續々群書類從

第十三

續々群書類從第十三

例言

一本編は詩文部として、後水尾天皇御製詩集以下十四種を收む。

一後水尾天皇御製詩集一卷　謹て按ずるに、天皇英明學を好み給ひ、國風の御製、既に專集ありて、世に傳ふれども、漢詩に至りては、稀に覩る所なり。今此集内閣文庫所藏の寫本に係る。天藻の美固より此に止まらざる可きも、片鱗隻羽亦以て龍文鳳章の一班を窺測するを得んか。因りて謹みて玆に拜寫し、本編の首に辨す。

一鳳啼集一卷　後光明天皇の御製詩集なり。謹て按ずるに、天皇叡哲英毅の天資に加ふるに、聖學の勤勉を以てし、夙に松永貞德を召し、洛閩の經義を進講せしめ、大に叡旨を性理の學に傾け給へり。本朝の經筵、程朱の註釋を用ゐしは、實に天皇の御宇より始れ

り。史を按ずるに、天皇常に漢詩を好み給ひ、和歌の御製、較〻稀れなりしを、後水尾上皇以て宸憂となし給ひしに、天皇卽夜御歌百首を詠進し給ひきとあれば、御製の漢詩、蓋し應さに決して此に止らざるべし、憾らくは九重路遠くして、捜索するに由なし。今小杉博士の寫藏本を借り、恭く之を引馬本及内閣本に讐校して、後水尾天皇御集の次に掲げ奉ると云ふ。

一機山十七首一卷　武田機山晴信法號信玄の作なり。其體七絕にして、凡て十有七首、信玄全集より鈔錄せり。史に稱す、晴信學を好み詩を嗜む、群下說を進めんと欲する者、皆多く詩を習ひ、昵近を得て、而して後に說く所ありと、以て平生嗜好の作、亦決して此に止らざるを知るべし。而して當時群雄中にありて、其材功力の相敵すべき者は、亦唯一の上杉謙信あるのみ。謙信の詩、世多く知る、故に今之を略し、獨り機山を錄す、其間別に軒輊の意あるにあら

ざるなり。

一貞山公詩鈔一卷　貞山は伊達中納言政宗の法號なり。此鈔、公の作を錄せし者にして、もと伯爵伊達家の所藏より轉寫せり。想ふに、公の才藻の美を以てすれば、此外觀るべきの作、必ず多からん、憾むらくは今は捜索の便なければ、姑くその獲る所の者若干首を、本編に收むることゝせり。

一惟新公自記一卷　舊薩摩藩藩祖島津義弘の記なり。義弘晚年髮を剃りて惟新と號せり。此書はその征韓及關原の役にありて、兵馬倥偬の際、自ら筆を援り自己の閱歷及見聞を手記せし者にして、もと惟新公御自記と題して、島津公爵家にあり、今帝國大學史料編纂掛の寫本に據り此に收む。但此を漢文として論ずれば、語句の議すべき者尠からざれども、元祿享保以前にありては、專門家の漢文と雖も、亦向物而未化の憾あれば、未だ區々の繩矩を以

て、亂世英雄筆墨の跡を論ずべきにあらざるなり。

一颾言錄一卷　古河城主堀田筑前守正俊の著なり。正俊徳川常憲公綱吉に仕へ、樞機に參預し、幕府の元老となり、名臣の譽ありき。本書は己れ常憲公の殊遇を蒙りしを感激し、朝夕君前に出て、親しく目覩せる公の言行を錄し、永く後世子孫に示さんとの意より、筆錄せし者にして、題して颾言錄と云へるは、尙書の虞舜皐陶作歌颾言の故事より取りしことは、其自序中に詳かなり。堀田伯爵の所藏を轉借謄寫して、此に收む。

一勸忠書一卷　是亦堀田正俊の著なり。自序に據るに、或人の新たに官に就きしを祝し、君に事ふる大道を陳述して、勸誡となさんが爲めに著せるなり。文章明暢にして誦すべく、絕えて戰國武夫の筆端澁滯論旨晦蒙の弊なし、蓋し其人篤學好文の深きに由ると雖も、亦當時文運の推移如何を見るべきか。又堀田伯爵の所藏

を轉借謄寫して收載せり。

一惺窩先生文集十二卷　先生の學問德業は、文章を待ちて傳ふる者にあらず。而も我國近古にありて、儒敎の中興と共に、漢文學の革新の功烈は、彼傲岸一代を睥睨せる物徂徠も、亦推尊して學宮に尸祝すべしとなせり。其集、後光明天皇御製の序を賜ひ、水戸中納言光圀校訂の任に當れり。蓋し我朝人臣の別集に御序を辨せるは、建國三千年來空前の盛事にして、亦以て先生の學問德業が、如何に上下を感孚せしかを見るべきなり。其傳は史傳の部に載せたれば今之を略す。先生の集二種あり、一は門人林道春の輯錄せし所にして、一は冷泉爲經の校梓に係れり。今後者を底本に取り、前者によりて之を校訂し、玆に收載す。

一尺五先生全集二卷　惺窩先生の門、林羅山あり、幕府に仕へ、德川氏の叔孫通たりしは、世既に定論あり。松永尺五あり、京都に住し、

禁闕の進講を奉仕し、布衣を以て、特恩を賜ひ、冠纓の禮待を蒙りしは、前後惟だ一人と稱す。本集世に罕有の書にして、皆寫本を以て傳はるのみ。今內閣本を底本とし、他書を以て參校せしも、誤謬脫漏尙ほ頗る多し、姑く疑を闕いて存錄す。有識博雅の士、幸に見るに隨ひ是正せよ。

一恭靖先生遺稿三卷　物徂徠嘗て我邦の文章を論じて曰く、錦里先生出て、扶桑の文始めて文なりと。是より先き、朝野緇素の徒、漢文を作る者なきにあらざるも、大抵宋明の語錄、叢林の禪偈より、餘唾を拾ひて、語句を綴り、否らざれば、其體を漢文にして、其言を和語になしたるものにして、純全なる漢文より觀れば、顚倒錯置の弊少からず。錦里先生の文出るに及びて、斯弊一掃し、文順ひ字從ひ、氣脈貫通、格法具備し、其雄篇傑構、往々彼土の元明を踰えて、直ちに唐宋作家の壘を摩する者あり、何ぞ其れ盛なるや。錦里先

生は卽ち木下貞幹にして、恭靖は其私諡なり。錦里先生文集卷數頗る多く、悉く載せがたければ、今文章の部三卷を收載す、其中存する所の太平頌の如き、先生十三歲の作にして、九重の宸賞を蒙りしは、先哲叢談、近世叢語等の書に詳かなり。

一垂加文集七卷　闇齋先生山崎氏の著なり。先生名は嘉、闇齋と號す、又垂加と稱す、其事蹟、先哲叢談、日本野史等に詳かにして。既に世人の知る所なれば略す。源安崇本集に序して、明舍人親王神書大成之蘊識朱子接千載不傳之緒之實者、獨吾垂加先生也と云へるは、少しく誇大の譏を免れざるも、亦全く阿好の言にあらざるなり。先生の朱子に取る所は、其立朝侃侃として、誠意正心事に處し、群小嫉視の禍を買ひ、僞學黨禁の厄に逢ふも、夷然として變ぜず、出處の大義を論じ、華夷の別を嚴にせんと勉めたるにありて、彼林羅山の徒が、專ら多聞多識を以て、朱學の能事となすと、頗る其

撰を異にせり。其所作の文詩唯、達意を主として、字句の精錬に至りては、頗る遺憾を免れざるも、要するに氣魄の雄偉時に見るありて、近古の一豪傑の作たるを失はず。且其集、今に於て頗る乏しければ、特に本編に收錄することゝせり。

一 澹泊齋文集八卷　安積澹泊の著なり。水戶の文學、西山義公光圀、四方の才俊を禮聘し、修史の業を創めしより、鬱然として天下の冠たり。而してその世臣の士、學問文章を以て著はるゝ者は、安積澹泊又實に之が魁たり、澹泊名は覺、覺兵衞と稱し、澹泊齋と號す、明の遺臣朱之瑜に從て學を受く。物徂徠の古學を關東に唱ふるや、澹泊之と往復し、疑義を商搉せり、其文載せて本集にあり。且大日本史の編修たるや、前後多數學者の手に成ると雖も、其初めに當りて總裁せしは、又實に澹泊たれば、本集所載の文詩、獨り其學問識見を窺ふべきのみならず、又當時史料の一として傳ふべし。

斯書極めて寡し、今内閣本を底本とし、澹泊史論により校訂を加へて、茲に收む。

一觀瀾集六册　三宅觀瀾の著なり。觀瀾名は緝明、又端山と號し、九十郎と稱す。初め山崎闇齋に從ひ學び、又木下錦里の門に游ぶ。水戶義公辟して修史の職に任ず。後ち幕府に擧げられ、儒官たり。新井白石室鳩巢等と往復唱和し、亦一代の名家たり。斯書世に稀なり、今內閣文庫所藏の寫本を底本とし、帝國大學圖書館藏寫本により校訂して、此に收む。

一玉仲遺文一卷　佛機大雄禪師宗琇字玉仲の遺稿なり。禪師は日向櫛間の人、京都大德寺第百十二世の住持にして、慶長九年十一月十六日を以て寂す、年八十三。正親町天皇嘗て勅して禪師號を賜ふ。豐臣秀吉前田利家又之に歸依し、小早川隆景最も之を尊信せり。鎌倉以來、武人專政、文學地を掃ひ、僅かに五山僧侶に賴りて

能く一綫を其間に保ちしは、世の既に知る所なり、然れども幸にして、近時五山文學全書の輯あり、其文章大抵收めて輯中にあれば、今復た別に纂輯を要せざるに似たり。但玉仲亦五山中の人なれども、其文未だ全書に收載せしを見ず。且當時群雄の事蹟を考ふるに便なる者なれば、特に此に收むることゝせり。

一塙氏編輯の群書類從の詩文部は、正編に平安朝時代の作を採り、續編に多く鎌倉足利時代の作を採れり。今本編は、主として戰國時代より、德川時代の初期卽ち元祿以前の作を收めんと欲せしも、戰國時代にありて、漢文の淵叢たる五山僧侶一派の詩文は、近時既に五山文學全書として專書の世に出でたれば、今は之を省きぬ。而して德川時代に入りては、本編に輯錄せし者の外、林羅山、鵞峰、一門父子師弟の如き、水戸義公の如き、石川丈山、僧元政の如き、堀杏庵、那波活所、伊藤仁齋、安東省庵、山鹿素行、中江藤樹、熊澤蕃

山等の如き、名公鴻儒碩學鉅匠の作、極めて衆きも、僅々たる紙數限りあるの本編は、到底網羅して載せがたし、且此等の詩文は、多く單行板本として傳ふる者あれば、姑く割愛することゝなしぬ。

一本編は藻洲牧野謙次郎氏監修の下に成り、且小杉榲邨日下寛の諸氏は、秘藏の書を貸與し、材料借出に就き、便宜を與へられたり。茲に之を謝す。

明治四十二年二月

續々群書類從第十三詩文部

目録

續々群書類從第十三詩文部目錄終

續々群書類從第十三

詩文部

後水尾天皇御製詩集

山霞

晴峰聳日帶春熙、霞紫霞紅錦繡垂、無乃減錢王壯觀、朝來一片裹山時、

春野

三冬野望悉雕零、五字古原吟欲罄、草上春風吹緑後、只疑殘雪染還青、

鴈作字

月明終夜獨看閨、字々傳音鴈翼低、是妾秋情憂患始、一行却寄數行啼、

聞時鳥

夏雲忽起失前峯、彷彿鵑聲難覓蹤、他日期聞何成好、若耶溪上一株松、

霜

寒氣透衣能打綿、行人留跡板橋邊、鐘聲無處不空嶺、月落烏啼殘夜天、

里雪

欲問梅花折晩風、杖藜更不辨西東、村園白盡多相似、處々柴門深雪中、

惜花

樂事賞心寧外求、千金一刻百無憂、花時却恨異時瑞、十雨五風皆是讐、

雲浮野水

薫影微雲去復還、江南野水隔塵寰、溶々曳々無心地、中有白鷗浮伴閑、

梅遠薫

吟杖徧尋行路忙、遠村梅樹日知亡、月朦朧未瞥疎影、風彷彿先聞暗香、

山月

四顧山光明晩樓、十分月色莫如秋、孱顔寫出破瓜歳、西子粧成鏡未收、

待月

今夜清光影未鮮、掀簾先賞玉欄前、黃河移在廣寒殿、
一刻來遲五百年、

終夜見月

好是秋來作月荒、滿底寒影白於霜、更籌數盡不須睡、
二十五聲猶未長、

孤夢易驚

方夜誰置泰山安、孤枕先知添夜寒、匣香曉猿若呼覺、
打窗葉雨未曾乾、

夏風

紛々溽暑以何推、除却清風又在哉、元亮窗中誇北臥、
子瞻殿上詠布來、

河紅葉

楓樹秋深錦滿枝、風前雨墮染漣漪、臨河只恨東流水、
不爲霜紅住少時、

春雨

一夜樓頭春雨斜、輕雷起蟄暖猶加、空階餘滴如相語、
此地明朝必見花、

花雪

爛熳花如瓊屑鮮、須臾落去暴風前、林頭消盡滿林下、
景勝湘江葉雨天、

梅

此神此處本同塵、遺愛千年花正新、二月江南零落盡、
爭如北野晚梅香、

松下晚涼

松陰深處葉齊紈、六月炎塵點不殘、無價清風終凛々、
晚來却覺夏衣單、

夕紅葉

楓林染盡錦千堆、霜後秋山色美哉、樹上夕陽□點字、
只疑紅葉賦詩來、

七夕契

天上人間共一般、物皆交得喪悲歡、雙星莫恨稀相見、
聞說尋盟亦可寒、

花下忘歸

一春佳興不如今、花下忘歸事醉吟、數吹調成似留我、
金衣公子主人心、

雲間初雁

高秋氣霽漸驚寒、新雁橫空不厭看、萬仞峯頭雲集處、
一行字樣是龍蟠、

窗前栽竹

新竹峥嶸凉始生、窓前從是慰詩情、夏宜急雨冬宜雪、
也恐淸陰礙月明、

殘花

春景九旬將盡時、殘花猶發兩三枝、知人間有顚神術、
葉裡阻風紅未衰、

寒夜月

入夢松風覺被單、床頭伴我一輪圓、破窓踈戶苦留月、
何恨今宵不禦寒、

紅葉

紅葉雖非草木英、秋來壯觀有誰爭、林間一夜千堆錦、
靑女慇懃織得成、

積雪

滿庭積雪玉橫斜、只恨事々香不加、天地同根今始信、
千般草木一般花、

擣寒衣

數杵淸砧聲未乾、秋衣欲寄忽河干、風情月苦正長夜、
只怕郞寒忘妾寒、

槿一日榮

紅槿露乾知命輕、朝開暮落太忙生、此花却恨人間事、
勝懶涯無一日榮、

暮春

九十韶光一夢間、殘紅希處强登山、此時被伴落花去、
春自知歸鳥自還、

艷々得春梅

寒香冷艷未精神、雪裡纔開野水濱、踈影枝頭猶有待、
鶯聲添得十分春、

湖水眺望

湖光山色復無垠、西子淡妝如寫眞、水面風來還改觀、
驚波萬疊捧心顰、

太上法皇御製賜黄檗山舍利偈震翰

北天會自奉南山、古佛眞身傳世間、上萬里下靈骨暖、
三千年後異光班、宋皇述讚感生相、源將傾下欽定顏、
晨夕拳々服膺久、檗峯永仰五雲閣、

正三位平忠康奉二

太上法皇詔一、賜二佛舍利於黄山萬福禪寺一、
伏以靈覺舍利、輝レ古騰レ今、常住法身、隨レ緣
赴レ感、是故
宗社皇神讓レ託、
歷朝聖王傾レ心、原夫
佛牙舍利、北天王昔獻二宣律師一、今在天龍寺傳

來之由、見二于普明國師之記一、
上素欽二佛化一、有レ旨迎請入內供養、貯二水晶之匣一、旦夕
瞻禮、初時貯レ匣時、如二粟米粒一、素レ之歲月大
齋、歲子生二分化一、結似二貫珠一、非二
崇信深密一焉能如レ斯矣、頃年匣中生二白石之屑一、掃レ之
又生、如レ是數回、自然穿レ穴、內外洞明也、
上怪小、臣等庸昧不レ知二何等祥瑞一、竊謂佛眞法身、未二
曾寂滅一、是神明靈氣之所二依而通一也、
上益加二敬重一、乃
命レ工造二金色寶塔一、而焉慈隱元和尙、入二吾寰內洛南
靈區門一、創二黃檗一、展二龍像莚一、喝二無道一、實當世
法行之場也、
上美二其興復之盛一、特賜二寶塔兼宸筆御讚一、臣等所レ翼
聖壽無疆、皇國萬福、人天瞻禮、共成口（〇淨カ）身矣
寛永六丙午年六月十九日

鳳啼集　後光明天皇御集

夕陽連波

萬里蒼波萬里天、和氣◎氣引馬本作風來處拂雲煙、一山落日一湖水、滿面夕陽曳碧漣、

孤鶴立洲

萬里無心滄海裏、飛鴻◎鴻作鳴一千里平生歡、汀洲日暮歸來處、孤刷凍翎立歲寒、

遠寺晚鐘

宿雨空濛古梵宮、老僧歸處翠煙中、一聲彷彿疎鐘響、雲外夕陽秋意濃、

屋上多霰

曾家窮谷郭文意、忘却世間夜已闌、唯有□□□□霰、◎引馬本霰字在有字下而下四字闕更來屋上助市歡、

葦邊水鳥

蘆葦風後亂如麻、忽視白鷗睡水涯、嘻戲◎嘻引馬本作噫、按嘻恐嬉一生世波裏、悠々心上思無邪、

遙見漁舟

浩々風波含日時、水平舟靜寂相奇、遙見老翁屬姜氏、忘却世間垂釣絲、

山明虹出

□□□□□□、行筭殘星吟意濃、遙見螮蝀催朝日、一天曙色萬山紅、

綠竹猗猗

幽軒意遠絕□□、翠色猗々窓外開、更□□□偶諷嘯、此君駐我不知回、◦知引馬本作繞

殘月越關◎引馬本此詩在遙見漁舟詩後

一天纖月一天曙、淡々殘光沒樹間、馬上茫然忽回首、白雲萬里隔東關、

嶺上曉雲◎引馬本此詩在危猿數聲詩後

行雲一片□□□、星彩月花落佞鍾、◎引馬本花作華佞作陸夜色收時出幽谷、晨光生處遶高峰、

澗戶鳥歸

百囀千聲歸洛吟、◎引馬本洛作路且追反照簇長林、一溪春晚殘霞裏、衆鳥倦飛宿綠陰、

危猿數聲

今夕斷猿思益切、行人躑躅苦精神、樹間有鄧艾射否、背上悲鳴猶憶親、

窓前雨晴

洒掃晩天細雨収、◎洒一本作灑 金輪轢處影冉々、忽懷新霽坐
窓底、數點檐華透翠簾、

海路欲暮

天光浮水水浮天、一色曠蕩落日新、遙掃風煙布帆發、
晩來猶棹萬程辰、

水草陰橋

野人稍度斷橋頭、小草盤廻澗水幽、竹外吟行覓落路、
蘋香苔碧更踟躕、

燈前懷舊

書中渾憾歎何極、處々細評更粲然、見說一宵千載事、
案頭閑坐對群賢、

寄道祝言

從來徹上還徹下、一理浩然餘味長、於戲蒼生由此道、
平安眞萬世無疆、

題疑歸鴈◎引馬本作題欠疑歸雁歟

此夕鴈既歸、聲々過竹扉、故鄉如問我、一札寄南飛、

題通天一枝紅葉

恰繋珊瑚瓶竹裏、嬋娟秋葉照朱欄、通天我此不能見、
同見一枝宜賞觀◎同引馬本作囚、

舟中翫月

扁舟乘月思悠々、長詠淸嘯波上秋、憶有周生方術在、
懷中此輿寫吾樓、

四方拜 慶安庚寅〇(頭書)十八歲◎引馬本無頭書而題下注作十八歲慶安三年庚寅一本無年字

霜滿雲階天未曙、畫屛銀燭照中庭、當時曾自幸河上、
千載綿々禮七星◎七一本一作土

元旦

漏箭沉々睡夢中、坐來捲去一簾風、啼鳥燕語曉聲好、◎鳥引馬本作鶯
麗日艶霞晨色濃、頭上綵花飜碧殿、目前爆竹
燿瓊宮、乾坤不隔三千界、分得春光造化功、

立春◎引馬本注月令有迎春於東郊之語十字

更迎郊外春、望裏畵圖眞、今日千山雪、好花處々新、

試筆 慶安辛卯〇(頭書)十九歲◎一本及引馬本無頭書而題下注作十九歲慶安四年辛卯

三始一朝天、融々萬里春、八埏寒氣散、四海暖光臻、
放鴿立丹砌、畫鷄帖綺闥、數盃渾屠酒、至祝千群臣、

人日

人日多陰慳素開、凍雲寒雨惣紛々、一椀生菜一樽酒、
強祝千祥到夕曛、

和朝散大夫藤昭房之元旦芳韻

一片絳霞欲曙天、微風送暖物光新、般々只倚和氣發、
世界三千總是春、

白梅

復斯日域一林氏、遺愛今既十九齡、竹外嬋娟凝白月、墻頭凜冽點寒星、雪葩簇々繞空壁、◎空一本作雲 柳絮紛々入曲檽、萬古清標君子德、嗟嘆不及屈生經、

春雨

晝景涳濛晝景暄、風前細雨又黃昏、好花簇々侵孤院、芳草森々亂小園、筆下記言求古意、几頭披帙窺淵源、還忘書籍靜觀密、樹上唯看春澤繁、

黃鳥

渾々和氣一天涯、坐與黃鸝情益加、簧舌喈々和午日、金衣楚々刷晨霞、草間嚼躍求梅蕚、墻角睍睆弄雪花、猶斯芳酒催春色、◎斯引馬本作是 小窗春色酷相嬉、

春月

凌霧步花遊子情、◎花一本作月 一輪生處一吟生、飛霞翳鬱色甚薄、散樹朦曚影稍輕、金浪漾々千里外、玉華帕々萬行程、◎帕一本作的 坐來感却汝陰興、貪見悅光長短更、

瀾花

沙長草軟意既好、忽伴風光述幽思、翠嶺巖々松柏峙、淸川洋々藻萍滋、流芳郁々徹肌骨、落蕋紛々入酒卮、遊客偃休白櫻下、溪邊耽樂誤歸期、

懷古

用舍倚人豈倚己、天乎命夫奈其關。◎夫一本作矣引馬本乎 管仲掌禮匡天下、子產奉惠尹境間、楚士冲々溺羅水、晉臣欝々焚綿山、徒名惟止在文字、千載仰望不得還、

春江

高若風光好、春望冠我邦、鳥聲嘩半渚、花蕋耀長江、水際群魚躍、霞間小艇降、一吟還四顧、遠浪又淙々、

閑齋

朝雲併夕日、來往此淸溪、遠樹籠幽徑、生煙鎖突梯、鳥眠孤屋晚、猿叫數峰西、時感却風物、安如卜一閨

綠樹

仰視千萬樹、◎視引馬本作覩、淸樾覺微凉、林鋳日光遠、岩隈風氣長、眼前山欝々。身後水蒼々、歸路尋春色、殘霞滿一望、

杜丹

匪絲又匪竹、何厥蕩幽思、妖艶紅偏好、紛粧白又奇、衆芳生空殿、落蕋耀荒陂、旦夕傍籬畔、春來幾許詩、

驚猿

坐來也一聲、幾度苦吾生、推盡孤愁思、料知蕩子情、樹間風一陣、江上月三更、嗟斷猿何處、衆峯縱又橫、

古池

池上塵埃人不拂、◎塵引馬本及一本作風古槐疎冷老松濃、杜鵑寂莫呼昏黑、木槿蕭條引晩紅、◎引馬本晩作曉細浪生時星皙々、圓紋沒處雨濛濛、眼前愁殺眼前事、彼我廻垣思不窮、◎垣一本及引馬本作涯

浮嵐入簾

簾外馳寒氣、高秋幾許間、荒蕪霜一夜、落木雨千山、肩冷衣旋薄、情空景轉閑、層嵐併日發、遠邇赫赭顔、

雨夜戲作

吾朋斯豪俊、◎斯引馬本作期世事惣紛々、四宇嘩餘滴、一窓濛宿雲、

螢

薄暮飛揚覓小流、藹然數點滿吟眸、當窓的皪天葩發、撲面團々月影浮、

新涼入郊墟

郊墟蕭瑟樹間聲、影氣旋降露轉明、顓頊收威炎火滅、金天施德冷凉生、

孤鶴横江

聲如箏葉翼如車、江上翩遷孤影斜、赤壁之遊端誰處、不言不答下寒沙、

秋雨

風號蟲悲一夜秋、青燈挑盡思旋幽、曉來臺殿無人到、萬景淒凉暗生愁、

仲秋雨 某夜月色鮮明、天氣廓朗、乃二三子曉顧清影約仲秋之可必矣、維時仲秋、風雨凄々、雲霧濛々、果誓言如空、嗚呼遺感孰大於此矣、故詩及于茲、

張目搔頭怒且恨、黯然天色暗南樓、誓言無頼今宵雨、徒向頑雲冷笑秋、

秋興

風景索然日喚愁、長川疊嶂捲簾浮、吾家適有魚併酒、誘引親朋娛幾秋、

此景此時人莫管、杖黎徐歩不知還、岩隈仰望千山鞠、溪上長吟萬水閑、

たちぬれて身にしむからに我袖も
秋のけしきも森のしたつゆ

夜やくらき雲路や遠き行やらて
いまたたひなるかりの一聲

雲のいろも風のひゝきもおのつから
ひとりこゝろの秋よりそしる

攀月嶺

山勢崔嵬逼九霄、坐傍斜漢思淸遙、光明可貼有唐壁、

寒氣漸侵公遠橋、素練十餘遶桂舞、皓衣數百乘鸞謠、吾人醉賞一宵月、旋對娥眉目不逃、

讀三綱行實

見說卷中章矣仁、慈孫孝子異衆人、精誠微妙傳不朽、千載感悟彼我神、

九日

嶺南氣候菊花節、華發風流彌古今、蝶入紛紜疑白雲、雨成髣髴蕩黃金、心中索爾催潛樂、籬外酩酊覺弘斟、向暮半窓高枕睡、孤芳旋有送吾吟、

山家

午睡覺無情、長吟登彼屺、雲收遠樹靑、日落暮山紫、

夜坐（坐一作燈）

書齋無世望、（◎望一本作事）聖酒與親朋、點滴四簷筑、微光一夜燈、

晩望

秋來總底事、萬景惱吾顏、群動一方忙、（◎忙引馬本作鬧、）孤吟四顧閑、日光紅錦地、靄色碧羅山、佇立瞻望暮、無心雲自還、

讀詩經

案上詩三百、言々砭肺肝、衛侯千載德、淇澳一篇歎、至善不能忘、聖心豈是寬、猗歟匡氏說、旋有解頤歡、

曉行

千山和夢過、萬水滌懷行、林際曉風冷、雲間殘月淸、

藏氷古跡

一山日月一乾坤、此地沍寒春不喧、萬木婆娑鸞鳳舞、千峰鬱律猥猿犇、（◎峰一本作峯、猥引馬本作獵）枝賢新感豈生德、頼業舊懷高帝恩、遺趾寥々喬木下、室荒氷泮志猶存、

雪

望中圖畫眞、一色報淸晨、孫舍讀書處、藍關擁馬辰、鹽揚空裏海、絮起目前春、遙憶山陰夜、躭斯乘興人、

歲暮述懷

小辨腐談且幾時、支頤搯髀詰安危、二三同志二三籍、渾是茫然與歲移、

喜憂相喚是非連、（◎喚引馬本作換）人事蹁躚益耐憐、玉兎金烏晨夕裏、載馳載驅送年々、

羊脾旋炊曙色生、黃粱漸熟夢魂驚、人間萬事方難奈、一歲遑々一歲成、（◎是一首引馬本不載、）

漫興

秋光引我獨彷徨、惙々憂心屬宋生、環堵夜來無一事、只看月色得閑明、

對月約中秋

金波蕩漾萬行程、樽酒相賞一夜明、若使月光照我意、
知維三五陟高城、

雨後

一雨一林東、坐來涼味濃、四簷雲漠々、半戶月濛々、

白蓮

涼從華外集、占作素秋天、天上月生處、浮光此白蓮、

闘仙洞御池 朝覲行幸之時慶安辛卯二月

南山崔𡸣北山兀、□□□□□數十程、方外何求葛陂術、
一望千里轉分明、
紅纜飄颻紅日動、白波奔蕩白花浮、霞盃勸醉春風裡、
撿右詠歌豪盪舟、◎撿右引馬本作棆石一本撿石
窺魚白鷺向晴飛、穿草黃蜂帶日歸、冠者五人童六七、
樂山樂水坐斜暉
三島風光環紫府、十洲天色入瑤池、俯仰渺々吟望裏、
鳥舞華飄懷轉奇、
□□□□□□□、晴晦變化不容圖、一方遠邇山高下、
四顧密疎樹有無、

試筆 承應壬辰〇(頭書)二十歲◎引馬本無二十歲頭書題下注二十歲承應元年壬辰一本作承應元壬辰二十歲

曉鷄喚起萬家春、椒酒辛盤處々新、千載口吟陳氏頌、
一朝肝感伏羲仁、

餘寒

風氣飄々霜烈々、春成猶遺一般寒、◎成一本及引馬本作來 愧違酬
帝脫衣德、還覓重裘覺體胖、

山莊春興

小風吹水轉山腰、群鳥搏雲入彼蒼、適訪主人倚編戶、
一睟春靄鎖幽莊、

轉湖山

草間彷彿一蹊脩、峭壁攢峯仰彌幽、獨覓蜃樓吟迴谷、
兢牽䲁穴停高丘、◎停一本及引馬本作倚 湖聲轉處心還轉、風筆浮
時詩復浮、◎筆一本及引馬本作色 山上寂寥人不見、疑斯傍海到三
洲、

落猿巖

俯握長蔓啼握條、險窮阻薄思如焦、南征君子氣旋落、
越路老人魂欲消、巖嶽微茫方寂々、樹林陰翳自蕭蕭、
可憐旅客數行淚、爲爾踟躕寒起毛、

雨後月

明滅存亡雲霧際、猶曳情緒倚欄干、吉生高致一痕月、
◎，引馬本作吾 都屬萬年億兆看、

春夜

樹間飛羽觴、歌曲拍藤牀、一夜莊周夢、千金蘇軾情、
蒼茫眸稍昧、浩蕩思尤狂、月色朦朧處、景光數十程、

夜雨

草持綠蕣連檻上、花張紅蓋傍墻頭、夜風吹送萬絲雨、
綠隙蕭條響轉長、◎長引馬本及一本作脩、

春水滿四澤

□鷗爭浴簇沙尾、桃柳索陰橫水涯、□□□□擊惜處、◎擊惜一本作繫情一望四澤送春來、

自寬峽

氣寬風爽清家德、□□□□□□深、□巘四成重壁間、
老松五曲古槐參、羊裘體輕嚴光節、瓢酒味甘顏子心、
無盡藏斯仁者樂、萬般造物入閑吟、

浴月沼

月出浩兮風發輕、沼頭一夜思深邃、湘妃鼓琴白蘋洲、
鮫女鳴機靑藻地、波色朦朧餘影馳、水光瀲灎圓輝馳、◎輝馳一本及引馬本作輝駛兎浮蟾浴兩涯中、漾々溶々千萬峰◎峯一本及引馬本作翠可從

歲暮

張蘇無贖片時術、周孔失留一日權、樽酒相逢笑談裏、
毀譽來往二十年、

元旦（承應癸巳○頭書廿一歲◎引馬本無此書頭下注二十一歲承應二年癸巳一本承應二癸巳二十一歲以下倣之）

新歲風光溫且舒、氣輕神健大康娛、數觴勸醉高堂上、
先覺天和入屠蘇、

人日

靈辰人共得、徙倚轉忘機、雲影成丹彩、日華散碧輝、
酒消千載恨、菜助一朝饑、聊立休光裏、同娛新德徽、

黃花

粧如金玉莫摧殘、可怜閑庭倚壁開、幽谷甘流須益壽、
高臺美酒頓消災、黃粲光爛照眸去、◎黃粲光爛引馬本作黃花粲爛一本黃光燦爛他一本金光芳氣悠颺掩鼻來、人生本斯非爾志、早撮隱逸避塵埃、

郊墟秋月

枯草芬々寒影亂、荒蹊杳々冷光脩、萬情無限一宵月、
□□寂寥伴晚秋、

新年口號（承應甲午○頭書）二十二歲

連山獻笑水騰曲、天色和融物色新、竟日醉眼臺殿上、
猶期洞裏萬年春、
嗟嘆庶事投心氣、萬物昭蘇造化天、細草芽鮮穿土早、
小禽翅健迎陽還、水長明德得春顯、山遠靜心入節全、
予覓世間安逸地、棄捐舊恨樂新年、

白牡丹

雙枝白貴冷如水、料得丘園培養勤、植物猶知守孤操、世間豈箇無人文、◎引馬本箇無作毋箇

紫藤

松上開鋪似貴須、晩花猶發一庭隅、吟眸不思殘陽裏、却好數枝紫奪朱、

玄燕

三月天邊隨例來、堂前相對轉徘徊、慇懃好去烏衣客、滿腹春愁說無涯、◎無一本及引馬本作勿

七月十六夜

兒女歡娛臺殿上、不知萬火照愁來、◎引馬本是詩載下曉行詩後第二句下分注云此二句蓋在一詩之末當爲賤落句

題畫圖◎圖引馬本作屏

茅屋斜連南澗邊、陽坡青草自萋々、一童千女孤村暮、◎千引馬本及一本作十可從靜向落暉采白蘋、

月前雁

一輪輾處一天涯、雁影横空古字新、月下有蘇氏書否、簾前々去入誰家、◎々去引馬本及一本作今去可從

畫圖

晩來雲盡收、一渚水悠々、草際吟望處、鴛鴦眠石頭、

夜坐

寒燈青由几、披帙理昭々、〔兎釜松風起、窓間還寂寥、〕小窓渾底事、一巻兼三杯、爐火寒光沒、雪華春意開、

右九十四首之內和歌三首◎右以下十一字引馬本無

或人御製とて語し試毫と覺て和歌二首引馬本載皇家夜游詩後曉行詩前

祝ふそよこのあら玉の年共に

道もかしこき世〻にかくれて

慶安辛卯朝覲行幸御會　花契多春一本作朝覲行幸御會慶安四年卯

契をかむはこやの山の花にあかぬ

こゝろに千々のはるをまかせて

杜鵑

杜鵑千里啼、聽得畫欄西、一叫生愁處、曉更月欲低、

〔皇家夜遊〕◎據引馬本補他諸本無

〔今夜公卿會玉堂、夏虛雲盡月蒼蒼、笙歌催興奏數樞風飄翠簾自清涼、〕

曉行　御註御添削　基賢朝臣

厭浥草頭行露清、厭邑濕意、詩召南行露之篇云、厭浥行露、此詩蓋用此句、言工而意新矣、◎引馬本無矣字曉風殘月自高明、杜詩、曉風殘月入華清、又曰此句◎杜引馬本及一本作杜常鷄鳴數點出門後、言鷄既鳴而出門久矣、於是聽村鐘之殷殷、而知殘更之相轉焉、感慨表于言外、遙送村鐘又一更、意思全于語中、非不思而中、不勉而得、孰能至于此矣

春日同賦宮燈市 一首以花爲韻　　權大納言長直
以下四首及識語引馬本及一本不載
燈市紛々月色住、◎南溟按當作佳歟 宮門如水輾遊車、飛[illegible]明滅
玉樓上、颭我霧中生眼花、
秋日同賦星夕樓望 詩以情爲韻　　少納言菅原章長
百尺攀登秋意淸、望中幾許二星情、九華燈盡南樓上、
臥聽銀河西落聲、
春日同賦都門早鶯 詩題中取韻、　　權大納言菅原和長
君門飛雪易成情、京國春光附燕鶯、吾句彌遲典彌早、
柳陰鎖處認詩聲、
七夕同賦雲漢月 題中取爲韻　　權中納言菅原繼長
一刻千金猶不酬、星河刋浪月飛舟、蟬風露頌涼於水、
仰得宸遊毛巧樓、◎按毛恐乞
右
後光明天皇御製詩集一卷以市河世寧藏本書寫然誤且
落繁多依以一本加一校頗爲善本矣
昔文化第五曆孟夏上旬　　源宗悟寫▢
◎引馬本識語如左
右　御製詩淸原宣忠用▢五音而所撰錄故所忘闕文字
可甚惜矣
鶯知萬春 承應二年正月十九日　　吉從檢出
鶯のもゝよろこひのもゝしきに
あひにあひたる萬代の春
右　後光明天皇御製集一卷請借卜部員衡丈所感得之
本再寫之
◎一本識語如左
延寳戊午歳以廣田七郎左衛門家藏本寫之
洛陽新謄之 再考了
◎以下一本及引馬本無
承應甲午之夏、帝於曉床有夢、赤龍下南殿之階、
帝上騎而至于天、于時西園寺右僕射 實晴公 在側、諫
曰、止危哉、危哉、明日　帝以實告待臣、此時　帝
有不豫色、侍臣曰、　帝莫憂、夫夢不足爲實、
帝曰、　昔黃帝鑄鼎於荊山下、既成、有龍垂胡髯下
迎黃帝、上騎、羣臣後宮從龍上者七十餘人、小臣不
得上、乃悉持龍髯、事見漢郊祀志、由是觀之、於朕心
有慽々焉、諸臣箝口、而氣息不續　不過五月、而
九月二十日崩、自往歲以來　希世之事　爲序記左、

其一

往歳夏六月、自ニ禁中臺殿一有ニ失火一、而金殿複閣盡灰燼　雖レ然累代之調度　無ニ一而不レ殘、

其二

今歳三伏之頃、三條西黄門實敎卿宿直侍ニ禁闈一、長夜有レ夢、帝嬰ニ戚于疱瘡一崩　公夢破、問ニ諸臣一曰、帝有ニ疱瘡之憂一哉、僉曰、未也、公何故當ニ曉天一而頻問レ之、於レ是實敎卿語ニ夢中事一、諸臣打レ掌而嘆、實敎卿終日袖涙、

其三

七月晦日之夜、　帝又夢有ニ五尺之童一、來而侍ニ御前一、身體爰膚、赫如ニ渥赭一、後到ニ　帝之左脇一、入ニ玉體一、

其四

南都春日社鳴動如レ雷、

其五

將軍塚鳴動、

其六

九月十七日夜、孤鶴下ニ宮殿一、群臣欣々然而相告曰、鶴是千歳之齢、賀哉、吾　皇齡得下於ニ疾病一而忽斷上レ床、帝不レ休曰、夫鶴在レ上翱翔、是性也、今當ニ朕病一下在レ地、不レ足ニ朕爲レ然也、

其七

金殿之造營、邪許之聲、恰如レ入レ地、

其八

九月十八日、於ニ吉田之神前一降ニ丸雪一、

其九

九月十九日夜、四方有ニ且千聲一、諸臣出見レ之、聲在ニ碧空一、而四無レ人、

其十

先帝皇女在ニ別館一、今玆五歳也、十九日之曉更、如レ夢而寤、擲レ枕叩レ床、仰レ天俯レ地、涕泣有レ聲、乳母驚而問レ故、曰、　天皇崩、乳母曰、凶哉、莫レ道、少焉報ニ崩御一、

右豈非ニ一奇事一哉、伏惟　帝之卦、當ニ剝之六四一、其辭剝レ牀以レ膚凶、予推レ之、往歳有ニ炎上一、是非レ剝レ牀哉、　遂營ニ　皇居于仙洞一、而滅ニ其身一矣、是非ニ以レ膚凶一哉、不レ堪ニ感嘆一、綴ニ拙唱二首一、强而染レ翰云、

死生變換似輕塵、　一日信風空九天、歸去來今在何處、無聲無臭白雲邊、

泰山一夜爲深谷、百姓千官號上天、世是滔々人是夢、
輕舟短棹溯流川、

今茲九月上澣、　帝有レ詔、加二臣於叙爵一、渥恩之深、至下高二于天一深中于海上、故卜二吉日良辰一、而頻催二理髮之儀一、臣年十八、雖レ長、名齊二于後學一、類二蜂腰一、第愧招二異日之嘲一、于レ茲、　帝俄然崩、百寮千官、哭泣之哀、不レ足二同日語一レ之也、所庶幾臣之中、臣無下一日侍二於錦茵一奉中愚忠上矣、　嗟嘆難レ拒、聊賦二川八一章一、其詩曰、

力人一夜持山去、惕々庶官仰九虚、百姓抱口如失鳥、
三歸緣木似求魚、弧臣素誤明經席、微德偏塵叙爵譽、
難奈　天恩深碧海、挽詩爲賦更躊躇、

清　忠　寛　拜　書

御製集拾遺

和　歌

かすみたつ末の松山ほの〴〵と
　なみにはなるゝよこくものそら

右宸翰御懷紙、泉涌寺來迎院所藏、

惺窩先生文集序

蓋聞文者貫道之器也、自二昔年大昊八卦書契之作一、延延綿綿、如二天地之不一レ可レ易矣、如二日月之不一レ可レ息矣、禮樂政令之經二緯乎穹壤一、洞二徹乎古今一、法度教化之融二液乎遠邇一、周二遍乎内外一者、不三亦基二乎是一哉、近世有二北肉山人惺窩先生者一、寛仁大度之君子也、幼而穎悟、一覽千言、七過萬句、弱冠而丕通二經史及諸子百家之書一、莫二事不一レ備、莫二物不一レ詳、其爲レ學也、博聞強記、故其爲レ理也、精察明辨、其爲レ文也、范袁張彪之徒、王戎仲容之屬、朝馳二鶩乎書林一、夕翱二翔乎園藝一、非二其道一、雖二高車馬一不レ顧焉、棄レ之如二敝屣一、從二其道一、則簞食豆羹亦足二以頤一レ神而保一レ年也、義士仁人、慕レ德望レ風、出二入其門一、往二來其道一者、不レ可二勝計一、於乎空谷之足音、晦暝之日月歟、而彼精微妙渺、雖レ猶レ不レ可二階レ天而升一也、儘亦得二先生之一體一者數輩、日新月盛、自レ此以後、百姓尊二信聖賢一、誦二說仁義一、其恩惠德澤、所三以蒙二天下後世一者、至矣盡矣、斯時也談士雲起狙詐星聚、然道德之說、罕レ有レ所レ聞也、先生獨悼三斯民之墜二於塗炭一、苦三此道之湮二於塵俗一、屢遊二說諸侯一、上遡二堯舜一、下陳二周孔一、然滑稽口給之士、皆以爲三迂遠

而潤ニ於事情一、故不レ爲世用一、乃退ニ廬市原一、隱居放言、恣ニ其丘壑一、任ニ情山林一、沈ニ吟小詩一、作ニ爲文章一、而其遺稿餘篇、紛々籍々、惜ミ其無ニ統紀一者、其子爲景、採而輯レ之、間亦竊附ニ己意一、所ミ以裨ニ補其闕略紕繆一者數卷、名曰ニ惺窩文集一、朕偶請而覩レ之、則忘レ食忘レ寐萬慮以澄、百節以通、耳目以融、肺腑以清、猶如ニ龍護レ珠不ニ釋、造次必於レ是、顚沛必於レ是、噫嘻朕於ニ先生一、不レ見ニ顏色一、不レ通ニ言語一、而百年神交如ニ符節一、果何之謂也、所レ視所レ言、所レ勤所レ蓄、庶ニ幾乎其不レ差也焉、詠嘆之餘、聊託ニ管城子一、妄爲ニ之言一、乃譬下彗星之繼ニ朝陽一、飛塵之集中華嶽上云爾、

慶安四曆辛卯九月十二日

輪王寺一品法親王書

右御製序文ハ坊間印本ニハ不レ載、古本ニハ、稀ニ此アリ、書ハ輪王寺一品親王ノ筆ナリ、山蔭中書脩テ本書ヲ藏セリ、

早春和歌

春立ちていくかもあらぬ梅つほの
　梅こそにほへこすの朝風

毎山有春

白妙の花はいつ見ん春はまつ
　山また山にかすみそめぬる

春風氷解

風も猶のとかなる世は氷ゐし
　池のこゝろも春に解くらん

鶯知春

宮の内にきくものとけし春來ぬと
　いふはかりなる鶯の聲

題後悔戀

いひさはし人のうき名にあひ見しも
　なか〳〵つらき契なれとや

祈逢戀

今そしるうき年月にあふことを
　かけてもたのむ神のしるしそ

右七首御和歌は新題林和歌集にも見えたり

日本二十四孝賛傳　昨非菴　瀧川昌樂

後光明帝ハ、後水尾院第二ノ皇子、生レナガラ聖德マシマシテ、日東ノ儒宗明壽院惺窩先生ノ子、冷泉爲景ヲ侍讀ノ官トナシ給ヒ、學問シ給フ、殊に朱眞宗仁宗ノ勸學文ヲ用ヒ給ヒ、人トシテ道ヲ行ハザレ

バ、鳥獸ノ襟裾、猿狙ノ冠佩シタルガ如シト云フヲ御覽アリテ、京兆尹板倉防州ニ命ジテ、九條宮ノ南隣南門ノ外三閑地アリ、コレニ孔子ノ廟ヲ築テ、都ノ學校ニ擬ス、此堂天子ノ南門ヨリ一尺五寸アレバトテ、石川丈山云ク、杜詩去レ天只尺五ト作ルハ、漢城ノ天子ノ御門ヲ去ル五尺アレバトテ、尺堂ト名ヅク、松永昌三ヲ居ラシメ、王子皇孫官家武辯ノ輩ヲ、學文ノ爲メニ、四書五經百家ノ書ヲ誦讀セシム、京師ノ貴賤、皆來リ學フ、コヽヲ以テ昌三京洛ニ久ク廢レタル釋菜ノ禮ヲ興シ、絕タル禮樂ヲ繼テ、每歲二月上丁ノ日ハ、伶人ヲ招キ、音樂ヲ皷舞シテ、孔子ヲ祭レリ、□□帝學文ヲ好ミ給ヒテ、殊ニ易ヲ崇ミ給ヒ、石川丈山ニ命ジテ、乾元亨利貞ノ五字ヲ、八分ニ書シメテ、坐右ニ掛ケ給ヒ、易理ヲ悟リマシマス、且亦易ノ觀ノ卦ニ、觀二天之神道一而四時不レ忒、聖人以二神道一設レ敎而天下服矣、ト云文ヲ、昌三ニ命ジテ、注ヲ假名ニテ述ベシメ、天心ヲ甘ナヒ給フガ故ニ、此日本ハ萬國ノ父母ノ國ナレバ、此帝元祖天照大神ノ御恩ヲ感ジ給フ御孝心ヨリ彌厚クオハシマシテ、御父帝ニイヨ〳〵御孝行ヲ盡シ給ヒヌ、天子ノ御身、萬機ノ政ニ御暇ナケレバ、玉體カロ〳〵シク仙洞ヘ出御ナサレ難キニ依テ、每日三度ヅツ勅使ヲ立ラレ、御機嫌ヲ窺ヒ給フ、若又御違例マシマセバ、天子御寢食安カラズシテ、父帝ノ御寢ナリタマハネバ、天子御寢ニ就キ給ハズトナリ、

槐記　山科道安

家熈公近衞語ニ山科道安ニ曰、愛岩通福卿云、帝上龍昇天ノ夢アリテ、朝山素心ニ御物語アリ、素心是ハ目出度キ御瑞夢、天下思召ノマヽナルベキ前表ナルベシト答ケレバ、サレバト許ニテ、御笑アソバシケルガ、其時御製ノ詩アリ、御辭世ノ御心持ナリ、ソレヨリ五月バカリニテ、御疱瘡ヲ以テ崩御マシ〳〵シトナリ、

鳩巣小說の書ぬき及び正保遺事といふものを書きつゞけたれど別にをさむるを以てこゝには略す、

稱意館吉田氏の藏本なりにこの御製集を坊間にもとめ得てのち矢野翁が何くれと書きさめられつる本に就てたらさるものを補ひつ

楓村□

序

甲州賢太守武田晴信公者、本朝射騎名家、而不墜箕裘、武勇才藝之譽聞于世者久矣、雪螢之學、火牛之策、今車胤田單也、可謂名下無虛焉、遠近望風服其威矣、爰有一禪衲、深受太守之知、今春一錫、出洛入甲、獻壽於邦君、遲留有日、竊謄賢守之佳什一編以歸、意在誇說于洛下風騷諸客者可知也、蓋到處說項斯之比歟、介于其人需予之序以稱賞焉、雖謝不能、請而不允矣、凡詩道之興也舊矣、周詩三百五篇、源于二南二雅以來、浸爛乎漢晉唐宋焉、吟風弄月約花媒葉之徒、滔々皆是也、其餘波溢、歸吾東海、作詩韵之淵海、爲文字之江河矣、於是緇素之流、倒詞源於三峽之水、爭文光於一天之斗、以至蟬噪蛩吟蜂腰鶴膝之衆躰輩出、不可勝記、雖然獨步作者之閫域者、古來李杜蘇黄而已、此四君者、諸壇無敵之騷將也、今十有七絕之佳作、移風易俗、以爲述作本、則十五之國風、二雅之正風、蔑以加焉、又比老杜夔峒十絕詩老蘇豫桐七絕詠、則足拖工部之袂、拍翰林之肩焉、豈不奇乎、且又用武事作文事也、六花偃月者、文陣也、筆陣也、紫潭清分湯池深、玄烟凝分烽燧舉、一揮之間、智淬白刃、詞森霜鋒、百萬甲兵發於自胸中、則武庫韓白、爲之卷旗、戰國曹劉、爲之棄甲、寸鐵不施、千里決勝者、在武田氏、一將之戰功而已也、漫書士苴、資雅藁之首云、萬年葉巣埜拙妙安子

機山十七首

武田晴信著

新正口號

淑氣未融春尚遲、霜辛雪苦豈言詩、此情愧被東風咲、
吟斷江南梅一枝、

又

風逆鶯寒意緒加、梅邊吟履月横斜、因思香雪齋前夜、
春若有情吾約花、

鳥語花中管絃

飛入繁花奏管絃、提壺勸酒共留連、新聲一曲芳春調、
數囀黃鶯古寺前、

春山如笑

簷外風光分外新、捲簾山色惱吟身、孱顏亦有蛾眉趣、
一笑靄然如美人、

古寺看花

紺藍無處不深紅、花下吟遊勝會中、身上從教詩破戒、
舉盃終日醉春風、

惜落花

檐外紅殘三四峰、蜂狂蝶醉景猶濃、遊人亦借漁翁手、
網住飛花至晚鐘、

新綠

春去夏來新樹邊、綠陰深處此留連、尋常性癖耽閑淡、
不愛黃鶯聽杜鵑、

薔薇

庭下留春晚露濃、淺紅染出又深紅、清香疑自昆明國、
吹送薔薇院落風、

又

滿院薔薇香露新、雨餘紅色別留春、風流謝傅今猶在、
花似東山繞游人、

旅館聽鵑

空山綠樹雨晴辰、殘月杜鵑呼夢頻、旅館一宵歸思切、
天涯憔悴對殘春、

四月花

妖艷紅花出壽安、風光閏月與猶殘、騷人要見十三葉、
未在姚家黃牡丹、

便面蘆間有漁

山色水光烟接天、漁翁江上棹蘆邊、丹青若寫得勝景、
萬里風波一釣船、

便面有鴈

水綠山青欲雨初、數行鴻雁度長虛、天涯高處要通信、定可蘇卿胡地書、

便面水仙梅花

風送淸香寂莫濱、諸公攜酒又逡巡、與梅胡有弟兄約、黃玉花開一樣春、

便面半月照梅花

昏月橫斜欲夜時、梅花秀色似臙脂、湖山疎影茂陵藁、凉水風標元祐枝、

便面蘆間白鷺

蘆葦淸風垂頂絲、窺魚白鷺水生涯、江南記得曾遊夕、似見梨花院落時、

寄濃州僧

氣似岐陽九月寒、三冬六出酒朱欄、多情尙遇風流客、共對士峰吟雪看、

跋

龍寶山家佐首座、予忘年友也、一日過レ予出二一詩卷一曰、是吾檀越甲州賢使君所レ作也、葉巢老師序二其首一、翁跋二其尾一、分不二亦幸一乎、予曰、狗尾難レ續レ貂、況又昧二其素一、再三辭焉、使君家譜、公且說レ言一二、其先新羅氏、奉二朝命一、賜二旗胄一、以討二貞任宗任之凶賊一矣、重賞之下有二勇夫一者也、以二六器一、至レ今爲二家傳至寶一也、爾來以レ武爲二家業一、宜哉武田之爲レ名也、今賢守晴信公、政事暇、崇二禪敎一、好二詩文一、日二課內域最勝王經一、晨拜二北野自在神像一、禱二爾國家淸平一、故提封益固、人民彌康、沛然德敎、溢二乎四境一矣、然此詩也、爲レ求二傳家稱許一寫來云、公之志氣不レ可二峻拒一焉、予於レ是手レ之口レ之、吟玩不レ知レ所レ止也、嗚呼近世儒流、決無二此作一、何圖刑名之家、復覩二此佳篇一、奇夫　詩者以レ唐爲レ盛、詩法源流、自二李杜一、至二張孟一、擧二十七家一、曰各有二一躰一、此十七首、擬二作之一者乎、又建安能者惟七、大曆才子惟十、幷以爲レ一者乎、蓋十者、陰數之極也　終而又始、七者陽數、一變而爲レ七、陰陽合、萬物生、自二十七篇一而

後千ニ萬句、積ニ成累篇鉅軸一者、拭レ目可レ竢焉、可レ謂ニ今代風騷將一也、孔子曰、有ニ文章一者、必有ニ武備一、有ニ武事一者、必有ニ文備一、古亦云、今亦云、可ニ嘉尙一哉、

文祿林鐘日　　前龍山睡足叟集堯書

貞山公詩鈔

元旦試觚

時物春來催我吟、詩情酒渴共何禁、屠蘇洗醉忘才拙、
和答黃鸝新語音、

落梅

花落乾坤風未吹、樹間料識有黃鸝、不然行客惱春色、
自入梅林折一枝、

春月

風落雲閑窓外邊、双締對客不知眠、中秋莫羨管絃月、
一刻千金春夜天、

同

臥床夢覺意花豐、牕外今宵春色濃、捲箔看來籬落月、
梅花影動五更風、

暮春

可惜光陰三界空、花邊閑景坐春風、明朝若有洗花雨、
朶々蒼々庭上紅.

無題

秋來雅興夕陽斜、衫影映庭色也佳、一盞猶斟朋友酒、

半醒半醉座中花、

欲征南蠻時作此詩

邪法迷邦唱不終、欲征蠻國未成功、圖南鵬翼何時奮、
久待扶搖萬里風、

醉餘口號

馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所赦、不樂是如何、

又

四十年前少壯時、功名聊復自私期、老來不識干戈事、
只把春風桃李卮、

惟新公自記

夫按當家之代々、自忠久至家久、殆二十代也、予幸及八十餘歳、見近代他家之盛衰、歴々如目見、而或殆泯盡、或有如亡、瞬息之間焉有去矣、或稱一士而不擇家々貴賤、以我之有才覺、領莫大之知行、其勢雖似興家國、而不用舊邦之例、是故朝興而夕亡　終爲槿花之夢矣、雖然當家無異儀而美譽振世者、日本神國、以而孝由舊章也、由此觀之、一士重代之無臣、諫之無賢臣、心之所之、捨古賞新、不敬佛神、使不以時、（使下恐脱民）用人不以道、因失往古之政、天罰不遁者乎、當家代々崇佛神、敬先祖、修武略、勤文教、加忠節、以故國代隆盛也、自今以後、嗣而守家者、彌守此旨、不可亂國家之行義、抑予辱爲義久公之舍弟、自少之時、委身於弓箭之道、奉命於危難之間、數十年之中、不舍晝夜、始挾懷遠柔近之心、終思見危授命之義、是故東戰西伐、匪啻日本帝國中、着一戎衣而在朝鮮者數歳、斬敵立功、竟逢天下泰平國家安穩之時、雖實生前死後之本懷也、以事之次、予成功之趣、略記之者也、

一天文之頃、薩隅日之國人等、挾逆心令蜂起方方、因益可有誅罰逆徒由、貴久公依御進發、先著陣岩劒、逆徒亦回狼心之謀、握大勢、企伏兵、欲得勝利、予不量軍之吉凶、忽引率陣中軍兵、不止足、懸入追散方々、討亡數千之强敵、得太利畢、然者逆徒等放火岩劒落去矣、自爾三年令在番、于時天文廿一年癸丑三月晦日、予年十九歳也、

一蒲生本城、岸高谷深、四方無地續、而易依難攻、差通蒲生、可攻松坂之要害之由、令評議、予忍寄而見彼要害之模樣、茂架羅亂杙逆茂木城木戸垂數多重有之、堅相構而可遂防戰、雖成覺悟、猛勢押寄、圍四方、放火民屋、揚吐氣聲、自城中、合吐氣聲、放矢打石、如雨降、時刻而難叶之間、自予三尺劒、眞先攻入處、或者一騎懸出渡合、予暫雖相戰、終討伏、捕渠首畢、城攻終、而見鎧之上、受矢四五箇所也、

雖レ然不レ徹レ身、生年廿二歲分捕之初也、于レ時弘治二年丙辰三月十五日之事也、

一蒲生之城、爲二加勢一、自二菱刈一取二添陣一、依二相支一、于レ時永祿元年戊午四月十五日、貴久公爲二御大將一、薙二拂麓廻之麥作一、押二寄菱刈陣一攻戰、然陣高山也、自レ陣放レ矢如レ飛、來中二咏方之壯士一、自二咏方一所レ射之矢、雖レ及二敵陣一、因レ玆軍士、徒費二心力一、茫然而難レ進、予於レ是着レ甲、眞先攻入、士卒得レ力、一同攻登、爰楠原與名乘而渡合、予纒頭之合戰、互欲レ決二勝負一、暫雖二相戰一、終斬伏、刎二楠原之首一畢、在レ傍勇士、亦懸レ手討捕、所二楯籠一之敵、不レ殘被二討果一、大將菱刈左馬權頭自害、誠快意不レ少也、雖レ然予被二斬疵一、令二痛腦一、所レ受レ鎧矢、亦多雖レ有レ之、不レ徹レ身也、終日之合戰、矢盡力疲、及二深更一、軍兵引二退本陣一、近日可レ攻二蒲生一由傳聞、同廿日放二火城内一、令二逐電一也、自二伊東家一、取二懸飫肥一、及二難儀一之時節、爲二豐州之養子一、可三相二越肥一旨、承二貴久公之命一、誠一大事之義、進退究レ此也、伊東者、一國之猛勢、飫肥者、一郡之人數、爭決二雌雄一哉、殊於二飫肥一、有レ名程之家臣、皆累年之弓箭遂二戰死一、今殘衆、其余裔也、殊更薩摩遠路也、易レ難レ受二加勢一、豈不レ異二夏之虫入一レ火哉、雖レ然重レ義輕レ命、武士之法也、于レ時永祿三年庚申三月十九日、已令二進發一、越二着日州飫肥一、而成二在番一矣、中頃令二歸國一處、伊東率二大軍一取二懸飫肥一之由、告來之間、忽討立、亦欲レ越二飫肥一、於レ是貴久公義久公御父子、從二未明一、及二黃昏一、雖レ有二御押留一、一旦與二豐州一、成二親子之約一、當二于時一於二相疎一者、可レ背レ道、且又自二他國一之誹謗因レ難レ遁、不レ顧二貴命一、走二籠飫肥一、其比肝付之敵軍令二進發一、忍取二廻之城一、即肝付省釣令二在城一之間、貴久公義久公御大將、被三取二卷廻之城一、因レ玆肝付之軍兵討出、一日有二合戰一、不レ意右馬頭忠將、其外歷々數多、依レ令二戰死一、被レ引二御陣一、御家急危存亡之秋也、於レ是可レ致レ歸由、密々從二貴久公一雖レ被二御通一、更依レ難二見捨一、不レ隨二貴命一處、豐州忠親被レ來二旅館一、訴レ予曰、一人於二皈國一者、可レ爲二御家長久一、愚家亦終可レ開レ運、國家何不二相鎭一、終日流涙、被レ加二意見一、被レ推二道理一、令二皈國一畢、

一日州眞幸院、北原之一家、就二劇亂一自二飯野一西者、

屬二當家一、自二三山一東者、隨二伊東一、然間令レ發二向
飯野一可二相治一旨、承二貴久公之命一、永祿七年甲子、
既欲レ赴、爰横川之城主北原伊勢介、依レ有二逆心一、
彼境往還不自由之間、廻二霧島山之麓一、凌二山川一、
越二着眞幸院飯野郷一、而先押二寄横川一、令レ誅二戮伊
勢介一、横川者、被レ充二行菱刈一處、還挾二逆心一、以
レ讎報レ恩、甚背二順義一、何遁二天罰一乎、重而之矢所
者、可レ爲二菱刈一云々、

一於二三山一、伊東之軍兵差籠、固二要害一、可レ成二防戰一
有二覺悟一、彼城郭不二追却一、可二事之煩一之間、可レ被
レ成二追討一旨、依二奏達一、貴久公永祿九年丙辰十月
廿六日、被レ命二諸卒一、有レ發二彼地一、予至二先陣一、即
外岳下郭討破攻入處、予依レ被レ疵、軍士驚引、仍
不レ得二勝利一也、欝憤雖レ無レ限。先薩隅日兩州之人
數也、皆令二歸國一也、

一菱刈依レ令二謀叛一、可レ有二退治一之旨、僉議區々也、
予告二諸卒一曰、近年於二馬越之城一付レ忍、其趣細々
聞レ之、則臨二其境一如レ見レ之、易可レ攻由、雖レ成
レ諫、諸卒未二同心一、或曰、菱刈要害十ヶ所有レ餘、
半時中莫大之人數相集、加レ之權威均二相良澁谷一、
易御退治可レ難レ成由爲レ訴、雖レ然予被レ任二申旨一、
永祿十年丁卯十一月廿四日、被レ催二大軍一、貴久
公義久公爲二御大將一、自二栗野一、有三御二進一發湯尾一、
予亦自二飯野一討立、臨二馬越境一、伺二菱刈西院之體一、
不レ意續松盡レ數往來、扨者隱謀相顯哉、與二士卒一
成レ疑、敢不レ進、不思儀哉、是者稻荷大明神奇火
也、於二當家一佳瑞其例多、兩院無レ程可レ屬二幕
下一、不レ可レ有レ疑由、曉二諸軍勢一、而寄二懸馬越一、於二
火麓廻一、揚二吐氣聲一、自二城内一、合二吐氣一、數刻雖二相
戰一、以二多勢一入替々依レ懸難レ叶相見處、自二本丸一
斬出、追二寄手之軍兵一、予於レ是渡二合強敵一、懸レ手數
多討捕、見レ之諸卒成レ勇攻入、城主及所二楯籠一之
人數、不レ殘討果畢、然而諸軍兵群二集貴久公義久
公之旗廻一、唱二凱歌一、其響轟二天地一、菱刈院中騷動
而其夜暨二深更一、六七ヶ所落去矣、自二其殘黨等一
賴二相良一請二加勢一、相二固大口城一、三年之弓箭、此
彼之戰、或討勝、或討負、未レ決二雌雄一、就レ中翌年
正月廿日、於二道崎一、有二不意合戰一、敵猛勢、味方
無勢、雖レ欲二相戰一、被三討二立多勢一、或被レ討或被
レ疵者多レ之、彌敵軍成レ勇、取二籠左右前後一欲レ討二

捕予、敵味方之間、纔隔二二三町一、雖レ然不レ亂レ足
返合々依二相戰一、味方漸渡二大河一、引二退曾木之城一、
遁二奇特之難一、因レ茲相良之軍兵乘二勝方々懸詰大成
レ勢之間、平松水與二五神之尼一之間、潜二伏二置人數一、
入二敵於粢理一、待二討果一、然者則明二退大口之城一、相
良人數者、引二入求摩一也、
一永祿十一年戊辰八月十日、菱刈弓箭之最中、爲二後
卷一伊東催二大軍一、取二陣飯野一、於レ是予回二計策一、同
廿日企二伏兵於陣中一、一人當千之勇士一兩輩、其外
數多討捕、因レ茲無レ程放二火陣一、伊東之軍兵引入
也、
一伊東入道義祐、隱者之條、元龜二年五月五日、率二
諸勢一、著二飯野一、發二向加久藤一、兼可二相働一之由、
雖レ有二其聞一、未二分明一處、俄如二雲霞一寄二來加久藤
城一、近押詰将二放火一、其煙横二半天一、敵猛勢、味方
漸不レ過二二三百一、若又合戰敵心者有レ之哉與、依二
疑敷一、手廻之人數、相分差二籠加久藤之城一、馬廻四五
十騎召列、懸二向大軍一、誠蟷螂斧無レ取二所論一、而討二
寄加久藤近邊一、欲レ見二要害之體一、煙討捲、敵之爲二
攻破哉、未二攻破一哉、不レ分二是非一、如何可レ有レ之
哉、與思廻處、爲二寄懸敵一、其引退、忽自二陣中一斬
出、追懸爲レ備レ勢、諸々之敵軍待二請之一、揃二干戈一、
揚二吐氣聲一、一同斬懸、味方軍兵被二追二散左右前後一、
於二予旗本一、捨レ身勇士拾四五騎、差向散二火花一相戰、
予又依レ難レ遁、相二定戰死一、自碎レ手、眞先進來者討
捕矣、縱軍兵滿合斬崩、彌添二力味方一、不レ漏二一人一
可二討果一由、加二下知一、諸卒相而追二懸落行敵一、予管
レ馬而走、返二敵軍一自二加久藤一二三里相過、落行勢之
中、着二紫威之鎧一五六十騎相具、懸通之間、喚返
來、其時二人違合、柚木崎丹後守與名二乘高聲一、二
人者不レ發二言語一、目二懸予一、不レ振レ面斬懸、寄付二
人、共懸レ手討留畢、猛勢敗軍故、易レ取遂事不レ叶、
而少歳共、依レ欲二遂延一、三山與飯野之間之廣野、
被レ討者如レ亂レ算也、一國之猛勢、纔二三百之以二
人數一討亡事、可レ爲二前代未聞一者乎、自レ其伊東運
命窮矣、
一累年依レ回二計策一、天正五年十二月七日、伊東家臣
福永丹波守企二逆意一、可レ候二當家一由告來之間、馬廻
纔二三十騎召具、馳二籠野尻之城一、同九日推二入綾一、
翌日、伊東居城討二入都於郡一、哀哉伊東入道義祐二籠

本城、雖欲成防戰、俄之逆亂、依國中之騷動、軍兵一人不馳續、同十一日戰防既盡、皆豐後之國沒落矣、予差向日州境、成武功者、十有四年之間、或討勝、或討負、及難義度々也、一々不記之矣、

豐後大友新太郎義統振威於六國、驕傲之餘、與伊東入道義祐易可斬返日州由、令衆議、天正六年戊寅十月廿日、率大軍、寄來日州高城、而燒拂城廻、打破下郭、已欲攻頭前中務大輔、籠谷當番可謀略、寄付敵於岸涯、放鐵砲、轟天地、忽被射殺者、不知其數、雖然强不屑之、結垣、引退本陣、十一月十一日予成下知、於松尾之陣之通路、企伏兵、敵千討捕、即平攻攻破一陣之敵、軍不殘討亡、自其味方之諸軍兵推寄、惣陣取卷、予於是當大河於前可相備由、雖加下知、伊集院右衛門太夫忠棟、依無同心、諸軍兵置大河於後相備、如案十二日之曙、敵軍斬懸、越河爲相備、軍衆其皆被追立、猛勢不辯河之淺深迯渡、北鄕讚人久盛、本多因幡守親治、於立所遂死、予者當大河於前、依爲相備、自前更之道口與敵相戰、々渡忽斬崩、然者伊集院忠棟被驅之手割合手、彼當州之軍衆離爲無双之强敵、所宿坐無爲方、而追入古川、人馬討重、埋不測淵、如是目醒敷儀、難述言語者也、數萬之軍旅纔被討成二三百、令飯國云々、爾來六ヶ國之大名小名、若黨至統、三江之鄕、十七日自三江討立屋、南鄕之峰起義來之間、追崩、數百人討捕、其間者越若海之河内、少欲休人馬之息處、又蜂起之從黨來、雖不屑、當難所之長路於前、大軍可引取事不具、若夜中迄在此地、於待付敵軍者、可及大事由、依衆議、夜中又討立、經難所、明頃佐伯表之敵雖襲來追散、越梓之大山、諸軍無越度引取日州懸畢

予時文祿元年壬辰、前關白秀吉公、引率日域之武兵、爲三韓御征伐、百萬餘騎被差遣、薩摩之軍士、又爲其隨一、肥前國松浦郡、於名護屋之津解纜、渡壹岐對馬之難海、到朝鮮、凌風雲冒危難、而成數年之在陣也、日本之軍[illegible]速兵於全羅道構城郭方々成在番也、予者於酒

川ハ、息宰相家久相共令在番處、自江南催數百萬騎襲來日本之諸陣ハ、就中於泗川ハ、茅老爺爲大將ハ、慶長三年戊戌十月一日、如雲霞寄來、而取卷要害ハ、揚吐氣聲ハ、放鐵炮ハ、種々戰術、動搖轟天地ハ、誠難遁消息也、夫日本神國、非佛天之擁護ハ、爭開此運哉、平生之信心在此時與、祈念心中ハ、指懸屏涯ハ、見敵之模樣ハ、双楯傾甲、頻欲攻伏ハ、不一戰而於及籠城者、敵踏本國之軍衆之兵粮矢種等可必、味方者、纔一城之人數、日本者㊎隔數百里之蒼海ハ、易難得加勢之間、欲遂安否之一戰ハ、而陣中鎮鳴、近敵於矢比ハ、揚吐氣聲ハ、斬出一同ハ、於是家久懸入猛勢之中ハ、自碎手被盡粉骨ハ、見之諸卒彌成勇斬掛、不思儀哉、白狐赤狐現、走入敵軍之中ハ、即稻荷大明神之御告無疑也、哀哉兩狐中◎恐有字脱而果畢、如此因神慮深ハ、無量斬崩猛勢ハ、追亡追北、伏尸不知幾千萬ハ、流血漂楯、而集首三萬八千七百有餘、其外討捨不知數也、日本開闢以來無比類次第云々、於是茅老爺可致和睦由、依令懇望ハ、茅老爺之猶子泗濱、令捕人質ハ、諸卒無恙、共乘飯帆之船ハ、發名譽於漢家本朝者也、

一小西攝津守、自泗川十餘里隔海路ハ、令在番順天ハ、然處江南人海陸共取卷、實網裏之魚如難遁體也、以大國之大軍取卷之間 以當一千ハ、可成謀略儀雖無思懸ハ、隣陣有之、而依難見捨ハ、夜中揃兵船押懸、敵船二三艘斬取、互雖成防戰ハ、彼者猛勢、此方無勢、殊敵者揃大船ハ、乘懸々々、燒破味方之船ハ、予至乘船迄已危處、敵船少灣隔引退、其間相繫近所之島ハ、而一夜之船陣、敵船又其夜者沖下碇相繫、此隙、小西攝津守陣之人數、不殘乘船一艘ハ、無越渡引取矣、自其日本諸勢、悉催飯帆ハ、直還着京城ハ、爰豐臣朝臣關白殿下、臨薨逝之期ハ、被預日本之執柄於內大臣家康公ハ、御幼息秀賴公、及十有歲ハ、速可被讓渡旨被仰置ハ、雖然佐竹長尾兩家不隨此旨之間、爲被追却有御進發ハ、爰江州澤山之城主石田治部少輔、太閤公之御時、爲股肱之臣ハ、其威無双肩人ハ、然處背內府公之命ハ、被止出仕ハ、蟄居之中所思合者、內府公到秀賴公ハ、可被讓天下儀不可有之 然者合心長尾佐竹ハ、催關西四十

國之軍兵ハ、即攻二破伏見之城一ヲ、發二向美濃國一ヘ、此由相二聞關東一ヘ、忽チ東國之軍兵打上、于レ時慶長五年庚子九月十五日、於二濃州關ケ原一有二合戰一、數刻雖二相挑一ム、未レ決二勝負一處、筑前中納言於二戰場一依レ起二野心一ヲ、味方敗北、逃登二伊吹山一ニ、於レ是予見二廻旗本一ヲ、漸ク人數不レ過二二三百騎一ニ、以二纔之人數一、難レ追二退敵軍一ヲ、又欲二引退一ム、爲二老武者一ハ、難レ越二伊吹山之大山一ヲ、縱タトヘ雖レ被レ討、向レ敵可レ死與思、乘二本道一ニ、討二果向者一追散、一日之中、度々斬二除猛敵一ヲ、凌二伊勢伊賀近江山城之邊土一ヲ、越二着攝津國住吉一ニ、而大坂於爲二質人一有二御座一 龍伯公之御息女、幷家久之慈母、其外薩摩之質人男女、不レ殘引列、令二歸國一畢、

颺言錄序

古之王者有二左右史一ハ、一言則書レ言、一動則書レ事、所下以謹二言行一昭中法式上也、故前言往行、足下以貽二後世一而爲中訓戒上矣、唐杜正倫對二太宗一曰、君擧必書、臣職當レ修二起居注一ハ、不下敢不上レ盡二愚直一ヲ、若一言乖二於道理一ニ、則千載累二於聖德一ニ、非三直當今損二百姓一ヲ、太宗大悅、嗚呼斯言也、凡君二天下一者、不レ可レ不レ鑑レ之、我大神君一統以來、五二世於レ今、四海昇平、黎民歸レ厚、先大君治平三十年、忽捐二群臣一而無レ嗣、今大君在二館林邸一ニ、遽然起レ自二龍潛一ヨリ、受二國家之讓一ヲ、欽明睿智、以レ仁御レ下、昭德敦化、威レ於二鈇鉞一ヨリ、道尊國豐、風移俗易、猶孜孜夕惕、視レ民如レ傷、夙興視レ朝不レ倦、乙夜覽レ書無レ怠、是所下以丕二五世之鴻業一而能致中萬國之懷服上也、臣正俊庸昧之陋質、忝浴二高擢之大恩一ニ、常咫二尺幕下一ニ、叨預二機務一ニ、唯恐固非二其人一而傷二和氣一ヲ、不レ勝二其任一而覆二鼎餗一矣、臣仰鑑二前世一ニ、未レ有二載筆之職一、以缺二記註之詳一ヲ、故 太祖神君以來 嘉言善行、唯在二古老之口授一耳、臣平日竊

嘆レ之、臣每侍ニ今大君ニ、有德之要言懿行、親炙視聽、日夜思レ之、服膺銘レ肝、臣生來固不レ可レ忘レ之、然自覺身後而知レ之者鮮矣、是故設ニ一冊子ニ、時時記レ之、日增月積、以爲ニ若干卷ニ、而欲レ命レ名、未レ得レ之、因與ニ野節ニ議レ之、節曰、昔舜作レ歌、皐陶颺言以賡ニ載之ニ、乃拜ニ昌德之言ニ而大言述レ之也、正俊以爲レ可、而題曰ニ颺言錄ニ、深藏ニ秘笥ニ、猶庶ニ聞見ニ記レ之而不レ止、伏想他年排レ之、欲レ獻ニ嗣君ニ、是正俊之微意也、

天和三年癸亥冬十一月穀旦

元老古河城主從四位左近衛少將兼筑前守

叢翁紀正俊叙

颺言錄卷之一

大君嗣世之始、宗對馬守上言曰、朝鮮國王爲レ賀ニ嗣世ニ欲レ來ニ信使ニ、先大君二世、朝鮮信使來朝之時、其參ニ拜日光山ニ謁廟、今番亦如ニ故事ニ乎、大君曰朝鮮王禮ニ敬於ニ我祖宗ニ不レ可レ有ニ其志之所ニ信、何使ニ異域之人濫ニ視我祖廟ニ乎、於レ是ニ爲ニ聞者歛ニ感ニ御旨ニ、

今年壬戌朝鮮來聘、有ニ 台命ニ曰、今年朝鮮信使致レ聘、凡自ニ馬島ニ至ニ諸國ニ驛路、其海陸舟馬飲食迎送、各可下隨ニ先例ニ厚禮遇上レ之、但以ニ異域之使价ニ、不レ可下敢以ニ華麗奢侈ニ飾上レ外、唯以ニ信實ニ可也、

余一日過ニ櫻田ニ、陌上見ニ七八歳四五歳之童子二人悲泣而歩ニ、余憐レ之使ニ從者問ニ之、曰飢兒也、余不レ忍レ見レ之、欲レ救ニ其兒ニ、又思余所レ職者、天下之政也、纔欲レ救ニ彼二兒ニ、乃小惠也、不レ應レ所レ職矣、悵然而行、然猶有ニ不レ忍之心ニ、使ニ從者與ニ之食ニ、明日侍ニ幕下ニ、奏レ事之後、偶上言曰、臣昨日陌上見ニ飢兒ニ、不レ忍レ之、伏願致ニ思小事ニ、不レ應レ所レ職、故徒行矣、

及二今日一、猶不レ忍レ之、可レ謂二臣念慮之過一也乎、大君聞レ之曰、是汝之惑也、仁心所レ發、何論二事之小大一乎、日月無レ所レ不レ照、纖芥之微皆受二其光一、汝以レ不レ忍二小事一爲レ過者、還是汝之過也、正俊赧然銘レ肝、汗流浹レ背、

朝鮮王致レ書如二舊例一、命二林貢野節一作二其報一、有二台命一曰、先例、彼國事、與二我國事一、皆揭三一字於二行行之上頭一而書レ之、然以二我國事一自尊レ之、乃無二謙遜之義一、今般報書、不レ可下以二我國事一揭中於二行行之上頭一、有二近侍一人一進曰、伏承二嚴命之重一、然今違二先例一、則恐彼國人以爲二憚屈一乎、如何、台命曰、彼國人所レ論是非、何妨乎、唯盡二我國之禮一、而事々得レ正、則可也、

余從恩之餘、宗對馬守來贈二天馬皮一、副レ之以二其獸形之圖一、且與曰、此獸出レ自二朝鮮國一、古書所謂此獸出則豐稔、乃以二斯皮一爲レ襖太溫矣、觀二其圖一、形如レ犬、毳如二白兎一、余以爲二珍奇一獻二大君幕下一、大君一顧而措レ之、翌日使三近侍牧野備後守還二授其皮一、而有レ命曰、凡珍奇玩好無用之物、非レ所レ可レ貴也、外國所レ貢有用之物、可二以珍一レ之、無用之物、太不レ益レ於レ人、且謂此獸出則豐稔也、乃以二豐年之瑞獸一、何忍レ剝二其皮一乎、又謂爲レ襖而溫也、乃防寒者綿襖而足矣、何求二珍奇一乎、且其皮有レ毒、亦不レ可レ知レ之、汝等盡レ思レ之乎、余叩首愧謝、以語二備後守一曰、大君聖明之言、爲二國家之敎一、可二以賀一レ之、臣等愚昧、貴二珍奇一而獻レ之、不レ堪二汗顏一、然不レ獻二此物一、則何得レ聞二此聖言一乎、固是天下之大幸也、

上總國龍崎之民、得三一怪石於二海濱一、玲瓏如レ玉、其大數寸、有二一孔一、吹レ之如二海螺之響一、以爲二奇珍一、八月四日、其民捧二其石一、獻二憲臺一、斯日執政山城守戶田忠昌、及諸奉行、聞レ訟而事畢、發レ營、正俊與二諸執政一奏レ事、侍レ於二御前一、忠昌上下言龍崎之民獻二怪石一之事上、大君默然、諸執政退、正俊猶侍、有レ命曰、方今忠昌所レ告怪石之事、他日召三其民於二憲臺一、碎二棄其石一、示レ民以レ不レ納二如レ此之奇物一而可也、正俊初不レ達レ之、大君從容曰、無益奇物、不レ可レ貴レ之、民之愚陋、可レ使二之喩一耳、正俊慚謝、感レ之太深、即退告二忠昌等諸執政一、以喩二諸奉行一、使下吏碎二其石一以示中其民上、

秋八月、慧星見レ手二西方一、幕下謂二臣正俊一曰、今秋

有二星變一、自レ古或有二吉兆一、或有二凶兆一、方今無二吉凶之可一レ應也、寡人嗣二先君之位一、爲二天下之主一、既三年矣　國家無レ事、自思身所レ行者漸欲レ有レ怠、政所レ施者、漸欲レ有レ私之時也、故天之警レ予、以示二斯變一、寡人可レ不レ愼レ之乎、正俊聞レ命不レ堪二歡抃一、感涙頻垂、拜手稽首而進曰、都　幕下自省　所レ愼如レ此、伏以斯星變、乃大吉兆也、臣等不レ可レ不レ賀レ之、數日而慧星不レ見、

一日正俊及諸執政、侍二于　御前一、召二寺社奉行大目付町奉行勘定奉行等一有　レ命曰、近年士民風俗疲弊、寡人以爲レ憂、汝等辨レ認布レ令、徒勿レ拘下其所二見聞一之是非利害而已上、畢竟以下直二士民之心志一、正中士民之行爲上爲レ意而可也、汝等深思レ之、委曲之事、筑前守喩レ之、汝等宜レ受二其旨一、

召三諸番頭於二　御前一有　レ命曰、每聞諸番士、或有二行事飽放不義者一、汝等宜レ令下諸士能勤二愼之一勵中戒之上、猶有二飽放不義者一、即上言可三彈二劾之一若私扶而隱、不二上言一、則汝等之罪也、

諸隊將（俗曰二物頭一）有二隊士步卒一者、（俗曰二與力同心一）及諸司有二屬官一者、悉召レ之、筑前守傳二　台命一曰、自二隊士屬官一至二步卒一、受二其號令一之輩、浮末奢侈、無禮無義者或有レ之、事既達レ聞、宜二以勤愼戒一レ之、後來若有下如レ此者上、依二其品一、或告二各官長一、或其諸隊長諸司長、自能糾斷、而可下隨二罪輕重一罪上レ之、若有二私扶而隱者一、乃諸隊長諸司長之罪也、汝等能可レ守二此令一、

大君一日命二臣等一曰、凡諸國之百工商人、以二天下一之字一、各銘二器物一、不レ知下自二何代一有上レ之、是爲二私欲一作二僞詐一、乃亂レ俗飾レ惡、無二其實一者甚矣、宜二固禁一レ之、即令二諸國制一レ之、

颺言錄卷之二

嚴有院公捐二群臣一之時、及二御葬一、大君曰、寡人自可レ預二其事一、大臣僉曰、御先世未レ有二此例一、大君曰、然則汝等爲二我名代一而可也、僉曰、無レ例、大君曰、先世禪受相嗣、皆常也、寡人受レ讓非レ常、何用レ逐二前例一乎、遂命二元老酒井忠淸一、爲二御名代一、奉三從二於御葬一、而後 大君居レ喪五十日之間、正襟危坐不レ出二園庭一、齋戒沈默、不二漫言語一、初遷二御於二丸一之時、有 レ命曰、大君嚴有院公常御之厠、有二畏憚之意一、太不レ安、如何、侍臣即速令三群工別作二一厠一、其間一日一夜、減二御膳一、不レ上レ厠、

大君在二二丸一、聞二自鳴鐘一曰、此打刻、與二市中之鐘一相違者、何乎、僉曰、舊例自鳴鐘太早、翌日又問曰、違レ時何乎、對者如レ初、翌日又問、於レ是執政正俊語二侍臣一曰、某察二 上意一、宜レ改二自鳴鐘之刻一、自レ是與二市中之鐘一無レ違、

大君欲レ遷二本城一、群臣請三改爲二內寢一、有 レ命曰、休息之寢、是 先大君常起居之座也、寡人畏憚不レ安、宜二改爲一レ之、其餘悉由二舊貫一斯可也、

大君遷二本城一、凡內寢被褥、世々皆用二綾繡一、特 命以二黑絹一製レ之、其禁レ侈尙レ質、皆此類也、

正俊一夕陪二 御前一、有 レ命曰、天下之事、先在レ擇二賢良一、凡善人雖レ得者、古今之通患也、汝宜下發中庸若二予采一者上、凡爲二人臣一者、版蕩之時、馬前致レ死、往往而在レ焉、太平之世、座上致レ死者鮮矣、正俊大服二其言一

大君嗣世之始、召二執政之臣等一定二 御印一、僉曰、幕下世世以二家字一爲二御諱一、方今可レ改乎、 大君曰、綱字者、 先大君之賜也、 台德院公以二大閤秀吉之所一レ授、亦猶不レ改レ之、況 先大君之賜、何改レ之乎、

天和二年、風和雨順、五穀大熟、處處有二稻一莖而數穗者一、闔國皆樂二豐年一、是瑞穗也、昔後漢光武有二九穗之瑞一、治世至二數百年一、今大君聖明德化及レ下、初新政之時、有 レ命曰、民惟邦本、不レ可二忽諸一、今玆豐年而有二斯瑞一者、想夫天人之感應者也

江戶淺草川、自二前代一世世有二大船一、號二安宅丸一、本

朝無類之者、然不便軍用、唯吾國之飾耳、是世人所傳言也、世修補之、年既尚矣、近歲多所損缺、故欲修補之而上言之、大君命執政等曰、嘗聞此不便軍用、唯吾國之飾耳、汝等宜糾其實、於是執政等會議、果不便軍用、衆議既決、大君聞之曰、無用之物、乃非無益耳、且又爲人之煩、況夫尚飾是僞也、不可修補焉、毀之可也、即命下船監而毀之、

台命曰、聞奉行部下同心與力、數年來習氣、貪汚太甚矣、宜急改之、若年久既成風俗、而難改之、則宜悉放之而使他吏卒替之、近來每部同心百人亦太多、各宜減四十人、執政等承命、即召甲斐莊飛驒守北條安房守傳告之、

大君嗣世三年于茲、德化自及下、民不令而易俗改、弊者既多矣、若婚姻養子貪賂遺禮者皆止、諸官互易宅地、倶値金銀者皆止、舟遊淫飲茶會競美、或好翫茶器、或日々宴享者皆止、無用之人每旦來往權門者皆止、從私從欲以不正之所願告請於公者皆止、侯伯達官亂其家國政教者多改之、諸士及代官鷹匠鳥見町人猿樂[illegible]奢欲者多改之、其餘不可枚擧、孔子所謂其身正、不令而行、誠乎、

大君常嫌下民之奢侈美麗、未敢下令、頃日幼君之母公、自解捨其御衣彩文之金絲、故營內給仕女中之衣服、悉傚之、皆解捨金絲、而後侯伯達官及士民、遂以爲俗、是 大君仁厚、自然感人也、

大君命侍臣曰、天下久治、故民之奢侈甚矣、上不以身教之、則下何能從之乎、自今而後、寡人服御、宜不擇麁細、縱雖舊垢不改之、近侍諸臣不可不傚之、

大君以衆俗奢侈爲憂、臣等承 台命諭長崎奉行、而於異域諸國之商船所來貢、各禁其無用之物數品、所謂羅紗猩猩緋及諸罽毳、不製衣服之諸織物金絲、珍禽奇獸怪蟲魚、非藥餌草木、諸材器用之珍翫、乃此類也、

癸亥春王正月、兩傳奏花山院右大將藤定誠、千種前大納言源有能、承密勅傳 詔於京尹稻葉丹後守正通曰、將軍家令嗣、今年五歲、宜任大納言、正通即以 密詔 聞於江府、臣等上言之、大君謹下兩手於御坐而拜禮曰、今辱承 密詔之旨、

謝而有レ餘、然　小子猶幼、而不レ爲レ晩矣　曾雖レ有二先君嚴有院公五歲直任之舊例一、而　寡人之身、本非レ備二天下之主一、以下　先君無二世嗣一故上、偶受二國家之讓一、而在二斯位一、則小子何隨二先君之例一乎、汝等宜下命二正通一能諭二傳奏之兩臣一　固辭謝中　密詔之旨上、臣等感佩叩頭、即以二傳驛之書一、達レ於二正通一、

天和壬戌冬十二月、江都風烈大火、及二癸亥之春一火災屢起、乃以二盜賊放レ火然矣、執政諸臣使下諸奉行命二吏卒一按中捕之上、或獲レ之、則論二其罪一、事達二上聞一、大君諭二臣及執政等一曰、都下屢有レ火、人民苦レ之、有司爲レ憂甚切、故深疾二放火之盜一、而其按撿者、至二七八分一　即決レ罪、則撿斷不レ明、論刑不レ詳、而非輕者亦陷二重刑一乎、不レ可レ不レ謹レ之、汝等所レ議何如、有二一臣一對曰、刑罰不レ重、則凶賊不レ懲乎、　大君曰、不レ然、刑之不レ及者、不レ當二其罪一、刑之過者、亦不レ當二其罪一、無二過不及一者、惟刑法之正也、臣等嘆服、

颺言錄卷之三

大君常以二民俗之奢侈一爲レ憂、命二執政奉行之諸臣一、屢議レ之、下二服飾令一曰、凡神事祭禮佛事法會、不レ可二奢侈一、寺社及修驗之法衣裝束、不レ可二華美一、各宜二太儉一、凡農商工及猿樂等、縱雖下賜二官俸一者上、唯佩二一刀一、不レ可レ佩二兩刀一、其衣服、以二絹紬綿麻一可下隨レ分服上之、其妻子亦可レ從レ之、但猿樂等勤役之時、可レ服二熨斗目一、凡諸賤婢之衣帶、可下以二麻布木綿一製上之、

天和二年三月、巡監使人上言、駿河國富士郡今泉村民五郎右衛門、事二其父母一、孝行之勤致レ誠、接二其邊民一、扶助之義稱レ善、居レ喪恭謹、能救二飢民一、惠二鰥寡孤獨一、大君感レ之、召二其民於江都一賞レ之、賜二御朱印一、除二其田畝九十石之租稅一、以顯二孝義一、其後邊民化レ之者多、

大君嗣レ世爲レ政之始、先二選擧一以下　先大君近侍之臣忠勤超レ類者、大久保兵九郎、松平傳左衛門、坂本小左衛門、大久保一郎右衛門、甲斐莊三郎右衛門、須田

市兵衛六人。久勤不怠 先大君特有恩顧者也、因賞之、各加賜采邑五百石、癸亥夏四月廿日、當大猷院大君三十三回之忌辰、先是 御駕欲詣日光山、壬戌之夏、大君下命曰、近年五穀荐不登、人民窮困、寡人以爲大患、乃此行不忍驛民之勞苦、寡人詣山廟、豈營忌辰而已乎、宜罷來歲之行、於是癸亥之夏、命執政佐倉拾遺大久保忠朝、行日光山廟法會之事、事畢、從五位下左兵衛佐梶定良有 召來於江府、五月二日、召定良於 御前有命曰、汝在日光山三十餘年 奉仕 大猷大君之廟、朝夕無怠、非忠誠之厚、豈能然乎、寡人太感汝志矣 即授定良從四位下、而加賜食邑千石、定良初爲 大猷大君近侍之臣、特有恩寵、精勤至矣、及 薨奉護 御靈轜、上日光山、遂爲守廟之長、而其居相去十餘町、每日鷄鳴而起、夙詣拜之、及夕又拜之、于今三十餘年、無日少怠、常勸廝下吏、灑掃太勤、或自執箒、謹役之、定良常思 大猷大君、猶現存在御坐也、故灑掃之吏若或有怠、則艴然戒責之曰、汝等於 御前、何爲如此乎。其誠一貞固。大概如此。定良今年七十二、容貌强健猶壯。一生無妻無子、人皆無不服其高義、嗚呼 大君厚賞斯人也、致孝之誠。揚善之明、乃如此。

出雲國主堀尾氏、奉仕
東照大神君、屢有忠勳、而賜御書、
台德大君讓世於 大猷大君之後。堀尾山城守病
沒、無嗣而絕、其家臣野村以心悲勳家之無嗣、屢
請官、而不問之
嚴有大君之世、以心委身、請官以外族之子繼其
姓、而又不許、及
今大君之嗣世又上狀請官、申獻
神君之御書、凡數十年之間、不顧自家事、一心請
之、而不問之、癸亥夏四月、當
大猷大君三十三回之忌辰、以心請日光山守全法親王
之告官、於是
今大君有 命曰、堀尾之家絕嗣年久、方今無奈
之何、
神君所下之書、如彼之請宜還呈之、以心立忠
義之志、經年固執不怠、可賞之、
命下、於是賜年俸於以心、以心拜謝、匍匐自陳曰、

數十年來之志願、一時氷消、洪恩萬萬、不レ知レ所レ
報、然
神君御書、則去歳壬戌十二月廿八日、罹二都下之大
火一、以心即欲二上二聞之一、而自謂若上二聞之一、則再難
レ奏二掘尾之忠勤一、故隱レ之不レ言、今一得二上聞一而志願
足矣、以心所レ隱之罪、固中二誅罰一、至レ此賜レ死、則
無二一毫之遺恨一焉、事達、
大君嘆賞曰、彼之所レ爲、則似二大詭一、然志皆出レ於二
忠義一者、猶增大矣、遂賞レ之、而不レ問二其罪一、
癸亥之夏、京尹稻葉丹後守正通來 レ府、密語二正俊一
曰、明年大君 幕下、宜三轉二任 右大臣一、然今春有二
淨德院君叙位任官之 內勅一、
幕下固辭而止、及レ此又辨レ之、則爲二禁裏一而不可矣、
宜下諭二筑前守一而竊議上レ之、是
天皇之意也、正俊即密上言、
幕下有 レ命曰、轉任猶未レ晩矣、宜レ奉レ謝レ之、正俊拜
伏、感二謙讓之厚一、而以告二諭正通一、
癸亥冬十月。
大君召二正俊及執政等一、有 レ命曰、去歳今歳大有レ年、
以二此豐饒之秋一、下二令諸國一宜レ爲二凶荒之備一、正俊即

與二執政等一胥議、以二 欽命一、傳レ於二諸國主領守等一、
而普令曰、各國各郡、謹承二 台命一、稍成二庫倉之蓄一、
宜レ充二救荒之用一、勿レ遺二失之一、
正俊嘗疑二武王伐レ殷之事一、屢求二諸古人之所レ論、
而此疑難レ解、一日陪レ於二
幕下一、白レ事之次、偶及二此說一、正俊以二數年之疑一、達
レ於二
上聞一、且口日以獻レ之、
武王克レ殷者、爲二萬民一而討二其君一也、余常竊疑
レ之、若謂下以二道之大者一易中小者上、則不可也、君雖二
一人一而大矣、民雖二億兆一而小矣、且又微子箕子、
則紂之庶兄親戚而仁者也、擇二此二人之間一、爲二殷
後之天子一而事レ之可也、然武王自爲二天下之主一、則
余惑、於レ是難レ解、余又竊疑、微子箕子仁者也、
然見三武王之討二其君一、而徒然受二其封一、無二報レ讐之
心一、不レ知二如何一、伯夷天下之大老、而歸レ周、及二武
王伐レ紂、叩レ馬而諫、諫不レ聽而逃矣、乃雖レ不レ逃
而何有レ害レ義乎、以レ愚視レ之、微子箕子、不レ能
レ報レ讐 則不レ食二周粟一而可也乎、至レ此余惑又難レ
解、

叡覽之後、有ニ 御感一而御手自被レ筆ニ其後一曰、
此論可レ謂ニ忠義之志深切一也、
　正俊感戴萬萬、辱拜ニ 恩言一、錦嚢而藏レ之、
大君一日與ニ正俊一議レ政之時、語曰、凡人思ニ事事皆善一、故難レ善レ之、譬如三命レ工製ニ小器一、初思ニ其製之適一レ心、器成而有レ所レ不レ適レ心、故改ニ作之一、亦不レ適レ心、凡物皆然矣、古曰、水至淸則無レ魚、治ニ國家一者可レ不レ思レ之乎、

颺言錄卷之四

臣一日侍ニ 御前一、論ニ古名將之事一、臣上言曰、亂世之後 國家無ニ遑處一、而名將能思ニ治世之計一、治世之將、却無ニ其思一、何如レ此乎、大君曰、亂世之後、必思レ治レ國、故深以ニ草創一爲レ念、治世久而國無レ事則怠ニ守成一、故用レ心大疎、譬如下病人能專攝レ生服レ藥或求ニ針灸一而不レ怠、及レ無レ病則必怠中修養上矣、

勸忠書

頃聞得二新官一、其國君賢明、乃子之欣幸可二料知レ之、然若不善則易レ竭二忠義之力一。若君善則致二忠義之誠一固不レ易也、余見二常人事君之勤一、乃遑二忠義之心一者多矣、偶因レ所レ思、揭二座右之誡一、筆二記數條一寄二送之一、草牽之言、能擇二取之一而可矣、

一忠孝之道、自レ古論レ之、如三車有二兩輪一、余常想、忠最重矣、若以レ孝爲レ重者、則其父母存之間、不レ事レ君而可乎、

一事レ君之道、常人不レ省二其可レ務之如何一、而徒爲二尋常之務一、悾々而止耳、

一君喜則進、君怒則退、唯移二心於人主喜怒之間一、而不レ見レ所三以立二其志一、

一自己身命、既献二人主一、然徒爲二自家之物事一、而事レ君、或有レ所二自愛好一、或有レ所二自嫌惡一、

一人主若附囑以二細小之器物一、則日夜專心守レ之、於下其居二官職一受二封祿一之大上、則以二身命一爲二我有一、而不二專心守レ之以一レ正、

一人主所二附囑一之物品、或其所二珍藏一、或其所二愛用一、則謹レ之、及二麁細之物一、則不レ謹レ之、是唯以二物之精麁一爲レ心、而以二君命一不レ爲レ心也、

一己心所レ守不レ正、則唯以二眼前之進退毀譽一爲レ務、而至二奉上之忠、勤事之本一、則不レ辨レ之、

一常人之居二官職一、己之所レ好則喜レ之、故其勤太精、己之所レ不レ好則不レ喜レ之、故其勤太疎、

一常人與二其朋友一私語、則或嘲二人主之過惡一、至三人主問二朋友之過惡一、則隱レ之不レ言矣、

一人主之洪恩則輕レ之、朋友之小惠則重レ之、凶愚之人、遂忘二此洪恩一、貴二彼小惠一、以二朋友一代二人主一、而自以爲レ義、嗚呼悲夫、

一常人多憚二朋友權勢之心一、折二事レ君之志一、乃不忠之甚者也、

一不肖之人、與二朋友一私二語人主之非一、而自謂以二其不善一爲レ患、是嘲レ上者也、何益レ於二人主一乎、唯以レ矜二己之邪智一然矣、若欲レ格二人主之非一、則致レ誠覃レ思、伺二其便宜一而密納レ諫可也、凡人爲二其君一捨二身命一者間在焉、忘二身命一者鮮矣、乃不レ忘レ之

則豈謂二忠臣之本志一乎、

一隔二人主之恩一者、不下自悔以二愼レ己改レ過爲上念、而唯欲三掩二蔽其非一耳、

一凡人敎二戒親戚朋友一、以二事レ君之務一者、若言下爲二人主一而好者上、則爲二其人一亦好矣、然敎レ之以下爲二其人一而好者上、從爲二其人一不レ好矣、

一人多乏下任二己上一之官在二己下一之職上、則著レ心欲下應二其務一計中其事上、至下己之可レ務者上、則忽諸、

一人主洪恩其類多矣者、感佩太淺、其類少感己獨承レ之者、感佩太深、何則以レ屬二心於一他故然矣、

一凡人可レ恥者則不レ恥、不レ可レ恥者則恥レ之、人主不レ用則恥レ之、因二其不一レ用、生二恨恚之心一則不レ恥レ之、衣食居處、各隨レ分而儉則恥レ之、飾レ外爲レ奢則不レ恥レ之、

一有二一侯伯一、使二衛士四人守一レ門、一日犯レ罪者過レ門、不レ禁レ之、其主糺二責衛士一、皆自陳レ罪曰、一人讀レ書、一人習レ射、二人圍レ棊、故不レ知レ之、想是其所レ爲者雖レ有二美惡一、而不レ勤二可レ守之道一、則皆同矣、

一常人粧二言貌一、飾二才智一、乃雖レ美レ外、而其處レ事太危、唯不レ超二生質之分一、而無二粧飾一、則人主朋類之所レ見、便是其實、故不レ危矣、若色粧鄕愿居二非分之官職一、則必至二謬レ世危一レ身、凡愚不肖之人、從二眼前之美利一而不レ辨二己身之有一レ害、可二以嘆一レ之、

一或問レ余曰、有二吾友戒レ我者一、謂奉公精勤、勿下抱二危懼之心一而爲中自保之計上、唯可三純一而踏二入可レ務之路一矣、我事二斯語一常勤レ之、而未レ得二踏入之路一、爲レ之何如、余答曰、若尋二其道一、則雖二終身勤求一レ之、然遂可レ得レ之、唯能踏二入無路之地一、而損レ体傷レ足、亦可也乎、

一凡事レ君者、皆重レ祿蔵レ恩而奉公以勤者多、不レ可レ謂二眞忠一乎、是故或違レ命犯レ怒、所レ黜所レ疏、則恨恚即生、豈謂二致忠之誠一乎、唯以二純一愛レ君之心一而勤レ之可也、

一凡事レ君、願レ從二人主之心一者皆同矣、然不レ知二人主之所一レ好、而唯以二所レ願之私欲一、送二歲月一而已、

一余見二古今忠良之臣者一、或臨二患難一、而委レ身致レ死、或納二直諫一、亂二官祿一、而自以爲レ潔、乃是而已、余想爲レ君自不レ顧二後世之嘲一、而或臨二難レ遁之地一、能

惜生苟違、或自請官祿而不爲汚辱、若斯而爲徇君之事者鮮矣、若以爲君捨身命亂官祿爲義、則爲君惜身命請官祿、亦豈不爲義乎、無他、唯從我私心而求名、故以彼爲義以此爲不義耳、如大公無私、則豈有彼此之違乎、

右數條、其取捨在子之所擇耳、凡人皆其本心之誠、則固有之、乃以爲私欲所蔽故、心與行爲二矣、萬殊無窮其本一理、其間不容一毫之私、則心與行爲一矣、然則奉公之務、專事皆不求而中、不勞而安、每其所務能適人主之心、而其榮福自至耳、若欲知其私之所在則自可問我天君、天君是我明徵之人也、問此明徵、則豈不知之乎、子平日好讀聖賢之書、余嘗昧而不知道、孤陋寡聞、恐不有子之所取者矣、然所思不言、則不慊心、故爲子言之、余觀古人之言、至理明備、但聖人能知時、又隨人之氣質而教之、隨其所問而答之、後賢編其言以成其書、今學者讀其書、而必先好爲人師、不知其時、且不辯問者之氣質、唯混然講說、故受教者、徒從己性之所好而言之行之、故讀書之人、却多不善之人、乃讀書何益矣、凡古聖賢之言、讀之者非每人可悉用之、願夫爲學者如喫飯而可乎、余見世之學者、以聖賢之言如扶杖然矣、飯則自然、而爲人力之健者也、杖則倚賴而爲人力之助者也、子能知食與杖之辯、則有小補乎、子其念茲、

天和壬戌　　一不斧子識

勸忠書跋

天之生二斯人一而賦二斯理一也、彝倫之道無レ不レ具焉、彝倫之最重者、在レ國則有レ忠、在レ家則有レ孝、乃有二大上之恩一、而父母之養亦有レ之、故特所レ重者忠也、忠不レ可レ不レ盡レ之、非二至誠純一一、則何以謂レ盡レ之耶、能至誠純一者、生質之美或有レ之矣、好學之人或有レ之矣、生質之美者、無二以尙一レ之、然太鮮矣、好學之人者、必讀二聖人之書一、必學二聖人之道一、然知二聖人之志一而行レ之者又太鮮矣、何則聖人能知二其時一而行レ之、能（知字恐脱）其處而居レ之、能知二其人一而敎レ之、自レ古讀レ書學レ道、而其所レ行所レ居所レ敎、各不レ違二聖人志一者幾人乎、況生二我　本朝一讀レ書學レ道者乎、去二聖人之世一殆幾千年矣、隔二聖人國一殆幾千里矣、學者不レ能二離レ經辯一レ志、不レ能二知レ類通達一、徒然拘拘、欲下以二斯世一如中聖人之世上、欲下以二斯國一如中聖人之國上、世殊人異、國殊俗異　而强欲レ同レ之、豈能易レ得耶、乃不レ辯二時與一レ處而然矣、所二自行一者如レ此、敎レ人者亦如レ此、必欲レ使二人人同一、乃非レ不レ知レ人而何歟、於レ是欲レ知二聖人之志一、然不レ可レ得矣、欲二能至誠純一一、亦不レ可レ得矣、凡生質之美而至誠純一者、於二事レ君致一レ忠、自然而不レ乖二其義一、然或有下不レ知而違レ理者上乎、固美矣、未レ盡レ善也、好學之人而至誠純一者、能知二聖人之志一、能隨レ時而行レ之、能隨レ處而居レ之、則於二事レ君致一レ忠、不レ乖二其義一、不レ違二其理一、盡レ美矣、又盡レ善也乎、元老明發紀公、乃其人也、生質之美則有矣、其好學者亦有レ之、頃日紀公作二勸忠書一而自勸二戒之一、且又以爲二人之勸戒一、別以二俗字一書レ之、欲三不文者能解二之、節讀レ之喟然而嘆曰、凡讀レ書學レ道者何爲乎、乃欲レ如レ此也、能如レ此、則於レ事レ君何在矣、事レ君而能如レ此、則孝弟之道亦存矣、宜乎　紀公奉上之誠、至矣盡矣、若使二世人能如一レ此、則可二以移一レ風、可二以易一レ俗、唯恐下讀者以二其近一而忽上レ之也、節不レ可レ無レ言レ之、於レ是乎謹書二其後一云、

天和癸亥夏四月

鶴山野節識

御製惺窩先生文集序

蓋聞、文者貫道之器也、自昔年大昊八卦、書契之作、延々綿々、如天地之不可易矣、如日月之不可息矣、禮樂政令之經緯乎穹壤、洞徹乎古今、法度教化之融液乎遠邇、周遍乎內外者、不亦甚乎是哉、近世有北肉山人惺窩先生者、寬仁大度之君子也、幼而穎悟、一覽千言、七過萬句、弱冠而益通經史及諸子百家之書、莫事不備、莫物不詳、其爲學也、博聞强記、故其爲理也、精察明辨、其爲友也、范袁張彪之徒、王戎仲容之屬、朝馳騖乎書林、夕翺翔乎藝園、非其道、雖高車駟馬不顧焉、棄之如弊屣、從其道、則簞食豆羹、亦足以頤神而保年也、義士仁人、慕德望風、出入其門、往來其道者、不可勝計、於乎空谷之足音、晦暝之日月歟、而彼精微妙渺、雖猶不可階天而升也、儘亦得先生之一體者數輩、日新月盛、自此以後、百姓尊信聖賢、誦說仁義、其恩惠德澤、所以蒙天下後世者、至矣盡矣、斯時也、談士雲起、狙詐星聚、然道德之說、罕有所聞也、先生獨悼斯民之陷於塗炭、苦此道之湮於塵俗、屢遊說諸侯、上述堯舜、下陳周孔、然滑稽口給之士、皆以爲迂遠而闊於事情、故不爲世用、乃退廬市原、隱居放言、恣思丘岳、任情山林、沈吟小詩、作爲文章、而其遺稿餘篇、紛々藉々、惜其無統紀者、其子爲景採而輯之、間亦竊附己意、所以裨補其闕略紕繆者數卷、名曰惺窩文集、朕偶請而觀之、則忘食忘寢、萬慮以澄、百節以通、耳目以融、肺腑以淸、猶如龍護珠不釋、造次必於是、顚沛必於是、噫嘻、朕於先生、不見顏色、不通言語、而百年神交、如合符節、果何之謂也、所視所言、所動所蓄、庶幾乎其不差也焉、詠嘆之餘、聊託管城子、妄爲之書、乃譬嘒星之繼朝陽飛塵之集華嶽云爾、

慶安四曆辛卯九月十二日

惺窩先生系譜略

先生系出二于法成寺攝政道長公第六男長家卿一、長家官至二權大納言一、號二御子左一、又號二三條一、長家生二忠家一、爲二權大納言一、號二小野宮一、忠家生二俊忠一、權中納言、號二二條院一、俊忠生二親家一、初爲二男葉室權中納言顯隆子一、改名二顯廣一、後歸二本宗一、又改名二俊成一、爲二皇太后宮大夫一、家居二五條一、世稱二五條三位一、別賜二播州三木郡細河莊一、江州坂田郡小野莊一、是爲二倭歌所奉邑一、遺二于世世一封、俊成生二定家一、號二冷泉一、後稱二京極一、爲二民部卿權中納言一、父子相繼善二倭歌一、永爲二世範一、定家生二爲家一、權大納言兼二民部卿一、住二采地嵯峨中院一、爲家有二子三人一、長曰二爲氏一、權大納言、號二御子左一、其後裔稱二二條家一、又號二冷泉一、次曰二爲教一、左兵衛督、號二京極一、季曰二爲相一、權中納言、號二冷泉一、三家鼎峙。各立二門戸一、正元年中以二書券一付二播州細川莊於爲氏一、爾後爲氏有二不孝數事一、爲家悔レ之、文永十年癸酉七月二十四日、十一年甲戌六月二十四日、以二文券兩通一付二爲相一、建治元年乙亥五月一日爲家薨、葬二嵯峨中院一、爲相幼、故爲氏強二奪細河莊一、爲相母北林禪尼赴二鎌倉一、訴二將軍惟康親王一、爲氏亦告二其事一、獄久不レ決、爲氏爲世父子、與二爲相一論爭不レ已。又訴二將軍守邦親王一、執權相模守平熙時判二曲直一、以二正和二年癸丑七月二十日一、賜二公牒一通於爲相一、復二其本邑一、其牒今存二于吾家一、後住二鎌倉一、號二藤谷一、薨葬二藤谷岡一、墳墓猶存、爲相生二爲成一、爲二左兵衛督一、早世、弟爲秀嗣、權中納言、建武亂後、細河小野兩莊爲二人所一レ奪、爲秀無レ由二告訴一、徒抱二哀痛一、爲秀有二二男一、長曰二爲邦一、次曰二爲尹一、爲邦爲二爲氏孫爲明之子一、繼二御子左家一、騷亂之間、失二其世祿一、唯攜二典籍一而家居、尋早世、爲尹乃嗣二爲秀後一、爲二民部卿一、爲二權大納言一、應永二十三年丙申五月十八日、將軍左大臣義持公、還二付播州細河莊于爲尹一、爾來傳至二爲純一、無レ有二爭者一、爲尹有二三子一、長曰二爲之一、次曰二爲員一、次曰二持和一、持和生而穎悟、才過二二兄一、故爲尹太愛レ之、釋氏有下請二以爲二弟子一者上、不レ聽、左大臣義持公賜二持字一、名二持和一、因爲二伯父爲邦後嗣一、傳二奇書秘笈一、襲二號御子左一、以二采邑不一レ給故來歸、爲尹乃分二與細河之地一、號二冷泉一、吾家今猶幷用二二條之家規一、本出二于此一、後更名二持爲一、權大納言、

持為生成為、將軍左大臣義政公、初賜成字、後賜政字、因改名政為、享德二年癸酉五月二十五日、還付江州小野莊、兼民部卿、為權大納言、政為生為孝、為侍從中納言、為孝生為豐、侍從從三位、為豐生為純、參議侍從、累世住播州、歲時入朝、有子數人、長曰為勝、為左近衞權少將、次曰斂勝、次乃先生也、幼而為僧、既長常讀聖賢之書、志嚮儒術、後遂還俗、名肅、字斂夫、號惺窩、詳行狀、次曰後久、改姓源、名有親、繼六條有孝後、次曰為將、天正六年戊寅、赤松氏旁族別所小三郎源長治以兵襲來、略細河莊、為純為勝父子防之、四月一日戰死、依藤氏某聞事急來援、館舍燒亡、父子已死、某悔來遲而立自殺、士人感其義、合葬三人、樹松三四株、名曰冷泉塚、或曰依藤塚、播人至今稱之、歷世藏書盡為灰燼、肅訟之平右府信長公家臣筑前守秀吉、秀吉曰、且待時運、意不果、肅無如之何、於是齎正和二年公牒及殘編遺書、奉母與兄弟同來京師、後弟為將加元服、任叙官位、時既失邑、家亦垂絕、肅子為景初奉仕後水尾帝、任圖書頭、賜號細野、取細河小野首尾字也、後光明帝正保中敕、冷泉古有兩派、可以再興、傳旨於東府、以為景復為冷泉、任左近衞權少將、尋轉中將、賜城州愛宕郡小山村、相樂郡林村、及小寺村三所之地、數蒙顧問、侍講經筵、善詩歌及倭文、所著有白鷗文集若干卷、

享保二年花朝前日

正二位行民部卿藤原為綱謹識

是尙窩記

是尙窩者　日東儒者斂夫之窩也、其所謂是尙者何也、予嘗聞㆓孟子之言㆒曰、一鄕之善士、斯友㆓一鄕之善士㆒、一國之善士、斯友㆓一國之善士㆒、天下之善士斯友㆓天下之善士㆒、以㆑友㆓天下之善士㆒爲㆑未㆑足、又尙㆓論古之人㆒、是以論㆓其世㆒也、是尙㆑友也、夫以㆔一鄕一國天下有㆓其士㆒孟子猶以爲㆑未㆑足㆑爲㆑友、況以㆔一鄕一國天下無㆓其士㆒乎、夫以㆓孟子之時去㆑古未㆑遠、而猶且尙㆓友古人㆒、況以㆘今之時與㆓孟子之時㆒又加相遠㆖乎、所㆑賴古昔聖賢之生去㆑我者雖㆑遠、而古昔聖賢之心迹布在㆓方策㆒、令斂夫盡得以誦㆓說之㆒、諷詠以紬㆑之、涵濡以得㆑之、晨夜於㆓其中㆒坐臥乎相對、與㆓稷契皐陶伊虺周召㆒、揖㆔讓進㆓退於典謨誥命之中㆒、與㆓騫牛雍陽游夏由師㆒、升㆓降切㆔磋於洙泗杏壇之上㆒、欲㆑聞㆓入德之門㆒、質㆓之於孟子㆒、欲㆑得㆓性命之原㆒、問㆓之於子思㆒、左手拍㆓濂洛肩㆒、右手挹㆓紫陽袂㆒、和風慶雲、泰山巖巖、盡爲㆓責㆑善輔㆑仁之益友㆒、則地之相去也雖㆑隔㆓萬有餘里㆒、世之相後也雖㆑隔㆓萬有餘歲㆒、而吾之所㆑聞㆒、惟古人之言、所㆑見者惟古人之事、所㆑行者惟古人之道、吾之一心、即古人之心也、一身即古人之身也、所㆑居之窩者、即古人之窩也、則是窩之得㆑名㆓是尙㆒、其知㆑有㆑所㆑取㆓於斯㆒也、予嘗聞日東四大姓、藤爲㆓之宗㆒、又嘗見㆓宋太史景濂詩㆒有㆑曰、聯城甲第競㆓豪華㆒者是也、自㆓曠古㆒世攝㆓國政㆒以至㆓道長㆒、長五世孫京極黃門定家以㆓道德文章㆒顯、十一世孫參議爲純、是斂夫父也、以㆓王綱不㆑振亂賊橫恣㆒、自㆑幼隱居不㆑仕、以㆑道自樂、阿堵一世人物渺然、則斂夫之所㆑友、舍㆓古人㆒其誰哉、嗟乎余是遠人也、自㆓結髮㆒則對㆓聖賢黃卷中㆒嘐々然、嘗曰、古之人古之人、而今者不幸旅㆓寓於絕域之中㆒、偸㆑生假㆑思、所㆑闕㆒死、則於㆓古人成㆑仁取㆑義之道㆒何如哉、幽明之間、大宮良友聞㆓子之道㆒汗顏哉、故爲㆓之記㆒、發㆓揮是尙㆒、而因以自憚焉、

萬曆己亥　　朝鮮刑部員外郎菁川姜沆記

惺齋記

自三予之落二日東一者三年、得二斂夫於日本王京一、與レ之遊者數月、始知二其爲レ人而聞二其爲レ學焉、既聞二其爲レ學而益信二其爲レ人焉、其爲レ人也、隱居教授、不レ求二聞達一、人可レ聞而不レ可レ見、可レ見而不レ可レ知也、簞瓢陋巷、處レ之裕如、義所二不可一、雖二千駟萬鍾一、有レ所レ不レ屑也、疾レ惡如レ風、見レ善若レ驚、道所レ不レ合、雖二王公大人一、有レ所レ不レ顧也、其爲レ學也、不レ由二師傳一、不レ局二小道一、始二於佛老之學一、得二箇昭昭地一、以二其心迹背馳一、終棄去不レ爲、而因二千載之遺經一、繹二千載之絕緖一、深造獨詣、旁搜遠紹、自二結繩所レ替、龍馬所レ載、神龜所レ負、孔聖所レ籍、迄二于濂洛關閩性理諸書一、靡レ不二貫穿馳騁一、洞念曉拆、一切以下擴二天理一收中放心上爲二學問根本一、其所レ居精舍、扁曰二惺齋一、人莫レ會二其意一、予聞而喜レ之曰、我知レ之矣、茫茫堪輿、俯仰無レ垠、人於二其間一、藐然中處、參二兩儀一而爲レ三者、以三其有二是心一也、是心者一身之主宰、而萬理之所レ具也、萬事之所レ應也、性情之所レ統也、舍レ是則人豈得二以爲レ人哉、雖レ然是心者一活物也、虛靈不昧、遷動難レ安、出入無レ時、莫レ知二其鄕一、其或耳目之官失二其所レ司、旦暮所レ爲、有二以梏亡一、聲色臭味鑠二於外一、喜怒哀樂動二於中一、則放以二須臾一、走以二千里一、人之一身如二一空室一、主人翁既去二其所一、而狐兎魑魅反爲二之主一、與二禽獸一相去者詎幾何哉、惟聖賢知二其然一也、故存養省察、提撕驚覺、換二掇此心一、夫常惺惺、天關泰然、百體從レ令、洞然八荒、皆在二我闥一、此昔賢所謂常惺惺法、而斂夫之所三以名二其齋一也、嗚呼古往今來、孰無二是心一、而心爲二形役一、舉レ世同然、有レ放而不レ求、視不レ若二雞犬一、日夜之所レ息又盡二於牛羊一、則豈不レ可レ知之甚、而惟斂夫獨以レ收レ放爲レ事、惺惺爲レ法、則斂夫之學、可レ謂三先立二乎大者一、其小者豈能奪哉、嗚呼三千之徒、蓋莫レ不レ聞二其道一、而獨得二其宗一者、曾氏之傳也、程門群弟子、蓋莫レ不二親炙一、而不レ失二其正一者、尹氏之子也、今斂夫乃於二百王之季、窮海之表一、尋二繹微言一、慨然自奮、眞實心地、刻苦工夫者、乃能如レ此、則滄海之不レ能レ隔二地脉一有二如レ是者一、豪傑之士不レ待二文王一者、孟子豈欺レ我哉、叔季之人知二斂夫一者鮮矣、則予雖二遠人一、而勢不レ得二以不レ言也、故爲二之記一、以俟二夫後世之子

雲ニ焉、

萬暦己亥

朝鮮刑部員外郎菁川姜記

重修惺窩先生文集跋

曾大父惺窩先生文集、舊所ニ梨行一有ニ林氏所編五卷菅氏續編三卷一、而字句脫誤、遺漏亦多、大父竹陽君嘗憂レ之、乃以ニ手筆遺稿一訂レ訛補レ闕、附以ニ倭歌倭文凡十五卷一、別有ニ副本一藏ニ于家一、慶安之初有レ旨備ニ天覽一、御製賜レ序、實希世之寵也、在昔菅家三世文集、延喜皇帝賜レ詩褒稱、其它大家巨筆、雖レ不レ乏ニ其人一、而聖言冠レ首吾未ニ之聞一也、伏讀ニ宸語一、有レ言、噂星灑ニ朝陽一、華袞之賜、贈諡之美、未レ足ニ以爲レ比也、豈非ニ斯文之昌會家門之顯耀一乎、三韓姜沆、跋ニ先生訓點五經一曰、今日薄、而後日有レ厚、其言於レ是乎徵矣、大父君亟規ニ繡梓一、已命ニ淨書一、寬文辛亥、二本俱罹ニ于災一、欲レ不レ爲ニ之辛酸一得乎、幸先生手筆遺稿尙存、爲經承レ家已來、常以レ此爲レ憂、百方予計、以求ニ復舊一、凡短篇小帖之散、在ニ于親友門生一、懇祈假借、隻語單辭之沈ニ淬于遐陬遠域一者、極レ力蒐致、如レ是數十年、尙未レ得レ全焉、一日水戶西山君、使ニ介紹一謂ニ爲經一曰、我與ニ祖父君一有ニ夙好一、每ニ談及ニ文集一、莫レ不ニ慨嘆一、二本苟存、願命レ工行ニ

于世一、於レ是以二遺稿與一林菅二氏所レ編參攷裨補、纂輯始成、繕寫送レ之、君大悅、然有レ故不レ得レ果、吁使二斯集傳一耶、於二先人之德一固無二加損一、將レ不レ傳耶、爲二之後一者罪不レ可レ逃、歲月荏苒、憤厲益深、不レ料今日素志遂了、以傳二遺言一、豈非レ天歟、敕序輪王寺一品法親王所レ書、詩文十二卷及倭歌倭文五卷、總十有七卷、爲經手謄寫、不レ顧二醜陋一、庶幾崇レ先繼レ志之一端也乎、

享保二年龍集丁酉端午之日

正二位行民部卿藤原爲經謹識

凡例

一、先生集舊所二刊行一、出二于門人所レ編也、祖父君虎賁中郎將輯錄而家藏者、即 慶安帝所レ序、而未レ行二于世一、家尋罹二火災一、而幸先生手筆遺稿獨存焉、以レ故文若干篇詩百餘章、今悉增入、

一刊本詩文及倭歌倭文、錯出無レ次、今詩文品彙合類、以二年月先後一爲レ次、倭歌倭文、從二祖父君所一レ編、別釐爲レ卷、

一刊本間有レ脫二誤文句一、今以二手筆遺稿一讎校歸レ正、

一手筆遺稿中、或詩或文、有二敲推未レ決、兩行并存、而難二于去取一者、今分二註其下一、曰二某或作一レ某、而兩存レ之、文異旨同者去レ之、

一遺稿中、曰二某文應二誰某之需一、又記二年月日一者、今分二註其題下一、

一刊本文字頗多二異體一、今悉用二正體一、

一我國尊卑、槩有レ名而無レ字、或有二名字兩命者一、古者國俗不レ避二御名一、天長延曆之間、雖レ有 レ詔諱一レ之、而貞觀以來又不二以諱一レ之、故多有レ犯レ之、蓋詩書不レ諱、臨レ文不レ諱之謂乎、今悉依二其舊一、

一刊本載ニ門生及朋友所レ作題跋追悼等文一、今悉去レ之、而但存ニ羅浮子道春撰行狀、朝鮮刑部員外郎菁川姜沆撰是尙記、惺齋記二篇一、

惺窩先生文集總目錄

卷之三

七言絕句

惺窩先生文集總目錄

惺窩先生文集卷之一

從四位上行右近衛權中將藤原爲經編
參議從三位行右近衛權中將源光國校

五言絶句

和風堂應上田宗古求

和風吹萬物、物自不曾知、是故有生意、三春貫四時、

春日偶成

山寺欲斜陽、庭前花自芳、一身蜂與蝶、醒亦意將狂、

見付驛紺屋市隱

把茅菴自小、豐草經纔三、塵外千金帚、世緣半甕藍、

題歸去來兮圖三首

陶寫胸中妙、畫成目下詩、葛巾幷竹杖、天地一吟髭、

◎一本轉句作醉醒醒又醉

牕下自羲上、簡中無宋年、孤松幷五柳、別置一山川、

尋壑亦經丘、委心任去留、此中松菊趣、樂只與天遊、

和龜三郎送林道春東行

師友趣東方、少年寫別腸、相思梅意暮、他後認餘芳、

次韻淵生山中即事二首

道遙山水村、目擊道相存、見趣高耶下、讀書不待言、

襬纖世塵輕、不聞城市聲、此中長得住、飲水可肥生、

七言絕句

新正與故人話十四歲作

逆旅迎正懷友時、徵君誰慰野生涯、夜闌相話紗牕月、半是許梅半是詩、

送松鶴峯詩并序　十六歲作

典相藍藏鑰松鶴峰者、江南慈恩禪寺主盟、而後進之秀也、先是、一日予避近乎蔭凉軒下、有一僧坐榮、以生面待焉、予見高標之不凡、淸談有味、而憮然拱立、稍就而扣之、則氣宇之超逸、雖如彼冀北之駿足、而和藹之閑雅、知爲其江南之鷗侶、爾來敦好於金蘭、共居於圭篳、而終不見喜慍之色、加旃矜予愚衷、時々諫非垂誨、誨不倦者、寔爲益者耶、爲爭友耶、所謂士有爭友、則身不離令名、令名令望、予雖不膺其選、以公之激勵、若無不善之行、則恩之高、惠之深、山也、海也、吁、上攄下輿之間、棐只樂只蔑大焉、公竊謂予曰、明旦欲發軫于梓鄉、予驚愕曰、一日三秋、咫尺千里、執友者之情也、況越境逾月者乎、挽留不可也、此別無爲矣、予也置荒投閑人也、行李蕭然、探囊無物、故詒馬師莫歸鄉之嘆、聊學古人贈言之禮、而以心之所之、

恩義平生友有爭、別來誰又慰吾情、江城潮信秋風晚、子細題詩爲寄聲、

諸友竹軒小集并序

瑞雲雅伯者、桂芳老人之高弟、而予畏友也、比年予萍漂蓬轉、荒陬寓孤蹤、蹤雖疎而情之親者、非餘子之比、一日迎接諸友、勝集于華軒、軒前竹淸苔厚、而幽趣蕭然、盾日之不至也、塵塵之不汚也、實裴度之凉臺、不可同日而語焉、於是亭午之陰漸移、自南之風旣來、不覺令人致義皇上者、此擧也、予亦備其員、贅席次、傾聽餘論、不亦悅乎、於戲、是何幸哉、蓋皆出於軒主之惠意者也、感佩不可言焉、軒主之爲人、氣宇耿介、才調卓犖、可回萬牛者、其筆力也、如捕長蛇者、其文思也、加旃、月地花塢、賦詩而升大雅堂、聯句而築五字城、新進小生、所望而敬也、誰不歆艷耶、凡叢社交接之際、風月講磨

之益、以㆓年相若、道相似㆒爲㆑友者、人情之常也、今也軒主之超邁、而予之庸愚也、分㆓骨髓於猪龍㆒、同㆓逍遙於鵬鷃㆒、恐軒主貽㆓誚於損友㆒乎、亟縮而已、請恕焉、因狂斐二篇、伸㆓忱謝之曼乙㆒、而兼修㆓耐久之盟㆒云、

竹房涼氣慰幽情、諸友相隨半日程、刻是黃金談白璧、
多般惠意不應輕、

花有青春月素商、風流文物屬斯郎、自今吟社若容我、
嫩桂芳鄰約久昌、

賀慶前博陸左相藤公頌并序

竊惟、吾　朝往昔君臣兩神之苗裔、雖㆔久保㆓社稷㆒、百王之誓已過。三台之政漸衰、指㆑鹿爲㆑馬之匹頗夥、澆漓之風可㆑嘆哉、前博陸左相藤公、避㆓難於海南㆒、屢見㆑遷㆓台座㆒者、有㆑年㆓於茲㆒、以㆑故　聖朝天書累徵不㆑休、竟茲歲春之孟、忽欲㆑廻㆓舟車乎京華㆒、到㆓播之室津㆒、客館數日。恩情之收㆑覃、無㆑貴無㆑賤、予也趨㆓走於庭下㆒、辱拜㆓台顏㆒、寵遇之厚、不㆑勝㆓屏營之至㆒、賸出㆓示試春之詩㆒求㆓拙和㆒、予是江湖之散人。鷗鷺同㆑羣、空操㆓釣竿㆒、豈手㆓筆硯㆒、愧赧有㆑餘、雖㆑然高命不㆑允、漫綴㆓兩篇㆒、奉㆑呈㆓隨從宗臣長治之旅牀下㆒、抒㆓下情㆒以獻㆓其壽㆒、

一朝流落豈其天、來繫歸程萬里船、可是江南爲梅早、
漁村客舍暫留連、

十歲風光客裏天、海波初穩艤歸船、春來君亦青雲上、
再見宮槐新綠連、

漱雪齋詩并序

盧玉川嘗作㆓茶歌㆒、歌曰、六椀通㆓仙靈㆒、蓬萊山在㆓何處㆒、七椀喫不㆑得也、唯覺㆓兩腋習習清風生㆒、古今絕唱也。尾之小蓬萊加藤氏紹孝居士、頃者以㆔予爲㆓鄉友㆒、要㆑扁㆓其齋㆒、命不㆑可㆑拒、乃扁曰㆓漱雪㆒、夫居士爲㆑人也、性聰利而藝兼㆓多伎㆒、不㆑究㆓天文河洛書㆒、而自然會㆓卜的㆒矣、鑿㆓開八卦井㆒、洗㆓見伏羲心㆒、繇㆑是乾坤握㆓於其掌㆒、星斗列㆓於其胷㆒、滕六之雪、巽二之風、或相或卜、毫忽無㆑差。況言㆓人之吉凶禍福事㆒乎、如㆑神如㆑鏡、異矣哉、且其志耿介、不㆑同㆓於塵俗㆒、所㆓與交㆒者、方外士也、預㆓其流㆒者　醫家道家者流也。故頤神之藥、換骨之方、傳以爲㆓家寶㆒、於㆑茲丹竈稱㆓錙銖㆒、炮炙入無㆑礙㆔曰中擣篩、而轉㆓波羅蜜丸㆒、于㆑時黃鳥囀、青雀賀、曰玄霜絳雪漱㆑之者、永保㆓不老春㆒、豈無㆓神効㆒

乎、性特愛レ茶甚矣、昔蘇玉局烹レ茶曰二雪阮一、黄大史輾レ茶曰二霏雪一、秦少游嘗レ茶曰二雪花一、曰二乳味一、蓋茶色白者、取二譬于雪一、茶之與レ雪、其名雖レ異、意味一般也、且趙宋陶學士、取二雪水一烹二雲芽一、一時之美談也、箇々看來、喫茶小三昧、得二之手一、寓二之口一耳、漱雪之義、不二亦善一乎、

漱松漱石總家常、別有曾阮風味長、點著娘生舌頭眼、雪花吹作茗花香、

過馬山五首

予嘗過二馬山一者數回、今茲之抄秋　爲レ治二風病一又到二此地一、留止者有レ日矣、旅館岑寂之餘、歎二風土之美一、漫綴二菲詞一以攄二客懷一云、天正八年九月、

浴室溫湯煙霧濛、隨時沸與海潮同、掬之廼覺有鹹味、疑到江濱泉脈通、

巖底溫泉響快哉、衆生病苦一時摧、源頭欲識是何處、遠自醫王佛界來、

此處行基奇巧多、穿巖彫佛意如何、曾聽湯自其胷出、要使人間解百痾、

未見浴湯身健强、或憂腰腳又金瘡、遶村多聽呻吟輩、數百人家養病坊、

溫泉名地與唐侔、驪岫馬山何是優、假使華淸窮壯麗、竟添殘月曉風愁、

悼虎公童詩并序

辛巳秋之杪十又七日、虎公童俄然就レ木矣、一家呑レ聲揮レ淚、矧萱堂之骨肉乎、荊樹之同根乎、哀悼之情不レ可レ言、其爲レ人也、穎敏超邁、出羣絶倫、僉曰、風流文采似二於莵一、見者靡レ弗三愛重一焉、予先レ是出二入于公之門牆一、則相得喜驩、溫顏愉愉、笑語熙熙、揖遜進退、如二老成之人一、今也往事水流雲散、遽遽然夢也、雖レ爾和氣之藹然、儀刑之卓爾、音容在レ目、如レ攝二光彩一、忽聞二訃音一、歎惜涕暮、是可レ忍乎、吁矣、倒衣跣足、行弔之次、蕪詞一篇、代二薤露蒿里之歌一、以瀉二一哀一云、

我公化去奈愁腸、不覺通宵淚雨滂、光彩尙餘舊時面、屋梁殘月照空牀、

文鳳禪師忌日

天正甲申五月十二日、文鳳禪師遠忌日也、於レ是仲春斯日、預與二諸徒一辦二蒲供一、謾涉レ筆而綴二蕪辭五篇一、聊瀉二涕慕之萬一一云、

忌辰今日預相迎、泣向春風思阿兄、深重慈恩知幾許、

滄江却淺岱山輕、

風光雖好惱吟身、緬憶先人胷亦塵、遺愛梅花花濺涙、
暗香依舊一株春、有手栽梅、

在則人兮亡則書、書巢塵暗墨疎疎、平生學業今誰繼、
留與風師掃蠹魚、

太平飛閣枕山形、人傑地靈存典刑、窄窄柴扉今半掩、
間雲唯有伴單丁、山曰二太平一、太平飛閣在二山谷一、

宛爾吾翁面目眞、眞成相對轉清新、十三年後不遮掩、
餘得青山淨法身、

取郎將淳風倭歌末字爲韻并序

諸葛武侯者、天下奇才也、老杜之所レ謂功蓋二三分國一、名成二八陣圖一者也、嘗佐二蜀主一而欲レ復二漢室一、據二武功五丈原一、對二司馬宣王於渭南一、未レ遂二成業一、營中而卒、千載之遺恨也、閲歲宇內搶攘、如二三國之鼎峙一、光二輔其一方之主一者、越之牧也、僉曰、此擧得レ人、天下之牧、復如レ指レ掌矣、頃戰未レ半、不レ虞敗績、而終自殺、古今一揆、天乎命乎、可レ嘆哉、於レ是郎將淳風感二欷世之變更一、裁二倭章一而贈レ予、一再朗誦、則句格之圓美而語意之高遠也、予雖レ非下解二其義一者上、尙知二雋永之可一レ味、誰不二玩弄一哉、實不レ辱二京極之英枝、冷泉之傑派一、可レ嘉可レ尙焉、竟不レ克二淵默一、以二末句之一字一爲レ韻、而漫述二狂斐一、蓋代二街衢之童謠一云、

三國倂呑期樹功、當時諸葛此情空、一朝換盡山川外、
四海徒思雨露中、

欽際景劉院小祥忌、聊抒野情、助令嗣之哀三首

不覺死生浮與休、憂深唯見似無憂、今朝却洒去年涙、
鳥亦別來驚定不、◎結句一本作料得比來驚定不

視我平生如慈母、分甘想得少年時、遺蹤今日北堂下、
腸斷栽萱又爲誰、

由來天上赤松仙、誤住人間數十年、雲想衣裳花想色、
金華山下幾風煙、

贈鶴峯

貼扇雖輕情豈空、陋邦物產愧贈公、寸誠可記朝鮮國、
一掬猶傳日本風、

贈五山

清容一見是豪英、客寓寥寥數日程、無奈陋邦留滯久、
料知坡老六無情、

次韻山前以詩見示

一笑擧杯恩不輕、雅筵官燭慰吾情、淸談未了天云暮、
且緩樓鐘數杵聲、

和大鵬

高詩重與謝詞輕、愧我連牀話鄙情、記取今宵官燭下、
砌蟲共聽露叢聲、

菊花副詩贈山前

悠然採菊見南山、千載淵明對暮顏、不隔異邦霜下色、
歲寒節操伴淸閑、

疊韻答大鵬

筆力如公能拔山、玉詩剩見照吾顏、黃花秋老古禪院、
語韻雖殊同此閑、

疊韻贈山前

四品友朋共一山、淸談何幸對君顏、野生唯願相隨去、
哦句讀書消我閑、

爲經按、天正庚寅、朝鮮國使黃允吉、金誠一、許箴之、來貢、先生就鴻臚館見之、筆語酬荅、而鵠峯、五山、山前、大鵬者、未審爲誰某之號、姑識他日之參考、

寄丹州人五首

鄙悋幾回胸亦塵、此情十歲負靑春、梅花月白鳳樓夜、
細話曾遊尋舊因、

憶昨靑雲蟬蛻潔、至今丹穴鳳章彰、
天書遠召豈無日、衛足葵花向太陽、

聞說天橋勝景多、錦囊風月更如何、吾公幸入文殊境、
智惠尤從藝苑和、

回頭往事夢初醒、父執思君顧眄靑、爲有春風風樹恨、
眼波洒入冷泉亭、

寓迹亂邦居不堪、魏吳鼎峙鼓鼙酣、世塵壘壘豈唯五、
山色靑靑從此三、

惺窩先生文集卷之一

惺窩先生文集卷之二

七言絶句

呈赤松氏并序

古曰、鐘鼓管絃以飾喜、鈇鉞干戈以飾怒、蓋人心者因物感、感則化、化則有善有不善、實可懼矣、凡有土者、爲人物之主宰也、其所以喜、其所以怒、得中正則綱紀整、而治敎明也、樂器之和人心、兵器之威人心、亦如是乎、左武衛源公赤松廣英、頃華第落成、走乘間邂逅于此、公偶集麾下之世臣試伎藝、樂器而奏雅典、兵器而講武事、因謂曰、臧否如何、子其議之、走響答曰、以我言、則必不信、請以古證焉、彈五絃琴、歌南風者、有虞之德也、飾喜不在玆哉、否則牛飲三千之鼓、樂則樂、爲德者未也、徒是浮榮而已、以一戎衣懼天下者、武王之德也、飾怒不在玆哉、否則雞鬭三千之劍、勇則勇、爲德者未也、徒是戲劇而已、吁、兵云、樂云、鐘鼓鈇鉞云哉、在人、不在物、勉哉、公拊掌曰、非吾子不聞斯言、保始之徵我其事斯言矣、於是更賦小詩呈焉、

能化人心務攬雄、右庠講學得精窮、君家更秘赤松術、有待成功似祖風、

以二美人獻登徒子

汝竹由人事、必參玉板師、六六三十又餘六、中有清風自在吹、咦、蘇子云、瓦礫猶能說此君、那不知、吾亦云善、右金吾求禪語、予性不好佛、故辭、不可、蓋曲順其情、而以三錢之鷄毛、添數字之蛇足、不亦快哉、

贈君以筆莫輕之、中有春情慰所思、試寫短長肥瘦字、宛然飛燕玉環姿、

見舞童

便體淸聲絶比倫、眞成彼美少年人、偸身偸眼共爭見、心動舞衫歌扇春、

送淸叔和尙之紫陽

俄然底事督西遊、截鐙難留奈我愁、孤影風飄離袖暮、身如蒲柳不堪秋、

送人之隨隱月老遊學

風月主人隱月堂、隨師學道一秋强、詩場若是傳燈去、

許否天涯分影光、

寄室津故人

世外幽人愛海涯、每因風景幾篇詩、吟遊料識梅花月、
一葉扁舟秵載歸、

留別江叔子聊寓所思

惻惻別愁論死生、緬憶李杜故人情、秋深廣德湖邊柳、
更綰煙條送我行、

送旭昕英之紫陽

尋常秋思尙堪傷、況復離愁更斷腸、千載馬師公論在、
向人祇道莫歸鄕、

訪友不逢

尋常偶然來扣幽、僕童開戶屢相留、蒼崖翠壁小牕外、
不對主人心自休、

試毫

萬福鶯花觸撥人、新年景象賞心頻、山川富貴得時處、
草木文章瑞世春、

卒走筆次韻有鄰試毫

未盡雪兼新上瓶、寒梅朶々色交加、風騷良將備軍實、
文陣看來亦六花、

醉裏次韻桃翁漫興

世上交情喜忽嗔、一團和氣始逢春、爲君明日調羹去、
菜色要知寒苦人、

春初述山中閑活計 起句取二眠雲之字一

高臥安眠雲一龕、寄身深邃自堪慙、困花慵柳若添我、
懶者春來從此三、

春初迎故人

跫音可喜况相親、空谷徵君間卻春、午睡背花茅舍底、
自今風景屬吟身、

春寺鐘色 爲經按、說苑云、優然喜樂者、鐘鼓之色、

僧龍蟠處鎖巖扃、吟向東風地亦靈、雲外欲昏鐘色濕、
小樓春雨碧溟々、

逢關西故人

杏壇春暮事吟遊、今日關西有孔丘、傾蓋論交非邂逅、
三生石上舊風流、

初夏聽鵑

何聲彷彿睡餘猜、思是啼鵑報夏來、自起捲簾看不見、
雲埋老樹半巖隈、

和幽齋巧夕 代人

吟取銀灣萬丈流、裁成詩句洗窮愁、武門今若論材器、
濟世稱君傅說舟、

中秋二首

山到中秋景更奇、松杉葉葉動光時、吾巢未定鷦鷯外、
許否深林月一枝、
新上月兼新築樓、今宵并得賞心侔、藤蘿斜掛林間影、
官府從來無此秋、

菊有佳色（得牛字）

羣卉之中獨拔尤、歲寒佳色露香稠、秋風縱喚牡丹去、
莫比劉家一黑牛、

重九二首

菊到重陽分外奇、故人況是聚頭時、有花此地亦何陋、
裝點山房秋一籬、
游九佳辰興不休、菊樽眠處小邑秋、除花恨我無良伴、
獨酌幽香自獻酬、

落葉雨墜來

梧館秋風驚夢魂、忽拂山頭雨過村、無端落葉通宵響、
開卻欄前月一痕、

辭雲陽二首

三豚一產事悠悠、卻與世間憎愛侔、自甘圭篳堪閑靜、
紙帳鐵檠風雨秋、
甘得京華旅食春、鼎茵奉承白頭親、輕柔他日風蒲雨、
織作芒鞋養老神、

寒月

清寒月色入詩脾、莫道秋光勝別時、木末回頭霜葉盡、
暮雲一抹影如眉、

湖上逢故人

遠別故人參與商、江湖夜雨又同牀、胷中積疊十年事、
一笑相逢臧穀羊、

題畫屛代人

岸了沙嘴擁柴荊、甘隱誰歟耐慰情、應是主人安樂意、
竹高淸節槿誇榮、

元旦試筆

我性不關閒與忙、山林城市又何妨、春來忽被風光觸、
作鳥歌兮作蝶狂、

春初作

殘雪未消今雨頻、藥爐活計蹙眉展、由來一萬八千歲、
中有靈椿上古春、

春日偶成

塵撲長安市上顏、忘忙又自更忘閒、煙霞痼疾春過半、
眞箇識山非在山、

自酌

佳期在醉酒無量、榮辱升沈笑一場、和者養生勁齊物、
春風滿面氣呑莊。

訪友

數里出城尋故人。一宵淸話覺情親、擧杯相約再遊事、
花柳村々杖履春、

禁庭櫻花

亂於雲又湧於霞、櫻樹連邊緩曳靴、歸程誰識拜
天賜、吟衣猶帶　御前花、

紅葵胡蝶圖二首

葵花誰比子卿忠、一寸丹心一朶紅、胡蝶影迷鴻雁外、
詩家物色漢家功、

粧點詩人小草堂、紅葵帶露見恩光、太陽轉處花獨向、
籬落一邊胡蝶忙、

七夕草花

星夕云臨兒女家、中庭設奠巧絲斜、寒機未響忽飜錦、
千草文章五色花、

中秋

月是今宵盡作遊、賞心樂事勝封侯、恩光座我廣寒殿、
八萬三千戶々秋、

黃菊

黃菊籬邊日欲斜、秋光偏自滿官家、唯今鈞築收賢輔、
莫道西風隱逸花、

重陽

世上浮榮奈險難、重陽酌酒慰荒寒、一問富貴誰爭者、
浥露秋風小牡丹、

重陽梅對菊開

和靖淸標靖節賢、芳盟今日好因緣、重陽酒熟白衣後、
昏月香浮縞袂前、

山寺見丹楓

環寺皆山山更長、東遊西賞踏斜陽、松梢間出飽霜葉、
認作翠障西子粧、

贈人二首

風流情厚憶交遊、一日不逢如隔秋、爲漏別來無限恨、
子細題詩說心頭、

相逢何日語曾遊、雲路迢迢兩地秋、別後暗期歸計速、
一宵十夢九刀頭、

客至

官客何圖來屢留、浮生半日得閑遊、交如支許舊相識、
竹寺風聲話暮秋、

楊柳作僧

作僧楊柳是何因、又向東風綠髮新、因憶靑龍貫無本、吟衣染盡九衢塵、

所見

亭前有箇長松雪、雪色益淸松韻奇、斤斧丁々殺風景、如同煑鶴破琴時、

冬夜

天涯雲霽碧空寬、賞月吟詩坐夜闌、牕岫檐峯黃落後、淸光和雪滿庭寒、

寄友四首

旗幟色兼金鼓聲、見聞可識只談兵、乾坤何處亂邦外、著得閑身送此生、

多時相望是芳聲、攻此愁城付酒兵、早晩逢君跋紅燭、共談風月慰殘生、

金蘭簿上舊盟堅、一別居諸奈變遷、欲寄短書尋震艮、雁迷寒雨叫雲天、

歲寒節操鑽彌堅、亂裏曾聽物產遷、解道人窮詩更巧、俾君愁苦想其天、

詣菅廟即興

菅君遺愛舊風流、韓木召棠亦曷羞、白梅之傍靑松外、綠竹若添神許不、

爲經按、方輿勝覽云、潮州金城山、山上有韓木、韓愈所植、不知其名、士人觀其華之疎密、以知登第之多寡、

讀愛蓮說

至道由來一語無、爲蓮作說費工夫、亭亭淨立亦中立、多事先生大極圖、

哭知己

斷絃斷壁泣將休、此別如何去不留、月亦帶愁花亦淚、自今誰共送春秋、

題許由巢父畫像二首

許巢高節世皆驚、却愧至今餘品評、汚耳汚牛堯水外、不知何地洗浮名、

過眼浮榮輕點塵、牽牛洗耳好比倫、脫離朝廷衣冠縛、不覺浮名絆此身、

何忍

母病委牀傷我懷、决然何忍到天涯、晩風濺淚荒浦雨、有愧古人曾織鞋、

失題六首

物外天遊人不知、中央此處有吾師、吾師敎以爲吾邑、食不耕兮衣不絲、

嶺猿叫雨兩三箇、驛馬嘶雲百八盤、一鬨市中無雜貨、賣了晨炊又晩飱、

良將良醫達兼窮、昇平奇策豈無翁、人參甘草治邦國、
可道洛中司馬公、

料識淸貧亦不卑、若非史酌定經炊、醫中自古出賢者、
唯爲吾公說項斯、

海客風帆影遠浮、誰歟相待倚沙洲、魯周水陸今宵會、
山對蒼顏波白頭、

遠近船中富客庖、高低水上著漁巢、晚唐詩味晚春雨、
蜆蛤一籃賣島郊、

文祿癸亥試筆

光風和靄滿身春、一日歲新心亦新、消盡寒威如克己、
迎來陽氣似歸仁、

出洛

蓐食忽々治假裝、三條廣路借胡牀、鷄聲起早曙雲影、
馬背夢殘朝日光、

粟田即事

昔年阿佛記東行、緬憶粟田離別情、車轍回時軸將折、
載來美譽與芳聲、

逢坂關

天下三關逢坂關、往還還往不曾閑、蟬丸去後無人會、
依舊兩山圍一灣、

過尾陽野間

今古義朝兼信孝、君臣亂逆後人哀、哀之不鑑應如此、
莫道野間猶禍胎、

遊ニ尾之小蓬萊一、謾涉筆記レ詩、蓋摘ニ白眞人之所レ謂杖頭雲水三千界、身裏蓬萊十二樓之句一、諭ニ世人區區之愚陋一云、

世間榮達眼中埃、方外眞遊心上灰、弱水誰言三萬里、
不知身裏有蓬萊、

惺窩先生文集卷之二

七言絕句

熱田宮揭牓題海藏門三字、遍照之眞迹也、

五色雲隨望眼過、蓬萊闕下鎖仙娥、踏破唐朝早歸去、
海藏門前雙襪波、

淸見關

淸見關前暮景濃、沙汀潮答寺樓鐘、天衣疑是未歸去、
一抹雲懸三保松、

由井濱

萬竈煙籠舒舍簷、洒潮斥鹵日相添、汲時抹月煮時雪、
渠亦才高不道鹽、

由井濱燒鹽

有山如赭無薪取、物産怪看曾不常、晨竈炊煙非桂玉、
旋燒黑石煮黃粱、
狂風平日轉羊角、滿陌浮埃沒馬頭、燒鹽人擔暮潮月、
賣酒客來街市樓、

由井濱偶成 幷序

簸レ之揚レ之粃糠在レ前、沙レ之汰レ之瓦礫在レ後、此是孫習相戲之言也、今日見二由井之掘レ金者一、沙汰簸揚唯謹、曰蓋似者多、而眞者少、故擇レ之精一也、不二精一一則終日營營不レ得二秒忽一、予因思レ之、令二人主見一レ之則必知レ擇レ士乎、今之主二宰于人物一者、緊而不レ知レ擇レ之、知レ擇レ之者、亦不レ知レ精二一之一、或認二在レ後之礫一而爲二精米一、或誤二在レ前之糠一而爲二金玉一、難哉得二物之眞一、精一執レ中、然後心得、雖レ然是豈金工得レ金而已哉、人主得レ士而已哉、令二一身之主見一レ之、必得二道之眞一乎、身之主與二人之主一孰親、道之眞與二金之眞一孰多、身之主者尊二於人之主一、道之眞者重二於金之眞一、以自敬云、

寂寞貧窮由井濱、平生嘗盡幾酸辛、民擇黃金君擇士、
吾于心地要求珍、

富士山二首

遠爲士峰成此遊、吟眸處々幾回頭、靑天忽見素羅笠、
羅笠檐中十五州、
白地西施白雪山、曾聞欲富士夫顏、他年我亦鴟夷子、
攜去應遊宇宙間、

大礒虎石 幷序

大礒路上有二一頑石一、行人皆撫二摩之一、懷二抱之一而

過、予問レ所二以然一、里俗曰、相傳昔日此地有下曾我助成之美妾曰二虎御前一者上、（爲經曰、御前者、國俗婦人美稱、）曾氏殂後、妾化二此石一、故好レ色者慕二其婉孌之名一而戲レ之云々、予呻嚬慼レ額書二石上一詩曰、昔者三人言二市有一レ虎、人已信レ之、今也萬人名レ石爲レ虎、誰不レ信レ之、漢李將軍誤爲レ虎、發レ箭沒レ羽、此地往者還者、于レ貴于レ賤于二少壯老一誤レ汝爲二美妾一、況諸人躁欲之五兵利二於將軍倉卒之一箭一、敗レ德者過二於穿レ體剸レ身、悲哉古今何入二烈婦之傳一、國風恐歌二奔女之詩一、仲尼曰、未レ觀二好レ德如レ好レ色者一、予於二先聖一聽二其言一、於二過客一觀二其行一、嗚呼汝石而有レ名、名尙然、況實乎、客惑レ汝乎、汝惑レ客乎、勉歟客、欽哉石、

有石相傳虎御前、大礒遺迹舊因緣、若逢李廣掣身去、沒羽箭頭聲響邊、

武藏野二首

武藏野廣往無窮、四顧蕭蕭草拂空、方處轉迷頻指點、日殘西復月昇東、

此行武藏去忽忽、有約再遊情豈空、春入燒痕鳴草鳥、秋添涼色響花蟲、

過淺草寺詩并序

達二武之江戶城一里許地曰二淺草一、有レ寺亦曰二淺草一、嘗聞觀音大士堅坐之妙境也、一日呼二杖履一、攜二家僮六七輩一、放レ目信レ脚、遊歷漸入二此境一、則四顧閒爾、不レ聽二群籟一、雲淡地淨、而肺肝爲レ之烱然、參天溜雨、雨杉風檜、綠松連レ枝處、疑下閟二金沙灘上一之老婦娟上、白花送レ香時、怪下坐二補陀落迦一之老上、老屋蕭條三十二宇、隱二映竹林蓬蒿之間一、而檐半傾、垣漸頹、突二兀其中間一者、大士之宮也、左畔右畔、層塔高廟、屹立者、鬱乎者、大小若干、皆其附庸也、時野僧三二一枚、干レ茅索レ綯以補二葺祠堂之罅漏一、予就レ渠讀二口碑一曰、寺之揷草遡二推之一、則遠在二推古天皇統御之日一、嘗此濱有二漁者一、曰二濱成一、曰二竹成一、二漁一時下レ網捕レ魚、網裏稍動而如レ有レ物、擧レ之則數寸之觀音像也、拜以奉祠焉、靈異不レ可二縷數一、遂成二一方勝區一、始寺僧學二法相一、慈覺師寓二于此一、改而成二天台一、今掌二寺事一者專堂僱頭、是彼二漁之裔也、來由粗如レ斯、予愈問愈不レ答、斂首之一吷而去矣、雖三意根如二薙本之不二可レ拔、不二奈何一、予戲呼二童子一諭曰、蛤殼裏得レ之者文宗、而魚網中

得レ之者濱成也、若有二誠信一則無二刹不一レ現レ身、爾蠹敬レ之、童子侍レ傍微哂曰、應身今安在哉、衆人之不二誠信一乎、大士之不二靈驗一乎、予指二白櫻樹一吟曰、意足不レ求顏色似、前身相レ馬九方臯、白衣仙人來也、吾無レ隱レ爾、童子低レ頭不レ答、予亦一笑、

昔年遺事記濱成、弘誓海中曾度生、又爲詩人一身現、白衣仙子白花櫻、

角田川 并序

淺草之東畔跬步、而有二角田川一、輕舟短棹、浩歌一望、有レ鳥翩翩可レ愛、所謂觜與レ脚赤者、昭二昭乎倭歌集中一、不レ問二其名一亦知レ爲二都鳥一、蓋名者實之賓也、故其鳴如レ有二京都聲一、予不レ覺發二鄉思一、南巢北嘶、物尙然、況人乎、昔白氏左二遷江州之湓浦一、而舟中聽下彈二琵琶一者之有中京都聲上、淚濕二青衫一、千載之佳話也、于レ彼于レ此、江州之者湓浦、江城之角田、舟中京客感二京都聲一者同、而所レ愧不レ能レ作二歌行一矣、雖レ然其鳥語之管絃、豈不レ及二商婦之琵琶絃一也耶、吁、

飛鳴有鳥角田川、名曰京都聲自然、我亦舟中湓浦客、斷腸認作琵琶絃、

贈城氏織染署令詩二首 并序

予以レ事遊二武之江戶城一、而戾止者、數二十日于此一、雖レ然目下碌碌、無下可二共話一者上、官卒市兒之爭二名於仕途一、論二利於壟斷一而徒喧聒而已、一日城氏織染署令招レ予以慰二羇客懷之無聊一、感幸無二復加一、漫記二小詩一言レ志、其一者寫二予之遊慰之懷一、其二者稱二城氏之稟賦之美一、蓋聞城氏奉レ主以二廉謹一、接レ友以二信節一、況文事武備、幷學惟嗜、今也觀二其所一レ養、無レ不レ慊二素聞一、尤可二嘉尙一哉、聊記二其實一而贈焉、且代レ簡云、

客館蕭條官道傍、佳招堪喜問存亡、人生若得相知樂、何處風煙不故鄉、

面顏未熟意先親、賦性如君又絕倫、淸白名高士林上、富山可讓一由旬、

慶梅菴老人韻

由己老人從下相國豐臣公之將上レ征二大明一、因作二歌詩一而留二別嫡嗣梅童一、於レ是競和者、上而貴介、下而士庶、皆有レ聲二于洛下一者、如レ走亦有二舊交之分一、謾應二其索一、聊祝二途中之善爲一、

文度平生膝豈離、唯今告別數篇詩、千金相共保軀命、
有待凱歌歸洛時、

四海如家又如國、王師到處道相存、僉言徯后來蘇息、
民物望風開國門、

次韻梅菴由己并序

予見倭俗近時之詩、竊有疑尙矣、夫古人之於詩也、所評所判、爲工爲巧、爲奇絕者、與今時之製作評品決不脗合、故疑之、或曰、詩之爲詩也、有時勢之變、有諸家之別、子以今人之不合古人諸家之不同一家疑之者、陸之舟、水之車、非愚而狂哉、予曰、以時變以人別者、實然也、所以爲其好不好者、實不然、古今彼此豈有異哉、其猶相梨橘柚、味各不同而皆可於口、其不可口者非正味、味不同者古今之異也、諸家之別也、可口者詩之好也 不可口者詩之不好也、論以至此、其疑彌深、其惑益遠、雖然予素不學詩、何能辨其惑決其疑哉、吁止矣、癸巳之夏、予隨黃門君秀俊、遊肥之前州名護屋之海城、梅菴翁亦侍相國公、營公事之暇、一日招予閑話、話未盡、壁陰之牕漸昏、燈雨之牀將曙之頃、一小蟲翩翩然入座隅撲燈火、翁指點賦一詩示之、落句曰、書牕話盡十年雨、笑見夏蟲來撲燈、予不覺手舞足蹈、問曰、翁詩何似古人、杜老之注目寒江倚山閣、蘇氏之笑見飢鼠上燈檠、黃氏之出門一笑大江橫、比々與翁之句如一模脫出、奪胎乎換骨乎、抑又暗合乎、於是益知或者之言之妄、而予之疑之有徵、從前來憤悱之懷不啓而瓦解、凝團之心不破而氷釋、因始悟今時之詩小巧淺露、而多爲用事屬對所牽强、失優游不迫之體、却謂古人之詩甚不工、蓋知鏤氷文章之爲工巧、而不知著水鹽味之爲密藏者也耶、蒙莊之言云、日鑿一竅、七日而混沌死、於詩亦如斯歟、意也、體也、于首尾、于胷腰、斧鑿之不至死句者 未有之、活句乎活句乎、養混沌之德者、非翁而又誰歟、自今從翁於吟社而講磨風月消遣世塵、則於予益亦不爲不多、以予之晚生莫排斥好矣、更賡元韻抒下情、其詩曰、

如翁眞箇是心朋、佳句幸哉能及僧、雨入吟脾淸幾許、
飛蟲影暗一牀燈、

邂逅大明國使

癸巳之仲夏、大明國信使奉二國命一來、蓋其意欲下講二和議一致中太平上、豈凡庸謭才之所二能堪一哉、所レ謂使二四方一不レ辱二君命一者也耶、遴選之至當不レ言可レ知而已、竊自顧以二蕞儞之至陋一對二高明之豪英一、語脉不レ通、禮容不レ同、似レ慢非レ慢、頻冀恕容、更綴二小詩一抒二下情一、

四海一家非遠方、大明高客忽梯航、休言語韻飜還苦、中有賞音同故鄉

次韻紹意子二首

今玆夏秋之交、予以レ事萍二遊于關外一者踰レ月、而昨之哺時旋レ洛、於レ是紹意作レ詩、賀以見レ示、及二剝レ封朗吟一、則詩律進二於曩時一、喜感交加、及二次韻者二章一、其一者寫三予之客懷無二聊賴一、其二者美三彼之詩思有二新功一、蓋攸レ冀覆簣不レ止、策勵不レ怠、脫二今時淺露艱澀之弊一而復二古人之正雅一、子其思焉、

具嘗艱嶮旅遊情、行盡江東數十程、枕上蛩吟霜下響、被中鷄唱曙天聲、

喜見新功詩思情、知君勤學歷多程、秋牕夜諷孤燈淡、梧葉聲兼書葉聲、

欲渡大明國、遇疾風而到鬼界島、

三人此地謫生涯、二士賜環一士嗟、若是浮遊天涯去、波間鬼島即神査、

聞太夫人訃二首

甲午三月十有七日、瑞室殂二落于京之私屋一、予偶遊二關左一、不幸而不レ及下啓二手足一之日上、今也歸二來客館一未レ就レ席、忽報二訃音一、哭泣擗踊、水漿不レ入レ口、因書二小詩二章一、其一者悔二予之遠遊之久一、其二者記二平生慈仁一、兼傷二家孫之不順一、聊瀉二鬱陶一云、

歸養計遲情已空、參商千里隔西東、吾生不幸虞丘子、慟哭無端樹々風、

平日齊家豈顧身、孀居幾歲奈酸辛、有孫不順曾無恨、婦道母儀思古人、

家君忌日詩三首

文祿甲午四月朔日、乃家嚴參議侍從爲純、一十有七年之正諱也、偶在二逆旅一、不レ耐二震悼溯慕之至一、欽書二小詞三章一、其一者嘆二客中不レ能レ設二祭奠一、其二者假二古人冷泉驚レ鷗之句一、別寓レ意、其三者歎下有二兒孫一非二幹蠱之器一、空二吾翁一生之本志一、失中吾家萬代

之道統上、是可レ忍哉、聊漏ニ哀情之曼乙一、願冀ニ靈感一、

十七年來憂更憂、異鄉異客泣啾啾、薦新禮典無因備、槐夏風淸麥已秋、

逝者如斯嘗不留、死生元是自浮休、冷泉泉下乾坤闊、中有玉人閑似鷗、

頑嚚孫絶箕裘學、落魄子無冠冕榮、手澤未乾書帙散、不克揚名却掩名、

弔石田氏

文祿甲午之秋、石田氏工部郎居ニ母喪一、其門客兼如老人、唱ニ倭歌一篇一、當ニ挽紼之詞一、數日之後、由己法印裁ニ和章一以助ニ餘哀一、予偶在ニ席上一、竊謂鄰有レ喪舂不レ相、里有レ殯不ニ巷歌一、是禮之大節也、況工部者、執政之重臣而闔國稔ニ譽望一矣、誰不ニ哭而慟一哉、予亦迅筆同韻、蓋雖レ類ニ吹竽之先生一、然亦非ニ代庖之尸祝一乎、

一別靈蹤何處尋、壯夫亦是淚難禁、慈顏猶見屋梁月、滿墓秋深孝子心、

焉耳新居雪

頭白書林蘇雪堂、堂成雪下洗詩腸、風流今日不吟瑳、天以斯文屬我郎、

惺窩先生文集卷之三

七言絶句

謹和桃花菴春首詩

春纔三日五更終、久要平生焉耳翁、燈盞添油談未了、野花啼鳥入詩濃、

文祿丙申次焉耳再疊韻三首

籍甚京師百萬家、新年景象競豪奢、自今春服言吾志、六七人童處々花、

占盡市中甘隱家、笑他擾擾愛紛奢、飜濤鼎是字治茗、含雪朧唯地主花、

獨樂園中是汝家、從來何用事驕奢、春情藹々皆詩料、月上欄干移影花、

病餘立秋

聚散無恒世態恒、病來辜負舊交朋、新秋涼意起予者、萬卷陳編一盞燈、

詣天滿之宮廟、迅筆書小詩、聊充贄禮、蓋有思夢觀之舊詠、因及玆、

偶謫塵中亞聖才、元知天上一靈梅、花其文思實芳德、六百年來又幾回、

遊嵯峨

欄角樹梢含露垂、案頭貝葉帶風披、背山樓閣殺風景、休道木叉心地師、

過遍照舊蹤

遍照昔時曾所廬、舊題尙記數編書、女郎花下風流事、千載歌人拜蹇驢、

過西行法師遺蹤二首

西行卜隱小山家、無奈世人相逐過、翁應自責櫻何責、錦繡心腸勝似花、

歌有仙人元不名、名聲天下識西行、幸然此地著翁後、山亦增高水益淸、

遊嵯峨、經宮女小督局舊迹、

佗夜靑雲亡小督、一朝白地有西施、非金非石非松竹、月滿法輪琴韻奇、

禪房偶成〔一本云遊大德寺〕

喝雷棒雨響西東、知是高僧住此中、野性由來無個事、瘦藤挑月倚秋風、

答若州羽林君二首

奮以二若州羽林君倭歌之末字一爲レ韻者二章、蓋其一

者謝二秋衣之惠一、其二者嘆二倭歌之美一、予雖レ非下解二倭詞一者上、試讀レ之諷レ之、則俾三酸寒側微之身被二亭毒化育之氣一、氣象渾厚、與下近時以二絺章繪句一取二悅於人一者上大有二逕庭一、自レ非下播二弄造化一超中越宇宙上、才氣豈臻レ之哉、予以爲、衒物喪レ志、非二風雅立教之意一、吁止矣、天不レ喪二斯文一、而以二羽林君一爲二木鐸一乎、予生二衰世一而不レ愧者、幸辱有レ得二眷顧一而已、

蕭索秋風雲亦飛、世情誰又問寒微、芰荷易敗蘆花薄、夢穩今宵恩意衣、
倭歌風骨得天機、古亦家流如此稀、因憶文琳餘品藻、買人恰似著鮮衣、

寒爐燒葉赤松左武衞君席上

獸炭烏銀活火紅、官家不覺九冬中、歸來自適山房夕、爐底燒殘落葉風、

白蓮社中偶作

頃困二城市之囂塵一、而僑二居於白蓮社中一、社中亦予レ曉于レ昏、士女雜沓、喚二阿彌一而不レ止、喧聒不レ可レ忍、蓋予賦性懶慶、百事皆休、所謂一睡千年、不レ聞二佛名字一、嘗爲レ蝴乎、爲レ螺乎、抑又爲二蚌蛤一乎、那律尙然也、不レ免二黃面老子之呵罵一者必矣、可レ笑可レ笑、戲記二小詞一以自解レ嘲云、

痴呆可憐男女兒、白蓮社裏苦孜孜、阿彌亦是張公子、盡力高聲呼喚時、
白蓮香火舊因緣、昏曉稱名妨睡眠、我是由來螺與蛤、不聞佛字百千年、

慶長二歲之春遊東山大佛口號

長篇閑語雜華塵、本地風光吹報身、三七日中不吟盡、東山又卜白櫻春、

題皷者幸五郎二郎畫像、代釋董甫、篤綵按、董甫者、先生之叔父也

天下斯郎擊皷名、紅音紫韻壽難成、當軒大坐吾家曲、誰識無聲勝有聲、

若州刺史祖母挽詩五首幷序

言者心之發也、文者言之粹也、故簡淡平易、心什レ誠而不レ感レ人者未レ有焉、刻彫藻繪不レ有レ誠而能感レ人者蓋寡矣、若州刺史屬者居二祖母之喪一、作二哀詞數篇一、走逃二空虛一之徒、計音不レ落二俚耳一、不レ致二置芻之祭一、不レ盡二執紼之禮一、後數日披二此卷一示レ之、平生至孝之誠隱然溢二于詞表一、不レ覺悲淚無レ從、不レ克レ終レ卷、走聞讀二蓼莪詩一而廢レ業、讀二陳情表一

而墮レ涙、以二彼誠一感二我誠一、誰不レ墮レ涙、誰不レ廢レ業、銅山洛鐘氣類相感、物皆無レ不レ然、況人哉、文中嘗記二祖母之顧命一云、刺史自レ幼多病、其享國永年、念レ茲在レ茲、宜レ愼二於屬纊之際一、眷戀之情不レ言可レ知焉、唐李重規幼屬レ文、多病也、祖母趙氏以二百藥一名レ之、後宿病皆愈、翰藻沈鬱、詩尤其所レ長、樵斷皆能諷レ之、身老而才壯、齒而意新、爲三天下所二推重一、顧命其有レ所レ期乎、刺史文思之高、養氣浩然、筆勢之妙、風神蕭散、共是除二近時之弊一、復二古道之舊一、雖レ然刺史者閩國望族、豐臣貴戚、而萬人所レ賴也、養レ德制レ行、從來遠矣、詞翰者、殊其餘事而已、非レ所レ期焉、充二擴孝悌之誠一、推レ己化レ人、發爲二修齊治平一、施爲二禮樂刑政一、則誰不二感而化一、所レ謂本立而道生者、此其驗歟、動靜云爲、無レ不レ在レ此、不二敢不一勉レ之、君子所二其無逸一、無逸壽考享國永年、先聖之訓也、顧命果在レ茲乎、豈不レ愼哉、於レ是序二其事實一而取二其末字一者五章、雖レ非二言之粹一、又心之發、而有二誠感レ之應一レ之、不レ得レ止者也耶、

闌風伏雨被秋催、況又居喪情欲摧、歌什數篇難畢卷、一回讀了一回哀、

三萬六千斯日暮、暮齡不奈去難住、舟岡山下悄無言、哀涙洒來成薤露、

反哺烏兒雙翼倦、感時是亦尙堪羨、暮山凝紫紫烟衣、藹々慈顏看不見、

閨門具禮有威儀、顧命團欒各敬之、遺愛就中誰泣下、李家百藥使君思、

不昧一靈終始恒、死生無滅又無增、這回何待中秋到、斯姓澄於明月澄、

題釋迦出山像

採果拾薪無世紛、愛他山裏自辛勤、當時五十年來事、回首應慙出岫雲、

慶長己亥中秋、贈二合香於賀古宗隆關西之行一、以抒二中抱之鬱一云、

別離常易會常難、贈以合香聊自寬、一炷煙中千里外、同心記取臭如蘭、

題菊花圖答姜沆

嘗聞栽菊地仙家、短世頹齡相制遐、不變淸容今見畫、三秋花是四時花、

數莖芳菊色奕奇、姜氏新題亦自宜、節義秋高風露底、

對花可道是吾師、

河上氷　長嘯子席上

河水一條寒且清、層氷怪底好吟行、素紈忽展今朝色、
碧玉還收昨夜聲、

名所雪

川◎一本作剡溪夜色灞橋朝、千歲風流未寂寥、今日雅筵添
故事、歌仙堂裏雪瀟瀟、

林忠索字、命曰子信、又請其說、有所思牢辭之、
數年後還所寄之明紙一片、慶長九年

人事都來皆夢中、江淹夢筆感天工、江淹非我筆非紙、
才盡空還豈夢中、

林道春寄二小律一篇一、足レ起二予呰窳偷生之懶一、
乃次韻答二來惠一、慶長十年二月

傍花隨柳昔聞風、不管世情閑與忽、若識自家生意在、
四時渾是一春中、

與賀古宗隆

陰自慘悽陽自舒、天心來復閉關居、雪村梅早畫前易、
吾子何須與讀書、

答朝鮮僧惟政松雲　代長嘯子　慶長十一年

四海八荒同一庭、殊方不礙眼中青、清詩健筆枉來問、
粧點山中◎中一本作房小畫屏、

再疊前韻謝來惠

絕俗無塵客館庭、高人假寢似山青、珍藏書帖重嘉惠、
一宇山房六曲屏、

長嘯子靈山亭看花戲賦

君是護花花護君、有花此地久留君、入門先問花無恙、
莫道先花更後君、

無題

花有紅顏柳綠眉、非花非柳我何知、漢宮眠熟少年面
腸斷君臣絕補時、

丙午三月晦得春字二首　紹元席上

浮生聚散轉頭新、何幸今朝會友人、三月正當猶小盡
欲留易暮日兼春、
莫道韶光唯九旬、多君溫故更知新、牀頭黃卷程夫子、
留得四時和氣春、此日偶讀程子遺書

丙午中秋雨曉晴、在靈山賦

山雨滂沱佳節空、曉堂乍霽倚清風、望中八萬三千戶、
粧點洛陽成月宮、

紀州雜詠四首

遊和歌浦

遨遊諸客海城傍、瀲灩水光連彼蒼、出網跳魚新撥刺、
一聲欸乃逐斜陽、

太守淺氏庭前芍藥

滿庭芍藥絶比倫、白白紅紅相映新、無賴國家賢宰相、
除斯花外更何人、

月夜遊楊梯席上

近時𥿻纊布衣前、閒坐日長如小年、眞箇近前煩熱去、
雪而涼者月而懸、

永原松雲之子畫像

淮陰跨下古相傳、可惜斯郎生不生、一點孝心難磨盡、
遺容如媿對親前、

和林道春秋雨作

聖門衰晩嘆秋時、理義味長芻豢滋、蔓草梧桐牕外雨、
鳴蛩聽了又仲尼、

次韻三淸初雪作三淸後改道安

初雪濛々不厭寒、有年祥瑞客心安、閉關養得至陰底、
來復微陽和氣團、

次韻林道春丁未歲首詩時道春病有聞

誰飮硯池爲上池、病離貴體與淸詩、更期位育中和妙、
吾道春風吹物時、

鶯求友、探得鶯字、寄林道春、

由來春日載陽時、人意鳥聲求友期、始識淸新相感氣
倉庚訓故讀章鶯鶯爲經云、月令廣義曰、倉庚亦作ㇾ鶊、黃鸝也、章鶯經曰、倉淸也、庚新也、感二陽春淸新之氣一而出、故名、

次菅玄同傷慈母詩韻井序慶長十三年

比屋善人多、則不ㇾ見二善人一、而見二不善人一、比屋不善人多、則不ㇾ見二不善人一、而見二善人一、不ㇾ見者非ㇾ不ㇾ見焉、習以爲ㇾ常也、見者非ㇾ見焉、怪以爲ㇾ異也、蓋夫庸流之篤二於時一也、數十年間、千怪百變、世道刻薄、亂逆無ㇾ紀、弒二其父一者比々施二及達官貴介一、人以爲ㇾ常而不ㇾ言、戊申歲、有下手二殺所生之母於下京一者上、人以爲ㇾ常而不ㇾ言、譬二諸麻木痿痺一人之不ㇾ知二痛痒一、世道緣二乎此一、風俗極二乎此一、悲夫、余去歲戾二止南紀一、數月漸還二北京之小居蘇一、歲云暮矣、猶如三擊二蛇之尾一餘二半鱗一、杜二絶人事一、四顧閴爾居矣、後林啞啞、前山閃閃、鳥中尙有二曾參一、而人中唯有二梟獍一、是可ㇾ忍哉、年後猝猝鷄狗猪以至二牛日一、偶羅浮氏懷二一稿一來、披覽ㇾ之、玄同子去歲十月喪ㇾ母挽ㇾ紼之和也、餘子追和者數十章、

詩以稱レ孝、歌以美レ孝、宜哉人之以ニ同子一爲レ異、同子豈異哉、以ニ梟獍異一也、若令三同子處ニ盛世一、則人豈見ニ同子之孝一也哉、何也、曾參之至孝、君子唯言レ盡ニ子職分內事一也、況子乎、子其遺體敬乎、居處莊乎、事レ君忠乎、涖レ官敬乎、信ニ朋友一乎、戰陣有レ勇乎、伐レ木殺ニ禽獸一時乎、君臣之義、長幼之序、夫婦之別、百行皆孝之推也、子其能盡乎、稱ニ美子之孝一者、以レ子爲レ異也矣、余獨以（◎爲字脫歟）不レ然矣、何也、令三子處ニ盛世一、則人不レ見ニ子之小孝一、而期以ニ大孝之全一焉、魚以濯レ錦、鹽以洗レ金、石以攻レ玉、玉ニ其德一而已、傳云、父母全而生レ之、非三獨生ニ其形一、幷全ニ天命之性賦一焉、子全而歸レ之、非三獨全ニ其形一也、以ニ生時天命所レ具之理一全ニ於身一而歸焉、乃爲ニ全孝一也、天人一理、所ニ以事レ親事一レ天亦然也、子之平素所レ讀孝經西銘果而一歟、二歟、生順沒安何言、余於レ子者魚也、鹽也、石也、錦之與ニ金玉一子其思レ焉、哀之中レ節子之所レ照、待ニ余之言一哉、同子沈默寡言、言無ニ浮華一、讀レ書好レ善、非ニ時輩之比一、前程止ニ乎此一乎、勉哉、古書堆中事蹟之可レ言者、羅浮氏書以告焉、余唯記ニ世變之實一以規レ焉

後世又有ニ鄙人之子一而言乎、玄同子善居レ喪、東夷之子也、於レ是子實爲レ善矣、書以族レ之、

舉時梟獍豈知終、夫稻能甘夫錦江、爲汝更憐無孔聖、
聞言夷子少漣風、
昊天罔極愼其終、情與扶桑出日紅、萱近北堂空甲拆、
無聊懷抱泣春風、

惺窩先生文集卷之四

惺窩先生文集卷之五

七言絶句

殘暑 戊申孟秋二十有一日遊二羅浮堂上一、探二大暑去酷吏・清風來故人之十言一以爲レ韻、而得二吏字一、殘暑乃其題也

酷暑殘時猶裂地、滿庭豐草色皆異、凜然唯有菊孤芳、
孰與聖人沈下吏、

因林道春請和遐年詩

林忠訪我叩深幽、袖裏遐年詩記遊、今日斯文期德業、
花之春與實之秋、

辛亥三月八日訪長嘯子於靈山

爲雨唯占一望霞、訪來新霽龍人家、春風吹物又吹我、
早午晩山閑坐花、

次下韻松洞主人在二山中一避二殘暑一、兼問中臥病上、
二首 松洞長嘯子別號、居有二松洞齋一、

殘暑晤消松洞中、雄風知否又雌風、萍間蘋末清池外、
地下寬閑五百弓、

忽枉清詩慰病中、勝於讀檄愈頭風、彭殤彀豹人間世、
到底客杯蛇是弓、

次下韻松洞主人喪二幼女一韻上、聊助二其哀一、兼

謝レ惠二酒瓢果合一二首、

漣々涙雨滴紅泉、玉碎無那瓦自全、忽讀哀辭見天性、
父子眞成舊因緣、

藏密洗心何假泉、八荒洞庭眼前全、許瓢高潔顏瓢樂、
收取酒中爲好緣、

小倉山

西山有二小倉者一、其地深邃爽朗、自レ古隱逸之士所二盤旋一也、營二別墅一結二居蘇一若二上人西行納言定家一者不レ可レ勝レ數焉、一日拉二韻人宗隆一、訪二玄人之讀書之齋一、乘二晩凉一、踏二晴月一、散步閑吟、見二先賢遺蹟一、李翰林之今月古月之嘆來二往于懷一、因記二小詩一與二隆玄二子一、且爲二再遊之起本一、

小倉山下屢經過、聞說先賢行樂窩、今夜坐來古時月、
月搖松竹亦倭歌、

甲寅元旦

呆々癡々自坐忘、經無摩詰樹無桑、歲來歲去何能記、
忙殺前身杜五郎、

甲寅中秋市原看月

殘生豈待幾回秋、佳節月前宣髮頭、清影轉時心亦轉、
四山光帶一川流、

次爲春臺上主人歲首韻

爲春臺上主人元出二武門一、頭登二騷壇一、而將レ試二軍旅之陣於詩文之陣一、忽有二歲首佳作一、推奬之餘、次二其韻一、聊祝二前程一、蓋曉三文事武備非二二途一云、勉レ旃、

春新乃武乃文家、詩陣營中亦六花、夢熟周公高枕上、要須毀諫議之茶、

乙卯春追二悼理齋老人一、弔二慰蝴蝶洞下一、二首（理齋道春父也、羅浮山有二湖蝶洞一）

九老圖中一主翁、自今洛社社盟空、鐘鳴漏盡別時淚、春帶殘星雙鬢風、

八百猶思九百翁、連山雲母此情空、空餘玉兎長生月、唯逐白駒過隙風、

世間有百歲翁翁、誰識身空名不空、輝映金昆幷玉季、人言幹蠱見山風、

便面有古人題詠、消磨纔餘數字、

詩與姓名如漸無、墨痕數點眼將枯、鳥飛鶴病不須補、字々斯中奈杜蘇、

歸去來兮圖

僮迎稚候指舟輕、泉始涓々木向榮、歸去來兮心入畫、淵明身後復淵明、

與正意（乙卯九月廿五日初雪、語二正意一以二東坡九月岐陽詩一而作二絕句一、正意偶見下文苑英華、白傅和二劉夢得一秋雪翌日和レ之與レ之、）

古書偶鈔研池澌、文苑英華又吐奇、劉白元和人與歲、今纔秋雪要添詩（◎轉結一本作、縱白元和八待歲、天疏秋雪要添詩）

顏淵爐雪（正意席上）

雪蓋千山與萬川、眞形埋沒變天然、書燈影淡破牕底、一點爐中見子淵、

淵明栗里畫軸、塗抹以還二之道圓一、蓋因二嗜好一可レ知二其人一云、

靖節先生千歲人、畫中非假認爲眞、北牕高臥東軒嘯、我亦南村鄰曲賓、

遊高雄

秋日拉二一二之同游一遊二高雄一、因記二途中之所レ見、同僚詠二倭歌一、予亦倣レ之賦二絕句六首一、

數里出城塵事空、

詣八幡神祠

天皇遺廟住山中、靈神護寺有靈瑞、民物猶殘淳朴風、

寺曰神護村田畑

山下孤村、渾舍閑爾無レ人、隔レ林聞二樵唱一、

輿入吟脾暮色幽、孤村淡日四山秋、比隣掩戸無人事、時有樵歌響嶺頭、

至溪橋側畔逢一龐眉、渠曰、昔海師住此山中、有勅求牓上之題字、中使抵此處時大雨、洪水泛溢不得渡、挈牓立岸上、海師隔川提毫一揮、則墨汁如細雨密霧、而字畫忽現牓上云々、實千載奇事也、不堪感晞記小詞、

海師健筆筆傳神、聞昔隔川擘牓臻、萬歲枯藤懸水上、宛然今亦似揮眞、

供空海師之影前求那伽定中之點頭云、

密機轉處大因緣、海老終非戯化權、阿字門頭搭◎（一作豁）開見、先師面目自依然、

翌午出雄峰、厲揭溪流、踰越石磴、而至栂尾寺、寺乃明惠上人之舊房也、

四顧無人地不譁、秋深明惠上人家、曾將霜後階除葉、認作檐前朝暮花、

葉葉滿山秋似妝、解言草木有文章、洒成子產凝成羽、潤色雨耶脩飾霜、

次韻幻菴以人惠木犀之詩者三首、蓋一者以喜補三徑之闕、謝其惠、二者以記一段說話、聊相爲（一作諱）浪焉、三者賀擧揭七日立玉之奇音續中紹白首詠梅之芳躅、而示全侍者、乃幻住屋裏之事也、幹蠱之重寄、勉哉、

幾縉花史首頻低、猶闕三三之徑蹊 預寄秋香避塵坋、木中犀壓獸中犀、

晦堂魯直眼睛低、滿院桂香落草蹊、愚弄相幷都失却、暗昏昏地夜明犀、

是法豈論高與低、能詩實悟別無蹊、百梅幻住幻非幻、意足佳篇一木犀、

再疊前韻、東全侍者、而謝幻師異種映山紅之惠云、

黃孃萬朶壓枝低、孰與君家花滿蹊、奇品山紅今受惠、塊看珠玉又文犀、

次韻斥鷃生遊山（斥鷃爲春號）

彈丸手裏憶寒山、翎弄須彌芥子間、北肉峯頭天外客、一凹洗密不求閑、

和正意戊午歲旦二首

日上扶桑三浴暇、春風吹筆著芬葩、文詩從此得神助、孤鶩齊飛又落霞、

和氣入顏春氣報、論詩談易及奇葩、遐齡斟壽董仙杏、
自道朝來一片霞、

再和

長安一日日暉赧、得意春風東野葩、物色無邊吟不盡、
涌於雲復簇於霞、

次韻鹿苑寺鳳林座元試筆二首

乾綱地位攝坤維、出寺吟行奈好奇、詩思熟時禪亦熟、
潘花祇樹樹林枝、

上下東西南北維、月從雪夜是皆奇。畫前刪後詩耶易、
鑿破乾坤梅一枝、（鑿破一作坐斷）

書道遊老人詩後

三條廣路道遊老人、屬者銜二何恃之恤一、不レ堪二罔極
之至情一、作二哀辭數篇一以漏二鬱陶一、讀レ之則欷歔汎
瀾、不レ堪レ終レ卷、如レ見二蓼莪之篇一、老人稟賦至
孝、在時定省之勤、愛敬之誠、五十而慕、六十而
泣、靡レ弗レ罄焉、矧那此別哉、余亦以二此卷一、命二
侍書者一謄二一通一、置二座右一、蓋欲レ感二化輓近梟獍之
徒一也、因裁二小詩一記二其後一、聊吊慰中節之哀云、
萱近北堂心盡休、憂深人道似忘憂、泣招魂魄勸歸去、
杜宇聲爭梅雨流、

又

擧世平生有母慈、如今惟孝少人知、行々字々哀々淚、
滴濺蓼莪盈硯池、

次井三位星夕

謾次二大醫局井三位、星夕口占之韻一、寓下規二祝遠大一
之微意上、兼記二其少年而多レ病、頃二豎走、三彭去一
矣、賀以壽レ之、
螢火仙方今見螢、井華新汲試泠泠、傳家神聖與工巧、
設貿何須仰二星、

又

不待讀書牕下螢、上池水味自泠泠、今宵仰見女牛外、
當世推尊司命星、

又

燈火新涼淡似螢、袖中東海水冷冷、笑拈詩筆乞牛女、
祝那元辰爲壽星、

觀岷峨集謝羅浮堂下

漏洩岷峨雪裏春、一枝昨夜送瓊塵、林間縞袂香風早、
人是花耶花是人、

次韻雪岑元日代人

經記三風與十愆、山林花自筆頭旋、詩脾清絕牕吹雪、

不隔新年又故年、

浮屠氏日留、持二予舊習之草藁一去、或人涉筆書焉、見二其字畫一、一波一撥之間、風神蕭散略可レ愛、雖レ未レ接二眉睫一、推二知其爲レ人、遠客之幸有レ在、故再疊二前韻一、書以與レ之、供二至矧一、

百年泛宅又浮家、行李蕭然烟雨斜、不意小春春已動、筆頭愛子著斯花、

次韻林道春己未元旦、頌祝前程、

滿顏和氣一團欒、中有仁風貫歲寒、天下周公春夢熟、殘書枕上泰山安、

獨笑獻笑

屬者得二小銅仙一、以二白鏹一買レ之、蓋那波道圓爲二之先容一、置二之於文房一、以爲二一翫具一、月地花塢、名山勝水、攜レ之爲二詩友酒伴一、先レ是、富島元古、惠二古銅笠樣之物一、今令下之爲二之笠一、爲中之帽上、則其大小規模、無レ違二絲忽一、物理之機會奇哉、爲二此銅仙一命二姓名一、名二獨笑獻笑一、維時春山放晴、目下寥寥、作二此詩一與二銅仙一、仙又笑、我笑、山亦笑、還爲二三笑一、若令二羅浮子視レ之、則必有レ添二一段之詩話一、歸二一錫一以竢二三子之來一、且以示二岌淵生一、更増二一笑一、

偶得銅仙心快哉、傾頭擎手口容開、命名獨笑今非獨、我笑春山獻笑來、

賣花翁獨笑氏別號

利走名奔眯目塵、乾坤一鬨市中人、賣君賣友賣夫婦、自笑賣花將買春、

山居

青山高聳白運邊、仄聽樵歌忘世緣、意足不求絲竹樂、幽禽睡熟碧巖前、

己未三月廿四日送和三位東行二一首

別情此日奈低摧、再會何時笑口開、富士有神向君語、雪山輕重去兼來、

手裏春風吹藥囊、萬人活卻一方牆、青油幕下指呼曰、爲相爲醫得此良、

題二狩野平四郎所レ畫西湖之貼扇一、蓋道圓詩以稱焉、余漫書レ之與二二子一、己未五月十日

游藝風流奪化工、德成上下得精窮、無聲詩與有聲畫、坐我西湖十景中、

闕題

堅城削鐵插雲間、辛苦功成豬蜀山、慣見土階茅舍陋、

玉樓金殿香難攀、

惺窩先生文集卷之五

惺窩先生文集卷之六

五言律詩

過馬山

接山地不平、民屋韔檐楹、巷受百千聚、湯爭一二淸、
楓然烽似照、松聳蓋如擎、若是無風景、客中難奈情、

大明使節來

朝、予爲ㇾ講ニ識荊之好一、詣ニ牀下一賦ニ一律一述ニ野懷一、蓋以ニ唔語不ㇾ通故也、勿ㇾ怪恐笑、

棹船千萬里、囘首兩三台、且作倭人喜、仰看明客來、
出鄉吟白雪、此地送黃梅、欲語音聲別、小詩愧不才、

由己老人拉ㇾ予將下消ニ炎暑之酷一、探中巖壑之勝上、老人謂曰、我故人有ニ東條氏一、風騷之韻士也、敲寂而訪問否、予曰、可也、翁爲ニ之先容一、至ㇾ門則適不ㇾ在、因記ニ一章一爲ニ他後之笑資一、

響門童子在、言主去他之、滿室綠陰淨、一庭白日移、
達情雖不亮、高臥又思義、名字檻前竹、歸來君可知、

由井濱 序見七言絶句

民貧由井潟、辛苦奈呻吟、臣賓主須擇、自珍我不淫、

眼遭沙塵瞇、肌被土風侵、愚莽可憐者、爲形又役心、

丙午中秋靈山對月

佳月常雖好、中秋更若新、一樓同此會、千里豈相親、
今夜舊朋友、明年何主賓、浮生無定在、快笑仰蒼天、

紀州雜詠

彦名自淡島、徐福避秦時、風土古聞者　世塵今有誰、
三山鼈涌浪、一雨蟹過籬、俯仰殊方客、物華入小詩、

秋晩遊二林寺一、迅筆簡二源正利一、蓋攄二五年睽別之懷一、且記二重逢之喜一、

洛陽相別後、存沒要常聽、千里寄聲雁、五秋照寂螢、
再逢林罅寺、共步月中庭、話盡吾人事、朝暾射半櫺、

羅浮堂上見レ月、以二涼天佳月即中秋一爲レ題、得二月字一（月闕同韻、雪列同韻、然有下古人通二用之一者上今效レ之、）

中秋如再來、淸賞涼天月、露草滴方諸、庭柯堆夜雪、
燈幽思背卻、詩拙慙同列、斯會幸然久、後期應不闕、

花遲暗水（靈山長嘯子席）

幽邃小山堂、烱然洗肺腸、蹈花忘有逕、聞水奈無方、
滿々九成樂、紛紛百和香、遭春風嬲了、夕照及晨光、

將レ卜二新居乎殘山賸水之間一、偶攜二林光上人一宿及レ信、上人銜レ口言レ詩、迅筆答焉、

苓通謝世榮、華構附乾城、松倒鳥徒壽、櫟全鵰不鳴、
谿淸高枕耳、山見讀書情、吾子幸能識、到頭何似生、

失題三首

寒風俄怒號、野艘奈逡巡、客已皆如醉、我何獨不淪、
安然起臥了、元是死生均、笑傲浪花裏、三冬有小春、

巨靈鑿石開　奇巧一宵催、突兀樓猶倒、空冥堀亦回、
淸池山影動、佳景夕陽頹、巓望凝眸睫、村居接水隈、

松門晝閉關、靈迹隔塵寰、蟠屈數千尺、輪囘五十間、
神君雖博愛、俗客不躋攀、暮色微風起、祠前肅衛閑、

七言律詩

謹獻陽明殿下（幷序）

凡堪輿之間、山之大者、莫二五嶽之如一、而挺然乎五嶽之中一者、是曰二泰山一、一曰二岱宗一、爲二群嶽之長一也、又曰二天孫一、爲二天帝孫一也、登而小二天下一者仲尼也、覽而小二衆山一者少陵也、蓋其至高者可レ觀矣、技峯蔓巒豈差二肩於其間一乎、任二千巖萬壑之尊一者無二異論一矣、夫日出國、天兒屋根命之嫡裔、內亟相鎌足公、右僕射淡海公之橋梓者、楓宸羽儀、藤原姓鼻祖也、爾來遙遙華冑、分作二五攝家一、代居二三師位一、攝二萬機政一、百僚之模範、萬民

之表準、爲二其任一重哉、詩曰、泰山巖巖魯邦所レ瞻、殿下內府君、幸富二春秋一、他後弼レ中彪レ外、積レ德如レ山、覆簣弗レ止而底二于成一、則應レ爲二天下之所一レ瞻、豈止魯邦而已哉、泰山而已哉、孰弗レ仰望一也、內府君爲レ人、天資聰敏而惟學是嗜、能二眞字假字書一、而祖二述道風佐理之楷法一、暗二長歌短歌之集一、感二慕定家雅經之英詞一、究二其壺奥一、撫二其精微一、風花雪月之華、江山雪煙之美、擧摸二之於毫楮之際一、奇語驚レ人、人皆絕嘆焉、加旃經二史于壁陰之隙一、子二集于燈雨之牀一、造顚未二嘗不一レ留二意於此一矣、實君子無二須臾不一レ學之謂乎、屬者東討西討聚レ書殆充二棟宇一、牙籤玉軸、琅琅然璨璨焉、雖二張華之三十車、丁顗之八千卷一、不レ可二多讓一焉、烏乎今也叔末之世、世衰俗薄而聖賢之道棄如レ土、所二嘆賜一也、扶レ顚持レ危、彌二縫其闕一、埭二堰其流一而篤二前人成烈一者、非二殿下一而誰歟、可レ謂濁世佳公子也、繇レ是前右府信長君視猶レ子、推奬過二眞囝一、馬之逢二伯樂一、劍之遇二薛燭一者、可二併按一、奇哉、殿下自レ今研精覃レ思、年彌高而德彌邵、輝二春日神之餘光於蜻洲一、激二淡海公之末流於葦原一、仁行洋溢、威名赫奕、乃作二文章司命、人物權衡一、黼二黻朝廷一、衣二被國家一、而恩風風レ人、惠雨雨レ人、則必曰、徧二天下一者、惟泰山之雲也、遠者大者、祝望在レ玆矣、僕辱レ投レ刺謁見、蒙二鄭重顧遇一者非常之恩榮也、不レ勝二屛營之至一、綴二唐律一篇一獻二閣下一、以祝二前程一云、宓斬台覽、◎一云綴川八句一篇獻殿下奉祝前程云宓斬台覽軒渠

世系丕承春日神、
本朝貴族更無倫、巍冠屢講唐虞德、支笏常談周孔仁、
顯若仰之如泰嶨、翕然歸者似岐豳、他時必攝萬機政、
恩澤普霑天下人、

蓬萊假山

維時天正己卯之夏、有レ詔召二洛下之僧徒於御前一、獻二蓬萊假山石之詩一、古人曰、莫レ道文章不レ直レ錢、布衣親到二玉皇前一、如レ走竊聽二衆作之盛美一、雖レ隔二身於弱水三萬之波一、而馳二意於蓬萊五色之雲一、奇哉快哉、偶爾一日在二甘露寺納言之第一、涉レ筆記二一時之實事一、聊寓二所思一、蓋孫綽之天台、牧之之阿房、以二想像一

賦レ之、人倘有二議者一、況走乎、見者恕焉、

莫道假山拳石頭、若非蓬島定瀛洲、淸風不借盧仝椀、
物外何求徐福舟、五色末雲蒼蘚濕、脩齡幾歲綠松倅、
曾聞鷄犬亦仙去、猶問飛昇易致不、

過馬山

亂後快看居宅新、溫湯治病日相馴、不論春夏秋冬節、
著得東西南北人、簷掛潤泉晴談雨、牕含山靄晤吹塵、
風寒此地飛霜早、客裏難堪經二旬、

送人

別來交會若公稀、何計天涯鴻燕違、洗滌膏肓肌忽脫、
湯治筋骨脚如飛、鄕書相約報安穩、社友又須歌式微、
爲說士峰三保境、貪看佳景莫忘歸、

妙見山即興

遠離聚落路無窮、千載猶存古梵宮、階下樹高僧臘老、
檻前苔厚俗塵空、峰巒難寫畫三祖、風景宜吟詩七雄、
待我再遊應有日、淸閒借榻睡雲中、

贈松堂

仄聞萬里異邦人、通信使乎修善隣、四海又知坡老學、
九夷何陋孔丘仁、珠旒高映扶桑日、杯影輕斟下箬春、
目擊道存寧用語、相逢掃盡滿胷塵、

贈山前

想昨來時著暑衣、寥寥客館未能歸、山川蕭索秋徒半、
風月交遊今已稀、鴉外故山望轉遠、蛩邊愁雨夢多違、
知君楓葉飽霜日、織作錦帆帆翼飛、

右松堂山前二章、贈二朝鮮國使一之
詩也、說見二七言絕句鶴峯詩下一、

經織田信孝墓

大御堂中持善寺、曾聞信孝避讎來、寫懷歌詠思猶雅、
辭別封書情欲摧、自割肝腸三尺刃、獨留骸骨一堆灰、
行人今日問遺迹、竹雨松風聲帶哀、

失題

東方君子長諸侯、地隔中原天一陬、平日絃歌思魯國、
滿城第宅置揚州、士峰雲散蘭垒壁、武野波連裏濫舟、
漁火遠流螢稍去、客杯滿引蟻空浮、

慶長甲辰冬十月、過二林道春之宅一、四韻一章、
代レ簡以謝レ之、

洛陽才子一青年、招我慇懃如舊緣、興起盧仝茶鼎上、
醉同懷素草書前、古風話盡今時雜、朝雨坐來昏月鮮、
不覺留連何及此、滿顏生意小春天、

月夜楊稊席上同賦

天識故人招我情、舊霖此夜放新晴、浮雲榮願笭通盡、

明月詩章簡匣盈、梧館懷中介古照、草廳意思至今淸、
古今於月同斯理、不信塵寰有不平、

未開桃花

久待芳園細雨來、欣逢淑氣艷陽催、紅顏崔護去年約、
白髮劉郎前度栽、洞口難通尋處路、浪頭不泛落時埃、
桃花似與芙蓉異、只向東風恨未開、

高野峯

鼎峰絕頂一龕雲、高閣靈蹤隔俗氛、百圍杉叢僧臘老、
五千相葉梵文紛、雙橋流潔小魚樂、三寶更闌異鳥聞、
慈氏龍華開幾歲、那伽大定納奇芬、

羅浮堂上賦秋熱

殘暑新秋威更大、講堂淸氣能招我、元知方寸轉陰陽
還等一中分造化、聯句納涼徒俗氛、虛文談道亦閑課、
諸生擲筆自回頭、此話未終昏月下、

賦新雪、頗慰元古客舍無聊之懷、

飛雪終宵以及晨、笑聲赫赫壽斯民、臘前三白從今始、
灰冷寸丹因景新、南紀梅明陳子閣、西堂草待謝公春、
僑居思汝非吾土、樓上幾篇詞賦頻、

與順知詩并序

知生從ニ余於筆硯之間一而遊者也、敦龐好レ學、傍遂ニ于醫一、春夏秋之際、愛ニ龍安山中之幽閑爽朗一、僦ニ浮屠一室一而讀レ詩讀レ書、略了ニ大義一、志氣之正可レ觀焉、屬者訪ニ生於山中一、而賦ニ山中物色一者、唐律一篇及倭歌、以示レ生、蒹葭科斗者、觀ニ于池一者也、菌蕈茶蕤者、松肪土膏之蒸以成レ之而採ニ于山一者也、物色何止レ玆哉、所ニ以感一、所ニ以規一、亦在レ玆而已矣、古人見レ物寓レ懷、數百千歲之後讀レ之、其時其事、歷歷在ニ眼中一、濺淚之花、驚心之鳥、所ニ以感レ時乎、瓜田之履、李下之冠、所ニ以規レ人乎、余亦寫ニ一時之懷一、雖レ然當ニ其感發興起之時一、不レ覺氣象志意有下自不上可レ掩ニ所レ養之邪正一、猶下以ニ犀革一畏ニ南宮萬一、以ニ輼輬車一載中呂政上、可レ堪ニ惡縮一也耶、生幸今讀ニ詩書一、請以レ之質レ之、不レ有レ益ニ於生一、必有レ益ニ於我一、若知レ有ニ邪正之所レ在、則詩書之爲ニ詩書一也、其亦豈在レ外哉、夫是蓋非乎、

寺負佳山山抱池、僑居羨子讀書詩、蒹葭露結秦風夕、
科斗今看魯壁時、盤飣老松蒸菌蕈、藥籠人物採茶蕤、
室如懸磬莫嗟嘆、屢向簞瓢奈朶頤、

赴ニ高雄一叩ニ院門一、逢ニ一二之僧一、則迎接茗談、終投宿、維時桂香滿レ院、楓葉未レ霜、故語意

及㆑茲、
來敲深院忽開關、三二枚僧相對閑、千仞巉崖連丈室、
一條澗水斷前山、桂花暎月嫦娥面、楓樹待霜鄒衍顔、
吟取箇中風物了、道人胷宇出塵寰、

子猷尋戴圖

二子風流不可攀、入圖出畫利名關、難逃兩火一刀下、
興發小船孤棹間、屋外乾坤唯雪月、琴中造化自溪山、
這回何用更拈筆、文思詩情付往還、

獨笑獻笑 說見七言絕句小銅仙詩

陰陽是炭物銅丸、禍福胡爲足控摶、宇宙國家唯獻笑、
山川風月盡游歡、三般瓢上生涯足、兩卷書中心地安、
乳露腹垂衣勃窣、笠簷荷葉様團團、

五言古風

偶成

身裏主斯存、動中元至靜、隨情五火炎、復性一灰冷、
出處自依依、行藏俱惺惺、紅塵市隱間、藥室天眞境、
客若問如何、月來花弄影、

迅筆答元古漫興九韻

呆坐一病叟、孫眞避時流、縮頭忍凍餒、自與凍龜侔、
荒陋踈機事、事事其趣幽、燒灰見筆墨、治爛空悠悠、
因憶陶徵士、琴書以消愁、又憶杜工部、樂土更南州、
擺脫富貴去、溫飽非所求、草堂有顏色、株松得所由、
少年能頴敏、先知起予不、

七言古風

文祿乙未之孟夏、法印梅菴老人受㆓相公之命㆒、爲㆓湯浴治病㆒、將㆑赴㆓馬山㆒、發㆓伏見㆒之日、賦㆓二十韻詩㆒、記㆓一時之實㆒、而求㆓友社中之賡㆒、不㆑以㆓予無似㆒見㆓示及㆒、迅筆書㆑之以答、

朗吟瀟洒新詩句、雋永無窮將及專、幸然蘇地俗情去、
恍爾一時喜氣揚、風騷壇上士常少、大雅域中誰敢望、
學術從來因有在、佳名亦自不曾藏、相公磁石如於鐵、
斯老葵花似向陽、預識蒼姬魚腹玉、更逢伯樂馬精房、
仄聞伏見盡華美、卻見京師依末光、萬代雄基窮智巧
四夷包貢盡心腸、尋常藍尾宴遊瀆、兩部樂聲上下堂、
月落江心全璧碎、風吹帆腹一弓長、消閑坐隱楸枰上、
入夢濶泉茶竈傍、壯觀樂山添絕景、深幽建寺映雕墻、
每逢㆓興意皆適、倘愼典刑威益彰、門外森嚴兵衛戟、
塵中倒臥訟庭桁、維時槐影旣迎夏、荒圃麥秋先滿場、
唯願吾人宜極樂、又知天地欲呈祥、天地呈祥吾人樂、
餘恩加處泳兼翔、祇今藥病是非病、憂國憂民鬢亦霜、

博愛平生無貴賤、往還路繹不嫌忙、溫潤德量堪養氣、
不須礬石沸成湯、

五七言

幽邃巢主人嗜酒、故詩及此、

棲巢雲樹林、盃酒月花陰、唯爲能醒又能醉、不關蒿目與蓬心、

題歸去來兮圖

乞食有詩尊、儲餅無粟存、漉酒巾中容宇宙、沒絃琴上易寒暄、

聯句

九月岐陽雪、百坡公一坡、六朝彭澤古、有磨祖無磨、

惺窩先生文集卷之六

惺窩先生文集卷之七

說

生白室小說 玄同室號

吉祥者夫是而已、虛室恬活、宇宙白漫漫、春花也、夏雲也、秋之冬之月以及レ雪也、因問生ニ吾室一者何白矣、吉祥者、此是而已、非ニ雪月一、非ニ花雲一、它之所レ謂無垢者歟、所レ謂守レ黑者歟、抑亦涅而不レ緇者歟、欲レ窮ニ千里目一、更上ニ一層樓一、

夕佳樓小說 道安書樓

往昔本邦禪林之巨擘、肖翁已下十八、爲ニ或者一摘ニ陶靖節之詩句一牓ニ于其所一レ居、蓋以ニ趙松雪之書畫一、爲ニ此草堂之顏色一、于レ文于レ詩言レ之詳也、以レ余見レ之、松雪之於ニ靖節一、出處天淵、有志之士非レ無ニ遺憾一、然今眷ニ戀于靖節詩句之中一、夫是悔心之萌也耶、否乎、出處者人之大節也、後之見者、豈可レ不レ敬焉哉吁、

解

四景我有解

何地無レ山、山之無レ色者意之懶也、何地無レ水、水之不レ淸者心之忙也、所レ謂意懶山無レ色、心忙水不レ淸、古人云、我亦云、我日本六十州之間、誇二游觀廣覽之美一者、以二關以東之八州一爲レ甲、八州之美者、以二士峯武野隅田筑波之四景一爲レ冠、故不レ到者、爲レ非レ人矣、予亦以二斯遊一爲レ意久矣　嘗聞佳山水者、觸二發道機一、仲尼之登二泰山一、在二川上一、有二所以一哉、文祿癸巳、蒙二八州牧伯　源君亞相之佳招一、而遊二武之江城一而踰レ年矣、旅寓環堵之室中、書二我有之二大字一而扁レ之、有レ客笑曰、子之蕭然之行李、未レ有二尺地一、未レ有二小屋一、未レ有二一物一、何以爲二我有一哉、予曰、甚哉汝之拘矣、陋哉汝之隘矣．我有二一宇一、不レ假二工巧一、不レ費二脩補一、汝却不レ知哉、圓二顱于レ上、是我棟宇也、方二趾于レ下、是我基趾也、載レ我佚レ我、到處有二我屋一、不レ可レ言レ無矣、我屋之所レ在者乃我地也、不レ可レ言レ無矣、瞻前忽後者、皆我尤物也、悉我珍具也．不レ可レ言レ無矣．夫雪之於レ冬、雖レ爽未レ足レ奇焉、夏雪皎潔之朝、一由旬之士峯之高懸也、仰成二一箇吳笠一、則却不レ重、花之於レ春、雖レ美未レ足レ奇焉、秋花撩亂之日、數百里之武野之橫鋪也　俯成二一箇楚鞋一則又能香、隅田之水之洄洄而貯レ月者、瓢中之物也、筑波之山之擾擾而抹レ雲者．詩中之料也、豈止是而已哉、萬象者屋裏之有也、不レ可レ與レ人、客曰、吁、子之言者．揚子之爲我也　君子者不レ可レ稱矣、曰然也、衆人者、屋裏之人也、可二以與一レ之、客曰、子之計者墨子之兼愛也、君子者不レ可レ語矣．曰然也、然則何如、曰、物皆有レ主、豈無レ主也耶、欲二自有一レ不レ可レ得、欲レ與レ人亦不レ可レ得．物皆有レ主、屬レ主而已、曰主爲レ誰乎、曰府君、問二府君一、府君不レ有、問二衆人一、衆人不レ有、於戲人之所レ欲者、我所レ不レ有也、我之所レ有者、人所レ不レ欲也、於レ是乎室有二空虛一、心有二天遊一、納二隅河于二瓢中一、挾三筑山于二詩中一、士峯之笠、武野之鞋、鞋襪從レ此始、瓢二飲乎レ此、詩二興乎レ彼、恍然自適、則非二四景而已一、非二八州而已一、非二六十州而已一、四極八紘游覽之美、擧在二一身一、天下之山色、不レ入而目染、天下之水淸．不レ洗而耳濡、天下之至理不レ思而心得．心廣體胖而初是爲レ人而已、斯遊樂哉地其不レ廣乎、屋其不レ大乎、物其不レ備乎、斯游不二亦悅一乎、不二亦樂一乎、實威武不レ能レ屈　富貴不レ能レ奪、貧賤不レ能レ移、意必固二我既絕之後一、優哉游哉、我以爲二我有一

云、客𪋻然起而斂レ衽謝曰、子其學下登而小二天下一臨
而嘆二晝夜一之人上者歟、非二揚與一墨、

序

樂活撮要序

蒙莊之言曰、天下有二至樂一、無レ有哉、有下可二以活一レ身
者上、無レ有哉、今奚爲奚據、奚避奚處、由レ是觀レ之、
至樂活身之道至矣、凡遊二方之外一者、寓三道乎二末技一、
同三波乎二庸愚一、而韜二晦世之闇遠一者、往往在焉、古
所レ謂醫卜之中、多有二賢者一出者、寔有レ以哉、卜者
居不レ論、醫之爲レ學、學者如二牛毛一、成者如二麟角一、
有二一麟乎一此、名曰レ才、廉介儉約、蚤嗜二醫術一、發
藥多不レ受レ謝、人懷二其惠一、故到處上而貴介下而走
卒、無レ不二敬重一、加レ旃安樂延年之法、頗慕二孫君防
之爲一レ人、近世罕レ見二其比一也、方今宇內搶攘、非三
獨無二醫人之術一、又能無二醫國之才一、時々徒吟下四
海無二遠志一、一谿甘二遂心一之句上耳、吁已矣哉、因レ茲
彈丸黑誌之地、皆爲二戰國中之物一、而山之擾擾某陰、
水之迴迴某隈、無三三蘘四笠之可二以投閑一、無三兩火一
刀之可二以逃難一、于レ儒、于レ釋、一秦之暴、三武之廢、
可二併按一焉、故道德陵遲、世波溶蕩、人々日以困匱、
故險心萬併、躁欲五兵、朝欷暮歔不レ可レ解、是可レ恐
乎、當二此時一、翁也逍遙自適、不レ凝二滯物一、乖違得
喪、不レ係二累懷一、與レ之浮沈、與レ之升降、而近足二
自衛一、遠救二人之術一、蔑二以加一矣、然則以レ醫爲二至樂
之道一亦得也、爲二活身之術一亦宜也、翁之寓道同波之
謂、在レ茲耳、豈技業勞形者之比耶、其自守可レ尙矣、
翁嘗謂レ予曰、醫之先聖有二此論此方一也、四妙十全、
靡レ非二叢論一、靡レ非二靈方一、然謭才諛聞之徒、迷二多
端一費二分疎一、而終不レ知レ所二以然一、今我有二一方書一、
書葉僅數十、撰二病之大而尤難レ療、方之奇而甚有レ効
者一、太簡而至要也、或得二之異域能醫之手錄一、或受二
之本邦名家之口碑一、而乃選紀以爲二鴻寶一、請標二題其
出處一、且略二記顚末一、賜莫レ大レ焉、予離二無似一、嘉二其
救恤之意一、淵默不レ敢、題曰二樂活撮要一、蓋取二諸至樂
活身之義一者也、揚長者送二能醫劉彥仁一詩曰、活却千
人藥一囊、今爰褸二數此方之排劑一、一囊尙不レ盈、況活
者千人而已哉、彥仁而已哉、雖レ爾、黃大史曰、萬金
良藥、不レ如レ無レ疾、蘇公亦言、安心是藥更無レ方、於
レ是著二一隻活眼一、據二繹本草一、子細看破了來、大死人却
活、活計豈啻也耶、

送三里田爲曉歸二雲州一序并詩

里田氏爲曉者、雲之產也、去歲冬之孟、且嘗二疊嶺複水脩途之嶮艱一、得々入レ洛、其志在レ欲レ觀二上都文物之盛一也、竟投三顥泓於二臨江齋下一、臨江以二連歌之藝一、聲レ于二洛下一、人望甚高、天下之士、難犇水走、歸者如二歧郊一、子就レ之朝而講、夕而磨、壁陰之隙、燈雨之牀、研精覃レ思、孳孳不レ怠、人以爲レ非二池中之物一、故其學益進、其才益茂、嗚呼、今也世降俗薄、不レ過二襟裾之馬牛、冠裳之禽犢一、訪論稽古者幾希也、蜀日耶、越雪耶、奇哉、鄕友因爲レ予說二項斯一曰、平素其爲レ人也、曾子之三、顏子之四、拳拳服膺、淸謹奉レ主、純孝事レ親、想其何暇、而不レ遠二千里一有二此學一乎、蓋聞行有二餘力一則以學レ文之謂有レ在、可レ尙焉、邇徠謁レ予、時時敲寂欵話、以二見晚一爲レ歎、實有レ愜二素聞一、頃者遽起二南巢北嘶之念一、匆匆告報、一再挽二留之一不レ可、臨レ行、請予苦口丁寧謂曰、凡視二遊學之徒一、或克レ始不レ克レ終、或蕩有下爲二自暴一者上、流有下爲二自棄一者上、決無レ踐二正途一、已矣哉、韓氏曰、業精レ于レ勤荒レ于レ嬉、行成レ于レ思毀レ于レ隨、可レ謂二昌言一、子者有志之士也、諗焉以レ是、聊効二贈言之轡一、且不レ揣二荒陋一、迅レ筆書二小詩二章一、舒二情素一云、

講學隨師期樹勛、歌詞今見更精勤、歸鄕唯自可怡悅、聞說關西有八雲、

記取同林幾聚頭、別來誰共作吟遊、每因風景見思否、有月有花春又秋、

古今醫案序

學者之訪論稽古也、以二嘉言一、學レ窮二其理一、以二善行一、學レ實二其事一、是爲二稽古一、蓋言行不二、雖レ學二空言一、治レ己治レ人、施及レ物則實行也、非二空言一矣、雖レ學二實行一、口言レ之、心不レ知レ之、心知レ之、身不レ踐レ之、則又空言也、非二實行一矣、可レ謂言行一也、二レ之則非二稽古一、非二學者一矣、雖レ然初學者徒然守二空言一、則臨二事變一、藐然不レ知レ所二以處一レ之、故不レ如レ見二行事之實驗一矣、聖人修二春秋一有レ曰、我欲レ載二之空言一、不レ如下見三之於二行事一之深切著明上也、學レ醫之道、亦猶若レ斯乎、雖レ學二常法一、不レ知二發用之術一、則又徒法耳、夫是行之善也、以二在レ家而事一レ親爲レ始、事レ親者以レ侍レ病爲レ大、故程夫子云、事レ親者不レ可レ不レ知レ醫、春秋遺二許止之戒一亦在レ茲歟、近世世降俗薄而不レ知二事レ親之道一、漸將レ成下無二父母一國上、既不レ知レ治

レ己、安能治レ人、安能及レ物哉、縱終日能言、鸚鵡也、猩猩也、吁止矣、大醫局法眼、名恂、意安其字也、纘二紹父師之箕裘一、而跨レ竈出レ藍、當世之司命也、學必稽レ古、知二其理一、踐二其實一、奇効靈驗、不レ可レ盡レ之、家乘也、日錄也、門人繡二之於梓一、玉二之於軸一矣、先レ是母嘔吐、鼎茵不レ佳六十日、疾革而不レ納二藥水一、況食餌乎、恂晝夜不レ解二衣帶一、奉二承顏色一、不二少怠一、謹愼之餘不レ恃二我能術一、拜二迎闔國諸醫一、諸醫與二萬方一無二寸効一、伎窮計竭皆辭去、氣息奄奄俟二屬纊一、恂無レ地レ措二手足一、不レ克レ止、自撿二諸方書一、偶爾默二察虞恒德治レ嘔之驗例一、忽有レ所二感悟一、擴二充其法一、別處二一方一、侑レ之、服二一盞一不レ吐、不レ耐二喜躍一、又侑二二服一而後稀粥亦不レ吐、調攝數旬、脫然全愈、奇哉其術、稽レ古踐レ實者其効亦如レ此也耶、彥修之養レ母之方、子和之事レ親之義、可二幷按一焉、恂嘆曰、我不レ稽レ古奚得二箇入處一哉、因爲二後學一校二讎古今諸醫醫按一、而筆削編纂爲二此書一、一論一法於レ是深切也、一行一節於レ是著明也、善之可レ勸、惡之可レ懲、於レ是判然也、釋然也、煥焉炳如也、睎驥之馬亦驥之乘也、睎恂之人亦恂之徒也、學者於二此書一有レ得、則必養レ親、必救レ人、人而已哉、有三秋夫二子二鬼、鬼而已哉、思二邈于蛇一、師二皇于レ馬于一龍、始レ於レ事レ親中レ於レ救レ人、終レ於レ利レ物、博哉醫之利、至哉醫之道、唯非二一世之利一、即是萬代之道也、豈不レ知而可乎、程子之言於レ是可レ徵焉、春秋之戒於レ是可レ守焉、所謂五經如二藥方一、春秋猶二用レ藥治一レ病、然則以二此書一謂二醫家靑史之法一亦宜也、非二溢美一矣、爲二醫家素王之業一亦得也、非二過譽一矣、予自レ幼多病、衰憊不レ勝レ衣、就レ恂聆二醫家之餘論一、染二指丹鼎一、鍊二性藥爐一、荷二嘉惠一者、不レ爲レ不レ多、以至二今日一、所レ愧者、人而尙不レ能レ盡二龍馬蛇鬼之報一矣、恂不三以レ予爲二卑、以レ序囑焉、予樸而不レ文、俗而不レ韻、何言哉、然亦詳二成書之起本一無レ如レ予、不レ可二敢辭一、叨叨至レ此、更有二一事一足レ爲二懲艾一、因記甲午之歲、余以二人事一遊二關左一、不幸而母以レ病終、不レ果二定省一、不レ侍二湯藥一、空二平生之志一、貽二終身之憂一、痛恨徹レ骨、九原不レ可レ作、今見二此書一、濺二淚於蓼莪一、餘三悲於二風木一、後之見二此書一者、於二恂之孝一一以喜、於二予之悔一一以懼、一喜一懼必有二感發興起一乎、豈無二感發一哉、

文祿五年丙申二月十日惺齋斂夫以肅書二于城中草樂室一、

跋

君臣小傳跋

古人其可レ見耶、曰否、在則人也、果不レ可レ見耶、曰否、亡則書也、吁古人吾不二得而見一レ之矣、得レ見二其書一者斯可矣、吾友梅菴由己、風騷韻士也、形枯氣老、訥二於言一而辨二於筆一也、唐詩也、倭歌也、瑯瑯然、璘々然、不レ得二玉人一、而其價連城也、加レ旃無二書而不一レ讀、讀以爲二尙友一、狄仁傑之卷軸中之聖賢可二併按一、方二濁富之季世一、物論不レ公、老人獨復レ古、雅尙之意可レ觀焉、好古之餘、頃集二古人之親筆一貼二屛上一、以當二席上珍一、唐大宗眞草書之屛風、不二多讓一焉、尊悟親王辱染二奎翰一、記二來由一考二眞贋一、爲二他後之證一、兼請レ予述二崖略一之次、從レ頭點撿歷視、蓋歌而仙者、詩而佛者、或蟠三常山之蛇于二文中一者、或躍三天門之龍于二筆下一者、皆名價籍二甚一時一、而聲譽飛二騰千古一、上曰二一人一下至二庶人一、以レ道不レ廢レ人、故人品多混雜、凡雖レ分二三科一、間或新舊、或貴賤、或材器之優劣、躐レ等失レ倫、然亦有二微意寓一焉、天地之覆載、是其常也、上地下天者、泰之義也、源流之本末、是其常也、由レ流遡レ源者、學之序也、又不レ爲レ誣矣、見二其字劃一、則確乎如レ接二其人之風彩一、讀二其言辭一、則宛爾如レ聽二其人之謦欬一、卓然起二古人於二朽骨一、千載之下、使二人興發一、於レ是乎貪夫可二以廉一、懦夫可二以立一、先所レ謂得レ見二其書一是可者、不レ在レ茲哉、昔者鄕黨篇畫二一箇聖人一、今也屛障上對二數箇古人一、老人之手段高哉、哀公之席、太公之筆、舜之漆器、好レ古而取レ笑者、豈足レ言乎、蘇子瞻曰、寓二意於物一、雖二微物一足二以爲一レ樂、不レ足二以爲一レ病、留二意於物一、雖二微物一、足二以爲一レ病、雖二尤物一、不レ足二以爲一レ樂 至哉昌言、夫能寓二其理一、則物々古人妙術也、苟留二其事一、則物々古人糟粕也、老人其如何哉、樂又在二其中一也耶、況風雨六十刧、古今一彈指、自二不レ變者一而觀レ之、古亦在レ此、自二變者一而觀レ之、今亦不レ在レ此、奇哉快哉、仲尼之逝川、匿王之觀河、宜自得者可也、惟時冬之仲、寒月銜レ山、如レ霜如レ雪、推レ牕不レ覺朗吟曰、今人不レ見古時月、今月曾經照二古人一、古人兮古人兮、擧レ頭問レ月、月亦不レ答、

天正十有九年〇〇〇〇書二于城中客舍一、

戸氏家藏書跋

知レ好ニ藏書一、而不レ知三其所二以樂一、既知レ樂、而不レ知三其所二以敬一、則翫レ物喪レ志而已、雖レ好猶レ不レ好焉、何者、書之爲レ書也、上臨傍質、爲レ師爲レ友、會三千萬人之聖賢於二一室一、盡三千萬世之言行於二一時一矣、蓋聞五百有餘歲而　聖賢出焉、寡難矣、縱其出、豈能一室而會二千萬人一、一時而盡二千萬世一也耶、是亦甚難矣、嗚呼、知二其難一、則日夜從二事此書一、而優柔饜飫、怡然理順、所レ敬篤、而此心收斂也、主一無適也、整静嚴肅也、常惺惺也、樂在二其中一、嗚呼、非レ翫レ物、非レ喪レ志、然後以二己所レ敬使二人敬一、人亦使三後人而復敬二後人一、則已雖レ沒、有二其不レ沒者一存矣、此書在レ茲、豪傑之士、待二文王一哉、戸氏勝冬藏レ書、囑レ余書二其後一、以二嗜好一而爲レ人亦可レ觀、故擴充以諗焉、子其敬哉、

記

小蓬壺記或名二松花一

安生袖二香爐一來　謁レ余、請レ命二之名一、就審視焉、一小壺而磁二其質一、鼎二其形一、犀二其紋一、其體豕腹膨脝、蟆脚跳梁、其色螺殼音熒、其兩頭各架二小提梁一、可レ愛可レ翫矣、可レ謂文房之一器、足レ飾レ閑、余則名曰二小蓬壺一、有下笑レ予レ列者上曰、甚矣名之誣而說之迂矣、彼海外之絕島而此塵間之小器、彼鼇負而此犀戴　如二眞假一何、如二名實一何、甚矣說之迂而名之誣、余響應曰、子之所レ言者實也、請實レ焉、古以二蓬萊一名レ香、姑措不レ論焉、以二香事之幽賞一言レ之、明牕淨几、或雪或月、夕レ之晨レ之、冬與レ秋、不レ梨而白雪香、不レ桂而素月薰、淸與不レ啻閑雅有レ在、或小雨潤レ花之春氣添二和香一、或淸風敲レ竹之夏陰增二細香一、不レ覺乘二一縷黃雲一、出二九衢紅塵一、丹府靈臺　四戶八牖、玲玲瓏瓏、洒洒落落、不レ踰二弱水一而隔三俗坋於二三萬里一、不レ變二桑田一而閱三仙齡於二千萬世一、葛瓊琯之所レ謂身裏蓬萊十二樓、鼇負虖、犀戴虖、海外乎、塵間乎、知二身裏蓬萊一、則無三處而不二蓬萊一、無二物而不二蓬萊一、悲矣徒知二其賓一未レ知二其實一、昔人曰、分明人世有二蓬萊一信矣、不レ覓三之於二海外一而覓二之於人世一、不レ覓二之於人世一而覓二之於身裏一、眞蓬萊也　若以レ怪證レ怪、金仙氏之所レ話、香積之香國、香嚴之香氣　其亦割二蓬萊之左股一也、夫不レ語レ怪之徒而語レ怪者何也、人非二夏蟲一、非二井蛙一、語レ氷語レ海、語レ之以レ不レ語、復

豈傷哉、子亦知名實之說哉、何有蓬之心、子亦知眞假之說哉、何有童之心、諺曰、水銀無假、何魏無眞、自眞者而見之、天地亦一阿魏也、矧蓬萊乎、自假者而見之、毫芒皆一水銀也、矧器具乎、安生幸隱于醫者也、必辨阿魏水銀矣、子其自反焉、胡俟余言、犀之爲犀也、以德不以形、楊羔兒之在香世界也、木而犀乎、香癖翁之險心萬仞、躁欲五兵、爲之一空、甲而犀乎、絕面上之三寸、洗腸中之五斗、却塵犀也、忘世波之震蕩、離苦海之淪沒、破水犀也、與陰陽消息、與天地盈虛、辟寒辟暑犀也、虛靈不昧、衆理萬事、顧諟明命、通天之犀也、夜明之犀也、犀亦仙獸哉、宜矣戴蓬壺、安知不龕之抃、犀之靈也、小說記、浙人下番以貨物水瀬、一塊如鉢、嗅之頗香、抵家一日隣家穢氣逆鼻、爇之則烟中結作七鷺、飛數丈而乃散、咄咄奇奇、言未了、爐薰一炷、篆煙騰騰、如霧如雲、如白衣、如蒼狗、斯須改變作數鶴、鶴兮鷺兮、駕言借一隻騎焉、於虖蓬萊山安在哉、龕也犀也、鷺也鶴也、孰識其同、雀蛤鯤鵬孰識其異、焉得圓機之士論同異、質名實、辨眞假、至無同異、無名實、無眞假、而後知眞心、心清聞妙香、杜少陵云、吾亦云、因朗吟曰、竟誤入蓬萊島、香風不動松花老、竟命曰小蓬萊、又名松花、於此余亦一笑、

惺窩先生文集卷之七

惺窩先生文集卷之八

銘

山州橋本新造橋銘并序

應山口玄蕃頭之求、文祿元、臘月望、

惟地之險、莫過乎江河之大也、江河之大、莫如乎橋梁之備也、然則橋梁之備者、守土者一日可廢之哉、前博陸公將有事乎大明、命諸國、開道路、作舟梁、而欲得往還轉運之便、事絕古今、慶傳遐邇、時哉矣、山州八幡橋本之津、華夷出入之咽喉也、百川之合流、九重之深淵、而黿鼉魚鼈之所不能游也、故行旅雖數有漂溺之患、竟無胥謀者、於是山口玄蕃頭豐臣宗永奉武命、主其役、作長橋、遠取材于伊丹之二州、集匠氏、設奇巧、自同勞苦、與齊倶入、與汨偕出、從水道而不爲私、脩梁峻址、以架以植矣、其長一百八十間、其廣五間、柱數一百三十八、柱根入地丈餘、規模之宏壯偉麗、罕見其比、八月九日資始、十二月初四日以成、僅數月之間、而畢大功者不亦奇乎、蓋經始勿亟、庶民子來者也耶、髴所謂江河之險、却成閨堂之安、夫是政敎之所化、智巧之所施可觀焉、維時士女和會、闐郛溢郭、相共賀之、宗永因請予、記其功勞而將貽來者、其詞曰、

國屬寬仁、笑子產乘輿之惠、渡憂覆沒、施杜預建橋之工、勝茲萬代雄基、寔是一時壯觀、深則厲、淺則揭、未若得步於長空、近者悅、遠者來、正好免勞於艱嶮、不求刻舟劍、何浮帶帛璨、鷄聲月殘時、誰歟吟霜之客、馬蹄雷生處、彼豈問津之人、天公呈祥、河神受職、懷哉治水聖智、政化無彊、胥矣濟川奇才、功勳不朽、

重建和歌浦菅神廟碑銘并序

於乎、神姓官、三其字、諱道眞、世冑儒宗也、天生岐嶷、多材多藝、幼年章章焉、竟甄拔登甲科、居翰林也、在試局也、轟於右相也、經術史學之博、敷奏議論之詳、職業履歷之實、斑斑乎遺文殘稿矣、百十載之後、廟食於京師、而祀典肅肅也、上而王公搢紳、下而厮徒負養、信奉欽慕而不敢止、載在口碑、不俟勒彝鼎、何其盛也哉、雖然竊測其家乘、立論遣辭之際、如不免雜駁于寂滅之敎、人或疑焉、彼豁大道、宜擯斥拒絕之不遑、而從

愬之一、若ニ儒名一何矣、讒口嗷嗷竄ニ紫陽一、都府樓之瓦、觀音寺之鐘、幽鬱無聊之懷不レ可レ掩矣、蓋素位之學未レ明而然乎非耶、當時之有レ識者詠ニ赤寫几几一有乎無乎、不ニ少概見一者後也、人亦疑焉、何其劣也哉、於乎神可レ欺ニ一人一而不レ可レ欺ニ衆人一、可レ欺ニ一世一而不レ可レ欺ニ後世一、豈無レ有ニ其中一而長可レ飾ニ其外一哉、豈無レ有ニ其實一而久可レ爲ニ其名一哉、必有下所三以令ニ人信奉一之故上也、睠吾邦上下渾ニ馥陷三溺釋氏一者由來遠矣。神其無レ意哉、時其不レ可レ得焉、犯ニ人主之怒一、濟ニ天下之溺一、談何容易、故以ニ漸默消潛一、奪ニ其邪僻之氣一、而欲レ使三之歸ニ至正域一乎非耶、其若ニ儒名一何、神必不レ然、齊王好ニ貨色一、孟子不ニ直掃一之、而先導レ之、魯人爲ニ獵較一、孔子不ニ卒改一之、而小ニ同之一、於乎神意果在レ茲乎、姫且其亦不レ可レ學哉、彼一時、此一時、憂レ君憂レ民、雖レ欲レ無ニ不豫色一、不レ可レ得焉、是亦不レ可レ爲レ非ニ素位之學一、宜矣人欽慕不レ止矣、復何疑之有矣、南紀和歌浦置ニ菅廟一者、遞代尙矣、今國主豊臣姓淺野氏幸長君、就ニ胙土之封一之五年、相ニ舊制之陰陋一、而於邑不レ措焉、然神之レ主、先成レ民而後致ニ力於神、鑿ニ開兆域一、依ニ崖壁一、疊ニ

鉅石一、躋ニ攀峭嵘一、百工子來、廟堂不レ日以落矣、刻畫華彩、丹漆黝堊、延袤之宏壯、照レ顔奪レ目、昔狄梁公毀ニ江淮淫祀一千七百區一、所レ存者惟夏禹伍子胥二廟、君子猶以爲存ニ伍子胥廟一未レ是、國主之於ニ此廟一可レ毀乎、以新焉、可レ廢乎 以崇焉 所レ爲可レ知而已、維時世道亾膺日甚矣、列國侯伯達官、唯有下佞貴ニ瞿曇一、術ニ耶蘇一者之譸張爲レ幻、而未レ聞レ有下崇ニ儒敎一者上、彝倫攸レ斁是之懼、偶因ニ衆人之信ニ奉此神之有ニ善名一、而作振以擴ニ充其秉彝之德降衷之性一、不ニ亦韙一哉、賴レ之士知レ所レ學、民得レ所レ由、國主爲ニ之倡一、則列國嚮レ風慕レ化、有レ如レ日矣、此擧豈淺淺哉、然則今日神廟則他日聖廟也、今日國政則他日天下之政治也、夫神之所レ學之道先聖之道也、所レ欲レ之敎先聖之敎也、於乎神其道屈ニ于昔日一而伸ニ于今日一、其敎晦ニ于昔日一而顯ニ于今日一、於レ是神始得レ爲レ神、神若有レ知則可レ謂國主者千載之知己矣、神其安焉、神其饗焉、於乎神千載之精爽也、何其幸也哉、初余應ニ國主之佳招一入ニ國境一、縱觀焉、徒矼舟梁以得ニ往還轉運之便一、列レ樹以表レ道、立ニ部食一以守レ路、塘ニ于池沼一、陂ニ于川澤一、以備ニ水旱一、民高ニ其閈閎一、

厚二其墻垣一、侍二畚揭一而無レ縣レ耜、食レ力樂レ生、含レ哺鼓レ腹、熙熙然以安矣、暇則講二罛罶一設二罤鄂一、魚鼈禽獸不レ可レ勝レ用也、雖レ不二佃作一而足矣、況腴田之饒園圃之利乎、千樹棗栗橘柚梨柹、千畝漆枲桑麻竹葦卮茜、千畦老芋母薑、衣食於レ是乎生、楩枏櫲樟松柏檜杉、有二周廻數十里之山一也、材器於レ是乎成、積雪百里之鹽、惟金三品、銀及鉛與レ汞、怪石綠青、財用於レ是乎出、有二大洋一也、荒服異域之產重二寄象鞮譯一而來貢、奇貨於レ是乎居、此皆所二取給仰足一也、可レ謂天府國也、胥哉秦徐福逃レ難而投化、明太祖題レ詩而想像矣、紀之爲レ州雖レ鄰二京畿一、地迫二南裔一、嘗聞前世其民恃レ嶮潛レ幽、爭二捷於猨狖一、比二猛於材狼一、狡猾兇悍不レ可レ測、有レ事則枯木朽株盡爲レ難矣、守レ土者以爲レ憂、而至レ不レ可二奈何一焉、今也昒爽闓昧得レ耀二乎光明一而化爲二撲魯質直之民一、想是敎養兼施、刑賞竝設、駕御之術有レ在矣、由レ是見レ之、敬神之至誠實出二聖致一、若其托二荒誕迂僻奇怪恍惚卜祝禳禱之說一、而扇二惑善良一者、得レ逞二其淫巧一、則有レ愧二狄公之手段一、於乎神雖二獨豐一其何福之有矣、余適抵二和歌浦一、浦之勝、古今風人韻士不レ絕レ口、然獨山部明人之歌載二乎萬葉集一、僉曰雋永無窮矣、先レ是因レ歌而以知二斯地之絕景一、今也因レ地而以知二斯歌之警策一、試高歌數闋不レ覺此身遊二此地一歟、此心在二此歌一歟、憑レ欄繞レ廊逍遙徜徉矣、山之偃蹇而長也、橫或側、圓或尖、更斷復連、如レ笑如レ睡、如二延佇一如二俛仰一、水之汪洋而遠也、如レ走如レ逐如レ遊、如レ倒如レ狂、似レ驚似レ怒、地勢坼而嶋嶼出、潮聲退而岩石高、飛鳥之爲二聯翩一風破レ烟、跳魚之爲二撥剌一波碎レ月、或一望千里、曙雲共二遠帆一消、少頃多時、歸牛載、寒雅過、遠淡近濃、雨抹晴粧、一日千態、四序萬狀、不レ可二具述一焉、至レ若二人事絡繹一薦烝椒漿、迎レ神送レ神、有二來集而祭者一、山酒海物、上交下交、有二相伴而遊者一、攜レ幼扶レ老、夫唱婦隨、主先奴從、漁者、樵者、耕牧者、商賈者、雜遝盤桓矣、開レ眼人之與レ物倫理炳焉本無レ隱二百姓之日用一、知者之知、仁者之仁、先覺覺レ之、後覺亦覺レ之、東西海之聖人同レ之、南北海之聖人亦同レ之、是以八政得レ用、五倫得レ敘、四民安レ業、是乃神之歌詩也、文章也、史論也、經義也、命性道敎也、豈外求哉、於乎神孰無二此心一、一撥轉、一提醒、信二其所レ可レ信、益知レ有レ信、疑二其所レ可レ疑、終至

レ無レ疑、然後神人以和、是所二以我敬ヲ神、而所二以神助ヲ我歟、於乎神以爲二何如一、人其欽哉、國主屬レ余書二斯事一、其辭曰、

議海墺兮封神丘、廟貌嚴兮遺徽猷、名而實兮人焉廋、敷敎化兮使民由、綿歷遐兮涵天休、爲經按、他日聖廟也、舊稿作二宅日文宣于聖廟也一

主靜室銘 與醫七稱芸

心主斯存、動中至靜、隨情五火炎、復性一灰冷、語默平平、行藏惺惺、紅塵市間、藥室眞鏡、嗅指階前花香月影、

子元新造瓦硯銘 貞順字子元

貞順子元、鈞軸轉過、陶于嵯峨、水土和火、爲硯精工、堅潤多可、嗚呼貞元之間、造化在我哉、

紫石荷葉硯銘

洞庭紫波、簪峯玉井、有蓮盧中、盧中石靜、類聚群分、斯文壽永、

星槎硯銘

片石之泓、研而是水、黑質白章、天潢雙起、天地人文、渾然一理、旋乾轉坤、造化在己、

某銘

日開月學、斯文文房、四友莫逆、千載無疆、

歆案銘 背挿寺所藏

黃卷赤軸、周折造顚、斯師斯友、曰聖曰賢、非身隱沒、此心永全、天理所在、道統以傳、有血氣者、其曾親焉、彼亦人耳、我盡自然、靑燈其下、絳帳之前、朝講夕磨、密鍊潛鞭、日月逝矣、爾曹勉旃、

歆案銘

夫是讀書、又猶磨鏡、去垢照形、窮理盡性、所爲雖同、成效或更、有暗有明、惟狂惟聖、此器豈徒、讀書在敬、

歆案銘 幷敍 應玄同之求

爲書造案、將訂吾頑、學非口耳、體身可閑、優柔饜飫、易簡不艱、天地人物、顯微無間、有珠在此、買櫝莫還、

數百千載而賢聖出、蓋難矣、數千萬里而賢聖處、豈易哉、縱生二其世一同二其地一、僅止二其人一而已、況乖逢不レ可レ測也哉、書之爲レ書也、會二百千萬人乎一室一、縮二百千萬里乎尺地一、終二百千萬世乎少時一、益難矣、書之所レ存者賢聖之所レ存也、上臨旁質、斯師在レ此、斯友在レ此、其時其地亦在レ此、由レ是觀レ之、此歆案上、乃唐宮也、虞廷也、禹湯文武之

朝堂也、稷契皐益夷夔伊傅周召呂散、道德政教禮樂刑兵亦出レ此、杏壇嘉會儼然宛爾、四勿一愚寄二簞瓢于此一、三省一唯易二華睆于此一、暮春春服、童冠五六七、浴二風于此一、中和位二育于此一、浩氣充二塞于此一、若夫避レ言避レ色避二地之與レ世者、箕山潁水、流二峙于此一、首陽薇蕨生二于此一、秦風蒹葭蒼二蒼于此一、或狂二歌于此一、或耦二耕于此一、或荷二蓧于此一、或抱二關一擊一柝于此一、聞二磬聲于此一、鬻二魚鹽于此一、莫レ言レ無二其地一、莫レ言レ無二其時一、莫レ言レ無二師友一、待二文王一而後興者凡民也、方今競二葩藻一負二訓詁一之徒、犯二名讀書一、而假二求勢利一、萬卷百車、入レ耳出レ口、過レ眼喪レ志、嗷嗷尙言二我能讀一レ書、所謂發レ冢者歟、書以自警、且告二玄同生一、辛亥九月二十五日、

贊

四聖贊

乾坤之內、四聖人誰、氣類相感、麟鳳龍龜、

贊城泉牧昌茂壽像 乙卯閏六月十三日

凌煙畫圖、月移闌干花影、齊國物色、天到別春梅邊、文武豈異、行藏皆然、迹循名以長、眞因假以傳、在昔任將軍、餘吾慶戶隱妖鬼、累世稱勇士、資茂挫岐嶇兵權、節刀嘗信之嶮難、印章領越之山川、戎容壁壘、族譜聯聯、矍鑠是翁、據金鞍而老氣益壯、卓犖無敵、揮白羽而威風遠扇、軀殼一犀甲、腰間雙龍泉、忠直奉君、更奈貝錦　綏急處己、何佩韋弦、剛克柔克、折旋周旋、義氣詠彼鶺行、活眼空他驎槙、擇接乎水體之記、游藝乎風雅之筵、諳五倫八政、誦三風十愆、趨庭過庭、戒子之誨最諄諄、手澤口澤、思親之淚常漣漣、救不振之匱乏、恤無告之顚連、楸枰會賓、蛛絲蜩蛻慕坐隱、茶寮待友、雀舌鷹爪候老煎、巖爾肅肅、游焉息焉、退齡竟期晩菊之曝露傲霜、譬諸子房之從容而身名兩保、偉勳高仰古栢之參天溜雨、譬諸孔明之正大而文武兼全、遠者大者◎一本作近者遠者敬旃勉旃、夫是之謂傳善信不可知之神、而遺安於子孫萬斯年、

贊歸去來兮圖

噫吁戲、鞠兮鞠兮、花中陶也、陶兮陶兮人中鞠耶、嗟爾甕生、生竟不息、仁壽轉更遐、色其文章、香其德、千載人兮千載花、見之猶可、夫亦何加、歲云暮、修小笆、

雜著

書正徹老人親筆倭歌後

右一簡者、招月正徹老人所寄冷泉亞相爲尹之親筆也、標題乎上、越前某者、亞相世臣中井氏也、徹也丞親昵亞相、傳和歌之統緒、而詞藻不凡、傑語豪章無僭態、篇篇警策、人以爲天縱也、名吟藁曰草根、行世而蔓衍、賀哉潤色歌林、而令詞花言葉之根柢不可拔矣、此書中也、筆勢奇逸如攝其凜然確乎之風姿也、徹也我不得而見矣、得見此書斯可爾、吁矣、書中所謂兩卿者、五條京極父子而徹之傳統之祖也、敬重可知矣、夫是釋氏之業倭歌者何也哉、嘗聞參詩如參禪、然亦詩之於歌、同工異曲、如繇錦繡、背面俱華、詩而佛、歌而仙、禹稷易地者歟、昔有以周詩爲吾家涅槃經者、徹亦以兩卿之集爲涅槃經者也耶、豈啻哉、

題扇面 自註云、一方濃紫一掃、一方淡黑一掃、別無物色、

有客向予、覆手、則視一道之紫氣、老聃至于此乎、翻手、則吹五里之黑霧、公超隱于此乎、搖手一揮、則起九萬里之風、蒙莊逍遙于此乎、放手一擲、則忽作一扇落予前、奇哉奇哉、一扇化三仙歟、三仙化一扇歟、扇與仙必有分、是謂物化、世之言神仙者、蓋其然乎、豈其然乎、

書無畫白貼扇 應嘗少年之求

論畫者以形似、若夫至不可以形之物、則離其畫品之神之妙、何以施工也哉、今見此貼扇、布地皆白而不著一物、蓋昔論性者、予羽予雪予玉者不曰白乎、又曰、人性上不可著一物、由是觀之、以無形之畫、畫出有理之性、奇乎奇也、畫乎畫也、不羽不玉雪、無物堪比倫、豈可以形似論哉、儒先有曰、鄉黨篇、畫出活聖人、於是吾亦云、畫聖人矣、吁、堯舜性之也、人皆可爲堯舜、子其奉揚仁風而學以至此、莫自暴自棄焉、仁風云仁風云、貼扇云乎哉、夫是歟哉、

題無畫金混扇

城中寸土如寸金、幽軒栽竹唯十箇、此是僧清順警策也、予頃在城中、未得寸土、況幽軒乎、十竹乎、吁已哉、今視此扇子、十竹琢玉、寸土布金、誰歟慕順者、竊言予以爲竹卜鄰、而諾重於金、一節堅於竹、公其許否、

題壽老人畫像

形於上者日月星辰、中而人之倚之與獸蟲、下而山

峙川流、草茂樹立、理一而分殊、分殊而理一、惟夫所㆓形似㆒首長身矮、須眉皤皤然、或云、是狼星之精而見則世道治平矣、余謂唯唯否否、蓋人而爲㆑星乎、星而爲㆑人乎、不㆑可㆑議、而不㆑足㆑議焉、可㆑謂㆓治平則見㆒、不㆑可㆑謂㆓見則治平㆒、何也、貞元之間、造化在㆑我、中和之致、位育在㆑我、吁、

惺窩先生文集卷之八

惺窩先生文集卷之九

雜　著

致㆓書安南國㆒代㆑人

日本國○○○○○致㆓書

安南國頭目黃公㆒、比年鴿舶往還、二國之情好稍可㆑徵矣、感佩惟深、甲辰六月、我舟人亡㆑恙歸、辱㆓復書㆒添以㆓嘉幣若干㆒青貝肆匹、白絹大好五匹、牙扇二件　香蠟一瓶　蕭香一瓶　厚意不㆑可㆑言焉　書中所謂一止㆓於信㆒之一語、誠是家國治教之要矣乎、夫信者、吾人性中之固有、而感㆓乎天地㆒貫㆓乎金石㆒、無㆓以不㆑通、豈啻交隣通好而已哉、雖㆓是千里不㆑同㆓其風㆒也、所㆓以五方皆不㆑殊、此性者也歟、由㆑是見㆑之、則其不㆑同者、特衣服言語之末而已、然則千里萬里雖㆑遠、衣服言語雖㆑殊、有㆓其不㆑遠者不㆑殊者㆒而存、是以所㆑謂一信也、前使不德、往㆓還彼此㆒之間、上㆓下其手㆒、表㆓裏其言㆒、而多誤㆓事情㆒、故處㆑之以㆓國刑㆒、想在㆓貴國㆒亦如㆑此乎、凡舟人者、命㆓市兒販夫之徒㆒、而僅見㆓小利㆒則忘㆓大辱㆒、其言多任㆓喜怒之恣㆒、而不㆑足㆑取㆓其信㆒、自㆑今而後、二

國之信者在レ書、書之信者在レ印、以レ是爲レ證耳矣、故今附二舟人一以二今夏之復書一、貴國子細檢焉、方物數事、聊寓二綏好之禮一、書中又言、貴國者、詩書禮義之國、而非二市貨會集之地一、苟市貨商賈之事、惟利是務、眞可レ鄙焉、然亦通二論之一、則四民孰非レ民、八政孰非レ政、安民爲政之外、無二詩書禮義一、詩書禮義之外、無二安民爲政一、是亦五方固有之定性、而乃一信之所二主在一也、貴國之所レ誡者、在三彼失レ信、而屢生二不好之事一而已、二國不レ失二其信一、則縱雖レ有二小人一、何至レ生二不好之事一乎、然亦不レ可三以不ラ誡、若生レ事、則二國各有二刑法一乎哉、

舟中規約貞順運二商舶于安南國一、因代レ之、

一凡回易之事者、通二有無一而以利二人己一也、非三損レ人而益ラ己矣、共レ利者雖レ小還大也、不レ共レ利者雖レ大還小也、所レ謂利者義之嘉會也、故曰貪賈五レ之、廉賈三レ之、思焉、

一異域之於二我國一、風俗言語雖レ異、其天賦之理未二嘗不ラ同、忘二其同一怪二其異一、莫二少欺詐慢罵一、彼且雖レ不レ知レ之、我豈不レ知レ之哉、信及二豚魚一、機見二海鷗一、惟天不レ容レ僞、欽不レ可レ辱二我國俗一、若見二他仁人君子一、則如二父師一敬レ之、以問二其國之禁諱一、而從二其國之風敎一、

一上堪下與之間、民胞物與、一視同仁、況同國人乎哉、況同舟人乎哉、有二患難疾病凍餒一則同救焉、莫レ欲二苟獨脫一、

一狂瀾怒濤雖レ險也、還不レ若二人欲之溺ラ人、人欲雖レ多不レ若二酒色之尤溺ラ人、到處同レ道者、相共匡正而誡レ之、古人云、畏途在二袵席飮食之間一、其然也、豈可レ不レ愼哉、

一瑣碎之事、記レ於二別錄一、日夜置二座右一以鑑焉、

日本國慶長　年　月　日　　同易大使司貞子元誌

書山水畫應二城氏和泉守之求一

有二不レ山而高者一、然後能觀レ山、有二不レ水而淸者一、然後能觀レ水、知仁之於二山水一、◎一本此間有亦字由レ己而由レ人乎哉、鳶飛魚躍、仰觀也、俯察也、振二衣千仞一、濯二足萬里一、◎山人乎哉之下一本作振衣千仞濯足爲里仰觀也俯察也鳶飛魚躍不レ可二徒然一矣、當レ觸二發其道機一、則以レ之登而小二天下一、以レ之臨而嘆二晝夜一、觀瀾之術、伐木之息、實有レ在矣、或以レ之渴而棄レ瓢也、四岳百揆失二其貴一乎、或以レ之飢而採レ薇也、八百諸侯失二其富一乎、至レ若二九鼎一絲之風、裘影飄飄、兩火

一刀之雪、琴韻冷冷一、猶以レ之自信、不レ爲二王者之公一、不レ爲二王者之伶一、故曰不レ可二徒然一矣、睠下夫彼遊二方之外一者上、有レ力而負、見レ性而觀焉、可二稱言一也哉、嗚呼水亦水哉、山亦山哉、又以レ由レ己而已、否則終南有二提徑一、湘浦有二辟陽一、有二曉猿之驚夜鶴之怨一、有二白鷗之舞而不レ下、嗚呼山豈山耶、水豈水耶、又以レ由レ人而已、今見レ所二物色一、有レ山有レ水、擾擾焉、洄洄焉、可レ樵可レ漁、可レ隱可レ樂、屋之連二其傍一、松之老二其下一誰歟、前者導、後者隨、蓋有下由レ己而樂二山水一者上歟、抑又有下由レ人而汚二山水一者上歟、聞レ言觀二山水一如レ讀レ書、見二趣何如一而已矣、嗚呼于二山水一于二讀書一于レ眞于レ畫、馬異不レ異、盧仝不レ仝、子其公務之餘、臥遊之中、子細自得可矣、余是非二有識者一、由レ人而想像以言焉、是亦不レ由レ己也、雖レ然且對レ畫而不レ覺不レ克レ無レ感二于其眞一而已矣、

題歸去來圖

乙卯冬十有一月、適丁二先生歸去時一、時晚菊數莖、◎一本作株 霜下吐レ英、凜乎不レ可レ狎、對二此圖一不レ克レ無レ感、於レ是書焉、

避二秦於桃源一者淵明其人也、何也、託レ秦以避レ宋也耶、記二桃源一以貌二栗里一也耶、人世之爲二人世一也、無レ時而有レ秦有レ宋矣、人生之爲二人生一也、無レ處而有二桃源一有二栗里一矣、栗里者不レ在二栗里一、而適在二方寸地一也、其然乎、劉歆豈奪焉、子驥豈往焉、允哉後遂無二問レ津者一、若或有二其知レ津者之在一、則是此亦一淵明也、否乎、安得下若二黃道眞一者上、躡二輕風一高擧遠引、相共優遊徜徉焉、桃源云乎哉、栗里云乎哉吁、

題三笑圖丁巳之歲

斯圖、古人之異議尚矣、置不レ論焉、睠夫道一而致三、心一而笑三、所謂造レ適不レ及レ笑、三氏者何笑焉、不レ適二其適一乎、獻レ笑不レ及レ排乎、安排而去、化乎否乎、入二於寥天一一乎否乎、道生レ一、一生レ二、二生レ三、三生レ萬、萬歸レ一、一者何也、孔之以レ一乎、老之得レ一乎、釋之唯一乎、夫是一而不レ一乎、抑亦不レ一而一乎、蘇子曰、不レ識二盧山眞面目一、只緣三身在二此山中一、敢請三氏者、更向二山外一、質二諸胸中盧山一云、吁、今有二三笑圖一、而三笑聲安在哉、其一者、尚有レ在而壽也矣、萬世且莫二之遇一是而已、於レ茲有下陶與レ陸及遠之笑聲上、有二虎之嘷嘷一、溪聲瀑韻、無レ不レ有焉、且莫二之遇一是而已、

題淵明畫軸并詩

醫生正意隱于醫、而最嗜詩酒、一日持此軸來曰、是靖節先生歸隱之圖也、裝横新成矣、上有楮隙、幸請書一語焉、凡見世之醫家者流、貯蓄古畫像而爲尊崇者、多羲農軒岐以及扁鵲也、蓋因景仰其原始也耶、靖節於醫何有哉、適讀先生元集、略獲其一二矣、世人唯言先生者、以爲晉宋之間詩酒之人也、淺乎哉知之、先生不作詩、唯寫其妙、先生不飲酒、唯逃其蹤、唯其非晉宋之人物、無懷氏之民也、葛天氏之民也、羲皇上世之人也、其詩曰、此中有眞意、欲辯已忘言、醫之於先生有餘師、意生是知之乎、生也愕爾曰、靖節何以通醫、曰生也非不知先生而已、讀軒岐之書、而未熟所謂上古天眞者也、夫是所謂上古、不在上古、而時時即上古也、喜怒之未發、一念之上古也、鷄鳴之孜孜、一日之上古也、肺腑之春、一年之上古也、大人之赤子、一生之上古也、眞在其中、欲辯忘言、眞豈可辨虖、道中有一眞、天下無二理、讀禮而知補陰之說者朱彥脩、而讀易得治瀉之法者黃子厚也、般帝論瞑眩藥、宋儒議承氣湯、偉矣、醫人醫國、元唯一眞矣、生也其讀軒岐書認先生之眞、讀先生之書認軒岐之眞、正看背看、左看右看、精義入神、有得則生亦無懷氏之民也、葛天氏之民也、羲皇上世之人也、始是軒岐之徒也、於醫有餘蘊虖、於戲身對畫前、神遊園中、則先生我奇文欣賞之友也、疑義與折之師也、時是涸陰沍寒之底、滿懷回春、春風吹物、物自欣欣、九變黃鸝囀、捲簾白鷺飛、會得則活潑潑地、不會得則唯是弄精魂、生也歸家、讀所謂天眞論者、必有靖節先生之眞、讀在其中來、叨叨贅語也、閑言也、抑以長也、

要見羲皇上世人、天眞論裏認其眞、解衣盤礴不描盡、非酒非詩有脚春、

講筵矜式（懸支同之需）

一經書講筵、以懇款蒙允容、三事相並、豈不思報恩謝也哉、（鎔經按三事見檀弓及晉語）

一若句讀義理有過誤、則相共審問明辨、而自他有益、退有後言私義者、是乃小人之意、必可愼焉、

一祝髮之徒者可衣卜德、蓄髮之人者可著袴肩絹、是亦我邦俗禮、百行之一也、

一雜話、戲笑、私語、睡眠、一切須二停止一、座次不レ論二貴賤老弱一、以二來時之先後一爲レ序、蓋免二當時之冗擾一也、

一師傳耳提口義等、與二膸倭訓一、於二志不レ篤者一、叨不レ可レ漏レ言矣、中人上下先聖之格言也、孟子所レ謂挾而問者、竝想焉、

五事之難

一天道、

二災難、

三因果、

四有二正直而貧賤者一、有二邪曲而富貴者一、

五惡人之榮、

一曰、夫天道者、理也、此理在レ天、未レ賦二於物一曰二天道一、此理具二於人心一、未レ應二於事一曰レ性、性亦理也、蓋仁義禮智之性、與二夫元亨利貞之天道一、異レ名而其實一也、凡人順レ理、則天道在二其中一、而天人如レ一者也、狥レ欲則人欲勝二其德一、而天是天、人是人也、是故君子用レ力、以知レ復二乎天命之實理一、小人肆レ欲、而不レ知レ近二乎禽獸一、中庸曰、致二中和一天地位焉、萬物育焉、實以二我之心一、而通二天地之心一、則範圍有レ道、而天地自レ我位焉、以二我之心一、而通二萬物之心一、則曲成有レ道、而萬物自レ我育焉、不二惟是子思一、子貢亦曰、夫子之文章可二得而聞一也、夫子之言性言三與二天道一不レ可二得而聞一也、是即理與二天道一所レ無レ二之徵也、今舉二此二說一、以對二言レ之者一也、

二曰、災難者、吉祥之對也、此其是非善惡小大得失亦皆如レ此也、有レ人二于此一將自レ室到レ堂、掛二于屋牆一之闔扇、偶然下而中二人之頭上一、是小災也、小災也者小變也、將二下レ堂出一レ門、措二于門上一之瓦石遽然轉來而傷二人之顚頂一、是大災也、大災也者大變也、此天之所レ爲歟、人之所レ爲歟、蓋天之所レ爲者我之所レ爲、我之所レ爲者天之所レ爲也、然此變未レ知下自二何處一來上者也、書曰、天道福レ善禍レ淫、降二災於君一、以彰二厥罪一、然則大小之災祥皆在二乎己一、而依然不レ離二其身一者也、如二夫天變一者亦災也、日月之食地震疾風等是也、蓋上天當二於此小變一而遂不レ失二其所一、孔子阨二於陳蔡之間一、而是亦小災、而遂盡二其正命一者也、夫天地之間、人物共有レ變有レ災、但變者將レ變而未レ終レ禍者也、災者旣

成而有レ迹者也、故君子不ニ防レ微而召一レ變、而巽辭以謝、君子過而知レ改、豈終ニ于禍一、歷代思堯舜禹湯文武周公至ニ孔顏子思孟子等一、有ニ小變一而無ニ大變一矣、其餘假ニ仁義一而好ニ覇業一者、與下用ニ夫權謀術數一以說レ人者上、皆遭ニ大變一、或被レ罪、或爲ニ天下之大戮一矣、此所レ謂自所レ召之效也、此以書墨揭レ之、

三曰、因果之字義未レ詳、說文因託也、緣也、又猶ニ根本一、果與レ菓同、凡有ニ木之根本一者、必結ニ其實一、因レ彼來レ此之謂也、譬有レ人ニ于此一、昨日盜ニ人之物一而今日遭レ害者、昨是因而今即果也、又列朝之士、以加ニ無禮於此一、則己亦以報ニ無禮於彼一、加ニ於人一因而見レ報ニ於人一果也、是出ニ乎爾一者反ニ乎爾一之義也乎、今論ニ其虛遠一、則過去因而現在是果也、既語ニ其淺近一、則動靜云爲日用語默之中、而有レ因有レ果、有レ善有レ惡、孰可レ不レ敬ニ畏之一哉、此借ニ孟子之辭一以私考レ之、未レ知ニ其可否一、

四曰、有ニ正直而貧賤者一、有ニ邪曲而富貴者一、凡正直者近ニ乎義一、故常知レ羞ニ於己一、而未レ知レ走ニ於利一、是以必不レ富矣、邪曲者溺ニ乎欲一、故日夜處ニ於汚穢一而放ニ於利一、是故必富矣、陽虎曰、爲レ富不レ仁矣、爲レ仁不レ富矣、孟軻氏曰、鷄鳴而起、孳孳爲レ善者、舜之徒也、雞鳴而起、孳孳爲レ利者、蹠之徒也、正直而依ニ於仁義一者、豈獨舜以爲レ聖也、邪曲而走ニ於利欲一者、豈惟蹠以爲レ賊也、是故邪曲者必富矣、正直者必不レ富矣、或曰、然則舜亦有ニ邪曲一乎、曰舜當ニ常天已定一、且得ニ氣之最通正一、以乘ニ乎時日吉星之運一、故聖而富矣、如ニ夫邪曲者一、亦幸乘ニ乎時日吉星之運一、而當ニ變天未レ定、且得ニ氣之偏塞一、故邪曲而富矣、一就ニ人事一以論レ之、一以ニ日月星辰之向背一而推レ之、

五曰、觀ニ惡人之顯榮一、莫レ大ニ乎夏桀殷紂一、此亦幸乘ニ乎年月吉星之運一、然偏塞之氣及邪惡之氣最重而正通之氣最輕、故有レ祿無レ德矣、譬油將レ消而火光益明也、桀紂將レ滅而顯榮太盛也、此陰陽消長、吉凶禍福、人事得失之定理也、以レ此推レ之、則天下善惡之人、尊卑大小俱然也、詳察ニ此五事之難一、皆出ニ乎賢聖之言外一、而其理甚精微也、今領　レ命以不レ得レ已而聊述ニ其大概一、必多ニ差誤一而已、實聖人

之罪人也、

惺窩先生文集卷之九

惺窩先生文集卷之十

手簡

簡朝鮮姜沆

邇日杳不レ聞二音耗一、薗鼎奈何、殘暑漸如下強弩之末勢不上レ穿二魯縞一、快哉快哉、天運循環若レ斯、人事亦有二窮而無一レ通乎、以レ是自寬、余久不レ抵二此地一、蓋或邵先生不出之四、或嵇中散不堪之七、因循而至レ今、翹乗照亮、即時有二閑暇一、則迓二清旆一否、頗慰二積變之懷一、何如何如、介兄婦翁、起居清勝否、逐一僉傳二卑忱一而以抒二索居之情一、謦折白、

問姜沆

赤松公介三予傳二言於足下一、其言曰、日本諸家言レ儒者、自レ古至レ今、唯傳二漢儒之學一、而未レ知二宋儒之理一、四百年來不レ能レ改二其舊習之弊一、却是二漢儒一非二宋儒一、寔可二憫笑一、蓋越犬之吠レ雪也、非二雪之不一レ清、以レ不レ見爲レ怪、蜀犬之吠レ日也、非二日之不一レ明、以レ不レ知爲レ異而已、予自レ幼無レ師、獨讀レ書、自謂漢唐儒者、不レ過二記誦詞章之間一、纔註二釋音訓一、標二題事

迹耳、決無聖學誠實之見識矣、唐唯有韓子之卓立、然非無失、若無宋儒、豈續聖學之絶緒哉、雖然日本闔國既如此、一人不得回狂瀾於既倒、返斜陽於己墜、悱悱憤憤、而獨抱瑟不吹竽、故赤松公今新書四書五經之經文、請予欲以宋儒之意加倭訓于字傍、以便後學、日本唱宋儒之義者、◎一本唱作譯義作解 以此冊為原本、嗚呼流水之知音、雖無子期、後世之知己、又有子雲乎、足下叙其事、證其實、跋冊後、是亦松公之素志、而予至幸也、足下計之、

荅姜沆

復姜員外足下、前日在伏見日枉芳洒、意旨懇懇、闊闊不措、然歸程忽々、不裁謝荅、人事不任意、似慢非慢、文獻通考留付香子、以傳足下、蓋為慰旅館無聊、殊方異域而、友尚少、況心友乎、書策中之古人獨非尚友哉、呵呵、今再惠手書、書中以言語不通為恨、至情至茲感佩不可言、雖然古云、目擊道存、言不盡意、意若有誠、則於物尚感通、人之至靈、豈待言哉、然則言之通亦可喜、不通亦不恨、想足下以為奈何、復次所諾之窩記勞大手、速疾以成、多可多可、唯以見晩為歉、餘有介信、必付以賜之、餘蘊竢再會、不一、

答東山長嘯子

忽披手牒、生意欣欣、如向榮之樹、渇心津津、如元亨之水、是非閣下陽德仁風、和煦之令然也哉、況荷一盂嘉穀之惠乎、寒陋之庖廚、於此得豐贍矣、屠門之大嚼、人之恒情也、更嘗之甘之滋枯腸、閑中一快也、就審閫門稍康、復得無妄之喜、前日醫意安話次及茲、今知事實、千金珍重、

答林秀才代田玄之

朔日所貺之手柬、十數日之後落手裏、裁謝遲怠莫為怪、於是釁浴至於三、開闔至於數、琅琅璨璨、蔀韡生光陣、為慰為幸矣、余於足下、始而慕風采也、望梅而遙止渇、埃中而聆餘論也、嚼蔗而漸入佳境、今而問以言、責以善、忽如飲眩藥、而狂愚之病癖、將有少瘳也耶、會遇一回面未熟情既親、不以余無似、欲置責言之地、豈不為慰乎、不為幸乎、顧我孑々然無友、孤陋寡聞、其故如何、方今世降俗薄、而物論不公、呫

呫然動二其喙一、高者入二空虛一、卑者入二功利一、有二隋綜者一、有二騁軏者一、有二突梯卷攣者一、故交二乎人一者、炎而附、寒而棄、朝而眞、暮而僞、甚者僅有レ間、則揮二舌上之龍泉一、而刺二人於背後一、不レ見レ血、悲夫矣、夫是所二以無レ友寡レ聞也、傳曰、人之大倫是五、然亦朋友之於二人倫一、其勢若レ輕而所レ係甚重、其分若レ疎而所レ關至親、其名小、而所レ識甚大也、是足下生平素蘊、而所二以問レ言責一レ善而已矣、自レ今得二講磨之力、濡染之益一、則不レ可レ謂レ無レ友、不レ可レ謂レ寡レ聞、不レ可レ謂レ無二公論一、然則余雖二不敏一、亦不下剖二露肝膓一忠告上哉、今見二來書一、楚則失矣、齊亦未レ爲レ得也、請述焉、來書所謂儒服之製、非レ不レ爲レ榮二足下之稱許一、雖レ然他人見レ之、則彼指議曰、足下悅レ人以二溢美之言一、余受レ人以二不虞之譽一、然則彼此無レ益而却有レ害、且夫儒服之製、以レ余爲二濫觴一者亦奚爲、本邦居二東海之表太陽之地一、朝暾晨霞之所二輝煥一、洪濤層瀾之所二蕩潏一、其淸明純粹之氣、鍾以成二人才一、故昔氣運隆盛之日、文物偉器、與二中華一抗衡、諸儒居二大學寮一者、砥レ節礪レ行、孜孜不レ倦、屹屹不レ怠、釋奠之禮、試科之制、昭二昭乎菅右相遺錄一、當二此時一、若諸儒不レ服二不服一、不レ行二儒行一、不レ講二儒禮一者、何以妄稱レ儒哉、抑亦儒レ名而墨レ行乎、墨レ名而儒レ行乎、嗚呼猿而服二周公之服一、鶴而乘二大夫之軒一、余第恐其服不レ稱二其身一、何暇論二他衣服一哉、若又禮義不レ誤、何憂二人言一、來書所レ謂排レ佛之言、更不レ待レ勞二頰舌一、唐有二傳大士韓吏部一、宋有二歐陽子一、餘子不レ可二勝計一焉、程子已往諸儒先皆有二成說一、足下之所レ講、余無二斯意一哉、雖レ然上有二治統之君一、下有二道統之師一、則渠何妨レ我、若其無則奈レ渠何、且如レ余者、堅白未レ足而妄試二磨涅一、還爲二渠所一レ議、可レ愧莫レ甚レ焉、唯自警自勤而已、來書又有二一二事請揚搉言之云云一、其一件者朱陸辨也、足下所レ辨者、諸彥排レ陸之緒餘也、我亦閱焉、如二朱夫子一者、繼二往聖一、開二來學一得二道統之傳一者也、後生區區置二異論一哉、如二陸文安一者、有二信而最學レ之者一、有二疑而未レ決レ之者一、有二排而斥レ之者一、信者排者置不レ論焉、以二其疑者一言レ之、在二同時一者、張敬夫、呂伯恭、於二紫陽一爲二丈人行一、而共發二揮我道一爲二己任一者也、然亦以二文安一不レ爲二全非一、在二有元一者、北有二許文正一、南有二吳文淸一、又共發二揮我道一爲二己任一、如二文淸一、亦

於二朱陸一左レ之右レ之未二偏執一、在二皇明一者、儒門一代互譁、皆有二寃レ陸之疑一、故余亦疑二其所レ疑而已、非二信而學一、唯見二羅整庵、霍渭厓、陳淸瀾等、黨同伐異排陸之諸篇一、未レ見二金谿家乘文集、語錄年譜、及門人故舊之手錄一、故曰非二敢信者一、疑而未レ決者、足下辨レ陸、不レ遺二餘力一、不レ顧二譏一、不二回護一、想是於二兩家之學一、窮二閫奧一、抽二扃鑰一、見地堅定而若レ斷矣、余姑以二疑者一論レ之、則鹽梅相濟、瑕瑜不レ掩、亦復有二此理一、微箕比干周武伯夷所レ爲各如レ不レ同、而所レ欲亦如レ不レ異、故仲尼兼稱幷取、不二偏廢一、卷二夫風雩日省一、父子異二氣象一、異中有レ同、故元氣周流之先聖、與二其志一傳二其道一、坐春門雪之伯叔、異二天資一、異中有レ同、故光風霽月之先生、授二其圖一、接二其統一、同氣尙然、況他人哉、由レ是推レ之、紫陽質篤實而好二邃密一、後學不レ免レ有二支離之弊一、金谿質高明而好二簡易一、後學不レ免レ有二怪誕之弊一、是爲レ異者也、人見二其異一、不レ見二其同一、同者何哉、同是二堯舜一、同非二桀紂一、同尊二孔孟一、同排二釋老一、同天理爲レ公、同人欲爲レ私、然則如何、學者各以レ心正レ之、以レ身體レ之、優柔饜飫、圓機流轉、一旦豁然貫通、則同歟異歟、非二見聞之智一、而必自知然後已矣、嘗聞有下因二周程張朱之言一、譏二謗韓子一者上、敬軒薛氏論曰、在二周程張朱一誠可也、在二他人一不レ免下不レ識二己量一之罪上、至哉昌言、余所レ懼又在レ茲矣、其二件者大學綱領也、前回余雖二卒然道著一、而復非レ無レ所レ承、足下今所レ言、余先所レ言、衡決不レ合何哉、余偶口囁嚅、而言不レ盡レ意歟、抑亦足下偶耳聽熒而意不レ曉レ言歟、必竢二他日面布一、於戲鑿陰之愢、燈雨之牀、我往叩レ之乎、足下來訂レ之乎、狂愚之言、叨叨至レ茲、病癖未レ瘳也、倘莫レ恪二瞑眩之藥一、幸之又幸、蔑二以加一焉、不宣、

慶長甲辰三月十有二日　田玄之白

與林道春甲辰閏八月二十六日

前回不虞之會、明快不レ可レ言、假三言於二賀氏一曉二此意一、以達否、所レ諾之深衣一領、道服一領、備二製法一、深衣者少雜二國服之樣一、蓋取二一時之便一也、若從二皇明之制一、則短二其袖一長二其裳一可也、復所レ借之知新日錄、大學論語兩部三冊、還納焉、庸孟附二后信一、終二電矚一者、魚與二熊掌一、而又所レ欲也、

又

手書一再周覽、不レ異二對語一、深衣製了珍重、道服奈

何、知新日錄庸孟三冊落二手裏一、不レ日還納耳、且又佳招之一件、竢二賀氏郎指呼一、搖落秋既盡、風月之交友、豈無レ情哉、手簡標二大儒之二字一、昔柳柳州稱二退之一、以二儒者韓退之一、時論非レ無レ之、如何足下每每對話手書共以語意失二平易一、恐年壯銳英之氣象、未レ消二圭角一也耶、思焉、

又同年十月十日

昨應二佳招一、竟日治具豐縟、却慙二素餐之詩一、且如二不穀一者、榮肚藜腸而足矣、何要二膏粱一哉、雖レ然厚意亦可レ見、多謝多謝、重陽之賀啓、格律切密、可レ喜矣、第恐推奬頗過當、恧縮可レ堪乎、涑水先生以下呉處厚負二先生之大拜一之啓上爲下稱譽不上レ克レ當、而即時封還、處厚赧愓、再下二分疎言一、無二半語虛飾一、然後受焉、彼稱二其實一尙然、况於レ余哉、於乎方二風俗淵濁之時一、子之稟賦較異也、天意其亦有レ在也耶、自嗇自重、莫二暴棄一焉、故每二晤對一、無レ愧二枝辭蔓說一、傾倒無二餘蘊一、蓋期二望子之玉成一而已、余言者所謂他山之石也、令弟初接二眉宇一、亦以レ是傳レ之幸幸、

又同年十月二日

因二賀氏一而所レ達之手書、至レ今周覽、就審二日新之盛業一、可レ尙可レ嘉矣、昨日賀氏再赴二大坂一、是否、以レ是無レ由二于晤言一、人尋聚散、元不レ可レ無、而人情眷戀亦不レ可レ遣矣、分睽已還、舊痾稍發、藥爐側呆々過二旦暮一、前日手錄一通、通啓一首、閑闊數番、以慰二目前一而已、所レ索而批評隨二子之請一、則余非二其人一也、牢辭則拂二戾子之情一、莫猶因循、竟不レ獲レ止、粗呈二管窺一、不レ知子之意何如、蓋老嫗非二解レ詩者一、而白香山作レ詩常令二彼解一レ之、想是當下夫無レ所二蔽塞一時上、愚夫愚婦之心、即聖賢之心、嘗無二二心一、是則所謂秉レ彜之定理又在レ茲、老嫗非二解レ詩者一也、子今於レ余也、白氏之老嫗而已、豈可下以レ非二其人一牢辭上哉、然如二其蔽塞一何、子其子細擇焉、又所二表出一經語、不レ舍二晝夜一、體究云々、必有レ所レ得乎、此等經語、浩浩皆然、奚在二數件一、雖レ然先哲尙因二資稟之所一レ近、點二出數字一示レ人爲二警策一、各得二入頭處一、所レ謂大小程子之敬、朱子之窮理、金谿之易簡、陽明之良知等也、余所二以告一レ子者、欲三賴レ子而發二余蒙一而已、以二子之所一レ得幸示レ之、病餘涉筆枯戰、以竢二他日一、不悉、

又

肖文遺稟達于座右云々、好了好了、蓋聞此策非足下之所有、借他、以又借余、至恵亦不可逃焉、還納速疾以是而已、足下許余以倍十行倶下者、何哉、縱雖倍十行倶下、非余所希望而謗說、況余之駑下之質、寧有公等駿發之氣哉、讀書不求甚解、古人既有之、其意又何如矣、賀豐牧音息迢迢忽々、已靡行旆于大坂乎、離索不克無懐無爲矣、手啓之淨書、展翫洗眼昏、鄙謝粗具前書、今不得再瀆、陸舟之起草、留在案頭、是亦脱稾藻飾、則坳堂之芥、化作龍驤之華歟、呵呵、足下所告、屬者讀書終日矣、於乎足下涵濡體認、雋永可想焉、足下自言與視非禮聽非禮不同、其不同之處、實其解書之深切著明、而視聽所當視聽者、然却言不知讀書而解之、又言未知所當視聽、是足下所以善誘人者也耶、余又豈善誘足下哉、慙々、夫是余所以知足下之體認涵濡之雋永也、非耶、來示聖像、不覺起敬悚栗、卷以還焉、贊詞不知所以覼縷、古人以鄉黨一篇、爲畫出聖人、贊詞亦軼焉歟、然足下之盛意尙俟晤語、春秋大全應所諾、以借示之而已、日已迫昏、草草、亮恕、

又

手簡即今到達矣、蓋以老赤脚不在也、賴生之介紹、而今日始斟酌東沼乎流水之中、假風之飲可笑矣、流水不可留、即速送去、冊數如舊呵呵、彼浮屠之先輩、一時文物之盛、記覽之博、富贍之才、固有在矣、陸海潘江又流水之謂乎、豈可蔑視也哉、然以蠡測焉、往往論理之不粹也、下字之不貼實也、其文之氣之與思、客者浮者、亦有不可掩、生之隻眼瞭焉之占又何如、一件明日之會、辭謝具前書、不以羸憊之未蘇也、非虛慢也、得蘇息一日、不可待折簡之呼、一件國朝綱目、生之勇爲、實可嘉尙、所謂瑤琴空匣至今日龍門之遺歌、天意有俟于生乎、勸之、一件達德綱領未脱稾、且此編雖類聚古人之成說而已、曾不著一私言乎其間、是恐其僭踰也、然亦俟他日、愚卑棄懶于涉筆而作書、無復侍叢之可代此勞者、故雖因昵交密友、經年或不投書、知者不罪之、不知者以無禮不恭彈斥、生其如何、預告報以至此、曲乞允容、肅子磬折、

又同年十二月四日

昨之昨、一介一書、頗慰ニ多日之鄙吝一、爾來不レ及レ敲ニ書室一、以ニ天寒途泥之不レ可レ當ニ病體一也、蓋在ニ亮恕一矣、欲ニ招以話一、則百拙之鳩未レ能レ營レ巢、且就ニ葭莩之好一儼ニ偏室一、彼厭ニ人事往復之雜遝一、又世之常情而已、余於レ子豈慙ニ圭蓽之陋一哉、凍餒之極、轉ニ溝壑一者、尙無ニ自致一、則不レ足ニ愧屈一、況其末哉、幸卜ニ閒散一弓之地一、至ニ春暖一、拾ニ瓦礫一、披ニ榛荊一、結ニ小草堂一、寓ニ筆硯一、則必呼レ子而知ニ寒士氷檗之態一、是亦非ニ子之知一レ命、學中之一事也耶、於レ是彼此握レ手談笑、一噱以償ニ比來不接之債一乎、若人事乖戾、墮ニ烏有一亦未レ可レ知焉、到底委ニ順彼蒼一而已、他後莫レ謂レ食レ言呵呵、又子信之說竢ニ面布一、何有ニ宿諾一乎、

又同年十二月二十二日

歲云暮、朱門白屋、官事私事、紛紛冗冗、國俗之常也、如ニ散焉閑人一、當ニ此時一通ニ問訊一、以ニ我無一レ事妨ニ他有一レ事、此是儸焉、非レ疎非レ怠矣、不レ意拜ニ烏銀之包、蟻綠之尊之嘉惠一、一爐三杯、且闔且傾、和氣騰騰先得レ春、感佩深、故事一卷二條、議論覈實可レ見焉、他日榮三膺乎ニ國史之選一者、自レ是兆矣、祝祝、前日賀郎之書問延及レ余、所レ說吾子之事也、彼生質元非ニ今人之比一、每每欲下揚ニ人之善一、成中人之美上、以爲吾子負ニ不世之望一、不レ宜ニ韜晦一、古人以ニ名譽不一レ聞、歸ニ過於朋友一、蓋彼責レ余以レ是也、彼徒知三吾子之玉之美與ニ錦之彩一、而不レ知下余之石之頑與ニ魚之爛一、而所ニ以攻一レ之、所ニ以濯一レ之之不上レ能レ如ニ石與一レ魚也、然彼於ニ吾子一不レ可レ不レ謂レ敎、於レ余不レ可レ不レ謂レ忠、最足レ泚下今世輕薄子之蔽ニ人之善一、競ニ己之長一、猶爲レ歉推ニ之於陷穽一、而後下レ石者之顙上也、奈何奈何、吾子之金蘭簿上有ニ幾人一哉、是明人之所三以著ニ聲承集一乎、如レ余孤陋歲晚之心事唯在レ此、故不レ覺信レ筆訴ニ吾子一而已吁、春來燈前勝集、先賡ニ此話一、忽忽白、史論二篇暫留ニ于案頭一、慰ニ歲晏之懷一、

又乙巳正月十二日

賀歲之手牘、添以ニ烏糖一、依ニ足下之悃欵一、深增ニ拙鄙之逋慢一、慙悚慙悚、明日十三日、叩ニ書室一以面謝而已、貞順在ニ西山一、順知尙遠在ニ西播一未レ來、所レ諾之期以ニ上元之頃一、巨卿之信未レ可レ占焉、且又所レ告之朝鮮講和使、一儒一僧、爲レ正爲レ副、以レ僧者、胡元世祖以ニ寧一山一誘ニ導我一者也、蓋以ニ我所レ

好遺二他愚弄一者、古今然矣、不レ知又我墮二于術中一乎、奈何奈何、然亦天下者、有二天下之人一、非二散焉者之所一レ議、思レ之思レ之、欲レ話者、如レ山如レ海、如二細雨一如二密霧一、幷付二明日一、再拜、

又乙巳正月十四日

昨日終日相話、春初之一快也、多謝有レ餘、困知記全貳策還焉、朝鮮信使若得二好先容一、則相共携レ手行以見レ之否、如何、卜二風日暄美一告焉、任二足下之指呼一、薄暮不二羅覼一、

又同年正月二十日

昨昨讀書錄遺忘而不レ借レ之、慙慙、即今續錄三冊備二歷覽一、他卷在二櫃中一未レ得レ出レ之、先以二座右之所一レ有、附二老奚一、它日終レ編而已、前日整菴記中、余所レ議之數條、暗三合于二天命圖說一者有レ在、如何、又廣胖之二字、姜沆之所レ命、非レ所二以自稱一、昨木者少日之別號、而非二今日之意一、以二惺窩一表レ之而已、故告焉、

惺窩先生文集卷之十

惺窩先生文集卷之十一

手簡

與林道春乙巳正月二十三日

即今讀書錄六冊、前況三冊、合部九冊、備二歷覽一、日用體認、至祝至祝、延平問荅嘗染レ指否、紫陽師弟授受所二自來一、學者不レ可レ不レ讀焉、有二其書一乎、若無レ之則借二余之所一レ有而已、吾子尙得二春秋之富一者也、勉レ旃勉レ旃、余所レ冀在レ茲矣、細雨稍催レ花、詩興何如、然亦古人所レ謂山林園圃之花、在二經史之中一者、以レ彼代レ之哉、思レ焉、

又

敬軒箚記全冊還來、好好、延平遺錄全二冊、附二了此老一、平生擧二言洒落之二字一、蓋深慕二于濂溪一而有レ味二乎此一者乎、足下染レ指爲二何如一、藤房小傳、敘事犛亮、贊辭簡潔、至敬至敬、不レ怠則復レ古之功可レ竢焉、至祝至祝、少焉稽レ之慰二目前一、惠感蔑レ堪矣、朝鮮人筆語惠來、快哉、雖レ然目擊道存、變在二機先一、彼不レ足レ容レ言、頗爲二足下一惜レ之、豈無下不三語上二失言一之戒上乎

哉、思之思之、或者語余曰、彼二士共無識凡庸、非可奉使命者、想非正使乎、以是余亦不欲就見、竟罷了、如何、來月一二日之招、靑蚨至厚、佳期未決、附嗣音、然路遠脚頑、每每憚之、可笑、昏睡之餘、不知所以落筆、亮照、狼藉狼藉、

又

延平遺錄二冊讀了、幸幸、非足下之幸、而余之幸也、然非余之幸而已、闔國之幸也、萬人之幸、萬世之幸也、蓋足下體認涵濡以至洒落也、若不然則今日之幸者、他日之不幸、而闔國萬人萬世之不幸亦在于此、非予與足下之幸不幸而已、思焉、雖然靜坐未發之中、一變入釋、先儒之明誠可見、誠敬之工夫、徹上徹下、洒落在其中歟、魯齋全書二冊、心法一冊、二編大較一書也、其議論豈外程朱哉、以其出處之行實見、則其人可知焉、其人可敬焉、今日讀書、亦得入頭之處、然后見其議論之誠實、讀者亦得踐履之實乎、書自書、我自我、何益哉、許先生在胡元戰爭之始藉苦之際、立志如此、成就如此、出處如此、是其大丈夫哉、有為者亦若此而已、又明日不雨、則可執謁乎、如何、

又

左逸終精覽、珍重、一篇之品評、吾邦又不為無一鳳洲、文已然、道學豈不然乎、況道外無文、文外無道、足下立志已如此、彼鳳洲者不足多焉、勉之、文宗初卷附奚、前後遍閱了、至佳至佳、前次所告佛書、非今日急務、竢嗣音、異書者、先哲所戒、然亦知彼崖略、則不墮其術中、又學者可知者、有在乎、如何、前日叢林公論中之言、論儒釋之異、見頭腦哉、凡見異書、莫見異中之同處、見同中之異處、然後知異之實對、（◎一本無對字）然先於氣象全迥別、是能見者也、莫必問言談之同異如何、字說未起草、至春懶墮深加、自決為一廢人、可憐矣、

又

文宗首卷還納、說苑全二冊附蒼頭、信國正氣歌、彼之烈不及論焉、是亦宋室道學諸君子所鼓舞之遺歌而已、思之思之、昨獨坐寥寥、適讀疊山謝公與程雪樓魏參政之二書、不覺掩卷涕泣、古人讀古人之文云、一字一涕、愚於二書、一字萬涕、是何意哉、義氣無古今遠近間者可觀、

又

說苑二冊達二几前一、程墨三及第文二冊、李滄溟三策、共函緘以還レ之、見二未レ見之書一、悉出二厚意一、甚慰、前次所レ借之天命圖一卷、其時貞順者、爲二他編之校讐一持去、至レ今未レ有二信息一、緩慢之罪於レ予不レ可レ免レ之、然足下豈不レ知レ予者哉、亮恕、然亦不レ可下恃二足下之知一而又增中其慢上、今日齋二一束一與レ彼而督責焉、且待二須臾一好矣、

又同年二月二十七日

天命圖還了、遲怠之罪前書吐露、曲在二亮照一、屬者推候如何、情親而蹤濶、不レ克レ無二遺憾一、以レ予推二足下一、又可レ知也、一件仄聆、於二將軍面前一左右三四輩之嬖幸以二足下講學之事一、飾以爲二貝錦一、彼小人者古今然矣、雖レ不レ足二介懷一、而微服過レ宋、人事亦不レ可二忽諸一、是此人事即天理、下學即上達、又足下所レ可レ講レ之也、他山之石、彼既碌碌、足下之玉成之日亦在レ今歟、彼之所二以禍一足下一者、予之所三以祝二足下一者、亦在レ茲矣、今日適快晴、以二此老奚一爲二前導一、而迂二玉趾于半塗之一僻地一、竢レ予、予亦往以下所二傳聞一之事上告焉、故忽忽馳二老奚半塗之地一、付二奚之口實一、蓋予往二于足下一而不可、足下來二于予一亦不可也、其以下避二人事一故上如レ此、何如何如、凡交際、于レ吉于レ凶、于レ禍于レ福、于レ善于レ惡、不レ可レ不二以告以賀以弔、共憂共喜共謀一、若其不レ然者、市交也、面友也、非レ義非レ心、又何如何如、

又同年二月二十七日

宋氏文一冊得二一見一、頗擊レ蒙、劉子一冊備二雅覽一、此是拙所レ有也、莫レ憚二稽留一、東端知レ命之一言、於レ予首肯、予昨書中玉成之言在レ茲、若夫不レ然、所レ讀之書何書、所レ學之事何事、思レ焉、動レ心忍レ性、彼其爲二足下之地一者也、勉レ旃、且又拜叩、待二他日一可二陳說一而已、

又

發東審二來惠一、意旨甚厚、副以二一尊美酒、菓殽一貫、團餅廿枚一、惠情彌益、多謝多謝、昨日自二南城一來者云、一件幕府曾無二嚴責之意一、唯一青蠅之營營而已、投二畀豺虎一尙有レ餘、詩人謂二之何如一、李于鱗文歸二足下之掌握一否、珍重、附二嗣音一、再覽於レ予爲レ幸矣、罄折白、公穀若不二永得一、則爲二足下一就レ他借否、公羊正義在二城氏和泉守一、穀梁者在二長嘯一、城

泉今奉三侍幕府于二伏見一、

又

上巳之賀啓、奇麗拭レ目、至珍至珍、以レ面謝而已、于鱗文不レ落二足下之手一云々、在二足下一則欲レ遂二再見一、在レ他則不レ要レ借焉、莫レ勞二搜索一、戰國策他日借以借レ之耳、莫レ訝レ遲、宋太史文還焉、揚子法言附二此奚一以借レ之、予三二日來受二時氣之侵一、震艮不豫、怜恕、彼此期二他日一、草草布字、再拜白、

又

昨劉子還來、今朝法言亦還レ之、拙恙未レ得二全効一、無聊中馳二日月一、花謝綠暗、春稍將レ夏、一元之流行不レ已者如レ此、自家體認奈何、上巳啓吟誦慰二目前一、足下今所二慕效一四六、唐歟宋歟、抑亦元歟、所レ有之四六編幾在、嘗見二宋元之播芳一乎、若未則宋播芳者予所有也、元播芳未レ有、足下有レ之、則見レ借否、又前日所レ還宋濂文中、諸子辨、孔子生卒辨二篇、命二侍者一謄書以惠、惠莫レ大レ焉、予右手痲木、不レ得二涉筆一、故如レ斯常憚レ作レ書、欹欹斜斜不レ堪レ上二人眼一、正二于筆一敬二于字一者古人之所レ誡、慙慙百事、自甘レ爲二一廢人一、實天地之間之罪人也、戰國策未レ來、來則速致二之于足下一耳、

又

宋播芳四冊還了、大抵四六文辭等、雖レ非下志二道學一者之所上レ必、古今之變亦因レ焉可レ知、非二翫レ物喪一レ志、如何、鳳洲文、今藏二他之書櫃一、他日騁レ奚致二几前一耳、凡余勸二讀書於二於足下一者、必非レ爲二足下一、見レ善喜、見レ惡憂者、區區之愚僻也、百事灰冷、唯此一事、未レ能二忘了一、招二時好之笑一者在レ玆、爾來舊病又發、氣息奄奄、臥內涉筆、亮照、

又

杳缺二書問一、忽枉二手牘一、云審二茵匕之清佳一、祝祝、宋文粹之鈔書數紙煩二侍書者一、多謝多謝、穀梁起レ筆知二獲麟之不一レ日、句讀朱點足下下レ手否、若不レ然他日再勞二校讎一也耶、元本者、東山子之所二愛護一也、戒二傭書家小兒輩之墨汚、老鼠子之吃嚼一而可也、顏氏之護書之訓有レ在焉、公羊彼既許二納余之請一、隨レ來達二座下一而已矣、

又

公羊傳六冊遺レ之、此疏等一覽而後、宋儒之高明、◎按後下恐脫知字誠吾道之日月也、漢唐訓詁之儒、僅釋二一二句一

費百千萬言、然淺近如此、如何、然亦名物度數、不可不一校者歟、思之、此疏、公羊之語下之疏、何休注下之疏、錯雜混淆、行無高低、字無細大、見者費眼力乎、如何、今傳注分高低、解疏兩行細字、而瞭瞭乎、如何、

又

昨來過、酒殺之惠、每每出不意、還而慙不分矣、澄弟適鼎來、然亦祇待欠了、寔如周黨之過閔子、可笑矣、且因城氏之先容、執謁于幕府云々、至賀至賀、面前二三之嬖幸、事事言言、密裡之砒、機中之穽、不可容易、思之計之、有君子之德、而無君子之才、則遭爲小人擢敗、習坎設險之聖訓審哉、奇正編二冊附笈中、此冊子、非余之有、曲應請、莫爲他漏泄而好矣、七八日之招、懃懃不可言、然且待余之再告之期、草草何如、

又

萬首和歌十一冊還焉、春秋大全一十二冊借焉、邇日雅候如何、春秋三傳已歸手裏、經旨精一受用如何、古人讀春秋於羅浮、羅浮者、是不在羅浮、而在足下、明牕淨几之上得古人羅浮之意、則隨處有羅浮而已、一笑一笑、足下讀春秋、日用得羅浮之意旨、則告我哉、我亦同此樂耳、不宣草狀、

又

再騁小奚、手書所言、今已得其意、今晨春秋愚書、無故還來　甚訝之、不得止暫留之耳、奴輩往住有如此者、莫深罪焉、如所言吾人不敬之廢、至此而已、自一提醒、則是亦日用學中之一事也、思之、拙每有此事、自警自懼、小奴小婢、共以恕其罪、則於予萬幸、若不然、則予再就足下謝之耳　蒼皇不縷、勸善書二冊、一覽之后還之耳、至惠至惠、再拜、

又

白氏新樂府齎來、嘉惠鄭重、蓋樂府而已而止乎、又白氏文全部有之乎、復誰某氏筆也哉、次卷竢他日、月翁與桃源手柬、適允次倉皇、后來備惠眼、邇日不面、如井之無鹿盧、爲之如何、草草不悉、

又

新樂府一卷還之、而以竢次之冊、何如、小堂全已附匠人了、余就閑矣、毋勞遐想、桃源手書備

一覽、彼浮屠亦已知周程張朱之諸老先生、如何其所自注、以王韓孔疏並取相接哉、因想沿襲之蔽、俄相革之難如此、吾人之舊習可懼亦如此、歷錄之字義、粗貼片紙、見此字解、則漢唐詁訓之學、亦不可不一涉獵者也、其器物名數典刑、雖曰程朱、依焉而不改者夥矣、讓焉而不注者數矣、所謂十三經疏云者、魚亦所欲也耶、梅潤入書、若時保嗇、

又

仙老遺牘采納了、爲人須知一箴、未見之書也、暫留几上、厚意曼曼、如來示酷暑如酷吏、不可奈之、隆樓傑閣尚然、况圭蓽之陋哉、余附經營於匠氏就閣矣、明日先郎土木之事云々、明日之后、余全然而無事、尚竢他后之信、而報心曲而已矣、

又

今日聽菊亭職原之講云々、周官官制孰興彼此、再爲余話之否、以余見之、吾邦今日未知有官職之制、讀者聽者、蓋知職之有原、則奚有劉覆瓿之責柑者之嘆也哉、吁吁、樂府一卷再入手、蓋爲或者也、

又

昨昨不意之閑話、頗洗煩襟、六條參議傳語、必可相達而已、陽明詩一冊、丘濬詩一冊、暫留之、陽明文錄在僧三要書笈、先是借以瞥爾過了、實如飛鳥之過目、而不可躡迹、此冊亦文錄中之所錄乎、抑又別錄乎否、丘氏者、編纂大學衍義補遺者乎、如何、所評品之題文、龜思縈望在此矣、不日寄來、則鎰金非重、小夜小話、速落手、蓋遼東之白豕歟、慚慚、又急病讓夷之抄書之片紙記取了、返之來以余室中無國語也、

又

星夕之三章、吟翫不措、如予一篇亦無之、懶廢可憐生、前日之高文三首、有小冗之事、未能子細看、卽今乞還璧、且隨其命、重借之寫之而已、心曲附他日之拜晤、陽明詩、洒落可愛、丘氏篤實可見、前日之冊、共非全冊、買之無益乎、且待全部之來齎乎、大學衍義并補遺、學者尤所可講讀之書也、足下亦見之否、治國平天下之至要盡于此、明日大學之講、可喜可敬、所恨者不在其席次、昨日執謁于幕府、府內無奇事否、與賀豐

一書、留以待便介、習字之訓可并見、若取一則取雙峰歟、并俟話欄、早早擲毫、再拜、

又

歲月荏苒、巧夕瞥爾過了、中秋稍近、又欲聽足下新吟、新吟與月相并、期望有在矣、于明子明明、眄睞之招、厚德不可謦言、然亦圭蓽之居、將稍畢功、故梓人責以土價、欲償其債、俗事冗冗不得止暫待事了、可笑焉、順知未來 想假裝在本月月尾乎、途路之脩、炎暍之酷、豈無父母之情乎哉、又有人子之情而已、倭書一冊許借見、以足下之言、爲予謝鑑三、更俟嗣音、懼懼白、

又

手牘欣欣 明日明朗未可應佳招、佳月即中秋、中秋必非中秋、思之思之、冥冥之雨、有老杜之嘆而無老杜之詩、彌可歎者也、憐察、澄弟無恙哉、寄聲爲幸、

又

重午令辰、如時保養、就中手柬酒瓶一雙雙肴、惠意出望外、悃誠之至、謝焉有餘、且又漂海錄全三冊備博觀、此等之書非急務、雖然處事變、窮理盡性亦在于此、豈不爲學者之一助乎哉、因告前日小學之書、第五倫爲私之一條、鑑三所持之冊爲誤字、醉裏推測之辨如何、凡聖賢之餘論者、非屆酒曼衍之間可量者、不敬之甚、自悔自愧、誤己誤人、實名敎之中之罪人也、并附面布、頓首、

又

爾來音容疎濶、芒乎如隔生、蓋足下之多公務、與拙嬾慶甚而已、無奈之何、就中洞院左府所著名目鈔云者、足下所有三萬軸之牙籤有之否、拙所有之冊、賀豐假而不返、今在東武數百里之地、雖於拙無用、長嘯子就拙借之、因及于此、復聞 順德天子所述之禁秘鈔、足下有好本、勝熊說向長嘯、然否、長嘯就拙借之、拙以一本與焉、長嘯云、亥豕魯魚難分別、故以足下所有之本欲校正之、如何、古人曰、校書如風葉塵埃、隨掃隨有、實哉此言、非有好書之志不及此、足下爲何如、

又

昨日情話、洗滌煩襟、如飲一杯之降氣湯、快哉快哉、眄睞亦不少、多可多可、名曰鈔、長嘯子之所欲

也、若二勝熊所レ藏之冊一、則彼已可レ達二長嘯一何如、禁秘鈔、拙早以二一通一借二長嘯一、足下之本、好古本則可也、不レ然則與二拙所一借不レ可レ殊、煩二足下一無レ益歟、并附二后信一、不二覼縷一、

又

早早使到、勤厚之至、曲禮六冊即進二呈之一、此書之編次　註釋精粹無二遺憾一、故周儀之二書、渴心生レ埃、望梅在レ此、萬一一年之間得レ看、則亦不レ爲二虛生一、雖レ然如レ拙者、一蠹魚而已、於レ書於レ人於レ世、共無レ益而有レ害、所レ望者在二足下一也、思レ焉、官暇迂二玉趾一、則共二順子一商二量此事一、順也頗篤厚、雖レ未レ見二辭章華藻一、於二義理上一、有二些工夫一、故有二些見之見一乎、一見否、不レ有レ益二于足下一、即必有レ益二于順一也矣、

又

因二惠書一就審二雅履裕勝一、甚慰甚慰、曲禮全經之外、集二冊、附二歸使一、想是稍得三全終二寫功一否哉、吾子讀二此書一得二日新之所一レ得、則請敎來、如何如何、書史全一、補闕一、亦復備二博洽一、此等之書、雖レ若レ無レ益二於正學一、又遊藝之一、而藝之與レ德、禮書暫分言レ之、然亦古人以爲レ非二二途一、其所二以感一レ之者、元其所二以寂一者也耶、豈二途哉、若又爲レ二、則世俗之溺レ藝、爭レ短競レ長、爭レ能求レ勝之謂、而非二禮書之藝一、非二論語之游一者、謂二之溺一、謂二之曲一、偶足レ害レ德、卑意以爲レ然、吾子別有レ見則示來、甚慰二霖雨中之悶懷一、爲レ賜莫レ大レ焉　彼與桑喪飯之情、足レ比レ之哉、知生不レ見久矣　想徙二移居于他處一歟、與一亦然也、困二頓川役一、以順二父命一云、二子若來、必傳二足下悃悃之言一矣、

惺窩先生文集卷之十一

惺窩先生文集卷之十二

手簡

與二林道春一

手牘再三、殷勤鄭重、謝レ之有レ餘、况復餅酒枯魚之惠乎哉、前日書史大小二冊達二几前一、爾來侵二染喝氣一、匕筯不レ佳、以至レ今不レ裁二復書一、有二赤誠一墮二烏有一、緩慢有レ慙　唯賴二足下之知一レ我而已、三二日間閱二國策一云云、若得二知新之見一則示來、策士之人品、唯有二魯連一、然尙約矢之書、不レ可レ爲二訓之說一、眞文忠公之賢、而明据二鮑氏一爲レ斷、無レ不レ惜二魯子一、於レ此吳氏再分踈爲レ不レ然　足下以爲二何如一、臥內草草馳レ筆不レ罄、委曲附二他日之話次一、再拜、

又

手書惘欵扇二煩敲一、况副以二二十顆之甜瓜一、甚感慰、傳說天降之據、書以賜焉、今昏了、閑閑地讀レ之擊レ蒙而已、是亦重賜、前次附二歸奴一、以二古文珠璣十一冊一、篇篇璨璨、炳燿圭華、珠璣非二珠璣一、而古文之爲二珠璣一、眞珠璣也、快哉快哉、我無二十五城一、何以謝焉、曲禮勿レ恐二遲緩一、明律今遣二八冊一、先レ是二冊、幷十冊也、此冊全十二、而欠二二冊一、欲レ言事多而日薄暮、暮鴉斜斜、閃閃塗抹、

又

手牘欵欵、去二會晤一者不レ遠、曲禮八冊謄寫了、至喜至祝、蓋拙齋二藏此冊一數二年于此一、未レ得二精義入一レ神、所レ謂書自書、我自我、不二相干涉一、自レ今已往、此冊之入神之妙、得二足下之有一レ在、於レ予亦得三耳目之濡染之益二於足下一者、豈可レ比二徒爾而挾一レ冊乎哉、拙之幸、在二于此一而已、思レ焉　明律九冊還來、前次誤言二十冊一歟、若然則一冊必隱在二拙之反古堆中一矣、拙邇日爲二殘暑一遭レ染、起臥惰窳、如二吳牛之喘一レ月、雅履裕勝珍重、頃詣二府中一否、

又

文錦四冊、杜集五策　還遺焉、杜集比二分類之古本一、則註甚簡也、然亦其取舍之當否、未二細檢一、時架上無二杜集一、不レ可二比校一也、文錦之諸人、周程張朱不レ容レ言、除レ此外、歛夫伯恭、非二餘子之比一、陸文安公天資高明、措辭渾浩洒落、自得之妙亦不レ可レ掩焉、餘子雖レ有二可レ觀者一、而有二支離者一、有二影響推測者一、

有曲徑迂路者、有黑腰子者、有黃口兒者、編意不必純粹歟、蓋微倖擧子一時之應對故乎、必有足下隻眼之定價、何如、昨澄弟雅什、翫弄至今、彼未弱冠、語意渾厚、優游不迫、類其爲人、堪推奬之、不怠則復古作者之域乎、規視不少、以是傳之爲幸、雖然余非知倭歌者、如秦吉了之强解人言、可笑、片楮迫尾、姑措焉而已、

又同年七月二十八日

屬者欠目擊、不克展布中曲、於邑惟夥、青油幕入洛云云、想足下嘌旭之陪侍、得幸歟、得勞歟、且又知生昨自播易還、今適有人事之暇、欲加倭訓於馬史、其意在將借足下所藏之本、而憚自言、故假言於拙、如何、同善乎人者、足下之所素蓄也、拙亦知足下不疑而告之而已、長嘯之本亦欲借之、蓋爲校讎也、匆匆涉筆、不罄委曲、

又同年八月十二日

閒濶之情、如闌風、如伏雨、如飃蓬、如枯草、如痴蠅、如凍龜、如土偶、桃梗之流落、非言之可述、筆之可書、幷附亮照、此史冊四十五、賴足下以達于城泉刺史、則幸之幸也、蓋拙奴不識彼旅館故也、水咁假蝦而爲目、人之與物亦有之哉、胡盧胡盧、再拜草狀、

又

城泉手牘、具得事實、蓋足下介紹之勞、謝有餘、中秋一絕、羅浮峰顚之光霽不意在足下之胷宇、余倘雲雨裏之人也、借一邊之餘耀乎否、呵呵、延平書卽今雖可附一奚、余俄有人事而欲赴南紀、時已及發一步之始、故書櫃等寄藏于他文庫、偶不在座右、無奈何、將告南行乎足下而別、卑宂迫切、因循猶豫之頃、又致音書、幸抒中曲、今日若以事有稽留、則必以面別、匆匆倉皇、言不盡意、況短書乎哉、再拜、

又同年十一月三日

昨晚上洛、其後之瞻望、不可言之、前度三淸下時、一書一詩、光輝遐陬之荒陋、幸亦甚矣、終不獲的便、不克裁謝、如芒刺在背而不忘（一本有之字）澄弟龜三無恙哉、一語傳達、賴足下之進止而已、且又在南方之日、以太守牢請、不得止撰和歌浦菅神廟碑銘、事出倉皇、蓋覆者而著子瞻帽、可笑暇日一來、相共商量、以爲笑資、如何如何、足下近

日盛文幾篇、草草不レ渉二多辭一、拜拜、此一殺兩尊、効二郵信一、莫レ罪二麁俗一、

又

手書件件披二肝肺一、去二晤言一不レ爲レ遠矣、史一家言見二未レ見者一、又足下之餘裕也、如水碑文還レ之、學郝通辨遺レ之、長嘯子歌跋、起草不レ竟レ日成、所謂腹藁者耶、然累二數千萬言一、雖三即時讀二之難レ終レ篇、不レ如レ爲二永夜燈下之玩一、感佩感佩、十四三日之招、期二實報一、必叩二書室一而已、人世難レ逢二開レ口笑一、此會不レ輕レ之、荷恩惟重、明日赴二東山之招一、彼此附二他日一、草草不悉、

又

前次跋語淸新、比二足下之舊作一、則甚異也、漸流二于皇明三家之文瀾一歟、如何、如レ某者不レ脫二却宋頭巾之氣習一者也、可レ笑可レ笑、十四日之朝之招、佳期眼拇、喜喜、貞順未レ見レ之、順知有下鄕人之罹二痼疾一者上而先容乎、意安二子不レ可二提攜一焉、昨東山之會、無レ詩無レ文無二倭歌一、蓋山間之黃隕、天根悉呈露、是歌也、詩也、文也、唯少二足下一爲レ恨、欲レ言者惟夥、矮紙於犸、蕉之與二柹葉一、既已朽敗矣、可怜生矣、

又

所レ告件件剖判、愉懌不レ啻、貞春一書、甚愜二老懷一、先レ是余雖二口不一レ言焉、日夜望二其成立一者、如三農之於二寸苗一、沛然之雨、唯期二足下一、果今見二浡興一、於レ是余亦抃レ野、秋收之實尙有レ竢、勝熊淨書之一卷、一二日間、騁二一奚一裁二一簡一謝レ之而已、明蔵脈語、彼於二二公一非レ有二平素一、無レ故而荷レ惠、彼不レ肯歟、凡取予之際、傷二廉惠一、又有二定理一歟、雖レ然二公之意、達二于彼一而後報二二公一也、再拜布字、玄忠生執謁得二容接一云、童蒙求レ我、於二足下一有焉、

又

荊川七冊還來、一見之際、見二彼之所レ見、得二彼之所レ得、不二亦悅一乎、同然之理於レ此徵矣、讀春秋論、彼如レ得二要領一、世之逐レ句而讀レ之、賴レ人而說レ之者、豈若レ斯乎、愚之揣摩在レ此、如何、足下代二一禪客一曰、未レ見レ星、未レ悟レ道、且道如何是悟レ道、余亦代二禪客一曰、八刻遲劄、呵呵、餘附二明日一、

又丁未正月二十六日

漢魏叢書一帙十册、并疊山文章軌範六册還納焉、叢

書次帙重疊、今有レ事、得二閑暇之日一、丏許借、即今姑閣焉、且又令弟所レ借之眞澄鏡・本主賁翁也、見二人之所一欲、而貴二其價一、以レ故暫還レ之、彌踊貴、終至レ不レ可レ借レ之、可レ笑、以レ是傳二之於令弟一、時尙料峭之寒、千金保重、足下之一身非二私物一、一者父母之遺體、一者此道之所レ載也、

又

三二日間他出、昨夜歸到、以レ故前日之行文六聯、稽留至レ今、今還レ焉、劉駕詩、馬上續二殘夢一、馬嘶時又驚・心孤多レ所レ虞、僮僕近レ我行、棲禽未二分散一、落月照二故城一、莫レ羨二閒居者一、溪邊人已耕、全篇也、又舊年足下話次、及下半山詩註屈平不レ溺二死于汨淵一云云上、拙暗記稟賦鈍、也不レ覺二然否一、髣髴如レ夢、今以二他本一考レ之、未レ克二檢出一、所レ望者、別記二於片紙一而賜レ之、則鎰金惟輕矣、餘附二面會一云、靑魚二十尾、以二他之惠一、投二廚下一、一笑采納幸幸、

又

史鈔二册備二勘考一、卷初之策、彥龍所二親筆一也、彼雖二異敎之徒一、又一代偉人也、余所二甚愛重一也、其手澤者、他可三以爲二弊箒一、余以爲二千金一、可レ笑可レ笑、會面何日哉、掃レ榻以竢焉、莫レ食レ言、福鹽之辨、在二衛生寶鑑一、即今有レ事、借二他之原本一、再借レ之而已、余所二鈔書一、偶爲レ人所レ借、尙不レ若レ閱二全書一、全書意安所レ藏、以二如見一爲二先容一耳、

又

白文謄書之事、吾邦古來不レ名而稱二文集一者、在二此編一、然則一日不レ可レ無者耶、至珍至重、本朝文粹、暇日繕寫、希仰在レ茲矣、蓋非レ爲二足下之羊棗一、亦老拙之熊掌也 呵呵、意多筆短、不悉、

又

二荒神傳、勞二執役者之手一、然荷二足下之庥一、多謝多謝、結末贊詞無二餘蘊一、豈復有二他筆一哉、竢二晤語一、今日諸生之勝集、可二想觀一焉、漫聯破題之兩句、洗二眵昏一慰慰、楚人之頌、伸縮在二手裏一、可レ尙矣、

又

二荒神傳中云、由レ是見レ之云々、不レ聽二沙門闖入一焉云々、此間之事、若然則先所レ謂援レ神入レ佛、掠二社戶一爲二僧俸一者、驗二于此一、摘レ奸證レ慝、鞠レ情鉤レ距、司レ臬者必辨焉、夫涉二史筆一者必據レ經、據レ經者必通レ律、元有二二理一哉、徒爾而言レ律者、刑名之

徒而入㆓苛酷㆒、豈祥刑之謂哉、故曰、五經之有㆓春秋㆒、法律有㆓斷例㆒、後世修㆓本邦之史編㆒者、於㆑玆添㆓一段好議論㆒矣、嗚呼常山之率然、文訣思㆑之、

與㆓意安㆒

文則周覽適㆓老懷㆒、即今十二冊還㆓納之㆒、蓋此編者、皇明文士之製文、而別無㆓作文之式㆒、故早速返㆓呈之㆒、北野之一件、雖㆑非㆓直務㆒、粗問㆑津、則世波厲揭之一端乎、呵呵、餘蘊弁付㆓拜顏之談欄㆒、頓首、

又

明通紀全部十七冊還納焉、電囑略得㆓大較㆒、是亦出㆓于惠意㆒、豈不㆑爲㆑幸也哉、就㆑中孤樹裒談、前年逐㆓涉獵㆒、今日又忘焉、再許㆓恩借㆒乎、若然附㆓此奚㆒來、

與㆓順知㆒

昨晡勞㆓迎接㆒、特旅宿之中、盤飣桂玉之困、在㆓默存裏㆒、雖㆑然曾子當時說㆓三費㆒、亦學者之明誡也、曲禮全經二冊、僻案鈔一冊、齎持來、好了好了、全經得㆓全功㆒哉奈何、秋雨之嘆、滿懷不㆑可㆑言、老杜之舊題、諷誦聊遣㆑興而已、心曲併竢㆓跫音之日㆒、草草不悉、

又

四書通證一策、了菴錄二冊、匆匆終㆑卷、目下熒惑、電抹過了、雖㆑然嘗㆓一臠㆒知㆓全鼎㆒、亦豈無㆓此事㆒哉、呵呵、了菴錄如㆑飲㆓栗棘蓬㆒、如㆑喫㆓金剛圈㆒、可㆓吾子之口實㆒否、雖㆑然儒先有㆑曰、學者於㆓吾書㆒有㆑所㆑見、見地堅定、然後看㆓異書㆒亦宜、他日不㆑墮㆓渠術中㆒云々、吾子其及㆑茲也耶、晚來杖履歸㆓赴龍阜㆒、則行逢以頗慰㆓分睽之懷㆒乎、奈何、睡餘眵昏未㆑擘、行筆蚓蛇、枉賜㆓諒察㆒、

又

從㆓南城㆒、今早歸洛矣、爾來音息杳絕、雅候震艮奈何、蒸溽炎暍、氣宇清勝否、保重、就承雖㆑無㆓專事㆒、契濶之懷難㆓排遣㆒、故及㆑此耳、西山丈近頃無㆓會晤㆒否、梅雨稍得㆑霽、則郊墟之夕乘㆑凉、清旆飄然來過、佳期有㆑在矣、山間靜坐、未發之工夫、有㆓新功㆒乎、歆羨歆羨、呈露將來發㆓老懷㆒幸幸、草草不具、

又

萬葉十數冊齎來、想㆓足下之所㆑書、發㆑函子細點檢、則僅四冊、他皆趙子之手澤也、事出㆓意外㆒、不㆑覺驚愕、於㆑此又精察焉、這回所㆓繕寫㆒、更蓄㆓全集㆒、昨所㆑寄者、曲度之舊本也、然乎否、沒分曉矣、史漢韻

會各一冊、管爾抹過、范史不レ好本、如二黑漆屏月蝕詩一可レ笑焉、韻會稍劣二於長嘯之所一レ藏歟、今聘二一价一、三書與二萬葉一、同レ函速還レ之、丸藥黄鷄、卷簾白鷺、情景何如、若有二餘暇一則一來、下レ榻竢レ之、

與二正意一

挺林燭一十枚、槁魚貫一十絡、燭以擧二掃韈之明一、貫以備二無レ棄之良一、規レ之視レ之、牛溲歟、馬勃歟、抑敗鼓皮歟、以二無用一爲二大用一者、將レ在二調劑之手一也、呵呵、明日明午、如レ諾行而落焉、於二燕雀之後一、

答二正意一

中正子革解治暦二篇、下二高手一以代二予之勞一、鴻庇有レ在矣、多謝多謝、此冊之主、知二此冊之珍一乎、朋レ足之璧也耶、凡物之顯晦、必有レ數存焉、象之所レ謂澤火、而中正之所レ謂積濁之文明也哉、必有下不レ沿二襲流俗一而以上レ革者上、此冊之主、所レ期在レ斯乎、否乎、渠夫知レ易者歟、然而終日易、而未二嘗易一者歟否、於レ茲予亦長噓一聲、又太息而噓一聲、而卷而還焉、中正之時與レ處、予不レ克レ無レ感、中正子者、建仁寺僧圓月、字中巖、著書號二中正子一、

與二玄東一

昨者嘉惠、病體甚適、多可多可、八牋價鑿、即今四十三鐶、附二此童一齎持以去矣、渡二與賣書漢一、則足下先容之勞亦不レ尠、謝レ之有レ餘、瑯琊之一編、留在二架上一、不日還納焉、至意過二蔡郎一者曼曼、幸之又幸、赫蹏無レ餘二地於展布一也、

又

南簿貫鰒之惠、酌レ之啖レ之、蓴鱸梧酒之後、亦識二秋風一者、蓋足下之惠意令レ然也、至感至感、併以附二明日一云爾、抑又前頃市原之勝集、實塵世之一奇過也耶、多可、

又

昨者來訪、殊六義之惠、於レ予去珠復還者、十襲珍重、喜意津津揚揚、謝レ之有レ餘哉、就レ中前囘之世說、今已收買焉、欲下以二足下之所レ藏之善本一就レ之、一◎讎中本有焉字校添減之上、許レ借否也耶、若然則語林亦附并、連日淫雨濛濛、雅候未レ審、爲レ學自嗇、昨赴二安生之招一、會二戸帶子一、夜間正意亦與レ之云、土苴緒餘、竢下接二芝眉一之日上云　按戸帶子者、戸田帶刀爲春也、

與二道圓一

倭名類聚抄繡梓了、寔可レ資二多識一、荷二一部之惠一、今又新刊白氏文集、卷々每レ終二上板一寄來、誦レ之尤適二

老懷、何賜加之、以謝焉、

又

頃聞朝鮮國使來、其人品如何哉、道春兄弟侍幕府于伏見城、足下從春斉、盍往而一見試之乎、若或有筆語、則余之所欲見亦在此、不啻魚熊矣、思焉、

又

一褁之惠、賞翫得其興、昨日之鵑子安在、猶可逐日生育否、所希在茲耳、

與某人

昨香子通信於足下、余以不知、不問震艮、實出意外、非慢、即今就安告余有足下無妄之疾、愕然蹙頞攢眉、欲往以問、則人事不得止、甚乖素志、且命就安代余而言、想其有勿藥之喜、念在茲、委曲告報、則余亦安心、恐病餘勞細覽而不涉繁辭亮昭、

又

西疇居士崔子方彥直之所著之春秋經解、拙所未見之書也、聞或者之所藏、而价或者之所友借焉、即今來視矣、蓋不拘於三傳、賴己見而解也、雖未及識聖經精理之所在之當乎否乎、未詳彼操履何人、彼卓見特立不可啻焉、冊僅五、葉亦五六十也、甚簡易卓蘙、以是較之云、季彭山之私考者、渴之望梅、饑之甘糠覈、拙饑渴于書者也、所見不多、是屠門之大嚼也、黿鼎之染指也、其未及見、則以爲奇書、而思與人共之、癖已可笑矣、以此書告足下、白豕而芹之與暄也、又可笑矣、足下若欲檢此書、則今日云暮、明日來至否、下榻竢焉、

惺窩先生文集卷之十二

尺五堂昌三恭儉先生全集序

昨非菴　瀧川昌樂撰

不肯潛以、今古國家之治亂安危者、恰如二奕棋一、人間之榮辱盛衰似二夢幻一、然爭二蝸國一搆二蜃樓一逞二機巧一誇二利名一是無レ他、因三聖賢之出處與二文道之興廢一、生二亂世一不幸也、生二治世一幸也、今世聖代有レ道、而國治天下平、而八百成周、四百漢家、粲然在レ目、上正二南面之德一、下敬二北面之禮一、生二太平之世一不幸乎、生二太平之世一死二太平之世一、則功業成而佳名不レ朽也、我國古昔詞人才士雖レ不レ寡、學行兼具、英名赫奕者亦鮮矣、嗚呼我　嚴師尺五堂昌三恭儉先生、是其人也、蚤流二出於東海風雅和歌浦浪之際一、遊二學於北肉山間光風霽月之裏一、擧二學鞭於萬卷之文場一、颺二文瀾於千古之翰海一、晨師二鄒魯濂洛關閩之聖賢一、昏友二漢魏唐宋元明之豪俊一、進攻二李德之書城一、退下二董氏之書幃一、自二經傳國史一、到二醫卜老釋一、摭二其華粹一、掇二其精英一、惺窩先生之伐柯而青レ於レ藍寒レ於レ水者也、蘇長公所レ謂作文章之意之所レ到、則筆力曲折無レ不レ盡レ意、世間樂事無レ踰レ此者、想先生用レ之歟、然其胸海何以二愚生之蠡測一哉、頃奉二昌先生之季子永三思齋先生之命一、聚二昌先生之遺文殘篇一、爲二全集十二卷一、請二四明逸人一、使三石凹丈山作二題序一、雖二一諾一、不レ果而卒矣、且野間三竹許二於後序一、而不レ果レ所レ言而逝矣、此亦黃土、彼亦塵埃、噫予訣二于先生一、至レ今十三秋、想二像於昔日之容貌一、如二再親炙一、而談笑在レ目、講解在レ耳、吁非レ夢、爭有二再見之期一乎、庶幾他日竹窗之底繙二此集一、則不レ至レ忘二先生之德功一也、

寛文己酉六月二日

尺五堂恭儉先生行狀

先生姓藤、氏松永、諱昌三、小字遐年、其先出清和帝、十二代孫源安藝守久信之男、松永彈正少弼霜臺久秀公之後、久秀公、山城國西岡之英產、而幼而麟兒鳳雛、有食牛之氣、鷹揚虎視、武質成立、管領五畿內五箇國、惟時列國角爭。四海鼎沸、甲越尾三國鼎立、而天下豆分瓜破。公屬于三好氏之幕下、大有軍功、爲先鋒、殺將軍義輝公、自是振威於天下、然愧從反臣三好、而與織田信長公、爲 帝都之藩籬、護 王城、治國養民、依仁撫士、常尊信於大乘經典、信心深於海、尊敬高於山、布金買京南民屋之地、廣于本國寺院之佳境、至今境內之僧徒、住安宅、潤恩澤、每年三月。爲報其施恩、轉讀於千部妙典弔之、世俗號之曰櫻花之千部、天正四年八月、久秀公自天王寺牙城、引退據大和國信貴城、要路結柵、嶮地壁壘、屢侵邊境、其勢沛然強大也、蠶食於京南、虎視於鎭西、甚誇武功、欲領天下、常樂陸羽盧同之團茶之會、有漢肩衝并土茶椀及蘆屋釜、其名曰蜘釜、是時名譽重器而直千金、織田信長公强雖請求、久秀公終不許、依之與信長公有間、同年九月廿七日、信長公命長男信忠、帥數萬騎、攻信貴城、使佐久間信盛先登拔此城、久秀公入天守、欲使二男宗通宗勝出城、二男相俱請同死、久秀怒謂曰、汝等不知程嬰杵臼之行乎、豈爭血氣之勇、全一命而求生、再擧義兵、當報其與不戴天仇、且梟于信長之首、供于我木主之前、而弔怨魂、勝大葬、且領天下、繼後嗣、興孝道、振古無儔白骨治國家定天下之理、何以事匹夫之勇而縊死于溝瀆、宗通宗勝不可曰、志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁、我謂不食言、而久秀放火於天守、父子三人同自殺死矣、永種居士者、久秀公季子、而于時三歲也、久秀公之姨、矜其孤弱、命乳母襁負之、竊出城、躬親撫養、而後隱惠日山東福寺、爲薙染之身、隱浮圖、祖母歸心於蓮宗、陰招致之、去東福禪院、寓泉州堺之法華寺、後遷洛之本國寺、偶讀孟子、及不孝者無後爲大之語、流涕、忽然而脫緇服、代素衣、永欲保子孫、是先生之祖父也、昔在惠日山、聞法華經楞嚴經維摩經圓覺碧巖禪錄及四書六經之講解、而

儒釋兼學也、能書、以入木道鳴世、依之都鄙學書書生、以金銀米錢、代筆跡而學之、勝師者多矣、中葉在連歌之宗匠宗養門下、學歌藝、詠和歌、爲連歌、以風雅爲一生之遊樂、與紹巴同學也、在洛、永種生貞德、貞德事親至孝、幼而穎悟也、志學、讀孝經及毛詩、至身體髮膚受之父母、立身行道、揚名於後世、以顯父母之語、及讀蓼莪之篇、永種流涕哭、依之貞德廢孝經及蓼莪之篇不讀矣、永種者、藤體胖惺窩先生之姪聟、而以上冷泉爲純公之女娶之、是黃門定家鄉苗裔、而永種生貞德、貞德穎悟、而師細川玄旨、受古今集之傳授、就九條玖山公、聞源氏物語之蘊奧、隨中院也足軒素然公、得數嶋之口訣、依稱名院實條公、傳和歌之奧義、因紹巴法橋、學連歌、聞一得十、獨步千歲、遡洄百川、而歌林之秀也、就細川玄旨、欲讀歌、而入吉田山、誅茅結一間四面之小舍、竹籬柴門、而審容膝之易安、居之一年強半、而一日咏十首而不怠、総及二千首、如是好歌也厚矣、學道也信也、長歌短歌雜歌旋頭譬喩問答相聞回文俳諧等諸體、兼備無遺、以此有秀句吐奇言、人口囂囂矣、上達 後水尾帝之叡聞、忝賜五首和歌之 勅題、承 勅命、登鳳闕、應詔探五首之宸題而詠之、中有遠見月之題、此歌秀逸而幽艶也、松浦潟傾月耳唐之果之果迄行心哉、是也、聖皇嘉之、感 宸襟曰、是非人詠之所爲、可爲和歌三神之幽助、忝爲一唱三拜、詔飛鳥井大納言菊亭大納言、而推獎稱譽有餘、承 勅命、賜酒食矣、誠歌人之榮也、於其席、又有 宸勅、詠俳諧歌、應聲爲之、獻之、勅イ、トテ歌ノ御ダイテクダサレテ忝シトコトニゴゴシマテ是ナリ（◎按古今夷曲集よみ人しらす、ちよくとして哥の御たいを下さる、辱しけなしや殊にごしゆまで）帝奇之、入宸輿、滿殿縉紳、羅綻群公、稱譽嗷嗷矣、其智德超世之奇才、而醞藉超邁、爲當世之鑑、人皆以爲近代之異人、是先生之慈父也、母黨者、駿州之太守入江氏、數傳至五代之祖攝州刺史盛重、盛重生政重、政重將死遺言、謂後嗣繼武業、則必當改松永、以母黨入江爲氏、若不繼武業、則以松永爲氏、是織田信長以爲暴勇奸悍強敵、忌誅於松永子族種類、變姓名改入江、其後信長公於洛本能寺、爲明智惟任遭弑、而後改入江爲松永、貞德翁文祿元年壬辰、誕先生於洛陽致業

坊之宅、先生生安靜、幼不好弄戲逸遊、其天資遙異群兒、頭似反宇尼丘山、目有重瞳、當門齒缺、而兩頰豐滿也、能愛人、慈仁深而至孝超世人、質朴誠謹、質直素淳而無飾、守儉禁驕、謙而不諂、事父至孝也、六歲喪母、自八歲讀書勸敦篤、日夜不倦、出父之歌海、入師之儒林、從事于妙壽院惺窩公、惺窩公知其少年誠實簡默、必成儒者之名、顯父母、而授與先生以自所著深衣幅巾、是繼道統之傳、此其證也、會十一歲而能詩、佳句驚人、昔日林道春堀正意林永喜菅田德菴、於堀正意杏菴亭、爲詩賦之會吟遊、時當中秋、賞明月、昌三先生亦在其席、林羅山子截秋月揚明輝之句、拈出於詩題、各鬮之、先生得秋字、則賦之立成矣、其三四句曰、淸談猶勝十年學、風渡林間黄落秋是也、先生惟時十一歲也、林羅山以此詩獻惺窩師、惺師見之驚異、愛其妙齡奇才、祝其遠大、謂喜我親族繁榮、和之曰、林忠〔道春姓字〕訪我扣深幽、袖裏遐年詩賦遊、今日斯文期德業、花其春兮實其秋、是識而在惺窩文集、時書生墨客稱先生詩、愛其天才、而人口囂囂矣、慶長九年甲辰、先生十三歲、而通四書及六經、依之豐臣氏秀頼公聘先生、先生乃赴大坂城、豐臣公待之以賓師之位、於殿上講演書經、羅筵之群侯、滿座之諸臣、無不賞歎焉、豐臣公愛出群之奇才、而恩賜甚厚矣、既而歸洛城、洛中弟子益進而執束脩愛業者彌多矣、豐臣秀頼公、又令其臣片桐氏祿先生、貞德翁不願仕官、是以固辭而免焉、貞德翁能見機而爲之人也、其翌年冬天下大亂、其明年夏大坂城陷矣、是時能通左傳史記通鑑文選者、京中亦寡矣、先生正年十六、皆能曉達也、三十而請惺窩公傳周易河圖洛書先天後天卜筮九圖大極圖及書洪範九疇春秋奥義、是有一子相傳之誓盟、不滿他子矣、與貞德翁同在三條坊、講說經傳、來學者輻湊、書生旁午滿座上、履屨溢戶外、以學黌狹隘、乃遷居於五條坊之別宅、上京之冠蓋豪傑、惱下京之遠隔、而皆招先生、故先生卜居于西洞院銅駝坊上、列國之諸侯以祿籲者多矣、先生從父命、且懼定省之虛、而不就仕、在市中敎授焉、自禁內之公卿、迨委巷之士庶、莫不受學、先生得市陰之名、是以列侯群牧以客禮聘之、先生乃應佳招而臻其國、或兩三月、或五

六月、講二演四書六經一、語二主君一以レ政、告二宰相一以二輔相之道一、其國文道跡奇踪、隨レ需而製レ文以記レ之者數多矣、又遊觀、每レ遇二靈蹤佳境一、皆留二題詠一、如二武州賀州一、則蒙二賀能越三國大守恩顧一、隔年至、又尾州濃州播州因州丹州、依二國君郡主之良遇一、而屢徂、多レ所二遊歷一矣、寬永十年癸酉、先生歲四十一、博覽强記、本朝外國之篇藉、殆涉二獵之一、貞德翁命曰汝已入二儒闕一、且通二諸子百家之變正一、今轉二覽大藏經一、以可レ該二貫釋敎一焉、此我願也、先生以爲道不レ同相爲不レ謀、然家君之命、不レ可レ違也、自二正月一入二建仁寺一、到二明歲暮春一、閱覽了、貞德翁喜二素志之成一、以爲諸刹之浮圖、亦未レ有下如レ斯轉讀之敏速者上也、先生作レ詩以發二其意一、衆皆和レ之、後水尾皇帝命二飛鳥井菊亭之兩傳奏一、召二先生於殿上一、獻二一切經拔粹大海一滴一部一、觸二　宸覽一、有二叡感一曰、十三經二十一史外國雜書一切經全部、博識之鴻儒、今古稀有之天才、我日本所レ未レ聞也、有二　勅詔一曰、　朕不レ遑二萬機之政一、不レ能レ見二一切經全部一、今見二此粹抄一、而當二一切經全部一、越膽二寫於其大海一滴一部三千葉一、　太上皇帝美二其學業博贍一、忝賜二皇朝類苑勅本一部一矣、京兆尹板倉周防守謂二先生一曰、二條城東門外、鄽間有二一閑地一、古老曰、此地本謂大學校之地也、此我慈父伊賀守之所レ營也、今將レ與レ子、請先生遷レ居矣、先生往而見、其地勢廣濶而幽邃、市鄽而無二車馬喧一、繁華而避二塵囂一、眞是市中隱棲也、門前臨二堀川流一、屋後背二脩竹園一、橫際百弓、縱及二三十竿一、眞可レ容二若干之書生一矣、周防守手親繩二縱橫之曲直一、則又命二匠人一、建二屋宇一、先生移二此宅一、乃自號二講習堂一、韻人墨客、咸賀二其落成一、朝暮講二聖經一不レ斷、貴介公子縉紳武辨之輩、羅轍交跡而來聽焉、先生容二與于此園中一、春薰二懷於杏壇之花一、秋澄二心於川上之月一、絕二官纓之束縛一、功名盡忘、遠近望レ風、緇素慕レ德、乃屬二門下一、僑二居於隣家一、日往二來于講習堂一、而問レ學扣レ義、敎不レ倦、釋菜之禮不レ行二于洛陽一尙矣、先生繼レ絕、聚二學生一、招二伶人一、設二籩豆一、舉二其法於家塾一、比年春秋二上丁、奠祀不レ懈也、慶安元年戊子、先生歲五十七

天皇詔賜二數十弓之地於　禁闕之南一、京兆尹周防守爲搆二講堂一、此蓋使二皇子公孫聞一レ道也、新築旣成、先生從二銅駝城下一移レ之、公卿及京兆尹皆來賀二新居一、

預ニ燕饗一、先生以レ詩謝ニ尊客一、群弟子彈和レ之、是時洛陽詞人才子皆臻、四明逸人丈山生謂ニ先生一曰、環堵、今抵ニ鳳闕之南一、近鄰ニ蓬瀛一、此所レ謂城南韋杜之家去レ天尺五者也、老杜詩去レ天只尺五是也、先生從レ玆號ニ尺五堂一、開ニ講筵一、門人倍多、官門槐宮得レ接ニ孟鄰一、而訪問不レ絕、冠冕劍佩滿ニ座上一、車駕奴隸盈ニ門巷一、受ニ　天寵一殆及ニ十年一、越以ニ二條堀川講習堂一、賜ニ於昌三長子昌易寸雲子春秋館一、京兆尹重宗◎恐有脫遺昌易居ニ此堂一、日日講ニ四書一、談ニ五經一、有レ年ニ于玆一、昌易死、而後其介弟思齋先生永三、棄ニ賀陽厚祿一、退隱ニ於此草堂一、構ニ慈父昌三先生之祠堂一、祀レ親、見ニ祠堂一思レ孝、以ニ不レ遠不レ可レ忘レ親之敬一也、◎以不以下八字不可解恐有脫字三年庚寅、奉ニ後光明院帝詔一、撰ニ草書抄水仙花詩註等一、京兆尹周防守薦レ之、欲レ授ニ儒官一、先生不レ欲ニ人爵一、安ニ天爵道德一、不ニ敢肯一也、以ニ布衣一、交ニ貴位高官之人一、以ニ家事一不ニ自累一、應ニ侯伯之聘一、遊ニ遠方一、徧覽ニ名山大川一、花下之燕遊、月前之吟興、春携レ樽、赴ニ東山之靈區一、秋杖レ藜、尋ニ西嶺之勝境一、彼大原野之白櫻、高雄山之紅楓、京洛之佳蹤舊跡、無レ時無レ處、扣レ幽探レ景、賞レ之樂レ之、與ニ群弟子一、

同極ニ歡娛一而歸矣、此無ニ任仕之責一也、承應二年癸巳、先生歲六十二、貞德翁卒、先生哀毀踰レ節、益不レ欲レ仕レ官、遂隱居、常曰、吾雖レ不レ至ニ富貴一、忘ニ貧窶一而不レ忮不レ求、藏書萬卷、詩文三千篇、此外又無レ願焉、垂レ老尚勉勵不レ已、手不レ廢レ卷、若遊ニ他所一、夜深沈醉而還、先向ニ燈前一、繙ニ載籍一、讀誦閱見、畢就レ寢、未ニ嘗徒寐一也、雖ニ小說雜書一、無レ不ニ闚觀一也、明曆三年丁酉、先生歲實六十六、春三月、比鄰九條之櫻花盛開、掩ニ映于尺五堂一、設レ筵、招ニ親戚子弟一、燕享之半、先生曰、今日吾思疾起、識レ將レ死也、諸子曰、小恙曷足レ憂、先生曰、吾在ニ西洞一十稔、在ニ堀川一十稔、在ニ此宅一又十稔、所レ居皆限ニ十年一、吾去レ玆、無ニ他可レ遷、理數之自然、知レ不レ可レ遁也、不肯樂、予時在ニ江州彥根城一、不レ知ニ先生疾病一、闕ニ定省一、醫門師野間三竹法印、有ニ瓜時而代之役一、而向ニ東武一、路歷ニ江南一、道宿ニ江州一、高官太守伊井直孝、使下予就ニ客館一、饗上ニ於三竹一、三竹告レ僕曰、吾子嚴師松永尺五先生、患ニ瘖瘂症一、而不レ通ニ酒食一、超ニ朱晦菴一、無ニ道人之術一、則他方行脚可レ有、近我亦療レ之、以ニ萬方之藥餌一、俱無レ驗、洛汭之諸

醫束手退矣、不佞在門弟之列、殊志情爲膠漆之交、親炙薫染三十五春、今恨永訣、故誡保養之道、以止酒、禁膏粱滋味、請以誓紙、先生書神文、授不佞、頃聞予東行、先生謂予曰、死生有命、富貴在天、我知理數之自然而不可遯、今年夏必死矣、知不免死、則今生樂須臾事也、此忘憂物不可廢、去歲授吾子神明盟辭、薫心誓言、逼情困然、而障病情、妨賞心鬱陶矣、欲作黃泉之障碍、速還之往東武矣、予應諾、出誓紙、包淚卷之還矣、汝往京師、宜問師之沈痾、速去莫遲　越不肖草行露宿而至洛、謁先生、先生語予曰、遠衝鯨波、歷犬牙、苦心焦思、煩身勞足、問我病、謝辭有餘、且去秋附鈴木昌策生、遠州荒井一味一捲、幷江州佳品鮒魚鮓一桶、寄我、其厚情至孝顯風味、尤就寢之酒肴、無如此物、今以面晤謝之、其返簡達亦否矣、予謹曰、然也、先生又曰、我疾不可起、天有數、何恨五更風乎、花木遲速、造化之功也、以人事不可挽回、理數所然不可遁、乘化歸盡、樂夫天命、復奚疑乎、盜跖孔子共塵埃、汝所素知也、予拜先生形質愕然、形

容枯槁如柴、一以喜、一以懼、淚雖銜胸上、未溢兩眼、予曰、先生疾在淺、予宜治無患、木下順菴在其座、薦先生、先生莞爾而笑曰、孔丘釋迦不長壽、況於我哉、死生有命、扁鵲曰、越人非能生死人也、此自當生者、越人能使之起耳、然我今生人而等死人、呼不可起也、況亦汝治療不可勝越人、何欺天乎、言終而怡然、溫顏如平常、我知先生所素養死生一理、易簀時、亦在敬一字、其後不肖去江湖、居洛東、延寶七年夏、先生長男昌易寸雲先生、亦患痞隔症、京師國工神醫療之不止、千方無驗、命掛絲、令弟永三先生、及松木壽伯醫生、木下順菴儒伯、引予診脉求治、予家本有療痞隔神方妙術、已與藥餌、半年强而全瘥、以之觀之、則曾恨不療昌三先生之痞隔也、實是明曆三年三月十八日也、予去尺五堂、直至清水寺及鳥邊山大谷大佛豐國古宮、見殘花、坐花下、思昔日從先生、尋東山花、終日宴遊、此日既過、命亦隨減、恰如少水魚、去年不可爲今年、時不待人、桑楡影薄、來日不可待、觀夢幻泡影、悽然獨步、寂然獨坐、賦小詩二首歸旅檐、翌日十

九蓂、至四明山下一乘寺、訪隱君石凹丈山先生、獻賦豐國二首之小詩、請筆削、加雌黄點評、告予曰、此詩有議論、而稱傑出二篇、賜晩炊、辭去歸江湖也、而後師病逼矣、遠近問病、孝子侍床褥、使醫來窺、藥劑不驗、針灸不應、而到六月二日、欻捐舍館、卒內寢、四方之弔賻滿門、上自天王、下至士庶人、貴官朱門、識與不識、共無不哀惜、誄曰恭儉居士、葬于洛東烏邊山、後有故改葬于城南本國寺、親屬之墳墓以在此之故也、生平所著、有四書私考、七書備考、七書諺解、無冤錄抄、棠陰比事抄、彝倫抄、杜詩抄、陳書諺解、五經私考、大海一滴等、共數十百卷、其作文製詩、大槩不經心、然皆有渠鑊、至取予、則雖一毫不苟也、一生脫爵祿、而得市城之隱栖矣、先生有三子、英傑之奇才、出群之天倫、連玉比藻、長男春秋館昌易、宏贍之才華、豪縱之巨筆、暗六經、飽三七史、殊通周易春秋、書而無不兼講、列國之牧伯、郡國之公侯、欲封以千石之祿、甘潛龍之行、慕泥龜曳尾、不欲出仕、終處士、常自云、我竊比邵堯夫之安樂窩、隱堀川講習堂園、讀六經、以舌耕食硯、教書生不倦、傳北肉藤惺窩師之道統、近代經學博贍之儒宗也、惜哉、延寶八年申六月晦日、罹沉恙卒家矣、仲子松岡宗運、繼他姓、在肥前國佐賀、仕鍋島丹後守光茂公、博覽良才儒醫而活人多矣、穎悟而智辨湧文海、佳名滔西天、高識忘物欲、嗜學如渴、讀古書日不足、誦新編爲獨笑、論文則几席之前、忘日之旰、賦詩筆硯之間、不覺夜之闌、古今之興亡、歷世之人物、百氏之文體、味之弄之、或討論之、或品節之、交物、胸宇廓通、而無所礙、天和三年夏四月、在君命之江陽、紀行中、有富士之製二首、尤絶唱者也、事畢而過京師、謁慈親之遺廟、祭神靈、追遠恰如新喪、向靈前、謝仕官身隔西海、山川萬里、孝道之薄淺、雙行掬之淚難拂、不肖旁觀之、知顯于孝純之至情矣、季子永三思齋先生、淳靜好古、深淵淡朴而至孝也、與物無爭、不凝滯於物、而能與世推移、能愛人、仁慈惠愛超諸兄、治聞博記、十六歳通五經、有才藻、富詞翰、巧詩律、好聯句、花晨月夕、登鷲峰、沿鴨川、催詩興、無不誘我、我爲斷金之交

日久矣、少時在二賀陽金澤一、官二遊於松平加賀守綱利中將公一、良遇甚厚、而待レ之以二賓師之位一、祿及二五百石一、敎レ之以二治國齊家修身正心誠意之法一、君賢民淳、一國興レ讓遷レ義、三國孝親、自レ斯大守好レ學、尊二德性一、道二文學一、宰臣遷レ義、人民得二其處一、如下登二春臺一詩中春風化雨之中上、是思齋先生之德也、然後召二尺五先生之高弟木下順菴一、加二同列一、就二厚祿一、且平岩仙桂、澤田宗謙、食二加陽之采邑一、思齋公之价紹而執レ贄相見、是公之恩澤而慈仁之深也、思齋公慈母妙儉女釋、日薄二西山一、又多二病疾一、公官二遊賀陽一、遠隔而懼二慈母之定省虛一、詑レ病乞二形骸一致仕、事二慈母一孝純也、天和元年酉正月十七日、公喪二慈母一、哭泣哀情、摧痛之誠心不レ止、而居二三歲之長喪一、啜レ粥面深黑、形容枯槁矣。自著二喪服一、至二復小大斂虞祭卒哭齊衰小大功緦麻居殯小大祥禫祭一、哀痛之誠情、始終若二新喪一、尤三年之通喪者、從二　天子一、達二庶人一、雖二聖門之大行一、或有二時變一、或有二疾病一、或有二君命一、昔孔門之高弟、以レ欲レ爲二期月之喪一、當二今世一、而無二碍障一終二三年之重喪一、可レ謂レ不レ減二古人一也、孝哉、生事二父母一、和氣婉容愉レ色、敬恭而

如レ執レ玉、如レ奉レ盈、如レ弗レ勝、溫凉定省、一日而無レ闕、除肉養レ志、每レ上、必在視二寒暖之節一、一日三朝之課無レ怠、若疾痾冒二親體一、其有レ不レ安レ節、公憂形二于色一、有二敬愛一、無レ違二顏色一、愛敬之所レ存、孝子慈孫至道也、慈母妙儉尼釋、有二耳聾一、不レ得レ聽二雷聲一、公常侍レ傍、備二筆硯一、爲二筆語一、代二吾言一、通二其意一、其他孝心可二推而知一耳、雖レ釋二三年之喪一於二天和三曆癸亥正月十七日一、孝情有レ未二慊足一、不レ忍レ除、而待二禫祭一、脫二喪服一、是於二吾日域一近世行二三年喪一者上、惟在レ公見レ之、後人鑑レ之則レ之、而與二仁道一、起二孝心一、則一人之孝、則千萬人之孝也、五刑之屬三千、而罪莫レ大二於不孝一、公常甘二心於此語一、夫曾子不レ言乎、孝慈者、百行之先、莫レ過二於孝一、孝至二於天一、則風雨順レ時、孝至二於地一、則萬物化盛、孝至二於人一、則衆福來臻、今思齋先生惟其人也、始仕二賀陽一、食二俸祿一、誇二富貴一、養二慈母一以二三釜一、立レ身揚二名於當世一、顯二父母一、孝道之至、非レ公而誰哉、自二永種公一、至二于永三公一、四世繼二風雅美一、以二風雅文物一鳴レ世、終不レ棄二賤業一、可二得視一矣、昔日不肯冒樂儀屋、與二昌三先生之尺五堂一、其相去纔隔二數十

弓之地一、鄰並之居、而余朝來暮往、爰遇異二諸子一、花與レ柳、雪之朝與二月之夕一、無レ不二往學一、先生亦乘二明月一控二僕學窓一、酒浮月吟、賞垂二艶陽一、春服既成、門生五六人、從二後乘一、尋二東嶺豐國之山一、櫻花影涵レ盃、乘レ興賦レ詩、花街柳陌、遊人如二蟻回一レ垤、如二織似一レ梭、摩レ肩尋レ花、如二狂蝶一、不レ問二姓名一、花有則入二僧坊一、開二宴席一、緇素無レ隔如二舊識一、無レ我而忘レ我、仁心四海、皆如二兄弟一、或至二禁門一、嘯二官家之月一、以二布衣一、對二公侯一無レ耻、拈レ題請レ詩、則應レ聲立成、不レ假二於千煆百練之功一、而不レ離二格律一、有二字法一皆有二可レ觀者一、去寛永十五年十月十五夜、依二飛鳥井大納言雅章之佳招一、有二詩賦之會一、刻レ燭爲レ詩、則刻二一寸一、要レ賦二一詩一、裁レ句爲レ題撚レ之、各鬮レ之、餘二一題一、主公曰、昌先生宜レ賦二二詩一、先生不レ辭而取二一題一、一題曰二爐邊閑談一、一題曰二曉山雪一也、秉レ燭刻二一寸一、先生賦二二詩一立成、見二蠟燭一則餘二半寸一、其詩曰、爐邊閑談題詩曰、閑燒二榾柮一禦二寒重一、共酌二醁醽一忘二夜深一、座上團團爐火底、溫談不レ歇動二春心一、又曉山雪題詩曰、四山夜深泛二寒光一、頃刻生レ花殘月長、夢覺猶疑還入レ夢、群仙跨レ鶴陟二崑岡一、是也、此一題詩者、打二銅鉢一、其韻響及レ滅、則詩成、皆可レ覽者也、奚翅昔日鸚鵡蜘蛛之對、七步之才而已哉、慶安五年春三月二日、不佞招二先生一、見二東山清水寺及鳥邊山大谷之櫻花一、設二筵於鳥邊山之花下、松間之青苔之上一、先生賦レ詩與レ予、予屢二賡韵一謝レ之、木下順庵田代宗的三宅玄三安東省菴林厚菴宇津宮由的次レ韻言レ志、酒酣而先生自二鳥邊山上一、四二顧京師一、溫顏微笑告レ予戲曰、我死後必瘞二此松間巖根一、於レ我足矣、其言今在レ耳、不肖追二思師言一、涙濡レ巾、至二鳥邊山一謁二遺廟一、爲二禮拜一、彷徨而不レ忍レ去、賦二小詩一、供二梅花一、灌二泉流一、祭二神靈一、其言曰、梅蕚供レ香從二我涙一、泉流當レ酒弔二先生一、而今憶得花前語、瘞在二松間一骨亦淸、不佞筆レ之、洩二師恩萬一於篇中一、且令孫松永昌雲秀才、來請レ布二其行狀一、此以不レ得二固辭一、忘二孤陋一、爲塞二其責一、贅二其楮尾一、故謹狀.

天和三年癸亥六月二日

昨非菴昌三末弟

瀧川昌樂隨有子欽誌之

尺五先生全集卷之一

賦類

扇賦一首

炎帝之火德兮、堪輿薰熇、祝融之先驅兮、群蒴苦燠、有虞施仁、設五明之巧、殷高有祥、發雉尾之福、輕箑頻搖、揮名於東關之假、九華忽開、發威於漢宮之蠹、觀夫始也、靑靑林中竹、剪裁質輕、薄薄齊邦紈、新裂月明、袖藏大塊之噫氣、舒卷隨意、身厭矮屋之炎蒸、天籟爰生、圖微蟲而與君實之詠、畫乘鸞而惱婕妤之情、況亦運動七輪之連續、滿室生寒、落筆六角之便面、價增三倍、縱雖不執韓滉之手、翕然見慕謝安之來、鼎峙之沸亂兮、三軍爲之指撝、畫妙之精絕兮、萬里疑咫尺在、西風忽起則蔽元規之塵汚人、東陽臨別、則悅袁宏仁風闡、嗚呼功用之博、行藏之時、新涼挽來、殘暑立推、不擇縉紳、負養之等、仁恩普施、能示進退出處之義、炎凉盛衰、同去大暑之酷吏、共揚仁風之雍熙、

不肖昌樂曰、先生是賦已成、而示二妙壽院惺窩師一、師一覧之、甚嘉奬曰、文勢工麗、不レ減二于古人一矣、

湯泉賦一首

雒之西南、攝之有馬、神泉沸燠、僊湯濺瀉、膚瓣筋僊革暫游、宿痾沈恙瘳頻灑、舊簡炳蔚、煥然數十歲之上、黎庶賞揚、瀰漫億萬年之下、原夫兩神闢基、二皇駐輦、神涯灌漑帝澤霑、◎澤下恐有脫字 行基師感金軀與崇餝、西叟協夢託彝脩闡、東關西門之喧池、靈霈異徵、江北江南之炎液、殊祥譾鮮、緬憶主簿山穴氣衝天、雞籠潤口信隨潮、佛陀院中、祥標佗邦、琉璃堂前、幷按本朝、驪山一涌、拭汚秦垢、華淸數幸、◎幸下恐有脫字 蒴唐祆、異域貽訾、藏顯功之妙用、敝邑濟衆、施仁需之恩饒、於是乎春氣盂、溫泉滔、高賢來浴、庸材共槽、游泳則學與點氣象、滌濯則覺過堯覆燾、希洋溢聖道之恩泉、蕩洗澆人欲之膩膏、

詩類

古詩

賀州逢雪賦古詩三十韻一首

星回將終調玄律、竭來幽都甚北涯、嚴寒震威物畏縮、
凍胗銀海裂骨肌、萬竅怒號衆籟起、排闥鳴鐵射門楣、
白雲紛糅無閑歇、瀌瀌奕奕又儌儌、異夢飛絮厭稠夥、

頭刻素濤起平遼、姫蒲黃竹何嗟歎、魯桓陰沴匪斯時、
聯檐氷筋逆劍戟、鋒鋩突頭寒威熹、深谷爲陵高山下、
埋沒蹊徑樵夫悲、充塞川瀆水底澁、皓渺漁艇迷水涯、
身著襏襫足束藁、還沓唯類老鬢髭、殊區別境易觀聽、
變態換狀離此羅、帝鄕風光今胡越、安否難料長吁咨、
累旬陰曀晻佳躅、漏天嶂地罕駁曦、凜烈壞瓦斷甍宇、
屋上堆壓懼頽欹、砌畔崔崒雪山現、蓬洞瑤臺簾際移、
牖外僊女駕雲鶴、映戶欄楳欠芬奇、群梼槎牙惡醜媸、
欵著紛葩萬朶垂、莊衢層積通簷上、奔使走卒如凍龜、
晴江鷗鷺眼難辨、叢底鷽雉應阻飢、天柱峯下步蟾影、
不夜城中曉籌遲、書窓耿烱照細字、緬憶孫康報懶癡、
梁王兎園何足比、鄒生枚叟歌勞搞、欲報平安援紙筆、
栗栗手龜淬澌捍、陟彼崔嵬望鄕里、滑路蹇澁屐齒危、
空歸旅館兀然坐、面交雖叙無切偲、老農荷鋤下辭苦、
穿破崑崙路平夷、士臣執鞭仕途闊、常侍雪宮知不綴、
心慘澹乎無何有、曷別華貊又憂嬉、北人僉云斯雪讃、
散漫滔天絕路岐、南人駭看肺肝碎、聊寫愁腸綴蕪詞、

五言律

題歸去來圖

奪化丹青手、挽回典午天、琴樽常設室、松菊幾經年、
容膝南窓潤、退身東作全、眞如遊栗里、漫要扣門邊、

題嬌鶯

剩寒春未半、睍睆屢遷喬、彈琴梅顏綻、投梭柳眼嬌、
楚關雲水潤、秦國樹林遙、學舞金衣袖、先庚如奏韶、

遊北野

菅姓肅譜廊、幽香此地多、餘寒尋蕚處、三月奈梅何、
林宿孤山雪、松飜瀛海波、詩神儼若在、鶯唱萬年歌、

暖徑芳草

春雪朝野隔、幽處艸嬋娟、才子尋詩夢、遊人思醉眠、
雪消敷碧玉、日暖曬靑氈、賜我綺羅褥、輪蹄怯近前、

元旦

曉風催淑氣、萬物改正晨、迎暖萌芽動、逐時翠柳勻、
辛盤催縷潔、玉曆入梅新、窓外黃鸝曲、一天皆唱春、

江南卜仙丈寓二居洛陽一、専攻二學業一、其餘暇設レ筵
羅レ肴、催二新綠之遊宴一、招二一二同志一、因以作二
五言律一搞二雅懷一、予亦應二其佳喚一、於是乎塵二韻尾一、
謝二懇欵一云爾、

軒渠

輦轂招搖外、聖經常見尊、醫門三折永、儒業萬文繁、
函丈論微蘊、僑居耽善言、開筵新綠酒、留得杏花村、

十七夜遊友人席

共尋工部詠、頻聽雨聲聽、越女障羅袂、湘妃隔素屛、
闌堦凝遠矚、草露想晶熒、既醉盃衆月、連霄終未醒、

元日

徒慣馮唐老、强揚椒酒盃、春暖冬日早、年伴月正來、
鬢駐將消雪、形慚已發梅、何分鵬鷃樂、適得起徘徊、

梅尾

溪橋霜沒跡、梅尾路茫茫、秋暮楓開奥、寺荒苔嗣粧、
講鐘穿霧響、夕梵掩扉揚、明惠惠燈影、煥然支與桑、

春雨

霏霏如縷細、布化酒天涯、時得一犂潤、始耕百穀嘉、
放桃紅入萼、洗草綠生牙、逢節恩光遍、發榮毎物加、

春晴和瀧川昌樂詩韻

懸綱朝霧散、杲杲映紅塵、縱目遙岑近、回頭幽景新、
林明花曬錦、風靜艸鋪茵、料識老漁夫、脫簑換漉巾、

春月

共愛朦朧夜、吟風憑小欄、梨花瑤弄影、柳絮雪何寒、
遊情刻金短、坐臻更漏殘、緬憶蘇子婦、淸賞陪秋看、

山路聞鵑

一聲望帝遠、雨霽步欣欣、秦樹翳朝日、楚山破曉雲、
旅天悲蕩子、鄕國念先君、彷彿將何去、巉巖停杖聞、

秋夜得心字

煙雨淒淒収、秋光露艸深、月明如白雲、風潔度蒼林、
佳客賞良夜、主人催詠吟、高樓携手上、萬事只斯心、

春雨

東風簾幕外、終日不吹晴、融液物鐘美、淋漓樹向榮、
午窓昏嶽色、蝶夢破簷聲、細細如絲亂、織成滿洛城、

八月末與諸子宴、得然字

嬰病索居久、良朋勸雅筵、紅楓留夕照、素菊浮堦前、
藤閣聯新律、蘭亭集舊賢、後盟尤莫闕、德業祝期然、

八月十三夜、瀧川氏昌樂書窓見月

生涯常賞月、屈指待中秋、飛鏡十三夜、開樽多少樓、
涼天浮白露、爽籟發林丘、漸若登崑閬、拾珠心不休、

十四夜、遊木下順菴亭賞月、

風晴秋日落、嶺上絕微雲、排闥甍瑩玉、臨池水晒紋、
更闌消思慮、境靜促歡欣、淸影勝明夜、未圓眞十分、

蓮

亭亭淸淨色、綠底染泥塗、藕隱非天質、藹承甘蔗蹢、
淡粧懷惠遠、紅艶慕麻姑、花寶同時出、展哉君子徒、

冉伯牛與諸弟子分十哲先生得之

瞻仰孔門裏、大哉十哲賢、仲弓差在後、閔損最居先、
寢病東牀下、傷心甯牖前、斯人亡命矣、唯聖克知天、

石榴

一叢開似火、春外占新姸、妃妻玉釵上、神仙丹鼎前、
雨沾紅臉淚、風任翠鬟燃、昔日星槎後、餘光照幾年、

初秋三日月得二木字一

薄暮厥生明、纖纖稱滿目、蛾眉黛未濃、蟾影粧潛伏、
清鏡匣將開、香輪車若覆、秋先從此宵、爽籟起林木、

次二恭安法眼餞別之韻一

秋晩林丘冷、離筵歌渭城、風材超子建、詩律憶淵明、
書閲五車帙、醫期三世名、爲言歸策日、別墅約吟行、

和下杏仙送レ吾赴二東武一之韻上

思君關內道、最切士峰煙、濃抹頻粧出、陰晴屢變遷、
山根蟠數國、絕頂挺天邊、縱唱宋濂曲、暫期野老還、

賡二岌淵法眼之韻一

贈言君子嚧、秋暮牽吾車、詩拉歐梅策、術凌張李書、
吳天雲渺邈、秦水樹扶疎、收拾江東景、歸期想敝廬、

繼二壽仙之韻一

秋風黃落日、揚策馬蹄輕、詩語驚人意、文章華我行、
辱榮任所遇、來往豈求名、欸想式微後、再盟期帝城、

押信經之韻

歸雁叫雲去、秋風促做裝、柳絲牽別恨、楓錦想還鄉、
浦景望魚腹、山行過鳳翔、餞吾瓊玖賜、戀戀豈應忘、

十八夜詠月安東省菴學窓見レ月

中秋三夜後、輪減惑吟身、愛影尋騷客、仰光懷故人、
天高涼氣重、更深賞心頻、忽誦少陵句、古今與月新、

即興、遊二醫三竹法印之家一

茗花開臘雪、騷社共彷徨、存性抱淵靜、保虛止吉祥、
繙芸追鄭蔡、施藥慕列張、且嘉呆亭勞、盍奪忘夜長、

山州氷室十二景

自寬峽

城北偎靈窟、崔嵬路環巒、白雲埋硐戶、碧樹遶空欄、
西蜀亭鍾秀、東山洞置安、考槃君可詠、峽入碩人寬、

攀月嶺

陟彼崔嵬處、高高幾歷艱、盪胸星可摘、矯首月堪攀、
絕頂割昏曉、閑雲伴往還、銀橋何日假、身託廣寒間、

雲窩溪

幽邃絕人跡、無心雲滿溪、全椒山畔景、台嶠界邊西、
寒早衣裳冷、路遙鐘磬悽、何時乘曉月、共聽杜鵑啼、

落猿岩

仰看青嶂上、蘚舊石巖巖、銜鳥尋花去、猿狙拾菓銜、
蒼崖纏葛藟、幽澗老松杉、疑誤入巫峽、一聲淚濕衫、

眠雲峰

望裏谷東峰、屈蟠似臥龍、雲衣誰表出、林袂自芬濃、
態傚淵明醉、意追邊氏慵、安眠常要熟、不變四時容、

轉潮山

歲寒能保節、鬱鬱翠光多、雨抹傾青蓋、時粧晒綺羅、
寺幽風送梵、林茂嶺揚波、崖古松十樹、蒼髯奈老何、

憂球灘

逝川比德業、名以憂球鳴、知水有原遠、儒流分派清、
吟胷消世慮、講舌轉溪聲、今古澤何竭、文瀾逐日生、

服涼坂

盤旋登且憩、靈籟每如秋、當暑拋輕箑、乘涼想敝裘、
勢凌雲夢澤、氣壓水晶樓、臨眺山丹境、颼然心未休、

霧海島

稻粱連隴畝、巖嶽一丘山、鴉帶斜陽去、牛垂昏暮還、
田邊生積霧、雲靄擁空辯、茫渺如仙島、何人置世間、

浴月沼

峰上團團月、臨池秋色深、迎輝魚出沒、樂水鷗浮沈、
洌亮影投玉、澄瑩波躍金、姮娥長賜浴、終夜洗胸襟、

藏氷古跡

氷室本仁政、徽猷助二王、短長迎日月、愆伏協陰陽、
周禮叙官職、豳風歌篇章、依然遺跡在、告朔喜存羊、

凌陰山靈

山中壇壝在、惟德伐氷神、遊客拾瑤草、楚人羞荼蘋、
肅雍施旺化、蕭索絕埃塵、倘主殫誠敬、靈威應日新、

和丈山公寫懷

君是庾鮑儔、新詩可自由、開襟王粲宅、飛翰仲宣樓、
將略藏懷抱、詞源廻倒流、盛名収拾早、冠冕識如漚、

月

曉鏡同一照、凭欄凝寸眸、揚輝筵背燭、愛宿笛登鉤、
黽勉攤書泌、絕奇題句休、夜闌望不厭、清賞在中秋、

遊二臨川絕境一 嵯峨臨川寺也

避暑臨川境、吟筇探勝幽、松間涼引客、綠深景湛濤、
遊日晝屏嶂、洗心碧玉流、此中眞至樂、聊欲問白鷗、

中秋十七夜月

中秋三五後、夜夜望嬋娟、風歇浮雲淺、星幽微翳連、
餘光分細縷、末影積純綿、暫覺巫山夢、瑤池宴未旋、

孟冬哉生明、次二丈山韻一謝二小廬丈就饗兼寄
レ僕之詩一

平生慙我頑、訪寂羨清閑、楓染楚山徑、菊殘陶宅間、
隱倫懷谷口、老髮樂商顏、嵓棲人寰外、仙瓢醉忘還、

和尙勝年少

簪紱侍觀迎、高譚忘俗情、招涼林樾淡、垂夜玉階淸、
勇往風騷陣、先登文字城、相期翰墨主、年少筆縱橫、

題程明道像

天追還四代、聖道待人開、生意窓前草、賜休玉色梅、
專明倫理學、永拂異端灾、千載不傳妙、臻君一一回、

和丈山

崔嵬登且歎、門水自依然、巖塔藏金唄、祇池橫白蓮、
溪松疑助嘯、河柳可貫鮮、碑字現山在、名將天壤連、

次細野氏詠庭梅二律一首七言入二七言律一

皎潔江南物、風流傍竹籬、清標氷骨色、惟德晴香時、
比孟玉蟾意、屬坡魯直詩、爲奴桃又李、誰可抗春姿、

題永觀堂

秋日禪林景、楓煙口靄晴、溪危勞採蕈、籬短耐含英、
修業紺園古、談空蓮沼淸、徜徉排世慮、淨室使心平、

丙申

第次回年早、曉來暖漸微、鶴聲延旋算、鶯舌促天機、
雨潤泉將滑、風和雪解圍、裁霞昔服麗、脫舊着新衣、

卒呈大明人元贇

相遇異鄉客、儀容心目融、詩誇曹植捷、文角馬遷雄、
貴國儒彌顯、吾民道不隆、蒹葭連玉樹、目擊有無中、

謹和凹凸丈山口號芳韻

耿介逢梅福、年來久避奢、幽棲三徑草、和煦滿庭花、
祭日尋晋嶽、偃山掛絳霞、清筵堪羨見、勝景屬詩家、

丁壽昌院之小諱辰也追悼一律 日野間玄琢院號

敬弔鷹峰畔、霜餘宿草寒、張朱功蓋世、陶謝性求難、
卒谷雲猶在、舊廬牆未乾、去年今日涙、掃墓又闌干、

中秋無月、遊二藏光院一得二浮字一此嵯峨之作、

遙尋西嶺月、驟雨妬中秋、醜好雖融會、乖逢不自由、
龜陰空掩玉、龍水俄維舟、藏有周生術、藏光坐上浮、

十六夜月

佳期尋勝境、携友出京城、昨夜西山雨、既望北闕晴、
吟行天有恨、遊趣景難并、世事常如許、君看欹器傾、

十七夜

靈籟拂陰翳、蟾光照八埏、晴巒侵歸近、雲漢帶涼懸、
宿鳥驚簾外、壁虫語枕邊、下絃雖入二、猶未減嬋娟、

十八夜月、得二回字一

秋半旬八宵、坐來月山頂、捲簾霜瓦寒、凭欄露叢冷、
影明宿鳥驚、天豁冥鴻回、淸境忘深更、摘奇論石鼎、

欽奉レ賡ニ宗甫公九月十三夜之佳什之末一

中秋似再逢、玉盤掛淸鏡、連巒絕翳陰、萬境促新靚、
騷壇巧評詩、文炭談性命、良夜又高朋、最畏罷更競、

題丈山庭上櫻

春夜懸紅燭、花間淸賞長、枝枝星若隕、樹樹月凝光、
烽燧褒姒笑、粉脂虢國粧、靑煙相映處、影是反魂香、

冬十月晦、與ニ丈山公一會ニ安節之亭一、其翌有レ詩
予亦作、

霜雪歲將暮、茶筵羅豆觴、交遊嚴適俗、詩話綽成章、
尙仲愧淸操、張朱讓驗方、主賓雙白璧、斯會不尋常、

水仙花

一自番風動、與梅約弟兄、雪膚黃玉淨、道骨縞衣淸、
薤葉粧加美、蘭叢衰愧榮、馮夷誤出否、花亦得佳名、

送大掘氏 幷引

緒爲質矯操、膏漆之不譾者也、樂益輔仁、淡交之不鬻者也、擊ニ嚶谷風一謳ニ歌伐木一者、信義出ニ闔懊一也、言大掘氏宗貞公、歷伺書囿、汎澤禮園、岐嶷敏聽、敡舉章彙、自夙齡專攻ニ詞謠一。令聲洋溢、響瀍ニ遏雲一調岀ニ潛鱗一、眷眷服レ之者、徒越潤孟冬訣手狂東之駿愕眊㬋然羨蹀躞馬背綴鑣望於士峯之暘巘兮、遊颶煙、蓬紲詐於天龍之壓奴兮、披黝黴耽ニ絕境一、躋ニ巉嵓一、斸ニ舊蹤一、周觀歷覽、羈愁豈在乎、雖之夷陋之有、君子之謂也、子不レ在レ茲乎、江東之雲吳州之月子思レ之、角弓出レ詩、嘉僖出レ傳、吾何誼、屬ニ饑蠹一、擴ニ樗材一、奬勿ニ淹滯一愍口唉擲◎本文似頗有誤謬今無自由讐校姑存疑

迢遞東關路、吟鞍遠征人、折枝惆悵送、羇畢別魂頻、
皚雪擁連巒、寒波湛岸濱、再遊尤莫忘、花馥餞陽春、

源光高公之挽詞四首 幷敘

加能越之司牧羽林次將源光高朝臣者、前太守黃門利常公之適嗣、而今之幕府左僕射源公大君之猶子、又長聟也、寵遇出ニ懿親之內一、眷渥拔ニ列侯之群一、位ニ三州億兆之上一、冠ニ方伯連帥之中一、抱ニ武門累葉之棟梁一、徵ニ日域北藩之鎭禦一、麟趾高望ニ周文之公子一、龍種遠想ニ漢高之流屬一、乃武不レ殺、乃文惟新、國家之柱礎、而四海之倚賴也、生而雄偉宏濶、人望而畏レ之、寬洪溫慈、民服而懷レ之、惟孝ニ于親一友ニ于兄弟一、小大臣僚侍御僕妾、中心悅而誠服矣、

使三司牧假レ之以二永年一、其間或有二傴僂猾レ夏噢喟寇レ邊、幕府令三之爲二將帥一、則夏殷之戰レ甘、伯禽之誓レ費、齊桓之召陵、晉文之城濮、秦孝之奮强、楚昭之陵弱、曹操之破二濡關一、謝元之克二淝水一、劉祐之禽二慕容超一、世民之戮二竇建德一、得二之心一、應二之手一、且伊呂之智、管晏之謀、蕭曹之規畫、良平之奇、鄧禹之平定・寇恂之鎭撫、馮異之整齊、梁冀之跋扈、諸葛之忠良、司馬懿之寬忍、王魏之極諫、姚宋之材、歆二慕之一、尋二求之一、日訪月問、然終不レ使下之見二施爲一遂中成功上、則司牧生來之不幸、而幕府股肱爪牙之一缺也、不二啻一缺一也、天下國家之所レ失二覬覦一也、始聞二魯論及貞觀政要一、丞知下聖賢之道、王伯之略、有レ益二國家一、有レ資二人已一、學問之力不上レ可レ誣而孳孳不レ倦、常侍二衛幕府于武江一、事レ君以レ忠使レ臣以レ禮、交レ友有レ信、接レ人有レ恭、和而不レ同正而無レ譎、天下之美談皆叢二于其身一然後稟二封於大君一、繼二國於家君一、還二旆於加城一、入統二領三州一、出恩二撫庶民一、傚下春秋循二行郊野一之法上、羽二獵于高岡一、漁二獵氷見浦一、予亦從レ之、夫浦之爲二體勢一也、碧巒高峙、蒼海漫漫、四際與レ雲連、波光與レ天接、岸芷嵩汀蘭、嵩花澗草、郁郁芬芬、釣舟垂レ綸、漁艇曳レ網、採二黿鼉之窟一、尋二馮夷之幽宮一、鱝鯖鱧鰤、鱸鯊鰛鯉、蟹蛤螺蜆、潑溂躍レ罾、呴濡粘砂、於レ是乎泛二樓船乎中流一、賦二唐詩一、詠二和歌一、窮二島嶼之縈廻一、循二洲渚之邐迤一、海濱之壯觀已終、司牧臂二蒼鷹一、呼二鷂隼一、擺レ撥鎩レ羽、雨レ毛灑レ血、長揚之遊、上林之娛、豈有二以加一レ之哉、既而歸、使三予讀二孟子并性理字義一、評二訂公孫丑萬章之徒難義答問一、窺二測程朱北溪之理學淵源一、自夫購二求梭閣萬架之牙籤一、謄二寫扶桑石錄之奇籍一、間步回鸞旆迎、予講二演書傳一曰、景二堯舜禹湯之執中一、欽二慕伊傅周召之訓詁一、旭鍛曛鍊、夜以日、倏蒙二幕府之徵書一、未二數月一而之二武江一、今茲何如凶歲歟、正保第二旃蒙作噩四月五日、饗賓之半筵、奄忽而逝焉、享年纔三十弌、惜矣、常侍三文敎可二自レ北而南一也、何斯道之難レ興レ于レ世、身有二周公之富與レ貴、命薄レ於二顏子之天一、哀哉、輀車經レ日、到二于加城一、予亦遙赴二弔禮一、國中閭閻不レ許二透入一也、聞說千官之縞素・反袂滿レ天、雪二萬夫之悲淚一、拭レ面滿レ地、百姓如レ喪二考妣一、不二卷

歌、春不レ相、翔者泳者、動ニ哀慕之姿一、喘耎肖翹、亦添ニ慟哭之啼一、天乎不幸哉、聊記ニ見聞所レ及、擒ニ戚痛之情一、製ニ五音律四首一、以充ニ祭奠一、

其一

英主司三國、提封幾萬千、一朝空棄去、百世怨相纏、

◎按後聯缺

其二

見龍文武質、壽考欲無涯、何定浮世事、難憑壯歲誇、彭殤人世異、顏跖命途差、不思春風後、空零第一花、

其三

指麾兵衛森、嚴警執膺侵、東閣大星墮、北雲新月沈、齊桓功未就、魯稷德惟深、命矣斯文發、佳城淚濕襟、

其四

旅櫬歸鄉國、北天雨泣紛、蟬鳴雖遺悶、鵑叫豈堪聞、山態自傷客、水聲亦慕君、風林傘將相、惜矣瘞孤墳、

梧桐

淸時令德澤、蓁蓁茂朝陽、伐琴材懷楚、削珪葉贈唐、井邊常淩影、秋節早生凉、群鳥何翔止、舊棲屬鳳凰、

霞

山頭催淑氣、彩麗巧新粧、嬌艷奪桃杏、淸輝映若桑、劉根常命駕、碩氏偶斟觴、天女裁春服、爲誰晒錦裳、

加能越太守陽廣院殿三周諱辰、於ニ龍峯禪窟芳春院一、以ニ幼君之命一、被レ行ニ齋會一、叨製ニ追悼一律一、以充ニ弔祭之禮一云、

賢牧大祥日、禪場齋會淸、鵑紅慟舊涙、貝葉絕塵聲、北路群臣思、東州孤主情、三年如電夢、花謝綠峥嵘、

送ニ奧村氏三首一幷序

正保[illegible]四強圉大淵獻格仲呂初五、丁ニ陽廣院殿三回忌辰一、爲ニ大祥之禮一、幼君之命、奧村氏日州公自ニ加之金澤一來レ于ニ雒之北阜龍峯芳春禪院一、執ニ行大齋會一、自ニ初一一屆ニ忌日一都四[illegible]、闔寺龍象英衲緇徒百六十有餘、戴ニ烏巾一纏ニ方袍一撾ニ鍵椎一、鳴ニ鐘磬一、梵音高韻ニ弘敞之堂宇一、儀範備ニ罄緇林之淸規一、整ニ其祭法一、竭ニ其弔禮一孝子追遠之誠、雖レ隔ニ千里一、如レ在ニ咫尺一、太守致ニ如在之於敬亡君一、勵ニ陳力之忠於ニ幼主一、想是雖レ不レ與レ祭、其心豈缺然哉、使乎使乎、大守乃祖乃考累世、予舊相識也、毎レ到ニ加國一預ニ眷遇之恩霈一、結ニ久要之歡心一、乃考主殿司者、自ニ弱齡一擷ニ六藝之芳潤一、嗜ニ百家之書味一、涸酌ニ洙泗之流一、近泝ニ濂洛之源一、常尊ニ

孔孟之遺編一、玩索終日、潜究二程朱之儒理一、黽勉忘レ食、可レ謂二左文右武明哲一矣、惜乎行年未レ到二强仕一而下世矣、幸今與二太守一、暢二其舊知之締交一、語二其旣往之親一、豈再如尋二祖考之舊盟一、又侶回二昔年之往日一、太守今茲初來二洛陽一時、維晴天永日、非レ可二幸而致一也、鳳闕禁省之墀、紫陌紅塵之街、皇風之淸夷、王化之累洽、東山西郊之殘紅、北阜離宮之嫩綠、並轡縱二覽於レ彼、同途遊二觀於レ此、是我所レ望三濡滯於二太守一者也、雖レ然官事無レ盬、君命不レ愆、期奠終後、將レ促二歸轡一、眷眷餘意未レ止、戀戀之胸襟無レ所レ擒、同製二五言律一、聊記二別情之壹鬱一云爾、

又

皇州春正暮、自此泛星槎、新綠繞山淨、殘紅夾路遮、
鷗前湖水遠、鵑外楚雲加、跋涉勞何憚、君言不宿家、

又

受命初來雒、先公禫服前、終軍存節早、王吉執廉連、
禮竭幼君敬、祭從衆祔禪、式微將在禫、酷惜別期遄、

又

專使奠終後、欲催輦轂遊、紫宸聯甲第、金闕挺重樓、
楓滿西郊爽、花園東阜稠、子規今勿叫、邂逅願遲留、

惺窩先生三十三回忌日拈香 并叙

慶安第四重光單閼無射旬有二日、惺窩先師之三十三回諱辰也、令嗣爲景朝臣究二禮奠之敬一、盡二祭享之誠一、遠者、人之所レ易レ忘也、能追レ之、惟孝子仁人之至情也、先師者、本朝台輔道長公之世家、而定家卿之雲孫也、自レ幼薙染入二緇徒一、居二萬年山禪窟一、有レ年二于茲一、天質英挺、夙智哲、應奉五行、蘇頲一覽、二妙備、四德幷、且眼界高明、胷宇開豁、聞レ往知レ來、卽レ始見レ終、觝二排漢唐記誦之俗儒一、尊二崇宋元性命之道學一、遂脫二却嵩山少林之禪機一、接二得濂溪伊洛之道脈一、解二法衣一、着二司馬之深衣一、抛二貝葉一、講二晦庵之集註一、始點三和訓於六籍一、新極二工夫於聖言一、昔在二延天之誕膺レ同、宏才碩學之鴻儒、强記博識之詞人、滿レ上列レ下、莫レ盛レ於二斯時一、寔文明之治世、學業之嘉運也、雖レ然誇二佔畢鉛槧之挾筴一、耽二鬪靡爭妍之刋虫一、刋レ陳落レ腐、好二文藻之絢麗一、回レ聲揣レ病、悅二詩章之精緻一、自レ厥以降、亘魁猾レ夏、兵燹脊レ國文道學術、棄如レ土、世乏レ人而不レ絶如レ縷、近代海內安泰、姦賊絶レ迹、先師崛二起百世之下一、超二邁千載之上一、懷

レ寶韜レ光、開三三徑於二北肉一、想二元亮之隱棲一、存レ心
尊レ性、求二天下之廣居一、養二孟子之浩然一、謝二絕世
故一、景二仰李愿一、中足不レ越レ閫、忙二殺杜五一、即世
無二古今一、地無二遠近一其心同、其理同、則聖聖一揆、
何有二異論一乎、我國眞儒之鼻祖、道學之濫觴、捨
レ公其誰歟、偉哉開二來學之功一、豈謪謪哉、爲景朝臣、
幼而雖二慈父見レ背、驥子汗血、鳳雛、奇毛、與二絕
世廢家一、已竭二至孝之終一、永開二來裔之統一、允中興
之人傑、門藩之楨幹也、即今丁二忌日一、設二宗祝之
儀一、奏二伶工之樂一、肅肅焉詳詳焉、然如レ在二其上一、
如レ在二其左右一、詩云、鼓瑟笙磬同音、又云、樂具
入奏、以綏後祿、其此之謂乎、又於二承天禪寺一、修二
齋會一、敲二揵椎一、是孝思迫切之情、無レ所レ不レ至、
於乎孝哉、同製二五言一以備二瓣香一云、

追遠曾純孝、敬同歲月加、深衣濕表德、道統顯無邪、
文瀾導東海、官門聯北家、儒林根蔕固 生實又生花、

中秋夜 依二天龍寺慈濟院虔長老佳招一、欲レ賞レ月、
薄暮泛二舟於洪河一、至二渡橋下一、經二臨川寺前一、耽二佳
景一爲二逸遊一、向二黃昏一、雨師來妨二遊賞一、終夜霶霈
矣、已入二藏光院一、酌二般若湯一、光心月越院主中虔
叟、藏二王君玉之只在浮雲最深處之佳句一、拈二出之一、
各鬮レ之取レ次相唱、而金春玉應、賦二無月之詩一塤篪
互和、余得二浮字一、中虔得二只字一、木下順庵最字在
字二題、瀧川玄育雲字處字二題、安東省菴深字、
各賦レ之言レ志也、中虔叟製レ序、

遙尋西嶺月、驟雨妬中秋、醜好雖融會、乖逢不自由、
龜陰空掩玉、龍水俄維舟、院有周生術、藏光坐上浮、

五言排律

春日遊禪林寺管由益令弟信遠有詩 予亦作

傍柳光明寺、尋花永觀堂 竹林禽樂暖、松際客遊莊、
晴日仰皇闕、霞間望雒陽、白櫻枝末雪、靑草綠生塘、
騷思憶陶謝、文談慕董楊、風閑山擁紫、景遠水浮光
東嶺鶯誇美、西郊蝶促粧、蓮池儲法鼎、蘭若甲禪場、
幽討費吟杖、登臨累酒觴、逍遙淸境畔 歸計落暉忘、

靈龜山虔座元來遊二矮居一、時維炎蒸、如レ在二洪
爐中一、三白了後製二排律一首一、押二其韻一云、

盛夏枉芒屩、風人淸苦吟、宏材抽意外、麗藻洗胸襟、
要相禪機熟、雅情詩巧深、文城能據固、筆陣獨應任、
竭力龍門浪、揚名龜項陰、精微靈徹思、婉約惠洪心、
由道雖矛盾、執交比鐵金、辨如河漢轉、談古文談今、

雁

陳陳隨陽猟、嗷嗷出塞聲、春違花北向、秋帶月南征、
漢武歌殊品、周宣詠泰平、質修夫婦約、心厚弟兄情、
齊思夷吾德、衛招孫氏爭、贊列虞臣禮、帛通胡虜誠
歸泉起塔廟、穿霧沒橋丁、呈字慰行旅、貫錢示學生、
衡州烟瘴暗 湘浦沙岸明、好待來賓節、爲尋舊客盟、

秋夜泛大井川見月

微霽西郊雨、密雲北岳頭、暮天風破昧、河水月輝流、
楓寺暗鐘近、煙村霜樹幽、凝眸峯頭雪、遣興岸邊秋、
陶謝調新律、庾鮑停雅輪、佳期如再遇、終夜又浮舟、（正意）

送法眼杏菴國手歸尾陽

管鮑締交昵、李蘇携手愁、心情如水淡、聚散若雲浮、
學養鷗軻氣、術包盧扁儔、文星輝洛邑、丹鼎返蓬丘、
早發天月馭、程宿霜葉秋、人生易危涙、離恨幾時休、

五言絶句

即興

盛縱秋色新、光景奈三春、今日詩遊外、千門會貴賓、（二竹）

和大醫院靜軒法印韻

君何憶帝京、所處德應生、蓋世成功後、待鳴鑾玉嚶、

題盤中紅楳紅鰕

林逋兼鶴子、盤中雙似卩、上元前一夜、燈外入詞花、

仙桂初作五言之詩各繼其韻予亦和之

初覩百葉詩、英發自今知、他日勵勳業、可期百世師、

和友人之韻

英髦遊翰墨、敏捷句驚人、前程誰可測、魁梧逐日新、

陪二京兆之瓊筵一見下道安法印遊二東湖一之詩上又嚴終之翟有レ作、余和二法印之韻一

醫國上池水 一篇金玉聲、羨思三月盡、多少鑑湖情、

冬日遊白雲山房

衰日應高換、北郊共徜徉、堂藏嘉遯德、地翠耦耕祥、
臘迫寒風烈、天晴山雲彰、所論經又景、恨在到斜陽、

又

山舍無人問、未聞機械妨、牧童過邑外、丁壯築池塘、
嬉話紅麟見、郊原白鷺翔、再尋王氏志、興盡返家鄉、

尺五先生全集卷之二

七言律詩

丑歳旦　尺五堂初逢春　松永昌三

新築新年迎淑景、白梅黃鳥覗聽娛、多才猶羨戴憑席、一醉不須鍾子圖、金殿登前彩霞麗、紺園逼後物華殊、何爲三徑無媒草、宿雨誤移尺五衢、

庚寅元旦

今晨自有太初氣、人靜物新晝掩門、出見衣冠朝禁闕、退從杖履往芳園、八句老子悅其壽、七百部經待再存、滿室春風溫飽外、醉翻彩袖戲兒孫、

卯試毫

却老丹成氷雪嶺、白頭朝襪絳霞毬、番風春早梅將綻、紀曆年遲椒始嘗、堂上椿花誇壽考、階前蘭草裏餘芳、新芽嫩葉還童態、俯仰怡顏生意長、

辰歳旦　履端之歲執徐之歲

璇穹迅轉雖常記、一事無功空失期、昨雨敲簷寒破睡、朝晴含暖物爭奇、具傳椒酒添歡洽、新換桃符除舊思、慚愧衰躬心未老、對花猶似少年時、

復答瀧川昌樂軒玄育書　松永昌三

尾陽之瀧川玄育秀才、价永三生、求余請謁、相看函丈、祗接須臾焉、壯年瀟灑出塵、耿介拔俗、周旋威儀、與其潔、與其進者邪、經南三日、寄一封於楠梧、展讀之、折巾歐蘇之手簡、効顰黃陳之餘韻者邪、却愧比余於程伯淳之一團一箇月坐了、習主簿之一會、三十年進益、云德云學、推獎過實、溢娓之好辭、非予所覬覦也、何可當也、無答語可報、然而有操觚之志、文脈接續、存養性之趣、義理昭着、示心之所適、彰學之所至、不誇絢縟之巧詞、無敝帚之私醜、苟以斯心畜謙遜之思、有載酒求是正之志、則覆一簣於平地者、我何不受之哉、其前程不可測也、因押其韻末、祝遠大、其和曰、

少年宜惜寸陰璧、老大悲傷何足論、仰慕繁華來帝闕、奉尊德性倚儒門、一篇詩律初投卷、萬卷書堂行觸藩、從是應勤燈火讀、芳聲廣譽待人言、

慶安元年孟冬

慶安元年夏五、不レ計依ニ
天恩一、於ニ蓬洞門外一賜ニ寸金土一、被レ許レ築ニ蝸廬一、新
構已成、不レ速之客來、不レ勝ニ歡悰一、製ニ七言
律一、告ニ諸友一云

菊後不圖天日好、搢紳武弁入貧家、簷間纔設吾儕席、
門外幸留長者車、荊棘誤生蓬闕側、楊園謾作畝丘加、
踈材緣底待秋實、斯會驩然先着花、

太上法皇應勅賦上苑之紅白牡丹

風塵櫻謝惜春殘、多少餘情屬牡丹、湘浦靈妃黧絳袂、
蓬山仙侶峙瓊冠、雨收階砌雲霞起、日永園邊氷雪寒、
紅白魏姚看不厭、瑤池宴罷倚欄干、

慶安三年三月五日、依ニ瀧川玄育（昌樂軒）秀才佳招一
遊ニ洛東豐國一、

洛東幽賞入春永、靈跡岳山梢向榮、豐廟櫻花枝壓雪、
鎭峯松樹色催晴、獨尊大殿廊腰緩、千佛長臺簷角明、
庚信方干泉石景、登臨何若對皇城、

瀧川昌樂軒玄育一信者、尾陽人也、遊ニ壽昌院三
竹巠門一、有レ年ニ于玆一、晤ニ誦素難百煉岐兪之頤
神一、倘ニ友李朱千煆活手段之妙術一、孳孳不レ已、探レ
囊起ニ九死一、察レ脉治ニ未病一、曲ニ痊沈恙一、躋ニ壽夭折一
之効驗、它日必可ニ屈レ指而俟一焉、可レ謂ニ克勤一
矣、且入ニ尺五堂一、翱ニ翔六經之芳苑一、泝ニ洄諸家
之詩流一、擷レ華咀レ英、分派統源、依レ是艶陽春時、共
携ニ壺觴一、尋ニ東山之花一、登ニ四明山一、敲ニ四字文山
隱士之梅關一、評ニ詩章一、得ニ浣花之髓一、涼天佳辰、
嘯ニ西嶺之月一、敲ニ寨馬中虔竹扉一、攻ニ五字城一而
追ニ石鼎一、袖レ詩論レ文、余比年同遊、隣並之居、暮
往朝來、允莫逆之友也、今茲首夏、忽賦ニ式微一、不レ
勝ニ別情一、作ニ七律一、華ニ其行一云爾、

心檀蠶門忘世慮、身居輦轂似丘山、燈前穿蠹經年久、
雲外聞鶻倚道還、劉毓丹誠通素問、葛洪玄術駐朱顏、
成功可稱無人助、匪懈令終孟許間、

慶安五年四月吉日

秋日遊泉涌寺

將尋香煙上東山、天豁日晶萬境間、泉涌僧坊消世慮、
惠峯佛閣鎖禪關、城南層塔穿雲聳、郊外遙村向晚閑、
四顧秋光楓未染、餘船一棹伐酡顏、

暮春遊黑谷紫雲山光明院

共惜春殘尋勝景、白櫻已謝紫藤催、光明寺塔聳丘墓、

女意瀑川處埜臺、隔谷禪林晴翠濕、點隅銀閣麗粧開、
東山一面容眉睫、遊趣假仁樂競來、

用二前韻一

澗草綿綿松鬱鬱、無人惇恔興堪催、孤園日永曼陀雨、
雙樹境閑般若臺、白鷺輕過白川上、紫藤時帶紫雲開、
晴絲自捲郊巒暮、幾覓殘紅歸去來。

春日遊北山

千株松樹洛陽北、古院花開遊戲塲、雲覆郊巒雖不快、
時貪春景思何妨、少章鈍馬難停轡、康節小車今豈粧、
薄暮淋漓無地避、未通姓字入僧房、

中秋翌日遊靈龜山

昨攀龜項入崑崗、懷姤綵鸞割客腸、眼穿法輪崖寺古、
心漸大井逝川長、嵐山吹練翻三級、松洞禪室擊鐘徹上方、
雲雨無聊秋草淚、空過佳節思幽茫、

蟋蟀

漫驚懶婦省機織、在野入床吟曲清、宮女貯籠懸枕畔、
高僧比管代簫聲、待秋已著王褒頌、鳴壁聊扶永叔情、
千載被書豳國詠、羽虫部裏得佳名、

山村晚步

斜陽扶杖立溪頭、山靄人煙一望幽、梅福隱棲何所在、
孫登長嘯暫來遊、倦飛禽鳥翠微暮、尋宿樵夫青嶂秋、
霧裏聞鐘知有徑、縱觀頃刻忘遲留、

鷹峰遊二三竹新築一、與二四字翁丈山一、同賞二明月一、

鐘山新築迎涼月、佳節相逢耆叉英、終日淋漓凝雅趣、
今宵清影暢吟情、玉宮潔色移村舍、銀界奇粧入洛京、
何羨武夷催好會、頻斟醇酒待天明、

殘暑

頻引新涼開戶立、遙山爽氣意先欣、高天燥烈扇難弃、
矮屋炎蒸書倦勤、趙盾慾期猶未去、蓐收司節令無聞、
待看筆陣文壇下、一鼓西風霍氏軍、

大原口號

獨騎鈍馬貪光景、八瀨水涯通大原、稚子巖頭擔虎杖、
閑僧竹塢劚龍孫、谿深略彴苦衣滑、天豁田畦麥浪飜、
浮生想見杜陵意、曲江蒂醉及黄昏、

顯佛眼院

蓬壺絶勝鐘神秀、石徑崎嶇佛閣開、松歷風霜欹斷岸、
水分呂律蘸莓苔、馴人待食雅兒近、出岫還留雲葉來、
白日孤燈淸照罷、菩提樹陰更徘徊、

遊勝林寺

薝蔔林間遊賓地、山身清淨自青青、細泉斷續傳琴韻、
疊巘縱横竦畫屏、千尺煙絲飄野馬、一雙巢燕蹴飛蜓、
閑中剿木題詩後、昏黑幽不耐鐘聽、

山路見藤

天工麗質挺凡塵、山路不言還惱人、誤愕王生羅步障、
飄疑石氏曬綸巾、海棠讓色雨中亂、蘭蕙分香風外樹、
將寫幽情無紙筆、暫時駐馬浪唫呻、

過迎光院見藤花

不住晴天選佛場、眞無拘礙騁幽望、文龍點水水口動、
錦帶低松裊裊長、韋曲罇前猶刺眼、慈恩庭畔自噴芳、
此花妖豔奪朱處、奇品十分憍靚粧、

魚山瀑布

峭壁崢嶸碧四圍、陰陽昏曉靜清暉、深林淋岸洞黿浴、
高漲木標冰雪飛、水精宮欄懸素練、香爐峰頂散明璣、
銀河萬丈衣裳冷、洗却惡詩乘月歸、

歸路寫懷

會隔山巒四里程、涼風馬背吹衣輕、赤城霞斷杜鵑叫、
黑谷煙連村鼓鳴、川上未看垂釣坐、野邊猶靡帶經耕、
嘯歌吳楚東南句、晚飯紛塵入洛京、

山村即事

旁礴乾坤何所適、藜美淡飯思無邪、截飛截集江村鳥、
時死時生口吻花、穉子第櫨藏彩筆、隣翁荒鼎煮新茶、
不才閑讀安仁賦、山隱還辭塵務譁、

題山陰僧房

閑轉法華飛錫杖、大千界裏自盃觀、行承筧水瀹茶鼎、
坐擲袈裟掛藥欄、黃卯林間梅實熟、青錢蝕壁蘚痕乾、
徑山會曰丈夫事、勿涉風塵世路難、

七言絕句

慶安四載二月九日

仲春釋菜聽講論語同賦讀論語詩幷序

記曰、仲春上丁、命二樂正一習レ舞釋菜、天子乃帥二三公九卿諸侯大夫一親往視レ之、蓋報レ德也、弘道之聖、莫レ盛二於夫子一、知恩之誠、莫レ大二於祭儀一、薀藻之菜、行潦之水、有レ禮可レ羞、有レ誠可レ饗、於レ是菲儀侵禮、微忱營奠、已非二圓冠博帶之士一、今集二青衿野服之徒一、列レ籩置レ尊、欽仰二聖像之儼然一、論レ文評レ學、景二慕賢者之卓爾一、家熟逢二良辰一、彰二微志一、烏知二庠序之禮樂一、同侶喜二善道一、助二薄禮一、爰視二性之彝德一、（◎性上恐有脫字）夫享多レ儀、不レ及レ物、爲二不享一、於レ物不レ足レ觀焉、於レ義少免二其罪一、是以

講書將レ充ニ獻芹一、非理何足張皇幽眇、賦期レ發ニ志趣一、◎賦下恐脫詩字 非詠寧可レ暢ニ叙雅懷一、想夫魯論、五經之管轄、六藝之喉衿、不レ可レ不レ讀、允大聖之遺訓、群賢之要語、何可レ不レ識、因レ玆絕レ章分レ篇、各揚ニ舌瀾於ニ翰海之風一角レ材抗レ思、互爭ニ評於ニ繭絲之微一侃侃然、誾誾然、陋室之榮、席上生レ花者乎、矧又寫ニ之唐詩一、動ニ盪精神一、◎以下數句恐有脫誤 共馳陳蘇鮑之詞苑闕之樂章、◎陳字上下恐有脫字 凝定ニ寸誠一、志及程朱李朱之降臨、所レ希崇儒之義、普施ニ之州閭鄉黨一、尊道之旨、盡涉ニ士農工商一、履レ霜至ニ堅氷一、涓滴不レ止、將レ成ニ巨海一、存羊不毀堂、◎毀下恐脫明字 纖善漸積、奚遠ニ聖門一、敢裁ニ狂斐一、以勸ニ學業一云爾、

謹序、

二萬三千字綴瑛、春風開卷拂塵情、青衿講舌瀾飜處、隔牖似聞鶯燕聲、　昌三

仝

仲脩選試微言裏、趙普勳功記誦餘、繪句絺章何認意、六經喉舌在斯書、　昌易

仝　　木下　順菴

三獻升堂各鞠躬、魯論講習道何窮、孔門忠恕萬殊本、趙氏乾坤半部中、

仝　　瀧川　昌樂軒 玄育

功賢堯舜德容優、薦菜春丁倚席周、政道彝倫懸魯典、勸懲褒貶述春秋、

仝　　平岩　仙桂

書部乾乾雖戈釣、年來餘力又何微、閑窓口吻生花處、更信趙公扶宋朝、

仝　　昌堅

春日讀書翰墨場、大哉孔聖道無量、勿嘆陳蔡絕糧厄、只自期窮行益彰、

仝　　林厚菴

晝誦宵思覺德聲、平心易心積霜星、漢儒底事爲人笑、錯把法言方聖經、

仝　　安東　省菴

禮容儼肅仰儒風、丁日繙經共折衷、正識終身堪誦處、懷安老少一言中、

仝　　醫生　道三

風俗陵夷不用愁、昔年孔聖已乘桴、曲肱飲水是眞樂、豈比人間萬戶侯、

仝　玄三

時習聖經精耐研、故知李氏嘆茫然、至仁施及幾千載、
享祀蘋蘩二月天、

仝　屋益二

至仁德澤遍乾坤、措大儒門講魯論、道統傳來千載後、
長教聖學到今尊、

仝　正策

研精覃思惜三餘、大聖遺言十卷書、汗牛充棟何足讀、
也知時習在從初、

仝　玄求

遺編讀破有精神、千歲儒風興起人、世上功名尤可愧、
正知原子處窮貧、

仝　三益

讀書字字理分明、辯惑闕疑事細評、夫子畏匡雖處困、
聖哉傳道道猶亨、

仝　宗謙

錄仁記德自巍巍、携卷每憂難蘊微、美玉正當初韞匱、
六經帕轄積光輝、

仝　正利今佐野了心

時習平生苟志仁、世間榮辱不關身、聖容千歲温良德、
仰望儒風日日新、

仝　右衛門尉山形隼人息

杏壇祀奠絶風塵、各講魯論儒教新、初識聖賢仁豈遠、
半天纖月舜何人、

仝　康勝

聖言及口與眞同、洙泗遺風日本東、二十篇中時習句、
古今高仰感麟翁、

釋菜式　元贇相傳今瀧川昌樂傳之

二月上丁日　學生若干人　樂人八人　禮生左右二人　禮役左右二人

一盥手(ヨクシユウ)　有二口傳一、
一燒香(シヤウヘン)　右禮生唱曰、上香(ヘン)再上香(ヘン)、三上香(ヘン)、有二口傳一、
一四拜　右禮生唱曰、鞠躬、左拜、右興、
左平(ヘイ)升(シン)有二口傳一、復位
一奠幣(テンピイ)有二口傳一　蘋蘩蘊藻榮盛、邃井菓子、類盛レ笠、
又奠帛(テンポ)　樂人奏二寧和曲一也
一祝版(シユクハン)有二口傳一　祭文
一獻酒(ヘンチユウ)有二口傳一　迎神安和曲起
一亞獻(アヘン)有二口傳一　景和曲起
一終獻有二口傳一

一徹饌有ニ口傳一　樂人有ニ口傳一　咸和曲起
一送神有ニ口傳一
一灌酒有ニ口傳一
　其時禮生唱曰、三献完滿、不ニ敢久留一、謹倚奉送、
一瘞帛有ニ口傳一　咸和曲起
右昔年此禮式、行于尺五堂、有口傳
　瀧川昌樂一信相傳焉

慶長五載二月上丁日釋菜、聽レ講ニ詩經一、同賦下讀ニ
毛詩ニ詩上、幷有ニ問答一、有レ序、如レ左、

問　傳曰、古者詩三千餘篇、及レ至ニ孔子一、去ニ其重複一、取レ可レ施ニ於禮義一、伏惟於ニ傳記所レ載逸詩之中一、蓋有下可レ施レ於ニ禮義一者上也、曷删レ之、取ニ鄭衛淫哇之詩ニ乎、倘爲ニ垂戒一、删雖ニ一篇一亦足矣、何爲ニ二國若干篇紛紛擾擾然乎、蓋欲レ使下人玩ニ其言一、審ニ其諷諭ニ而自化上レ之乎、其又欲使亦之懲被之絃管以盡得ニ性情之正一乎、◎其又以下數字不可讀恐有脫誤　不佞未レ達、願聞ニ解頤之辨一、

昨非菴瀧川昌樂謹問

對　竊惟夫詩之爲レ經、迨レ至ニ孔子一、去ニ其重複一、正ニ其紛亂一、而其善之不レ足ニ以爲レ法、惡之不レ足ニ以爲一レ戒者、則亦刋而去レ之、以從ニ簡約一、亦久遠、使三夫學者即レ是而有三以考ニ其得失一、善者師レ之、而惡者改焉、此聖人之憂ニ天下後世一可レ見爾、夫子所レ删之逸詩、縱雖レ有下施ニ于禮義一者上、聖人不レ取焉、此善之不レ足ニ以爲レ法者也、今所レ存之鄭衛之音、雖レ有ニ非禮淫行之風一、聖人取焉存、此惡之足ニ以爲レ戒者也、然則今所レ傳之三百餘篇、人事浹、天道備、潜純粹忠孝惻怛陳レ善閉レ邪之意、修レ身及レ家平ニ均天下一之道不レ待ニ他求一矣、吾子察レ之審レ之、

講習堂昌易對

仲春釋菜聽講詩經同賦

二南風化之本詩叙　木下順菴序之

大哉聖人之道、上自ニ王公一、下至ニ士庶人一、大而天地鬼神之變、君臣父子之倫、小而鳥獸草木之生、無レ不三皆由ニ斯道一、在昔堯舜禹湯文武周公之治ニ天下一、斯道行レ世、杲杲歷歷、如ニ日月之麗レ天、如ニ河嶽之列レ地、有レ生者孰不下仰ニ其德一而涵泳中其澤上乎、及ニ周之衰一、彝倫頹敗、綱紀錯亂、上下相奪、小

大失レ所、天下倀倀乎無レ知二斯道之適從一、孔夫子出二於斯時一、德盛道大、世不レ能レ容、故退删二述六經一、垂二敎萬世一、彜倫於レ是乎育、後之治二天下一者於レ是乎取レ法、記曰、祭有レ報焉、傳曰、盛德必百世祀、何只百世而已哉、其德敎垂二于億載一而罔レ極者、此乃所三以奠菜之報二于萬世一者也、是歲春之仲丁之上吉日辰良、松先生率二諸生一舍二采于講堂一、籩豆云陳、蘋藻惟馨、三獻四拜、升降揖讓、整整焉、肅肅焉、禮成講經罷發論、論畢賦詩、詩也題以二二南風化之本一、論也辨以二鄭衛淫哇之義一、講也演以二關雎正始之道一、於戲吟二咏情性一、涵二暢道德一、入レ人深而見レ功速者、莫二詩若一也、是以孝經學庸子輿氏之書、往往據レ之斷二其義一、周官之大師、據レ之敎二國子一、春秋列國之交際、據レ之達二其志一、加以二夫子賛易皇極之敷言一、亦協二其音一使二人諷誦詠歌、恍然而悟、悠然而得一、則此乃非下入之深而功之速者上也耶、原夫王業之興替、民風之黜陟、天保蓼莪之倫常、鳥獸草木識名之博洽、及物之忠厚、推至下彼動二天地一感二鬼神一者上、觸レ類旁通、善以興起、惡以懲創、吟咏涵暢、用二之鄉人一、用二之邦國一、以化二成天下一者、其本如レ之何哉、詩不レ云乎、刑二于寡妻一、至二于兄弟一、以御二于家邦一、故德化之本、始二於閨門一、閨門雍穆、公子信厚、關雎麟趾之化也、積行累功、庶類蕃殖、鵲巢騶虞之德也、此固非下詩乃吾上之風化而二南復爲二風化之基本一者上也耶、而今千載之下、諷二誦之一詠二歎之一、所レ以二懲創興起入レ人深而見レ功速一者、復非二夫子删述之德澤一也耶、王通之所レ謂罔極之恩者 於レ是乎可レ觀焉、若夫學海至レ海、晞レ驥附レ驥、諸生能服二先生之敎一、而得二情性之正一、擴二充斯道之大一、以家國天下興起、叙正位育之法、則豈徒奠菜献享云乎哉、復可レ謂下報二 夫子罔極之萬一一者上歟、其講レ經者 先生、論辨者難レ兄難レ弟、賦レ詩者滿堂之諸生皆然、如二僕不肖一、幸遭二遇乎斯時一、猥與二執事之榮一、不レ忍二默默一、忘二其踈陋一、以贅二詩首一、非三敢比二之於卜氏一、聊以託二區區之寸忱一云、其詩曰、

木下順菴

丁祭言詩仰席珍、二南正始本人倫、遺音好用房中樂、和作温柔敎化春、

同賦　講習堂昌易□

盛德從來所廣覃、風詩吟了味回甘、成周王化三分後、八百洪基在二南、

同賦　懷德堂人永三

移風易俗二南基、聖化洋洋及四維、周政昔年若時雨、一天發育物皆宜、

同　瀧川玄育

二南宜學豈墻面、近可脩身遠及民、風化縱令委蔓草、若微孔聖有誰陳、

同　安東省菴

丁日誦詩尊敎風、底忱蔦菜沃國衷、邦基託始周兼召、方伯紀綱從此隆、

同　林厚巷

仰祈至化杏壇春、永被繁禧序典倫、堂上諷吟二南典、洋洋興起面墻人、

同　昌堅

周召施功風化新、黎民總不有艱辛、文王遺德幾千歲、今見太平中古春、

同　玄三

堂上洋洋三獻成、二南講說質論評、閨門風化播人處、□蒲乾坤仰聖明

同　康勝

聖代歌謠盡正風、蒼生教化二南中、令聲來許未曾已、堂上繙詩感治功、

同　正利佐野了心

周召化行覃八紘、遺風始識感情生、蘋蘩依舊豆籩外、詩義開葩前漢衡、

同　右衛門尉

上丁祀典古今同、蔦菜殷懃讀國風、周召造端王業本、當時方作太平功、

同　正棠

遺風至化顯彝倫、元自二南及惠民、六藝敎修洙泗上、聖儒恩澤洽斯人、

同　喜三

四海王風何在涯、澤覃異域遍中華、化民辟國成周德、歡樂吾人無思邪、

同　單菴

澤加南土始施功、季札遺倫實不空、八百年來周室美、洪基都在此篇中、

同　閑易

甞薦蘋蘩仰聖賢、閒詩見禮自嚴然、旣知周召張綱紀、
赫赫邦基屬兩篇、

同　昌三尺五堂人

自北而南周德新、閨門多助數家人、一從姬旦功成後、
王化普敷天下春、

賡瀧川玄育櫻花韻

遠見羅襦近雪霜、色奴桃李不尋常、從來名品欠吟久、
屈子梅花甫海棠、

東山見櫻花

群櫻吐雪古墳前、東岱春粧物競妍、登覽莫誇謝安洞、
京城萬戶與雲連、

題豐社

豐國尋來春色加、廟前依舊着櫻花、頹垣厭草苔埋徑、
鶯曲如悲助怨嗟、

遊淸水寺

淸水樓臺尋景時、林端山影夕陽奇、不才何愧向櫻賦、
直把飛流洗惡詩、

春日待花

山色朝朝襯(シタカサネニス)彩霞、物逢時雨發榮加、杏桃似麥春將半、
漫慕堯夫脂小車、

祝鶴與板倉防州公

瑞羽霜毛聲聞天、東皐獵獻玉皇前、君臣値遇齡偕弱、
先祝仙禽千萬年、

同

東海蓬瀛鶴作群、秋來羽獵獲多欣、祗今盛代祝千載、
好執仙禽先獻君、

秋日遊東山

周遊萍水是西東、文會惜陰矮屋中、一望京洛多景外、
又添今日勝花楓、

三竹靜主人讀ニ楚辭一、偶逢ニ蒲節一、因賦ニ一絕一、以乞ニ予和一、醉中走レ筆、報ニ惆款之曼乙一云爾、

蒲節祝來仙鶴年、擧人長慕屈平賢、佳期今日催吟處、
偶爾離騷至幾編、

暮春遊黑谷、避風望山麓白川流水

丘壑厭風來澗邊、景殊心換暫留連、白川餘水流觴曲、
淸光勿空春暮天、

燈前話舊

夜來求友事遨遊、同隊情親心不休、靜語往時都似海、
未央燭淚先人流、

依二瀧川玄育秀才佳招一、而遊二頂妙寺之池邊一、
將消殘暑至池邊、薄暮鐘聲盃酒前、明月浮雲秋始好、松間風渡忘更遷、
初秋十四日、野間玉岑法印之忌日也、至二鷹岑一弔二玄琢之遺廟一、
蓁蓁宿草七經年、湛酌招魂遺廟前、曾憶舊遊秋日涙、西風難拂北山邊、
讀前赤壁賦
坡翁俯仰盡文章、一葉秋遊屬既望、赤壁當時風月笛、餘音千載響無疆、
題瀧川玄育昌樂軒學窓之杜鵑花
南漪風景促詩筵、一朶杜鵑花自嫣、紅染氍毹耀庭際、匆憇今日學窓前、
昌先生告レ予曰、此詩料、取下東坡之南漪杜鵑無二天下一徵香殿上紅氍毹之二句上云云、
新樹
山眉畫黛萬紅零、恰若朝來宿酒醒、蜀魄聲中春已去、林容依舊眼終青、
奉和爲景公梅柳爭春之瓊韻
風光稱意暖園邊、梅柳爭春雨色連、庾嶺縱誇晴好美、龍池聊奈雨奇妍、

瀧育註曰、爲景公、下冷泉藤惺窩公之長男、侍教藤中納言、號譚玄十、後爲二 天子之師一、任二侍讀學士一、經二翰林侍講一、受二 後光明帝之良遇一、異二于他一、　○庾嶺稱梅、龍池言柳、晴好雨奇稱美妍、東坡詩、水光瀲灎晴方好、山色空濛雨亦奇、欲把西湖比西子、淡粧濃抹也相宜、○美妍二字出二於西子一西子西施、美婦人也、

紀行

自二九月二日出一レ洛、至二八日一至二賀州小松及金澤一、
詩五十一首、
粟田口
第三橋外洛陽東、人馬繽紛來往忽、萬國祗今太平象、關門不鎖一天中、
御廟野
道老峰前古廟容、蕭然孤立識遺蹤、飛龍千載昇天去、抔土猶殘數十松、
相坂關
淑裝期露出都門、相坂雲狂雨又昏、關寨自玆千萬里、往憂還喜割人魂、
大津浦
琵湖雨暗掩吟眸、水色天光一樣幽、往帆歸舟看不見、風流空背洞夜秋、

膳所城

湖雲江雨擁高城、粉壁朱甍見不明、若過晴天斜照景
映波倒影暢秋情、

勢多橋

湖面雨淋波色濃、勢多橋上渡長虹、何望大志客題柱、
富貴有天命化工、

草津

夾路喬松幾十程、茅檐薄暮母留行、燈前今夜旅床始、
雲色雨聲先隔京、

出草津

蓐食衾收數五更、隣雞唱了吼華鯨、此行願借飛廉力、
撥却雲煙求快晴、

臍村

朝來雨歇仰穹蒼、解駁屯雲日漏光、洞口山眉半顰笑、
陰晴殊態促吟長

森山

森山蕭索小檐中、一日稽留陰壁空、誤踏近州東道去、
被遮秋潦恨天公、

同

無事臥床心不平、風顛信口慰秋情、阻河阻雨皆常耳、
人世幸途何亦驚、

宿森山

孤床無睡想征途、壁蟀叢蟲泣向吾、終夜隣姑聽不穩、
雨般聲入併長吁、

阻矢須川水

秋水漲來停旅人、矢須河畔暫逡巡、憑夷若在吾應責、
辛苦心頭又苦辛、

同

前途阻水止村邊、將追趦趄如鋼然、河上在森無傳說、
憂危始識國忘賢、

同赴矢須河

平旦天公快賜晴、馮夷亦是寄恩情、人生憂喜手飜覆、
鐵石丈夫心不輕、

渡河

河水豚啣初駭看、暴流三日沫波殘、傍人深厲相携去、
獨舉經轎心自安、

矢野無根

逾河飛駕取長途、雨後晴天心自娛、初見江東江北路、
淡濃山水郭熙圖、

鏡山

一峯偃蹇峙數仭、雨洗煙鬟翠微潤、湖面高懸鏡山容、
水光相對磨不磷、

武佐

經過三日近東中、茅舍村園一樣同、積雨初晴稻粱熟、
漸俯秋獲埜農忽、

馬淵

聞說巨川斯地多、征夫有雨病經過、中途水溢泥兼石、
艱澁遲遲奈泊何、

愛智川

數渡無舟經曠長、西風凜冽掠山光、稍經松徑人家在、
越智川邊及夕陽、

高宮

高宮絺綌古今宜、紡績女功比屋奇、文道從來頹敗久、
民人何識葛覃詩、

佐和山

瞰影輝城聳一隅、潭山風境冠東途、往年姦賊做王莽、
分裂邦家入戰圖、

小野宿

行程四顧一村淸、不少時留信步征、小野宿邊聽名久、
初來勝境我心平、

鳥居本

心足人生麤淡休、浮雲富貴識無由、羨看禰國佳山水、
脩竹茂林魚鳥遊、

磨針嶺

溪轉峰圍行不窮、雨餘添碧水村中、磨針嶺下仰纖路、
寂寂無人秋草濃、

箕浦

野老腰鎌刈稻粱、春耕夏耨待時忙、村童農奴饁田畝、
何處遺賢有孟光、

與二永二

第轍從吾函谷關、初背千水萬里山、賢愚縱使隔穹壤、
慈愛何殊禍福門、

宮川

遠山蒼翠近山靑、蟠虎臥龍千樣形、數十程中看不厭、
色身淸淨若心醒、

大谷

桑畝苧畦墻有桑、蕎花雪白稻粱黃、農夫何識淸閑樂、
牙角不全天地常、

柳瀨

斯地曾聞古戰場、山河爲固孰爭强、豐君神速回多算、

越國三軍一擧亡、

又

縈迴砂礫兩峯間、潺潺溪聲瀉不閑、遙寫瑯琊醉亭夢、
釀泉風致解愁顏、

又

無名花草各私開、丘壑天然非巧裁、堪笑平泉山水美、
擧枝削葉奈童孩、

鐔井坂

屈盤山路若脩蛇、抰北高低勞倦加、幽鳥不鳴人不到、
溪聲長舌助嘆嗟、

今庄

靑山重疊遶今庄、溪水潺潺流道傍、依舊人家迎送外、
觀音寺裏午鐘長、

湯尾峠

巑岏湯尾翠崖岡、雲樹葱瓏攀嶮長、絕頂遙觀前越路、
平夷從是絕羊腸、

府中

越國秋光已令看、黄花未發暮風寒、岐陽聞說天微雪、
候氣相齊思不安、

早行

茅店霜嚴秋曉寒、幽都風候涉艱難、朝來征路山川態、
莫做皐州一樣看、

泰澄大師廟

泰澄遺廟驛程傍、梯航履歷見靈場、白山神約合符契、
普救俱廬冠朔方、

途中淺生津橋

晴日輝天雲霧消、經過縱目淺生橋、停輿借問孤村社、
僉曰應神經幾朝、

福井城

越城高聳入雲霄、初日樓臺如綴瑤、五十年來無擧燧、
陶朱秘策不曾饒、

舟梁

雙軸橫舟連作梁、鐵繩纏曳繫堤防、秋來水漲須衝破、
修補終功行不妨、

途中

稻畦千頃若鋪氈、白鷺雙飛斜日邊、遠村幽樹晚煙裏、
豆人寸馬畫屛前、

金津

迢遞于征日已酉、金津村舍奇（寄イ）同棲、從來此處陰寒早、
蕭瑟終宵風響溪、

又

遊息柴扉落照時、遐邦風致不爭奇、宵分假寐孤床上、
歸雁一聲驚旅思、

早行

侵星昧爽任轎行、鷄犬村村互有聲、只見東峰雲一縷、
高低數里逮天明、

細呂木

前越周回到賀陽、遶墻溝水斷封疆、秋粧何隔兩般色
四海同風混一長、

見北海

海浸乾隅接北溟、晨光映浪若藍青、田租賦(料イ)外魚鹽利、
天府遐邦振古寗、

大正寺(一作聖)

往日親戀化國人、右(古イ)家饒益匪吾仁、蓁蓁寅夕講堂鼓、
民俗到今猶不新、

菅生天神

林樹蕭森圍一丘、路傍嚴然廟壇幽、菅生先世輔皇化、
神惠千年猶未休、

小松

行盡加陽雄地淸、卸囊歸馬暢羇情、小松城古人騰茂、
猶入東風物自榮、

昌先生曰、東風、指二東照權現一言、利家公自二家康公一賜二賀能越三國之人物繁榮上也云云、

於二北村季吟亭一講二和漢朗詠集一之竟宴、題下冬景
似二春華一之意上、

梅顏早綻雅遊新、地暖江南未雪辰、臺上凞凞歟飽、
寒山景麗訝逢春、

恭靖先生遺稿

錦里文集序

古人有言曰、文章經國大業、不朽盛事、蓋謂羽翼名教、裨益風化者也、豈尋常詩文云哉、嘗聞錦里平直夫、天資敦敏、博學洽聞、無書不讀、無讀不記、特以道學、爲山斗于一世矣、當是之時、海內學士大夫、靡不知有錦里先生、且也遊其門者、有若源室二氏、有若梁田氏、有若雨森氏、有若祇園氏、碩儒俊才、繼踵而起、郁々濟濟、菁莪之美、到于今稱焉、而其所蘊蓄、發爲文章、故其文汪洋澹蕩、斟而不竭、注而不盈、有呑雲夢八九之氣象、其所稱述、往々發道德仁義之微、操修身治人之要、所關係者至大矣、所謂經國不朽者、其庶幾乎、正德中、男寅亮摺摭遺文、編爲十有八卷、以藏其家、蓋直夫不欲以詞章著、以故散軼者不少云、玄孫正直、恐其久而淪沒、頃者命工上梓、方今海內寧靜、載籍之道、與世共隆、若夫源室梁祇等集、已刊行、而獨此集則未也、但直夫嘗以道學名其家、文章則其餘事耳、雖然汪洋澹蕩、其可不以傳哉、正直仕吾族加賀中將、故常常來見、因乞予序、予感永言孝思之義、聊以數語題其首云爾、

天明丁未仲冬　正二位菅原胤長撰

錦里文集序

盛矣哉錦里先生門之得人也、參謀大政、則源君美在中、室直淸師禮、應對外國、則雨森東伯陽、松浦儀禎卿、文章則祇園瑜伯玉、西山順泰健甫、南部景衡思聰、博該則榊原玄輔希翊、皆瑰奇絕倫之材矣、向其岡島達之至性、岡田文之謹厚、堀山輔之志操、井三省之氣節、石原學魯之靜退、亦不易得者、而師禮之經術、在中之典刑、實曠古之偉器、一代之通儒也、夫以若數子之資、而終身奉遵服膺先生之訓、不敢一辭有異同焉、則先生之德與學可想矣、而先生無一卷述作、今雖欲聞其所以訓導成就

數子一之方上、而私淑甲其何以哉、先輩蘭林中村深藏之學、出レ於二室師禮一、邦彥少時從レ其問レ經、屢就叩二先生之事一、亦擧二大學修身說一外佗不レ能レ道二其詳一焉、則似下先生之事終不乙可三以得二聞一也、辛卯歲邦彥罷二藩役一、徙往レ于レ京、先生遠孫靜、字正直、來遊二邦彥之門一、一日出二一束書策一而泣焉、曰是靜遠祖之遺文、靜之祖、上則參二贊幕籌一、下則敎二育羣材一、其於二道與レ國、不レ爲レ無二小補一焉、今其門人著述文集皆盛行、而此獨埋二沒塵筒一、是靜等之罪也、將下節レ食約レ衣以爲二此集一圖中不朽上何如、邦彥聞而喜出二意外一、取而讀レ之卒レ業、其文典雅而博、汪洋以核、雖下或出二一時戲謔之餘一者上、亦皆歸レ于二爲レ己及レ物之學一、宜乎其陶二鑄數子一而成二偉器一矣、邦彥既得レ詳二數子淵源之自一、而樂レ成二正直追孝之美一、因償二歷年景慕之萬一一、而又得下附二託編端一以不朽上、則亦望外之幸矣、是所丁以不丙以二謭劣一而辭乙序言之請甲也

天明七年丁未十二月

阿波國儒員柴邦彥撰

錦里先生全集序

楩楠豫章、天下之良材、生レ於二深山之中一、產レ於二谿谷之傍一、立則爲二衆木之宗一、仆則爲二萬世之用一矣、堅質直理、密緻博通、無二膏油一而光澤生、不二刻畫一而文章成、當二其榮茂之時一、千枝萬葉、參レ天接レ漢、鬱乎雲蔽、燦乎霞擧、日夜之所レ息、雨露之所レ潤、生生不レ息也、當二其腐朽之日一、寸斷尺株、浮流橫野、堅者補レ朽、短者續レ長、鏇觴以爲レ器、丹漆以爲レ飾、用用不レ盡也、豈可レ比下蒲柳枯楊之委二棄于道路一者上乎哉、先君子抱二天質穎悟之器一、而遇二太平無事之世一、一生之受用、以二道德性命之學一爲二根本一、以二博聞多識一爲二枝葉一、其如二詩賦文章一、殘膏剩馥而已、是以上遡二洙泗之淵源一、下挹二濂洛之波瀾一、傍至レ于二天經地志釋老稗官小說之類一、無レ不レ讀焉、故積年之工夫、翕而爲二德業一、散而爲二文章一、所レ謂和順積レ內、而英華顯レ外者、未レ有下如二先君之本末始終相備一者上也、豈良材奇珍、非二天下萬世之至寶一耶、旣而沒後、欲下閱二遺稿一而編次上焉、不肖忝二陰補一、而無レ幾近侍二

憲廟二十餘年矣、晨入夜直、亦不二暇給一、頃年處二閒散之地一、頗有二暇日一、遂續二夙志一、拾二摭舊稿一、編爲二若干卷一、然先君不下以二詩文一爲上レ業、故平日所レ作、往往不レ留レ稿、散逸者多矣、嗚呼、如二是編一、實有下關レ于二世敎一者上、而其流芳餘澤、終使下子枝孫葉蒙二其德蔭一、延及中桃李之纍纍上、亦盛矣哉、

正德乙未秋七月

木寅亮謹撰

錦里先生小傳

先考姓平、氏木下、諱貞幹、字直夫、順菴、錦里、敏愼齋、薔薇洞、皆別稱也、其先平家忠臣彌平兵衞宗淸之裔也、子孫世住二伊賀一、柘植爲レ氏、四世祖有レ故而移二居京師一、改二木下氏一、祖意春有二五男一、先考實次子也、生而岐嶷、五六歲讀レ書學レ字、聰明卓犖異二常兒一、鄕閭稱二其俊邁一、旣而作レ詩屬レ文、往二來于公卿之間一、題詠頗多、亦與二五岳僧侶一爲二方外交一、皆嘆二其奇才一、十三歲、作二太平頌一、獻二烏丸亞相藤公一、因遂達二

天覽一、世以爲二國瑞一、厥後受三業於二惺窩先生之門人尺五先生一、先生有下遊二出一頭一之嘆上、門友如二貝原損軒、安東省菴、宇都宮遯菴一、皆英豪也、推爲二先達一以矜式焉、夙興夜寐、勤苦磨礪、學業大進、弟子彌衆、嘗從二但馬守柳生某一遊二於江戶一、道不レ合、決然而歸レ洛、屏レ跡讀レ書幾二十年、聲名動二天下一矣、當二是時一、加藩菅公好レ學樂レ善、殆有二河間東平之風一、遍招二天下之名儒一、講レ書論レ文、聞二先考之名一、欲レ聘、先考辭曰、余尺五先生門人也、今先生之子永

三見在、請先聘焉、菅公嘉二其義一、竟聘二先考一、嗣聘二
永三一、初先考仕レ於二菅公一也、定二居　京師一、陪二　東
武一、往二北海一、氈席不レ暖、往來絡繹、曾在二東武一
日、閣老酒井公適至二藩邸一、聞二先考之名一、請而見
レ之、先考獻二小律一首一、其餘列國侯伯欲二接見一者多
矣、皆辭不レ往、先考年彌高、德彌卲、海內之士、耳
熟二其名一、口腴二其行一、
幕府每レ有二選擧之事一、必以二先考一爲レ首、
常憲公之初、特徵入侍、無レ幾、令レ修二國史一、書成
而上、賚賜褒二其勞一、爾後
常憲公親講二周易一、每令三先考侍二其座一、夏必　賜以二
絺綌一、冬必　賜以二綿襖一、曾命二先考一講二中庸一、數
令下近臣勞二其年老一而不上レ怠二侍奉一、而先考耿耿丹心、
常憂二報　恩日淺一也、其在　レ朝也、終日整齊嚴肅、
如二不レ容者一、其在レ家也、雖レ燕二居私室一、恒盛服端
坐、人望レ之如レ神、天資至孝、事二父母一致二其志一、
極二其養一、友二愛兄弟一、共レ被連レ床、父母沒、行二三年
喪一、撫二育兄弟子一猶二己出一、使二役奴隷一、慈惠有レ恩、
娶二三宅澹菴君女一爲レ配、先卒、後不二再娶一、孤枕獨
衾如二野僧一然、平生一無二嗜欲一、食必淡泊、服必黃
白、元祿戊寅冬十有二月二十有二日、病卒レ于レ家、
享年七十八、遺言以二孝經一卷一相隨、門人私諡曰二
恭靖一、二男三女、長敬簡先卒、次寅亮、一女亦先沒、
一女不レ嫁終レ身、一女嫁二堀氏一、

不肖男寅亮謹撰

凡例

金薤之照曜、悉現瓊瑤之琳琅、錦囊之儲蓄、都感蓼莪之劬勞、守株只知讀父書、傳經何以貽孫謀、爰專校讎、務要精選、安求縣國門之虛名、聊擬遺竹帛之不朽、

家庭遺稿、次第難速詮次、篋笥累篇、繕寫但急編摩、或先或後、勿妨文章之大體、隨書隨校況分品目之各部、

先君子夙泛濫百家、晩饜飫六經、排金溪之窠臼、闢紫陽之關鍵、羹墻存道、言言涉理路、名教定脚、行行履樂地、或雖取頭巾之誚、庶無負席珍之任、

豐州以前之詩、稱杜老之少作、海外以後之文、推坡仙之晩成、是以文章之機杼、不關年齒之早晩、西京之稿、半係夙齡蜚遯之時、東武之稿、多係晩節　徵命之後、早韮晩菘、倶具佳味、春蘭秋菊、孰非芳香、

楚筵設醴、千古英主之遇、梁苑授簡、一時大夫之才、況其朝夕進講、納牖約之規、小大叩問、見鐘鳴之應、爰錄北海之著作、以觀東平之樂善、羈縻之信幣、咏鹿鳴之雅章、縞紵之交契、見鳳樓之大製、豈敢取眩曜於異域、復將修懇款於寳鄰、日者坊刻多闕、今則帳祕悉發、全託譯言於兎穎、庶騰聲價於雞林、

東西南北之跡、不負四方之志、林泉丘壑之奇、信屬千里之遊、故稿號于役、聊效廬陵之志、興稱破浪、最見宗慤之豪、

貪魚者、密罟芳餌、而未免遺鱗、逐禽者、恢網勁弩、安能盡逸翮、此後務收拾散軼、庶經營續編、雖曰災棗、應念肯堂、

男寅亮識

恭靖先生遺稿目錄

恭靖先生遺稿卷一

平安木貞幹直夫著
男　寅　亮　編
遠孫　　靜　校

序

和名本草序

余讀二周官一、至下醫師列三于二天官一、而食醫先上于二疾醫一、未二嘗不レ嘆下古之仁人憂二天下萬世一之深上也、今夫人之罹レ於二疾病一也、寒暑燥濕感二其外一、喜怒憂思攻二其內一、而其初始レ諸二飮食一者、比比而是、六氣七情之於レ人、有レ時而無、至レ於二飮食一、則人生日用不レ可二一日闕一、猶下水火之不上レ可二一日廢一也、水火固不レ可二一日而廢一已、然火而不レ愼、或燎レ原而不レ可二撲滅一、水而無三以提二防之一、小而沒溺、大而潰決、其爲レ害可レ勝レ言哉、是故曲突而徙レ薪、利導而疏瀹、則世豈有二焚溺之患一哉、此之謂レ防レ於二未然一、此之謂レ備レ豫、書云、唯事事有レ備、有レ備無レ患、易云、豫之時義大矣哉、古之聖人不レ治二已病一、治二未病一、其亦如レ此也

夫、夫淡溺之起ㇾ于二水火一也、患之形ㇾ于ㇾ外而可ㇾ見者也、疾病之由ㇾ于二飲食一也、患之萌ㇾ于ㇾ內、而非下常人之所二能見一者上也、可ㇾ見之患雖ㇾ大、治ㇾ之得二其道一、則其患自除、若夫不ㇾ可ㇾ見之患、用而不ㇾ知、習而不ㇾ察、漸漬積聚、至ㇾ於ㇾ不ㇾ可二救藥一、則其患誠大矣、天下之憂、莫ㇾ大二積ㇾ于ㇾ微成一ㇾ于ㇾ漸、不ㇾ知不ㇾ察、至ㇾ于下頽敗而無上ㇾ可二如何一、宋范文正公憂二天下之憂一者也、其禱ㇾ神之言曰、不ㇾ得ㇾ為二宰相一、願為二良醫一、以為宰相救二人于ㇾ上、良醫活二人于ㇾ下、尊卑之分雖ㇾ異、濟世之心則同也、故曰、醫、仁術也、然而天下之大、億兆之衆、水土異ㇾ宜、剛柔異ㇾ禀、六氣七情之為ㇾ祟、未三必人人而同二也、則藥之之術、又烏可二一槩而施一焉、至ㇾ若二飲食一、則天下之口之所ㇾ同、而萬世人人之所ㇾ賴、於ㇾ是乎防ㇾ之愼ㇾ之、此乃匹夫匹婦可二以與知一可二以與能一者、其為ㇾ術也、不二亦易而簡一乎、易則易ㇾ知、簡則易ㇾ從、所ㇾ謂博施濟衆、其亦在ㇾ茲與、周官之先二食醫一、其用ㇾ心也深矣哉、觀水子、今之名醫也、邇者賀陽執政前田孝貞以二食飲之易ㇾ忽、而疾病之易ㇾ乘、屬ㇾ之撰二和名本草一書一、以備二君庖之用一、誠重ㇾ之也、書成、觀水子問二序於一ㇾ予、其編撰之說、已具ㇾ於二自敘及凡例一、余特嘆二觀水子用ㇾ心之勤、而益ㇾ人之大一也、夫一氣之生也、蓋載之間、未二必不ㇾ同、然山川風土、國異州殊、故曰、百里不ㇾ同ㇾ風、千里不ㇾ同ㇾ俗、而草木禽魚生ㇾ於二其間一、豈能無ㇾ異、且人之名二其物一也、方言俚諺、不ㇾ可二一一而齊一、蟛蜞之誤食、露葵之謬稱、在ㇾ于二中華一尙然、而況隔海絕域、物產之有無、形狀之大小、名同實異、似ㇾ是而非、豈易ㇾ辨二其眞一哉、觀水子據二中華之本草一、考二此間之稱呼一、博采二衆說一、旁搜二幽微一、正ㇾ名覈ㇾ實、求ㇾ是去ㇾ非、精而記ㇾ之、疑則闕ㇾ之、其用心之勤也、至矣哉、嗚呼、此書之成、豈唯邦君庖廚之用而已、擴而布二之天下一、使三人人豫二防愼一養於飲食之微一、銷二病患於未萌一、躋二億兆於壽域一、則仁術之博濟也已、觀水子名元升、字以順、氏向井、而觀水其別號也、其術之精、世所二遍頌一、不二復贅ㇾ于ㇾ茲、

早春會二集冷泉公亭一詩序

夫繼ㇾ絕興ㇾ廢者、聖主之所ㇾ必、善政之所ㇾ急、而當二其選一者、令德英才、衆望之所ㇾ仰、輿論之所ㇾ歸、而後可三能負二荷先業一也、羽林郞中藤公者、惺窩先生之家嗣、而京極

黃門之雲孫也、丁亥夏五月、
太上皇　詔使下接二冷泉之下流一、與中宿衛之禁卒上、雜佩晨鳴、長裾夕曳、鵷班鷺行、巍三巍濟四濟於二　青瑣丹墀之中一、夫冷泉家者、京極黃門之遺緒、和歌者流之所レ宗、加以二惺窩先生一、傳二千歲之道學一、持二百世之文衡一、則奉二其遺緒一者、豈淺學小才之所二能當一哉、難波津之跡、淺香山之詞、揚二其波瀾一、掇二其英華一、李神社聖、蘇新黃奇、洞視深察、千變萬化、頃刻數百千言、宜乎其當二才望之選一、接二絕廢之系一也、若夫一氣旋轉、三春忽至、風光浩蕩、物色和融、禽聲花容、欣欣熙熙、羅二列軒庭一、以供二觴咏一、則公能無二技痒一乎、於レ是開二賓館一、延二墨客一、賦二暖日之遷鶯一、分二短策之題咏一、錦綉奪レ目、珠玉盈レ案、於戲、宴會嬉笑之間、動以二文墨一相娛、非下徒留連光景而已上、則公之素志篤二斯文一者可レ見矣、雖レ然文藝末也、遂能激二冷泉之餘波一、起二儒門之遺流一、忠言格レ上、膏澤流レ下、光二先人緒業一、副二
聖上期待一、則前程其可レ量乎、席間命レ予述二其顚末一、幸託二龍門一、及レ見二盛事一、豈能磨二兜堅一乎、茲卒綴二鄙言一、以爲レ序云、

暮春陪二尺五先生一遊二吉田東岡一詩序

青律將レ暮、風光澹蕩、氣和日暄、春服既成、尺五先生與二數輩諸生一、遊二洛水之東北一、三宅玄三幹二其事一、漱二鴨社之清冷一、嘯二吉田之岡嶺一、芳草如レ織、茂樹似レ畫、紅鵑紫藤、火燎雲屯、望二銀閣一而惆悵、悲二喜之荒遊一、撫二青松一以徜徉、嘆二兼好之長往一、飛レ觴賦レ詩、優游咏歸、今夫世之登レ山臨レ水者、比比皆是、而其心果同乎、峰巒環列、如レ坐如レ立、如レ俯如レ仰、如二覆壺一、如二畫眉一、如レ龍如レ虎、如二群鳥驚犇一、如二夏雲騰湧、江河脈分一、流者瀦者、直者曲者、斜者帶者、煙霞波瀾、千態萬狀、接二眼目一、發二筆墨一者、詞客文人之事也、振二衣高岡一、洗二耳清泉一、閒雲無レ心、舒卷自由、流水不レ競、行止任レ運、資レ於レ外安レ於レ內者、隱士逸侶之操也、高者爲レ山、卑者爲レ川、草木禽獸、蟲豸鱗介、萬象森然、各得二其所一、仁人所レ樂、逝者如レ斯、得レ諸レ物覺レ諸レ理者、學レ道者之心也、今先生率二諸生一、諸生從二先生一、將安居乎、果能得三此心之理於二登臨觀望之間一、則爲二詞客文人一也可、爲二隱士逸侶一也可、而況從三先生於二斯道一者乎、彼浴レ乎レ沂風レ乎二舞雩一之樂、豈又出二此心

之外者哉、噫、窮居野處、雲山煙水、騁千里之目、懷萬古之感、以言其志者、微管城子將又誰憑、詩凡若干、列之於左云、

軍醫寶鑑序

寒暑燥濕之攻其外也、飲食男女之蠱其內也、所由來者漸矣、則治之之法、猶可以緩而得、一診之或未察、刀圭之或不中、失於此得於彼、損於前補於後、未可遽至不起之甚也、夫戰陣之際、弓弩砲銃、殺人於百步之外、矛戟刀劍、決死於尋常之內、幸而不死、洞腸胃、中肯綮、命在呼吸之間、其救之之術急則活、緩則死、茅元儀所謂軍中之疾、莫急於金瘡、噫、夫信急而難矣哉、此金折之祝藥攻養療節之法、所以云云於周官者也、近世河內有吉益半笑者、金瘍之術、妙得精巧、發衆流之蘊、立一家之標、其姪匡明、亦克傳術業、益多所發明、遂乃彙集傳家妙方、及其所自得者、還爲換骨祕錄、錄成、受業者襲爲珍藏、生田丈菴少遊匡明之門、深請其術、祝藥療節之所施、百不失一、於是乎、本所傳換骨之祕、加以中華之醫方、參之於平生所用經驗良方、條分臚列、編爲若干篇、名曰軍醫寶鑑、想夫軍旅倉卒之際、繇此照之、則刀斧劍戟、箭頭鉛子、一治則得其功驗、急者緩、難者易、其猶明鏡一懸、則妍媸短長、毛髮之美、心膽之隱、無不得其情、此非瘍科者救急之至寶乎、世之傳此書者、若執一定之法、不知變通之意、則所謂按圖索驥者、復大方家之所嗤笑也、可不愼乎、而今海內清平、兵革不起、然而武辨輕俠之士、馳馬試劍、爭辱於片言、輕死於鴻毛、則刃傷折傷、不爲不多、而況慮亂於治、豫有其備者、國家之善謀也、此軍醫之所以不可不講於平時、而寶鑑之所爲作也、丈菴名榮智、舊姓伴氏、甲賀之豪族、有故更氏生田、其子丈仙與予、有同寮之契、屢需其叙不已、遂述所聞、以塞其請云、

御法一貫集序

天下之事、萬有不同、而天下之理一也、天下之理一者、人心之所同然也、若能心一於理、則事之萬有不同、莫不一以貫之矣、心之理之於天下也、大哉要哉、東方之人仁、仁者必有勇、故我東方國、風俗勇武、天下莫之抗焉、夫人之用武也、

必有資於物而成矣、弓者五兵之長、馬者行地之最、是以韋弁家之資於用也、弓馬爲大、諺曰、弓者士之手也、馬者士之足也、士之資弓馬、猶人之用手足、手有以執、足有以蹈、而天下之事、其復有行而不成者也哉、夫物有定變、擇有難易、射之擇弓、亦猶御之相馬、然弓之六材九和、規制往來、木理邪正、有一定可知者、其擇之也不難、馬之爲物、其性不一、有駿者、有騂者、進者退者、躍者騰者、籋雲者、超澗者、而有詭御竊轡者、有懼變易人者、其性有萬變不同、則其相之也實有不易者、而其萬變不同、欲一一而應之、則轡御鞍韉、無勝其擾、手足身心、不知所安、此必有可得其要而御之者也矣、若夫正度乎胸臆之中、執節乎掌握之間、內得于心、外合馬志、則神思所運、一以貫萬、而範驅縱騁、莫不適而可矣、所謂理一分殊、取乎心應乎物、得其簡要者也、市橋昌盛研精乘馭之術、深通馬性之理、百慮一致、同行異情、無不透徹矣、遂極衆流之蘊、約爲一家之書、大綱十二、細目若干、合爲百條、而騎乘之萬變、無不歸於一、名曰御法一貫集、以爲非簡無以御煩、非要無以乘機、簡之與要、得之一心、而萬有不同、莫不貫之、其亦庶幾乎理一分殊矣、或疑一貫、聖門傳心之微言也、御末伎也、以此名書、擬非其倫、無乃不可乎、是不然、御之爲道、藝之六而有法之五、載於周官、咏於葩經、聖人所執、賢者所論、不一而足、其可爲小乎、物有本末、道無精粗、洒掃應對、精義入神、下學上達、其誰間之、況東方勇武之俗、不可一日無其備矣、此豈末伎云乎、其又擬非倫云乎、余亦擴而言之、周穆之御八駿也、車轍馬跡、欲周天下、昌盛之術、人人學之、推之天下、以天下之人御天下之馬、則昌盛馬跡周天下、而術之大也可見而已、昌盛介于人、求敘其書、余善其術之精而志之壹、於是乎書、

戰馬中和集序

大凡人之馭物也、循其性、通其意、則其類雖異、情則同焉、龍之神九淵、虎之虓深山、非羈靮銜轡之可施也、而擾而馴、媚而服、其唯人之從、無佗、情同也、矧乎畜于家、養于牧、制調之具、

乘馭之術、存レ乎レ人者乎、
本朝之俗、雄心壯勇、顓用ニ武治一、凡皮革羽毛、銅鐵
竹樹之可レ助ニ武備器械一者、旁採精擇、不レ遺ニ其用一、
況馬軍政之所レ急、何不下周ニ備制調之具一、閑中習乘馭
之術上哉、人雖ニ或備且習一、而盡ニ其巧妙一者益又鮮
矣、山陽世卿吉川江君廣純益好ニ其術一、日夕練磨、殆
三十歳、世之名レ於ニ騎法一者　多聞博學　以窮ニ閫奧一、
故縱横磬控、驅驟馳走、驀ニ澗濞一、躐ニ風雲一者、曲得ニ
其妙一、介聲美譽、籍三籍於ニ侯國之間一、於レ是乎述下其
平日所レ得レ於ニ心手之際一者上、輯爲ニ一書一、名曰ニ戰馬中
和集一、其意以爲馬之爲レ用、唯戎爲レ大、故鞍鐙御轡
鞭策等類、一以四便三利於ニ戰鬪一爲レ務、皆爲ニ之圖
記一、制調之具既備矣、而乘馭之術有三少乖ニ戾其性一、
則馬之與レ人、情相牴牾、奔軼頓踣、不レ至レ于レ敗也
幾希、吾心不レ偏不レ倚、湛然不レ動レ於レ物、逢レ場而
作、隨レ時而安、然後周旋從容、咸中ニ其節一、意氣相
通、人馬相忘、則跨鐙不レ資三御轡一、據鞍不レ假ニ鞭
策一、進退徐疾、左右逢源、無ニ適不一レ可、此乃胸臆之
中、脣吻之和、內得レ於レ心、外合ニ馬志一者、則類
之巽而情之同也、可ニ梗槩而知一焉、至レ若ニ篇終之六
件一、横提俯仰、明暗左右先後陰陽之説　苟臻ニ其極一、安
則雖ニ古善馭之妙一、亦不ニ多讓一矣、夫治不レ忘レ亂、安
不レ忘レ危、賢君明主之遠慮、而又　本朝用レ武之雄
心也、君之德禮以駕ニ馭其下一、撫ニ循其民一、則藉藉聲
譽之實　斯其可レ觀者、中云和云、戰馬云乎哉、

讀書拔尤錄序

書不レ可レ不レ讀、而讀レ之不レ擇ニ其善一、不レ若ニ不レ讀之
爲一レ愈、擇而讀レ之、讀而不レ得ニ其要一、不レ可三以爲ニ
善讀者一、此必擇之善、得之要　而後可ニ以不一レ負ニ古
人之志一矣、古之君子著レ書見レ志、其必精思苦心、
以明ニ斯道一、而鹵莽之學、孟浪之見、容易讀レ之、則
安在三能得ニ其要一哉、夫六經古也、有宋以來、於レ元
於レ明、諸儒先正、傳道之書、家家具在、予竊愛ニ河
東薛子讀書錄者一、誠心之純、敬身之篤　言言皆實、
淡而不レ厭、質而有レ文、如下布帛菽粟之不上レ可ニ一日
無一、吾敬レ之信レ之、以爲書之善者、濂洛關閩之後、
其類幾希、此書之不レ可レ不レ讀者也、吾嘗謂學者讀ニ
薛子書一、知ニ其有一レ味、則可レ知下其學之進上於ニ誠身一、
想夫布帛菽粟、比ニ之綀𦄂錦綺一、則淡也質也、然滋ニ
血肉一煥ニ體膚一之功、不レ可ニ須臾闕一也、此則天下之

至珍、其誰間レ之哉、吾友奥村顯思、得二薛子書一、晝而讀レ之、夜而念レ之、出則諷レ之、入則省レ之、遂擇下切レ己之尤者上、抜爲二一卷一、題曰二讀書抜尤録一、佩服玩味、以爲二修身之方一、可レ謂レ得二讀書之要一矣、雖レ然人之讀レ書、若レ登レ山然、其步之進、則所レ見愈遠、其志之高、則所レ取自異、今之所レ謂尤者、此豈他日之尤者哉、今之所レ謂抜者、其又他日之抜者哉、今之所レ抜、純誠篤敬、其切レ于レ己如レ此、則他日之所レ取、亦復何如也、君子之言レ治二人之病一、猶如二醫之用レ藥也、醫之用レ藥、溫涼補瀉、種種弁蓄、唯病之適、書之立レ言、進修啓發、省察懲懲、人人可三資以救二其失一、而所レ謂讀書録、此其尤者也、牽牛甘遂、去レ滯逐レ水、其効如レ神、用レ之不レ適、則爲レ害也大矣、參苓白 、中和平正、君子之劑、而衛生家之日用有レ益、亦猶下布帛菽粟之不上可二一日而闕一也、薛子之言簡而文、溫而理、純誠篤敬、淡乎若二家常飯不一レ可レ厭、傳云、有レ德者必有レ言、宜乎君子之德之言、溯レ中而彪レ外也、

送三田君之二越州一序

余友田君初爲二越州幕職一、今歳甲戌、受三任於二其州代官一、代官之爲レ職、未レ爲二甚顯一、而君夙抱二經濟志一、訓二鍊時務一、而今處二斯職一、則於二君之才一、固未レ爲レ當矣、世之知レ君者、竊爲レ君嗟惜無レ已、而君亦鞅鞅有二不レ樂之色一、見レ于二眉睫之間一、余之於レ君、相識固不レ淺、則爲レ君嗟而惜レ之者、殊甚レ於二佗人一矣、君之不レ獲レ志也、固久介二然于一レ懷矣、今也憂而嘆レ之者、亦復甚レ於二君之自處一焉、然而今吾於レ君、將二喜而賀一焉、未二必憂レ之而嘆一焉、今於二其行一也、將下爲二一言之贈賀一而解上レ之、則吾奚可レ已レ於二斯言一乎、古之人、家貧親老、則不レ擇レ祿而仕、毛義奉レ檄、其喜可レ知已、如レ君椿萱在レ堂、齡幾古稀、而甘旨之奉、不レ充二朝夕一、今也補二斯職一、而俸入未レ豐、奉養所レ需、略亦無レ闕、則君固可レ無二歉然一、而毛義之喜、於レ是乎可レ得已、況歲時伏臘、稱レ觴行レ壽、父母之心、欣然忘レ憂、愉然相樂、則祿養之願有レ求レ乎レ外乎、雖レ然吾將三爲レ君賀 而又期二君於遠大一焉、代官之爲レ職、雖二卑微一、有二民人一焉、有二社稷一焉、亦足二以爲一レ政、君於レ是乎、少試二其才一、敷二惠施三化乎斯民一、則經濟之施二時務一者、其有レ獲レ乎二其志一焉、其大者遠者、無下施而不レ可者上也、假令君處三位乎二公相一、受二任

鼎鉉一、而言之不レ聽、道之不レ行、暗然取レ容、苟且偸合、顧爲二身家之圖一、口將レ言囁嚅乎不二敢言一、足將レ進趑趄乎不二敢進一、依レ此致三位於二通顯一、著三名於二門閥一、則君將二甘爲レ之耶、君必不レ爲、孰若職之卑任之微、猶足丙以行二其志一而施乙其道甲也耶、是吾持レ是爲レ解乎、君果不可乎、抑又君之志之逌、將レ得レ當二其才一也、吾將下爲レ君憂而惜上レ之、而所下以反致二之賀一、而重爲中之解上、是何不可乎哉、如レ是、則君何鞅鞅不レ樂之色之有、君於レ是矍然起レ席謝曰、然、余乃書以爲二田君贈一、

記

櫻岡記

名山勝境、蔽レ於レ古顯レ於レ今者、必有二擇美之智一、擧二之始一、愛物之仁、成二之終一、而後其名可下以播二遠近一而垂中永久上也、所レ謂美不二自美一、因レ人而彰、昔聞二其言一、而今信二其事一矣、肥陽距レ城數里、所有堆岡曰二佐波一、加州太守藤公食采之部內也、岡之勢起レ自二平地一、不下與二衆山一接上、坡陀如二蟄伏一、曼延如二龍走一、厥初人不レ知二其爲レ勝矣、先太守行レ部也、一望レ之覺レ有レ異焉、命剪二榛穢一、屏二蓊翳一、樹二亭於レ頂、蓺二櫻於レ傍、改二名櫻岡一、意籌心謀、設置略備、而有レ故不レ果、公廼繼二先志一、益爲二構築一、更造二亭館一、以爲二游衍之所一、其觀覽之壯也、華甍粉壁之矗聳、閭閻街陌之區別、鬱鬱葱葱、隱二映喬木脩竹之間一者、佐賀城郭之繁麗也、白水一條、宛轉曲折、帶縈紬直、鱗二朝霞一練二晚烟一者、小城河流之明媚也、桑柘千村、沃野萬頃、田中之廬、伍伍什什、參差交錯者、再熟之稻 而陸海之富也、連峰嶙嶒、崇丘漫阜、茂林修麓、自レ西而北、自レ北而東、羅峙綿亘、不レ可二名狀一、而所レ謂天山圓通岩藏淸水祇園高城水上者、此中佳處、而浮屠之窟宅也、至レ若三岐海之環二其南一也、雨色晴光、千態萬容、湧レ白褭レ碧、舸經舫緯、往來不レ絕、漁網朝晒、蜑火昏明、斜雁獨鶴、沒レ於二島雲浦霧之外一、浩渺乎莫レ知二其所レ極矣、且溫泉括之隔レ海、阿蘇峰之異レ州、遙靑遠黛、獻二奇几席之下一、効二恠眼眶之際一、凡數十百里之景象、於レ是乎鍾矣、嗚呼盛矣哉、先太守之擧レ美也、而取三之於二榛蕪翳薈之餘一、則可レ謂下擇而精者上也矣、今滿岡花樹、璨榮爛熳、凝雲堆雪、居人悅、遊客娛、埃𡐦由レ之排遣、塵勞以レ之消歇、熙熙然、逌二遙春臺和煦之內一、則公之成レ物

也、可謂敦厥愛者也矣、然則四方之士、往來乎此者、必指之曰、創攬勝地、善善之智也、恢張先業、親親之仁也、智以始之、仁以終之、於其國家、又何有哉、彼樂山與水、則逸政之餘事、而其英名茂實、垂于不朽也者、昭昭可期焉耳矣、余之謁公於京東、述其涯略、求爲之記、余嘗辱先太守之知、其遺美之彰、喜而不辭、遂據所聞而書、

遊東山禪林寺記

東山多名刹勝槩之地、各以所適己心處爲稱首、余初欲盡其境遍覽之、而弗果、獨禪林寺高僧慶全和尙、以余有舊識之因、往還屢遊者有歲、寺距京師僅一許里、而無車馬之勞、又無風波之險、似遠不遠、似近不近、其間之所經、犬雞牛巷、稼穡耕耘、桑麻離離、禾黍垂垂、草牖夜織、竹扉朝春、凡大小涉淸川行、殆可六七、浸水纔不沒脛、渟渟然冷冷然、或漱或盥、獨煩折酲、遂與一二友、環坐其上、呼所載之酒、竭所攜之囊、徜徉而玩焉、優游而戲焉、既而到寺門、架石作梁、溪水淙淙而下瀉、左右有竹林、枝葉蔽芾、其大者尺許、限以短垣、繚以翠麓、既入門尙百武許、枉峰佐岩、挾以綠樹千株、蒙蒙乎參天、密密乎蔽日、故無施張蓋之勞、不假揮扇之力、碧蘿無幄、美蔭蟬鳴、青蘚列屛、幽溪鳥靜、既而入第二門、石梁亦尙如前、千姿撮奇、萬態攬要、寂然離障、蟬蛻汚濁、疑登釋氏非相之天、淡乎消意、鶴遊太虛、如入老氏無何之鄕、而行尙五十餘武、然山勢周環、連亘不絕、窮幽挾勝、若迎若送、其間之景象、飫心飽目、不可以筆舌狀盡焉、既而行路傍有勢州桑名自齋夫婦之墓、余以鄕邑之人弔之、怜之、乃爲題詩曰、一睡百年人、空爲萬鬼隣、悲風吹木葉、飛化古墳塵、既而行尙數武、自山腹架竹、遙通山後、泉溶溶濃濃、曳則爲練、濺則爲雨、如琴可聞可玩、下有石罇、積水不滿尺、久旱尙無涸、乃爲題詩曰、冷若雪氷甘若飴、筧流響耐入桐絲、涓涓不止石坳處、活水有源無涸時、既而折西出北門、沿方丈徐行、尙十餘武、而甃石作方井、縱橫不盈三尺、深亦如之、水勢跔突、泓止明淸、洗眼耳之塵、磨心舌之垢、院院汲而茶鐺沸、寮寮掬而筆研濕、乃題詩曰、小泓淸可掬、

來訪屢忘還、沒レ脛碧潭下、曲レ肱彩石邊、澆レ山雲氣濕、狀レ地野水漣、時見茶烟起、院僧汲自煎、既而度二通天橋一、階級鱗次而登、五步而喘、十步而息、廻曲至二御影堂一、木像廿許、儼然對坐、尙如二生時一、堂後有二鎭守神一、置二八幡春日熊野權現之三廟一、令レ護二四方一也、折而登二阿彌陀堂一、飾無二丹漆一、塗用二土堊一、泰然座、郭然樂、高山驅レ神、深林沈レ思、西指二洛都一、則宮殿參差矣、北對二黑谷一、則山塔特起矣、含三萬景於二半窗中一、極三千里於二一瞬間一、故文客墨賢之輩、肩摩趾錯、有二來而遊、咏而歸者一、又鄙凡賤士之族、括レ饑沽レ酒、有下雜沓而至、酩醒而去者上、夫山水者、得レ人而名著、人亦以二山水一而情暢、乃爲題詩曰、寂寥山閣孤林暮、涼氣沁レ人坐二碧空一、梵磬音凌蒼漢上、檐鈴高聳紫雲中、鹿鳴荻下三更月、蟬駭松陰十里風、景象多端詩叵レ說、一欄登眺亦無レ窮、而下二石磴一、磴數五十級許、折而遶二衆寮一、寮僧九十人許、中庭有二玉池一、湛然而止、凜乎而靜、畜二小魚數頭一、水亦無二腥氣一、乃爲題レ詩曰、一池淸徹照二人面一、淫雨不レ流久旱充、四閣口懸明鏡底、半峰影倒玉壺中、月沈湛色含二群動一、風定冷光涵二大空一、要レ踏二名山靈水境一、禪林寺在二洛城東一、既而登二客殿一、入二講堂一、使下人白中於和尙一、良久和尙出而迎、揖而入、供引觴且酌且吟、忘二一日驅馳之勞一、縮二百年游觀之樂一、歸家之次日、作二詩幷記一、遂書二後堂之壁一、以供下後來遊二此寺一者洗中徐凝惡詩一之一興上而已、

育德園記

東武、大都會也、群公邸第咸在焉、於レ是拓レ之爲二苑囿一、離レ之爲二別館一、庀レ之爲レ亭爲レ臺、勢之所二必然一者、惟是畿甸侯衛、冢君邦伯、甲丙相高、南北東西、騷人梓匠、智巧輻輳、於レ是語二風物一則漢之鄴下、選二園林一則宋之洛陽、然又嘗聞レ之、賞鑒之家、歷覽之多者、咸推二我后羽林公一、聚二林家之文星一、延二野氏之群英一、擇二園囿之勝一、標二亭榭之美一、觴レ於レ斯、咏レ於レ斯、奇思逸藻、寫爲二巨卷一、境之勝者八、景之美者八、合而名レ之、曰二育德之園一、取二周易蒙所レ謂君子育德之象一也、夫名者實之旗也、實者名之根也、萬物育レ於二中和一、群黎育レ於二爾德一、有二其實一有二其名一、理也、有二其名一有二其實一、勉也、勵也、有二其名一而無二其實一、則名將何麗焉、虛レ己、假レ己、華レ己、浮レ己、此君子之所レ恥、而造物之所二深忌一者也、山韞

玉而輝、水懷レ珠而媚、弸レ中而彪レ外、德之蓄者、其文形焉、實之所レ在、名必從レ之、可レ不二深長思一乎、德者得也、有レ得レ於レ心也、育者養也、生也、涵二養於己一、而生二長夫物一也、養レ己知也、生レ物仁也、仁靜知動、動者如レ水、靜者如レ山、故曰山下出レ泉蒙、水必盈而後進、蓄而後流、爲レ川爲レ瀆、滙爲二河海一、恭爲二雲雨一、此君子所三以取二象於育德一也、若夫淩二苞稂一而冽二下泉一、則無レ取レ於レ水矣、羽林公聰明睿達、蒙以養レ正、孜孜勉勉、善固執、行必果、優柔厭飫、日新月盛、道之得レ於レ心也素矣、盈而進、蓄而流、深仁厚澤、汪三洋乎二含靈動植之間一、今夫麀鹿攸レ伏、已得レ無レ有下敗レ類駭レ俗不レ遑二啓處一者上乎、白鳥翯翯、已得レ無レ有二羽毛不レ豐形容憔悴者一乎、池魚之牣躍、豐草茂樹之生生不レ息、得レ無レ有二三星在レ罶、苕華芸黃者一乎、凡園囿之所レ有、及レ物之仁、撫二其近一而思二其遠一、因二其細一而究二其大一、則北陸千里而遙、士民萬衆之盛、雲行雨施、河潤海涵、何莫レ不下浴二其德一而漸中其化上乎、名之稱二其實一也、豈他求乎、彼雕欄曲檻、金碧木煌、黼黻纁紈、隨レ風靡敞、我后之德、固不二以レ此相矜詡一也、年九月、幹來レ自レ京、羽林公命レ幹係二言卷末一、夫景物之佳勝、育德之芳名、賢主嘉賓、一觴一咏、序レ之跋レ之詳矣、又何言哉、竊取二名實之說一、以申二其義一云、

霑恩堂記

天地之霑レ物、莫レ大レ於レ雨、而雨之所レ霑、其用莫レ見レ於二草木一、今夫草木之於レ地也、大レ之杞梓松檜、小レ之菅蕢蒯薄、亦皆發レ于レ春、長レ于レ夏、成二熟于秋一、藏二畜于冬一、而必有レ待レ於レ雨、而後勃然鬯然、鬱然藹然、生生不レ息、所レ謂雲行雨施、品物流形、莫レ不レ資二於以生成一也、苟使二時月之間無一レ雨、則鬱者藹者、旱乾焦枯、而生意之存也幾希、然則雨之用大矣哉、人臣之仰レ君也、其恩之所レ霑、亦猶下草木之資上於二雨澤一也、豫州刺史高君愼卿、參河舊族、服二事 國家一、世竭二忠貞一、及三 東照廟之龍二翔參河一、君之高祖河州君、攀鱗奮起、頗蒙二 寵任一、食祿數萬、候レ于二關內一、而士州君親衛君相繼承二 國恩一、揚二家聲一、其勳閥赫二奕於一時一、譬三諸草木之得二雨澤一、而生發長育、莫二之遏一焉、君幹有レ故 南冠レ於二東羽一者數歲、閒居無事、日讀二書史一、識二前言一、考二性行一、以畜二其德一、猶下栽者之深根二培本一、有上待レ於二春陽一也、

及其 賜環也、洗滌振拔、選爲部將、指揮衆士、培植群材、以備 國家之採用、而英風芳聲、籍籍於士林之際、想夫春陽一發、時雨降矣、膏澤流矣、凡本於地者 無大無小、生生不息、則君之所畜、奮發興起、奚翅是已、其亦日長月達、期於有成也可知矣 君於是乎、構堂於賜第、名以霑恩、其意謂、今之所以至此、則 國家德澤之餘潤 不可須臾忘也、乃扁霑恩於堂上、晨夕仰止、以圖報効、而敬於斯、畏於斯、聚國士於斯、勵忠膽、策貞軌、疏作奔奏、率伏爭先、敬則有誠、畏則不懈、不懈而有誠、則其獲於 上者必矣 易曰、潤之以風雨、故侯之子孫、終復其始、則以春風風於人、以夏雨雨於人、而霑恩之實可見也、君請余記其事、余嘉其敬畏不忘、而前程不可量 於是乎書、

賜五經四子記爲門人井君美

宗藩甲府君、好學樂善、有河間東平之風、茲令儒生日講經書、求正心修身之道、間亦讀通鑑、論辨古今治亂、國家淑慝、被服道德、從容禮樂、未嘗一日般樂怠敖而逸其志焉、嗟乎、賢哉、世之所好、珍玩奇物、靡曼淫巧、縱欲蕩志、日不暇給、今乃遜志典學、篤信好古、可謂學得其要矣、國之所樂、武熙文恬矜多闘靡、甚至於流連荒亡而不自覺、而乃循理處善、立禮游藝、手舞足踏、進進不已、可謂學得其止矣、命一日出六經四子好本賜儒生井璵曰、此天下之公寶、余日所誦玩也、擧以與汝、惟汝熟讀愼思、上之致陳善閉邪之敬、下之施育才成物之教、夙夜匪懈、以副余心焉、璵拜稽首、奉持還舍、闢閣之几上、示幹侈其賜焉、請誨言、欲報恩遇之隆重、幹起敬而嘆曰、美哉、賢君之賜、大哉、君子之心、非獨自好學、令人居業、非獨自樂善、令人進其德、子宜日誦夕念、善有於己、至於充實之美、光輝之大、德業兼得、庶乎不負賢君之盛心矣、或曰、人之所寶者、世之所稀也、六經四子之書、學士大夫家家有之、人人誦之、如是其多也、何寶之謂乎、此不然、黃金白璧、飢不可食、寒不可衣、至如布帛穀粟、家家人人、不可一日而無者也、由此觀之、黃金白璧、一人之私寶、而布帛穀粟、天下之公寶也、人之爲生、飽食煖衣、逸居而

無レ敎、則近レ於二禽獸一、敎者莫レ切レ於二人倫一、人倫之道、莫レ備レ於二六經四子一焉、然則六經四子、不レ可二一日而無一、猶如下穀粟不上レ可二一日而無一焉、齊景有レ云、君不レ君、臣不レ臣、父不レ父、子不レ子、雖レ有レ粟、吾得而食レ諸、人倫之敎、有レ切レ於二穀粟一、此實所三以至二寶於天下一也、子輿氏曰、諸侯之寶三、土地人民政事、傳曰、惟善以爲レ寶、進講之次、以レ此獻二其君一、則異之所二以報一レ賜也、古之人遺二其子孫一也、黃金滿籯、不レ如二一經一、而況五經四子、人倫綱常之道、天地萬物之理莫レ不レ備、則遺二至寶於子孫一者、蔑二以加一レ焉已矣、

加賀菅侯奉レ旨進二講中庸一記

元祿壬申季夏哉生明、穀旦于差、大君親講二大學綱領於二便殿一、賀陽菅侯與二尾府紀府常府三家、及 甲府親藩一、同錫二敬聽一、德音琅琅、金聲而玉振之、群侯拜手稽首謝レ恩、既而特 命レ侯講二中庸一、其事本末、具レ于二林祭酒所一レ識也、今夫三家磐石之宗藩、甲府棣萼之嫡胄、天下至貴、蔑二以加一レ焉、侯乃以二異姓雄藩一、而遷二懿親崇班一、此希世之榮也、此日 大君上臨、宗藩列二于左一、閣老近臣侍二其右一、天下之至嚴也、巍巍台庭、赫赫 公座、挺レ身進講、天下之至難也、坐二至嚴之地一、演二至難之說一、而道理明暢、詞辨流麗、文不レ闕レ義、言無二長語一、此非下志氣充レ於レ中、精華形レ於レ外者上乎、孟子曰、我善養二吾浩然之氣一、其爲レ氣也、至大至剛、塞レ于二天地之間一、侯之篤學致知、於二天下之理一無レ所レ疑、集義自慊、於二天下之事一無レ所レ懼、不レ懼不レ疑、至嚴至難、不二少動一レ心、則其持レ志養レ氣、至大至剛、塞レ于二天地一也可レ知矣、宜乎、義理之精、詞辨之華、如レ此其美也、侯既請二林祭酒一、書二一時事一、又命三幹致二鄙言一、恭惟志氣高明、資レ於二充養一、義理精微、由レ於二問學一、侯之實學、有レ得レ於二思孟一者深矣、雖レ然高明或馳レ於二虛遠一、精微若流レ於二鑿空一、亦昔人所レ警、敢以爲レ獻、

後一月中元前三日、

木香爐記

蟠木根柢、爲二公侯之器一、自レ古而然、老泉蘇子記二木假山一、以謂漂二沒於湍沙之間一、激二射齧食之餘一、爲二好事者所一レ取、木之最幸者也、然蟠根輪囷、奇形異狀、埋二沒於泥沙塵土之中一、不レ爲二好事者所一レ取、其復何限、此物之遇不遇、有レ不レ可二得而期一也、小笠

原備中君、食ニ采於豊州一、州之山麓有レ木、爲ニ風雨所レ抜、其蟠根輪囷離奇、昂然而揚者爲レ首焉、礧然而起者爲レ尾爲ニ鬐鬣一焉、有レ似レ目焉、有レ似レ鼻焉、有レ似ニ肩背胸脇一焉、雙脚前立、兩腿後踞、宛然如ニ狻猊之狀一、君適獲レ之、以爲ニ香爐一、晨夕愛翫、祕爲ニ珍器一、此乃木之最幸而有レ遇者也、所レ謂蟠木根柢爲ニ公侯之器一、於レ是乎可レ知也、夫狻猊、外域之異獸、獸之猛者莫レ如ニ狻猊一、而世之用ニ香爐一、多以ニ銅鐵一鑄爲ニ猛獸一、其用レ木也少矣、君今有レ取レ於レ木、豈徒哉、木東方仁也、仁以レ柔克、金西方義也、義以レ剛克、以レ剛克レ猛、猛未レ克、剛亦傷、此猶ニ兩虎相鬪相傷一、柔以化レ猛、猛自心服、亦猶ニ三苗來格干舞一、書曰、高明柔克、黃石所レ謂柔能制レ剛者也、今夫蟠根奇形、望而可レ畏、威而不レ猛、有下如ニ木德之仁柔、化ニ猛獸之剛暴一、而馴ニ服于レ人者上、此君之所ニ以有レ取レ於レ木者與、夫小笠原者、勳閥之舊族、而武門豪雄也、世之言ニ弓馬一者、無レ出レ于ニ其右一、猛將勇士服ニ其剛一者久矣、然以レ剛服レ人、不レ若ニ仁愛入レ人之深一、仁愛備レ於レ中、德馨發レ於レ外、其薰レ人之大、爐香之芬郁云乎哉、君之好レ事也、請ニ幹記レ之、因爲ニ服猛說一以勗焉、

蜂腰石記

昔夏英公以ニ山勢蜂腰之句一、受ニ知於李相一、遂至ニ進用一、我嘗行ニ四方一、每レ見ニ衆山岀巃、如レ斷如レ連、未ニ嘗不レ嘆ニ造語之巧一、爲誦ニ此句一、則句中有レ山、見ニ其山一、則山中有レ句、句中之山、山中之句、我常矜以爲レ得レ言、松平樂只君、風流好レ事、尤癖レ于レ石、近得ニ奇石一、示レ余曰、此石數寸耳、而兩山相連、如レ斷不レ絕、似下有ニ意思一者上、子其爲レ我名レ之、余欣然指ニ其石一曰、此我所レ謂山中有レ句也、莞爾誦ニ彼句一曰、此我所レ謂句中有レ山也、其謂ニ之蜂腰一、不ニ亦可一乎、余乃拱立而言曰、君之先人、國之勳戚、登ニ膴仕一、膺ニ寵用一、有レ故致レ祿、放レ志終レ世、而今君之兄弟、徵入ニ幕府一、再蒙ニ榮祿一、斷而不レ絕、連而復聯、纘述之事君固可レ不レ思レ所ニ以勤ニ其職一乎、君之兄弟、如レ金如レ玉、簉ニ羽鵷班一、接ニ枝柳營一、溫潤縝密、堅剛不レ撓、君亦可レ不レ思レ所ニ以立ニ其位一乎、君乃悚然曰、然、吾願思而成レ之、余因而進レ之曰、蜂有レ衙、衙以課レ功、蜂有レ蜜、蜜能和レ藥、功課則政底可レ績、藥和則病得レ有レ効、君之兄弟、必復

受レ職當レ位、朝衙夕班、考課致レ和、以醫二民瘼一、此
則君之所二以勤以立一者也、然則英公之受三知於二李
相一、以至二進用一、此我今之所二以有フ待レ於レ君、而功
業政績、光纘先緒、而所五以使四我得三言於二後日一者、
君之恩而成レ之也必矣、詩云、伯氏吹レ塤、仲氏吹
レ篪、又云、樂只君子、福履成レ之、我引レ領而望レ之、

養老石記

細川孚軒君出二一卷石一示レ幹曰、斯石不レ盈レ尺、一峯
崔二嵬于フ左、兩山巃二嵸于フ右、有レ瀑挂レ于レ峯、半潛
狀不レ見、有レ水出レ于二山間一、縈廻而去、縮三千仞於二
數寸一、收三二水於二一掬一、山水之觀矚、近在二几席之
間一、此我之所二以養フ目也、子爲レ我名レ之、因レ名求
レ實、庶幾有レ警レ于二我心一焉、幹竦而言曰、善哉、君
之問也、名有二數般一、有二以レ德命者一、有二以レ類命者一、
請先以レ類言レ之、幹聞濃州有二瀑泉一、落崖數十百丈、
泊然而止、相距數十里、至二江州醒井一、湧爲二清流一、
國史所レ載養老元年、濃州出二醴泉一、世之所レ謂養老瀑
是也、斯石有レ類レ于レ此、宜下以二養老一名上レ之、幹又
述二養老之說一、勉レ之以レ德、原二夫養老之義一尙矣、庠
之上下、序之東西、右學左學、東膠虞庠、三代之養
老也、伯夷太公、居レ海歸來、西伯之養老也、曾子
承レ志、老萊悅レ心、賢者之養老也、然有虞三代者、
老二人之老一也、曾子老萊者、老二吾之老一也、老二吾
之老一、內而近矣、老二人之老一、外而遠矣、未レ有下孚
レ於レ內而不レ動レ於レ外者上也、未レ有下近者不レ悅遠者能
化者上也、是以君子近求レ於レ己、而遠及レ於レ物也、孚
軒君家有二北堂之親一、定省溫凊之勤、脂膏滫瀡之具、
無レ不レ備焉、然自レ表而裏、自レ粗而精、致レ誠底
レ豫、洞洞屬屬、如レ執レ玉、如レ奉レ盈、視二於無形一、
察二於未然一、此君子根レ於レ心之孝也、夫心者虛也、
感レ物而動、視爲二之則一、故古之人、戶牖器物、有レ銘
自警、無三所レ見而不二修省一也、孚軒君日對二斯石一、養
老之義、則於レ視根レ於レ心、不二須臾而忘一、則奚翅
養目之謂而已、其所二以養フ德、復求レ於レ外也哉、詩
曰、佗山之石、可二以攻フ玉、君之玉二成其德一也、可
レ期已矣、嗟夫石者堅剛之物、而山者靜壽之象也、養
老之誠、確乎不レ轉、則北堂之貞靜、如二南山之壽一、
不レ騫不レ崩、永獲二福應一者也、幹復諗曰、君之以
レ孚名レ軒也、亦可レ求二其實一也、夫孚者信也、信之
實レ於レ中也、易之贊二中孚一也、信及二豚魚一、言二孚信

之至、物猶感化一、而況天倫之至親、而可レ不レ底レ豫哉、孚軒君孚盈レ缶承二其志一、手舞足踏、悅二其心一、則養老之實 庶三幾乎二賢者之孝一也、

笑不答石記

元老古河羽林紀公邸第庭中有二一巨石一、其狀山立、無二嶮絕之態一、其色蒼緻、有二端重之氣一、公甚嘉丁其質而無レ文、靜而不レ動、使丙觀レ之者洒然消二浮躁輕薄之習一、淡乎生乙無爲閒適之思甲、因名レ之曰二笑不答一、且使三幹爲二之說一、其取下言於太白詩與中得三心於二定靜安慮一之說上、既具二林直民之所一レ記、幹復何言 雖レ然公之所レ好、不レ可レ不二擴而充一レ之、夫珍玩奇巧、悅二人之心目一、而世之所レ好、往往皆然、公獨無レ取レ於レ玆、而寓三意於二不言不朽之物一、其志有レ在、蓋試揚摧而言レ之、石之爲レ物也、其用大矣、國有二盤石之基一、臣有二柱石之任一、官有二戒石之警一、嘉石肺石之恤二斯民一、孝子貞婦之化二其俗一、此皆關三係於二治敎一之最大者也、今夫邦國大小、犬牙相錯、爲二國家之藩屛一、則盤石之基、於レ是乎固矣、分二任百司一、歲祿月俸、知二生民之脂膏一、則戒石之警、於レ是乎存矣、愛二養元元一、無レ有二罷窮一、賑恤之施、於レ是乎効矣、旌二表孝貞一、鼓二舞人心一、風俗之美、於レ是乎勸矣、公乃爲二國之碩輔一、總二持權衡一、旋二斡鈞軸一、端重鎭靜、平易質直、而使下小人變二輕浮之俗一、君子樂中無爲之化上、潛二移默三運於不言之中一、而措三天下於二泰山之安一、則所レ謂柱石之任、於レ是乎備矣、然則大勳鴻業、垂二之不朽一者、可レ知而已、若夫假山研山之止レ於二玩物一、平泉奇章之至レ於二喪志一、此徒適レ於二心目之小一、而君子之所レ不レ取也、或曰、石之不レ言固也、而謂二之笑一可乎、幹曰、子言信然、吾聞レ之、南河[illegible]丹、決有二響石一、人呼レ之應、笑亦應、見二今之時一、昇平年久、治敎日新、宇內之民、熙熙而樂、嚇嚇而笑、和氣上徹、天人相應、天之與レ人、笑而相對、石之有レ時而笑、不二亦可一乎、子如試以二公之志一、向レ石問レ之石亦心言意語、而點三頭乎二斯言一與、

識二礙茶小壺一

紅竿百尺倚二濆流一、獨泛二仙槎一問二斗牛一、拱極衆星爲二玉膩一、懸空新月作二金鈎一、地開煬水三千里、坐老乾坤八百秋、相見玉皇如有レ問、糸鱗今也屬二君收一、賀陽士人家有二礙茶小壺一、傍識二斯詩一、此乃明李春芳天河釣叟之詩也、其間字句雖レ有二小異一、而要レ之爲二中

華之物一也、昭昭焉、世之盧陸者流之所下玩二賞茶壺一、稱爲中唐物上者、或謂尾崙之所レ出、而非二眞中華之物一、假稱以珍、若二中華之窯一、却以二島物一名レ之、認レ假爲レ眞、指レ眞爲レ假、可レ嘆也哉、噫、假之亂レ眞、豈只物已乎哉、

恭靖先生遺稿卷二

論

秦伯論

古之聖人、其德之蘊レ於レ內也至、故化之施レ於レ外也大、至者人不レ可二得而知一之、大者民無二得而名一焉、唯其不レ知無レ名、此乃所二以爲レ至以爲一レ大也、孔子曰、大哉、堯之爲レ君也、唯天則レ之、蕩蕩乎、民無二能名一焉、今夫天者蒼蒼之多而已、而日月之往來、春秋之變遷、鳥獸草木之飛動生成、默運潛化、有下不レ可二端倪一者上、故曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、書云、帝德廣運、乃聖乃神、蓋聖之無レ跡、神之不レ測、大而無レ外、行レ之不レ息、而後則レ天之實可レ知也已、未レ有二德之至而化之不一レ大者一矣、未レ有二化之大而澤之不一レ久者一矣、夫讓者德之美者也、太伯伯夷同讓レ國者、而夫子特以二至德一稱二太伯一者何、蓋伯夷之去、在二事之後一、彰著可レ見、太伯之逃、在二事之前一、泯然無レ迹、可レ見者民之所レ稱、無レ迹者人之所レ不レ知、夫讓以二天下一、使三天下之民無二迹可一レ稱、則其德

之至何如也哉、此夫子所下以與二文王一同稱中至德上也歟、夫文王之深仁厚澤、大被二天下一、蒼姫八百之緒業、於レ是乎基、而太伯之逃也、施二化荊蠻一、啓二國勾吳一、而闔閭之盛、終二春秋之世一、爭三伯於二中國一、而季札之賢、播三聲譽於二上國一、稱三習禮於二夫子一、遂以至三嘆息識二其墓一、嗚呼、亦盛哉、而三讓之餘慶、施覃二本朝一、

神風聖化、聲教漸被、莫レ所レ不レ至、自二

人皇之建一レ極來、二千有餘歲、

皇統緜緜、邁レ百過レ千、蓋載之際、萬國之衆、未レ有下若二本朝之盛一者上也、此則至德之化之澤之久而大、其又何如也哉、傳曰、盛德百世祀焉、嗟夫、太伯之德澤、蘊レ於レ前、旌レ於レ後、屈レ於レ彼、伸レ於レ此、而扶桑出日之照、與二夫陶唐氏之則レ天者一、直與二天地一相始終也矣、豈翅百世而已哉、

韓信論

詩曰、靡レ不レ有レ始、鮮二克有一レ終、此古今之通患、而人情之所二嘆惜一也、昔淮陰侯大二功於漢一、不レ免二夷滅一、蕭相國固已失レ之、而侯亦有下不レ得レ於二其終一者上、所レ謂楚則失矣、齊亦未レ爲レ得也、初相國之追レ侯也、以二國士無雙一薦レ之、築レ壇拜二大將一、則其知レ侯也至矣、侯之登レ壇也、首說二劉項之得失一、論二天下之大勢一、龜卜燭照、無下一不上レ如二其言一、而定二三秦一、取二兩河一、蕩二平趙代燕齊一、以摧二强楚一、漢之爲レ漢、緊侯是賴、其功之大、帝稱二人傑一也、宜哉、項氏殲焉、帝奪二我齊一、王レ楚則王、侯二淮陰一則侯、唯帝之從、則侯之心事可レ知矣、樊舞陽勇傑舊將、稱レ臣送迎、則侯之威望當二何如一也、夫謀反大事也、陳豨新進也、侯既羞レ爲二噲等伍一、則其豈敢與二新進之豨一謀二大事一耶、此必無之理也、鍾室之事、出レ於二呂媼之姦計一、而史氏緣飾而成レ之耳、傳曰欲レ加二之罪一、其無レ辭乎、相國之紿レ侯就レ戮、誠知己之不レ終、古今之所レ嘆也、而侯之臨レ死曰、悔レ不レ用二蒯通之計一、嗚呼、悔之一言、將欲レ反二地下一耶、白璧之微瑕、我爲レ侯惜焉、而帝之能知二侯之不一レ反者、我特於レ不レ殺二蒯通一而見レ之、

說

節レ哀說

東門吳喪二其子一而不レ憂、曰吾嘗無レ子之時不レ憂、今子死乃與二向日無一レ子同、吾何憂焉、達哉斯言、而其流

至レ于レ滅レ倫矣、夫父子、天倫也、憂哀、人情也、情之所レ發、倫之所レ存、父子之親、安可レ已焉、第節ニ其哀一而可也、然人情難レ斷者、愛也、若能以ニ東門之達一、斷ニ其愛一而不レ至レ於レ滅レ倫、此庶幾情之中レ節者與、若夫喪明之惑、君子之所レ戒也、愼レ之思レ之、

實齋說

夫人不レ可ニ以弗レ實也、言不ニ忠信一、言之無レ實也、行不ニ篤敬一、行之無レ實也、實之不レ存、名將ニ安施一、平君倚衡氏需ニ其齋名一、余應レ之以レ實、夫名者實之賓、有レ賓必有レ主、有レ主而後賓者有レ歸、平君勉哉、因ニ實之名一、求ニ名之主一、而日夕惕厲乾乾匪レ懈、念念不レ忘、參レ於レ前、倚レ於レ衡、則言而必忠信、行而篤敬、余知ニ其實之爲レ實已、此乃可ニ以書レ紳、可ニ以銘ニ丹臺一、奚翅齋之額云乎哉、

敍倫說

加賀羽林公、誠敬仁慈、修レ德好レ學、其志不レ已、一日以ニ貴名某一、命ニ幹表ニ其德一、幹謹擇ニ箕範之言一、采ニ敍倫二字一獻レ之、公又命レ幹爲ニ之說一、如ニ幹不肖一、此非ニ其任一、固辭不レ得レ命、借奉ニ鄙言一、以致ニ微忱一、夫天有ニ三辰一、歲功以成、地有ニ六府一、民用以利、人受ニ天地之中一以生、是以有ニ三綱一爲ニ之經一、有ニ六紀一爲ニ之緯一、三綱六紀之經ニ緯人倫一、猶下三辰六府之成ニ歲功一利中民用上也、何謂ニ三綱一、曰君臣、曰父子、曰夫婦、此則天地之大經、而人倫之宏綱也、何謂ニ六紀一、諸父也、兄弟也、族人也、諸舅也、師長也、朋友也、師長朋友、所ニ以明ニ君臣之義一也、諸父兄弟、所ニ以成ニ父子之親一也、諸舅族人、所ニ以合ニ夫婦之判一也、人生之倫理、由レ之而不レ亂、亦猶下綱者之有レ綱有レ紀以張ニ萬目一、織者之有レ經有レ緯以理中衆絲上也、苟倫理之不レ敍也、三綱淪、九法斁、而萬物有下不レ得ニ其所一者上焉、夫上帝之降レ衷、烝民之秉彝、有レ物有レ則、莫レ不ニ倫理一、然人之有レ生也、氣質拘レ於レ內、物欲誘レ於レ外、顚倒錯亂、不レ能レ復ニ其初一也、必有ニ君師之治敎一、漸磨匡直、而民彝物則、各得ニ其所一、箕範所レ謂彝倫攸レ敍、此人君所ニ以建レ極也、夫箕範之所レ陳、其疇有レ九、而其要在ニ五事一、五事之要在レ乎レ敬、而人君中主レ乎レ敬、則聰明叡智、皆自レ此出、而貌言視聽、作レ肅作レ乂、作レ哲作レ謀、動容周旋、皆循ニ其則一也、五事既修、則五行八政、五紀三德、稽

疑之明、庶徵之念、福極之嚮、莫レ不三施而得二其宜一也、然則彝倫之敘、實係二人君之一身一、而其本在レ乎レ敬也、可レ不レ思乎、恭惟、公之誠敬充レ於レ中、而仁慈遍レ於レ物、三州士民、倫理秩然、無レ有下不レ得二其所一者上也、所レ謂三綱六紀、所三以經二緯人倫一者、於レ是乎可レ見矣、而又孜孜弗レ已、思レ所三以表二其德一、則希レ聖希レ天之志、其蔑二以加一焉、傳曰、至誠無レ息、易曰、天行健、君子以自强不レ息、此天之所二以爲一レ天、聖之所二以爲一レ聖、純而不レ已也、此亦君子之學、所二以則レ於レ天而自修一者也、

宸翰敬字說

拾遺源公之二二郎源助君一、始及二髫齔一、好作二大字一、遒勁端正、見レ之令二人起一レ敬焉、拾遺公以二 緋宮所レ貽後水尾帝宸筆敬之字一、屬レ于二二郎君一、而又使三幹述二其意一、幹拱立而言曰、二郎君於レ是乎、可レ知二爲レ學之要一矣、在昔明道程先生作レ字甚敬、而謂非レ欲二字好一、即此是學、今夫二郎君有レ得二於敬一、收二斂其心一、洞洞屬屬、從三事於二主一一、則操觚之際、一縱一橫、莫レ不レ出レ於レ正、一點一畫、莫レ不レ在レ於レ學、此乃敬之一字、爲レ學之要、而德之成者、實基レ於レ茲焉、況天章爛然、可二仰以寅畏一者乎、此則拾遺公之所レ期レ於二二郎君一、而二郎君之尤當レ務之急者也、若夫注三心於二園池一、邪媚以取レ態、飄逸以爲レ奇、務爲二觀美一、則藝成而下、固亦君子之所二深警一也、

德威允濟說

多賀直方氏、爲二嗣子某一求二名與一レ字、夫名以覈レ實、字以表レ德、非三幹之所二能命一レ之也、固辭不レ得、因遂名レ之曰二德威一、字レ之曰二允濟一、從爲二之說一曰、古之爲レ文、直心爲レ悳、蓋敬直レ於レ內、而義方レ於レ外、敬之爲レ直也、其德惟正、義之爲レ方也、有レ威可レ畏、此德威之所三以本二於直方一也、德者、仁愛之誠、非二姑息之謂一也、威者、嚴明之制、非二猛烈之謂一也、仁以愛レ之、嚴以明レ之、則處レ事無下不レ得二其當一者上、此德威之所二以允濟一也、苟以二姑息一爲レ愛、以二猛烈一爲レ威、此事之所レ斁也、夏書不レ云乎、愛克二其威一、允罔レ功、甫刑曰、德威惟畏、德乎德乎、威之本也、嗚呼、允濟因レ字顧レ名、因レ名覈レ實、 惟德是愼、則庶幾威重之學、有レ得レ於二將來一、而世濟二其美一者也歟、

可大字說

傳曰、人之生也直、夫人之所レ受レ於レ天者、本自直也、而私欲撓レ之、其天者於レ是乎屈矣、苟不レ爲ニ私欲所一レ屈、則存レ於レ內者莫レ不レ直、而應レ於レ外者莫レ不レ方矣、方者直之所レ形、直者方之所レ根、其本一也、今夫規矩準繩、天下之至正也、其始一直而已、直之爲レ用也、旋レ之爲レ規、折レ之爲レ矩、平而爲レ準、長而爲レ繩、此皆直之所ニ變而出一也、易曰、敬以直レ內、義以方レ外、大哉言乎、可ニ以見ニ賢人之業一也、鍋島紀州君以ニ其名直方一、問ニ字於レ幹、幹乃以ニ可大一祝レ之、而爲ニ之說一曰、夫敬直義方、坤象之要、而業之所ニ以大一也、所レ謂直者、非ニ徑直之謂一、心存レ於レ內、無ニ一毫之屈曲一、廓然太公、其天者全、故曰直ニ其正一也、所レ謂方者、非ニ偏方之謂一、道應レ於レ外、無ニ一處之固滯一、周流貫通、各得ニ其宜一、故曰方ニ其義一也、敬レ於レ內、所ニ以修レ己也、義レ於レ外、所ニ以應一レ物也、敬義立而德不レ孤、凡綱常倫理、禮樂敎化、其施爲裁制、無ニ往不一レ利、所レ謂富有之業、於レ是乎大也矣、揚子雲曰、大器猶ニ規矩準繩一、先自治而後治レ人、未レ有下不レ能ニ自治一而能治レ人者上也、未レ有下不レ能レ治レ人而業之可レ大者上也、夫名以制レ義、字以表レ德、因レ名思レ義、此君之當ニ勉以自治一者也、以レ字頌レ德、此幹之所ニ以期一レ君於ニ賢人之業一也、

原茶

茶者南方嘉木也、載レ于ニ周詩一、記レ于ニ爾雅一、郭璞以爲煑作ニ羹飮一、則其著稱也尙矣、而經作レ于レ唐、譜成レ于レ宋、于レ元于レ明、其用太廣、無ニ人不一レ嗜、無ニ日不一レ飮、傳至ニ本朝一、起レ于ニ栂尾一、盛レ于ニ菟道一、鷹爪之奇、雀舌之嫩、花白初昔之妙品、玉廉蕣華之賞會、佳賓嘉客、誇ニ飮中之歡一、隱士禪侶、耽ニ味外之味一、釋レ滯消レ壅、滌ニ中腸一、除ニ內熱一、其益レ于レ人、誠可レ謂ニ嘉木一矣、原夫周官有ニ五漿五齊之製一、蓋古之人、飮食淡泊、情欲寡少、無ニ滯梏壅塞之患一、至レ于ニ後世一、俗好淫僻、私欲繁多、五漿解レ渴、五齊養レ性、冀ニ其力之所一レ不レ及、慮ニ其智之所一レ不レ足、加之厚味醇醪腐ニ其腸一、艶姬戀童伐ニ其性一、煩悶熱積、爲レ痞作レ痼、是以除煩消熱不レ可ニ一日無ニ茗飮一、故上自ニ王公一至ニ士庶人一、外及ニ夷蠻戎狄一、其用太廣、此茗飮之所ニ以日與月盛一也、噫、世之蔽ニ物欲之痼疾一、染ニ習俗之汚穢一者、安得下服ニ聖賢之藥誨一、以除レ疾滌レ穢、若中茗飮之清爽上哉、

題跋

旁訓帝鑑跋

唐文皇曰、以レ古爲レ鑑、可レ知二興替一、此帝鑑之所二由作一也、然徒知二鑑之照一レ古、而不二磨礱以行一レ于レ今、則鑑之用廢焉、書云、非二知之艱一、行レ之惟難、加賀羽林菅公有レ感レ於二鑑古之言一、以二帝鑑書一、命レ幹作二和字旁訓一、以便二覽觀一、此乃知二爲レ君難一、而欲二回光反照、磨礱以行一レ于レ今者也、其圖レ治鑑盛心、幹不二敢不三慫慂而贊二成之一、謹加二和訓一、以獻二涓埃之微忱一、於戲、此書之爲レ用也、奚翅帝者之鑑、無慮有レ邦克レ家、亦以可レ省二厥躬一焉、但顧二力行何如一耳、

孝經跋

北陸菅公尊二信斯經一、命レ幹加二國語旁訓一、以便二讀者一、恭惟相公、異姓雄藩、官昇二參議一、天下之至貴也、肥壤三國、世祿百萬、天下之至富也、以二天下之至貴一、居二天下之至富一、高而不レ驕、滿而不レ溢、此諸侯之孝、而保二社稷一安二民人一、所三以長守二貴富一也、苟推二此心一、成二敎於一レ國、使下卿大夫以守二宗廟一、士庶人保レ祿主レ祭、養中其父母上、則孝道明レ于レ國、而君臣和順、上下愛敬、邦家之福、永久靡レ替已、於戲、至德要道、百行萬善、職此之出焉、可レ不レ尙哉、可レ不レ勉哉、敬以爲二之跋一、

三體詩絕句跋

詩之於二絕句一、易而難、難而易、自二其易一而言レ之、字句不レ多、情思易レ通、故初學小生、亦能言レ之、自二其難一而言レ之、以二無窮之思一、寓二于二十八字之間一、詞調流麗、興趣含蓄、寫二意外之妙一、非レ若下五七言律、爭三奇於二對偶一、雜體長篇、演三思於二數十百言一之比上也、故唐人絕句、以二靑蓮龍標一爲二正宗一、雖レ以二少陵聖一レ於レ詩者一、有レ不レ逮焉、則其難可レ知矣、本朝詞林贈答、題咏多用二絕句一、以二其字少意通、倉卒易一レ成已、及二其至一也、老師哲匠、亦有下難レ得二其妙一者上也、輓近詩家者流、好誦二周伯弜所レ撰三體詩法一、而略二五七言律一、專以二絕句一爲レ宗、頃日菅公命レ幹考定和點、使二幼學之士誦習一焉、世之學レ詩者、不レ可下以二其易一而忽上レ之、圖二難於一レ易、擬レ擬不レ已、則意外之妙、其必有二得レ於レ此者一焉、可レ不レ勉乎哉、

蒙求標題跋

李翰蒙求一書、掇二前言往行一、屬二對類事一、協二用音

謂、以便諷誦、幼學之士、諳其標題、則唐氏已前故事、可槩見焉、世之所傳標題、間有聲音譌謬、淸濁混亂、藏修之暇、爲加校正、以授蒙士、嗟乎、前言往行、君子之所以蓄德、奚翅童蒙之求云乎哉、

長恨歌跋

白香山長恨歌一篇、始述天寶宮中之耽樂、遂招西川播遷之禍亂、終則以明皇惑方士荒誕之說、終身不覺、可恨之甚也、蓋亦悲尤物爲亂階、而垂炯戒於將來者也、本朝交聘中國、於唐爲盛、香山文集、傳來斯國、搢紳士庶、晨誦夜吟、披玩不措、而若長恨歌、詞語醞籍、氣象風流、和歌者流、祕爲帳中之珍、余未能免俗、聊就是正、以便讀者、此亦懲創逸志之餘意云爾、

書詩仙圖後

太上立德、其次立功、其次立言、古之所謂不朽者也、夫堯舜之德、禹稷之功、不可尙已、而其言爲世規戒、久而不廢、若史佚周任之徒、後世雖不可及、而未可謂全無其言也、夫詩之爲言、上自郊廟朝廷、下至里巷歌謠之言、其可以感發善心、懲創逸志者、皆見采於聖人、傳于久遠、三百篇尙矣、後之言詩者、忠厚惻怛、託物觸類、含規諷、示勸戒、垂之後世、可觀可興者、此庶乎其不朽矣、若乃拘聲律、局對偶、流連光景、吟弄花草禽蟲之微、無助于世敎者、枝辭也、蔓言也、其可謂之立言乎、六六山人詩仙之選之圖、將使立言之士、尙友于千歲、而垂于百世者也、夫尙友千古者、可頌其詩而知其人、今乃丹靑傳神、目擊道存、則子卿之節、元亮之志、少陵之忠憤、太白之飄逸、韓之豪放、柳之簡淡、以及歐蘇黃陳茶簡齋、千歲旦暮、壽而不凶、則不朽之業益大、而詩之稱仙、不亦宜乎、奥村顯思、嗜學好古、傳寫斯圖、以寓景仰之意、遂懇山人、令書詩仙圖像四大字、以標卷端、又請于林祭酒叙其首、余跋其後、余之於山人、霑其膏馥久矣、今也山人謝世、手澤未乾、撫卷嘆息、不能無言、嗚呼、古人不可見矣、得見圖畫斯可矣、山人不可復見矣、觀其所選、則可知志意之所在矣、寛文壬子臘月既望、

書宣和畫鷹圖

馬州宗太守以二宣和帝書鷹一、賜二其宰平田眞賢一、蓋賞二平日忠勤一也、眞賢請三余書二其事一、夫宣和書鷹、世之所レ珍、如二隨珠和璧一然、世之所レ珍、則利之所レ在、人競趨レ之、故贋者比比、而眞者鮮矣、苟欲レ得二其眞一、則要須レ見二其所レ傳所レ鑒何如一爾、海岳書船、雲林印記、無レ不三以爲二全璧一、以二所レ傳所レ鑒之眞一也、宗太守世嗜二名畫一、其所レ獲必有レ傳、而其所レ藏必有レ鑒矣、不レ取レ于二古董家之專レ利衒レ鬻、似レ是而非者一也、其所レ藏宣和書鷹、始得二之故家舊藏一、而朝鮮鶴峯芝峰各有二錄說一、則其傳其鑒、歷歷可レ知、則其非二魯鼎之贋一者必矣、語曰、君賜レ生則畜レ之、此一時之惠、亦猶仁レ之敬レ之、重二君之賜一也、而況名畫珍藏、貽二之子孫一、俾下其知中恩賜之出上於二忠勤一、夙夜弗レ懈、世濟二其美一、則眞賢家珍蔑二以加一焉、眞賢尙善藏レ之哉、

待賢門接戰圖

尾府貴介攝州羽林公、聰敏好レ學、以謂　國家雖レ安、不レ可レ忘二武備一、常招二致老練之士一、談二古今之勝敗、主將之得失一、天野長重丈人、士林豪傑也、屢抵二邸中一、相與論二說古來名將愛レ士恤レ衆之事一、丈人少時從二勇氏源執政一、赴二島原之役一、喋二血陣間一、出二入死地一、親見二諸士殺レ身報レ主之事一、知下主將平日撫愛恩恤之厚、而後可レ得二其死力一也如上此矣、在昔平治之亂、義平重盛源平兩家之嫡嗣、而挺レ身接二戰于待賢門一、景安家泰見レ危致レ命、義平赴レ難全二活政家一、可レ謂二君臣之恩義兩至一矣、苟非三實有二愛士之盛心一、曷由得二報主之血誠若一レ是乎、此後世主將所レ宜レ爲二鑒戒一者也、羽林公深有レ會レ於レ心、遂命レ工繪レ畫、賜二與丈人一、以證二其言一、羽林公愛士之盛心於レ是乎可レ見也、國家自二島原賊平一、河淸海晏、宇內不レ知二干戈一、六二十年于レ茲、若二丈人一躬自歷二涉戰陣一者、於レ今麾下無二復一人在一、所レ謂靈光巋然獨存者也、其誰不二望レ風而嚮慕一乎、丈人年已八秩、英氣强健、有下少壯之士所レ不レ可レ及者上、豈非二所レ謂豪傑一哉、

巴女勇力圖

杜少陵有レ云、婦人在二軍中一、兵氣恐不レ揚、此則李公所下以斬二女子一鼓中士氣上也、夫戰陽氣也、女子陰柔間レ之、則兵氣不レ揚也宜矣、然若二巴女勇力一則否、女子而丈夫者也、故木曾義仲常置二軍中一、或將二一隊一、或魁二前茅一、所レ向無レ不二摧陷奮發一、此殆彌纖夫人、

綉旗女將之流亞也、義仲豈好レ色之將乎、特欲下示二巴女之勇壯一、以激中勵諸士之怯懦上而已、此亦主將鼓二士氣一之一端也、天野丈人好勇之志、老而益壯、秋元但州君、有二葭莩之親一、丹下青巴女禽二殺御田某一以事上、以助二丈人之壯氣一云、

靜女赤心圖

靜女歌舞、絕代之名妓也、一自レ得三寵於二義經一、不三敢變二其志一矣、及二義經忌レ於二賴朝一、流離艱難、無レ所二底止一、昌俊襲二堀川之館一、黑夜倉卒、其勢太艱、靜女扶二翼義經一、力戰却レ之、後至二鎌倉一、奏三技於二源右府前一、新製二歌二闋一、以下慕二義經一之意上、粗無二畏怖之色一、奚翅歌舞妙二絕一時一而已、貞烈之志、今古所二希有一者也、詩曰、靜女其孌、貽二我彤管一、說者謂彤管、赤心也、靜女之赤心、可レ謂レ不レ辱二其名一矣、肥州細川公、西海大藩也、天野丈人、有二姻婭之好一、貴賤雖レ異、情懷相通、一日談及二堀川夜戰、靜女勇壯之事一、公喜、圖畫贈焉、夫待賢門軍、君臣恩義、昭二晰千古一也、巴姬勇力、靜女赤心、英氣芳烈、芬二郁于今、而此圖亦可三以感二發人心一也、併爲二三幀一、藏レ於レ家以爲二子孫之勉勵一焉、嗟乎、勇力赤心與二君臣恩義一、按同求レ志、則丈人平生之所レ養可レ知而已、

寫本學庸論跋

備前故羽林公手二錄學庸論三書一、賜二其同宗外臣深田盛定者一、以勸二其學一也、盛定篤信勉行、終身不レ懈、其子成定傳レ之、十襲珍藏、拱璧不レ啻云、吾友容齋森翁齎二示其書一、爲請レ題レ後、予閱レ之、其事本末、已具レ于二林祭酒野竹洞之所一レ書、予復何言、若夫三書爲二道學之要一、則不レ可三以不二揚攉而告一焉、夫大學者古人爲レ學之次第、而自二格致誠正、修身爲一レ本、以至二家國天下一、則舉而措レ之、規模之大、節目之詳、此學者之所二以成一レ己也、魯論則經世之大訓、誨人之微言、此又仁人之所二以成一レ物也、而成レ己成レ物、合二內外之道一、會三其極於二中庸一、而性命道教之微、中和位育之妙、至誠無レ息、對越不レ貳、暗修篤恭、至レ於二無聲無臭一、而聖神功化、於レ是乎至矣、所レ謂窮レ理盡レ性、以至レ於レ命者也、然則三書道學之要、而志レ於レ道者、沈潛玩索、夙夜不レ可レ懈也、成定其勉乎哉、羽林公成レ物之盛心、家大人成レ己之實功、敬レ之信レ之、孜孜汲汲、身行心得、則庶二幾乎不一レ負二忠孝之義一矣、若徒珍二藏其書一、而不レ善二其身一、則十襲

拱璧、毀於櫝中、予獨爲成定懼焉、遂識簡末、還之森翁、

王化積年記跋

九里孟祥以王化積年記一冊示幹曰、此吾翁三三里人所手撰、嘗獻邦君、頗蒙襃賞、願子記一言、爲後來之徵焉、幹取閲之、本朝中華運會歴年、繋以甲子、合併爲一書、而君上之正與不正、政事之善與不善、乃至神社佛閣、建置廢興、夷狄僭竊、禎祥妖孽、一一臚列、以朱墨青紫、部分識之、而兩朝之治亂得失、如視之掌、可謂快書也、凡爲人君者讀之、則可作千秋金鑑矣、翁之獻邦君、其納約之牖與、幹亦竊有感於茲、夫人身之得失、猶國家之治亂、國家之治亂、繫君上之正與不正、人身之得失、因心中之善與不善、所謂善則得之、不善則失之、可畏之甚也、古人有云、河潤九里、孟祥其思之哉、見善從之如水流、見不善去之如河決、汲汲孜孜、夙夜不已、則意誠身修、而九里潤澤、世濟其美者也、翁氏九里、名正長、字仲天、三三里人其號、孟祥名將興、克家之子也、

書羅漢圖後

長尾善菴持羅漢圖來請數語、余不解浮屠之言、不習丹青之事、故羅漢之等級、繪畫之巧拙、不敢與論焉、然聞之、羅漢之修業也、喫辛攻苦、以證其果、則其志可謂確也、今夫世之學者、飽暖自適、優游度日者觀之、可不以自警哉、余乃讀卷中數子之所題、特恠、南軒儒門之豪傑、內服魏公之嚴訓、外資朱呂二先生之切劘、探道德之源、明義利之辨、而其稱贊異教、殆有不可解者、此豈佞于浮屠者哉、彼浮屠氏者、往往誣賢人君子、以爲其道之光華、若昌黎之交大顛、濂溪之會常總、其事不可必信也、若陸秀夫、趙家之忠臣、崖門一死、可與日月爭光、其不惑于異教也必矣、趙孟頫忍恥於二世、甘臣事虜廷、其黨于胡鬼、其復何恠、余特感憤三子之事、爲識其後而還之、

書啓

奉復常府源相公書

秋暑漸退、爽涼欻至、伏承西山尊老大人、神相景福、尊候清勝、此則邦家洪慶、萬衆大幸、至祝至禱、爰

垂盛眄、投賜瓊玉、重以嘉魚、玉者君子所貴、魚者小人所欲、今乃拜所貴、得所欲、二美兼具、五内感刻、燕喜雀躍、仰望鵬程、俯冀區區鄙悰、得少貢尊前、何幸加焉、枝辭蔓言、懼瀆高聽、一謝之外、不敢佗及、衷曲冥蒙、伏祈台炤、

與朱舜水書

泰斗重望、欽仰日久、昨因奥村師儉之先容、奉瞻揚休、山立之高標、握傾之際、鄙吝頓消、識韓御李、不足喩其榮、感激奚勝、今晨修敬門墻、辱蒙延接、又申之以賜教、寵眷之渥、實出望外、承委致書達尊意於安東兄、昨既受面諭、今復屢嚴戒、耳目之所及、不敢不言、行期既迫、不獲繼謁左右、悵恨無已、來歳秋末、當復來此、以托仁風、區區鄙悰、統祈台炤、

又

嚮獲進拜光範者再矣、平生葵心、頗既傾倒、禁促裝迫甚、不得飽德教、瞻仰之素、如水之必東、鐵之必南、無日不流向於左右、關山千里、徒以悁結而止、卽日梅蒸土潤、冷熱不恒。未審別來文侯如何、豈弟君子、神明所扶持、伏惟萬福、僕行李無恙、早抵金澤、毋勞遠念、如僕之庸劣、豈足挂太人之齒牙乎、比日師儉反旆之際、致翰餘末、辱蒙賜問、愛存之深、感佩靡忘、意緒如繭、不敢縷陳以塵高明、臨楮悚慄、仰冀炤亮、

又

幹羈在東武、私自計敝寓與貴館、隣近只尺、須當日候左右、飽聆立論、何意宦途忽擾、千緒萬端、左牽右纏、不得朝夕獲見、世事巧違、匪今斯今、振古如茲、歉殺歉殺、雖然或踰月、或浹旬、苟有間暇、則未嘗不趨門墻、苟造門墻、則未嘗不傾倒心腸、開示底蘊、幹何幸得眷愛寵榮、如斯之隆、感刻之深、至今猶見於夢寐心目之間、況又臨行之日、辱枉玉趾、賜以健筆、重以訓誨、夫敏愼爲學之要、敏而不失於躁、愼而不失於葸、此乃君子之全德、幹何敢望於萬一、傳曰、仁人之言、其利溥哉、今乃以贈言之訓、顏之座右、仰觀俯察、晝誦夜思、孜孜勉勉、若有所得者焉、則其利幹之溥、復將何如也、然則朝夕門墻復何異哉、何歉之有、奥村師儉專价奉問、茲修尺一、用貢謝忱、炎衡迫季、暑威可畏、伏惟珍護淸重、以慰

與望一、書不レ盡レ意、總垂二鑒察一、

又

一染爲レ縓、再染爲レ經、三染爲レ纁、物固不レ可レ不レ染也、而在下染之善與二不善一、擇之精與中不精上耳矣、人之相交也亦然、丹之所レ藏者赤、漆之所レ藏者黑、蘭室鮑肆、擇之不レ可レ不レ精者也、夫物之染也、其必一染濃レ於二一染一、善之染也、其可レ不二數染一乎、古之人一言相知、傾蓋如レ故、其所レ得不レ爲レ不レ多、若夫能再而三レ之、則染之深、化之成、其將二何如一也、若レ幹舊染汚濁、猶下紅紫綠碧間中于正色一、向在二東武一、執二謁伊墻一、得レ沐二清誨一、舊染頓消、新益少見、其猶二一染爲レ縓、庶淺染之善、擇之精、而益得レ至二其濃一矣、歸期有レ限、匆匆分離、不レ得二漸漬之久一、已再到二貴府一、陶レ於二盛德一者數矣、經之再染、其染益染、去歲今春、頻頻薰炙、殆八閱月、此乃三染爲レ纁之秋也、顧敗素朽帛、染不レ成レ色、惟供二大方家之一噱一已、雖レ然自今已往、四入五入六入七入、以成二眞色一、此又幹之素望之所レ在、而終賴二江海浸潤之化一也、睽別兩月、鄙吝復萌、瞻望弗レ及、臨レ楮耿耿、千般衷曲、統祈二台炤一、

又

光陰荏苒、歲律更端、適二茲陽泰一、恭惟新禧駢集、遐筭延長、至祝、前歲辱蒙二瓊報一、命下源剛伯得中厠二門下之列一、感刻之至、且論以二道學之實功一、言言至當、修レ己治レ人之要、其復有レ外レ於レ此乎、數百里之遠　猶可二以欽佩敬服一、爲二進修之地一、況剛伯日侍二函丈一、蒙二薰陶一、振奮興起、而學業之成可レ知已、遙羨遙羨、幹去冬還鄉、祥禫相繼、諸禮始畢、塵務猥幹、稟至蝟集、不下奉二數字一以修中候敬上、雲鴻冥矣、河鯉沈矣、疎慢之罪、恐悚無レ任、伏冀海涵陵度、不レ爲二蔕芥一、關山迢遞、瞻望弗レ及、言念二君子一、臨レ風鬱結、春寒斗峭、爲レ世爲レ道、珍攝是禱、

又

幹自レ得二寵顧之命一、洒二帚敝寓一、計レ日祇待、忽蒙二致翰一、諭以二尊體違和一、有レ妨二降臨一、即辰寒暄不レ常、伏惟珍重、若時保養無レ懈、他日貴鼎復レ常、謹容二卜レ日上稟一、餘附二面罄一、

又

幹解裝之初、濟之馳至、寒暄之外、不レ暇二他及一、問二尊候安否一、得レ審下天扶二斯文一、神人翼衛、動定享嘉、

百順咸宜、欣慰欣慰、無勝抃躍、幹之於先生、欽仰之深、暌乖之久、誼當急速執謁登龍門、無柰署事紛脊、弗能侘往、是以籍口於濟之、貢微誠於左右、何意翰教降頒、辭意懇到、爲寵爲光、照耀僦寓、愛存之隆、榮出望外、署事既了、便當祗候門墻、少伸謝臆、簡末嚴諭、傳之仙棹、惠念之辱、感激無已、披覩非遠、言不多及、區區鄙衷、伏祈臺炤、

又

嚮因奥村師儉便風、甫裁只赤、借修問敬、不意卑庸暗劣、不爲高明所弃、錫之以寵答、申之以腆貺、下拜祗領、惭悚交至、側聞先生震艮愆和、綿延兩月、邇日調護得宜、勿藥有慶、且驚且喜、今歲暑毒異常、不審入秋而來、尊候如何、仰望珍毓若時、永納康寧之福、夫以先生學純德粹、傳中華之道脉、激東海之儒流、聞風興起者、比比皆是、故寡君遣小生剛伯、執役於左右、之子姓源、氏五十川、剛伯其名、其父幹之黨友也、伏冀夏楚之嚴、陶鎔之化、提撕誘掖、至于有成、則蓋載之鴻造、幹亦可與感恩、前時所承謹誨、幹抵金澤之數日、既已裁書、郵致安東兄、想必不至浮沈、前書不錄、再煩諄戒、迷謬之咎、皇恐無地、來教諭以稱謂過謙、此乃幹崇仰盛德之至情、非過俙也、懇懇愛誨、無任感激、若猶仍舊、恐至方命、勉强敢從、以更前稱、意長材短、瞻戀之誠、百不盡一、統祈台察、

謝朱舜水書

德星照臨、忽覺蓬蓽生輝、而況高論風生、鄙吝頓消、唯恨延待失㳟、不少得暖文席、感愧交集、恐悚無任、誼當急趨門墻、俯伸謝悰、無柰幹事適至、忽冗移日、若又遲怠、罪譴實重、虔勒數字、以代面敬、嗣容卜日造謝、

又

昨赴龍門、過辱盛饌、續脯鳳胎、種種皆此仙厨奇品、所謂物其多矣、維其嘉矣、況飽道腴、醉德醪、不肖幹何幸、專承斯寵光、慙懼交至、感戢尤深、詰且當詣府以伸謝敬、適有事趨公、不遑執謁、茲借筆舌、少貢葵忱、書不盡意、統祈原亮、

與朱舜水書

藤井生來、辱孟秋貳拾肆日翰教、感感、就審比日

老先生有西歸之請、陳之執政、執政固執不可、而不達之公、故高志弗遂、特爲慨嘆矣、幹始聞而疑之、終渙然冰釋、以知先生之謙抑、常府公之尙德、而眷遇之深、其必有成於斯道矣、今夫西歸之請、其義高也潔也、君子成人之美、彼執政者、宜速告之公、以成先生高潔之美、何乃阻抑不達、此幹之所以始聞而疑焉、夫執政之心、則公之心耳、公欲留之、故執政留之、公之留者豈徒乎、蓋其志欲依先生相與有爲、以興斯道於東方而已、凡事之不成、以志之不立、苟志之有立、未有事之不成者、此幹所以知其終必有成矣、古之人有懸車致事之義、鐘鳴漏盡之戒、此爲尋常仕者而發耳、至于大賢君子、則未必拘拘於此、若太公之佐周、百里之相秦、在耋老之後、成不朽之大勳、幹之所期先生其在茲、奚翅幹而已哉、世之所望先生亦復在茲而已、併傳尊諭於奥村橋梓及淸季敬、相共嘆息、亦以幹言爲當、秋杪霜肅、寒氣漸至、伏冀爲世爲道、保變自重、八月閏賤恙涉旬、稍復之後、瓜期云迫、公務私幹、倚疊如山、裁答遲緩、罪無可謝、千萬鄙悰、統希台察、

又

前月中浣、托潮信奉鯉素、想無浮沈、旣徹記曹、此獲今井兄書、恭審尊候動定亨嘉、欣抃無極、就承幹之謭陋、過賜存念、感剴感剴、時下炎衛司季、畏日如熾、雖則如燬、氷壺霽月、超然埃壒之外、則燕間中天、不問可知矣、幹株守如昨、幸得無佗、唯心旌搖搖、日矚仙墻之下、而會奥村師儉專价馳候、謹修尺納、附貢寸誠、容易僭瀆、無任恐悚之至、

復朱舜水書

比候門墻、過蒙款留、無宗約期佗往、不能少侍談笑以答厚意、抱歉而歸、茲賜翰教、重荷眷愛、感激之深、何由言謝、就辱尊諭、及奥村師儉弔儀之事、有憂之日、適寡君于畋之期、府中事務塡委、東應西接、不可一日無師儉、故寡君强令起師儉、奪情就職、豈不畏簡書、事出于不得已、今田獵既畢、反旆達邸舍、尊意復欲在斯時而行弔禮、本邦之儀制、僻蒙高問、然幹之鄙野、豈足知禮節之詳、假令知之、本邦

之儀與二中華之禮一、度數品節、大有レ不レ同、況寡君還府之始、事之關二師儉一者、倚疊如レ山、故居二公府一之日多、而退二私館一之時少、此源濟之之所二熟知一也、本邦之俗旣已免レ喪。則不三復行二弔禮一、愚意以爲師儉旣非レ復視レ事、則不三更行二弔禮一亦可也。不レ知高明以爲二何如一、盛諭之悃悃、一一達二之師儉一、想當三別中二謝敬一、會濟之候二丈席一、就貢二愚忱一以備二採擇一、百千鄙悰、伏希二台炤一、

又

幹抵レ都之初、源剛伯來、寒暄之外、未レ及二佗事一、先問二先生之安否一、剛伯爲說二比日尊候淸勝、動定萬福一、欣抃無レ量　如レ幹平日欽仰之深、歷歲暌離之久、誼當三速執二謁閣下一、無レ奈署事紛冗、無レ由二佗往一、是以託二言剛伯一、貢三微誠於二左右一、不レ意台敎降頒、辭意懇到、爲レ誰爲レ光、照二耀徹萬一、愛存之隆、榮出二望外一、署事瞭了、當須下祗二候門墻一、少伸中謝臆上、書尾嚴委諭、傳二之仙桂一、惠念之辱、感激良深、百般鄙悰、統祈二台炤一、

又

前時辱惠二瑤函一、副以二高和二章一、開レ緘捧誦、恍如下登二崑崙一入中鮫室上、琳琅珠璣、粲然奪レ目、徐而察レ之、則謬稱下不肖沐二新恩一、將中重任上、過爲レ祝、而老拙頑鈍、何曾承二當百一、慙赧無レ已、若二不肖一幸賴二諸公之推轂一、進二步雲路一、此則台臺之鴻庇也。感激之至、何日忘レ之、別幅贐儀、併荷二惠愛一、歲暮匆忙、奔趨東西、即今還舍、裁謝稽遲、莫レ罪二怠慢一、凡百向稟、統期二詰旦一、不一、

與二朱之瑜一書

拜二違光範一、纔數旬爾、奧論玄詞、隱隱在レ耳、近獲二源濟之書一、就審二老先生德履淸勝、動有景福一、景仰之懷、少足二慰浣一、幹向在二貴府一、數趨二門墻一、屢蒙二款待一、飫二和飽德一、坐二春風一、享二太牢一、感刻之深、何日忘レ之、幹跋涉無レ他、首夏念八、旣到二金澤一、卸鞍之際、舊知新歡、往來勞苦、應酬之煩、忽忙度レ月、一掬謝悰、遷延至レ今、適奧村師儉專人候問、茲勒二數言一、謹修二候敬一、不レ騰士宜、聊貢二寸忱一、兇留爲レ榮時下炎衡司季、赫曦可レ畏、雖二豈弟君子、神之所一レ扶、冀順レ時保嬰、以慰二輿望一、雲山千里、瞻望弗レ及。區區鄙衷、統希二台管一、

與二朱舜水一啓

伏以海岳降靈、方鍾乾坤正氣、斗山凝望、每膺月旦高評、葭管添一線之長、華筵開七衮之慶、恭惟老先生卓爾風標、醇乎學殖、胸蘊經綸事業、口吐黼黻文章、一生忠肝、擬折漢廷之殿檻、千古道脈、竟極考亭之淵源、適會中原淪胥、備嘗外域艱險、幼安避地、枋得誓天、夷虜君不君、乘桴向東方君子之化、帛肉老其老、賜杖祝南極老人之祥、曰壽曰康、天乃錫箕疇洪福、惟德惟齒、世皆稱軻書達尊、幹性本棗昏、材眞樗散、寸進尺退、若跛牂追駿蹄、小學大遺、似斥鷃望鵬翼、謬涴金蘭之末契、久而自香、冀藉光霽之餘輝、脫然有得、幸逢瑞旦、敬效頌私、師儒鑄人、鑪尚能鎔出多少彝器、公侯養賢、鼎要須鍊成八千遐齡、

復加藤喜山書

春暮雲緘、仲夏下旬、自某處傳達、披誦圭復、怳如晤語、就審頃日體履佳裕、深慰鄙衷、所惠淸詩一律、句語流麗、格調雄暢、吳下阿蒙、非復舊日之比、足下之還鄕、纔數歲而已、文藻詞華、倍萬曩昔、不知足下所以與共講磨切偲者、有何人乎、將賢訓慈範、有得於家庭乎、抑亦所謂異書、有若中郎得論衡乎、人誰無父兄、人誰無朋友、而服其敎而輔其仁者鮮矣、汗牛充棟、束而不讀、讀而不得其意者、比比有之、足下之所得也如此、則非薰陶勉勵之所致也、可喜可尙、不佞樗散棄材、加以數旬日眚、不能執筆、數字之報、遷延踰月、而今泥睡小瘥、肅裁尺楮、以謝踈慢、且依來詩之芳躅、答眷眷之盛悃、碧雲天涯、引領延佇、河魚雲鴻、莫遂徽音、念茲在茲、梅潦既去、金庚未伏、炎雲燒空、烈曦可畏、隱几目眩、操觚神疲、風窗凉館、隨處珍嗇、雖然囊螢之勤、饐瓜之警、亦學者之所可佩服、足下幸其思焉、

答杜秀才

頃日長鬚持華箋而來、不佞適有急故出外、相遇門傍、纔開緘而止、爾後事務蝟集、不遑執管、答書經曰、書中所論易序大全以爲程子所作、其說固可用矣、孔聖全書以爲朱子所作、與游涎之所見相合、此亦一見、未爲定說、兩存可也、蔡沈傳、宋史未暇鈔出、今暫節略闡書所載、以呈梧右、足下曾見言行錄否、若猶未、則是似如何、所

レ諭有若之事、非レ可二承當一、多言嘵嘵、似レ添二蛇足一、不レ如二默止之爲一レ愈、酒師之滑稽、足レ解二人頤一、不佞性不レ勝二杯酌一、他日若逢二良工一、鼻尖針二酒魔一、爲二醉鄉徒一、則當二執レ贄而問一レ趣、猶恐足下以爲二舊日阿蒙一、不下爲二醒者一傳上、戲謔之言、不レ可レ爲レ典、投二秦阬一爲レ幸、

復二東皐心越禪師一書

暌二違淸儀一、炎凉屢更、瞻仰之懷、汪若二望洋一、忽辱二琅函一、捧誦再三、往歲高田盛會、粲花玄論、恍在二心目一、鬱陶吾思、渙然冰釋、且副以二兩種珍貺一、幹也日昨目瞤指動、宜乎得レ嘗二斯異味一也、就審法候違和、就二醫上都一、諸天保護、三彭漸退、至祝、詩不レ云乎、藥只君子、遐不二黃耇一、勿レ藥之喜、可二計レ日而待一矣、曩歲石原學子假二寓敝廬一、攻苦茹淡、勤勤不レ已、顧幹之淺陋、開導乖レ方、百無二一益一、今乃遜賜二鼎言一、厚顏忸怩、書中示諭學子醫術淵源有レ據、即今學子居二河之濼一、鴻術漸振、求劑之屨、戶外漸滿、有レ本者如レ是、混混不レ舍、榮達可レ期也、如レ幹舊歲病豎作レ祟、臥蓐十旬、至レ春稍安、病餘老懶、省事保養、非レ有二公事一、少二外出一也、嚮聞飛錫之至レ於レ斯也、不レ能下聘二一介一而候中震艮上、疎慢之咎、憑レ誰鳴謝、夏衡標季、盾日可レ畏、爲レ道爲レ人、珍燮一、勿レ懈、凡百鄙衷、統祈二炤亮一、

與二石徵君一書

奉二暌斗山一、忽巳累月、瞻望之素、不レ忘二晨夕一、俗冗蝟集、不レ能下修二寸楮一而伸中鄙悃上、多罪、豈陳レ于二鉛槧一乎、未レ審近來文候動履佳勝否、燒天火雲、爍石烈日、殆如レ坐二甑中一、想見凹凸窠裏淸泉茂林、無二塵寰一點之煩懊一、鍵羨健羨、白瓜一籠・魚鮓一囹、供二山厨一時之用一、叱留爲レ幸、伏祈爲レ世爲レ人自寶、

與二三宅大兄一

客舍彈レ鋏者久矣、忽有二嘉魚之貺一、感感、昨有レ幹佗適、答謝及レ今、非レ有二佗慮一、望不レ爲レ恠、嚮辱承二賁臨一、而少伸二鬱結一、雖レ然十數年之闊悰、豈能一日二日之所二傾倒盡一哉、若有二餘暇一、源源而來、實慰二渴望一、統希二鑒督一、不一、

恭靖先生遺稿卷三

頌

太平頌

甲戌之秋、應ニ亞相烏丸公之求一、

亮按、先考時十有三歲、作ニ此頌一、亞相公奇レ之、奏　覽、亞相公贈レ詩、有下一篇上達得ニ天憐一之句上、

皇帝陛下、即　祚以來、物無ニ違拒一、朝廷清明、無レ有ニ欺蔽一、光ニ被四表一、格レ于ニ上下一、克明ニ峻德一、以親ニ九族一、九族既睦、平ニ章百姓一、省ニ刑罰一、薄ニ稅斂一、深耕易耨、耕父推レ畔、漁豎讓レ陸、是以四海之內、學校如レ林、庠序盈レ門、遙集ニ乎文雅之圃一、翱ニ翔乎禮樂之場一、國家殷富、上下交足、卿士庶人、黃童白叟、踊躍歡呀、或慶レ於レ庭、或歌レ於レ市、或抃レ於レ野、太平之期、適當ニ此時一、皇帝神聖、通ニ達先古一、聽聰視明、惟精惟一、天錫ニ皇帝、寵臣碩輔一、博問遐觀、以置ニ左右一、億載萬年、下民無ニ敢侮一、天錫ニ皇帝、與レ天齊壽一、登ニ茲太平一、無怠永久、億載萬年、爲レ父爲レ母、而後既傳ニ　位今上一、移ニ殿內園一、其基レ德也、隆レ於ニ姬公之處ニ岐、其垂レ仁也富レ乎ニ有殷之在ニ亳、澤至ニ四海一、配レ天光宅、冠ニ道德一、履ニ純仁一、被ニ六藝一、佩ニ禮文一、含淳味德之聲盈レ耳、登降揖讓之禮極レ目、其宮室也、體ニ象乎天地一、經ニ緯乎陰陽一、據ニ坤靈之正位一、倣ニ大紫之圓方一、張ニ千門一而立ニ萬戶一、順ニ陰陽一以開闔、其中有ニ靈囿一、草則藿蒳豆蔻、蓋棄非レ一、江離之屬、海苔之類、抗ニ白帶一、御ニ朱蕤一、光色玄晃芬馥、木則楓柙豫章、栟櫚枸椰、縣杭杶櫨、松梓椅桐、擢レ本千尋、垂レ陰萬畝、攢レ柯挐レ莖、重葩掩葉、故鳳凰巢ニ其樹一、麒麟臻ニ其圃一、神爵棲ニ其林一、甘露零ニ其庭一、春見ニ椿花一、開ニ八千壽一、夏和ニ薰風一、彈ニ舜五絃一、秋因ニ菊花一、延ニ百歲齡一、冬因ニ尺雪一、知ニ豐年瑞一、其靈沼黃龍遊ニ其淵一、醴泉流ニ其塘一、於牣魚躍、鳥則玄鶴白鷺、黃鵠鵁鶄、鶬鴰鶤鷄。見覩鴻雁、沈ニ浮汎ニ濫乎其上一、孟子所レ謂賢者而後樂レ此、可レ謂レ是也、臣生レ於ニ窮巷之中一、童蒙無知、雖レ然遭ニ斯淸世一、敢不レ略陳ニ其愚衷一、

銘

賀陽菅相公研匣銘

體剛象レ乾、用靜法レ地、惟其觀レ物、可二以立一レ志、研二侯之慮一、磨二民之義一、石堅有レ箴、噫近取レ譬、

狙公研銘（其彩狙公烏帽、腹有二精筆一受レ墨、）

君子所レ化、鐵石心肝、莫下以二形似一、傚中楚猴冠上、

養魄研銘

墓精吐レ月、團圓如レ規、其明時晦、養二魄玄池一、

席珍研銘

奥村翁顯思、新製二一研一、旁雕二雲龍一、問レ余而名レ之以二席珍一、蓋取二諸少陵豈是池中物、由來席上珍之句一、而其言出二戴記一、夫翁之高志雄才、固非二池中物一、而能忠信强力、歸二之儒行一、則能持二其志一者也、能用二其才一者也、故因二席珍之義一、銘以研二其慮一云、

得レ雲行レ雨、恐非二池中鱗一、入レ墨歸レ儒、庶爲二席上珍一、

剔蘚研銘

素立翁製二石鼓研一、求二名於一レ余、其色斑斕白黑、紫綠相交、如二苔蘚一然、余摘二昌黎剜苔剔蘚之句一、名曰二剔蘚一、且爲二之銘一云、

鼓二其形一、蘚二其色一、研二其用一、玉二其德一、磨不レ磷、守二玄默一、

策勳研銘

珊瑚相映、墨海玄雲、誰架二彩筆一、爲レ君策レ勳、

鷺研銘

匪二鷺之黑一、爲レ近二墨池一、一般淸意、涅而不レ緇、

研銘

陰山潜璞、不レ琢二其眞一、貞靜玄默、唯德結レ鄰、

梅花研銘

花中之儒、石交耐レ久、知レ白守レ黑、與レ研同レ壽、

魚龍研銘

莘乎其尾、六六躍鱗、嶄然厥角、九九通レ神、

活潑研銘

天機自然、活潑潑地、纔躍二墨池一、龍門何異、

鑑研銘

瑚璉方圓、取二象天地一、文同レ用レ周、誰謂二汝器一、

布袋研蓋銘

皤其腹、囊二括四海一有レ礜、黝斯石、研二覃千古一無レ餘、

飛雪研銘

見レ晛不レ消、涅而不レ緇、雪嶺之雪、飛翻二墨池一、

水色香爐銘

加州老臣今枝君、蓄二焚香瓷甌一、名レ之曰二水色一、而世之傳者、謂此蓋取二徐凝山頭水色之句一、以言三瓷色與二香煙一、而不レ知下水之清與レ平、施二有政一措二規箴一者上、君之心隱然有レ在也、介二予銘一レ之、弗レ獲二拒辭一、漫贅二數言一曰、

博山別樣、柴窰佳名、水色外潤、火候內成、一穗臭臭、百和烘烘、坎離相濟、寬猛得レ中、以薰以陶、惟德惟馨、有レ物有レ則、尙稽二此銘一、

侍從信州刺史藤公祠堂石盥盤銘

卽彼山石、既文且貞、方盤式鑿、淸漪其盈、一勺之潦、萬境維新、誠敬以祀、神休駢臻、于レ堂于レ庭、有レ儀有レ威、兄弟克諧、家國用肥、匪二物之堅一、迺德之久、滿而不レ溢、垂二澤胤後一、

鳩杖銘

逍遙養レ性、出入扶レ身、祝鳩無レ噎、化レ龍有レ神、老少相伴、月夕花晨、靈壽之壽、願保二八旬一、

茶磨銘

此一副磨、緫經二敏手一、便脫二頑名一、因レ玆內外圓成、由レ是上下和合、終始常無二退轉一、從敎二向レ上留一レ心、恁佗雀舌龍芽、這裏須レ要二粉碎一、腹內多通二路逕一、發處不レ受二塗糊一、觀二佗日用工夫一、見二其頂門一竅一、未三敢呈二示諸人一、若要三細末將來一、幸望二先垂飄手一、

時軒銘

鈴木生玄休以レ時顏二其軒一、請レ言爲レ警、因述而勗レ之、

孔曰學習、說曰務敏、時乎時乎、玆宅乃準、

清明鏡銘

容短自見、假レ照而淸、心昧自省、監レ德而明、非レ禮勿レ動、非レ法不レ服、淸明在レ躬、神介二景福一、

花瓶銘

覩二瓶之居一、改井異用、養レ花不レ窮、我與レ爾共、

竹尊銘

中山松醪、西蜀筠筒、式燕且喜、君子淸風、

箭筒銘

會稽之箭、董澤之蒲、治不レ忘レ亂、時張二之弧一、

蓬樓石銘

一拳根核、出レ地含レ雲、層巒奇嶽、橫理回文、螺髻高聳、蛾黛細分、案几奚載、銅盆用盛、瀛海三島、崑

嵩五城、東漸西被、美具難レ拜、空中樓閣、壺裏山川、小大雖レ異、眞假同然、不レ緇不レ磷、維白維堅、君子所レ介、志在二靜專一、

敬業齋銘

木村生三圭、童稚好レ學、篤志二斯文一、新構二書齋一、問二名於レ余、爲摘二學記敬業之言一、揭二之楣間一、因爲二之銘一、以勗焉、

人心之善、厥初本レ天、氣拘物蔽、內擾外遷、卓彼先覺、道二斯後賢一、惟業惟敬、以勤以專、朝受夕序、日磨月硏、主レ一無レ二、居レ正不レ偏、修レ辭立レ誠。仰レ高鑽レ堅、終始典レ學、聖教乃全、

贊

朝陽贊

夜氣所レ息、平旦惟淸、人欲未レ起、天理太明、勿レ正勿レ忘、不レ將不レ迎、丹臺豁如、朝陽鳳鳴、

洛書贊

洚水方割、於帝疇咨、庶土荒度、惟禹甸之、彝倫攸レ敍、範作之師、五行敬用、八政農施、協レ紀建レ極、念レ徵稽レ疑、剛柔互克、福極相期、圖則龍馬、書象神龜、前聖後聖、此時彼時、天人有レ應、符籙在レ茲、周家授レ法、箕明不レ夷、

黃帝贊

嗟哉軒轅氏、文明之美、於レ是乎起、棟宇宮室、世以爲レ常、而忘下巢居穴處之病上レ于二洪荒一、冠冕章服、人得二其宜一、不レ思下風雨寒暑之困上レ于二衣皮一、所レ謂百姓日用而不レ知者也、醫方曆數、律度量衡、舟車金刀、井地陣兵、維帝神靈、而集大成者與、

太公望像贊

世之畫二太公一、多取レ於二渭上垂釣一、蓋有レ待二於遭遇一者耶、池田貞雄出二新意一、依二史遷之言一、令レ寫二白旄黃鉞之狀一、以見二發揚蹈厲之志一、就求二贊語一、余奇レ之爲述二數言一、以廣二太公之志一云、

猗歟太公、周家久望、渭濱熊兆、牧野鷹揚、白旄黃鉞、凉彼武王、獨夫就レ戮、萬姓惟康、就言陰謀、霸者之論、何用二間諜一、兵家之言、栽培傾覆、推レ亡固レ存、仁者之師、體二斯乾元一、

顏子

顏子之子、好レ學絕倫、博文約禮、克レ己歸レ仁、善人惟富、陋巷非レ貧、犯而不レ校、渾厚如レ春、

曾子

篤矣宗聖、聖學傳レ眞、一貫貫レ道、三省省レ身、武城避レ寇、文會輔レ仁、孝經至德、永敍二彝倫一、

子思

中庸爲レ德、萬物咸亨、不レ偏不レ倚、無レ臭無レ聲、祖二述堯舜一、表二章朱程一、九經三思、都屬二一誠一、

孟子

孔門私淑、鄒國稱レ公、道承二三聖一、氣盍二七雄一、功豈禹下、言必堯中、泰山喬岳、萬世仰レ風、

董仲舒

鄒魯迹熄、微言幾湮、儒哉是儒、醇乎其醇、下レ帷發レ憤、守レ經正レ身、學達二性命一、策極二天人一、抑二黜百氏一、嚴二辨三仁一、正レ誼明レ道、確論絕倫、

周子

斯文千歲、于レ周有レ光、無極太極、一陰一陽、溪月曰霽、池蓮惟香、繇繇道統、地久天長、

明道

河南夫子、秀外誠中、繼魯續緒、闢閩弘擴、渾金璞玉、和氣春風、睟然見レ面、淸明在レ躬、

伊川

河南夫子、道貫二古今一、二難無レ競、四勿有レ箴、麟經明レ志、羲易傳レ心、矩方繩直、誰不二仰欽一、

陶淵明

卯金禮樂、我馬爰亡、南山玄豹、霧雨斯藏、東籬黃菊、田園猶芳、絃無琴在、日促心長、桃源可レ託、葛天是望、潛雖レ伏矣、亦孔有レ光、

太公

熊二兆渭上一、鷹二揚孟津一、武成過レ亂、惟是仁人、

管仲

一匡九合、霸功有レ餘、四海鼎沸、微レ管其魚、

田穰苴

斬賈立威、燕晉退壁、司馬有レ法、王者無レ敵、

孫武

五事七計、三軍九地、一言蔽レ之、上下同意、

吳起

孫奇吳正、奇由二正論一、在レ德非レ險、千古格言、

范蠡

逃二分國賞一、願二傾城姝一、鴟夷一舸、誰辨二有無一、

張良

斃レ嬴踣レ項、借レ箸運レ籌、黃石傳レ法、赤松託レ遊

韓信

呂牝司レ晨、慘毒如レ虺、丹心示レ通、赤族因レ禘、

諸葛亮

鼎立方成、鞠躬盡瘁、出レ師忠肝、一言一淚、

司馬懿

狼顧奇相、機心不レ純、一槽三馬、弄レ假成レ眞、

關羽

禁軍介沒、許都避銛、天若祚レ漢、不レ奪ニ吾髯一、

周瑜

赤壁奇捷、火德不レ寒、醇醪有レ毒、醉ニ倒老瞞一、

菅神贊

嗚呼菅神、英靈所レ屯、生齊ニ申呂一、道泝ニ羲軒一、黼ニ黻王度一、領ニ袖儒門一、千載廟祀、四時蘋蘩、石貞水潔、瀹ニ祓心源一、飛梅影淸、老松綠蕃、善頌善禱、可レ敬可レ尊、日新ニ德澤一、永潤ニ後昆一、

楠正成訓子圖

維南有レ木、本支相同、義方承レ訓、勇烈匪レ躬、是父是子、克孝克忠、凜凜生氣、千載仰レ風、

惺窩先生贊

孔孟道熄、經ニ千餘年一、舂陵風月、纔得ニ其傳一、關閩地隔大瀛海、市原文章同ニ其天一、濂溪之門、曰程曰楊、曰羅曰李、至ニ于考亭一、道學大明、惺窩之徒、爲レ林爲レ杏、爲レ菅爲レ祐、由ニ于堀川一、講習最精、冷泉一派、餘潤遺澤、起ニ東方大平之口流一、丹桂五枝、殘芳剩馥、託ニ南豐辨香於神州一、如レ聽不言教、難レ報罔極恩、孟意勞ニ筆墨一、于以代ニ蘋蘩一、

篁洲生爲レ余寫ニ肖像一、求レ言、爲題贈、

咨爾與レ我、如ニ陰有レ陽、不レ言不レ笑、非レ閒非レ忙、道存ニ目擊一、神傳ニ毫芒一、平生履歷、尺寸短長、四十從レ仕、遲暮類レ楊、六十被レ徵、晚達似レ唐、古稀既過、來者可レ恇、北溟奮レ翮、東海望レ洋、富貴貧賤、用捨行藏、因レ遇因レ運、焉有焉亡、唯學之好、至レ老不レ忘、几上筆硯、架頭縹緗、照レ螢聚レ雪、數レ墨尋レ行、旣無レ所レ得也、豈牽ニ舊章一、悔レ溺ニ博雜一、終失ニ蒼黃一、寫レ眞誰也、惟洲之篁、塵埃滿レ幅、面目可レ傷、卷還ニ之子一、何足ニ以臧一、

瓜田不レ納レ履圖贊

程叔子曰、避嫌之事、賢者且不レ爲、其言也高、高者危矣、選詩曰、君子防ニ未然一、不レ處ニ嫌疑間一、其言也卑、卑者平而安、瓜田不レ納レ履、避嫌之卑者、君子之道、登レ高必自レ卑、下學而上達、灑掃應對、精義

入神、人能有避嫌、而後可以無避嫌、子與氏所謂人有不為也、而後可以有為、此乃魯人所以吾之不可學柳下恵之可、而稱於聖人、詩曰、周道如砥、君子所履、其如砥者、平而安也、易曰、視履考祥、幹有感此圖、因為之賛、以告世之好高者、而復自警焉、詞曰、

積卑為高、高而不危、升高不已、失足於卑、瓜田之履、念茲在茲、於戲君子、可以類推、

戲題壺公像

壺公何為者、一壺避塵寰、寰中何所有、酒泉與茶山、煮茶又酌酒、忙裏心自閒、七椀風生腋、百杯丹滿顔、醉鄉蓬萊何處所、別有天地非人間、

碑誌

御醫山脇先生碑陰記

先生姓橘、氏山脇、諱玄心、字道作、相傳其先河內楠氏之族、中世徙居江州山脇邑、因以為氏云、父諱正節、自江州移濃州岐阜、仕織田信忠、娶三好氏女、以文祿三年、生先生於岐阜、數歲、隨父來京師、先生幼而聰恵、精專好學、十有五歲、學醫於延壽先生、潜心研覃、術業早成、十有七歲、筮仕丹陽有馬氏、事不苟合、不一歲而罷、比至弱冠、事濃州德永氏、食祿五百石、未幾、有故而去、遯於紀州、數年而歸京、元和庚申、有詔診視中和皇后、進御藥、有奇効、官醫玄由薦之為侍醫、以 賜官祿、實先生二十有七歲也、閒兩歲賜醫官、稍稍遷轉、寛永癸未、遂叙法印、明年敕賜養壽院號、寛文六年、歲七十三、幕府賜年俸若干、蓋賞勞也、延寶六年十月八日、病終於家、壽八十有五、葬之城南霞谷之原、先生資質溫厚、莫逆於物、行止有恒、不喜苟愉、其居室也、終日危坐、無有惰容、其趣朝也、必浴必戒、無有逸志、性有至行、孝於父母、睦於族姻、初娶新庄氏、有子男二人、長淸安、次道貞、女一人、皆先沒、繼娶山村氏、無子、外孫玄直幹蠱、亦早亡、玄直子二人、曰勝曰久、俱幼、以外甥玄修為嗣、先生自始為御醫、歷仕五朝、世蒙恩遇、

太上皇及

東福太后寵眷最甚、每上御藥、未嘗不有効

驗、是故
聖躬之保護、仙齡延長、服食修養之術、惟先生是聽、先生老益壯、而少有疾病、寛文五年、適患頭瘡、太上皇特令中使日問安否、珍菓玉食、賜賚稠疊、疾愈、敕許爲帽鳩杖、用侍殿上、此乃優老之渥恩也、紀府相公、二豎爲祟、遣使聘召。以求治療、
太上皇不允曰、朕不可一日無道作、道作不在、朕心不安、是以弗往、幕府之賜祿俸也、例必往東武謝恩、亦有詔不許、坐食其俸、世少其比、故宮車之遊豫近郊、先生必持藥囊以備緩急、而仙源之花、姑山之月、菊潭之壽宴、楓林之御賞、必召先生以賜珍饌、
太上皇嘗曰、貴耳賤目、今昔之通患也、假令東垣丹溪在于今世、與道作幷馳、其誰爲之軒輊乎、諸醫之可侍禁闈者、至瘍科眼科之微、必咨先生、以決能否、其始拜闕也、先生亦必爲之先容、先生謹愼不泄、常念温樹之戒、宮中之事、未嘗向外而說、故
聖眷之深、人莫得而知者、而其術之行於世、起死回生之功、養老保壽之効、昭昭於人之耳目、有不可得而掩者、其受業於門者六百餘人、而爲官醫名於世者、比比而在、嗚呼盛哉、夫壽者五福之最、人之所同欲、而不可得而必者也、而又有可得而必者矣、蓋不可必者天也、而長短厚薄、稟於有生之初、可必者人也、耆壽康强、得之養生之後、譬如貯火、置之密室、久之無過、喩之種樹、栽培得宜、碩茂長遂、而况爲物之靈、頤養得道者乎、若先生也、耆壽之福、康强之美、此全天於人、而得可必於不可必者也歟、養壽之名、其實之不可誣也如此、醫者固所以壽人、人之所同欲、而先自得之於己、則其施於人之効、不言可知、宜乎門人之以術鳴者多矣、所著養壽錄、醫方捷徑、原病式集解等書、門人傳之亦以壽世、既葬之明年、門人斲石、表之兆域、請余志其行實、余與先生有姻親、不可辭、遂據其言而書、

西山健甫碑陰

嗚呼健甫、天何與才之長、而奪年之速耶、健甫馬州產也、聰敏好學、以太守之命學文我門三歲、

日夜淬礪、唯恐不勝其任、是以其學大進、詞場文壇、多先諸子、嗚、嗚呼痛哉、斯人也而有斯厄也、我不知天意之何如也、健甫生于萬治戊戌、享年三十有一、今歲十月三日、病歿于東武、棺斂用儒法、葬之谷養玉精舍、病革、猶縷縷以學之不終、命之不酬爲憾、其志可哀也矣、健甫、氏西山、諱順泰、健甫其字也、

朝散大夫內史今枝君墓碑銘

君、氏今枝、諱重直、小字彌八、世爲濃州士族、兵燹之餘、譜牒散逸、不詳其始、逮事關白秀次、賜姓豐臣、考彌八、諱某、天文弘治之際、屬齋藤氏、數有斬馘之績、齋藤氏褒功之書、猶有數幅存、天文甲寅、生君於濃州某邑、元龜元年、織田信長伐淺井氏、屬鋒姊川、君年甫十七、屬信長部將、兵及初交、右軍少却、君鼓勇奮擊、早獲首級、明年、信長擣長島賊巢、賊勢方熾、及班師、數百群尾其後、君與安藤氏、力戰却之、繼仕織田信雄、天正甲申、豐臣秀吉有異謀、東照廟援信雄、營于小牧山、秀吉率池田勝入森長一等、對壘于樂田羽黑、君與神子田某、出營挑戰、摩勝入之壘、勝入者驍將也、怒其陵己、謂家臣日置正勝曰、誰敢薄我軍門者、其械其甲、非今枝與神子田乎、奴輩敢如此、可速往取之、正勝率數十銃手、注射如雨、君與神子田、左旋右抽、從容翱翔、徐驅而反、衆嘖嘖稱其膽勇、長久手之鏖戰、揮鎗健鬪、一日兩遭、君生長兵間、壯勇之名、藉藉尾濃之際、進仕關白秀次、秀次掄選名士、賜姓叙爵、君與其列、階五品、任內史、秀次之廢也、賀能越三州牧贈亞相菅公幣聘招致、移家賀府、寵待優禮、日甚一日、逮黃門公之臨國、恩遇彌隆、君篤實簡直、强記好談、黃門公詢以近古之軍略、一一歷說、琦辨如流、退老之後、薙髮號宗二、居常好客、茗飲酒醴曲謠與僚友共之、優游卒歲、寬永四年十二月廿三日、病卒於私第、享年七十有四、葬之金澤野田山麓、君娶平松氏、無子、以姪直恒立嗣、直恒勤愼貞亮、寬和有才略、黃門公甚嘉之、選於衆舉爲家相、故羽林筑州公之傳、與聞國政、筑州公聰明秀發、日就月將、仁聲威望、軒翥諸侯之右、大猷廟數稱直恒輔導有方、正保乙酉、筑州公奄逝于東武、今羽林公年僅三歲

也、黄門公撝謂直恒曰、我老遘斯凶、天之棄我、我復何言、然國乃祖先之國也、我可以我私負我祖先乎、其汝克敬嗣傳我孫、其保其護、綏我邦家、直恒稽首泣血而受命、誓絕鄉思、保祐訓護、鞠躬盡瘁、越七歲、沒東武寓舍、病革也、黄門公、枉駕臨視、執手悲訣、君臣之遇、可謂盛矣、遂命男近義復其國柄、繼保傳之、近義黽勉惕厲、夙夜匪懈、十有一年、羽林公德器早就、英譽四馳、萬治辛丑、以 幕府之 鈞命、始就領國、三州之士民、愛戴畏敬、莫不沐恩霈而肅威風、詩云、靡不有初、鮮克有終、直恒近義、堂構相承、輔養之勞、可謂有初有終者、而其聲華行實、爲奕乎累葉、蓋復今枝氏餘蔭之未艾者也 初直恒欲爲君擇善地、改卜幽竁而不果、洛之艮隅、高野之墟、群山縈紆、瀏乎淸泉、蔥然茂樹、瑕丘之樂、佳城之爵、於是乎在、近義多方求獲之、遷葬祖考祖妣、考與妣之四棺、蓋成先志也、且因其山屬台嶺、爲營一梵刹、爲革翬飛、輪奐可觀、復運巨石自泉州、鐫其首、龜其趺、銘其祖之功行、夫有先人之美而不知之、不智也、知而不傳之、不仁也、不仁不智、何以立人之朝、而示後之人乎、此近義之所以汲汲於鐫刻也、直恒娶前田氏、對馬守長種之女、有子男五人、近義其嗣也、次某、次某、長乎近義者二人、早亡 女四人、皆適名士焉、近義屬余請爲之銘者數矣、辭、不得已爲叙其顚末、併述餘慶延于後嗣、銘曰、

有蕘今枝、託根濃陽、士林抽穎、英氣維揚、奮扙姉川、陷堅摧强、殿長島兵、鳴小牧槍、豊臣之姓、太夫之章、卓犖榮遷、烜赫令望、臨慶之國、茲垂休祥、是楠是梓、不柔不剛、輔導濟美、條葉騰芳、台嶠西麓、山廻水長、窅窅玄宅、蕭蕭白楊、勒辭貞石、永世無疆、

朝散大夫豫州刺史奥村君墓碑銘

所謂故國非謂有喬木之謂也、謂有世臣之謂也也、世臣者、乃祖乃父、與其高后先后、患難憂危、相與共之、而後世子孫、樂利安榮、與國同休戚者、我於奥村君見焉、奥村氏、姓平、其先在筑陽、號福富氏、世爲前田氏家臣、從前田氏、自筑遷濃、自濃遷尾、食米於尾之奥村邑、遂以爲氏、君諱永福、俗字助石衞門、自幼雄

健、有レ異二常兒一、年十八、爲二前田氏一守二荒子城一、有二守不レ假レ器之譽一、亞相公善レ之、元龜元年、織田氏攻二越前金崎城一、亞相公爲二前鋒一、君從レ之、苦戰獲二首級一、其秋織田氏討二攝州天滿賊一、班軍之日、公殿レ之、賊衆四起、危殆特甚、公皆擊却レ之、君與二村井某一、力戰傷レ股、凡織田氏之經二營四方一、公必從レ之、公之櫛風沐雨、君未下嘗不中執二羈靮一而從上、北陸漸平、織田氏乃賜二公能州一、居二七尾城一、織田氏之難、能州之舊族、溫井氏三宅氏復入二石動山一、築三壘於二荒山一、公急擊敗レ之、殲二厥渠魁一、君亦有二斬獲之功一、柴田氏之滅也、豐相國益二封公一以二賀州一、公自二能州一移二金澤城一、跨二有兩州之地一、初佐佐成政、同レ公仕二織田氏一、而不二相能一、於レ是乎成政領二越中一、與二賀能一壤地相接、竊懷二覬覦志一、能州末森山、控レ賀臨レ越、要衝之地、公爲築二城壘一、而難二其守一、輿論所レ歸、命二君守一レ之、天正十二年九月、成政猝率二大兵一襲二末森城一、急攻一日一夜、城將レ陷者數矣、君與二榮明一奮膽鼓レ衆、誓レ死固守、內子加藤氏持二長刀一、率二侍女一巡レ城拊循、士皆感激、勇氣百倍、易英尙少、復能放二矢石一、使間告三急於二金澤一、公聞レ之、

投レ袂而起、屨及レ於レ門、馬及レ於レ市、與二長嗣贈亞相公一馳往救レ之、黎明至二末森一、直進擊二佐佐兵一、君亦開レ門夾攻、鏖戰數刻、大敗レ之、成政狼狽而逃、公及贈亞相公感二其忠赤一、幷賜二褒書一、公復賜二其日所レ用鎗旐牙旗、金裝腰章甲胄、大小寶刀三口、及黃金若干一、君之功名於レ是赫奕矣、夫國家興亡戰爭之際、必先有二一大捷一、褫二敵人魄一、而彼勞憊氣阻、以至二滅亡一、長平之敗、趙不二復振一、淮淝之衂、秦自レ此斃、自二末森之失一レ利、成政心悴力衰、終喪二其國一、公之所四以能創三業於二三州一、職此之由、然則君之忠誠憂勞、與レ國同二休戚一、無レ愧レ於二世臣一也、天正十五年豐相國征二島津氏一、命二贈亞相公一、攻二豐前岩石城一、君爲二先鋒一、攀レ堞入レ城、中レ石傷甚、其伐二北條氏一、命レ公由二信州一而入、攻二野川松枝及武州八王寺城一、拔レ之、君揮レ戈先登、榮明易英、馳入二敵軍一、俱獲二首級一、豐相國之平二定宇內一、凡邦國之臣、有二奇勳偉績一、間所二榮拔一、君與二其選一、階二朝散太夫一、任二豫州刺史一、遂贈二豐臣姓一、復膺奉二謁東照廟一台德廟時、有レ獻二幕府一、賜以二黑印御書一、陪臣之賜二御書一、世以爲レ榮、君少而剛、長有レ守、老益壯、歷二仕亞相公贈亞相公

及黃門公數十年所、頻蒙恩遇、國政軍政、莫不與聞、晩年讓祿榮明、自稱快心居士、君以天文辛丑、生于尾州荒子邑、寬永紀元之夏六月十有二日、病卒于金澤私第、享年八十有四、某月某日、葬野田山隴、君娶加藤氏、有子男四人、女一人、長榮明、以襲父位五品、守河州、次易英、榮頼、榮頼有故去國、季某早歿、女嫁小塚氏、慶長庚子、贈亞相公攻大聖寺城、易英先衆入金丸、短兵急接、敵傷吾足、遂進馘其敵、凱旋之間、我後軍過敵而亂、榮明嚴整部曲、競發矢石、敵兵披靡、歲甲寅、有事于浪速、二子從黃門公、榮明爲隊頭、麾衆而進、易英屬前茅、直逼城下、砲銃雨注、殪仆麻亂、易英被創不撓、勵衆不退、人伏其勇、明年役之再籍、易英居守、榮明從行、復爲隊頭、獻馘數十級、遂晉謁幕府、賜金勞之、榮明卒、子榮政、孫榮清、相繼爲國老、榮清沒、嫡榮尚復克厥家、易英有寵黃門公、數加食祿、遂參政事、易英長子和忠、先亡、孫庸嗣兼國政、夫榮明易英、金昆玉友、兩家屹立、爲國柱石、賢子令孫、綿綿繩繩、安榮樂利、俱沐優渥、此君之餘慶也、今其孫十之所以碑之銘之、不忘永久、而余之樂言其美也、於戯、野田之喬木、垂蔭於千載、金城之洪基、流澤於百世、君臣交泰、士民輯睦、則所謂北方之強者、其將使後之人復頌後之人也、

銘曰、

於赫大邦、肇基北陸、奄有三州、咸宜百祿、矯矯虎臣。奥村其族、奮武末森、固守摧鋭、賈勇岩石、先登乘勢、英聲高翔、餘慶下濟、貽厥有素、友于偕臧。一夔足矣、二惠競爽、光輔五世、如棟如梁、野田岡隴、松栢參天。幽閟深鎖、貞珉云鐫、不磨不泐、千歲可傳、

傳

山州刺史橫山君傳

君姓小野、氏橫山、諱長知、小字三郎、其先出於敏達帝、父諱長隆、母杉野氏、以永祿戊辰某月某日、生於濃州多藝郡直江庄、七歲、投丹陽永谷山圓通禪寺、學字讀書、聰敏過人、天正十年、長隆携往越前、仕前田氏、使長知委質瑞龍公、時年十有五、明年癸未、平秀吉與柴田勝家戰于江州柳瀨、長隆與長知從前田氏、陣于一方、長

隆爲二司旗旌一、軍敗也、長隆樹レ旗逆レ敵、奮レ勇不レ撓、敵兵猶豫不レ進、既而敵察二我兵少一、競進急擊、長隆奮レ鎗苦戰、擊殺二數輩一、大創而死、時年四十有五、長知屬二瑞龍公一、殿レ衆而退、短兵急接、反擊數四、斬二其驍騎一、瑞龍公親視、稱二其壯勇一、柴田氏殲焉、高德公併二有賀州一、當二是之時一、佐佐成政在二越中一、與二高德公一爭二北陸一、高德公築二城能州末守山一、使二奧村永福守一レ之、天正甲申九月、成政大兵來襲、其鋒太鋭、急攻一日一夜、城將レ陷、永福告二急賀州一、高德公與二瑞龍公一馳往救レ之、到二津幡一、衆有二異議一中沮、夜且レ半、高德公俄發、倉卒之際、瑞龍公不レ及レ知而後、長知急執二認旗一、走進二軍前一、植二之沙上一、擧二火其下一、我衆望見、以爲三瑞龍公在二前茅一、勇氣倍奮、高德公亦大喜、其到二末守一、血戰數刻、成政兵氣頗張、長知與二稻垣上坂及前軍士一、伏レ鎗相待、敵衆勢沮、瑞龍公出レ兵、城中併擊敗レ之、是日長知勇略居レ多、瑞龍公嘉知二其可一レ用、明年從攻二鳥越城一、與二成政勇士印牧某一合レ鎗被レ創、天正十九年、秀吉西二征島津氏一、令下瑞龍公與二蒲生氏一攻中岩石城上、長知與二陰山大平兩士一、進逼二譙門一、相共健鬪、長知斬

馘其將、一日長知兄長秀與二石川某一有二違言一、長知走進、以レ杖撻レ之、某人辱レ之恨レ之、詬二長知一寅夜及レ之、長知傷甚、猶自擊殺レ之、長知資性沈毅、儼然有二威容一、奉レ上弗レ懈、臨レ事多二策略一、瑞龍公嘉二其材一、與爲二家長一、年始及二弱冠一、而一府以爲レ得二其宜一矣、秀吉之東伐也、高德公及瑞龍公將二北陸兵一、由二信州一入二關左一、始攻二松枝城一、銃砲雨飛、衆兵難レ進、長知爲二先鋒一、急列二竹笆一逼二城壁一、先二諸士一二十餘步、我衆依レ之、蟻附競進、攻陷レ之、其圍二八王寺城一、長知先レ衆登陣、爲二鎗所一レ刺、隨二石壁間一、奮激復登、衆從レ之入、遂拔二其城一、是役也、大田但馬誣三長知非二先登一、然攻城之諸士、同證二長知爲一レ先無二異言一、慶長庚子、瑞龍公攻二大聖寺城一、長知率二山田氏佐藤氏及家衆若干一、先二登金丸一、被レ創數所、進入二子城一、遂陷レ之、長知之勇功、於レ是乎大矣、開二一歲一、大田但馬得レ罪、公命二長知一誅レ之、長知手刄二殺之一、大田勇悍之士、公自提レ鎗臨視、褒二其捷勇一、悉以二大田祿一賜レ之、牛田某有レ罪、公復令二長知戮一レ之、公之讓二國於二黄門公一也、移二居越中高岡城一、亟レ之長知有レ故蒙レ譴、恐懼斷レ髮、蟄二居邊邑一、公怒不レ已、

故適北地、屛去山科、以石名菴、以堅其志、慶長甲寅夏五月、公之薨也、有事於大阪、東西聚兵、幕府召募長知、豐秀頼亦誘以州郡、欲招致之、長知不應、嘆曰、我受前田氏之恩深矣、豈有他慮哉、聞黄門公之赴大阪、大喜、率康玄長治二子、馳而迎之、到越前淺生津、望黄門公旌旗、拜于馬前、願執覊靮、再爲家臣、黄門公感其忠誠、許賜舊祿、謂長知、北陸之民、動易煽亂、汝可往賀城、鎭撫郡邑、使康玄長治從我陣間、遂令瀧氏神戸氏二部曲、假隷康玄、聽其指麾、是歳東西講和、諸州罷兵、明年、大阪再構難、黄門公復出兵攝陽、命長知爲前鋒、率渡邊後藤氏、督戰數合、勇震三軍、城陷、大兵齊進、萬衆擾亂、長知率騎士、左右分列、長知復標旗指揮、收兵爲備、軍容整正、可觀可畏、黄門公大爲稱賞、公之眷遇日隆、幕府使本多正信褒長知有備、是歳閏六月、幕府有旨、賜爵朝散太夫、任山州刺史、可謂特恩也、長知歷仕瑞龍公黄門公陽廣公三世、執國政、治績著于四方、正保三年正月廿有一日、沒於金澤私館、年七十有九、有子男八人、長康、玄繼、爲執政、次長治、次與治、次長清、與治十二歳、召仕幕府、賜采邑、無子以弟知清爲嗣、其次某某四人、與長治同仕黄門公、有食祿、女九人皆歸名族、横山氏之餘澤被子孫者、可謂盛矣、

雜著

罵燈火文

吁嗟汝燈、予之遇汝也不薄、處以高檠、不踏塵土、屛以麥光、不近風日、炷微則玉杖挑之、盞乾則香油加之、常聽絃誦之音、淫靡之聲不揚於傍、偏照簡策之文、華彩之色不列於前、予何負汝乎、汝何不少借光焔、助予文章、却使予惡見汝面、每逢則思人華背乎、不如使汝入冥冥之鄕、一吷滅之、少間有聲暗中者、曰、異哉吾子之言、夫肥牢豕者爲膳羞、培園蔬者爲虀羹、非有德牢豕園蔬、以欲利吾腸肚也、子之所以厚我、非有德于我、以欲利予用而已、煎膏焦心、起於黄昏、到于天明、我所以報子、不爲不足、我普照萬宇、而子不記一言、我纔照後章、而子已忘前句、如此而歸咎

於ニ我可乎、甚則據レ梧而伏、枕レ卷而寢、鼾息驚ニ駭旁鄰一、唾涎狼ニ藉几案一、古人黃嬭之譏、於レ子觀レ之、子兮子兮、子今不レ改、終レ于ニ面墻一而已、予則流汗如レ瀋、嗒然自失、急呼ニ童子一、點レ火謝レ之、

附錄

遠孫　靜　輯

祭ニ恭靖先生一文

室　直清

維元祿十三年、歲次ニ庚辰一、十二月二十三日、賀陽儒臣室直淸、謹以ニ淸酌庶羞之奠一、致ニ祭于ニ吾師恭靖先生之靈一、嗚呼先生、德業之崇、文章之鑑、不ニ獨天資之使一レ然、亦由ニ學術之自致一、故其行之篤也、在レ家則事レ親而孝、事レ兄而弟、以及ニ室家宗族之預一、恩義之厚、無レ所レ不レ至、在レ國則事レ君以レ忠、雖ニ身服一レ勞不レ避、待レ衆以レ誠、雖ニ人欺一レ己不レ疑、見ニ人之善一樂而稱レ之、惟恐下其不上レ得ニ爲レ善之利一、聞ニ人之惡一、深以爲レ憂、亦終身絕レ口而不レ議、此雖ニ古之君子一、猶有ニ難レ能者一、而先生於レ是、庶乎不レ愧焉、然其望レ道、猶レ有レ不レ及、日夜孜孜、必以ニ聖賢一自治、雖ニ燕居獨處之間一、亦不ニ敢輟一レ業自恣一、其恭儉之德、踔厲之志、至レ老不レ衰、死而後已、其學之博也、天下之書、無レ所レ不レ讀、古今之言、無レ所レ不レ記、若天文曆數、禮樂名器、爾雅訓詁之說、職方人物之志、

世之學者得其一二焉、猶可以見異、而先生乃俱收並蓄、以待天下之用而無遺、故學士大夫游其門者、始而目眩膽落、恍若自失、終則各自得其所欲、以爲有餘、莫不厭足充滿欣躍而出、今先生沒矣、國家有疑、奚所諮詢、學者無師、奚所稱述、鄉閭無所尊禮、薦紳無所矜式、而說客辯士、無以爲口實、此天下之人所以悵然而失望同然而共悲者、豈獨二三門人私哭於其室也哉、至其晚節、厭博反約、斂華歸實、稍悔已往之似支離、大懼末流之或衍溢、將與二三門人、益講道學之旨、且著書立言之有日、不幸其志未就、而遭此弗與之疾、可勝惜哉、此二三門人、所以爲無窮之悲者、亦非天下之人所遑卹也、嗚呼哀哉、吾始學于京師、先生愍其弱而無知、敎誨誘掖、猶父之慈、其後東征北役、無年不隨、屬先生被召幕府、留仕東都、吾亦舉家北遷、始與分離、賴公朝聘之會、備員藩邸之臣、獨能源源、而來奉辭色之怡怡、意氣懇欵、有加舊時、及吾以不才屏居於家、一違凡杖、三年於茲、倘先生之强健、冀再會之有期、孰謂先生遽棄其徒、奄忽一逝而莫之追、使吾煢煢孤立、徒抱志業、彷徨躑躅、而無所依焉、嗚呼哀哉、嚮聞先生之喪、義當日夜奔馳、乃羈於官不得去、顧平生而忸怩、方逢再期之周、緘詞千里、寄哀一奠、不自知涕淚之交頤、尚饗、

挽恭靖先生五首　　源　君美

星軺徵聘擁蒲輪、君昔歸來北海濱、一世共推天下老
百年空化墓中人、遺書何用求封禪、前席誰因問鬼神
惆悵九原無起日、寒烟荒草欲生春、

帝告巫陽猶未下、蒼天何處可招君、素帷霜拂西郊樹
丹旐風翻東海雲、坐奠兩楹都似夢、對崇四尺亦爲墳
長歌一斷消搖後、却使文章不得聞、

匹馬蕭蕭送葬車、古原霜落白楊疏、大名私議門人謚
厚德應傳國史書、爲志我聞三代飾、築場誰結六年廬
自今弟子如星散、共是離群嘆索居、

蒿里蕭條涕淚沱、白雲相送入山阿、素車有客霜華滿
繐帳無人月色多、瓠葉當時談俎豆、杏花何處聽絃歌
西門一路依然在、不忍還將醉裏過、

一從高臥起東山、洞裡薔薇長掩關、只爲脩文歸地下
肯敎遺草出人間、朱絃已絕流泉咽、繐帳猶懸落日間、

欲採梅花侑巵酒、天寒江樹未堪攀、

春日追二悼恭靖先生一詩八首

太平獻頌奏彤墀、早遇先朝聖主知、丹桂影空明月落、
蒼梧望斷白雲悲、鶴鳴可愁聞天日、龍去難攀厭代時、
最是洛陽年少客、才名猶受世人疑、

先生幼穎悟、年十三作二太平頌一、正保天子、見而奇レ之、侍臣賀以二世瑞一、時 帝春秋方富、崇レ文猶レ儒、每稱二其才一、將レ召二試之一、宮車一旦晏駕、烏丸藤公詩云、聖代頌成 文一篇、一篇上達得二 天憐一、蓋謂レ此也、

五雲縹緲望蓬萊、仙鶴孤飛天上回、白足神僧知異相、
烏臺御史惜奇才、衡門久向東山臥、樽酒還從北海開、
珍重安車馳魯邸、春秋直筆待君裁、

初先生七八歲、天台海公一見異レ之、請二父母一以爲二法嗣一、先生不レ喜、嘗從レ人遊レ于二東都一、或薦二才於二猷廟一、時爲二猜忌者所一貶抑一不レ得レ志、而歸屏二跡於二東山一、讀レ書殆二十餘年、聲名溢レ于天下一、北海大守、欲二卑レ禮厚レ幣致一レ之、使者累至、後愍二其聘一、方今殿下纂統之日、忽被二徵辟一、入修二國史一、按 天武天皇元年、改二御史大夫官號一、爲二大納言一、詩中借二用烏臺字一、蓋謂烏丸亞藤公也、

講筵近侍鳳凰幃、玉殿深沈晝漏稀、每習私庭執經出、
共陪公讌賦詩歸、笙聲縹緲翻仙樂、爐氣氤氳滿賜衣、
報主年年難致老、肯論衰晚寸心違、

近者殿下親講二周易一、奉レ敎侍二經幃一、於レ是年雖二耆老一、答恩日、誠不二敢乞骸一而終吁、

文采風流自一家、才名自小動京華、朱門客對金罍酒、
白社僧烹石鼎茶、鷲嶺月明尋桂子、龍門浪暖問桃花、
舊遊題處皆陳跡、誰拂紅塵護碧紗、

始先生在二輦下一日、天朝公卿爭引爲二門客一、五岳詩僧往來亦熟、嘗有下中秋弄二月於天龍寺裡雙桂樹下一、及龍門桃花等詩上、

老去還爲遊子吟、首丘猶在故山岑、寢苦已泣三年血、
負米空傷百里心、黃潦蘋蘩江水隔、青霜松栢隴雲深、
孤魂應慕長安路、西望遙天落日沈、

先生性孝友、嘗居二父母喪一、泣血三年、觀者爲レ之惻然、方二其宦達一、在二東都一常恨下去二先境一之遠上、歲時祭祀未下嘗不上レ盡二其誠敬一也、

江城忽見柳條新、追憶當時一慘神、季札未歸先葬子、
曾參不娶復終身、落花還似門中雪、芳草猶餘坐裡春、
可恨孤墳荒野外、杜鵑聲哭異鄉人、

先生年四十喪レ偶、不二復娶一、
長子敬簡先沒レ於二東都一、

當年講學幾書紳、還附青雲致此身、薤上露悲歌挽日、
花前風怨舞雩春、後生只捉皆來者、先進嘗從是野人、
經國名文誰得識、雞林猶自辨詩眞、

弟子叨辱二先生薦舉一、罔極之恩、比二諸子一尤深、且詩中第五六句、形二容先生恭讓之德一云、頃聞二我友橘伯陽一曰、朝鮮人每レ到二對州一、必求二先生文章一、傳誦而歸、

游學多年得及門、每隨師友問淵源、孤墳空灑侯生涙、明月難招屈子魂、遺愛從來見輿誦、舊聞應復撰微言、歌風猶有鳴琴曲、彈向丘中欲報恩、

讀書懷レ舊、傷二先師木公一也、公以二元祿巳卯一俄捐二館舍一、至レ今既五十年矣、當時門人榊氏所レ錄、只六十有餘人、而今存者僅數人耳、茲公令姪孫賀藩平七君、依レ題屬二詩於門人一、瑜亦幸在二數人中一、遂潸泣以賦、韻凡五十、非三要必合二其歲數一、第其情溢詞拙、不レ知二篇什自冗長以至一レ此云、時寬延元年季冬廿三日、

祇瑜

歲云莫矣雪瀌瀌、夜牕無人聽松濤、竹裏燈花大如桃、白頭讀書代飲羔、憶昔夙心芟寨茅、東遊江都擔負叨、公然照連風雲遭、先驅一世揚其鑣、鱣門高倚金城壕、雉橋春水碧一篙、公晨盛服臨人曹、昂昂如鶴在九皐、麗澤花開照英髦、滿堂光風穀膏仰、公口醇醇飲以醪、饑來去時飽淳熬、中世我儒多是饕、飲而不食類觸魛、又如擁劍偏張螯、臨文局蹐口卒嶅、公無不兼兼不勞、駑駘豈同天馬槽、文章四海波瀾滔、道德千年星斗高、程朱欲入請垂櫜、鄭馬如逢愧容舠、及門游良亦皆豪、羨我雀躍在蓬蒿、雲霄豈敢望鵬翺、六翮四璉金錯刀、束脩一語銘紳絛、十年几杖跋燭操、豈料洪庥蹐綈袍、辱知之義更褒褒、欲報寸效未効毫、仰望蒼蒼首重搔、嗚呼泰山一朝坳、子弟何辜天可謟、居諸倏忽奔丸逃、十指五眠寒食糕、老我依舊餔啜糟、臨卷糢糊陰與陶、疑聞誰從破虎牢、材美欲熟釜常簫、雨冥冥兮風騷騷、公留不留心忸怩、于澗于沼不堪芼、方塘千里目靈旄、尤恨桃李逐飄颾、獨憑錦里一鳳毛、

恭靖先生挽詞十首

姪冏堅

冷泉學派本渾渾、殊勝鄭玄出馬門、希世文華騰泰斗、再傳道義得淵源、孝經一卷身爲殉、小學兩篇心所尊、不襲楚臣奉詞賦、何人今更擬招魂、

先生受二業於冷泉惺窩藤君之門人一、先生易レ簀前一日、遺命以二孝經一卷小學兩篇一爲レ殉、

江東木氏奉其先、餘慶千年枝葉全、晩達　恩榮陪御講、太平詞賦得　天憐、鳳毛繼美文猶在、花蕚餘芳珠自聯、子弟皆知稽古力、滿庭　褒賜總堪傳、

哀情數日塞心胸、永訣堪悲難再逢、傳世奇珍遺翰墨、寫神壽像服章縫、遠遊有主柳州柳、盛德隆師松子松、更見門前無雜弔、車輿奔走正橫縱、

可歎二豎入膏肓、中壽偏哀命不長、韓客異邦稱筆力、

洛人同甲感詩章、一宵夢倚木傍鬼、千載文修地下郎、
瞻望此時終不及、淚痕滿面雨滂滂、
敎化猶思蘭蕙薰、門中桃李慕餘芬、柔和有德能安衆、
恭敬存心常奉君、千古儒流泝洙泗、當時道脈繼河汾、
仙遊何意厭人世、徒向帝鄕望白雲、
文星日暮墜天垠、忽逢訃書驚殺人、忍見地中方瘞玉、
徒思席上已成珍、藹藹相伴東山臥、醴酒共逢北海醇、
月下幸栽丹桂子、一枝從是易爲春、
書樓永駐武城西、春晝無人空鳥啼、逢遇一朝沾雨露、
仰瞻千里向雲霓、秦人挽曲賦黃鳥、謝傅夢魂驚白鷄、
形骸假合終朽滅、美名猶有墓碑題、
江都游學十餘春、恩義須兼父母均、鵠鶩書來嘗受戒、
龍蛇讖合忽傷神、玉樓欲記赤虬駕、錦里空餘烏角巾、
可愧人情疎去者、回頭駒影漸三旬、
文章海內獨稱宗、負笈人知萬里從、黃道輦生帷自下、
解經戴氏席猶重、初開吉地牛眠處、新築孤墳馬鬣封、
欲報洪恩香一瓣、向來子弟共應供、
獨坐黃昏淚欲紅、絳紗帳冷暮烟中、人亡一鑑方塘月、
蘭折孤芳空谷風、賦鵩即今辭漢代、騎鯨早晚到江東、
遊魂未返去何處、到日有誰發我蒙、

附錄終

垂加文集序

伊奘諾尊、伊奘冊尊、自立國柱於磤馭盧島、經營天下、正彝倫之始、天照大神始即位于高天原、以三種神器治中國、而日德徹萬古、皇統亘無窮、正直根人心、蒼生蒙恩賴、天人唯一之妙道、至矣盡矣、逮應神天皇時、異邦之聖典渡來、其道有暗合者、故天皇以爲神道之輔翼、其亦妙哉、然舍人親王神書大成之蘊、識朱子接千載不傳之緒之實者、獨吾垂加先生也、其門人不爲少、而未有能掇輯其遺文者也、光海翁源良顯君、私淑垂加先生神儒之學、篤志無倫、力行有積、深造其奧秘、特尊神道、以繼先生晚年之志、以爲先生之一句一辭、光明正大、俊偉洞達、敷教作人、皆有補於名教、非浮靡華麗之比也、先生沒而既經數十載、其書梓行者、固後人之幸也、其遺文散出殘脫、使之與埃塵蟲鼠、共斃於故箱敗篋之間、以至泯滅者、良可惜也、數載普搜廣求、得其遺書若干篇、第錄繕寫、號垂加文集、嗚呼可謂勤矣、頃有梓人之請、光海翁告僕曰、世之秘書、亡於延火之災者頗多、可思之甚也、今鏤梓、則先生遺編永行于世、何喜加之、僕幸得先生神道之傳於光海翁、故深喜此舉、欲先生之成功與四方之賢者共之焉、且謂此國之人、孰不仰神聖之道、唯讀書者、蠱惑師友所見之偏、遂至有外神道而不講之者也、善讀此編、得先生之意、則固有忠孝之大義、藹然發達、可得眞爲豐葦原中國之人云、

正德四年甲午孟春吉辰　源安崇謹序

垂加文集卷之一目錄

卷之一目錄終

垂加文集上之一

伊勢太神宮儀式序

伊勢太神宮儀式兩卷、延曆二十三年、神主等所記也、原夫神之爲神、初不有此名此字也、其惟妙不測者、爲陰陽五行之主、而萬物萬化、莫不由此出焉、是故自然發於人聲、然後有此名此字也、日本紀所謂國常立尊者、乃尊奉號之也、國狹槌尊者、水神之號也、豐斟渟尊者、火神之號也、泥土煮尊沙土煮尊者、木神之號也、大戸之道尊大苫邊尊者、金神之號也、面足尊惶根尊者、土神之號也、蓋神而隨化稱之也耳矣、然水火之神、各奉一尊號、所以分陰陽也、木金土神各奉二尊號、所以析陽中陰陰中陽也、一而二、二而五、五而萬、萬而一、無方之體、無窮之用、不亦妙乎、　伊弉諾尊、伊弉冊尊、繼神立柱、始行夫婦之道、生天照皇太神、太神賜　皇孫瓊瓊杵尊、八坂瓊曲玉、八咫鏡、天叢雲劒、三種寶物、爲此國之主、因勅曰、是吾子孫可王之地也、宜爾就而治焉、行矣寶

祚之隆、當與天壤無窮者也、是王道之元也、太神手持寶鏡祝之曰、視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡、復勅天兒屋根命、天太玉命、同侍殿內、善爲防護、是神道之祖也、瓊瓊杵尊生彥火火出見尊、彥火火出見尊生鸕鷀草葺不合尊、葺不合尊生神日本磐余彥尊、是爲神武天皇、天皇恢廓皇都、恭臨寶位、安置寶物、如太神勅、至于崇神天皇、畏太神威、移祭御靈寶鏡于大和笠縫邑、垂仁天皇時鎭坐於伊勢渡會五十鈴川上、內宮是也、雄略天皇時建豐受宮於渡會山田原、祭國常立尊、外宮是也、在昔祭祀之盛、洋洋乎、中葉漸衰、胡佛入來、神道愈廢、王道愈弛、逮蘇我氏之亂、舊記盡滅、而後佛徒肆誣、神佛溷殺、無神社不有佛寺、無神書不有佛事、獨皇太神宮嚴忌佛法、而此兩卷不少雜之、豈非萬代之龜鑑哉、嗚呼神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本、君臣上下無黑心、以丹心奉太神、則胡佛無所立、而觀常世之神風、明曆元年冬十二月九日、山崎嘉敬義謹序、

會津風土記序

自有天地則有我神國、而伊弉諾尊伊弉冊尊繼神建國中柱、爲大八洲、任諸子、各有此境、謂之浦安國、以四海安靖也、又謂細戈千足國、以軍器具足也、又謂磯輪上秀眞國、以秀出萬土也、逮生日神、授以天上之事、日神以皇孫瓊瓊杵尊、爲此國之主、稱曰豐葦原中國、豐葦原者、葦牙發生之盛也、中國者、當天地之中、日月照正直之頂也、又呼曰千五百秋瑞穗國、瑞穗是養人之物、千五百秋則祝言之也、神武天皇都大倭國、而以大倭蒙諸天下、皇輿廻望國形似蜻蛉、則謂之秋津洲、秋津者、蜻蛉之倭名也、大倭國、是日神降臨之地、故謂之大日本豐秋津洲、而又以日本爲天下之號矣、景行天皇立諸國之名、成務天皇制國郡之疆、元明天皇辨國郡鄉村之名、上古之大八洲、漸割爲三十三國、復分爲六十六國、而京畿七道定於中古、未之有革者也、畿內不言道者、猶禹貢之冀州不言疆界也、六十六國名風土記、始于元明天皇、成醍醐天皇、夫王者在室中、周知四方之地域、邦國之要害、則賴乎圖書之存焉、此周禮大司徒之所掌

職方氏、到二其詳一、隸二於司馬一、蓋祕而藏レ之、所三以防二レ患也、漢滅レ秦、蕭何先收二其圖書一、高祖具知二天下阨塞 戸口多少一、則何之功也、漢之地圖、掌二之司空一、浸以泄露、當時淮南諸王謀叛、皆按二地圖一、部三署兵所二從入一、王鳳所レ謂地形阨塞之書、不レ宜レ在二諸侯王一者、正得二周人之遠慮一矣、唐人設二兵部屬四一、而職方居二其一一、則能戒二後車一者也、明人亦屬二職方於兵部一、而一統志之成、漢唐以下所レ未レ有也、然共邦之土地、人民之數、則未レ備焉、故丘濬議レ之、以請下依二周禮一別爲中一籍上、可レ謂レ知下佐レ王安二擾邦國一之首務上矣、我風土記、大政官掌レ之、王室衰焉、官職廢焉、或放散而不レ收、或失亡而不レ補、今流二落於人間一者、出雲之外、未レ見二其本書一也、可レ歎而已矣、會津中將源正之、尋二大八洲之起一、惜二風土記之逸一、私記二會津之風土一、令三嘉潤二色其文一、且爲二之序一、以俟二國家修成之擧一云、寛文丙午八月六日、山崎嘉謹序、

會津神社志序

我倭封二天地之神一、號二天御中主尊一、擧レ天以包レ地、御、尊辭、中即天地之中、主即主宰之謂、尊、至貴之稱、凡上下大小之神、皆此尊之所レ化也、上古祭二天神地祇、八百萬神一、中古以降三千餘座、而延喜式內定レ之、王城鎭守二十一社、式外之神亦與焉 臨時奉二幣于茲一、此 圓融帝已來行レ之、至二 後朱雀帝一定レ之、以爲二上中下三七社一矣、或謂二之二十二社一者、以三賀茂分二上下一也、夫神所レ在謂二之宮一者、仍二 崇神帝以前、神皇同殿之舊號一也、謂レ社謂レ祠者、自二 崇神帝一而稱レ之矣、竊聞 神字之倭訓、與二上字一同、鑑字之倭訓、與二上觀二字一同、則神字之倭訓、是鑑字之略訓、而照二臨下土一之謂也、宮社祠三字之倭訓、宮與二御舍二字一同、尊而稱レ之也、社與二八知二字一同、神知二八方一之謂也、祠與二火藏二字一同、惟神天地之心、惟人天下神物、而其心則神明之舍也、抑天下萬神、天御中主尊之所レ化、而有二正神一、有二邪神一、何耶、蓋天地之間、唯理與レ氣、而神也者、理之乘レ氣而出入者、是故其氣正則其神正矣 其氣邪則其神邪矣、人能靜謐 守二混沌之始一、秡二邪穢一、致二精明一、正直而祈禱、則正神申レ福焉、邪神息レ禍焉、豈可レ不レ敬乎哉、會城太守左中將源正之、達二於我神道一、 舍人親王以後一人也、嘗憂三胡佛雜二于國

神一、嘆三神令在二于汚地一、欲三令胤侍從正經正二其管內社籍一、題曰二會津神社志一、命レ嘉序二其卷首一、苟匪二神垂冥加之人一、孰知二太守所レ存云爾、寬文壬子季冬九日、山崎嘉敬義謹序、

贈二永田養庵一序

養庵者、永田氏之號、名某、字在明、備之後州之產、厥父兄弟、共仕二本州福山城主水野君一焉、在明自レ少志レ學、不レ尙二記誦一、不レ習二詩文一、頗扣二老佛一、亦覺二其非一道廢レ之、一宗二朱氏一學レ之、十數年來來二往我門一、小學近思四書、循環理二會之一、窮理之知、集義之行、居敬之功、一以貫レ之之道、信而不レ疑レ之、其見處非二近世儒者之所レ逮也、予自二去秋一講レ易、今春畢焉、在明復來問二辨之一、審且明矣、起レ予有レ之、助レ我有レ之、既而告レ歸、昔子路顏淵之別也、贈以レ言、處以レ言、夫有レ德者必有レ言、皐陶之稽言二九德一、閔子騫不レ言、言必有レ中、予何人復何言、所二曾講一更言レ之、中庸之脩レ道以レ仁、是列聖相傳親切處、大學之欲レ明二明德於天下一、則好レ仁利レ仁者之事、仁以爲二己任一、則士之志、責レ善輔レ仁、則朋友之任也、於レ是乎序以贈レ之、在明往、欽哉、延寶六年仲春日垂加翁山崎敬義、

贈二楢崎正員一序

生也自二天地一來、死也魂遊二于天一、魄降二于地一、與二天地一化而一、更無二來處一、更無二去處一、此人物之始終、造化之道也、斯理也聖人於レ易備言レ之、告二子路一之深、語二宰我一之詳、中庸發二明之一、至矣、盡矣、復奚疑哉、但輪廻之說行焉、不三惟無レ學者被二誣惑一、而讀レ書者亦不レ能レ明二辨之一、可二慨嘆一耳、吾老友備後國人楢崎正員、質性謹恪、始不レ識二文字一、自憂レ不レ免レ爲二醉生夢死之人一、勤苦讀レ書、一年有二一年工夫一、而覺三天地之外更無二他道一也、昔李初平年老欲レ讀レ書而無レ及焉、遂聽二周茂叔話一、二年乃悟、可レ謂二偉人一矣、今正員讀書之力、全勝二於初平一、若親聽二茂叔之話一、則其所レ得爲二如何一哉、雖レ然猶幸周氏之書存焉、正員玩索終レ身、則朝聞夕死、得レ正而斃、不二亦可一矣乎、因序以贈レ之　延寶六年季春日、垂加翁山崎敬義、

東鑑曆算改補序

神道衰、王風降、素盞烏尊治二天下一之權、歸二于武家一、始二乎平淸盛一、而成二於源賴朝一矣、東鑑猶二魯之春秋一、

但未レ有二筆削之手一耳、嘉竊欲レ脩二倭鑑一、國史之外、博檢二雜史一、日之支干、月之大小之閏、日月之蝕、或書焉或否焉、或差異焉、嘗憂二乎難一レ定二于一一矣、會城仕士安藤有益、盡二心於九數一、實算學之秀者、近寄二其所レ著東鑑曆算改補一來、鎌倉歲時、得レ致二其詳一、乃喜レ之、有益屢需レ序遂應レ之、延寶庚申之秋、山崎垂加翁序、

有賀氏字序

會城仕士有賀氏之子、名文、字滿武、需レ叙二字之義一、且謂有賀者、信州諏訪郡之鄉名、嶽先出レ自二諏訪明神一、神子三人、長居二諏訪一、仲居二有賀一、季居二眞志野一、因各爲レ氏、諏訪氏置二大祝一、有賀氏置二大市一而奉二事明神一、謂二之神家一、家法 諏訪氏斷、則有賀氏可レ繼レ之、有賀氏絕則眞志野氏可レ續レ之、厥裔聯二聯于今一也、鎌倉平義時之時、有賀四郎、其子五郎共仕レ之、子孫相續、至二備前守滿重一、自二滿重一而來、世蒙二滿字一、吾應レ之曰、祖先名字、子孫相承、本朝振古而然、諸夏亦有レ之、不レ暇二枚擧一焉、禮二十曰レ弱、冠而字、冠者、成人之道、故三加祝辭、皆以レ德頌レ之、後世字之有レ序有レ說、則冠禮祝辭之彌文也、吾子悔二乎虛過一不惑一、寧欲下得二字義一勉上旃、乃爲叙レ之、家語 有二文事一者、必有二武備一、有二武事一者、必有二文備一、蓋文武也者、仁義之具也、易立二人之道一曰二仁與一レ義、孟子開レ口、便說二仁義一、而求二放心一爲レ要、子曰當レ仁不レ讓二於師一、我國士以レ武爲二己任一、亦無レ所レ讓、更能讀二孟子一、有レ得二乎浩然之論一、則不三止宜二於武一、亦可レ宜二於文一矣、夫氣、體之充也、餒則氣不レ充レ體也、浩氣、是集レ義所レ生者、非二義襲而取一レ之也、充、滿也、吾子念レ茲、延寶庚申之秋、垂加翁序、

贈二伊藤重剛一序

承應甲午暮春、伊藤重剛因二公事一往二東武一、仲夏而歸、過二京師一、訪二予廬一、是日予與二秋田三孝一約レ遊二大坂一、翌旦重剛亦至、會二于秋田氏一將レ別、予謂レ之曰、古者君子之交、其會也以レ文、退行二其言一、其別也贈以レ言、亦必踐レ之、不三徒有二其言一也、所レ謂與二朋友一交、言而有レ信者然矣、夫我何言之有レ信哉 然重剛嘗從レ我遊矣、相離日久矣、於レ今偶逢而又別也、不レ能下以二我無似一而尙籍上口也、蓋五倫之友、猶二五行之土一、五行無レ土不レ行、五倫無レ友不レ立、其

任之重如レ此、豈不レ擇二其人一乎、子曰、益者三友、損者三友、重剛歸而取レ友、則宜レ鑑レ此云、五月既望、

送二小川定一序

羽州新城人小川定、從三其君內藤豐前守守二大坂城一來、公暇與レ予交通、將レ歸、請二言以贈一、夫贈レ人以レ言、乃君子之事、非三不肖所二敢與一也、蓋言者、心之聲也、是故心誠言信、不レ誠不レ信、苟不レ信、非二人言一也、猩猩鸚鵡能言、豈以二能言一爲二人言一哉、夫言發二諸口一者、而筆二諸書一亦言也、其必信然後可レ謂焉、可レ傳焉耳矣、予近讀二胡敬齋居業錄一、其言一出二於誠心一、無二勦說一無二雷同一、易曰、脩レ辭立二其誠一所二以居一レ業也、錄名其稱也夫、予既無二足レ言者一、漫以二此錄一爲レ贈、聊不二容別一之意也、玄默執徐涼月上弦、闇齋序、

贈二山休一序

唐之賈浪仙、初爲二浮屠一、韓昌黎所レ勸去レ之、宋之肯庵由悟、與二朱紫陽一遊、而終二于浮屠一、未レ聞下其臨レ終尋二一尺布帛一裹レ頭而死上也、紫陽豈不レ有レ言、而其言豈不レ及二昌黎一哉、然則去レ之與レ否、在二其人一也耳矣、靖月川者、予爲二僧時之友一、茲歲癸巳、毀二衣鉢一、改稱二山休一、於乎滔滔焉、天下皆佛也、不レ惑者少、惑而悔者尠、祝髮胡服而去レ之者、賈後鮮レ聞、然賈也耽レ詩、有二賈島佛之名一、是可レ惜也、若夫般若湯水梭花之求而還レ俗者、不レ足レ稱也、今山休則異二於是一、予其不レ嘉乎、於レ是序以贈レ之、山休姓山野內氏、豫州之產也、

居諸劄記序

嘉題二敬勝冊子一、號二居諸劄記一、乃晦翁訓子狀之意、而欲二其日就月將一也　張橫渠劄記世正蒙成焉、薛敬軒傚二橫渠一而讀書錄成焉、劄記之義、學者所レ當レ居處、程明道議二橫渠劄記一曰、子厚却如レ此不レ熟、若二明道一則入二於聖人不レ記而記之域一者乎、天和元年冬至日、垂加翁書、

會津山水記

會津城、以レ鶴稱矣、山鎮號二磐椅一矣、高五百十弓、廻レ麓九十餘里、在二城東北十五里一焉、頂上建レ祠焉、延喜式磐椅神社是也、滿山溪谷小竹叢生、長雪所レ壓不レ能レ起也、正南巉巖、自レ麓徹レ巔　東上半而有二九池一、遠各二十許步、自レ此而赤石巖巖不レ可レ攀、東

北有孤峰、名赤埴山、其下曰見禰山、其麓有磐椅明神社、延喜式所載是也、西北有小磐梯、其西腹有平地、廣亦數十歩、熱湯涌焉、硫黃出焉、其氣蒸騰、成雲霧風、其湯味酸、能治諸疾、自孟夏至新秋、人多浴焉、厥餘月雪積風烈、人聲閴然、足音蔑聞矣、東北有巖二焉、一曰雷嶽、一曰烏帽嶽、巖頭似烏帽矣、東南之麓、則猪苗代也、舊時泥猪作耕、故云爾、此城以龜而呼也、前野平田而至湖水矣、環湖百里許、三十餘浦、相傳、平城天皇大同元年 水初湛焉、或言、此本二莊、云月輪、云更級、水暴至而居民殲、二莊泯矣、湖西曰戸口、是新橋川之源也、次曰名倉山、此北有大鼓石、文次郎大鼓之所化也、其北曰金子澤、有燈明石、方一丈二尺、口碑云、龍燈供于磐椅明神于石上矣、次盤澤、有舟石、亦文次郎之所乘也、次三城潟、舊名内城、源頼朝卿封佐原義連於會城、義連之子盛連、盛連六子、太郎經連、二郎廣盛、三郎盛義、四郎光盛、五郎盛時、六郎時連、光盛立爲之宗、經連居猪城、經連子、長曰經泰、仲曰赤房、季曰義泰、各城于此、因爲今名、林樹森森

處、有八幡宮、三子相謀、自鶴岡勸請焉、歷茲以往七浦、曰畐行焉、烏帽小屋焉、蜂布焉、百目貫焉、相名目焉、新家焉入江イニ 牛沼焉 已東曰松橋、曰小平潟、元名小出潟、此有松原、東西一里餘、圍三里許、松樹千年之綠、砂石萬古之明、風流瀟灑、絶一點之塵、昔人自攝州之平潟、攜菅公畫像來、奉祠林之東畔、出潟之爲平潟、記神像之出處也、祠側有梅、華于幹、故名身木梅、水濱秀孤松、其根拔出、隨波低昂、故呼根揚松、非常之松梅、靈場之所愛也 兼栽之母祈於茲而生栽、栽長嗜歌學、亦禱于此求成就之、後從宗祇學、遂爲連歌之宗匠、爾來稱之兼栽天神、或曰、此松原、恰如移住吉也 兼栽之號、因慈鎮之詠矣、其次金曲酸、川流來至此入湖、洲渚出而沙平矣、次關脇而壺下斯設關、譏往來之人、自戸口到于此、有網罟之利、而鮒魚之鮮、湖産之名物也、春夏之間、四山雪消、平湖水漲滿田兮溢于野兮、土人謂之泛（ウカリ）、是時也、鮒魚方登來焉、人人左把一束明、右持無底籃、或揭或厲、或舟而采、采之采之、竟夜達旦、瀲灧兮水光、灼爍兮漁火、不堪遠望

也、次有蟇目岩、其前淵曰蝦蟇脇、深可五十丈、其次山潟、有七巖、巖爲七染、勢崢嶸焉、岩前之水、性輕味淡、而色青於藍、青光射人、嘗欲窮淵底者、解三把之管、莖莖相結爲一條長連、直下于此、因名三把菅、蓋湖中之最深而神龍之所潜也、或升則捲狂瀾兮、降暴雨兮、其次曰輕澤、曰利濱、曰犬石濱、有犬石也、次曰魔地小谷、此谷昔有魔魅也、次濱地、次横澤、次館村、自利濱到于此七里程、其間曝銀沙、夜行不知夜也、白沙洗波兮、綠柳舞風兮、雙眸足以凝兮、寸胸足以盪兮、其次船津、南折則大礙也。中澤也、此巖描成鸚鵡、出水面二尺許、筆勢甚逼眞、影入水游泳、古有此地者爲之、今也水石之際、亘近傍焉、應是結搆而畫也、抑田海之變然歟、非耶、又有巨石、龍降蟠于此、故名龍崎、有破石、可容數十人、次曰鬼沼、水伯常棲、或奪人、或覆舟、因以鬼名焉、從此而赤岩鑊土出焉、而河原崎、而下棚、岩容如棚矣、而濱坪、此有番戍、察上載下載、其以福良濱　乃著船之岸也　次秋山　次藤崎、藤羅朶朶焉、次小倉澤、有金山、坑久廢矣、

次外貝沼、次烏崎原、名大崎、此繪烏於巖、書其側曰、雨洗風磨不可消、未知何世誰人之所爲也、亦可謂好事者、墨痕斑斑尙存、以爲崎名矣、次内貝沼、次赤崎、有奇巖焉、出於湖上可二百步、鸕鷀巢于岩壁而群集矣、有石窟焉、透徹于前後矣、次二枚鞍、岩貌似鞍也、次下松、此松皆倒懸也、次夫婦石、二石別立、故又云離石、其間云戀崎、夫婦有別而情之切者歟、次手綱、次原川、次崎川。此有熊野權現社焉、前淵之深、殆乎二十丈、謂之權現淵、沙細水淴、而人動陷沒焉、或云、陽侯取人、豈其然乎、人自取之也耳矣、濱上多鐵沙焉、宜兵農之具、有屏風岩、以岩象名有材木巖、巖形髣髴乎積材木也、次中田、此餘湖也、以佃焉、以漁焉、其次蜆浦、西轉則篠山也、此有鯖巖焉、亦有材木巖焉、俗謂磐梯明神夜將剔巖梁湖上、未成既旦、錯諸彼、錯諸此、漑水之人釣此巖上、謂之打釣、弄竿如打稻也、繫鈎之多可以知矣、次大石濱、次寺崎、其次則向所謂名倉山、而此山與崎之間、則戸口也、凡湖覽之勝、西南東方、山環而疊碧兮、北方地平而鋪錦

兮、仰瞻磐梯之突瓺、則春霞之横空兮、秋霧之埋山兮、夏雲之多峯兮、冬雪之照天兮、風物之刓眼兮、千態而萬狀也、加旃視惠日寺於乾峯之下、瞰觀音寺於艮山之際、坎位則眺吾妻山也、離方則望布引山也、淡烟平波之朝、曲洲灣浦之夕、扁舟之在鏡裏也、度天上也、鳧雁之起伏兮、鯿鯇之出沒兮、相忘於湖中也、矧彼翁島也、影映日月而與乾坤浮兮、與遊魚躍兮、三番三謠磐梯池者此也、雖曰萬代池在天王寺、然浦人猶誇于此、於是乎翁島吟詠江天之暮雪兮、篠山目送遠浦之歸帆兮、吾妻山見洞庭之秋月兮、觀音寺話瀟湘之夜雨兮、惠日聞平烟寺之晚鐘兮、壺下對于漁村之夕照兮、金曲則決眦於平沙之落雁兮、磐梯之祭時也、擺山市之晴嵐兮、八景之觀也無窮之興也、實東域之絕境、可與近州之琵琶湖共鳴者也、予未越白河關而入會津境、乙巳之秋、遊東武在會津中將源太守之第、話及于此、按圖指示之、固請嘉記之、昔孫綽氏之賦天台也、歐陽氏之記有美也、宋景濂之歌日東也、雖予所不敢、而不獲辭、即席上迅筆述其語、如此矣、就而思之、薛敬軒聞瀟湘之名、心乎愛矣、後往題八詩、寫其風致也、夫賢者山水之遊而豈徒哉、必可有眞情在焉、予若他日濯容顏於猪湖之水、則漫賡其高韻而綴句言志乎哉、東武遊客山崎河記焉、

兎香爐記

甲午臘日、柯謁石河翁、翁出示兎香爐、即進而閱之、身肥目開、視明不瞬、長身短尾、精巧甚與眞同、香烟自口出、裊裊撲鼻來、翁命爲之記、尊者之命不獲辭、退而筆曰、

伊川程夫子嘗見賣兎者曰、聖人見河圖洛書而畫八卦、何必圖書、只看此兎、亦可作八卦、蓋曰、天地統體一太極、而萬物各具一太極、則皆自有八卦之象存焉、夫此兎之虛中、亦太極也、形體之安定爲陰、口氣之氤氳爲陽、亦兩儀之象也、氣有消息、體有大小、亦四象之象也、大小消息、又各爲兩、亦八卦之象也、此非柯發程子之蘊矣、虛齋蔡介夫之所發也、是爲記

恒庵記

天地之道、恒久而不已也、而人與之參者、得其

道之全一、以爲二五常之德一也、是故恒二其德一、人之任也、人生百年之期、以レ月計レ之、一千二百月、以レ日計レ之、三萬六千日、今日如レ此、明日如レ此、今月如レ斯、明月如レ斯、年年如レ之則百年一日也、人豈無二一日之力一哉、多自棄而已矣、恒之九二悔亡、孔門有二以レ之者一、顏子淵也、夫聖人與二天地一合二其德一、而敎レ人也、博レ之以レ文、約レ之以レ禮、顏子以爲、我任而不レ惰、殆入二聖人之域一、是聖人之敎、本二乎天常一、而顏子之學、竭二人力一者也、故人必學二顏子一、然後可レ立二於天地之間一、若夫或作或輟、待二來日一待二來年一、則或承二之羞一无レ所レ容也、田近竹因者、豐之後州之產、自二丱角一、有レ志二于學一、以二父命一來二于洛陽一、隱二於醫一矣、頃與レ予謀、以レ恒名レ庵、蓋取二諸南人之言一、既而亟請レ記焉、予嘉二其有一レ志、乃書二向之所一云、且謂曰、恒之爲レ字、左旁從二立心一、右旁從二一日一、立心如二一日一也、或右旁從レ亘、立心之亘也、古作レ恆、一舟頭尾兼レ岸、立心徹頭徹尾也、此皆雖三以見二常久之意一、然庵之扁、畫二雷風之卦一可也、何也、觀二其象一而玩二其辭一、則三說之意在二其中一矣、明曆二年三月上巳、闇齋記、

記二家藏聖像一

張子曰、家中有二孔子眞一、嘗欲レ置二於左右一、對而坐、又不レ可、焚レ香、又不レ可、拜而瞻禮、皆不可、無二以爲一レ容、思レ之不レ若二卷而藏一レ之、今茲予得二唐銅孔子像一、以二周尺一計レ之、長一尺八寸五分、最爲二精巧一矣、遂器而藏レ之、昔者孔子沒、子夏、子張、子游、以三有若似二聖人一、欲下以レ所レ事二孔子一事上レ之、彊二曾子一、曾子曰、不可、於戲子溫而厲、威而不レ猛、恭而安、有子雖レ賢、而豈能具レ之哉、刻金木之工、圖畫之筆之所二得而摸寫一乎、君子猶假二其手一者、慕二聖容之髣髴一焉爾、其必勿レ褻レ之則可、乙巳冬十月、山崎嘉謹記、

省齋記

易曰、聖人齋戒、以神二明其德一、蓋德者、天命之性、五行之神也、神二明之一者、其德之存不レ可レ知之謂也、齋也戒也、聖人合下自然也、君子自戒而齋、可三以神二明其德一歟、加藤作太守、有レ志二于學一、以レ省名レ齋、屬レ予記レ文、其名取二諸曾子之言一、予嘉二其所一レ取、乃言曰、既所レ居曰レ齋、則足二以省一焉、又名以レ省、益二其功一哉、三省之功、約而博矣、彼邢七之三點

檢、程子嘗哀之、是固太守之所不惑也、然或徒以爲三者而已則未也、請得詳之、人者對我之稱、朋友則人之中之與我同門同志者、傳者師而亦朋友之倫也、人倫五焉、而三省之功、專用於朋友何哉、朋友者、人之爲君親、爲臣子、爲兄弟者之相交耳、其交也以文、責善輔仁、無言行之不實、所謂信也、能若是、則彝倫攸叙、無往不達、爲人謀、即人倫日用應事接物之處、於是乎忠、則在邦無怨、在家無怨、忠信所以進德也、傳而習、豈外於此哉、三省之功、約而博矣、正謂此也、夫傳之責之、在于師友、習之、我之任也、士不可以不弘毅、任重而道遠、是曾子之志也、太守志其所志、省其所省、則不愧于齋矣、齋云齋云、所居云乎哉、山崎敬義書於東武寓舍、

埋犬記

辛卯七夕家犬淸、汝生而畜之三年于此、夫汝之爲性、最堪愛也、吾出則隨後而送于門、反則棹尾而迎于戶、仰面上衣襟、低頭入衣裾、夜則能守寢室、見異色人、雖晝吠之、吾或有楊生之事、汝必爲楊生之狗者也、去夏之孟、吾南遊焉、季夏卜旬歸焉、汝以久不見吾也、覯走喜躍、過於常矣 是乃汝吾與中之馴吾者、吾其以犬而外汝哉、昔仲尼之畜狗死、使子貢埋之曰、吾聞之也、敝帷不棄、爲埋馬也、敝蓋不棄 爲埋狗也 丘也貧無蓋、於其封也、亦予之席、毋使其首陷焉、余亦無蓋、有故布衣敝布袴、幷予之、以埋之、

書加藤家藏論孟

孔子贊易曰、君子體仁、足以長人、嘉會足以合禮、利物足以和義、貞固足以幹事 又云、立人之道、曰仁與義、夫仁義禮智、萬善之本而義禮智皆仁也、人能體仁、則義禮智之用、隨其事之當然而行焉、論語專說仁、正爲此也、孟子之時、人謂兼愛仁、謂爲我義、以諛爲禮、以鑿爲智、而不知性是心之體、故孟子曰、仁義禮智、根於心、而發明其四端、又云、仁人心也、義人路也、而結之曰、學問之道無他、求其放心而已矣、則是七篇之歸、亦在乎此也、戊戌之歲、余遊東武、與加藤作太守、爲文會矣、一日出示一小篋、就而視之、題其上曰論語、開而觀之、朝鮮印

行小本也、太守曰、此我曾祖遠江守之本、而題書者、其子左近將監也、請一言以書焉、予謂、顯曾之本、顯祖手澤、最貴家之珍也、嘗聞、遠太守振勇於天正之間、逮乎豐臣公擊朝鮮也、遠州以千人行、威氣出其右者鮮矣、嗚呼其食沙之言、今猶在武人之口碑、太守又出示一大戈曰、此曾祖終身所持也、予謂、有文事者必有武備、有武事者必有文備、文武也者、仁義之具也、太守左顯曾之文、右顯祖之武、仁以行之、有所不行、義以通之、則人道斯可立矣、遂爲之書、七夕山崎敬義、

加藤家傳

加藤作內、諱光泰、美濃州人、世家橋詰庄、領其地七十貫矣、光泰形貌魁偉、勇力兼人、出仕關白豐臣秀吉公、公時爲平右府信長卿將、元龜中、塞北朝倉氏、近江淺井氏、相與起兵、右府令公守近之長濱城、城横山戍之、二氏來攻、諸士衛營、光泰執鎗前出、奮擊力戰、敵數十人圍之、被疵輪九死、竹中半兵衛衝突救之、光泰得脫、於是賜賞地七百貫、與力十餘人、別所氏據播州三木城、右府遣公征之、公出師令云、有獲豎旌者、止州里、任民以事、而以時徵其賦、光泰意謂、江北之戰、予雖傷膝爲跛、豈比肩庸夫哉、固請前驅、播州爲安藝毛利氏唇、故恐其唇亡齒寒、由高砂浦、致轉餉之助、公以爲、勝算莫如絕糧、教光泰居蛸草遮其通道、光泰捍之、而城中餉盡、別所氏自殺、天正八年庚辰之正月也、公乃賜采地五千石、十年壬午、明智氏弑右府、公方攻毛利氏、聞變即還、決勝於洛南山崎、光泰隨之、縱殺賊首長原某、癸未公與柴田氏大戰近州柳瀨克之、光泰從之、能用銳、手自接鎗獲甲首、尋而軍國大權入公掌握、公加獎光泰、爲丹波州周山城主、封戶一萬七千石、累遷近州貝津城、領知如故、又移同州高島城、增封戶、領二萬石、甲申、公與尾張內府平信雄卿有郤、公攻尾州、拔犬山城、卿屯于小牧山、公進向之、使光泰守犬山、公與卿講和、而光泰從美州大垣城、倍封戶、領四萬石、代官知二萬石、乙酉、公伐佐佐氏於越之中州、光泰隨行有績矣、其後偶失言公前遭貶、屬公弟大和大納言秀長卿、卿與之食邑一萬石、歲餘在同州秋山城、與二萬六千石、居數歲、公下宥

命、移近州佐和城、賜二萬石、叙從五位下、任遠江守、庚寅、小田原之役、公令光泰守參州岡崎、吉田兩城及駿府城、小田原降、而封于甲斐國、壬辰、公遣兵擊朝鮮、朝鮮請救大明、大明許之、公聞而加兵、光泰爲其一將、以千人行、石田治部少輔、增田右衛門尉、大谷刑部少輔、受閫外之命赴之、至朝鮮、會日本諸將于京城、諸將僉議、暫班師釜山浦、而運籌策、則功可成乎、光泰曰、明兵之援、曷驟懾之、且釜山浦距此數百里、若班師、則敵又收此地矣、而可哉、諸將云、兵食弗可繼、光泰曰、糧絕則食沙而已、諸將無語、石田曰、人豈食沙哉 光泰笑云、食沙底樣子未知乎 然則留予一人而去、我儻得生歸、則陳吾人商量於殿下、諸將終不能班師、石田增田大谷、御之不和矣、明兵果來挑我軍、光泰欲戰、諸將欲堅保棲、光泰彊之、立花左近曰、吾所願也、小早川肯之曰、吾其先騁、諸將無異辭、光泰鼓衆敢戰、一以當百、死傷相半、最爲危急、柳川橫馳擊之、立花小早川戮力乘之、明人大敗北、斬首三萬八千餘頭、光泰功名於是乎藉甚矣、講和成、將歸日本、到西生浦、石田等欲與光泰和解、宴于宮部兵部少輔所、宴罷就疾、明日永逝、蓋鴆殺之爾、文祿元年壬辰八月二十九日也、行年五十有七矣、光泰娶一柳氏、生二男四女、長男諱貞泰、稱呼作十郎、季男、諱光直、稱呼平內、四女、一適竹中氏、一適冷泉院、一適石河氏、一適加藤氏、甲午貞泰十五歲、國除、遷美州黑野、領四萬石、叙從五位下、任左衛門尉、夫光泰生前之功如彼、而死後胤子之報如此、何也 石田怨之也、公之智而惑志於佞人、亦不曾有致予服力操董孤筆者、可惜也耳矣、慶長三年戊戌豐臣公薨、庚子石田挾公子秀賴卿、令諸侯、陳于美之關原、源家康公自將討之、石河備前守、守尾之犬山、石田令貞泰屬之、貞泰通於 源公、遣舍弟光直質于江府、石河遂退聽、貞泰略定犬山、屢飛羽翰、以達其事情、公悅之、辱華檄兩封、既而貞泰應源軍先鋒井伊兵部少輔之指麾、發犬山、向美州、公著美之赤坂、貞泰謁見、迺命屯州之本田、拒大垣城、公大破關原、直抵近之佐和山、貞泰從行、公遣稻葉右京亮與貞泰攻同州水口城、城主長東

氏不レ戰而遁、公入二攝津難波城一、貞泰隨而往焉、公擒二石田等一、反接載二檻車一、狥二于京路一、戮レ之、而天下歸二江府一矣、庚戌 公命二貞泰一爲二伯州米子城主一、益二封戶一領二六萬石一、改任二左近將監一、甲寅之冬、有二難波之軍一、貞泰及二松平周防守岡部內膳正等一向二天滿口一、貞泰爲二之先渡一、和議成、公振旅而還、乙卯之夏、復軍二于難波一、貞泰與二松平武藏守一同陣二神崎口一、城陷而軍散矣、元和三年丁巳、公嗣大將軍秀忠公、命移二豫州大洲城一、封戶如レ元、癸亥五月二十二日、貞泰罹レ病不祿、享年四十有四矣、弟光直、敍二從五位下一、任二遠江守一、貞泰娶二小出氏一、生二二男一女一、長男、名泰興、稱呼二五郎八一、次男、名直泰、稱呼二織部一、女嫁二細川氏一、光直娶二本多氏一、生二二男一、長名泰直、稱呼與レ父同、次名二利景一、初稱二作內一、後呼二平右衞門一、直泰娶二小出氏一、泰直娶二本多氏一、泰興十二歲、見二于 大相國秀忠公 大將軍家光公一、其翌年貞泰卒、台命城主知縣如レ父、寬永元年甲子、敍二從五位下一、任二出羽守一、泰興先室岡部氏、生二一男一而亡矣、今室戶澤氏也、男名泰義、幼稱二龜助一、長呼二右馬助一、庚辰十二歲見二於 大將軍一、承應二年癸巳、敍二從五位下一、任二美作守一、爲二太田備中守壻一、茲歲萬治三年庚子、余在二江府一、泰義欲レ傳二家聲一、需二筆於余一、余賞レ之且言曰、今也父子共事二 大君幕下一、其能樹二忠功一、則子葉孫枝、家榮罔レ朽矣、作二加藤家傳一、

垂加文集上之一終

垂加文集卷之二目錄

卷之二目錄終

垂加文集上之二

湯武革命論

嘉嘗論曰、易曰、湯武革命、順乎天應乎人、而論語獨謂、武未盡善、而集註合湯言之者何耶、夫湯曰放焉、武曰伐焉、革命之權雖同、而放之與伐則異矣、此所以獨謂武歟、孟子答齊宣問湯武放伐、曰誅紂而不及桀、蓋亦此之由也、然伊尹之放太甲也、權而盡善者也、湯放桀而得天下、則雖有放伐之異、而遂與武王同矣、此所以合湯言之、夏曰后氏、殷周曰人、曾謂此也、晉之嵇仲散非湯武得國、宋之李易安詩、歎仲散之薄殷周也、石曼卿詠伯夷言、恥居湯武干戈地、來死唐虞揖讓墟、程子嘗謂湯武之別、而又稱曼卿詩、朱子嘗論湯武優劣、而又稱易安詩、則亦可以見其抑揚之微意矣、又曰、周雖舊邦、其命維新、而服事殷、此文王之至德、天地之大經也、若湯武革命順天應人、是古今之大權也、三代之後、漢唐宋明、稱之盛世、然溥天王土、率土王臣、則漢高非秦民

乎、唐高非隋臣哉、宋祖、明祖、不周元之臣民乎哉、孔子謂武未盡善、亦殷之臣也、夫天吏猶不免斯議、矧漢唐宋明權謀之主乎、其間漢光武之起也、其義最止、而賢於湯武之揚矣、予故曰、以征伐得天下、不愧于天地者獨光武耳、

嚴子陵論

天下之有君也、公卿大夫士庶人、各存其位而共其職、此天地之常義也、若夫君之仇、弗與共戴天、則不容以位之高下而異之、是古今之達義也、嘗以此而慊於漢之嚴子陵矣、夫丁莽之亂也、光武勃興焉、天下士大夫捐親戚棄土壤從之、以成其志、于時子陵臥不起何耶、假令無光武、而爲子陵者、雖擧博浪之謀、未必爲過矣、況幸有光武在哉、或光武之不可事則止而已矣、先儒但高子陵不屈帝者、而至與伯夷班稱之、蓋子陵高則高矣　恐非伯夷之徒也、其知退而不知進、伯夷不如此、其加足帝腹也、使伯夷見之、望望然去之、我故曰、子陵未及張子房、而羊裘七里之風、猶在鴟夷五湖之下、

世儒剃髮辨

從俗違俗而中者、君子也、流焉過焉者、小人也、子曰、君子之於天下也、無適無莫也、義之與比、又曰、麻冕禮也、今也純儉、吾從衆、拜下禮也、今拜乎上泰也、雖違衆吾從下、是乃君子和而不流、中立而不倚者也、世儒不知之、徒見浮屠剃髮癡坐人上、尤而效之、而曰、泰伯亦斷髮、素夷狄、行乎夷狄。從俗之中、是乃小人之中庸、無忌憚之甚、如漢之胡伯始、唐之柳宗元者、猶不至此也、夫泰伯處父子之變、全三讓之德、逃而斷髮、以泯其迹焉、則是聖人體道之大權、而非君子守身之常法也、矧春秋傳載子貢之言曰、泰伯端委治周禮、仲雍嗣之斷髮、豈禮也哉．有由然也、據之則泰伯未嘗斷髮也、若曰吾學仲雍也、則仲雍身中清廢中權、世儒果何道之所中哉、所謂素夷狄行乎夷狄者、君子素夷狄而行其道於夷狄也、非行夷狄之道也、子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有　此之謂也、孟子曰、吾聞用夏變夷者、未聞變於夷者也、如世儒、苟變於夷、又從爲之辭、且其曰從俗者、無稽之言也、何也、我　國自古　王公

未二背剃レ髮也、中葉以降、士民之俗、圓剃二頂髮一、束二其餘髮於後一、而斷二其端一焉、然則世儒剃レ髮、是其黨之俗、而非二天下之俗一也、以レ此言レ之、其不三惟背二孝經之訓一、亦書所レ謂亂レ俗者也、辛卯之冬、柯病二風感一、時有レ客來、話及二于此一、於レ是乎辨、遂書與レ之、

慶安四年冬作、

辨二大學誠意章句三字之異一

大學誠意章句三字之異、諸儒之論各有レ不レ同、朱子曰、大凡疑義所二以決一レ之、不レ過二乎義理文勢事證三者一、今此三字、皆朱子之親筆、義理文勢、固無二不可一、姑以二事證一決レ之、年譜、宋紹熙五年甲寅、朱子六十有五歲、受レ詔進二講大學一、是時講義、載在二文集一、作レ一二於善一、然則必自慊、絕筆之所二更定一也歟、且下節或問曰、知無レ不レ盡、則心之所レ發、能一二於理一而無二自欺一矣、則是一二於善一之謂、存二於或問之中一、吳氏自慊、乃毋二自欺一之後効、難二以居一レ先之說、蓋不レ知二自慊自欺正相抵背一、（朱子答二孫敬甫一書中論レ之、可レ考、）又不レ考二毋與レ無之異一而言レ之也、毋者禁止之辭、無者自然而然、傳文毋二自欺一、是工夫、章句無二自欺一、是功効、實二其心之所一レ發、工夫也、必自慊而無二自欺一、功効也、

石川宗字說

冠義曰、人之所二以爲一レ人者禮義也、然則無レ禮無レ義、禽獸之道也、是故隆レ禮由レ禮、謂二之有方之士一、不レ隆レ禮不レ由レ禮、謂二之無方之民一、人苟欲レ爲二有方之士一、則不レ可レ不レ學也、學則不レ可レ不レ正也、程夫子言曰、古之學者一、今之學者三、異端不レ與焉、一曰文章之學、二曰訓詁之學、三曰儒者之學、欲レ趨レ道、舍二儒者之學一不レ可、夫儒者學二禮義一、有二諸身一而已矣、文章訓詁、皆其末也、抑名家、專任二名位禮數一、則近レ正者、而不レ能二隨在一レ致レ隆、故儒者以爲二偏曲之學一也、然致レ隆、貴二於協一レ義、苟不レ協レ義、則不レ爲レ致レ隆矣、石川氏之子宗、年十六、以二其父命一請レ字、余且道隆字、家世相承之字也、因字曰二隆義一、宗也讀レ書、宗二儒者之敎一、勿下溺二於文章一、泥二於訓詁一、陷中於偏曲之學上、告レ之吾引也、從レ之爾力也、愼レ旃哉、庚寅之冬、

隆義反利說

去冬吾字二石川宗一曰二隆義一、而爲レ說以與レ之、今夏吾南遊焉、宗亦從焉、省二其祖父母一、以二其說一告レ之、祖父謂レ宗曰、儒敎之善也、旣聞二其說一矣、隆義反

考ニ之韻鏡一乎、可ニ以問ヲ之、宗以告レ吾、吾應レ之曰、歸字之訣、非ニ名字之義所ヲ關也、然尊者之命也、且可ニ以考一也、乃就ニ一東韻一、求ニ隆字一、知レ屬ニ半舌音淸濁第三位一、而就ニ義字韻一、取ニ半舌音淸濁第三位之利字一、因而又爲レ說曰易乾卦彖曰、乾元亨利貞、文言傳曰、利者、義之和也、又曰、利レ物足ニ以和ヲ義、本義發ニ明其旨一矣、竊嘗推レ之、父慈子孝而父子利、親之和也、君仁臣敬而君臣利、義之和也、夫義婦柔而夫婦利、別之和也、長惠幼順而長幼利、序之和也、以レ文會レ友、責レ善輔レ仁一、而朋友利、信之和也、事得ニ其宜一、物得ニ其所一、足ニ以和ヲ義也、易六十四卦言レ利、正以レ此也、然知レ利而義、則義非ニ其義一、而舜蹠之所ニ由焉分一也、故子罕言レ利、傳ニ大學一者曰、不ニ以レ利爲ヲ利、以レ義爲レ利、孟子七篇之首曰、何必曰レ利、亦有ニ仁義一而已矣、聖賢垂レ訓之意深矣、孟氏之後知レ之者蓋鮮矣、獨仲舒言レ之正矣、故程子以爲レ度ニ越諸子一、南軒言レ之密矣、故朱子以爲ニ前聖所レ未レ發、學者所レ當レ潜レ心也、宗乎宗乎、宗ニ儒者之敎一、愼ニ禮儀之則一、明ニ義利之分一、則身修而無ニ往不一レ利、斯可ニ以謂ヲ人矣、汝其以レ之告ニ諸祖父一、作ニ隆義反利說一、辛卯之歲、

片岡氏名字說

片岡氏之子義請レ字、字曰ニ正之一、義亦柯所ニ嘗名一也、蓋君子小人之分、義與レ利之間而已矣、然利有ニ義和之利一、有ニ貪欲之利一、貪欲之利、固不レ待レ論、雖ニ義和之利一、而纔有レ意ニ于此一、則陷ニ于小人之域一、故董子曰、仁人者正ニ其義一、不レ謀ニ其利一、此柯所ニ以名レ汝字ヲ汝之意也、其說之詳、先儒既言レ之矣、勉哉、辛卯之春、

※ 作レ判命ニ野中千一說

柯讀ニ大學一、得ニ正心二字一矣、心之爲レ體、至圓至中、無ニ少偏倚一、而統ニ性情一者也、正之爲レ字、一ニ一、二ニ｜、三一、四ニ｜、五ニ一、三ノ平二ノ直、亦如ニ衡繩之無ニ少偏倚一也、所レ謂正レ心者無レ他、反ニ其本一而已矣、柯命レ判、野中千合ニ此二字一作レ之、先書ニ正字一、長ニ其第一第五之二平畫之右一、而圈ニ於其中一、而點ニ於正字之左及圈之右一、以成レ亞矣、圈所ニ以象ニ心體之圓一也、左點分レ頭、所ニ以象ニ心發爲レ意、幾有ニ善惡一也、右點不レ分、所ニ以象ニ性發爲レ情純善無ヲ惡也、既而謂レ千曰、蓋心者、一身之主宰、而萬事之本根

也、故心正、則一身修而萬事治、夫判者、書牘契劵之爲レ證者也、李元紘之山判、君子稱レ之、陸餘慶之繆判、小民嘲レ之、豈可レ不レ敬也歟哉、柯所二以命一レ判、亦古人銘二几席觴豆刀劒戸牖一之遺意也、彼判者三知四病五蓮三穴之言、可レ笑也、

槇氏字說

美濃州人、姓槇氏、名某、字元眞、元字、其家所二以相承一也、壬辰之夏、元眞以レ書來、請レ演二其字義一、乃答レ之曰、元之義大矣、眞之義至矣、予得而知レ之哉、姑以レ所レ聞也、夫天地之間、一元而已矣、分言レ之、在レ天曰二乾元一、在レ地曰二坤元一、又折言、曰二元亨利貞一、而二氣五行、變交錯綜、至二於無一レ窮、其所二以然一者、無三往非二一元之本然一也、昔朱先生初冠、字二元晦一、後以レ元爲二四德之首一、不二敢當一レ之、遂更爲レ仲、今使二元眞更一レ之歟、然其祖先所レ傳、不レ可二輕更一也、靜言思レ之、眞西山者、朱門私淑之士、而其字希元也、通書曰、聖希レ天、賢希レ聖、此希レ元之謂也、西山字義、蓋取二諸此一、元眞當レ志二西山之所一レ志也、夫天地之生レ物也、乾元資始、坤元資生、是以萬物之生、皆莫レ不レ得レ之、而惟人得二其全一、所レ謂仁是也、孔門之敎無レ他、求レ仁而已矣、求レ仁即希レ元也、顏子之克復、仲弓之敬恕、其求レ之之要也、孟子曰、仁人心也、此擧二其全體一示レ人、親切之訓也、嘗竊論レ之、平居安閑無事之時、一心湛然、虛明之際、無二非禮之視一、無二非禮之聽一、無二非禮之言一、無二非禮之動一、此乃心之本體、天理流行、即是仁也、敬者所三以存二此心一也、恕者所三以推二此心一也、克復者、非禮之私、將レ害二此心一、則克レ之、復禮所三以全二其本體一也、夫眞也者實也、五經四書無二此字一、至二於周濂溪一、著二太極圖說一、始言レ此、而程張朱子、皆以レ此言二性命知行之實一、謬レ此異端假僞之說、俗儒虛誕之文、不レ得三以亂二吾道一也、豈曰レ小二補之一哉、今心學假僞之說、盛行二于士夫之間一、予欲二元眞顧レ字思レ義不一レ惑二于彼一、故因二其請一、告レ所レ聞也、

明石氏字說

夫道若二大路一然、人之行レ道、猶レ行二大路一也、忠孝仁義、人之道、不レ行レ之者非レ人也、然不レ知レ之、則不レ可二得而行一、程子光照之訓、正爲レ此也、蓋知有二淺深一、行有二遠近一、修レ身齊レ家、近也、治レ國平二天下一、遠也、知之淺者、行也近焉、知之深者、行也遠

焉、由二淺近一而進二深遠一、是大丈夫之事、半途而廢者、小丈夫也、彼不レ知而行者、瞽也耳矣、筑前國人、明石某、字行豐、求レ演二其字義一、余擧二前說一而申レ之、以二易之言一、曰、豐大也、明以動、故豐明易レ至二于刻一、動易レ失二于輕一、刻也輕也、其豈豐之云也乎哉、行豐念レ茲、遂書以貽、

答二澤田春伯丈一書

承レ喩朋友無レ恙、日日講習、甚慰二鄙懷一、問目之對、朱二書各條下一、前日邂逅相會、不レ顧二固陋一、信レ口了、今亦胡亂下レ語、漸汗漸汗、又承、柯之才德之全云云、是何言歟、柯之愚也、聞二人之譽一、則意氣揚揚、聞レ毀、則如二水不一レ可レ磯、未三嘗察二己之善惡奈何一、然遭レ毀也、遂覺レ爲二我之戒一、所レ譽則徒長二我之惡一而已、吾子必勿レ復レ之、此非二謙辭一、願レ諒レ之、朱子詩九十六首、此所レ謂訓蒙詩者、頃閱二新安程履齋所レ輯朱子詩集一得レ之、或以二文集無一レ之、爲レ非二朱子之作一、然味二其詞旨一、非二朱子一不レ及レ此、湯之盤銘不レ登二商書一、武王戒銘、不レ載二周書一、奚以三文集不二登載一而猶二豫之一哉、吾人所レ當二熟翫一也、今往二抄本一、謄寫訖寄來、不宣、

答二片岡正之一書

今月三日書、昨日來到、承三月二十六日昏娶、夫婦之道、小學詳明、而所レ謂夫和而義、妻柔而正者、乃其要道也、苟和而不レ義、則父子不レ親、義而不レ和、則妻子咨咨、不レ可レ不レ愼、而今讀者不レ明レ之、或妾媵無レ數者曰、一夫一婦、庶人之職、而聞二涑水之不一レ私レ妾、則以爲レ不レ足レ法、此豈知二和義之道一者哉、詩曰、妻子好合、如レ鼓二瑟琴一、兄弟既翕、和樂且湛、宜二爾室家一、樂二爾妻帑一、孔子誦レ之曰、父母其順矣乎、其三二復之一、樂羊子感二妻言一、終二學業一、晏御揚揚、因二妻言一抑二損之一、是妻正而輔二佐之一、夫義而能改者也、其亦念レ茲、此外猶有二可レ言者一、暫期二後便一、不宣、

答二眞邊仲庵一書

二月朔書、上巳後五日至、承海陸無レ恙而還、多幸多幸、疎慵如レ舊、弗レ賜二遠念一、年來子誤聞二吾名一、去冬枉レ駕過二蝸廬一、將レ謂一見二無似一、望望然去レ之、而今却蒙三博識力行任二考亭之道一、不レ虞之譽不レ勝二慚愧一、孔子集大成、垂二六經一、達二于此一、曰二博識一、曰二力行一、吾不レ與焉、固萬萬也、聖遠樂亡、經以レ五名、

禮之壞亂亦甚矣、幸朱先生出、易也詩也、明本義、攻末失、書令蔡仲默作傳、禮樂欲正而未成、然黄直卿續儀禮經傳、蔡季通著律呂新書、春秋以爲未學、不下筆、寓其微意於通鑑綱目、四書之解、小學之書、發明眞切、無復遺蘊、先生實夫子後一人也、善學者由小學進大學、而盡論孟精微、極中庸之歸趣、則六經可不治而明矣、吾竊志于小學、讀書題而、知無古今異宜者、不可不行、然而行之、則未曾有也、非知之艱、行之惟艱、請子以吾爲戒、來喩深惡致良知之説云云、孟子不云乎、能言距楊墨者、聖人之徒也、是吾所以不辭也、先生力與陸辨、廓如也、先生沒、吳草廬趙東山再倡之、程篁墩王陽明尋和之、以其外先生而難立也、篁墩作道一編、（見篁墩集）附註心經、（今刊行）陽明爲晩年定論、（見傳習錄）欲混朱陸以易天下、陳清瀾之學蔀通辨、馮貞白之求是編、正憂之而作、然陳馮未窺先生之室、則以一酌之水、救崑岡之火、雖勞奚補、朱書之來于本朝、凡數百年焉、獨清軒玄惠法印、始以此爲正、而未免佛、藤太閤亦以爲、程朱新釋、可爲肝心、而猶惑乎佛、遂不聞實尊信之者也、慶長元和之際、南浦自謂信之、而亦尊佛、惺窩自謂尊之、而亦信陸、陸之爲學、陽儒陰佛、儒正而佛邪、厥懸隔、不翅雲泥、既尊此而信彼、則肯庵草廬之亞流耳、豈曰實尊信者哉、去冬面論之際、疑於吾子中其毒也、今也尊朱惡陸、不棄無似、將與講習、麗澤之益、何悦加之、頃輯先生排陸之言、分爲上下兩卷、題曰大家商量集、（取于先生答諸葛氏書中文語）偶友人取去、後便寄之、不悉、暮春日、

與仲庵書

大家商量集、此間友人不欲遠遺、則爲令傭書、即今乘便風、因啓、近日自稱學朱子者、誹記誦、則以蔽己之寡聞、謗詞章、則以蓋己之無文、譏笑陸氏之禁書、而其所讀所行、却在陸氏下、此吾人所當顧也、蓋學、知與行而已、知可博矣、不可雜也、可精矣、不可鑿也、行可一矣、不可二也、可篤矣、不可薄也、知行相進、而可上達矣、此朱學之所以與俗儒陸氏不同也、張無垢之學、陽儒而陰釋、先生雜學辨中論之、又嘗聞張氏經解板行、曰、此禍甚酷、不在洪水夷狄猛獸

之下、夫先生未レ見二陸氏一也、既聞三其宗二無垢一矣、鵝湖之會、其詳不レ可三得而致一、然誦二其詩一、可二以槩見一焉、其後先生辨論不レ置、及二陸之死一也、有下死二了告子一之嘆上、苟得二此集一而讀レ之、則朱陸同異之分、不レ待二他說一而明矣、蔡介夫有レ言、以二朱子之正學精義一、而不レ能レ折二服象山氏兄弟於一時之語次一、意亦其雄辨之不レ如二孟子一也、介夫此言、吾不レ韙レ之、夫朱子之於二陸氏一、猶三孟子之於二告子一、孟子之於二夷之一、猶三朱子之於二李伯諫一、事見二先生答二張敬夫及范伯崇林擇之一書上則是服與レ不レ服在レ彼耳、豈以レ此而方二孟朱之辨一哉、維時涼至、燈火可レ親之秋也、吾子其勉レ旃、早早心緒、不二縷縷一、七月二日、

佐原義連碑

佐原氏者、相州三浦之族、而其先出レ自二平姓一矣、義連之曾祖、曰二爲繼一、爲繼父曰二爲通一、任二長門守一、是爲二三浦之祖一、爲通父曰二忠通一、忠通父曰二良文一、共任二鎭守府將軍一、良文者、乃平祖高望王之子也、爲繼子曰二義繼一、義繼子曰二義明一、稱二大介一、生二十子一、一男義宗、是杉本之祖、二男義澄、呼二別當荒二郞一、是矢部之祖、三男義久、是大多和之祖、四男義春、是多多良之祖、五男義季、是長井之祖、六男重行、七八九子失二其名一、十男義連、所レ謂佐原十郞是也、高倉帝、治承四年之夏、源武衞賴朝卿勃興焉、義明以二其黨一附レ之、秋八月二十三日、石橋山之戰、源軍敗績、武衞匿レ形而去、翌日三浦與二畠山一、戰二于油井濱小坪坂一、三浦利、斬レ首五十餘級、重忠忿レ之奮擊、義連等操二短兵一急當レ之、重忠危、畠山從者阻レ之言曰、三浦畠山爲二聯族一、何宛如レ此敵哉、而重忠免焉、時上總介廣常、弟金田大夫賴次、以二七十餘騎一屬二三浦一焉、重忠欲レ雪二前日恥一、二十六日、率二其黨一來、三浦聞レ之保二衣笠城一、畠山攻レ之、義澄義連力戰拒レ之、義明謂レ之曰、兩日戰鬪、兵疲矢盡、汝等當三逃去尋二君之處一、君之智也人不二得而害一レ之 必在二安房上總二州之間一、夫東國誰不二源家人一、雖三一旦隨二平氏一、豈忘二舊恩一哉、必皆歸焉、汝切勿レ懷二二心一、我既耄矣、不レ可二徒行一、不レ可二馬乘一、汝欲二扶去一、恐亦弗レ能也、及二其弗一レ能、則人必笑レ我言、白頭所レ得能多少、不レ死二於城一而死二于徑一矣、又必笑レ爾言、苟遺二其親一、肆二諸道路一矣、吾獨留二于此一、汝等往矣、宜下忍レ生戮レ力、建二君於世一、而領二先塋所一レ在以孝中奉之上、

是予之願也　我累世爲源家之臣、今幸逢君之起義兵、而爲之致死、盡喜之哉、但不親見君之拜日本大將軍而死、此遺恨耳、老涙泫然沾直垂袖、兄弟已下號泣不肯行、義明云速去、而其志不可回也、皆不獲已、踰城指安房國而赴焉、二十七日、畠山遂拔城殺義明、時義明百六歲也、爰北條父子、岡崎四郎義實、近藤七國平等、自土肥岩浦乘船、亦指房州而渡、與三浦遇于海上、拍手相懽、二十九日、武衛掉扁舟、著房之獵島、北條等迎拜之、數日愁眉一時開矣、尋而畠山來伏焉、武衛謂三浦言、不受降者、大事不可成、當爲忘私讐、三浦義不辭、五年之夏、武衛選善射者十一人、直宿寢處、義連其一也、武衛乘納涼之興、逍遙乎三浦、訪義明之舊跡、義澄拜辱、設盛饌饗之、武衛宴樂、無貴無賤、飛觴歌舞、時武衛脫水干、賜岡崎四郎、即命著之、上總介嫉之曰、若廣常者、合當拜受之、而義實蒙此賞、則意外之事也、四郎嗔曰、廣常自負功云爾、豈比義實之忠哉、二人爭欲兵、武衛不敢下言辭、義連出叱云、義實之吹濫、老狂之所致歟、廣常亦乖物儀也、猶有憤則可期後日、制止之、安德帝、壽永三年春正月、武衛遣兩弟蒲冠者範頼、九郎義經、爲節刀使、帥兵數萬、誅木曾、擊平氏、二十日、兩將破木曾軍入洛、義仲走、義澄義連等追之、義仲遂被誅、二月七日、源平決勝一谷、東西兩口之戰　雌雄相爭、勝敗未決、義經以精兵七十餘騎、廻出鵯越、即言可以九郎爲範、而馳驅深入險阻、頭上嶙峋、目下谽谺、進退窮而士卒屈、義連進曰、此是三浦之馬場也、先驅、義經繼之、士卒皆馳、揚聲放火、音響于谷、烟舞于風、城中以爲大軍襲來、失度而潰焉、義連之勇名於是乎籍甚矣、四年之春、兩將追伐平氏於西州、義澄義連從有戰功焉、後鳥羽帝、文治四年秋七月十日、賴家朝臣始著鎧、其儀尤嚴、義連進御劒、五年之春正月九日、朝臣有弓始之禮、使射手十人行之、義連其一也、夏召北條三男於幕府、命元服、武藏守參河守以下相州著坐、三獻禮畢、武衛命加冠、義連辭、重命言、上首列坐、汝辭亦可也、然往年三浦遊宴之時、廣常義實喧競之處、汝克治之、於今乎不忘之、此小童者、內室之所寵異、將來託之、不可

固辭、義連乃進加冠、字曰時連、秋武衛東征、源軍破伊達之厚樫山之要害、逼于西城戶、國衡血戰禦之、義澄義連等勵衆、戰疾攻急、而國衡死之、與師撓敗、源軍乘勝追亡、武衛令義連等整旅擊之、而泰衡遂授首、武衛使義澄義連等討其餘黨、而奥羽悉平夷矣、武衛賞功臣、而封義連於會津城、鎭東北矣、建久元年冬、武衛上洛、義連扈從、任左衛門少尉矣、三年秋八月九日、實朝公生、義連獻護刀、四年之夏、武衛狩富士野、會我夜擊之翌、召時宗於幕下、勇士侍左右、義連其一也、夫義連斷金之志、武衛亦諒之、凡出御則先後之、每有事則與於此焉、嘗司和泉紀伊兩國守護職矣、武衛任征夷將軍之時、使義澄奉勅使之除書、是思義明忠死之言也、人皆感羨之矣、抑義連兄弟之不顧親之死、與漢之王陵趙苞、異世同情之事也、可不哀哉、可不憐哉、其扶父而去、則既已不能也、儻與父共死乎、或與父共降乎、此皆父之不可許也必矣、然則與其違父命而死無益也、寧相君而繼父之志者耳、使程子論之、則亦可與王趙同斷案耶、未可知也、義連娶伊東氏生盛連、盛連之子光盛、是爲葦名之祖、其子泰盛、次盛宗、次盛員、次直盛、次詮盛、次盛高、次盛久、盛久無子、弟盛信立、其子盛詮、次盛高、次盛滋、盛滋無子、弟盛舜立、其子盛氏、是時中興、仙道來服焉、其次盛興、早世、而佐原氏絕矣、異姓更立、家臣相爭而國亦滅也、厥後上杉氏、蒲生氏、加藤氏封于茲、上杉轉封、蒲生無嗣、加藤國除、寬永二十年之秋、大將軍源家光公、封弟左中將肥太守正之于此、太守讀書好學、爲政有法度、嘗遣家臣、循行封疆、而聞義連廢基在耶麻郡、嘆曰、先封之主、名將之迹、我後人之所以可圖不朽也、遂爲此礱石建碑、屬嘉銘文、予於是考其譜、表其事、聊論之、繫以銘、厥銘曰、

佐原之系　平氏之族　世仕源家　久得定食
大介貽謀　十郎忍辱　繼父之志　共臣之職
維肱維股　維心維腹　李固斷金　趙峻匪石
勇蔑勳舍　氣陵賁育　御宴治亂　京寇追北
身生三浦　名揚一谷　奥役之勳　會封之福
因太守擧　銘少尉域　圓首方趺　過者可式

寬文八年戊申仲夏初三日　山崎敬義撰

垂加文集上之二終

垂加文集卷之三目錄

卷之三目錄終

垂加文集中之一

土津靈神碑

土津者、東照大權現孫、源中將之靈號也、靈神諱
正之、小字幸松、台德院秀忠公之子、大猷院家光
公之弟而、大將軍家綱公之叔父、母神尾氏、慶長十六
年辛亥、夏五月七日、生ニ于江府一焉、七歲台ニ命信州
高遠城主從五位肥後守源姓保科氏正光一、爲ニ義父一、弱
冠義父卒、任ニ肥後守一、賜ニ爲淸刀一、入ニ高遠一、寬永九年
壬申冬、陞叙ニ從四位下一、甲戌之秋、家光公上洛、靈
神扈從、七月十八日、公參內、是日靈神任ニ侍從一、
拜ニ皇帝太上皇一、賜ニ天盃一、丙子之秋、大增ニ封
戶一、移ニ羽州最上城一、賜ニ行光刀一、靈神入ニ最上一、巡ニ
所部一、加ニ奬諸士一、更召ニ多士一、各須ニ職事一、無レ大無
レ小、咸自爲レ之、戊寅之夏、最上近邑、白岩氏將レ叛、
靈神治レ之驛告、辛巳之秋八月三日、世子家綱公
誕、靈神獻ニ光忠刀左文字小刀一、癸未之夏、韓使來
貢、公引見ニ南殿一、靈神侍坐、秋復益ニ封戶一、移ニ奧州
會津城一、正保二年乙酉夏、任ニ左近衛少將一、四月二十
三日、世子元服、靈神理レ髮、獻ニ來國光刀于公一、
獻ニ守家太刀、行光刀于世子一、公賜ニ長光刀一、世
子賜ニ將監長光刀一、賜ニ御盃一、秋叙ニ從四位上一、冬十
一月、天子特贈ニ宸翰宮額于大權現一、勅使格ニ
于日光山一、靈神登レ山攝ニ御事一、慶安四年辛卯夏四月
二十日、公大漸、召ニ靈神於寢殿一、託ニ世子一而薨、
靈神常在レ府佐レ之、秋家綱公任ニ內府一、拜ニ大將軍一、
勅使來、靈神登城、承應二年癸巳秋、公任ニ右府一、
勅使來、靈神登城、公命ニ謝上使靈神、與ニ副使侍從
今川範英一、上ニ京師一、冬十月十日、參內拜レ帝、
公事畢、私覿、賜ニ天盃一、仙洞新院女院如ニ前儀一、
次謁ニ關白一、太閤亦會レ之、反、太閤關白送レ之、十三
日勅答賜ニ天盃一、而退則任ニ中將一、賜ニ太刀一、乃辭
レ官拜レ賜而出、仙洞勅答賜ニ仙盃一賜ニ太刀一、新
院勅答如ニ前式一、是日女院設ニ饗禮一、有ニ舞樂一賜ニ
御盃一、賞賜若干、靈神拜レ辱、二十七日歸レ府復命、
公乃言曰、中將之任、宜レ從ニ勅命一、乃拜、累叙ニ從
三位一、又辭、乃遂叙ニ正四位下一、明曆改元乙未冬、韓
使來貢公引見ニ南殿一、靈神侍坐、事闋、韓使以ニ書
信一來ニ于私第一、靈神報ニ答之一、寬文六年丙午、靈神五

十六、以病致事、而不得謝、自是營中乘輿、國老就謀焉、靈神性剛正而和淳、自幼讀書、不惑年、始讀小學、知大學之基、焚向前所讀老佛之書、專攻濂洛關閩之書、用力於敬、功夫日新也、其言云、主一無適、則存得未發之氣象、動亦定、靜亦定、聖人無情性之者 其庶幾乎、又云、程門靜坐之法、楊氏羅氏李氏、能授受之、三子傳心錄、於是乎編矣、嘗使嘉讀玉山講義、爲之附錄、則擧其要曰、仁之生意、親切之味、即未發之愛、一意一理、而萬物之所以爲一體也、又曰、智藏而無迹、識此而後可以語道體、可以論鬼神、又曰、仁智交際、萬化機軸、此合天人之道也、嗚呼可謂說約矣、知此要約者、朱門蔡季通、仲默、眞希元之後、未有斯人也、日本神代卷中臣祓者、我道傳授之書也、靈神學之、得吉田家之傳、遡五十鈴川之流、神武向日之畏、應神祕道之敬、奉持而著之心胸之間、實 弓兵政所、崇道盡敬天皇以後一人耳、其事君也、大義常存於心、念念不忘、以安世爲悅、而不以一毫欺之、恐己忠之不盡、而不欲人之悅己、其所書思對命、悉燒之、

人無得而知之、周公之于身、亦優爲之、欲得夷齊無怨之仁、厭聞湯武革命之義、常言、文王至德處、孔子以來韓愈程朱發之、泰伯至德處、孔子以來、惟朱子明之、夫然後天下之爲君臣者定矣、因言、事代主命、本朝泰伯也、又常稱明道愧視民如傷四字、愛范希文先憂後樂之語、使侍史讀倭漢歷代之書、察治亂之幾、論興亡之迹、考諸地宜、質諸時義、編二程治教錄、以寓其意焉、其治會津也、城隍郛郭時省、督課、儲軍餉、備兵器、作風土記、坐知四境、正神社、爲之志、廢佛堂、斥僧寺、置葬地、禁火葬、立社倉、行常平、謹權量、寬租稅、制糶糴漕運之法、聽訟本人倫、察事情、遣監司循封內、下情上達、凶年防之、饑歲賑之、九十以上、歲與口養、孝子節婦賞之、不忠不弟罰之、窮人無歸則給之、旅客有疾則濟之、未嘗有一人饑莩者也、靈神娶奧州岩城城主從四位左馬助藤原姓內藤氏政長女、生一男幸松、夫人夙終、男亦夭、二男正頼、從四位侍從長門守、先沒、三女嫁羽州米澤侍從從四位播磨守藤原姓上杉氏綱勝、先沒、四男正經、從四位侍從筑前守、娶加州小松

中納言、從三位肥前守菅原姓前田氏利常女ニ、三子皆母藤木氏、五女母牛田氏、嫁ニ利常嫡孫正四位左中將加賀守綱利ニ、先沒、六女嫁ニ相州小田原侍從從四位美濃守越智姓稻葉氏正則嫡子、從五位丹後守義雅ニ、先沒、七男正純、從五位東市正、先沒、二子亦藤木氏生、八男重四郎、卒、母沖氏、戊申之歲、著ニ家訓ニ、明年再乞ニ致仕ニ、台許、令ニ正經襲ニレ封。六十一、蒙ニ土津靈社之號ニ、壬子之夏、行ニ于會津ニ、卜ニ壽藏於磐梯南麓見禰山ニ、詠ニ倭歌ニ以賦ニ其事ニ、蓋仁以爲ニ己任ニ、生無レ所レ息、望レ壙則知レ所レ息者歟、夫我神國傳來、唯一宗源之道、在ニ乎土金ニ、而土即敬也、蓋土與レ敬、倭訓相通、而天地之所ニ以位ニ、陰陽之所ニ以行ニ、人道之所ニ以立ニ、其妙旨備ニ于此訓ニ、靈神達ニ乎此ニ、靈號良有レ以矣、是冬歸レ府、病ニ臥于城南箕田邸ニ、公使ニ國老數來ニ、十二月十八日、終ニ于正寢ニ、臨レ終不レ異ニ平生ニ、惟仁義之言、而安然氣絕、壽六十有二歲也、公哀痛賻レ之、諸侯惜レ之、女院聞レ訃甚傷、關白以下嗟嘆弔レ之矣、孝子正經治レ喪、不レ用ニ浮屠ニ、衣衾棺槨、必誠必信、晦日、大轝至ニ于會津ニ焉、癸丑之春三月二十七日、大葬ニ於壽穴ニ矣、夏建レ祉、請ニ神祇管領長上卜部兼連ニ、安ニ鎭之ニ、厥璽曰ニ土津靈神安鎭座ニ矣、延寶二年之秋、鐫レ石立レ碑、屬レ嘉作ニ其文ニ、夫靈神之忠之行、天下具瞻レ之、至ニ其學識ニ、則嘉竊知レ之、故不ニ敢辭レ之、乃爲ニ之文ニ、繫以レ銘曰、

維左中將　源家懿親　質剛而正　氣和而淳
讀レ書知レ道　持レ敬修レ身　排ニ黜他鬼ニ　尊ニ信我神ニ
受ニ託之重ニ　致忠之眞　國老謀レ政　韓使結レ鄰
初守ニ高遠ニ　乃利ニ黎民ニ　次護ニ最上ニ　乃陟ニ士臣ニ
終ニ鶴城主ニ　兼ニ龜壘鎭ニ　風土有レ記　社倉見レ仁
爰著ニ家訓ニ　永貽ニ後人ニ　體藏ニ磐麓ニ　祉扃ニ土津ニ
之德之合　之實之賓　正直祈禱　靈驗斯新

山崎嘉謹撰

刀銘

白刃可レ蹈　中庸難レ能

同

敬帶止レ戈　妄把起レ戎　其機如レ此　惟省ニ厥躬ニ

同

故人友松氏興、家藏之刀也、嘗以ニ此刀ニ追ニ截人ニ、其人北去泳レ水而做ニ兩段ニ、因名ニ泳波ニ云、

先レ幾勢不レ可レ干、卹レ乃處泳波寒、

藏柱銘

敬以直レ內　義以方レ外　敬義夾持　出入無レ悖

弓銘加須屋左近武成作レ所之弓、

一張一弛　文武道然　彎架滿處　三五月圓

十五射法、吉田家之祕傳、左近手書、附二屬于嘉一、故末句及レ之、

敬勝字銘延寶庚申之歲正月元日、字二山三郞一、因爲二之銘一、

爾生二丙午一　今歲十五　敬勝レ怠吉　銘二諸心腑一

甥女小三墓誌銘

甥女、諱小三、洛陽人、寛永戊寅三月二十日申上剋生、幼孤、家君令姊俱鞠二育之一、其性正靜孝順、不二苟食一、不レ茹レ葷、常不二外出一、能勤二女事一、予口二授女孝經一、敎下事二家君令姊一、祭祀禮相助上奠、皆遵レ敎能レ之、承應壬辰二月病臥、癸巳六月二日、午上剋十六歲死、病間只言二孝奉之事一、不レ欲レ使三家君聞二苦楚之聲一、病革、謂二嘉姊弟一曰、我死無レ憾、獨以レ貽二家君母君憂一爲レ恨耳、朔禮適二家君所一、少間而退、乃死之前日也、臨レ終、其言如二平生一、使レ掩二屏風於枕上一、奄然絕焉、嗚呼哀哉、是月丁酉、葬二于洛東黑谷山一、葬事不レ能レ備、惟衣衾棺椁依二家禮一治レ之、是日女舅敬義誌レ石、納二諸幽竁一、冀三後人莫二敢壞一、銘曰、

盡哉甥生、有レ德無レ年、命乎命也、泣納二此鐫一

半齋翁墓表銘

古之士者、不二素餐一、行二死生之庭一、不レ見二其人一也、今之士者、不レ仕曷爲、而仕惟喜レ得患レ失、魏勃掃レ門、潘岳望レ塵、旁觀乃堪レ羞、顚倒自不レ知、使三其行二死生之庭一、則吾見三其降眊股戰、而無二人色一也、豈可レ謂二之士一也與哉、嗚呼若二半齋翁一者、吾見鮮矣、翁姓片岡氏、諱某、尾張國海部郡小邊村產也、質性勁直、不二瑣碎倏閃一、事レ君不レ合則去、少稱二平吉一、仕二本國內大臣平信雄老、土方勘兵衛雄久一、大臣亡レ國、諸士流離、翁適二濃州一、仕二金山城主森右近大夫忠政一、行レ之、改二氏岡本一、稱二次郎左衛門一、往二豐之後州一、仕二臼杵城主太田美作守一、慶長五年、石田氏作レ亂、美作守與レ之、時同州竹田城主中川修理大夫秀成、使二其內弟吉田喜太郞將レ兵、將レ拔二臼杵城一、太田氏出戰二佐賀關一、翁爲二隊頭一、擊二卻中川兵一、斬二喜太郞首一、美作守致レ狀褒レ之、及二石田氏所レ戮、美作守喪、◎喪下脫字歟飄二泊京師一、翁從レ之能奉レ之、美作守得二終焉之地一、使二翁之レ他仕一、於レ是適二豐之前州一、仕二太守細川忠興一、行レ之、改レ氏稱曰二馬淵十兵衛一、往二備之前州一、仕二岡山中納言豐臣秀秋一、去而復二岡本次郞左衛門一、如二豫州一、仕二道後城主加藤左馬助嘉

明、慶長之末年、有大坂之軍、其前年翁去加藤氏、軍時入城、屬渡邊內藏助融、內藏助於田鳥野、及米澤中納言上杉景勝戰、一追一見逐、丁其見逐、士十六人、四人於柵外、二人於柵內、止拒逐者、翁在四人之中最、軍散、舊君右近大夫召、時右近爲作州太守、翁往仕之、既而有大坂餘黨之禁、而又去之、更號半齋、遨遊四方、未嘗衒其勇功、人或問之、則語而不誇寛永五年之冬、往土州、客大守山內忠義宰、野中直繼家士、城南三里吾川郡勝浦濱、有直繼別宅、翁居之、六年八月之望、忽中風、遂不起、九年十二月二十日、七十二歲死、火葬宅南山麓矣、翁前盛時、寄食者多、無貴賤、一與己等、平生不美衣、不重味、雖速客、器皿不滿案、或戲之曰儉、翁答之曰、士會不在酒肴、其爲故舊謀、如己之事、嘗有言曰、士不可僞也、僞者非也、又曰、士不可面從退有後言、蓋翁是古士之亞流歟、翁娶衣斐氏、無子而死、妾生一男、名千、夭斫、妾有故出之、妻和田氏生子二人、伯女名奈安、季男名義、字正之、小字鹿之介、常戒妻曰、女不可預男事、子有過、則使妻諭讓之、季男或怒婦、必答之、妻寛解、則曰、此事不可以幼而許也、夫毓二子困窮之中、而又養其族飯田又右衛門孤女菊、視之猶子、翁死時皆幼、妻亦少、死之前日謂妻曰、我疾久矣、汝善勤矣、我死勿託幼匪其人、勿汚死後之名、翁死、妻不改、遵守遺命、養女嫁土佐守臣西野加兵衛、伯女嫁野中家臣古槇八左衛門、季男爲直繼小臣、直繼歿、爲其嗣良繼小臣、今爲其屬士、復本氏、呼義右衛門、嘗從我遊焉、義憂翁死時、幼不更事、用火化、封墓不堅固、今歲修舊塋、建新表、柯方爲敍其事、而銘以繫焉、承應二年十二月二十日也、銘曰、

人皆有義、患氣所克　孰守孰持　惟翁不惡
佐賀闘功　田鳥野力　鄙夫可起　勇士可服
勝浦之濱　南山之麓　墓封于斯　椿樹于域
圭首方趺　我銘以勤　八千歲餘　芳名罔極

上梁文 家君命

東　日光紅、無私照、泰和中、
西　旻天低、惟人事、在提撕
南　薰風淡、那有盡、棟木堪、

北　仰瞻極、欽矣哉、帝之則、
伏願上梁後、父母倶壽耇姉弟能孝思、家道正長久、

楠正成庭訓圖贊

植植楠丈夫　庭訓吐二丹腸一
籌略曾無レ敵　長年英氣香

家君壽像贊土佐將監光起畫之

乾父坤母　一視同仁　家君壽影　於レ我尤親

自贊

神垂祈禱　冥加正直　我願守レ之　終身勿レ忒

跋二會津風土記一

會城大守、四品侍從源正經者、土津靈神之子也、寛文辛丑、靈神始記二會津之風土一、至二丙午一厥功成、以爲二一卷一、此不四惟欲三坐知二管內一、而待下國家繼二古者風土記之絕一者上也、今歲甲寅、太守補二入、丙午以後所レ增之村田、戶田、牛馬等、及靈神長隱之迹一、分爲二兩卷一、使下嘉看二詳之一、且爲中之跋上、其上卷、則專二國政之用一、下卷、則兼二方覽之勝一、實文質彬彬君子之書也、予嘗以二靈神之命一、潤二色是書一、則斯命也亦不レ獲レ辭、乃應レ之、孔子曰、孝者善繼二人之志一、善述二人之事一者也、其太守之謂乎、延寶二年仲秋日、垂加翁山崎嘉謹跋、

跋二御靈八所記錄一

下御靈社司、森原氏子信直、自レ幼讀レ書、弱冠專攻二神書一、從レ我學焉、吾愛二其器之堪一レ任、乃所レ受所レ考、傳レ之授レ之、信直年來尋二八所之起一、頃編爲二一卷一、以請二跋文一、予嘗歷二覽諸社配錄一、或闕略或附會、未レ有下若二此編一者上也、因言、桓武帝即位之翼、立二早良太子一、何其急也、賊殺二藤原種繼一、是太子之所二叛而致一、則何不下宣二其罪一而廢上之也、追二稱尊號一、則曰、朕有レ所レ思、亦何謂也　國史不二顯記一レ之、釋書未レ可二輕信一也、又言、追稱之號、與二　舍人親王一同曰二崇道天皇一、而不レ有二盡敬之號一耳、蓋由三太子崇二敬　藤森一而謚レ之如レ此歟、當社末社　親王坐焉、藤森相殿、太子坐焉、誠有レ故矣、夫我神道之大成、在二於　親王一、而太子崇二敬之一、豈徒哉、信直念レ茲、當社者、嘉之牛王神也、此編之成、以慶以賞、以願レ垂二于不朽一、延寶六年仲冬二十二日、垂加翁山崎嘉敬義謹跋、

跋二兼良公十三廻忌法樂倭歌一

孝經鄭註、孔傳亡二于諸夏一尚矣、宋史曰、日本僧奝

然、以二鄭註一來、二本今猶存焉、然舊事記引二孝經一言、求二之忠臣一者、必在二於孝子之門一、而今本無レ有焉、後漢書引二此言一、注謂二孝經緯文一也、孝謙天皇令三天下家藏二孝經一、　醍醐御宇皇子始讀二孝經一、菅氏江氏、爲二之詩序一、釋奠講二孝經一、菅江爲二之詩序一、可レ謂二盛擧一矣、後成恩寺殿兼良公十三廻忌、法樂倭歌、作者二十二人、詠二孝經懷舊一各二首、都四十四首、咏二歎之一淫二液之一、人子之心、豈不レ感二於茲一乎哉、夫年忌之云、我國史所レ不レ有、而他三敎之書亦無レ之、但十三廻忌、國俗之說、見二師練釋書一、其曰下迎二先支一寓中追慕上者、聊有レ以也、於レ是乎跋、

延寶八年七月七日、垂加翁山崎嘉敬義、

跋二秀吉公感狀一

右關白豐臣秀吉公、感二石川兵助忠死一、所レ賜二其弟長松一之狀也、夫身體髮膚、不二敢毀傷一、立レ身揚レ名、以顯二父母一、孝子之常也、殺レ身成レ仁、孝子之權、亦所三以顯二父母一也、故曰、戰陣無レ勇非レ孝也、秀吉初爲二筑前守一時、與二柴田修理亮勝家一有レ隙、天正十一年四月二十一日、戰二于江北柳瀨一、秀吉小臣七人、趣攻戰疾、大敗二柴田軍一、時兵助年十八、把レ鎗先二七人一至、柴田虎士拜鄉五左衛門、亦操レ鎗當レ之、拜鄉被レ創レ胷、兵助被レ傷二眉間一共倒、拜鄉當下死、兵助五日死、秀吉痛惜レ之、召二長松一賜二此狀幷俸千石一、兵助自レ幼侍二秀吉側一、十六歲賜レ旗、人以恠レ之、忠死然後咸二服秀吉能知一レ人、嗚呼兵助可レ謂レ孝矣、兵助、姓源、氏石川、字一光、贈二四位侍從一、長松、字一宗、任二掃部頭一、其先出レ自二多田滿仲一、滿仲四世曰二有光一、稱二石川冠者一、奥州人也、是爲二石川之祖一、河川和訓同、故通用、有光五世曰二光治一、承久之役、有レ績賜二濃州市橋莊一、遂爲二濃州人一、其苗裔有下曰二三關一曰二江雲一、曰二養德一者上、俱居二同州鏡島一、友弟深至、人謂二之三兄弟一、養德生二二子一、長木工兵衛名某光政、次伊賀守名某光重、共仕二秀吉一、兵助者、光重之子也、一日兵助之從姪有政、携二此狀一來視レ余曰、秀吉賜二感狀於從叔父及彼七人、七人之狀、著二在太閤記一、而此狀獨脫レ之、請爲跋レ之、以垂二不朽一、吾族之幸也、余受讀而謂レ之曰、此誠世之所レ未レ傳也、嘗見二彼七人之狀一、皆稱二一番鎗一、蓋可レ疑矣、且兵助既爲二之先一、則此狀所レ謂一番鎗者眞是也、然若微二此狀一、則後世無二從徵一レ之、宜二以傳一レ之也、昔朱文公之叔祖、直

闇公、乞ㇾ表ニ其族昭等死ㇾ節事一狀、忠義錄不ニ登載一、文公恐ニ其湮沒不一ㇾ傳、刻而附ニ於錄後一、今子傚ㇾ之奚以ㇾ余爲、有政求而不ㇾ已、於ㇾ是乎跋、承應三年四月廿五日、

祭ニ小倉三省丈一文

惟

承應三年甲午七年十九日、洛陽山崎柯闇ニ友人小倉三省丈之訃一、海南百里、以ニ親喪一而不ㇾ能ㇾ爲ㇾ奔、以ニ家貧一而不ㇾ能ㇾ遣ㇾ人、依ニ便次一、奉ニ香燭奠于吾友之靈前一、乃哭曰、嗚呼、三省好ㇾ儒惡ㇾ佛、事ㇾ君不ニ容悅一、事ㇾ親不ニ苟從一、善撫ニ弟妹一、善惠ニ隸僕一、茲歲四月遭ニ艱喪一、哀毀致ㇾ疾、今月十五日永逝、痛哉痛哉、不ㇾ圖三省而遽至ㇾ此也、交通之情、同志之樂、已矣已矣　哀哉哀哉、

垂加文集中之一終

垂加文集卷之四目錄

卷之四目錄終

垂加文集中之二

闢異小序

子朱子曰、正道異端、如二水火之相勝一、彼盛則此衰、此強則彼弱、熟二視異端之害一、而不二一言以正ヲ之亦何以扶二習俗之弊一哉、觀四孟子所三以答二公都子好レ辯之問一、則可レ見矣、

同跋

柯既述二此篇一、佛氏引二泰伯之迹一、以難二程子迹斷之言一、有二理障之說一、以難二朱子宇宙之章一、而謂程朱亦學二佛老一、而以三其身爲二儒者一、陰用レ之、陽闢レ之、而輕信述レ之也、或以告、吾謂レ之曰、程朱之門、千言萬語、只欲レ使下學者守二正道一闢中異端上而已矣、竊歷上考之一、未レ有下若二迹斷之言一要而的者上也、未レ有下若二宇宙之章一明而備者上也、彼能三復致レ思、則亦可二以感悟興起一也、惜乎不レ能レ然也、今且辨レ之、夫天下之道有レ經有レ權、經萬世之常、人皆可二以守一也、權一時之用、非二聖賢一不レ能レ用也、朱子曰、如三湯放レ桀、武王伐レ紂、伊尹放二太甲一、此是權也、若日日時時用レ之、則成二甚世界一了、泰伯之逃、亦是權也、故無二伊尹之志一而放二其君一、是無レ君者也、無二泰伯之心一而逃二其父一、是無レ父者也、無レ父無レ君、春秋之所二必誅一也、孟子之所二必闢一也、夫理障之說、程子答二人問ヲ此曰、釋氏有二此說一、謂既明二此理一、而又執二持是理一、故爲レ障、此錯二看了理字一也、天下只有二一箇理一、既明二此理一、夫復何障、若以レ理爲レ障、則是已與レ理爲レ二、朱子答二李宗思一書曰、來書云、以レ理爲レ障者、特欲レ去二其私意小智一、熹謂、認二私意小智一、作二理字一、正是不レ識二理字一、來書又謂、上蔡云、佛氏不二肯就ヲ理者爲レ非、熹謂、若不レ識二理字一、則此亦未レ易下以二口舌一爭上也、他日解レ此、乃知二所レ言之可ヲ笑耳、夫程朱之學、始未レ得二其要一、是以出二入於佛老一、及三其反求而得二諸六經一、豈用二佛老一哉、其闢レ之也有下廢二綱常一之罪上也、若有二可レ用之實一、無二可レ闢之罪一、而陰用陽闢、則何以爲二程朱一矣、朱子嘗譏下溫公吾排レ佛欲レ扶レ教之言上、則可三以觀二其不ヲ欺レ我也、吾幼年讀二四書一、成童爲二佛徒一、二十二三本二於空谷之書一、作二三教一致之胡論一、二十五、讀二朱子之書一、覺二佛學之非ヲ道、則逃焉歸二於儒一矣、今三十而未レ能レ立、深

悔吾之不早辨、又懼人之可終惑、故此篇之述、不得已也、或曰、異端之學、亦不攻之、安知彼之非道、而致闢之之功、然則冠首之章、與名篇之意、毋乃相礙乎、又洞規以下數章、非闢異之說而述之何也、曰、竊有意焉、蓋道者、綱常而已矣、彼既廢之、則其學之非道、可不攻而知矣、但綱常道昧而人不知所以不可廢之、世之所謂儒者、形體識趣、不異乎親鸞之徒、務記覽而寄于聖賢博學之言、爲詞章而託于詩書載道之文、是以綱常之道遂不明、而不化于佛氏之敎者未之有也、故取夫子之言冠首、以使人先知攻之之爲害也、洞規以下數章、所以明綱常也、苟能守夫子之言、而通一篇之說、則知廢綱常之非道、而闢之之功可坐致也、曰、夫子之時、佛氏未出于中國矣、而知子之言、則所謂異端、似指佛氏也、曰、固哉言也、以昔時夫子之言、爲今日學者之戒、尙何怪哉、抑以不出于夫子之時、以爲不可以異端闢之乎、朱子曰、異端之害道、如釋氏者極矣、然則使彼出于夫子之時、則豈免春秋之誅哉、如近世蠻學天主之敎、春秋之所必誅也、亦以不出于夫子之時、以爲不可以異端誅之而可哉、國法若不禁而誅之、儒者必可辭以闢焉者也、曰、智顗記佛之言曰、我遣三聖、化彼眞丹、列禦寇記孔子之言曰、西方有聖者、史記世家曰、孔子問禮老子、二氏之徒引此、以謂孔子吾師之弟子、盍述闢之之說、曰、此皆不足道而闢也、智顗之記、劉謐護佛者、猶頗知其誕、況他人乎、列氏之記、黄氏日抄、方氏千一錄之中、論之詳矣、問禮之事、張子朱子有說焉、王氏詹氏有論焉、參考而知之哉、丁亥之春、闇齋山崎柯述

書周子書後

周子之書、朱子所集次、余未見之、度氏濂溪集、謝氏濂溪誌、徐氏周子全書、皆非其舊矣、爰不自量、參攷編次、以俟異日得原本云、正保丁亥五月四日、山崎嘉跋、

白鹿洞學規集註序

晦庵朱夫子、挺命世之才、承伊洛之統、繼往聖小學之敎、明大學之道、又設此規、以開來學、而乃姦言所阸、不得大敷於當時、時則陸氏頓悟之

學、陳氏事功之說、競起、儒佛王霸、混雜爲レ一、夫子力闢レ之傳レ不レ至レ惑ニ天下後世一、於戲夫子之德之盛、功之大、固不レ待ニ後生小子之贅一、竊獨惟念、小大之教、皆所ニ以明ニ人倫一也、小學立教、教ニ明倫一也、敬身、明倫之要也、大學格致、則因ニ小學已知者一而窮ニ極之一也、誠正修、則因ニ已行者一而惇ニ篤之一也、齊治平、則擧レ此而錯レ之耳、此規五倫爲レ教而學レ之之序、實與ニ大學一相發、其學問思辨四者、格物致知之事也、篤行之事、先列ニ修身一、則所レ謂自ニ天子一以至ニ於庶人一、壹是皆以レ脩レ身爲レ本者、誠意正心在ニ其中一、處レ事接レ物之要、齊家治國平天下之事也、夫規之明備如レ此、宜下與ニ小大之書一並行上、然隱ニ於夫子文集之中一、知者鮮矣、嘉嘗表出、揭ニ諸齋一、潛レ心玩索焉、近看ニ李退溪自省錄一、論レ之詳矣、得ニ是論一反ニ復之一、有下以知中此規之所ニ以爲レ規者上、然後集ニ先儒之說一、註ニ逐條之下一、與ニ同志一講ニ習之一、且嘆、我　國小大之書、家傳人誦、而能明レ之者、蓋未レ聞ニ其人一、是世遠地去之由乎、雖レ然若ニ退溪一、生ニ於朝鮮數百載之後一、而無レ異ニ於洞遊面命一、則我亦可ニ感發而興起一云、慶安三年庚寅冬十二月九日戊午、洛陽闇齋山崎嘉序、

大家商量集序

心者、無極之眞、二五之精、妙合而凝者也、故居レ敬以窮ニ其理一、持レ志以養ニ其氣一、則我之不レ動レ心、亦可ニ以如ニ孟子一矣、孟子之後、周程張子、繼ニ其學之絕一、而朱先生得ニ其傳一、以曉ニ天下一、時陸氏自謂レ求ニ放心一、而不レ事ニ學問一、先生雖ニ爲レ此辯論一、然不レ顧ニ已言一、不レ察ニ人言一、而終ニ于告子之見一、可レ惜耳、予嘗抄ニ先生之言一、編爲ニ兩卷一、上卷發ニ學問之道一、下卷明ニ道體之極一、名曰ニ大家商量集一、以使ニ後生不レ惑ニ朱陸之是非一、仲春望日、山崎嘉序、

敬齋箴序

人之一身、五倫備焉、而主ニ乎身一者心也、是故心敬、則一身修而五倫明矣、程子曰、主一之謂レ敬、無適之謂レ一、此合ニ動靜表裏一言レ之、朱子此箴凡十章、自ニ首章一至ニ第六章一、言ニ持敬之目一、次一章、結ニ前六章一、其曰レ從レ事者、必有レ事焉之意、能如レ是、則動靜無レ違、表裏交正、何身之不レ修、倫之不レ明之有、次二章、言ニ不敬之害一、夫須臾之間、毫釐之差、豈可レ忽哉、苟忽則一身無レ主、而爲レ君不レ足レ爲ニ臣綱一、爲

レ父不レ足レ爲二子綱一、爲レ夫不レ足レ爲二妻綱一、且臣弑二其君一、子弑二其父一、佛氏一切殄二滅五倫一、非二一朝一夕之故一、其所二由來一者漸矣、末章總結二一篇一、嗚呼丁寧訓戒、至爲二親切一、願レ治之君、志レ學之士、所レ當二拳拳服膺而弗レ失也、明曆改元夏四月十三日、山崎嘉跋義序

同跋

予敎三二三子讀二敬齋箴一、而蒐下輯朱先生以下數儒之言及二于此一者上、分註附錄以與レ之矣、夫持敬之方、誠如三先生跋二主一箴一、然尙妄爲レ之者、亦欲下反二復往三來于其中一、有中心熟之功上也、小子思レ之、若夫草廬之爲二陸學一也、前輩定論既是云云、小子勿下以二其言一輒信中其人上、辛卯冬至日　敬義跋、

孝經外傳序

孝經一書、秦火之後、隸書今文、出二於漢之顏氏一、凡十八章、而鄭玄爲二之註一、科斗古文、武帝時得二於孔壁一、凡二十二章、而孔安國爲二之傳一、唐宋元明諸儒、論二古今文一、紛紛不レ一、嘗考二二文之異一、詞語少不レ同、而意義初無二遠者一、唯閨門章、古文有焉、今文無焉、此其關繫不レ輕、唐開元勅議、司馬貞淺學阿レ世、妄黜二閨門章一、卒致二天寶之亂一、是故晦翁朱先生據二古文一刋二其誤一、分二定經傳一、閨門章特釋レ之、竊謂小學所レ載經文、其擇最精、熟讀レ之、與二大學經一同一規模、實聖人之微言也、夫　本朝之古、　孝靈御宇、秦政贈二經書一、譽田御宇、百濟獻二博士一、　文武大寶之元、始行二釋奠之禮一、自來以二易書詩禮孝經論語一、輪轉爲二釋奠之講書一、風降俗衰、釋奠之禮廢、輪轉之講熄、而先秦之經、無レ見二于後世一、且鄭註孔傳、亡二于華夏一尙矣、元人志曰、日本僧奝然以二鄭註一來、今也二本流二落人間一、但未レ知二其眞贋一也、抑晦翁八歲讀二此書一、題二八字一曰、若不レ如レ此、便不レ成レ人、嗚呼天性之感、至矣、深矣、由レ是觀レ之、不レ讀二此書一者、非レ人也、讀而若二晉安昌王、隋之蘇威一、則可レ謂下不二曾讀一者上、惜乎此書、非二曾氏門人之舊一、是以晦翁僅爲二誤刋一、而不レ及二訓解一、欲三別爲二外傳一而亦未レ成、刋誤之後、雖三諸家多二訓解一、恐未レ有レ發二揮微言一也、爰忘二予固陋一、表二出小學所レ載、而掇二取他書之言一、爲二外傳十章一、以述二晦翁之意一云、明曆二年八月朔日、後學山崎嘉序

感興詩考註序

詩權輿于虞庭、而隆於周世、孔子列之五經、其雅言、誦之居多、曾思孟氏之後、其教亡焉、一變爲離騷、再變爲五言、五言起於漢蘇武、李陵、夫陵也降虜、武也持節、則言之巧相似、而心之趣頗殊、晋陶淵明、唐之李杜、皆能作五言、而超漢人、伴楚客、趕風雅之變者也、晩唐作者不足算矣至宋、程氏明道夫子、蓋得孔門吟咏之遺法、朱子依其法、輯詩傳、而此篇者、體爲五言、實續周詩、固非子昂感遇之所髣髴也、朱子沒後、未有繼作者、獨明之方遜志齋、其殆庶幾乎、惜哉命之不幸、莫見其成也、抑我倭歌之與詩、言雖異而情則同、濫觴于神代、而盛於　皇朝、逮中葉大津皇子、始作詩賦、然後詩歌並行、世不乏人、但歌也、失神代之風、詩也、非周世之音、菅公之才猶悅其製似香山、矧其他乎、數百年來、朱書斯渡、人人讀詩傳、而不得其旨、此篇、則不惟無讀之、知其名者亦尠矣、予竊三復之、有年于茲、遂輙考諸家之註、抄訓詁、出事證、以俟後之君子折衷云、明暦二年十二月九日、山崎嘉序、

堯暦序

邵堯夫論河圖云、圓者星也、暦紀之數、其肇於此乎、然則雖暦起于黃帝、而所自來抑遠矣、其見於經、則堯之王天下也、克明俊德、命羲和、正暦象、敬授人時、陰陽燮、天下平、及年老禪舜也、乃言曰、天之暦數在爾躬、舜亦以命禹、由是觀之、治暦明時。王者之重事也、按天開於子、故斗柄初昏、建子之月爲天正、今之十一月也、地闢於丑、故建丑爲地正、今之十二月也、人生於寅、故建寅爲人正、今之正月也、三正之云尚矣、夏后氏用人正爲歲首、湯武革命、商用地正、周用天正、夫歲首不曰一月、而曰正月、蓋取王者居其正也、秦用十月、則無謂之甚、自秦而下、古暦之法泯焉、漢武帝時、始造太初暦、復行夏之時、歷茲已往、暦法屢改、若唐之大衍宣明、當時以爲精密、然皆出於安排、而遂多舛矣、我國武鸕尊以前、歲時之記、不可得而詳、神武天皇以來、用寅月爲歲首、與孔子所取、不約而合矣、唐人美我、而稱正朔本乎夏時矣、崇神天皇、以遠荒之人猶不受正朔、遣將軍平之、則是夏王甘誓之舉也、孝靈御宇、徐福斯渡、是時未火于

秦一、意者古曆可二携來一、惜哉不レ傳二于世一、譽田御宇、徵二王仁於百濟一、太子師レ之、習二諸典籍一、然蔑二曆學之聞一、厥後　欽明推古之時、雖レ曰三百濟貢二曆本一、亦不レ知二何等書一也、持統四年、有　レ勅始用二元嘉曆一、次用二儀鳳曆一、聖武帝天平七年、入唐留學生上道朝臣眞備、獻二大衍曆一、廢帝天平寶字七年、停二儀鳳曆一、行二大衍曆一、光仁帝寶龜十一年、遣唐使羽栗巨翼獻二五紀曆一、而未二專用一レ之、淸和帝貞觀元年、渤海貢二宣明曆一、三年始頒レ之、至レ今行レ之、疇人歷歷焉、但稽二古之曆一者、未二之有一也、明曆四年之春、柯遊二于武江一、於二井上河太守家一、閱二其所レ謂堯曆一卷一、一據二朱子所一レ考、以成レ之、朱子嘗謂、古人曆法疎闊而憃少、此一卷、其庶幾乎、於レ玆乎序、

朱子社倉法序

井田之法、張子詳議レ之、欲レ驗二諸一鄕一、未レ就而卒、朱子之時、將レ行乃寢矣、朱子嘗言、程先生初年屢說レ須二要井田封建一、到二晚年一又說レ難レ行、想是它經二歷世故一之多、見二得事勢不一レ可レ行、然今不レ察二地勢懸隔、時宜頓殊一、而曰二徑行一レ之者遠矣、夫古者什一、今者什四、古之兵出二于農一、故什一而用足矣、後來兵農別焉、則其什四、視二古之什一一、不レ爲二二三多一矣、僅一二之間耳、故能考二古法之意一、而得二時措之宜一、則何難之有、孔子曰、其人存則其政擧、其人亡則其政息、若二漢之常平、隋唐之義倉一、則近古之良法、而民不レ被二其澤一者、何哉、人亡而政息也、朱子本二于隋唐一、制二社倉法一、其法惠而不レ費、所レ施之處、雖レ遇二凶年一、民不レ缺レ食、人存而政擧者如レ此、惜乎不レ得レ行二此於天下一也、本朝　文武帝之置二義倉一也、淡路帝之敷二常平一也、當時得レ人焉爾乎、蓋蔑レ聞二於後世一矣、予竊欲レ廣二朱子之遺法一、謄二寫通鑑之所一レ筆、蒐二輯朱子之所一レ記、而冠二朱子眞於其首一、以行二于世一云、山崎嘉序、

同跋

嘉按、安濟坊、崇寧元年置焉、養濟院、紹興二年置焉、所三以愍二無告一也、漏澤園、崇寧三年置焉、所三以恤二其死一也、明之太祖立二孤老院一、名改二養濟院一、其設二義塚一、蓋亦倣二漏澤園一耳、本朝施藥悲田、二院之舊事、可レ法二於後代一者也、

書二遠遊紀行後一

明曆四年之春、嘉遊二于東武一、萬治改元之秋、歸二于

西京一、紀行詩、總計百三十六篇、志之所レ之、口言筆書者也、昔晦翁東歸、亂藁之存、以謂レ未レ可二爲レ無レ益而略レ之、今我之志之不レ正、言之不レ巧、奚以足レ存焉、子曰、父母在不二遠遊一、不肖有レ愧二於此一、故集二往來之篇一、題曰二遠遊紀行一、以自省云、戊戌之歳也、

書二再遊紀行大吟一篇後一

萬治己亥季春、嘉再遊二于東武一、乃作二大吟一篇一矣、如レ此閑言語、換レ韻而道出、則或無レ知レ所レ止焉、故用二怩字韻一、得二三百十韻一云、

武銘考註序

易乾之六畫皆奇、敬之所二以實一也、坤之六畫皆偶、敬之所二以虛一也、奇偶之象雖レ殊、敬之意則一也矣、天地設レ位、而易行二乎其中一、只是敬也、不二其然一乎、放勳之欽、重華之恭、文命之祗、是書第一義、皆敬之謂也、禮者、敬之文也、樂者、敬之和也、詩之思無レ邪、自レ敬入焉、所レ謂聖敬日躋者、稱二成湯之德一也、夫湯學二於伊尹一、莫下時莫中處不乙致二其敬一而然甲矣、傳所レ引盤銘、蓋諸銘之其一也、惜乎不二盡傳一焉、武王斯銘、則聞二湯之風一而興起者、亦無レ他、敬之術而已矣、其所三以反レ之而至二於聖一、正得二于斯一矣、是乃敬也者、聖聖相傳之心法、皇犧初示二其意一、而其言出二於黄帝一、然微三師尚父之傳二丹書一、則誰得而知レ此哉、孔子贊レ易、以二敬義一、釋二坤之六二一、蓋本二于此一矣、其修二春秋一也、筆削之間、謹嚴之敬、誠萬世之常法也、獨夫受謂二敬不レ足レ行、自絕二于天一、結二怨于民一、武王一戎衣、天下大定、是武王之所二以爲レ武也、然則斯銘也、後世王者所レ可二必書以自戒一也、萬治三年庚子正月十四日庚午、山崎嘉序、

大和小學序

世の人のたはふれ、往てかへる道しらずなりぬるは、源氏伊勢物語あればにや、げんじは男女のいましめに、つくれりといふ、たはふれて、いましめんとや、いとあやし、淸原宣賢が伊勢物語は、好色のことをしるせれど、禮をふくむものあり、義をふくむものあり、孔孟業平、地をかへばみなしからんといふ、かゝるひがこと、よしあしいはんも口おし、つちのえいぬのとし、あづまにあそび、藤のなにがしのもとにて、かの物語をそしりければ、うれしくもいひつと、ほゝゑみて、小學こそ人のさまなれば、

男のみならはんかは、されどまなしらぬ女は、よみがたかるべし、そのさまを、かなにやはらげよとて、しゐられける、筆のちからもなく、ふくろに、ひとまきをも、たづさへねど、いさゝか、立敎明倫敬身の目をたてゝ、やまと、こま、もろこしの事を、おもひ出るにませかて、書付侍る、

洪範全書序

河出レ圖洛出レ書、伏羲則レ圖作レ易、大禹則レ書叙レ範伏羲之易、更二三聖一而其說備矣、大禹之範、其數不レ傳焉、朱子探二圖書之原一、別二四聖之易一、然後易道明二于天下一、當時門人與二於此一者、獨蔡西山耳、西山之子九峯、受二師父之託一、以著二皇極內篇一矣、竊謂二索之一、範數之相對而爲レ十也、猶二易卦之相對而奇偶齊一也、其行圖、猶二橫圖一也、左轉一周、則爲二圓圖一、也、九截重レ之、則爲二方圖一也、其八十一章、猶二六十四卦一、六千五百六十一而數之周、猶二四千九十六而象之備一也、其卜筮之法、易以レ四揲レ之、三變成レ象、範以レ三揲レ之、兩揲成レ數、象數奇偶、相因爲レ用者然也、其十二木以レ四約レ之、爲レ一者三、則亦奇偶相因也、虛二其一一則亦太極也、用二其二一、則亦兩儀也、然而占レ之之易、同二乎灼レ龜之不一レ費レ手也、嗚呼若二九峰一、則窮レ神知レ化、繼レ志述レ事者、眞西山稱下與二三聖之易一同上功、豈不レ信哉、遂因二性理大全所一レ乘、以加二質正一、定爲二上中下三卷一、而冠二洛書於洪範一、以爲二首卷一、取二周易全書所一レ載、以爲二末卷一、且以三嘉所二考述一、錄二于其後一、凡六卷、題曰二洪範全書一矣、斯道也、朝鮮之所レ宜レ傳、而李退溪嘆レ失二其傳一也、我倭開國之古、伊弉諾尊伊弉冊尊、奉二天神卜合之敎一、順二陰陽之理一、正二彝倫之始一、蓋宇宙唯一理、則神聖之生、雖二日出處日沒處之異一、然其道自有二妙契者一存焉、是我人所レ當二敬以致一レ思也、寬文丁未重九日、山崎嘉敬義序、

仁說問答序

玉山講義云、孔門說二仁字一、則是列聖相傳到レ此、方漸次說二親切處一爾、夫子所三以賢二於堯舜一、於レ此亦可レ見二其一端一也、然則宗二孔子一者、可レ不レ知レ求レ仁哉、蓋求レ之也、先理二會其名義一、體二認其意味一、然後致二敬恕之功一、用二克復之力一、則其庶二乎得一レ之矣、此乃朱先生敎二人求一レ仁之意也、竊嘗合下先生之仁說並圖及與二南軒東萊一論レ此者上、以爲二一卷一、題號二仁說

問答一、誠能從ニ事於論孟之間一、而熟ニ復于是卷之中一、則自有ニ仁之意思滋味親切處一、子曰、仁遠乎哉、我欲ㇾ仁斯仁至矣、嗚呼旨哉、寛文戊申仲夏上浣、山崎嘉序、

二程治敎錄序

人之有ㇾ道也、飽食暖衣逸居而無ㇾ敎、則近ニ於禽獸一、聖人有ㇾ憂ㇾ之、敎以ニ人倫一、此堯舜爲ニ億兆之君師一、治而敎ㇾ之者也、三代之明王、莫ㇾ不ニ皆然一矣、周之衰也、君師之職廢焉、治非ニ其治一矣、敎非ニ其敎一矣、時則有ニ孔子在一、而不ㇾ獲ニ其位一、嘗適ㇾ衛曰、庶矣哉、冉有曰何加、曰富、曰又何加、曰敎、是欲ニ治而敎ㇾ之者也、孟子傳ニ孔子之道一、而告ニ人牧一、則必以ニ帝王治敎之法一、逮ニ其沒一、而其傳泯焉、漢唐之間、若ニ明帝一、若ニ太宗一、雖ㇾ有ニ治之功一、雖ㇾ有ニ敎之迹一、而不ㇾ髣ニ髴乎堯舜之世一也、如ニ董子一、則知ニ道之出ㇾ天、而猶未ㇾ眞也、如ニ韓子一、則見ニ性之有ㇾ五、而猶未ㇾ實也、故其言ㇾ治也、言ㇾ敎也、大義雖ㇾ立、而精意未ㇾ盡矣、至ニ于宋一、程夫子兄弟者出、而續ニ夫千載不傳之緒一、開ニ治道一焉、明ニ敎術一焉、當時用ㇾ之、則堯ニ舜其君民一也必矣、惜哉託ニ空言一而無ㇾ所ㇾ施也、然後之君子有下賴ニ其言一而得中其心上、則亦萬世之幸也、會城太守左中將源正之、讀ㇾ書好ㇾ學、專攻ニ小學四書一、有ㇾ年ニ于茲一矣、頃閱ニ二程全書一、輯下其關ニ於治敎一者上、爲ニ上下兩卷一、名曰ニ二程治敎錄一、而屬ㇾ嘉爲ニ之序一、蓋聞ㇾ之也、夏商周所ㇾ因之禮、所ニ損益一之義、則古今人心之固有、而先聖後聖之一揆者、能深知ㇾ此、然後可ニ以言ニ治敎一、苟非ニ其人一、道不ニ虛行一矣、抑我神代之古也、猶ニ三皇之世一也、神武之皇圖也、猶ニ唐堯之放勳一也、此則是書開卷之寓意、良有ㇾ以矣乎、終卷之編次、亦非ニ偶然一、皆有ㇾ意而存焉、讀者宜ㇾ致ニ其詳一也、寛文戊申季夏望日、山崎嘉序、

同跋

伯淳曰、異日尊ニ師道一者、吾弟也、成ニ人材一、則予不ㇾ得ㇾ讓焉、此以ニ其德之異一也、正叔曰、我昔狀ニ明道先生之行一、異時欲ㇾ知ㇾ我者、求ニ之於此文一可也、此以ニ其道之同一也、明道渾然天成、伊川精細平實、正似ニ文王治ㇾ岐、周公制ㇾ禮之不同一、是朱子聞而知ㇾ之、以判ニ斷之一者、亦非ㇾ同ㇾ道、孰能與ニ於此一矣、嗚呼知ㇾ言也其難矣乎、二程全書所ㇾ收粹言之爲ㇾ書、

以其名則宜莫過之者、而其實則徐必達考焉、不精也、嘉閱楊張兩家集、斯書非龜山之所爲、而其序亦非南軒之所作也、朝鮮李退溪亦嘗議之矣、朱子有言、胡明仲文伊川之語而成書、凡五日而畢、世傳、河南夫子書、乃其略也、竊謂、粹言、即此是也歟、楊月湖亦疑以爲明仲之書、然則雖明仲之才、而倉卒之所爲、恐非惟有不寫得言語之氣象、且失其言之眞意、欠其語之餘味者、或有之矣、南軒所謂不應乘快便據目前斷殺者、於是乎驗焉、夫必達校正周程張邵之書、於正蒙則爲之發明、可謂勤矣、然橫渠論文言四德、而以信配貞、蓋有深旨焉、是周程邵子所未發處、必達不措一辭於此、則其識淺矣、徒隨文解義耳、不足謂之發明也、余又讀南州草、彼未上四家之階梯、豈知其言語之意味氣象哉、源太守治敎錄、以易傳經說遺書外書附錄之語爲上卷、文集遺文之言爲下卷、而不取粹言、因書厥後如是矣、若夫中庸解、則朱子所辨、必達既識之、故不復論于此云、季夏既望、山崎嘉跋、

伊洛三子傳心錄序

洙四學絕而伊洛再倡焉、楊中立始從學于明道先生、受中庸之書、後卒業于伊川先生、其志以聖人爲可學而至、自勉敎人、以靜一體驗之法、是乃所聞於兩先生、而其本則從周子來焉、羅仲素聞諸龜山、李愿中聞諸豫章、而皆靜坐養成其德也、至于濂溪之風月照乎延平之氷壺、則灑灑落落、瑩徹無瑕矣、若夫靜坐之似禪定、則朱晦翁嘗明辨之也、彼口耳之徒、偏執其救蔽責備之言、而不問三子之所以爲三子矣、夫三子志學立心之固、從師求道之切、後世學者之所不及、而其相傳指訣、則漢唐諸子之所不曾知也、苟非眞用居敬窮理之力、實見大本未發之中者、孰能識三子之度越諸子矣、嗟乎晦翁說夢之譏、吾曹當自省以喚醒焉、豈徒爲諸子之事而已哉、源太守反復程書之餘、看詳三氏之書抄錄之、葉爲三卷、名曰伊洛三子傳心錄、嘉讀之、竊有感焉、於斯乎序、寬文己酉三月朔旦、山崎敬義、

同跋

心之爲言、出於虞庭、而列聖傳授之法、子思著諸中庸、所謂喜怒哀樂者、皆心之用、而未發之中、

則心之體也　中レ節之和、則用之行而不レ失二其體一者也、孟子傳二此心法一、以著二七篇一、所レ謂執レ中聖時者、君子之中庸也、四根之性者、未發之中也、四端之情者、中レ節之和也、千變萬化、只說レ從二心上一來、及二其沒一、而其傳絕焉、唐之李翺、雖下尊二中庸一作中復性書上、然其滅レ情之云、釋氏之中庸、而非二孔氏之中庸一矣、宋之周濂溪繼二絕學一、著二圖書一、其曰三主靜立二人極一、則戒懼之謂也、其曰二無レ欲靜虛動直一、則致二中和一之謂也、二程受二學濂溪一、而遂爲二諸儒倡一、明道敎二人靜坐一、伊川每レ見二人靜坐一、便嘆二其善學一、繇レ是觀レ之、若二楊羅李三子一、則可レ謂二善學務レ本之君子一矣、今儒者自謂レ學二周程一而未三嘗用二一日靜坐之力一、甚者謗二靜坐一、以爲二異端一、學之不レ講可レ憂也、源太守傳心錄、正爲レ此而編也、藤子默尤重レ之愛レ之、手寫レ之、以示二于余一、且請三一言以題二厥後一、予開而覽レ之、筆墨之溫潤、字畫之楷正、固非三躁急忙迫者所二得而爲一也、古人云、書心畫也、心畫形、君子小人見矣、可レ不レ愼乎哉、孟秋念日、山崎敬義跋、

垂加文集中之二終

垂加文集卷之五目錄

卷之五目錄終

垂加文集中之三

蒙養啓發集序

子程子得二不傳之學於遺經一、拈二出敬字一、以補二小學之闕一、明二大學之道一矣、朱先生接二其傳一、而著二小學之書一、解二大學之書一矣、夫聖人之敎、有二小大之序一、而一以貫レ之者敬也、小學之敬身、大學之敬止、可二以見一焉、蓋小大之敎、皆所三以明二五倫一、而五倫則具二於一身一、是故小學以二敬身一爲レ要、大學以二修身一爲レ本、君子脩レ己以レ敬、而止二於親義別序信一、則天下之能事畢矣。是先生平日答問說著丁寧親切之訓也、嘉竊抄二謄其言一、繕二寫其語一、爲二蒙養啓發之二集一、以助二學者之講習一云爾、寛文九年夏五月四日、山崎嘉敬義序、

小學蒙養集序

易曰、蒙以養レ正、聖功也、書之名、其取二諸此一、蓋聖誠而已矣、幼子常視レ毋レ誑、則是養之正、作レ聖之功也、聖沒敎廢、蒙養不レ正、衰世之間、若二孟母一、若二程母一、乃能得二養レ子之道一、夫聖罔レ念作レ狂、狂克念作レ聖、雖二孟子程子之質一、非二養之正學之力一、豈充二亞聖之才一、而當二名世之任一哉、子曰、十室之邑、必有二忠信如レ丘者一焉、不レ如二丘之好レ學也、童蒙其念レ茲矣、五月四日、山崎嘉序、

大學啓發集序

論語曰、不レ憤不レ啓、不レ悱不レ發、書之名、其取二諸此一、昔謝上蔡學二於程門一、有二理會不レ透、泚二于顙一、明道稱二其憤悱一、嗚呼斯人其難矣乎、是故明道謂二張橫渠一曰、道之不レ明久矣、人善二其所レ習、自謂二至足一、必欲レ待二憤悱一、則師資勢隔、而道或幾二乎熄一矣、且當下隨二其資一而誘上レ之、橫渠初祕二其學一、不三多爲レ人講レ之、用二明道此言一、然後關中學者、與二洛人一並焉、朱門憤悱者幾人、而先生啓二發之一若レ是、蓋亦不レ得レ已之盛心也、五月四日、山崎嘉序、

跋二蒙養啓發集一

伊川先生言、學者須二是深思一レ之、思レ之不レ得、然後爲レ他說便好、此論語憤悱啓發之義也、又云、初學者須二是且爲レ他說一、不レ然非二獨他不一レ曉、亦止二人好レ問之心一也、此學記幼者聽而弗レ問之意也、古者學校之敎、大小之節、所二以分一之法、正如レ此因、書二之蒙養

啓發二集之後一、五月四日、山崎嘉記、

近思錄序

晦庵朱先生曰、近思錄看好、四子六經之階梯、近思錄四子之階梯、信哉是言也、孟子沒而聖學不レ傳者、其無二此階梯一也、夫學之道、在二致知力行之二一、而存養則貫二其二一者也、漢唐之間、非レ無二知者一也、非レ無二行者一也、但未三嘗聞二存養之道一、則其所レ知之分域、所レ行之氣象、終非二聖人之徒一矣、至二于宋一、濂溪周子繼二往聖一而開二來學一、其所レ謂無極而太極、則啓二大易之祕一、而發二中庸之妙一也、誠能有レ得二於斯一、則四子六經、可二不レ治而明一矣、然此豈若二異端頓悟之所一レ得哉、先生敎下伯恭倣二數語一載中於後上、正爲レ此也、竊謂一二高卑一合二遠近一者、聖人之道也、升レ高自レ卑、行レ遠自レ近者、聖人之敎也、或馳二於高遠一、或滯二於卑近一、則皆非レ道、非レ敎也、先生此編、以二近思之名一、而極二高妙之言一、小學大學工夫悉備焉、實學者入レ道之階梯、不レ可レ不二看好一也、當時鄭絅間之略レ之、略而不レ切、故先生且隨答レ之而已、後來陳潛室答二人問一之也、問者雜而不レ切、其答亦非二達者語一也、雖三何北山著二發揮一、恐微言未レ析也、葉仲圭爲二集解一、楊伯嵒爲二衍註一、皆未レ能二深有レ所二發明一、汪器之議レ之是也、戴亭之補註、抑貫之廣輯、皆葉解之亞流也、周公恕亂二成書一、爲二分類一、張元禎、陳文燿雷同而補二成之一、其犯二不韙之罪一耳、抑此編之後、劉子澄取二程門諸子之說一、編爲二續錄一、先生以謂、諸子終不レ及二程子一、接二續其意思一不レ得矣、其後蔡覺軒以二先生之書一、編爲二續錄一、採二張氏呂氏之書一、爲二之別錄一、嘉嘗閱レ之、不レ滿二于心一、聊試論レ之、夫先生經解之外、說二天人之道一、莫レ詳二於元亨利貞太極之二說一、然選二乎太極說一、而遺二元亨利貞說一何耶、仁愛之有レ味、智藏之無レ迹、先生丁寧開二示之一、其全收二仁說一、則愛之親切、足二以味一レ之乎、其截二取四性之論一、雖レ有二冬藏之言一、而不レ聞二其說之詳一、則無レ迹之微意、孰得而識レ之哉、玉山講義、發二揮四子一、旁通レ情也、此爲二學者用一レ力而講レ之、尤宜レ依下先生編二入好學論一之例上矣、敬齋箴、是存養之要也、白鹿洞揭示、則敎學之法、而大學以來之規也、答二吳晦叔一知行書、則大學之蘊、而傳者之所レ未レ發也、皆不レ載レ之、其他可レ惜者猶多、今不二盡論一レ之也、別錄之編不レ取二南軒主一箴一、不レ舉二東來大事記一、其亦遺恨也、蓋有二周程

張子一、而微二先生一、則此書之編不レ可レ成矣、先生以後、更無二先生一、則註解之眼、續編之手、果望二於誰一哉、寛文十年夏五月九日、山崎嘉敬義序、

中和集說序

薛敬軒曰、中庸序所レ謂要領天命之性也、一書之理不レ外レ是、亦可レ謂下知二要領一者上矣、夫天命之性、合二體用動靜一而言、未發之中、其體之靜也、中レ節之和、其用之動也、斯義至精至密、朱先生猶不惑年然後得レ之、遂定二章句一爲二輯略一、作二或問一、又特著二首章說一、以二克己復禮一、論二修レ道之敎一、於レ是乎竊有レ感焉、夫天命之性具二于人心一、故存レ心養レ性、所二以事一レ天、而存養之要無レ他、敬而已矣、易曰洊雷震、君子以恐懼修省、蓋天之四德五行、爲二人之五臟五性一、心火德而亨、雷鳴レ夏、禮屬レ心、孟子云、恭敬之心禮也、天人妙合之理如レ此、位育之功、其在二於敬一、不二亦宜一乎、周子以レ中爲レ禮爲レ和・程子論二中和一、必以レ敬爲レ言、先生常擧レ此示レ人者、其指深矣、予嘗讀二中和舊說序一、知二先生所レ見之初終一、惜哉其舊編之不レ傳也、仍爲二此編一、名曰二中和集說一、乃書二所レ感于卷端一云、寛文壬子夏至日、山崎嘉序、

性論明備錄序

合二理與一レ氣、有二性之名一、故聖賢言レ性也、有二以レ理言者一、有二以レ氣言者一、成湯所レ謂恒性者、本然仁義禮智之理也、伊尹所レ謂習性者、氣稟耳目口鼻之欲也、夫子之言三性與二天道一、則本然也、相近相遠之性、兼二氣稟一言レ之也、大學拂二人之性一、謂二氣稟一也、中庸天命之性、指二本然一也、孟子道二性善一、則本然也、君子不レ謂レ性者、氣稟也、周子所レ謂五性性命、本然也、五行之性、剛柔之性、氣稟也、夫本然氣稟之說、程子張子始言レ之、而其論爲二明備一矣、至二明道先生此論一、則前聖賢所レ未レ言處、勇猛攄發、無二復餘蘊一者也、然非二朱先生之說之詳一、孰得而識レ之哉。因爲二此編一、題號二性論明備錄一、亦取二諸程先生之言一云爾、寛文十二年六月七日、山崎敬義序、

程書抄略序

凡人未レ見レ聖、若レ不レ克レ見、既見レ聖、亦不レ克レ由レ聖、孔孟之去就、正以レ此也、是故堯舜然後可レ擧二舜禹一矣、湯文然後可レ用二伊呂一矣、程先生昆弟、實得二孔孟之傳一、然時君非二二帝三王一、則見二其賢一而不レ能レ擧、擧而不レ能レ先、同朝之士、惡二忌伯子一、謗二詆

叔子一、此皆言逆二于心一、不レ求二諸道一之過耳、予嘗謄下出遺書外書之言收二入於小學近思四書解中一之餘上、彙爲二天地人倫爲學三篇一、名曰二程書抄略一、因題二其端一如レ此、延寶改元日、垂加翁山崎嘉序、

朱易衍義序

易經大全、依二古易一、而啓蒙本義爲二之大註一、擇下諸說之足レ發二明經註一者上、爲二之小註一、以二程傳一、收二于性理大全通書之次一則可也。然亂二經文一、雜二傳義一、使二四聖之易混而不レ明矣、夫朱子之後、今易復行、而古易遂亡者、倆二於天台董氏一、而成二於大全者一、實朱子之罪人也、嘉自二壯年一憂レ之、乃復二朱易一、加二倭訓一、令レ鏤二諸梓一、以廣二其傳一焉、學者苟能讀レ此、則知二易本筮之書、四聖之易各別、而程易又別一也、不二甚難一矣、但恐爲二大全所レ汨、而不レ能レ反二其本一、於レ是乎爲二朱易衍義一云、延寶五年正月、垂加翁山崎嘉序、

周書抄略序

中庸孟子之後、周子言レ誠至矣、所レ謂誠無レ爲、此言二其本然一也、靜無而動有、此言三其一二動靜一也、動而未レ形、有無之間者幾也、此與二易幾者動之微、吉凶之先見者一相發、其先見、則有レ動二於中一、不レ可レ謂レ無、然未レ形、則無レ跡二於外一、不レ可レ謂レ有、故謂二之間一、即是動之微、欲レ動而未レ動之間也、元亨、誠之通、利貞、誠之復、亦言三其貫二動靜一、而靜中說レ復、與二邵程一不レ同焉、伊川動上說レ復、而關三靜見二天地之心一者、特指二王弼一而言也、堯夫之說レ復也、猶二濂溪之說一レ幾也、蓋天地之心、誠而已矣、或動上、或靜中、動靜之間、及二其見一レ之一也、若夫荀卿溫公之言レ誠也、皆不レ知二其至一、而語二其次一者也、學者思レ之、延寶七年冬至日、垂加翁山崎嘉序、

朱書抄略序

傳不レ云乎、天有二四時一、春夏秋冬、風雨霜露、無レ非レ敎也、地載二神氣一、神氣風霆、風霆流レ形、庶物露生、無レ非レ敎也、又云、鷹乃學習、又云、未レ有下學レ養レ子而后嫁者上也、然則敎云、學云、天地人物自然之理也、聖人順二性命之理一、建二敎學之法一、始二于皇犧一、成二于帝堯一、備二于周公一矣、孔子脩二六經一、垂二其法於天下萬世一、嘗曰天何言哉、四時行焉、百物生焉、又曰吾無レ隱二乎爾一、吾無下行而不レ與二二三子一者上、是丘也、鄒魯之後、伊洛接二其傳一、至二朱子一、解二孔氏之書一、明二六經之道一、是則述而不レ作者、嘉之所レ願

學也、延寶庚申之秋、垂加翁題、

同跋

敬以直內、義以方外、八箇字、一生用之不窮、朱子豈欺我哉、論語君子脩己以敬者、敬以直內也、脩己以安人、以安百姓者、義以方外也、孟子守身守之本者、敬以直內也、君子之守脩其身而天下平者、義以方外也、大學脩身以上、直內之節目、齊家以下、方外之規模、明命赫然、無有內外、故欲明明德於天下也、中庸九經、脩身也、尊賢也、此直內之事、其餘則方外之事也、誠者非自成己而已也、所以成物也、成己仁也、成物知也、性之德也、合內外之道也、故時措之宜也、夫成己內也、成物外也、是故程子曰、敬以直內、義以方外、合內外之道也、又曰敬義夾持、直上達天德自此、夫八字之用、不窮如此、朱子不我欺矣、山崎嘉敬義記、

跋孟子要略

朱先生年譜、紹熙三年、先生六十三歲、孟子要略成、予嘗尋覓此書、而未得見之也、夫孟子之書、集註明其正意、盡其餘意、則此書、蓋唯本文而已乎、或修入集註乎、抑別爲解說乎、皆不可得而知矣、向閱眞西山集、有序之者、具記編輯之次、乃因其目、塡以本文如斯、而掇先生言及茲者附于厥後、寘眞序於篇端、以俟他日獲原本云、山崎嘉書武江城下、

書行宮便殿奏劄後

聖人復起、必從吾言而不易矣、孟子豈欺我哉、蓋聖人之道、建諸天地而不悖也、故雖聖人既沒、亦能由其敎、而不悖於天地、則百世以俟聖人而不惑者也、宋寧宗朝、朱子奏事行宮便殿、以陳爲學之方、而言聖賢復生所以敎人不過如此、實與孟子同一意、其欲信用之而已矣、因讀此劄、敢書其後、山崎嘉跋、

跋拘幽操

禮曰、天先乎地、君先乎臣、其義一也、坤之六二、敬以直內、大學之至善、臣止於敬、誠有旨哉、泰誓云、予弗順天、厥罪惟鈞、是泰伯文王之所深諱、伯夷叔齊之所敢諫、而孔子所以謂未盡善也、吾嘗讀拘幽操、因程子之說、而知此好文字不可漫觀、既而見朱子以程說爲過、信疑相半、

再考之、朱子更轉語說得文王心出、夫然後天下之爲君臣者定矣、遂附程朱之說于操後云、山崎嘉跋、

跋玉講附錄（代會津中將書）

朱子之言性與天道、布在文集語類之中、乙巳之歲、表章玉山講義、且抄出其可與講義參驗者、名曰玉講附錄、凡上中下三卷、上下兩卷、各分一二三、乃以繕寫、重陽日成焉、

跋朱子訓子帖

道者、天下之公共、而非聖賢之所得私也、然孔門疑伯魚之有異聞者有焉、朱門問敬之之有異聞者有焉、陋矣哉、古者易子而敎之、所以全父子之恩、而亦不失其爲敎也、晦翁令其子從東萊學、嘗謂此也耳矣、其訓子帖一篇、乃爲受之而書焉、爲人父子者之所當讀也、斯帖、朱子續集、所登略矣、居家必用所乘詳矣、予謂必用之所載、蓋得其全者、而非後人之附會也、因參考之、而掇晦翁答東萊書中言及其子者、附于厥後、以貽諸遊學之士、山崎敬義跋、

跋薛文淸策目

右薛文淸策目、五十八道者、蓬萊寗果之所類次也、頃有人携來云、此世之所希見、其可信者乎、予謂嘗觀薛氏門人閻禹錫所編之門類讀書錄、其卷末登之、又閱文淸全集、其第二十八卷載試諸生策一道、即五十八道之第一道也、誠如果言則宜傳之也、遂鋟諸梓、請爲之跋、於是乎書、山崎敬義跋

跋訓蒙詩

右詩九十八首、考之朱先生文集、惟易詩有之、而命以下無有焉、按明正德年間、新安程叔玉載之其所輯晦菴詩集、而無訓蒙之號、叔玉序云、易命太極先天體用居敬人心道心一貫克己感興諸作、皆發明道體之蘊奧、表章孔孟之心法、以及歷代之治亂、如諸指掌、漢唐諸作安得同日語哉、又朝鮮吳祥所跋之本、題號訓蒙絕句、其下曰文公朱先生撰、卷頭無易詩、而有天詩、（其詩、氣體蒼蒼故曰天、其中有物是爲乾、渾然氣理流行際、萬物同根此一源、）有優游厭飫詩、（其詩、謹言妙處費形容、四字如何下得工、大要工夫怕躐急、須敎涵泳在其中、）卷末載觀書有感二詩、（文集所登、程集所乘、但編次不同、）中間九十六首、凡一百首也、斯詩胡敬齋信用之、李退溪誹議之、敬齋所用、未知其孰本、退溪之所議、則

正吳本也、予向依二敬齋一信レ之、後來以謂、退溪議得是矣、更詳レ之、抑先生有レ言曰、嘗疑曲禮衣毋レ撥等是古人教二小兒一語也、程子欲三作レ詩教二童兒一、蓋亦古人之遺意爾、北溪之小學禮詩、則繼二程子之志一、而石堂之學庸論孟毛詩之詩、則訓蒙之體也、頃有下人携二訓蒙詩一來者上、吾爲レ之言レ之、遂書二其後一如レ此云、敬義跋、

書二沖漠無朕說後一

此程子發二明道體之全一、而拆レ之不レ亂、合レ之無レ餘者也、近思錄載レ之而註レ之者、蓋有レ所レ未レ盡焉、嘉竊解レ之如レ右、而抄二出朱先生並門人及讀書、居業、自省、三錄之說一如レ左、讀者可三以參考二云、敬義識、

跋二張書抄略一

孟子之所レ願、則學二孔子一也、及二其沒一而其學絕焉、周程張子據二遺經一、繼二絕學一、然後儒者獲四復聞三聖人可二學而至一也、夫四君子之資、濂溪明道最高、伊川亞レ之、橫渠又其次也、然橫渠之勇、困知勉行、而其成功與二周程一一也、學之爲レ貴、豈不レ信哉、予嘗爲二程書抄略一、尋而取二張氏之書一、亦抄二略之一、仍記二於厥後一云爾、敬義跋、

跋二山北紀行一

右山北紀行、朱晦翁之所レ作也、夫詩之感レ人也、難二乎正一而易二乎流一矣、嗚呼大賢遊覽之興、感慨之心、發二於言一、示二于人一、其性情之正、可三以想見一焉、因三復誦レ之云、滿二茲仁知心一、然後淸宵共二明月一則斯不レ流矣、齋院氏之子、自レ幼讀レ書、頃點二此十二章一來、珍重視レ之、余嘉二其志所一レ之、乃爲二之跋一、且告曰、嘗閱三明人編二周濂溪書一、往往收二此第五章于彼一者誤也、其亦識レ之哉、敬義跋、

書二本朝改元考後一

本朝 元明天皇以前之錢文未レ聞レ之、和銅元年所レ鑄、蓋和同開珍是也、淡路帝所レ鑄、曰二萬年通寶一、曰二太平元寶一、曰二開基勝寶一、仁明帝所レ鑄、曰二長年大寶一、見二國史一矣、拾芥抄載二神功開寶、承和昌寶、饒益神寶、貞觀永寶、寬平大寶、隆平永寶、延喜通寶、乾元大寶一、神功錢、稱德御宇鑄レ之、承和錢、仁明御宇鑄レ之、饒益貞觀二錢、淸和御宇鑄レ之、寬平錢、宇多御宇鑄レ之、隆平延喜二錢、醍醐御宇鑄レ之、乾元錢、村上御宇鑄レ之、三才圖會、小窗別紀載二我錢六文一、和同、萬年、神功、隆平、乾

元、五錢爲二日本國錢一、延喜錢爲二倭國錢一、圖會引二舊譜一曰、日本國錢四品、一和同開珍、二神功開珍、三萬年通寶、四隆平永寶、其國延曆中鑄、又乾元之元作レ文、引二國朝會要一云、大平興國九年、日本國僧奝然等、浮レ海而至云、其國用二銅錢一、文曰二乾文一、我之所レ未レ開也、古錢之流二落於世間一、形弊文滅、完全者尠矣、今行寬永通寶、體質堅厚、輪郭周正、孔顯所レ謂不レ惜レ銅不レ愛レ工者也、通鑑綱目云、開元通寶、輕重大小、最爲二折衷一、吾於二寬永錢一言レ之矣、抑錢之爲レ物、積二於上一則下怨レ之、匱二于上一則下侮レ之、必周二流乎上下一、而上常操二其權一、則爲二天下之通寶一、苟上放二其權一、而使二下得一レ掌レ之、則不三惟施二爭奪之敎一、而實致二禍亂一之淵叢也、漢文帝除二盜鑄錢令一、使レ得二自鑄一、時吳王濞即レ山鑄レ錢、富埒二天子一、卒叛逆而滅二其家一、賜二鄧通銅山一、得二自鑄一レ錢、鄧氏錢布二天下一、而亡二其身一、萬世之監戒也、然唐玄宗、欲下倣二漢文一不上レ禁レ私レ鑄、勅二百僚一、詳二議可否一、劉秩議曰、管子謂、刀布爲二下幣一、先王以守二財物一、以御二人事一而平二天下一、若捨レ之任レ人、則上無二以御一レ下、下無二以事一レ上、夫物賤則傷レ農、錢賤則傷レ賈、故善爲レ國者、觀二物之貴賤、錢之輕重一、夫物重則錢輕、錢重係二乎物多一、多則作レ法、收レ之使レ少、少則重、重則作レ法、布レ之使レ輕、輕重之本、必係二乎是一、奈何而假二之人一、又曰、鑄レ錢不三雜以二鉛鐵一、則無レ利、雜以二鉛鐵一則惡、不レ重レ禁、不レ足二以懲息一、塞二其私鑄之路一、人猶冒レ死以犯レ之、況啓二其源一乎、是設二陷穽一而誘レ之入也、劉氏此議致レ詳者、所レ謂輕重之本、即上所レ操之權也、宋時陝土錢以レ鐵舊矣、有二議更以レ銅者一、已而會所レ鑄、子不レ踰レ母謂レ無レ利也、遂止、程伊川聞レ之曰、此乃國家之大利也、利多費省、私鑄者衆、費多利少、盜鑄者息、民不二敢盜鑄一、則權歸二公上一、非二國家之大計一乎、自レ古論二錢法一者多矣、伊川斯言、實不易之良法也、延寶五年正月望日、

山崎嘉謹識、

嘉按二革命勘文一、蔀首有二法二一焉、一　神武天皇元年、此至當之法也、一黃帝十九年、此無稽之言也、且勘文有下本朝奚取二法異邦一之議上、尤爲二格論一矣、或謂、用二易卦金革之義一、猶之可也、或謂、用二素問三合一爲レ治、此勘文所レ不レ道、而三合不レ限二于辛酉一也、原夫神道土金之傳、五十鈴之敬禮、猿田彥命所レ守所

レ導、而　神武天皇即位、天運妙契、則辛酉宜二宸愼之歳一矣、舊事神武紀曰、天種子命、奏二天神壽詞一、即神世古事類是也、又曰、種子命解二祓天罪國罪一、主レ事也、古語拾遺曰、令三天種子命解二除天罪國罪事一、其事具在二中臣禊詞一、　神武天皇、鎭二坐於王城鬼門、下賀茂宮一、昔賀茂齋院卜二定齋內親王一、親王禊祓大祓、國史歷歷記レ之、六月十二月之晦、齋院大祓之事、見二延喜式一、延喜式六月晦大祓祝詞、載二中臣祓一、良有レ以矣、御手洗川夏越會式、菅貫之輪、自レ南而中而西之儀、土生金金生水之行、乃是五十鈴川之傳、神人守二渾沌之初一者也、

垂加文集中之三終

垂加文集卷之六目錄

卷之六目錄終

垂加文集下之一

元日詩

甲午

東風吹柳綠如綸、黃鳥聲溫更可人、佳興無邊誰是主、
一元通貫四時春、

乙未

朝來春氣臻、天地一時新、卦畫變爲泰、招搖還建寅、
物皆隨本色、名自露天眞、無答勾芒意、居然舊日人、

丙申

孟春候至氣猶未、四望雲烟一覽遙、天欲新人間舊染、
故將靈雨滌三朝、

丁酉

雖從事學問、强仕未能信、順處猶平平、逆時還訰訰、
鄒公心不動、伊伯記彌進、而立吾閑過、自今欲奮振、

戊戌

乾元資始意如何、試點筆端著咏哦、庭鳥日溫歌韻滑、
池魚氷釋活機多、堂前敬處祝親壽、門外禮云謝客過、
坐了春風天地泰、絅懷明道一團和、

己亥

豈止今朝仰令辰、維天之命四時新、請君須按羲圖見、
坤布乾行都是春、

庚子

陽風陽日洛陽陰、一樣春光公古今、造物觀來無盡了、
化工甚處得追尋、雪消遠斷小人迹、草息長存仁者心、
正是履端雖有感、南軒詩後更難吟、

張南軒元日詩、古史書レ元意義存、春秋揭示
更分明、人心天理初無レ欠、正本端原萬善生、

謹次二其韻一、

敬爲三元促嘉會、鷄鳴盥漱待天明、若無利蹠侵心地、
成性存存道義生、

辛丑

椿庭花發八千歲、萱砌草生幾萬春、雙姊同心能致孝、
季男竭力未成仁、讀書看得是非實、愼獨功夫好惡眞、
俯仰乾坤願無愧、人間一樂在吾身、

同旦中原氏寄レ詩來、即和、

晦翁傳聖學、永做道檳梁、吾未窺他室、君須升厥堂、
青松常鬱鬱、翠竹正颺颺、今古一天地、春風播德香、

壬寅

寅年寅月又寅辰、正朔祝來同夏人、珍重相逢皇極世、
洛書點數我身春、

癸卯二首

地所載兮天所幬、眞元萬古浩滔滔、此中新意最難語、
試向東風染兎毫、

乾坤易簡無他事、資始資生只自然、昨立春兮今改歲、
貞元端緒正綿綿、

甲辰二首

木帝乘龍四海春、椿萱獻壽祝佳辰、日新盛德吾何敢、
只願老萊喜二親、

動靜本無端、推移天地間、春來春未立、臘去臘猶殘、
於道吾何似、得時誰是閑、黃鶯應出谷、喬木待綿蠻、

乙巳二首

光陰荏苒逝川波、忽遇新正發感哦、一樹梅花一枝折、
春風不似去年多、

八卦小成又三倍、四十八畫見貞悔、陰陽來往本天照、
消長隨時我莫怠、

丙午

大衍用數四十九、揲來左右逢其原、萬物備我吾如何、
只欲春氷寄心根、

丁未二首

一夜挽回造化權、春風無物不欣然、今朝向鏡自請問、
生面工夫在鬢邊、
大哉四德元、上下貫乾坤、知命年斯至、何時入易門、

戊申

乾元亨利貞、於穆四時行、臘裡春先立、朝來朔告正、
風雲新歲色、松竹萬年聲、庭上鶯啼靜、屋頭雀躍輕、
群兒忘日永、百姓喜時平、自笑懶人事、却曾察物情、
偶然心志發、聊爾口吟成、握管濡毫處、脩辭欲立誠、

又

東方景日升、物物及時興、百歲過其半、萬事一未能、

己酉

天命無今古、人心有知愚、踈慵交世拙、學業與他殊、
十字街頭隱、屛間按馬圖、九衢塵裡住、格上見龜書、
此外我何慮、閑中病亦除、行年五十二、弄筆憶堯夫、

庚戌

仁智交際間、萬化同出自、雖孔朱復生、不過啓此祕、
孔朱ノ生歲次ニ庚戌、

辛亥

靜觀造化密推遷、庭草生生遲日前、應是自家一般意、
晦翁曾賦感春篇、

壬子

馬圖五十五、相對愧生年、禮失目前地、知迷頭上天、
親恩爭得報、子道未能全、萱砌春如夢、見花淚泫然、

癸丑

日日日行西復東、朝來感慨仰蒼穹、三年光景恰如箭、
萱砌春寒每木風、

甲寅

又是東方既白辰、世妝人事一般新、乾坤不老今猶古、
男子永祈椿砌春、

丁巳

天行無始終、庸詎識窮通、律改鶯吟滑、氣和鳶舞豐、
松杉搖日影、楊柳引春風、萬物靜觀處、欲投身此中、

戊午

伯玉化年加一年、坐來無事只漫然、春風氷解三盃酒、
永憶君恩遍海堧、

己未

六合元來唯一中、人間隨處分西東、想應可美葦牙意、
萬物發生神國風、

庚申

春令新行神國颸、夏秋冬在巽方知、流行對待易其爾、
一日三光成四時、

辛酉

潔靜精微易道新、僅爲典要早非眞、朝來俯仰乾坤裡、
六出見花八八人、

壬戌

文會養心身亦安、世間閑事不相干、雪花六出梅花五、
白髮朝來多少般、

遊比叡山四首

清風拂曉促山行、山去皇城三里程、霧鎖路頭人跡罕、
四山呼答郭公聲、杜鵑、倭訓保登等藝須、書之爲霍公爲郭公者、國俗之文字、而非華人之稱呼也、故歌人皆用之矣、詩人用之則絕無而僅有焉、釋蓮禪賦郭公是也、今予所聞郭公者、鵄鷩鳥而非杜鵑也、此鳥自呼其名、似曰鵄鷩、似曰郭公、惟山林有之、而朝市不聞是聲也、

登臨比叡山、風物不慳看、湖面照心目、籟聲洗肺肝、
狗閑坊戶臥、僧閙塔扉還、五七同來輩、團欒興未闌、
吟餘忘世纏、操筆賦詩篇、越嶺濛山北、近湖浮洞前、
海尊坊已舊、辨慶水猶鮮、適去惆悵夢、誰哉爲我圓、
二十年前讀書處、再遊不厭路崔嵬、東臨湖水一明鏡、
北望越山衆皺堆、禽鳥聲中觀活意、松杉陰裏起詩懷、
無涯風景雖堪樂、梵磬惱人歸去來、

與諸友同遊洛西

僧守金胎界、俗迷祕密藏、欲摧他寶鑰、萬世絕欺誑、

仁和寺

聞說嵯峨古跡多、良朋相伴去經過、白雲忽逐白雲寺、
大堰自成大堰河、
隱士眠醒凭柱嘯、漁人釣罷扣舷歌、吟眸處處無涯好、
欲倩鄭虔寫翠峨、嵯峨稱廣丈、

歸程口占

眺望南郊外、吟行北野中、迎出東山月、送來西岳風、

藝文類聚所載、梁之武帝並丘遲硯銘、簡文帝紗扇銘 晉之殷仲湛酒盤銘、三才圖會亦乘之、而無讀法焉、予嘗讀之、遲銘甚優、戲作詩以示其法于鵜飼氏之子、

于順于逆字字爲魁、一句二句四句亦迴、六十四首讀
法乃開、而一幾首相逐出來、

北野二首

丞相威名崇、不惟溢日東、明人賛漉酒、渤使嘆詩工、
一旦西州謫、千年北野宮、好文今孰敢、每木有餘風、
菅廟八方林作圍、中庭瞻拜勢巍巍、靈䖝出櫝斷休咎、
明鏡在臺照姸蚩、使卹倏來階下隱、遊禽頻囀殿前飛、

周旋轉覺塵埃盡、遺愛梅香播客衣、和藤丈八

參宮五首

宮川

宮河霽景舒、吟詠暫躊躇、魚躍水中樂　雁行天上書、
居民携簟席、侍隸振衣裾、茲日是何日、身心致祓除、

太神宮二首

伊勢神風起、山田心柱尊、陰陽爲造化、四德是宗源、
五色絁纒內、厥徽豈易言、八重榊飾外、惟顯亦難論、
儀式古之盛、忌詞今尙存、新參眞意在、拜伏叩頭奔、
右外宮、

五十鈴鳴五瀨聲、到來特覺此心淸、人生底事吟根國、
八咫鏡中日月明、右內宮、

朝熊嶽二首

乘輿乘輿又乘牛、同登談笑是豪遊、風翻白浪東南海、
最覺此身一沫浮、

人言天狗住朝熊、飛石雷奔耳亦聾、借問今辰曷無事、
我儂不是狄梁公、

八幡宮三首

八幡天降應神帝、鎭坐鴿峰護鳳城、往古來今誰不仰、
壇前唱喏兆民聲、

八幡宮在帝城南、時乘春風來拜參、收斂身心無一物、
箇中眞宰與誰談、

經學權輿皇化春、國家仁讓一時新、如今胡鬼蹟神了、
鳩嶺壇前愁殺人、

藤森

親王强識出群倫、端拜廟前感慨頻、渺遠難知神代卷、
心誠求去豈無因、

遊洛東

世事不關自在身、行庖乘輿洛東濱、仰望淸水山頭景、
伏拜祇園宮裡神、天上雲温黃鳥囀、林間日永白櫻嚬、
眼前片片添風色、莫道花飛減却春、

豈惟淸地在雲陽、林木蓁蓁八坂鄉、神座遷來貞觀日、
至今靈氣正洋洋、

神仁明智古今崇、不止簸川舉勇功、五七之言出天賦、
三十一字起倭風、威嚴久守九重外、靈迹長存八坂中、
恰好春園淸淨地、櫻花千本色容濃、

八雲曾立出雲州、夫婦宮成實好逑、應是感神院中事、
遇來二少象如牛、右四首祇園社、此神曰牛頭天王、扁曰感神院、眞有以矣、蓋艮下兌上咸、艮少男、素盞烏尊、兌少女、奇稻田姬、咸感也、夫婦之道也、咸上兩爻、五四三身、二初四足、故詩云爾、

學問無他孝與忠、豈惶地獄願天宮、高才博識知何用、

八坂塔前笑耳聽、右八坂塔

清水洛陽東、山林正鬱蓊、地神宮曷狹、胡鬼殿還豐、
目力窮千里、足音度半空、見花多少客、相競逐春風、
音羽瀑流鳴世間、遊盤忽見玉龍攀、水澆青蘚春猶冷、
風散白櫻雪不寒、岩嶺雲晴千仭綠、京城霞退九重斑、
吟情隨處皆堪賦、往事成空却發嘆、攘獸造邦穴持命、
信僧建寺坂田丸、佛心娘子胡爲者、久假不歸地主山、

右二首清水山、此山神地主權現者、素盞鳴尊之子大己貴命是也、

櫻之倭歌最多、而華人之題詠少ㇾ聞焉、余讀ニ唐于武陵之題、宋王安石之詠一、而知ㇾ非ニ華人不ㇾ愛ニ此花一、但不ㇾ如ニ倭人之專一耳、周茂叔嘗謂、牡丹花之富貴者、予於ㇾ櫻言ㇾ之、因見ニ清水櫻ニ乃賦、

春事不漫漫、遊人頻往還、柳垂依路畔、杉直立林間、
繪馬馬頭殿、泥牛牛尾山、白櫻花富貴、綴玉照欄干、

又

春來無樹不開花、就裏白櫻獨自誇、富貴浮雲君可記、
山風一陣散銀沙、

江府會ニ于加藤氏一、散ニ歩庭上一戲作、

邇近勝庭遠市烟、士峰入望更淸鮮、水精盆耀千年雪、
火浣布晒六月天、泰嶽古來稱孟子、大洋今復憶朱賢、
主人動靜意如奈、執友相期仁知全、

神田明神

靈祠元是逆雄尊、土俗妄傳稱將門、囗賊破家惟此事、
神宮何不解誣冤、

題富士石 是松平加太守家藏也、其形色甚適ニ富士一、故名ㇾ之、誠是奇物也、本出ニ乎洛西清瀧一云、

最愛盆山山色濃、白頭青麓玉玲瓏、此非初雪非殘雪、
特地移來富士峰、

夏日偶成

世俗纒縈習熟中、恰如蛛網掛虛空、若能敬義夾持去、
即是吾家守一翁、

聞鵑有感

蜀魄攪眠聲亦頻、枕頭思得古之人、齊家治國平天下、
道在明倫本敬身、

蓮池

風渡玉蓮池、天香撲鼻來、葉青無異色、花白不曾緇、
遺愛元公說、長吟晦叟詩、眞情竟如奈、今古少人知、

仲秋主靜齋即興 齋小出備前守讀書之所也、

酷憐明月浮庭露、箇箇圓成大極圖、茂叔何人我何者、
只輸他主靜功夫、

同夜讀明道先生月詩、竊有感焉、謹賡其韻、

秋風蕭爽吹、涼露濕衣垂、再見侍周晩、歸來與點時、上天高有桂、下土孰攀枝、懷抱仲尼月、斯人安得羈、

同夜分儒林月三字、得林字、

淸風晴四林、明月上東岑、大地可携蟻、一天巨指參、虹燈昏室內、螢爝熄庭陰、對坐讀書眼、照看千載心、

藤園菊

藤翁養菊一何良、撫愛稱情勿助忘、百種成畦時灌溉、千竿結𥱦日徜徉、鐵冠霜後呈貞節、金蘂風前發淨香、禮義亭中文會好、花神信息入吟腸、（禮義二字榜于亭、故詩及之、）

年年桂綻菊開時、長憶芳樽共一巵、請誦周人和樂句、全勝三難陟岡詩、

是張南軒壽其弟定叟詩也、藤氏每歲菊花開、則倣韋家宗會法、余仍誦此詩、且次其韻、

又是菊花宗會時、千秋和樂入朱巵、希賢事業無他術、爲誦南軒夫子詩、

大德寺

倫理冥冥亂世敎、殿堂赫赫壞民財、惜哉王法不曾糾、却使妙超對坐來、

大源庵菊、其白者名玉牡丹、花樣如牡丹也、其黃者名眞盛、種自越前出也、（眞盛越前之產）戲作二絕、

花之隱逸者惟菊、金利愛來玉牡丹、富貴世間人亦賞、若其靖節兩眉攢、

自淵明有悠然詠、禪客虛稱第一磨、無聖邪兮眞意正、言猶不信問黃花、

秋鶯

居諸代謝四時中、花散葉濃復見紅、忽有金衣公子囀、秋風影裏聽春風、

十月十六日過東福寺

爾老不惟雖少童、諸調宏辨設王公、曾羞犬死笑囮耳、元是人中一蠹蟲、

藤森

十月是純陰、小春甚處尋、天心神不測、此道付藤森、

木幡

可仰正哉尊、天靈在木幡、默祈心感處、聊欲薦蘋蘩、

伏見

話出豐臣智略奇、干戈動處悉平夷、末年只坐三風裏、

城復于隍也不知、

宇治川

由来埋亂自推移、戰勝二度決宇治、河水晝夜往不息、
瀨淵古今幾許知、梶原被誑壽永日、芝田欲欺承久時、
英名曷朽佐々木、相爭先渡爾獲之、

扇芝塲

世間萬事時乘勢、待得斯乘志可伸、千歲堪悲源頼政、
一朝之忿忘其身、

雪夕煮㆑茶、戲作㆓一絕㆒

小室三人容膝安、雲花時點洗心肝、縱然白戰外邊急、
不妨這中一味閑、
師如正叔足尊道、友似游楊堪款談、初學入門休問樂、
苦茶喫後有餘甘、

冬日偶作

梅花未發蕾前易、柹實已成貞下元、萬古所存雖有迹、
上天之載竟無言、

地震

大地震來虩虩時、不由乎我更由誰、平生願學程夫子、
誠敬存心功最奇、

九月、嘉與㆓雙姊㆒從㆓二親㆒參宮、拜㆓新嘗祭㆒、

仍賦一絕

千秋神在祭儀新、時致拜參親子人、正直勅宣吾不貳、
一心階下仰天眞、

題孝經

不孝罪條冠五刑、參乎兢戰踐其形、彼哉剃髮腐儒子、
弗信聖門有此經、

題周子書

無極乾坤祕、有形天地初、向微周茂叔、爭得質圖書、

有感

坐憶天公洗世塵、雨過四望更清新、光風霽月今猶古、
只欠胸中灑落人、

讀近思錄

世遠人亡道統空、維天新命濂溪翁、一心常泰顏淵樂、
大志正任伊尹功、河洛宗誠脩己敬、橫渠先禮律身恭、
六經四子四賢訣、都在近思一帙中、

諸友和予、再咏、

先王樂禮未曾空、六籍集成東魯翁、須識取他參贊意、
要全了我進脩功、威儀有則動時察、誠敬存心居處恭、
軻死千年斯學絕、再興濂洛與關中、
乾坤門裏本非空、啓鑰還他太極翁、最惜堯夫無與講、

更憐程叟有餘功、弟兄受學遂明道、張子同心能致恭、
珍重文公近思錄、四賢妙旨在其中、
豈若異端坐說空、有無合一在濂翁、人材成就伯淳德、
師道尊嚴正叔功、曾惜溫公非此學、最愁邵子失其恭、
只橫渠示訂頑訓、關陝仁風齊洛中、
豈其無極陷於空、伊洛淵源自此翁、風月胸懷人仰德、
圖書心畫孰爭功、體仁程子終身敬、致孝張公俟命恭、
應是孔門傳授意、慇懃收在近思中、
太極流行實不空、莫迷陰晦憾天翁、窮神化在致知力、
變氣質由克己功、父子恩全方正義、君臣道合足過恭、
永言虞夏商周後、濂洛關閩執厥中、
四賢倡道欲成空、天運復生朱晦翁、千古引人經解力、
萬年垂法簡編功、知行次序本倫理、存養工夫主篤恭、
後學休身外尋去、由來仁在近思中、

會津

自是太平客、迢迢到會津、山廻擁四郡、湖靜涵三辰、
千歲鶴城主、萬年龜社神、神人和樂處、日日德風新、

中庸

孔孫心法傳、遠出自虞廷、周殷因而治、魯鄒述以定、
敎衰道寂寥、學絕俗佁僡、雖漢儒隋儒、欲尊聖擬聖、
談天猶未純、憂世却爲佞、唐德亦非仁、魏才爭議政、
有韓郎李郎、著復性原性、欠氣巨闢人、滅情豈配命、
文辭之達論、詩句徒吟詠、可笑柳中庸、何尤董五經、
程公宗此誠、朱子得其正、曾擇服膺來、丁寧示主敬、

題白紙二首、曰月、曰雪、銀河、銀沙、鶴鷗鷺鷥之類、人皆賦焉、戯作二絕、

青赤黑黃一點亡、顏書吳書是尋常、箇中別有眞情在、
闕里言詩得卜商、
中立曾過季魯廬、驀頭把筆早糊塗、陰陽未分知何物、
自是濂溪太極圖、

垂加文集下之一終

垂加文集卷之七目錄

卷之七目錄終

垂加文集下之二

會湖八景詩幷序

豈惟孫綽賦二天台一哉、凡詩歌文人題二山水圖一者、往往然也、不下必親到二其境一而後作上之也、若夫朱紫陽觀下趙祖文畫、天台賦、疑二思幽巖一、朗二詠長川一二一幅上有レ契二于心一、爲二之詩一、聞三人言二石乳洪羊之勝一、不レ及二往遊一、爲二之詩一、不レ登二曲江樓一、而因二張荆州之囑一、記二其風致一、則是大賢神遊之會、志向之趣、雖レ不レ可二得而測度一、其亦類也、戊申之春、余遊二東武一、寓二會城太守源中將第一、一日友人携二會津山水記敬軒瀟湘詩一來云、奚必俟二會陽之遊一、請和二薛詩一、以賦二苗湖八景一、予乃次二其韻一

觀音夜雨

江雨夜來濕、乾坤感此生、薛老瀟湘宿、題詩今尙鳴
會是觀音客、欲和情轉情、

吾妻秋月

吾妻山頭風、暮雲斷復接、忽吐一輪光、入湖天地白、
遙憶洞庭秋、何人鼓素瑟、

平沙落鴈

秋風蘆葉假、秋水涵天平、鴻鴈不忘信、來賓金曲汀、行行行守列、點點點書明、

江天暮雪

朔風吹而寒、斜日沒山霧、漁父漂湖中、樵夫印陸路、翁嶋影婆娑、忽焉跳躍去、

山市晴嵐

快霽磐梯嵐、午天人競出、景光映嶂巒、秀色分黃綠、神化誰其尸、推尋迹叵レ逐、

遠浦歸帆

環浦渡淸風、歸帆揭落照、無心船郎歌、逸興有曲調、悠悠篠山天、莫訝展吟眺、

漁村夕照

淡淡晚村雲、微風吹楊柳、立盡殘照前、漁艇橫浦口、啼鴉閃閃歸、遊人亦希有、

烟寺晚鐘

靜聞烟寺鐘、聲聲傳雲霧、彥明悟天機、持國迷晚路、照破今古情、月光上林樹、

參宮長吟一首短詠三首

常世(トコヨノシキ)重波常世音、淸風淸地勢陽濤、浴終水上見魚躍、步入林中聞鳥吟、松栢參天秋鬱鬱、杉樟垂地晝森森、百王不易日孁(ヒルメ)德、萬物俱生豐受心、鎭座幾經年與月、祭儀惟奉古來今、闔州不介人奔走、自是神明感化深、太神三種授皇孫、我道相傳是本源、萬古俱存御中主、山田原即高天原、

林色陰濃風色陳、山光秋霽景光新、心淸五十鈴河上、便向宮前拜日神、

兩化一神內外宮、光通天地照無窮、宗源妙訣知何處、心柱立來渾沌中、

參宮三絕

渡會川分宮樹林、風流一洗萬人心、想應豐受太神力、日月運天照古今、

神德惟明六合中、人間心黑失西東、最憐常世長鳴鳥、平旦依然天日紅、

理氣疑來一寸心、寸心敬守莫相侵、莫相侵去入神道、神道宗源在土金、

土津廟

龜城與鶴城、五里是行程、橋路馬蹄進、輿旛客眼睛、苗湖光瀲灩、磐嶽勢崢嶸、仁者靜觀處、智人動得亭、風流吟未了、興致畫難成、不格土津廟、爭知親切情、

生日有感

終身有喪思忡忡、哀樂人間總不同、椿砌惜春千歳興、萱堂愛日萬年風、神魂忽散紫雲上、體魄永藏黑谷中、俯仰乾坤何似者、音容髣髴淚痕空、

題箱根石

嘉一日、携二山兒一遊二洛東一、兒獲二之加茂川一、保井春海乍來視レ之曰、恰如二箱根山一、中庸不レ云乎、今夫山一卷石之多、則是箱根茲石之大者、乃以爲二之名一、器而藏レ之、油小路大納言藤原隆貞卿賞レ之、書二厥名字一賜レ之、於レ是乎賦、夫箱根社、天忍穗耳尊、瓊瓊杵尊鎮坐、賀茂上社瓊瓊杵尊鎮坐、下社磐余彥尊、而下上共與二伊勢一同立二齋院一、上稱二別雷皇太神一、下稱二御祖皇太神一良有レ以也、賀茂之號、蓋取二諸　皇孫歌詞一也、歌人所レ謂天降別雷神代者、詠二　天孫棱威道別降臨一云レ爾、不レ知者、徒謂二之造化之雷神一耳、更有二天人唯一之祕訣一矣、

乾坤造化去來尊、國土山川貽子孫、應是神功呈妙手、一拳石上見箱根、

諸友詠二箱根石一、仍亦賦、

石峯擎出白沙盤、文會詩吟興未闌、不借東關千里馬、閑中飽看箱根山、

夷洛惟同千里風、人間各自分西東、見歷盆上箱根石、一線低昂文路通、

鴨河得綠石、山樣水紋濃、昔過箱根路、今看少朶峰、鑑淵開眼目、光影入心胸、世事不關涉、長空一片風、

天和改元日、謹賡二菅丞相韻一、

太平政事絶塵烟、元號正新開四壖、朝市山林誰不祝、天和兩字萬斯年、

題庸軒

居扁曰庸軒、曾無車馬喧、明窻天鑑發、淨地土神存、幽矣西南室、悠哉東北園、屋頭留夕晷、壁角捧朝暾、設宴春風靜、鑿池秋月奔、竹籬生夏冷、茶鼎致冬溫、應節鳥禽囀、長時花木蕃、讀書求益友、建業遺子孫、有志惜年謝、潛心知道尊、平常君若是、卜得一乾坤、

初春之會

幽山黃鳥問春來、好景日新且快哉、四海同文泰平世、已繙窓外指南梅、

仲秋雨有感

多日各期良夜來、無端雲雨不曾披、芝蘭難種蕪難去、

誠意工夫在此時、

霞朝即事

霞朝樣樣萬山瀾、踈懶養成乘興難、洛下徘徊元寶輩、不知何處有袁安、

中秋與二友人一檢二祝氏類聚一、讀二月詩一、

物感吟長明復歌、田園言傲至能詩、却憐翫弄天邊月、胸裏靈光曾不知、

北野

松風北野古祠清、神是本朝第一英、經史點來通漢義、詩歌詠去動人情、生前遭讒左遷命、死後被誣參學名、誣讒豈爲靈德累、分踈聊用亦閑爭、

山崎家譜

曾祖考、姓山崎氏、號二淨榮一、播州人、不レ記二其生卒年月一、歿日十三日也、

妣、慶長十四年己酉秋八月六日、歿二于播州三木一、生二子三人一、男二人、女一人、皆幼而孤、長男祖考也、次男早亡、季女、慶長年中、死二于攝州大坂一矣、

祖考、號二淨泉一、少稱二又四郞一、自二二十四歲一、仕二正二位木下肥後守家定茂叔淨英法印一、慶長十一年丙午夏四月、法印命呼二又左衞門一、弘治三年丁巳、生二于播州完粟郡山崎村一、寬永元年甲子冬十一月二十二日癸酉、歿二于洛陽一、葬二于知恩寺一、享年六十八、

妣、姓多治比氏、名良、號二妙泉一、永祿五年壬戌秋九月九日庚寅、生二于攝州西生郡中島村一、寬永十七年庚辰春正月九日辛卯、歿二于洛陽一、合二葬于知恩寺一、享年七十九、男子三人、長男父君也、次男、小字六藏、稱二六右衞門一、季男、初稱二八右衞門一、後呼二半右衞門一、

父君、天正十五年丁亥夏五月四日壬辰日出時、生二泉州岸和田一、（延寶二年甲寅冬十月二十一日辛亥酉下刻歿二于洛陽一、二十七日夜合二葬于黑谷山一、享年八十八歲、）名

長吉、小字鶴千代、自二十一歳一、侍二法印側一、十九、法印命呼二清三郎一、法印薨、仕二其嗣從五位宮內少輔利房一、時年二十三、宮內命呼二淸兵衛一、宮內喪レ位三年、從レ之能奉レ之、宮內復レ位而去レ之、自稱二三右衛門一、時年三十二、四十四再仕、宮內命呼二清右衛門一、四十七、復去、稱二三右衛門一、其後窮居、五十五號二淨門因一、

母君、姓佐久間氏、名舍奈、天正九年辛巳冬十月、生二於近江之州安比路一、寛文十一年辛亥二月二十一日午中刻歿二于洛陽一、二十七日質明、葬二于黑谷山一、享年九十一歳 生二子四人一、男女各二人、長男、慶長十七年壬子冬十月晦日庚寅生、夭、次女二十年夏五月九日乙卯卯時生、名鶴、嫁二某氏一、寛文十年庚戌六月二十二日卯初刻死二于洛陽一、二十四日夜葬二于黑谷山一、享年五十六、次女、元和三年丁巳春三月朔日丙寅寅時生、名王、嫁二某氏一、寛文四年甲辰五月十一日申下刻死二于洛陽一、十五日質明葬二于黑谷山一、享年四十八、

季男嘉也、四年戊午冬十二月九日甲子亥時生、小字長吉、甫母君夢參二比叡坂下兩社神一、拜二于鳥居前一、時老翁折二梅花一枝一與レ之、母君戴レ之、納二于左袖一而孕焉、四人皆生二於洛陽一、六右衛門、文祿四年乙未夏六月十日辛亥、生二于播州姫路一、寛永八年辛未冬十二月五日甲戌、死二于洛陽一、享年三十七、叔母、姓安田氏、男子一人、稱二太郎兵衛一、其子曰二源太郎一、半右衛門、慶長四年己亥春正月晦日庚戌、生二于大坂一、寛永二十年癸未夏四月十八日辛巳、死二于洛陽一、葬二于知恩寺一、寛文三年□月六日改二葬于黑谷山一、享年四十五、無レ子、父君曰、先君性正直有二武志一、自レ少持二古筆三社託宣一幅一深護レ之、朝夕誦レ之、將二拜覽一、必盥漱著二道服袴一掛レ之、吾等幼時或觸レ之、則叱レ之、吾亦依二先君命一、自レ少誦レ之、乃賜二其古筆于嘉一焉、祖妣性嚴寡レ言、飲食有レ節、嘗謂二嘉姉弟一云、諺有レ之、身一錢、目百貫、汝等勿レ傷レ目、而善習レ字、不レ識レ字則與二無レ目者一同焉、信哉言也、夫有レ手而無レ目不レ能レ執レ物、有レ足而無レ目不レ能レ行レ路、有レ書而無レ目不レ能レ讀レ之、有レ目而不レ識レ字亦不レ能レ讀レ書、不レ能レ讀レ書、則貿貿然莫レ知レ所レ向、與二無レ目者一何異、目百貫之言、不二亦可一乎、善習レ字之訓、不二亦宜一乎、家君窮居貧乏、時祖考妣無レ恙、嘉姉弟方幼、養レ老育レ幼、其劬勞非二佗人所一レ堪也、父君性正直謙遜、人皆悅レ之、母君性嚴、雖三甚愛二我等一、然好二慢遊一放二飲食一、則未三嘗不二呵嘖一、常誡、靡儀不レ啄レ穗、

士夫之子當レ尙レ志也、寬永六年己巳、嘉十二歲、父君命呼二淸兵衞一、正保三年丙戌春三月五日壬子、以二父君命一、復二本氏一、而以レ嘉爲レ名、字曰二敬義一、以レ闇號レ齋、稱呼二嘉右衞門一、慶安三年庚寅秋、作二先祖神主一、九月二十二日癸酉始レ之、晦日成、二十五且父君語レ嘉曰、前夜夢神語レ吾曰、自レ今而後、以二忠平一呼レ汝也、嘉嘆二其孝感一、二十七夜嘉夢二幽都明都幽明室七字一、神主之春、用二家禮一行レ之、扁曰二著存一、家君日參、嘉亦侍焉、父君平居無事、從二容乎庭樹之間一、時使三從レ嘉小子讀二小學書及嘉詩文一、聞而樂レ之、五年之夏五月辛未朔、父君壽誕日、子男嘉謹識、

承應二年冬十二月癸亥朔、十七昏、嘉親二迎於鴨脚氏一、

明曆元年乙未春、始開二講席一、先小學、次近思錄次四書、次周易程傳、二年冬十二月二十一日乙未講畢、三年春正月、將レ起二倭鑑筆一、人日庚戌、詣二藤森一作レ詩曰、

親王强識出群倫　端拜廟前感慨頻
渺遠難知神代卷　心誠求去豈無因

二月二十一日甲午、出レ京詣二伊勢一、二十六日參宮、三月朔日甲辰歸レ京、十三日、參二八幡宮一、四年春二月二十七日甲午、出レ京遊二東武一、主二於井上內太守一、萬治改元戊戌八月二十一日丙戌歸レ京、經過參宮、二年春三月二十三日甲申東遊、秋八月十八日丁未歸、經過參宮、三年春三月九日甲子東遊、秋八月八日辛卯歸、四年春三月二十九日己卯東遊、經過參二多賀宮一、寬文改元辛丑秋八月二十七日甲辰歸、二年春三月二十一日乙未東遊、夏五月二十七日歸、三年春二月六日乙巳、改二葬祖考妣于黑谷山一、二十一日庚申東遊、秋八月二十一日丙辰歸、九月二親參宮、嘉姊弟三人從レ之、是月朔乙丑十四日出レ京、十六日著二山田一、宿二福嶋氏一、其夜拜二外宮一、其明拜二內宮一、嘉作レ詩云、

千秋神在祭儀新　時致拜參親子人
正直勅宣吾不貳　一心階下仰天眞

十八日出二山田一、二十一日歸、自二十四日一至二二十日一晴、二十一日雨、四年春三月八日辛未、二親參二八幡宮一、嘉姊弟三人隨行、明日歸、二十四日東遊、夏四月二十九日辛酉、聞二姊疾一、五月四日丙寅歸、五年春二月三日庚申造レ家上梁、三月二十一日戊申東遊、

主於會津中將源太守、冬十月七日己未歸、六年春三月二十一、壬寅東遊、秋九月二十一日己亥歸、七年春閏二月二十一日丙申東遊、疾、夏四月二十二日丙申歸、病間修洪範全書、秋九月三日乙巳成、九日序、自始閱此書、一紀乎茲焉、尋而疾愈矣、家君今年八十一、因有欽哉八十一龜卜之句、乃於北野祈禱連歌、八年春二月二十一日庚寅東遊、秋八月五日壬申歸、經過參宮、九年秋九月十二日壬寅東遊、經過參宮、受中臣祓于大宮司精長、冬閏十月二十五日乙卯歸、十二月二十四日癸丑便土佐將監光起、向家君描壽影、自贊曰、

乾父坤母　一視同仁　家君壽影　於我尤親

十一年秋八月十八日丙申東遊、冬聞吉田神道之傳、十一月二十二日庚午冬至、蒙垂加靈社之號、吉川惟足書之、自贊曰、

神垂祈禱　冥加正直　我願守之　終身勿忒

二十三日作藤森記、十二月八日乙酉歸、十二年秋八月十七日己未東遊至于會津、冬十一月十一日、壬午歸、十三年春正月二十六日丁酉、東行于會津、會源中將之葬、三月二十七日丁酉襄事、夏六月四日壬寅歸、

右先生自書也

天和二年壬戌九月十六日、終于平安城二條邊猪熊寓居、葬于黒谷山、享年六十五、祭垂加靈社、

垂加文集下之二大尾

垂加先生、神儒之道、抽彝倫、其學傳于門人、其書行于當世焉、所謂神道、則我　國　神聖之道也、先生受其傳、稽古書、除雜摘要折衷殊尊之、故徹正直瓊矛之道、守土金之敎、通兒屋根命宗源之傳、達舍人親王正統之書、揭天人唯一之神光、拜　日德、仰　神國、以立忠孝之大義焉、生我國者當希之、儒道則西土之道也、雖無口授之傳、得之於書以發明之、故悟孔孟中正仁義之道、啓程朱居敬窮理之敎、示天人合一之德行焉、雖東西相違、水土國風異、神儒之道自妙契焉、然兩部習合神道之禁戒也　神聖之敎、和語親切而意亦深、口授之味、神言之妙、西土聖賢未發之說多、故祭神修己治人之道、不假儒自灼然矣、宇宙之間、神道而已矣、於道理之合、則以儒自爲輔翼、先生詳說之、垂敎于後世焉耳、世有非先生之學嘲之者、邪智諂言、不實學者之心、則不足論、先生之博識英才、明智篤志、誰敵之乎、號垂加靈社、良有以哉矣、予生世祿之家、幼而受父母之敎、把筆以學文字、讀書以識古事、性好書、及長而益玩之、自甘天人之道理、除異端之邪說、故尊神儒道、欲窺其本源不失五倫之行焉。是以往往求師而學之、然當時無有道之師、只尋墨數行、無所歸而惑多岐、故無一的實之見所、徒過光陰而已。幸汲先生門人之學流、擇其正傳而學之、始解惑以徹心、恰如陰雲晴向明月、不知手之舞之足之蹈之、勉強而經年矣、雖有身不幸而沈痾之憂、而志猶不怠、尊神道最深、先生沒後有年、雖恨不得面命、側耳聽遺敎、潛心考遺書、則如侍膝下直受敎、故不憚生質之愚、不省傍人之笑、爲終身之業、以導同志耳、先生之詩文、抄編集之書、求家家之錄、多年輯之、成上中下三卷、號垂加文集、有壯年未定說、有晚年定說、或有錄者之誤、故雖欲改正、不才之見識憚之、諸者須詳考之明辨之、遠遊紀行再遊紀行詩、全部行于世、故除之、秘訣之神書亦除之、序跋雖短文載之、則欲令世人知編集之意、先生之著述、豈限于此乎、脫漏則希補之、又以家譜附于後、先生之功業宜合考也、此書每文載年月及姓號者、雖似贅、而詳見編功次第以備考耳、號垂加翁者、晚年益重神道之

謂也、然吾黨有下學レ神不レ學レ儒者上、有下學レ儒不レ學レ神者上、是非二先生學一、故予嘗憂レ之、寓二其意一也、雖二著レ跋述一レ志、近來眼疾遮レ明、不レ能レ揮レ毫、故令二僕以書一レ之云、

正德甲午孟春日　　　　光　海　翁

澹泊齋文集卷一

奉賀上公閣下致仕移居西山啓　辛未

元精鍾美、間氣挺豪、環形勝於封疆、磐石維固、觀大節於出處、軒裳甚輕、古既年逢、今豈易覩、恭惟　上公閣下、學究天人、行篤孝弟、制節謹度、好古禮賢、地居懿親、堂堂宗社倚賴、重在端揆、巍巍廊廟範模、恩惠薫陶閫境之民、仁義漸摩一州之士、師至德於泰伯、希淸風於伯夷、搜索逸書、插架有三萬軸、締構華藻、落筆成數千言、備武兼文、播令聞于四海、正名定分、馳芳聲于三韓、慨夫文獻之無徵、慮此記載之有闕、乃創體製于紀傳、殊勤校讐于批評、至若素履恬靜、雅尚淸高、忘貴求同、先期告老、就藩東海、厭衆流之爭趨、卜築西山、喜爽氣之有致、帶高增下、因地勢於自然、延庚挹辛、資剛氣於方位、既堂構之有託、況茅土之傳封、黄門倹朝請之班、非復山中宰相、綠野遂歸休之志、疑是平地神仙、軸幌雲寒、虛白生室、石磴路滑、空翠濕衣、謝峻離於宇墻、爰居爰處、窮曠奥於杖履、以遨以遊、落々獨對長松、悠々靜觀流水、寄傲同趣、樂淵明之琴書、勇退遵規、符景仁之齒爵、若夫琪花瑤草、送香氣于晴窻、紅木紫芝、耀靈秀于巖戶、鬱林陰森列步障、疊嶂香靄隔塵寰、孤猿叫而幽鳥鳴、天籟寂々、新月生而夕陽落、山靄蒼々、宛然世外乾坤、恍乎壺中天地、三盃時親紅友、一枕正樂黑甜、寬閒之野、寂寞之濱、撫千古而無盡、雨雪之朝、風月之夕、閱四時而有餘、法華作隣、幾想子厚之始得、高標絕世、豈假景盧之雄夸、覺漫忘驢技於云爲、竊致雀賀於左右、搶揚未盡、僭越難逃、伏願槐夏適北窻之涼、菊籬汲南陽之水、四美兼備、期丘壑以風流、萬壽無疆、與山林而悠久、

祭文恭朱先生墓文

維元祿五歲次壬申、九月丁未朔、越二十七日癸酉、門生安積覺謹以淺酌庶羞之奠、致祭於故大恩師文恭朱先生之墓曰、先生生於浙江紹興之餘姚、而葬於常陸太田之瑞龍、東西隔絕、風土殊異、若必求其故、則雖有智者、莫能窺測、而徐觀其迹、則事

理所然、天命在此、夫先生之不仕、豈潔身亂倫之謂哉、大廈將傾、獨力何支、非不欲仕、時固不可仕也、蓋當天啓之朝、已兆明室之禍、逮崇禎之馭寓、竟失孝陵之基業、內則學士大夫、分門別戶、否戰閧堂、而邪正之分不立、外則夷虜盜賊、攻城奪邑、席卷州郡、而守禦之方無聞、玩歲愒日、厝火積薪、而馴致甲申之奇禍、釀成古今之大變、當此之時、先生其能仕乎不仕乎、仕而欲行其道、則必無辭徵之理、不幸處變、則食祿死難、固得其所、當與殉難諸臣、媲美史冊、豈待四十年後蓋棺之日、而方爲全節之偉人哉、何彼馬士英阮大鋮之徒、以姦人之雄、居鼎鼐之任、蔽錮主聽、排斥忠良、先生之直道、不能一日相容、亦甚明矣、苟知道之不可行、而俛焉就職、則尸祿冒位之流、而先生豈屑爲之哉、當時已有偃蹇不奉朝命之彈疏、而高舉遠引、不暇與之辨晰、先生之心良亦苦矣。及大江失守、南都隨陷、則擧十三省之地、沒於一建酋之手、雖有永曆監國、各圖恢復於一方、道路梗塞、不能轉達、是以流離困苦、漂泊海外、能存冠裳之故、不染腥羶之俗、處身既善、而志則有在。大義著於安南之供役、方略存于陽九之述略、至於知友授命、大事既去、則欲決意稅駕、永爲抱甕之徒、而際我西山公敦尙儒術、待以賓師、餼餚之禮既崇、而啓發之功備至、學則溥博淵泉、行則嚴毅方正、才則黼黻經綸、文則布帛菽粟、罕見其儔、孰能與之、然非西山公之好賢、則不能發先生之蘊、相遇千里之外、竟成天下之奇、全衣冠於終始、彰節義於古今、水到渠成。莫非天也、蓋先生恒慮胡虜之蹂躪先塋、翦伐喬木、泣下霑襟、髮上衝冠、今先生之兆域、倚爽塏而臨岑蔚、帶丘壠而翳林木、先生之神既安矣、魂氣無不之也、然則先生之父母祖父母、神而有靈、豈有不安之理哉、先生瞑目九泉之下、垂名千載之後、莫之爲而爲之、盡人事而循天理、如斯而已、夫復何言、覺方童蒙、深荷敎授之恩、未盡弟子之職、遽違就養之方、今以裒輯遺文、來侍西山、親拜孤墳、爰設薄奠、償志願於今日、感提誨于舊時、立冬之辰、寒威嚴凝、想見風采、灑泣悵怏、一盞之誠、或能歆格、嗚呼尙饗、

明故徵君文恭先生碑陰　乙亥

徵君、姓朱氏、諱之瑜、字魯璵、號舜水、明浙江紹興府餘姚縣人、曾祖詔誥、贈榮祿大夫、祖孔孟誥、贈光祿大夫上柱國、考正總督漕運軍門、誥贈光祿大夫上柱國、妣金氏、前封安人、誥贈一品夫人、有三子、徵君其季也、生於萬曆二十八年、穎悟夙成、九歲喪父、哀毀踰禮、及長受業吏部左侍郎朱永祐、精研六經、特通毛詩、少抱經濟之志、有識期以公輔、擢自南京松江府儒學學生、舉恩貢生、考官吳鍾巒賞剖稱爲開國來第一、天啓以降政理廢弛、國是日非、故絶志於仕進、而有高蹈之風、崇禎末蒙徵辟不就、弘光元年又徵、即授重職、其薦出於荊國公方國安、而大學士馬士英當國、徵君不欲累於姦黨、故辭不受、臺省交章劾其偃蹇不奉朝命、徵君星夜逃于舟山、時淸兵渡江、天下靡然薙髪變服、徵君惡之、乃浮于海、直來我邦、轉抵交趾、復還舟山、監國魯王、駐蹕舟山、文武諸臣交薦之、豫料其敗、上疏固辭、凡蒙徵辟、始自崇禎、前後十二、皆力辭焉、監國九年、魯王特敕徵之、徵君適在交趾、奉敕歔欷欲往赴之、會安南國王檄取流寓識字之人、差官應以徵君、國王召見、逼而使拜、徵君長揖不拜、君臣大怒將殺之、徵君毫無沮喪、辨折嫺厲、久而感其義烈、反相敬重、既而欲還舟山、謝恩陳情、聞其已陷、進退失據、於是熟察時勢已去不可復振、決意税駕、因往長崎、實我萬治之二年也、流落海外、幾十五年、數至我邦、漂泊交趾暹羅之間、艱苦萬狀、往而復返、蓋志有爲、而事竟無成也、其在長崎、貧不能支、門人安東守約、折俸之半而養之、寛文五年、我水戸侯梅里公聞其學植德望、厚禮而聘、徵君慨然赴焉、待以賓師、禮遇甚隆、每引見、談論依經守義、啓沃備至、教授學者亹々不倦、雖老而疾、手不釋卷、天和二年四月十七日、卒於江戸駒籠之第、享年八十有三、葬於常陸久慈郡太田鄕瑞龍山下、梅里公諡曰文恭先生、彰其德也、親題其墓曰明徵君、成其志也、其在鄕里、子男二人、大成　大咸、妻葉氏所出、女高繼室陳氏所出、皆先歿、徵君嚴毅剛直、動必以禮、學務適用、博而能約、爲文典雅莊重、筆翰如流、平居不妄言笑、惟以邦讐未復爲憾、切齒流涕、至老不衰、明室

衣冠始終如一、魯王敕書、奉持隨身、未嘗示人。歿後始出、今猶見在、凡古今禮儀大典、皆能講究、致其精詳、至於宮室器用之制、農圃播殖之業、靡不通曉、如其遺文則有集存焉、

擬豐太閤討明智光秀檄

討賊、春秋之大經、報讎、臣子之常分、竭力赴難、宜先人而奪謀、決意行誅、將枕戈以待旦、苟逡巡失事機、其何貴乎旬宣之寄、徒觀豐興時變、則將焉用藩屛之臣、賊臣光秀、厠養賤卒、憸邪小人、始仕藤孝、僅見齒於士流、終遇泰巖、得備員於書史、荷榮寵於安土、環金湯於龜山、凌蔑典刑、矜伐雄武、通謀勝賴、久蓄携貳之異圖、出庇利三、實爲逋逃之淵藪、多樹私黨、廣收士心、不圖犬馬之勞、反縱豺狼之欲、谿壑難盈、識者豫慮其衆指、跋扈有漸、君子素惡夫朶頤、嗚呼豈遺臣之不存、誰收掛灌之釁、晉公子之不在、孰正里克之誅、一朝而殺一主、固天地之所不容、豎子而竊大權、蓋古今之所必討、予嘗方面之任、每提節制之兵、薄伐因幡、爰征吉備、聞變慟哭、布誠綏懷、輝元卑辭而行成、秀家戮力而嚮義、班師攝路、飲馬難波、肅清五畿、指畫七隊、發義帝之喪、事雖慚於漢王、報賀拔之仇、義豈讓於周祖、上奉天意、下順人心、師出有名、民歸如渴、販夫竈婦、希然董卓之臍、市豎街童、甘啖侯景之肉、方今群雄畢會、精銳益振、組練耀日、果毅折衝之材、旌旗蔽空、鷹揚龍驤之士、舉此大衆、直壓賊營、譬如發蒙、何足介意、雖然見可而進、好謀而成、禁暴戢兵、恥賈匹夫之勇、發號施令、期行雷霆之威、凡在偏裨、務體此意、虔劉大憝、芟夷群兇、甄功名於旂常、勒勳業于金石、崇爾典秩、厚輯子孫、鐘簴不移、金甌無缺、庶全趙孤於襁褓、永爲周室之干城、檄至敢有後期、其以軍法從事、

書武市常三

大閤記載常三事、余每愛之、欲表而出之、然寥寥數語不足作傳、唐孫樵論書何易于政績、而題曰書何易于、今傚之、

天正中、美濃士人有武市常三者、兄曰善兵衛、歿于戰場、有孤纔三歲、常三視之如子、鞠育甚至、及長常三命之襲稱父名、修繕其家、悉以俸祿

賫財一擭之、惟取一鐵槍一酒鎗而去、不知其所終、噫常三之行高矣、特惜其爲一物所累、不得謂之毫無所取、然而取之、徒見其高、何也、二物不足利明矣、鐵槍不忘武也、酒鎗寓其志也、夫世之貪鄙殘酷、欺孤兒姪、奪其有而不還者、聞常三之風、亦可以少愧焉、蓋常三疆埸多事之日、其擊刺之功無所概見、然吾知其臨陣不撓爲一剛士矣、撫養孤姪、出於天性、經營家業、澹無所利、不剛而能如是乎、昔齊竟陵王以徐景山酒鎗遺處士何點、傳以爲美談、常三酒鎗、其與鐵槍同朽久矣、儻或留在人間、則吾必重購之、以想見其人焉、

書唐詩後

張曲江感遇一首、崔國輔古意一首、嘗乞常齋竹子草書、裝而上屏、因述其義曰、曲江公一代正人、相業儔於房杜、而功烈不逮者、奸人害之也、然其剛大之氣、百折不回、觀於草木有本心、何求美人折之句、略可知矣、蘭葉桂花、貞潔自持、而出處不失其正、人能以此自處、則必不爲枉己狥物、衒玉自售、而喪其所守也、蓋林甫之鷹隼、撃之搏之、困之厄之者、止於曲江之身耳、如其心、則雖百林甫、將如之何、段成式、唐季稱博洽者、嘗駁此詩曰、桂花三月生黃而不白、曲江云、桂花秋皎潔、妄矣、余謂、此乃相馬於玄黃者、焉能知其神駿之骨、權奇之精乎、若國輔所謂悔不盛年時、嫁與青樓家、則祖陳思王美女篇盛年處房室、中夜起長歎之句、而略加轉換耳、正求美人之折者、而與曲江之意相反、反而可以並行何也、芳歇時邁、顧影徘徊、與鑽穴隙、義所不爲、其曰悔者、深含言外之旨、故竟陵鍾伯敬評此詩曰、郗嘉賓之於桓溫、杜欽谷永之於王氏、皆所謂嫁與青樓家也、愼之戒之、推是義也、士之抱才負時望者、不明求賢良難之義、嫁而失身、古今何限、若荀文若之於魏武、廖瑩中之於賈似道、亦此類也、后山有見于此、曰、當年不嫁惜娉婷、沿襲少陵之語、而深寓其意、余常喜誦此二詩、優柔婉曲、比興兼備、其有得於風人之言乎、蓋詩可以情勝、而不可以理勝、情之至而不離乎正、則有至理存焉、彼豪放奇僻、矜持刻削、謂之詩之一端則可、謂之全體、則恐不可、

叢金堆序 戊辰

好種菊者近於癡、苗而護之、長而養之、盛暑烈日、暴風苦雨、驅菊虎、摘旁枝、桔槔灌之、肥壤培之、防禦多端、而後纔供一時之觀、豈不癡哉、然不癡不精、不精不妙、妙也者得其性之謂也、菊之性素剛素直、舍而不顧、則爲蓬蒿所侵、屈曲柔弱、幾失其性、一旦扶植、培養用力、則曲者直、弱者剛、至於時至花開、正大厚重、馨香介烈、凌風霜而正其色、所謂大器晩成。不可鹵莽滅裂而種之也、或有好事者、當秋後極長、引而撓之、瘞其半於地中、密葉短幹、詫以爲奇、又有盛夏過去、俟其再生而養之者、此皆巧僞慘酷殘其性者也、不知菊之性、長短固有所定、鶴頭鳬脛、隨天賦予而修植之、則自然之美足爲雅觀、此余所以偃蹇東籬、而寓意微物者也、吳門老圃稱、其籬落畦圃之間、不可一日無此花、良有以也、今玆新闢荒徑、種數十品、其法未精、焉得其妙、唯其深好篤愛未免癡也、一日彰考館僚友過而觀之、遂命小酌、左唱右和、金玉其章、積成一軸、名曰叢金堆、於是始知癡之有用也、于時下元之日、天晴霧收、霜月與寒星爭輝、座客既散、猶有餘興、癡坐籬下、滴露而書。

謝賞千金梅啓

龍攫蚪蟠、直冠群木之上、珠輝玉潔、獨居百花之先、挺生羅浮、分派庾嶺、曾爲南昌仙尉、亦補慶曆郎官、畫閣雕梁、寧爲俗子移氣、竹籬茅舍、甘與詩人同居、紙帳夜寒、漠々梨雲之夢、茶爐晝靜、蕭々竹雨之聲、迴出風塵、瀟洒麻衣縞袂、淨掃庭院、依稀流水斷橋、却月凌風、參水曹于東閣、片煙殘雪、覿處士於西湖、婿芍藥、妃海棠、嘉伉儷之得匹、昇廟廊和鼎鼐、庶期待之不愆、瞻玉樹于階砌、雁行參差、聚金蘭於室堂、鶯語睍睆、清時有味、騁華藻於墨場、官暇無多、寄懷抱于詩境、既樂事之可叙、何雅盟之有渝、聊騁俚語、以應寵招、

邀館僚賞庭菊啓

一室當掃、竹塢常欲無塵、三徑未開、菊地纔堪通屨。寄笑傲於畦圃、澹々秋容、資品藻于簡編、藹々古意、豈敢翫物、聊復怡顏、當玆搖落之辰、麺吐敷腴之穎、弗妖弗冶、耀貞烈於風霜、

截芬截葩、標清爽於節序、坤裳垂象大易、鞠衣著名周官、櫟陽兩金、重露凄其欲滴、藍田生玉、寒煙凝而未銷、摘星辰於軒楹、舞鸞鳳於籬落、飄零滿地、執拗其奈半山、開處重陽、曠達將效坡老、既晩成之有分、庶歲寒之可期、佩服攸宜、觴詠須適、憑斯端友、邀夫嘉賓、復修舊盟、欲叙樂事、願勞八叉之手、共題五美之花、奕葉有光、聊披石湖之譜、貞芳堪賦、豈乏盈川之文、臨啓可勝汗悚之至、

書重修紀傳義例後 丙子 （史論）

編年記事、史也、紀傳分體、亦史也、編年、實錄之祖、而紀傳諸史之歸也、自舍人親王撰日本書紀以降、歷世因循、著爲實錄、曰紀、曰志、曰表、曰傳、綜覈帝王之徽猷、臚列臣庶之行事、治亂興廢、禮樂刑政、類聚群分、勸懲並存、粲然可見者、實我西山公之所創爲、而彰考館之所由建也、夫年代之悠久、機務之浩繁、據實而直書、即事而義見、自非推義以明例、豈能成經世之大典、故夫義例之不可不講也、己巳之夏、臣元常、臣宗淳、與編修諸子、講究商較、作爲義例、歲月寖久、採摭益廣、取舍眩於輕重、裁決膠於去就、解而更張、乃能可鼓、今茲丙子之夏、臣宗淳、臣顧言、臣覺、重與編修諸士、反覆論辯、旁搜史漢以下諸史可爲彝準者、參互考覈、折衷融釋、遺者補之、賸者刊之、窒者通之、晦者明之、釐正以爲重修義例、於是執簡操觚之士、臨文當事、確有所據、紀志表傳、各守其疆、不踰越、不累重、倣於彼而贍於此、約於言而博於事、區別品彙、體備法立、然後史之告成、可指掌而期也、然而編修之業、其難者三、實錄大率當時所撰、掩匿過甚、天武簒奪也、子爲父隱、桓武淫縱也、臣爲君諱、雖各存微意、未可深訾、而眞備佞臣也、不發其姦、基經權臣也、不著其專、以至早良恒貞之廢徙、長屋奈良麻呂之誣枉、蹤緒晦僻、難知端倪、苟非闡幽探賾、研究其實、則邪正曲直、不可復辨、其難一也、實錄既然、況無實錄之可徵者乎、宇多醍醐以後、雖粗有編年之書、而非舊史之體、彫管之文、華實雜副、緇徒之筆、抑揚多爽、稗官小說、夸誕浮靡、毀譽牽於愛憎、是非汩於見聞、唯冠族之家乘日曆、覈實該贍、可以考信、而年月不備、

殘缺相踵、則不得不取諸稗官小說之類、苟非深究精擇、則難輙爲用、其難二也、律令格式之設、詔勅命令之施、禮樂祭祀之典、官職階勳之制、彝倫所敍、罔敢或踰、然處千載之下、揆百王之法、在幾甸之外、議殿陛之事、苟非講習掌故窺其梗槩、則有識反脣、决可知矣、其難三也、知此三難、盡其精力、猶恐不及、豈可忽哉、然其要有二、寧繁勿失於簡、寧質勿過於文、廣蒐旁羅、以待良史之筆削、此西山公之盛德、而不世出之英識也、若夫保元平治之亂、骨肉相殘、紀綱日壞、蘖於清盛之罔上。而成於賴朝之乘勢、至於威權下移、陪臣執命、則王道不振、抑亦甚矣、州郡兵馬之務、將士黜陟之政、專在鎌倉、而御教書與詔敕並行、則其爲體、名雖列傳、實如本紀、宜本之世家載記、以著其漸、參之藩鎭列傳、以通其變、是皆義例之所不能盡而不能出於義例之外者也、下逮元弘建武、則名臣義士、相繼蠭出、藤房之諫諍、正成之忠勇、皆所謂磊々軒天地者、而世道隆替之樞紐、邦家廢興之機關也、作者宜三復而致意、通難知之意、以發難顯之情、可

不勗哉、或曰、義例猶號令也、發號施令、在於事先、今紀傳將成、而義例是講、不亦晩乎、曰不然、號令固可前定、方略不可前定、隨其形勢以設方略、隨其所設以申號令、孰爲先、孰爲後、要在能成其功而已矣、謹將重修義例一卷繕寫論述、以取進止、

祭鵜錬齋文

維元祿六年歲次癸酉、五月甲辰朔、友生安積覺謹修薄奠、告于近故彰考館總裁錬齋鵜君之靈曰、嗚呼鵜君齒幾逾強、髮未見宣、胡爲二豎之來窺、亘歲月而沈綿耶、雖淸羸之可憂、猶藥餌之足恃、衆方冀其有瘳、君豈料其不起、隔捐館未幾日、審差劇於起居、距下世纔晷刻、接動止於手書、雖謝聞望於謦欬、竊期精爽於舒暢、何展轉而在床、覓倉皇而屬纊耶、始焉聞之而駭、中焉疑其訛傳、終則不能不信、而未敢遽以爲然也、昔文正之弔師魯、談常理於倉卒、惟考亭之悼東萊、感枉書於前日、話言在耳、墨痕未乾、曷爲不使人駭且疑而摧折心肝哉、嗚呼鵜君其果歿耶、覺自結交、久懷畏敬、敢窺經義之縕奧、雅知學

術之醇正、議論能持讜直、操行豈愧聲名、懷薰陶於疇昔、慕箴規於平生、自今而後已矣、悲哉、想風采而太息、徒悵惘以長吁、嗚呼鵜君何遽亡耶、眷遇既隆、顧問方渥、當館職之修擧、寄文衡於掌握、編修絡繹於成毀、校讐旁午於否臧、瀝精誠於汗青、糾是非於雌黃、筆削出其力疾、指揮賴其臥治、彼聚奎之悠遠、何騎箕之容易、將地下而修文乎、抑天上而作記乎、幽明之理、竟莫測其端倪、存沒之感、誰能堪乎、慘悽、炙雞絮酒、未展其誠、車過腹痛、實見此情、悵音容於永隔、慨瞻望之弗及、欲叙中心之鬱結、莫知涕泗之橫集、嗚呼尙饗、

跋今井魯齋弔楠公文　（史論）

西山公建楠公碑於兵庫湊河廣嚴寺、住侍僧千巖乞藏今井魯齋弔楠公文于寺、公命覺跋之、

亡友今井將興弔楠公文一軸、以公命裝潢、藏于攝州兵庫廣嚴寺、讀之適有可慨者三、將興嘗使鎭西、路過兵庫、拜其墓於榛莽荒草之間、當時豈知有今日之盛擧哉、不知而能如是、可謂有志者矣、使其得見今日之盛擧、則其爲文亦當何如、一可慨也、將興同余師事朱文恭、文恭嘗在長崎、應人需而著像賛、今鐫碑陰、以垂將來、而此文又得藏諸廣嚴寺以備觀覽、將附驥尾而顯名、豈非幸歟、然使文恭在世作爲碑文、則揄揚闡明、殆亦不止於此、二可慨也、昔宋學士作余右丞傳賛曰、余來江左、想見戰守處、江流有聲、而斷雲落日、凄迷於蒼莽間、猶足以動人悲思、夫余闕胡元之臣耳、苟盡忠於所事、則誠可表章、況楠公之忠貞、固余闕之所不逮、而江流落日、弔古興懷、則無以異也、將興能拜其墓、能爲此文、而余不能、三可慨也、使將興聞余此語、不知以爲何如、

復湖玄甫書　丙子

嚮屬令嗣玄鞠兄抵江都辱蒙書問、就審行李萬福、與都原二兄從駕還鄉、門闌第宅喜色可知、至祝至祝、承惠佳貺、厚意稠疊、蒸春茗、家園之嘉植、其製精好、宛有旗槍之風、年魚、岐阜川之産、與此間所獲、相去甚遠、藏以爲鮓、小酌大嚼、所謂金虀玉膾、亦恐不能及此佳味也、每至微醺、沃以芳茗、淸風兩腋、殘暑頓醒、但恨枯腸朽腹、無以荅諫議之善信耳、感與愧幷、謝何能

馨、台兄不三以レ僕爲二無似一、謬蒙レ附二託温卿一、幸際三寡君訪二求俊良一、擧以爲レ對、梗楠豫章、自挺二凌霄之姿一、匠石所レ顧、豈藉二先容一、本月二日、新就二館職一、想已聞知、不下以二班卑祿薄一爲上歉、則可レ謂三不レ負レ所レ託、而擧得二其人一矣、冀亮二鄙衷一、蓋少年高科、先哲所レ戒、克勤二其職一、練二達史局一、則未下必不上爲二他日青雲之階梯一也、昨蒙二龜兄枉顧一、德容温潤、眉宇俊爽、元將仲將、共爲二偉器一、雖レ非二北海之鑑一、雅知二雙珠之美一、階庭玉樹、可レ勝二瞻仰之至一、

伊藤武之進碑陰（代二濫物友輔一）

武之進、藤原姓、伊藤氏、名友直、家嚴之第二子也、母福原氏、寛文十年庚戌四月二十七日、生レ于二水戸城中町一、爲レ人嗜レ學、好二武藝一、性孝悌、定省無レ懈、至二衣服器用一、精者敬二奉父母一、取二其麁者一自用、然嬰二沈痾一未レ仕、元祿九年丙子二月十七日、終レ于二銀杏坂下一、年二十七、葬レ于二稻置久昌敎寺側一、初甲戌歲、會我在二江府一患レ痘、時二月九日初發、弟聞レ之惻怛、欲下以レ身代上レ死、私作二祝文一禱レ天、我後聞驚愕、今弟亦患レ痘而發、在二二月九日一、何其若レ合二符契一也、家嚴爲レ之建レ碑、友輔勒二其梗概一、

野懋齋碑陰

君諱傳、字子傳、一字道設、稱二亦左衞門一、京師人、本藤田氏、考諱壹、號二卜幽軒一、仕二水戸威公暨西山公一、以二儒術一顯、無レ嗣、以二君謹飭一、取而子二養之一、故冒二小野姓人見氏一、實其甥也、幼課レ學、勤苦自立、弱冠來二江府一、從二鵞峰林先生一學、業益進、行益修、父子相繼與二修彰考館史書一、寛文八年考告レ老、西山公命襲二其祿一、備二顧問一、眷注日渥、參議公之爲二世子一、陪二講讀一多レ所二輔導一、時爲二小納戸一、管二編修事一、專當二史局一、自レ君始也、悉心精慮、筆削修擧、西山公優二勞之一、謂レ不レ可レ久勞二于筆硯間一、於レ是擢爲二小姓頭一、兼二寺社奉行一、振レ滯革レ弊、陳レ力施爲、及二西山公致仕一、參議公紹レ封、寵遇如レ初、元祿九年九月二十三日感レ疾不レ起、享年五十九、臨レ歿醫問交レ道、力レ疾起謝、神思不レ亂、後事不レ用二浮屠法一、其月葬二相州鎌倉扇谷之先塋一、初改二葬考于此一、穿二其側一可レ容レ棺、莫レ測二其意一、比二遺命一廼知レ擇レ地也、娶二三好氏一生二二子一、曰革、稱二新三郞一、曰正、稱二正之允一、並仕二參議公一、三女、長嫁二蔦木氏一、二女尙幼、君温醇敦篤、悃愊無レ華、家道整肅、儉

於己而豐於公、善治經喜讀易、雖處劇職、未嘗一日釋卷、抄纂尋繹、至老不倦、數從明徵君朱先生游、質經義、考制度、商確文字、不得其要不輟、徵君稱其純篤、期以老成、裒其所嘗聞曰朱氏談綺、所著詩文曰井井堂稿、自稱懋齋、以愛竹亦號竹墩、如其世系里居、詳于考之行狀、君恭以事其職、勤以嗣其家、所謂文行君子者與、革頗修植、不墜家聲、嗚呼君可以瞑矣、

書宅采菊詩卷後　乙亥

詩如營造屋舍、堂奧廊廡、規模宏遠、望而知其爲豪門巨室、然非積之有素、蓄之有餘、則雖勉強假貸而爲之、終見其寒窘也、來詩所不足者、典雅莊重之風、而若有餘者、閑澹平易之調也、譬如間架結構粗得其所、而桂礎脆弱、不成廣廈大屋、蓋由積之薄、蓄之淺、取材狹、用力小、故雖時有修飾可喜之語、而終乏雄深浩博之氣、讀書破萬卷、下筆如有神、此雖少陵夸詡之言、後生學之、受用儘多、夫閑澹平易、亦豈易言之、大曆元和翩翩才子、而能以閑澹平易名家者、錢劉韋柳元白數子而已、眞能閑澹、眞能平易、則何所不可、而今之所謂閑澹平易者、大率淺近膚弱之言耳、欲救其弊、須以曲雅莊重臨之、李杜高岑王常孟是也、古今論詩不勝浩繁、而嚴儀卿斷以盛唐爲宗、眞爲百世不易之確論、故欲學詩、取材漢魏六朝、取法李杜諸公、沈潛反覆、優柔厭飫、壯其氣、厚其力、溥博淵泉而時出之、則彀有正鵠、而箭無虛發也、雖然詩小道也、雖有可觀、不如文章之爲大、記事議論有益有用、苟不以利名爲心、則莫非進德之基矣、亦有大於文章者、布在方策、子其勗哉、

書釋蘭山詩卷後　丁丑

丙子秋、蘭山師浴于伊香保溫泉、問其歸期、杳不可測、吾輩相與悵然、歎其孤雲野鶴不可羈縻而已、明年春有人告曰、師還矣、吾輩亦躍然喜其決歸之蚤出於意表也、越數日適相見、不敘寒溫、首問林壑之勝、師爲開說、曆々如視、次及詩、笑而不答、固靳之、徐搜破篋中、出赫蹏書、乃其稿也、蠅頭細字、塗抹黮昧、幾不可讀、口授之、得其旨、陡覺浩然其態、飄然其趣、置身蒼

巖翠壁之間、吐呑雲煙、而嘯傲澗谷也、夫伊香保僻處上野、而以溫泉聞、四方之輿疾來浴者、日以百千數、能知山水之美者既鮮矣、矧能賦詠者乎、師能知之賦之、而人無知之、豈非寥々寥知者哉、然知與不知、於師無所軒輊、正以不知於人為自得、而況表襮衒鬻之為哉、師固出世人也、遺落形骸、逃避聲聞、求其詩、不得已而出之、既亦棄去、一無所顧、吾輩可以自省矣、余讀其詩、懼湮沒而蠹蝕、謄寫以與同志者觀之、若夫法之老、格之高、律之精、語之奇、則在觀者能自得之、贊一語則腐矣、

書村剛堂詩卷後　己卯

窮覽巉巖絕壑者、非徒決眥凝睇、將以壯吾氣、恢吾量、一吐胸中奇也、以史遷之才、周覽天下山川、與燕趙豪俊遊、然後能成一家言、山水之交相賛有以夫、戊寅秋、剛堂村子扈從西山公、遍歷深山大澤、登鷲子八溝、下諏野奥區域、踰黑澤嶺、觀袋田水簾、棧金沙之險、尋佐竹之古壘、堙嵐霧雨、丘陵林麓、以至川泳而雲飛、幽遐瑰詭、可喜可愕者、一於詩焉寓之、余抄秋還自武江、謁公、從容諭曰、良直頗讀書、兼能詩、使之縱觀館庫書、涉獵皇朝事迹、則操史筆書成敗可跂也、余忝父執而同餐、拜命之辱、銘于心、歸而讀其詩、典雅清麗、未必不有江之助、異日紬石室金匱之書、騁摩研編削之才、在能擴而充之矣、

送村篁溪之江戶序　壬午　（史論）

彰考館之設久矣、編纂非不勤、考覈非不精、而未告成、何也、蓋創立者、難為體裁、而殘缺者、未易修繕、皇朝之古、唯有編年實錄之書、而析為紀傳、彙分區別者、實我義公之所創立也、夫以古之所無、作之於今、體裁之難、從可知矣、宇多醍醐以下實錄、無復存者、僅有家乘之可徵、而稗編叢說之間可採者耳、掛一漏百、裒腋成裘、修繕之不易不亦宜乎、處至難之地、而為不易之事、固非老成更事之人、出其力而負擔之、則數百千年間、治亂興廢之事、豈一朝夕之所能成就哉、義公江海之量、不規規干督促、務求博考而精選、館職之士、遵其旨而盡其才、歲月之久、既有成規、而子傳子常子朴之徒、相繼凋零、當時共事者、

落落如晨星、而先輩宿望、屹爲後生領袖者、唯篁溪村總裁一人而已矣、今上公善繼義公之志、召僚寀於江府之館、仍其舊而置之、於是乎有行者、有留者、篁溪首應其命、而行與留莫不咸得其所焉、嚮所謂至難不易之事、篁溪備嘗之、而盡知之矣、請言其易者、蓋本紀者、本原其始、而紀次其事與時、義例至嚴、筆削至重、而上自神武下至後小松、百王之紀既成矣、闔殿椒屋之隆盛、金枝玉葉之蕃衍、賢愚異轍、淑慝交軌、而后妃皇子皇女之傳、亦既成矣、所未成者、文武諸臣之列傳也、然桓武以上既遂其功、平城以下亦有竣者、表與志姑舍是、較紀與傳、成者居於六七、而未成者纔三四耳、今以才雋之士、遇得所之時、發樂爲之機、乘垂成之勢、老成更事之人、皷舞而作興之、則如踔飄風而下順流、此之謂易、不其然乎、雖然、行百里者、半九十里、末路之難、而勉勵之也、治承養和之軍旅、元弘建武之兵革、英雄並起、州郡瓜裂、忠臣義士、肝腦塗地而不顧、猛將驍兵、勇略蓋世而間出、機務之殷、事業之偉、不可以承平無爲之人物例之、則邪正順逆之辨、抑揚與奪之權、固有所存、而史筆之重、蓋在於斯、若源平之戰、則水館之士、釐正而修飾之、南北之之爭、其責歸于江館、而義公之精神膽識、歷千載而不堙沒者、蓋亦在於斯、篁溪勉乎哉、其以是言、語于同螽栗子、相與戮力協恭、而告以成功、則今者之行、豈不光明俊偉也哉、

送鵜稱齋序

築百雉之城、作萬丈之堰、雖功役並興、畚鍤雜還、而非有精悍彊敏、奮不顧身者、起而董之、則怠惰罷做、終不能成也、功役之於人猶如此、而況舉數百年之事、著爲一代之史乎、苟非學識俱到、聞見有餘之人、作而振之、亦不能成也、今彰考館之爲事是已、然則終不可成乎、曰成乎哉、其成可指掌而定矣、凡在館奉職之士、莫不抱負其才、感載眷遇、黽勉勤恪、思有以報之、而稱齋鵜子、特其尤焉者也、始余與稱齋、漁獵于編削之域、熟知其所爲矣、事之錯綜紛亂者、必求其緒而究其蘊情之隱慝闇蔽者、必探其賾、而中其竅、文之繁碎厖駁者、必剗其穢、而撮其英、辭之支離抵牾者、必籤其僞而擇其要、孜々矻々、窮年歷紀、而志

益壯、勤益精、殆非二所レ謂精悍彊敏奮不レ顧レ身者一耶、每二對レ案披一レ策、朱墨交下、決レ疑振レ滯、而風力局幹、未三嘗少弛二於レ是乎館下之士、相率磨勵激發、並驅爭レ先、而用三力于二研覈之塲一、如レ此而史書之不レ成者、未二之有一也、今茲稱齋奉二公命一、與二僚案數輩一、赴二江府之館一、挈レ家而行、行且有レ日矣、余始聞レ命、悵惋懼下水館之無二其人一、而終或至上于二懈弛一也、既而喜曰、江館水館、其事一也、江館之偉功、水館之底績也、水館雖レ非レ衆、豈無下一二英俊、精悍彊敏、如二稱齋一者出レ於二其間一、作而振上レ之哉、然則稱齋之於二館職一、無二往而不一レ可者也、達レ於二執政一、聞レ於二明君一、涵以二溫潤含蓄之氣一、發以二渾厚敦厖之風一、則其功豈止レ於二史書一而已哉、余病不レ能レ觴、姑以二是言一贈レ之、

送二湖溫卿一序

學所二以適一レ用也、自二灑掃應對一、至二於從政涖民一、莫レ非レ學也、學而不レ濟レ乎レ用、猶二舟而無一レ楫也、雖二衣帶之水一、不レ能レ涉レ之、安敢犯二江河之險一、而凌二萬里之浪一哉、嚮者義公汲々乎求レ士、蒐二羅四方之英俊一、士之名レ於二文藝一者、亦樂爲二之用一、而萃レ於二府下一、故號爲二多士一焉、然義公之愛レ士、將下資二其才力一以成中皇朝之史上、而其用不レ止レ於レ此也、史局之事、有レ時而竣、委質之責、終レ身無レ盡、上之用レ人、隨二其才能一而器二使之一、有二文事一者文レ之、有二吏幹一者吏レ之、藉有レ人曰、我以二文學一進、吏事非レ所レ堪也、則豈通濟之具也哉、湖溫卿、後生之雋也、以二文藝一仕二于府一、義公爲レ才而甄二拔之一、公爲レ能而優二郵之一、從三事於二江館一、與二僚明一俱行、以三余有二推輓之素一也、來告レ別曰、何以贈レ我、余嚮焉無二以應一、然嘗聞レ之、欒鍼使レ於レ楚、令尹子重問二晉之勇一、對曰、好以二衆整一、曰又何如、對曰、好以レ暇、及二鄢陵之役一、見二子重之旌一曰、行人不レ使、不レ可レ謂レ整、臨レ事而食レ言、不レ可レ謂レ暇、請レ於二厲公一、執レ榼承レ飲而還、蓋整者近レ於二持敬一、而暇則從容自得之謂也、士君子苟能敬以直レ內、從容以應レ物、則雖二流離顚沛一、庶幾可二以濟一レ用、而不レ負レ所レ學矣、而況於二重熙累洽、四海又安之日一哉、余誦二整暇二字一久矣、張思正所レ謂勤謹和緩、或可二以レ此釋一レ之、子能擴而充レ之、進修而不レ已、則其所レ至豈可レ量哉、

送二佐元達一序

古之良史、必於二南董一焉稱レ之、何也、貴二直筆一也、

何謂直、不虛美、不隱惡、據事書之、其邪正曲直、彰于千載之下、彼秉鈞軸、操斧鉞、殺生與奪、無不如意、而有所不敢者、蓋爲是也、故以桓溫之勢、不能奪之於孫盛、以張說之權、不能回之於吳兢、史之貴直、如此其嚴矣、擧而措之事業、則在晉爲叔向、在衞爲史魚、在漢爲汲黯、降及曹魏、有一直臣、曰辛毗、徒戶之諫、射雉之規、直聲震於一時、觀其立身、自有本末之語、則剛烈不可屈之氣、溢于言表、凜乎如見其人焉、元達、南紀之產、而游學東武、余一見知其俊物、薦之府而與修史書、既而更名曰毗、蓋以其氏偶同辛毗之字也、揣其意、豈有慕毗之直乎、夫直者人之所以生也、內顧而直、氣得所養、則配義與道、而聖賢之事、可得與聞、而況爲毗者乎、子其勉旃、不積跬步、無以至千里、今之史、與古之史異、古者執簡操觚、而直書其事、今者捃摭記錄、錯綜以成之、雖所趨不同、而辨邪正、明曲直、善可勸而惡可懲者、其致一也、子能顧名思義、直以修身、勵史筆、勵操行、自信而篤行之、不爲流俗之所移、則雖古良史之風、固不難至、繇是而進於事業、毗可幾也、豈特毗之可幾也哉、進而至於汲黯、又進而至於史魚叔向、亦可幾也、過乎此者、非余所知、功在子之能修之矣、子其行乎哉、序以勵之、

題詠菊詩卷

永寧石窟之塔廟、鉅麗宏敞、鏡天撐空、以至園囿池塘臺榭竹樹之美、稱於元魏李唐之世、豈非洛陽之名勝耶、而今安在哉、幸有伽藍記名園記等書、猶得考其梗概而蠡測盛衰也、塔廟園池之大業已如此、而況東籬十笏之地、植微物而供采擷乎、雖能悅茂風霜、有時而盡、唯諸君之作則不然、寂午靜夕、展卷玩諷、則藹然香色、溢於紙墨之外、冬藏春發、夏茂秋榮、四時之態雖異、宛然一東籬也、由是觀之、伽藍名園之作、傳洛陽之勝於無窮者、豈爲無益哉、物雖小、可以喩大、是爲序、

謝宅采菊惠夏菊啓　癸未

探支秋圃、護蜂衙於疎籬、修飾夏畦、防蟻垤于幽徑、青秧纔長、紫艶既開、屆茲清和乍晴之天、

興二彼搖落云莫之感一、色映二書幌一、香徹二枕幃一、蓋由二培養之功一、殆奪二造化之力一、燕子窓中風淅瀝、杜鵑枝上雨淋漓、疑二青女之橫陳、瀼々曉露一、駭二白衣之闌入、靄々夕暉一、寧忍摘令レ稀、何况掇盈レ把、未レ汲二南陽之水一、先占二北窓之凉一、賞惟有レ餘、謝何能罄、

和三籟集序

饑而食、寒而衣、皆實際實境、無レ待レ於レ外者也、故世間一切之事、眞知而實歷者、其言不レ假二修飾一、而能中二肯綮一、若下陳湯之策二烏孫一、班超之定二西域一、長孫晟之料中突厥上、皆眞知而實歷者也、故其指二畫山川之險易、邊徼之要衝、彊弱之形勢、勝敗之利害一、不レ遺二絲髮一、瞭然在レ目、發レ於レ言驗レ於レ事、如レ探二囊中之物一也、在二世間事一既如レ此矣、出世間事、其可レ測哉、蘭山和尙少習二禪寂一巖棲谷飮、多歷二年所一、既而見レ亡二執謝一、萬緣俱空、唯於二山林一有二未了緣一、頃年來二住常之太湖一、茅廬竹扉、猿鶴之與處、其不レ暇二于應接一者、唯雲煙之來去耳、默坐靜觀、人境兩忘、日閱二石屋栢堂山居作、暨中峰四居詩一、劈頭追和、信レ手拈出、於レ是乎山林之性情、雲煙之態度、入二其彀中一、一無レ所レ逃、自二夫寒嵐晴月、竹雨松雪、泉湧瀑飛、石蹲巖跱之狀一、以至二樵徑之幽邃、鳥道之窅冥、孤峰絕壑、龍蛇騰而虎豹伏、奔放奇崛、瓌瑋變幻之極一、靡レ不五覼縷臚列而獻三能奏四レ技於二杖舄之下一矣、積レ久成レ編、俾二余弁一レ之、夫追二和古人一、昉レ於二蘇東坡一、盛レ於二陳晞顏一、非四徒較三工巧於句律之間一、要在下精神脈絡與二古人一相接何如上耳、余樸樕武夫也、既不レ能レ通二世間事一、况於二出世間之人之詩一乎、然余嘗聞二諸老之詩一、皆從二清淨胸中一流出、故叢蘗元禪師榆楊而褒二輯之一、名曰二三籟集一、今師之所レ和、亦從二清淨胸中一流出、孤往高寄、乃迎纏解、而精神脈絡、直與二古人一相接、山林高尙之致、泉石幽閒之趣、非二眞知而實歷者一、烏能至レ於レ此哉、蔚乎其光、蒼然其色、雄深閎奧、瀏亮縝密、非二彼承レ虛接レ響之爲一、則知下其於二單傳直指之妙一亦能圓通無碍、而縱說橫說無上レ非二實際實境一矣、

十竹居士佐佐子碑陰　甲申

君姓良岑、出レ自二大納言安世一、其孫玄理、典二尾張丹羽郡一、十三世孫時綱、居二郡之前野一、以レ邑氏、曾祖加賀、仕二織田伊勢守信安一、娶二佐佐陸奧守成政姊一、祖備前其所レ生也、因冒二佐佐氏一、成政卒、仕二加藤

肥後守清正、皆以二勇敢一聞、朝鮮之役、備前守二蔚山一著レ名、考直尙逮二事肥後守忠廣一、封除、事二生駒壹岐守高俊一、封又除、織田出雲守高長客二遇之一、居二菟田一號二義齋一、有二七子一、君於二倫次一爲レ五、妣大木氏、寛永十七年義齋去二讃岐一、五月五日、泊二舟一小島一而生レ君、小字島介、年十五、投二妙心寺一爲レ僧、名祖淳、參二黄檗元禪師一、更二超格一、去而隱二多武峰一、持律精苦、講二究毅相一、著二六物輯釋一、行レ於レ世、一日讀二梵網經一、至下殺二父母兄弟一亦不上レ得二報讎一、慨曰、是豈人理哉、我世業レ武、儻不幸有レ讎、忍レ不二之報一乎、又讀下論語子路問二鬼神一章上、忽然有レ省二死生之理一、遂著二立志論一、毀二衣鉢一養レ髮、更二名宗淳一、字子朴、稱二介三郎一、杖レ劒遊二江戸一、水戸義公聞而壯レ之、辟二藩府一、居二近侍一、總二裁彰考館編修事一、奉二使四方一求二遺書一、所レ得最多、及二義公致仕一、參議公擢爲二小姓頭一、使レ侍二西山一、眷遇益隆、以レ疾終レ於二元祿十一年六月三日一、年五十九、葬レ于二久茲郡增井邑勝樂禪寺一、始娶二志村氏一、先歿、後娶二淡河氏一、無レ子、生二二女一、參議公命二姪宗立一爲レ嗣、君夷曠而耿直、不レ拘二細謹一、與レ人接表裏洞徹、有レ不レ可輙敢言、其侍二顧問一亦然、強記博洽、精レ於二譜牒一、秉二史筆一能決二疑義一、淹二貫古今一、議論風生、好薦二達後進一、出二其汲引一者十餘人、多知名之士、善飮レ酒家貧晏如也、晩年號二十竹先生一、自著レ傳、雖下職在二編削一、功不上レ被二於物一、而磊落慷慨、有二毅然不レ可レ奪之風一、豈所レ謂古之人者歟、若レ君者可二以勵レ世磨一レ鈍矣、

與二山崎玄碩一書

去年秋竹間子致レ書、使レ序二省菴文集一、諭以二同門之舊一、僕以爲、非二大手筆一不レ能二擔當一、顧僕菲才不文、庸詎塞レ責、沈吟再四、謀レ於二同僚一、皆勸レ奉レ教、是以回レ書許諾、而不レ意竹間子宿痾纏綿、遽赴二修文之召一、披二台兄三月初一書一、驚訝悼惜、悲不二自勝一、然書中謂、易簀之際、回書適到、聞二僕允諾一、頗有二喜色一、且遺命諄諄、使下借二文恭文集一以搜中校往復之書牘上、想其尫羸困憊、危在二旦夕一、而繾綣以レ此爲レ念、非二至性血誠一、何能如レ此、而僕亦竊有レ感レ於二掛劍之義一、故不レ揣二謭陋一、勉強成レ之、今錄レ稿奉寄、唯冀留意裁削、使レ合二繩墨一、則爲二幸甚一、其中有二不安者一、一一開二示於左一、省菴老成醇儒、不二唯九州之地一、至二於東海之濱一、亦聞レ名而欽慕、以二張霞池之才學一、

猶推其名德稱先生、況在僕後進、宜稱先生者、然壓於文恭先生不得稱、故擧其號、於心爲歉、凡序之爲體、抽繹其緒、發揮旨趣、辭達而已矣、不必湊砌事實、堆疊操行、而省菴百行修飭、其留住先生於崎港一事、尤彰灼、在人耳目、其間多少窒礙、多少調停、悉心經營、遂成搢紳美譚、而悠悠之徒、或以省庵爲好名、以先生爲悅其賑窮、則豈不與契合之分相戾哉、近有芝山會稿行于世、粗載先生事、繆妄之甚、固不足較、而不知者恐爲所惑、故歷擧先生事迹、以及師弟相與有成之美、冀俾觀者知其顚末不爲浮言所撓也、古人文集、多附行狀年譜、其懿德茂行可以就見、而省庵卑謙敦篤、遺訓一篇、其見卓越前古、使人歎服不已、則不得不於序中述素履之梗概、而筆力不逮、遂多冗語累句、不能簡潔、恐非序之正體、若不痛下筆削、則不中用也、希將此意轉達諸門人、芟繁剪蕪、務使剴切俊爽、則僕意願足矣、第與竹間子一別十年、東西契濶、未罄平生所懷、而奄忽下世、然諸旣徵、不經點定、是則終身之憾也、僕少而孤、不聞過庭之訓、其事先生僅在總丱之時、前後不滿三年、而以養病歸鄕、旣長往來江府、則拘牽事務、不復得侍絳帳、是以學業荒疎、非如三省剛伯弘濟輩、親炙講肄積年累日之比也、序中所謂一無所聞者、固非謙辭、其後三省剛伯各歸而事其主、弘濟不幸凋謝、其親授句讀者、唯僕一人存焉耳、故先君義公命僕撰先生碑銘墓誌、校讐文集、而承乏負重、不勝其任、惴惴焉累先生之盛德是懼、鎭西關東千里遼邈、恐台兄不聞其詳、概以同門觀之、誤爲河汾之程仇、則不幾名實相乖乎、故僕自叙、刺刺不能休、省庵以丙申歲、自京師游學而還、規模既有定、僕方以其年生、而省庵精進勇往、薰陶先生之門亦有年矣、非夫三子者之所能及、況於僕哉、所謂齒德胡越者、實非矯飾、而得託空言以與斯文者豈非幸歟、聞竹間兄令嗣、齒及志學、三世通問、實所感愴、而庭淑之懿範、外家之敎養、他日有能成立、而繼乃祖乃父之芳躅者、不待蓍龜而知也、書不盡意、統容炤亮、

白瑪瑙硯屏銘

頃年就ニ進藤大和守泰通一、請レ賜ニ近衛右大臣家熙公草書一、癸未夏、公親書ニ駱賓王冒レ雨尋レ菊序一賜レ之、拜而藏レ之、明年春進藤刑部大輔長之傳ニ鈞命一、使下代ニ家熙公一撰中硯屏銘上、長短各一首、謹撰呈擬上、

物各有レ能、不レ局ニ一隅一、隨レ器濟レ用、功與レ之倶、是誰礲斲、瑳瑳其質、障レ風辟レ塵、循レ名責レ實、我則不レ然、照夜尚白、蕃屏弘農、張ニ其右掖一、華燈生レ暈、墨海湧レ雲、溢涸不レ測、濃淡難レ分、繄爾晶瑩、用相窺映、玉奩開レ鏡、毫末端勁、從ニ事於ニ斯一、永無ニ玷缺一、月石風林、同軌異轍、柳文梓人傳、家不レ居ニ礲斲之器一、說文、瑳玉色鮮白也、釋名、屏風障風也、嶺表錄異、犀角辟レ塵、蜀志諸葛亮傳、循レ名責レ實、盧鈞不レ欺、杜子美畫馬圖引、曾貌先帝照夜白、註照夜白明皇馬名、史記殷本紀、易ニ服色一上白、上與レ尚同、左傳、以ニ蕃屏一周、韓文毛穎傳、弘農陶泓、漢書地理志、張掖郡註、張國臂掖、故曰ニ張掖一、詩話、唐中書門下二省、如ニ左掖右掖一、韓退之詩、夢覺燈生レ暈、事類賦成、墨池於ニ一紐一、梁書朱异傳、玉海千尋、窺映不レ測、歐陽永叔月石屏歌、皎然寒鏡在ニ玉奩一、柳子原筆詩、毫末應レ傳顯兔靈、蘇子瞻有ニ月石風林硯屏詩一、

白雲兮怡悅、晴雪兮醒藉、賚ニ爾明一、管城不夜、漢書地理志、東萊郡不夜縣、註古有レ日夜出ニ見於ニ東萊一、故萊子立ニ此城一以ニ不夜一爲レ名、

寄ニ進藤刑部大輔一奉レ謝ニ近衛右丞相手書一啓

伏以河嶽鍾レ英、夙居ニ鼎鼐之任一、星緯垂レ象、坐握ニ鈞衡之樞一、苗緒綿延、多武峰樹益茂、華冑殷盛、三笠山月彌高、晒ニ金張於ニ關西一、累世達府、揖ニ王謝於ニ江左一、奕葉槐陰、六條統ニ五流之宗一、一言繫ニ萬機之重一、恭惟、右丞相陽明閣下、天爵固有、人文丕隆、威鳳表儀、祥麟挺質、劒佩襲美、臺閣挹ニ蘭蓀之芳一、棟梁比レ甍、廟堂賚ニ橋梓之道一、協贊啓沃、移ニ溫清於ニ經綸一、黼黻猷、發ニ婉愉於ニ將順一、矧夫鹽梅調燮之暇、政李輔弼之餘、說ニ禮樂一而敦ニ詩書一、紬ニ金匱一而披ニ玉牒一、諫ニ習朝憲一、諳ニ典故于ニ靑箱一、好ニ尙文辭一、誦ニ箴規于ニ丹扆一、加レ旃津ニ逮石室一、游ニ息墨堂一、鐵畫銀鈎、褫ニ夏井之書聖一、牙籤錦褾、壓ニ宅嗣之芸亭一、古既所レ稀、今豈易レ遇、宜其承ニ博陸之長嫡一、守ニ畫一之良規一、覺濱海部人、甕繩寒士、凡馬駑下、謝ニ跂望於ニ騄駬一、蟠木離奇、忝ニ先容於ニ左右一、過蒙ニ休寵一、謬荷ニ殊榮一、親揮ニ含霧之毫一、遙分ニ臨池之澤一、怒猊渴驥、凌ニ越千里一而來、驚鸞戲鴻、摩ニ騰九霄一以至、逼ニ鍾王之姿態一、蓬葦生レ華、競ニ顏柳之精神一、篋笥增レ價、淋漓璀璨、落花與ニ飛雪一繽紛、娟秀森嚴、新月將ニ長松一映帶、俯輸ニ悾款之銘鏤一、仰憑ニ神物之護持一、伏冀勳庸顯崇、推ニ冠冕于ニ百辟一、杜石鞏固、垂ニ模範于ニ千秋一、胃ニ瀆黃屛一、僥ニ倖玄鑒一、總祈ニ

執事之鎔鑄一、無レ任二賤吏之氷淵一、

帝號議　乙酉

本紀、神武至二仁明一、皆併三書追諡於二御名之上一、曰二神武神日本磐余彥天皇、綏靖神渟名川耳天皇一、蓋上世遼邈、名諱不レ詳、如二神武諱彥火火出見尊一、絕無而僅有、以二舍人親王博洽一猶不レ得レ知、故至二仁賢紀一、書曰、億計天皇、諱大脚、字島郎、注曰、自餘天皇不レ言二諱字一、至レ此獨書者、據二舊本一耳、然其御名、稱號之類、而非二諱字之謂一也、及ヒ神武元年登三極於二橿原宮一、號曰二神日本磐余彥火火出見天皇一、則是如三神日本磐余五字於二彥火火出見上一、稱二其功德一、判然可レ見、綏靖以下、名稱混合、不レ可二得而知一、如下懿德稱二大日本彥耜友天皇一、孝安稱二日本足彥國押人天皇一之類上是也、名諱既不レ可レ知、上レ諡又非二當時之事一、則不レ如下一從二舊史一書上レ之、然冠三追諡於二其上一、則竊謂不可、書二神武天皇諱彥火火出見一則可矣、綏靖以下不レ得レ書レ諱、故連二書追諡一、以掩二其曲一、非レ僭則誣、不レ可レ謂二公行之書一、按魏書道武天興元年、追二尊拓跋毛以下二十七代一爲二某帝一、書曰二聖武帝諱詰汾、神元皇帝諱力微一、今書二綏靖神渟名川耳天皇一、則猶レ書二聖武詰汾皇帝、神元力微皇帝一、（書二詰汾皇帝、力微皇帝一則有、如下詰汾皇帝無二婦家一、力微皇帝無中舅家上是也、書二諡其上一則無、）史家無二此書法一也、本館往年之議、以爲不レ冠二追諡一則不レ知レ爲二某帝一、故連書、及二壬午再議一、每紀末書曰、追諡曰二某天皇一、則與下開卷揭二某天皇本紀一者上相應、而至二次紀一、書二某帝子某帝幾年一、（如ヒ綏靖紀書三神武帝第五子也、神武帝二十二年立爲二皇太子一、下倣レ之）承レ前接レ上、無下復不レ可二差別一之累上、則追諡不レ當レ冠、毅然去レ之而不レ疑、一從二舊史之文一可也、續日本紀文武聖武光仁三帝、皆書二當時所レ上之諡一、（元明書二日本根子天津御代豐國成姬天皇一、元正書二日本根子高瑞淨足姬天皇一、亦追尊之號也、然無二上諡之文一、蓋闕文、）所レ謂諡者、尊號之比、而非二諡法所レ議、然因二循舊典一、書レ之可也、但聖武書二天璽國押開豐櫻彥天皇一則不可、宜下據二廢帝追尊之文一、（天平寶字二年）書上二勝寶感神聖武皇帝一、寶字稱德孝謙皇帝、亦廢帝所レ上尊號也、曰レ父曰レ子、尊無二等差一、而一書二其諡一、一書二尊號一、亦無二義例一、（續日本紀如レ此）況當時記事、既有二聖武皇帝之文一、（續日本紀天平神護二年四月、有二一男子一、自稱二聖武帝之皇子一）本館修撰、何憚何嫌而不二敢書一乎、追二尊草壁皇子一、亦同日之勅也、聖武不レ可レ書二追尊一、則草壁亦不レ得レ書二岡宮天皇一、是不レ可レ不レ議也、然則書二某諡天皇諱某一、當レ起レ於二何世一、曰、起レ於二桓武一、其義何據、

據類聚國史也、續日本紀書桓武曰今皇帝、當時敕撰之書、固當如此、日本後紀雖不可得見、散在類聚國史者、可以類推、淳和桓武之皇子也、而皇太子上表、有桓武聖帝之文、帝王部、天長二年十一月、皇太子臣正良言、自桓武聖帝、訖於當今、自餘薨卒部、天長年中、書桓武皇天皇寵之、書桓武天皇之時、類似不一、平城、當時天子也、而書平城天皇崩、帝王部諒闇條、天長元年秋七月甲寅、平城天皇崩、互見太上天皇條、蓋平城宮名而非諡、猶稱嵯峨淳和、而宮名與諡並行而稱者、蓋自日本後紀始、續日本後紀仁明崩下曰、善書法、學淳和天皇之草書、其稱宮名、亦猶日本後記書平城天皇、至續日本後記、則揭仁明天皇、而書天皇諱正良、文德實錄、直書文德天皇諱道康、據之則桓武以後書諡與諱、斷無可疑、釋日本紀以爲、神武等諡、淡海三船奉敕撰、蓋在光仁桓武之朝、則神武至元正、皆得書追諡曰某天皇、聖武孝謙廢帝、不在此例、光仁嫌於追諡、然日本紀續日本紀兩部正史、看爲一例書之猶可也、桓武以後、決不得書追諡、故曰、斷自桓武可也、今桓武紀書桓武日本根子皇統彌照天皇諱山部王、平城紀書平城日本根子天推國高彥天皇諱安殿、而嵯峨無諡號、則書嵯峨天皇諱神野、至淳和仁明、又書諡號、如桓武平城二紀、義例不一、書法乖錯、且如仁明諡號日本根子天璽豐聰慧天皇、續日本後紀所不載、僅見一代要記、歷代皇紀、紹運錄、不依正史爲斷、而據稗叢書之、亦未見其可也、管見如此、當書桓武天皇諱山部王、而書所上諡號於崩葬之下、平城以後、皆倣此例、如仁明諡號則引三書、注於崩下、非疑三書所載、而正史不載者必當有故、故曰註之、庶幾去就適宜、而體裁近正矣、蓋御名至重、奉諡至大、書法所由起、義例所由出、不可不謹嚴也、故議、

論痁鬼文　乙酉

水滲堤壞、蟲蝕樹僵、雖朽弊之有漸、亦防禦之失術、嗟爾痁鬼與我何讎、匿影潛形、擣虛伺釁、旣爲顓頊之冑、胡肆擣杌之凶、未成儒衡席上之交、適從何而遽集、素無叔夜柳下之分、何所見而歘來、始焉毛髮竪而手足龜、齒牙戰而肌膚粟、踞陰崖之氷柱、坐沙漠之雪氈、旣而鎔金石於肺腸、鼓鑪鞴於胷鬲、曬暘谷之赫日、墮深甑之蒸沙、雖斯須其可堪、矧虐焰之難熄、厭裘葛之頓異、駭炎涼之並臻、頭岑岑而氣低垂、安得孔璋之檄、視茫茫而心怔悸、孰披輞川之圖、搜天漿于窈冥、

挹三寒露于二夢寐一、宛轉怏鬱以羸憊、若三有レ物而觸二現聽一、於レ是屏レ枕揮レ筵而諭曰、我爲レ爾謀、不レ如二速去一、我有二挑茢一、足二以祈禳一、我有二糗粻一、足二以資送一、逡巡底滯、我亦有レ爲、湯藥勦二其中一、礦艾環二其外一、攻擊四起、驅除百端、爾雖二跳踉一、計將二安出一、睢肝桀黠、有レ時而窮、我奠二爾居一、須レ安二其處一、清波白石、裳衣潔而門畿熒、（韓遣二瘧鬼一詩、湛湛江水淸、歸居安二汝妃一、清波爲二裳衣一、白石爲二門畿一、）大澤深山、龍蛇蟠而虎豹嘯、躡二雲嵐一而浴二霧雨一、跨二鸞鶴一而驂二虯螭一、夕餐二煙霞一、朝飲二沆瀣一、舍レ此不レ返、是謂二迷塗一、翩其去兮莫二暫停一、歸埃軋兮無レ爲レ癘、

復二山混齋一書 丙戌 （史論）

昨承レ諭參州小豆坂之戰、信長記、信長譜、織田家譜等書、爲二天文十一年一、德川記爲二十六年一、紀事頗詳然以二信長記、信長譜、先輩所レ撰、艱レ於二取舍一、故開二設兩端一、以垂二下問一、援以二歐陽五代之事一、有二根據一有二見解一、議論鑿鑿可レ喜、所レ謂入二吾室一、操二吾戈一、而伐レ我者、將下釋二旗鼓一而解去上、其鋒殆不レ可レ當也、竊謂、諸書爲二十一年一者、皆承二信長記之誤一、然非二作者之過一、而後人之妄爲也、何以知レ之、信長記天文下注二壬寅一、不レ書二幾年一、而直書二月日一、其八月二日出レ兵、十日會戰、諸書皆同、但年有レ異耳、蓋當二選述之時一、駿參之載籍、未レ易二輙見一、得二之於織田家之傳聞一、而無レ所二參互考案一、故寧闕レ疑而不レ書レ年、作者之用意頗愼矣、意者、輕薄之徒、妄加二壬寅二字一、以補二其闕一、壬寅乃東照公降誕之年、是時道幹公未下與二信秀一構上レ兵、事實大牴牾、當二羅山先生撰レ譜、別有レ所レ據而然乎、抑亦以二壬寅二字一、吾推爲二十一年一乎、二者未レ知二何如一、而其爲レ誤決可レ知矣、如二楊燕奇碑一、實應貞元、紀年雖レ有レ誤、而無レ損レ於二韓子之文一、羅山之博洽、貫二穿古今一、其間豈無二一二所レ遺、亦無レ損レ於二羅山之學一、後進晚輩、不レ究二十六年之實事一、而泥レ于二十一年之虛文一、則其繆愈遠矣、僕非三敢輕二議前輩一、唯以二事實所レ在爲レ據、初道幹公避二叔祖內膳信定之亂一、依三義元于二駿府一、天文十年得レ還二岡崎一、根本未レ固、人心動搖、結二婚刈屋一、以資二輔車之勢一、未レ遑レ侵二伐鄰境一也、十四年、信秀聞二內膳死一、攻二拔安祥一、兵釁始見レ于レ此矣、十六年、道幹公叔父藏人信孝、與二信秀一連レ兵、以窺二岡崎一、道幹公患レ之、乞三援于二義元一、於レ是方有二潮見坂之事一、

義元聞レ之、率レ兵戰二于小豆坂一、參三之於二駿參諸記一、是時東照公實六歲矣、若無二潮見坂之厄一、則小豆坂之役緣レ何起哉、僕久疑二此事一、常有レ意レ于二删修一、而未レ能レ遂、兄能諳二練系譜一、縷折精微、裨二補紀傳一、其功鉅多、今當下博二攷駿參之諸記一、歷二繙祖宗之譜牒一、定爲二十六年一、以糾中其繆上、人非レ無レ過、能改爲レ賢、書非レ無レ誤、能正爲レ善、正二其誤一者、非レ兄而誰、牛溲馬勃之語、雖二謙遜之至一、而參求攻レ疾之譬、暗契二元行沖之言一、眞所レ謂藥籠中物、何可二一日無一也者、兄其勉哉、

石田軍記辨　（史論）

山混齋跋二石田記一、辨二其紕繆一當矣、無稽之言、傳會之說、固不レ足レ論、然其間有下大害二時事一者上、姑擧二其一二一、慶長五年秋、細川忠興與二幽齋一謀、招三妹夫一色式部於二田邊城一手二刃之一、此妄也、五年六月、大旆赴二東關一、忠興從而軍レ于二小山一、未三嘗在二田邊城一、若云三六月以前有二此事一、則是時石田三成退二居佐和山城一、姦謀未レ發、式部何由得レ知レ之乎、縱知レ之、忠興豈得二妄殺一之、縱殺レ之、增田長盛、長束正家之徒在二大坂一、而握二生殺之權一、豈不レ能下以二專殺之罪一罪上レ之乎、夫忠興之深謀遠慮、建二大議一、濟二大事一、皆在三善伐二其謀一、彼未レ形而我形レ之、忠興不レ爲也、此必無之事、而諸書所レ不レ載也、伏見城陷、內藤家長死生不二明白一、故東照公震怒、此又妄也、家長守二西丸一、率二其子小一郞一力戰而死、忠勇壯烈、不レ在二鳥居元忠、松平家忠、松平近正之下一、其子若孫、雖下以二汗馬之功一興中隆門戶上、而其實酬二家長之忠一也、據二當時記載一、家長殘兵、斂二父子屍一、不レ待二按驗一、而火三葬于二圓城寺一、故蒙二一時之疑一、此乃部下之過、而謂三家長不二決烈一乎、至二可兒才藏事一、則益妄矣、曰福島正則怒下才藏違二軍令一斬中敵兵湯原源五郞上而黜レ之、才藏屏二居營中一、伺二諸軍出一、潛出レ營與二敵兵一鬪、自二九月朔一至二十四日一、每日獲二甲騎首一、然其功無レ由レ達、故棄レ首而歸、及三十五日一、公軍レ於二關原一、布レ陳未レ戰、先撿二諸將所レ獲首級一、正則出二湯原首一、召二才藏一詰レ之、對曰、臣蒙二譴責一、不レ得レ列二軍伍一、竊從二諸軍之後一、有レ所二斬獲一、唯恐二人知一、故每レ獲レ首、納三竹葉于二耳鼻一、棄レ之還レ營、想壯士輩拾二得之一耳、正則撿レ之、果得下一竅有二竹葉一者十八級上、公大感賞曰、自レ今當レ稱二篠才藏一、時人羨レ之、

按八月二十三日、正則與池田輝政援岐阜城、黒田長政、藤堂高虎等諸將、戰于鄉戶、是夜正則與諸將屯赤坂、至九月十四日、以俟大旆之至、正則未嘗出軍、才藏何由得許多甲騎首乎、且如才藏之言、所謂拾棄首者也、奪首爲恥、況拾之乎、夫堂堂正則之陣、孰敢貪之、以爲己功乎、是欲稱才藏之功、而損正則之士風也、才藏固壯士、末森之戰、既以勇著、正則聞其名、引爲重臣、及攻岐阜城、與福島丹波、長尾隼人、俱有戰功、蓋納竹葉于耳鼻、異日之談、載在口碑、而記者傅會、以爲此時、眞好事之過也、或云、才藏以竹爲幟、故有此稱、此說近之矣、凡傳記小說、駭人耳目者、多不足信、溫公修通鑑、不取五代史闕文、其如昭宗使梁祖結鞋絲、武后以三矢付莊宗、皆奇特可喜之事、而溫公力辨之、夫王元之名臣也、五代去宋至近、而猶有譏議、況如此書、固無可採、宜其剖棄不行于世也、然間亦有藏之者、余恐爲所惑、故原混齋之意而廣之、

鳥居壽軒家藏文書記（史論）

鳥居忠豊、左近忠勝之子、而彥右衛門元忠之孫也、仕常藩、致仕號壽軒、一日謁西山公、公從容謂曰、聞爾家有東照宮賜元忠文書、恐歲久損壞、胡不繕修、對曰、文書傳在播磨守忠救家、臣家所有、特其所寫者耳、故不甚貴之、公曰、不然、使爾子孫知祖先之閥閱者、非文書乎、何分眞寫、壽軒拜命之辱、既而公薨、歲月倏忽、七換寒暑、壽軒憶公之言、命工裝潢、請理次第記梗概、嗚呼元忠、百戰之餘勇、覇府之元勳、當守伏見城、大敵雲集、元忠竭驅馳之力、奮韜鈐之略、及兵竭矢盡、大呼而出、力戰授首、麾下之士、皆從而戰死、一無逃者、義氣動天地、精忠貫金石、歷千百年、凜凜有生氣、眞所謂大丈夫者歟、初權中納言豐臣秀秋通使城中、請入守、元忠與諸將議曰、島津兵庫頭亦有是言、而終見欺、情僞未可料也、遂拒之、秀秋潛至城下、面陳懇款、元忠報曰、公誠能輸忠、則當俟內府之返旆而鬪、異日之功、公但悉力攻城、我唯一死報內府焉耳、秀秋不得已而退、元忠密使一士縋城而出、至小山營告狀、當是時、秀秋有兵一萬五千、率之入城、勠力守禦、則豈不聲勢甚壯而終能破敵乎、元忠以

爲、寧枕城而死、不爲孺子所誤、此元忠之剛毅明決、人所難及、而世知之者鮮矣、今其文書雖藏在忠救家、而元忠之兜鍪佩刀、藏在壽軒家、及諏訪原偵敵、元忠佩此刀、矢石雨下、鳥銃中及、鉛丸所蝕、宛然而存、自結髮從軍、大小三十餘戰、雖李存審之戰功、亦可庶幾、使人慷慨激昂、加以公命纘治文書、傳至來裔以勵忠義、是大有禆于風化也、壽軒今年八十有六、强健善飯精爽不衰、喜談往事、亹亹不倦、世治俗淳、厖眉黄髮。不乏其人、而如元忠之孫者、當時能有幾人、覺敬其老、而重其人、故併及之、

近衞關白左丞相手書記藤柳軒需

京畿茶湯之盛行、珠光紹鷗爲一時領袖、而至利休居士宗易、其法大備矣、有樂齋織田長益受法宗易、親授之於其臣高橋玄旦、三五郎長好、雲正寺賴長之子、而有樂齋之孫也、幼喜茶湯、師玄旦習之、長而悉通其藝、侍從主計頭織田貞置就而學之、練習精究、致仕益閑曠、日以茗荈爲娛、凡鴻漸之高致、文饒之精鑒。又新之品題、君謨之甄錄、靡不旁羅貫通、當時推爲模範、嘗曰、我有過分者三、以不肖之身、忝泰巖公之孫一也、班列拾遺二也、齒垂九旬三也、遂自稱三過老人、柳軒藤田子亦嗜茶湯、與貞置爲姻戚、以故每至江府、親炙而講肄、及告老而退、則飛函馳書、研覈尋繹、積累之久、得七百九十一則、晚年授以法倘應捨、何況非法之語、曰能守此足矣、既而貞置以壽終、柳軒追憶其言、欲書此八字以榜茶寮、使舊僚進藤隱松就其姪大和守泰通懇祈關白左大臣家熙公書、公揮染賜之、柳軒不勝忻戴、裴潢以貽子孫、使覺記其顚末、覺不文無以揄揚其美、竊惟、陽明殿下。奕葉之輔弼、而當世之鍾王也、其書豈易得哉、柳軒僻居東海之陬、而能得之、非雅尙之篤、烏能至此、暇日揭壁、以招親朋、俯汲那珂之流、仰望二荒之嶽、江山之勝既美、而瓷甌之器亦古、白花凝鼎、綠雲漲碗、玉川子所謂乘風欲歸去者、於此方可覰見、而貞置所傳、其味相尋于無窮、則殿下之書大有發揮其趣者、若夫戲鴻驚龍之勢、則世自有識者、豈待鄙言哉、

投壅茶入說藤柳軒需

人棄之、我取之、無用之用、存乎其中、而天下恒

無棄物焉、一日庵主人得落蘇㑭茶壺略毀損者、繕完以爲佳玩、問名于余、且曰、茶湯者流以形模如此者、比至尊、肩衝比將軍、蓋賞鑑家品藻之辭、而不知名義果何如也、余曰、指斥乘輿法之所禁、假物寓意、情之所原、昔者王莽簒位、就漢元后求璽、后出璽投之地、璽上螭一角缺、後還光武、相傳以爲至寶、今子之㑭茶壺、由毀損而求其義、殆有以相類乎、請名曰投璽、主人曰善、凡茶器之可愛者、在能適其用耳、苟不中用、則雖萬金之價、吾何貴焉、能濟乎用、則雖不直一錢、吾亦寶焉、彼雲山殘月之顯於公侯牧伯、與投璽之晦於甕牖繩樞、至其適意、則一而已矣、余思其言、亦頗有理致、蓋得之於驪黃牝牡之外、而不落前人窠臼者歟、

子花譜代

菊子至難見、有無不可辨、謂之有、則櫛比縷折、而終不可見、謂之無、則春時播種、能得其宜、輙生、大率雖層葉丰茸者、有心則易結子、唯千葉無心者、結子最難、然非此种、雖生不美、故務採其難者收藏之、擇土輕鬆而撒之、班定遠所謂不入虎穴、不得虎子、正言其難、而造物生生之妙、不可窮殫、譬如春秋之於花葉、膀花尋春、肩葉覓秋、兩無所見、而春而秋、固自若焉、此有無之說所由起也、古唯黃白二種、而以黃爲正、朱遜之之格言、蘇長公之所許可也、白菊入藥餌、見齊梁之間、天寶單方圖、該學名稱、而賞其花亦至唐始盛、劉禹錫張蠙等詩可證、雖有紅紫、未如今日之盛、品類之廣、蓋宋元以後、而皇朝亦然、吳菊之稱當以黃爲最、而承和菊名冠于一時、播歌詠者專尚白菊、餘若無聞、蓋當時以稀爲貴、亦如唐人乎、近時花戶射利之徒、務爲播殖、而騷人韻士、間亦自試其能否、於是殊色異品、相踵叢出、皆子花之所致也、然較其多少、紅紫居六、黃白居四、其餘雜色、皆可類推、大抵紅紫開早、不受繁霜、故結子易、黃白反此、故結子難、此又難易之所由判、而忘本趁末、衒奇債新、澆薄之風、可以慨焉、今茲碧於亭老圃下子得秧、無慮三百餘本、黜凡舉雋、選爲三十六種、倣石湖之譜以配歌仙之數、而又選之、約爲九種、史正志所謂律中無射而數九、俗尚九日而用

時之卓者、方可ニ援據一而豐厚重大之英、凛烈秀傑之氣、庶幾不レ忝ニ厥所一レ生、豈非ニ東離之一勝事一耶、其餘二十七種、亦附而譜焉、

棲鸞亭記　壬午

應ニ祀田文業之需一、謝靈運賦遲ニ鸞鸞之棲託一、名取ニ諸此一

古今愛レ竹者、無レ如ニ王子猷一、自呼爲ニ此君一、後世不レ能レ易レ之、蓋竹之爲レ物、直ニ其性一、堅ニ其節一、虚ニ其中一、高ニ其操一、有下似レ乎ニ賢士大夫一、羣居不レ黨、獨立不レ懼之風上者、然而子猷之愛、豈特止レ於レ如レ是而已哉、後世非ニ復子猷者一、不レ能レ知ニ其果何如一也、同齋箕甫氏、酷愛レ竹、所レ居之亭南有ニ竹數百竿一、蒼翠森蔚、掩ニ映簾幕一、每ニ公退有一レ暇、掃レ几讀レ書、展ニ古畫法帖一觀ニ其色一、聽ニ其聲一、灑然若レ有レ所レ得、欲ニ以名一レ亭、而未ニ敢自專一也、一夕招レ余、擁レ爐瀹レ茗、問ニ名於一レ余、時大雪、肌膚粟立、忍レ凍開レ戶而觀レ之、翛之蒼翠者愈可レ觀、而綵彩晶瑩、若ニ鸞鳳之飛舞而停峙一也、顧謂ニ箕甫一曰、是可レ名ニ棲鸞一、座有ニ掉レ頭者一曰、鸞非ニ必可レ棲之族一、無ニ乃付無レ謬乎、曰不レ然、今夫假ニ息數間之屋一、公邸之區、而非ニ箕甫之分一也、南隣數畝之宅、藩屏之植、而非ニ箕甫之有一也、所レ居所レ遇而愛レ之、所レ見所レ得而名レ之、亦何必問ニ鸞之棲與ニ不レ棲焉、且其尊公水戶之宅、宏敞深奥、岡阜壁立、北攬ニ山巒一、東吸ニ海氣一、西眺ニ那須二荒一、南挹ニ筑波之陰一、丘壑之勝既鍾ニ其秀一、而岡上巨竹成レ林、琅玕千尋、檀欒蓊蔚、貫ニ四時一而飽ニ霜雪一、豈箕甫之所レ愛在ニ於彼一、而寓ニ於此一歟、尊公毗ニ輔機務一、將ニ順其美一、臨レ繁處レ劇、謹厚寬綽、他日謝レ事告レ老、歸ニ休于斯一、箕甫從而侍養、克ニ其堂構一、能以ニ忠孝一自立、而顯ニ揚休烈一、則棲鸞之名、不レ爲ニ虛設一、而子猷之所レ愛、亦必有ニ能自知レ之者一矣、余將ニ刮目而待一焉、

奉レ悼ニ　源義公一文　庚辰

謂ニ昊天之莫レ知、何賢哲之挺生、謂レ有レ知而瞻仰、胡遽奪ニ彼宗英一、知莫レ知兮莫ニ能測一、三辰韞兮山岳頹、將ニ觀纏一兮悲緒纏、淚承レ睫兮肺肝摧、繫ニ青社之襲封一、赫ニ東照之餘烈一、轟三文武于ニ宸聰一、宣ニ間世之豪傑一、易三元良於二連璧一、植三大義於二繼紹一、富ニ黎庶一以漸摩、速ニ置郵一而戶曉、充ニ其美一而孝友、操ニ徽猷一以寒淵、膺ニ敵愾之偉器一、若ニ泉涌而轉圜一、恢ニ襟量一以包荒、構ニ堂基一而燕翼、陋ニ黃鳥之殲良一、垂三

模揩于矜式、飫湛恩於虎貔、咸瀝誠而思舊、事靡小而不通、業雖大能究緝、叶間韻徠遺老於明室、隆禮容於饋餉、被風稜於鷄林、讓典故於通信、蔚文藻之天成、發菁華于醇醲、固將門之所無、摩霄漢以獨翀、棹菅江而平視、豈餘子之足數、晒絳灌之無文、紬石室而綦組、覈名器于正閏、稠曠世之宥薰、館髦彥於彰考、旌淑慝以銓總、軼河間之好古、卓大雅之不群、覩伯夷於羹墻、激儒庸以廉頑、叶文韻既逸豫之有度、闢西山而恬退、謝扃鑰于巖扉、面煙嵐之渙霽、慨髀肉之易生、警輿轎之偷安、仰精爽於期頤、倏夜谿之淒[illegible]、嗚呼哀哉。騎箕尾兮森耀芒、本冰凜兮歲將窮。日色慘兮丹旐黯。獨鶴叫兮繐帷空、淵泉咽兮淅瀝、山氣沈兮巃嵷。桂叢牢兮閴無人。梅之粲誰適容、嗚呼哀哉、攀靈轜而莫逮、侍燕寢其曷日、凌感戴於江海、灑涕泗於氷雪、親勤碑兮峴首、孰題墓兮延陵、閉佳城兮英靈、垂不朽兮飛騰、嗚呼哀哉。

澹泊齋文集卷二

與村篁溪泉竹軒書

嚮所諭朱氏談綺序、頃間纔得構成、具稿呈覽、冀兩兄𢖫頭着破、一字不輕放過、冗者芟之、窒者闢之、做成一篇文字、幸莫甚焉、蓋此書、一部三樣湊合而成、頭腦頗多、能文者序之、亦不費力、如僕者為之、瑣屑特甚、不清楚、不曲雅、形格勢局、情文不得流暢、故懇祈兩兄留意裁定、凡作序者、抽其端緒、贊其體製、務欲使人景嚮其書而播傳于世也、僕謂、此書然、不足觀、無可稱贊、而必欲使之刊行者、先君景慕先生之懿德。而廣忠幼學之恢量也、不作序則已、苟作之不得不如此直截說出、本欲不須許多布置、數行半紙便了、但恐不知者見之。以為先生所蘊如此其淺、其徒所聞如此其卑、則無埤于先生、而有玷于先君也、故從節操上說出、略及濟世有用之文章、此與張皇表暴者大相逕庭、而又有說焉、往年在江府、偶閱芝山會稿、其寄鵜貞昌書、

載獨立之言曰、元贇之瑜非面知、然由得傳聞其實也、贇是市井之販夫、瑜是南京之漆工、彼儔奚暇爲學、又奚作詞章乎、此語猶謂不審信否、其謝林上珍何倩甫書曰、陳在洛而曩相會、朱在此而邂面晤、潜察厥言行學術、疑弗端誠純粹、多猥俚之態、乏彥士之姿、僕讀至此、不勝捧腹、其以元贇並稱、可謂不倫之甚、況又極口譏詆、何物么麼敢作如此鬼怪、此輩鼓弄唇吻、原不足計較、然使先君見之、必有一見當處置、惜乎其不及也、今試以一事辨之、所引獨立之言、非誣則妄、獨立與先生相知日久、何得言非面知、其跋安南供役紀事、眞蹟見在、稱先生之持操不一而足、至云言奪氣爭錚々鐵石、今古上下無其事、無其人、凜々大節可稱今古第一義幟、此語何與前言相戾也、獨立雖披剃易行之徒、其反覆未必知此已甚、故曰、非誣則妄、然會稿行世已久、見者貴目賤耳、不知世間自有一等大學問大文章、而悠々之譚不可窮殫、則不得不於序中述節義文章之梗概、此僕所以拳々于斯、而其實在欲校定文集也、春夏以來屢陳鄙意、兩兄旣以爲可、而館事督促、絡繹旁午、故東之高閣、而其成編固兩兄之所知也、特其間有刪補未能盡、訛繆未能正者耳、不過費半年數月工夫、大得就緒、顧僕菲才薄植、雖暫廢格編削之局、無所損於館事、而大有益于文集矣、自遭震火之變以來、祠宇焚蕩、祭奠曠廢、每念及此、悵怏彌日、霄壤之間、能留先生一片精神者、唯有文集存焉耳、係名先生之門人、可以擔當此事者、亦唯僕一人存焉耳、久患耳疾、老境浸逼、一旦溘先朝露、則孰能繼而修整之哉、及今訂補繕寫而藏之、使有時而鋟梓、毫無淹滯之患、則僕平日志願畢矣、今館職諸兄勵精課程、筆削修擧、鱗次成編、今歲所成文武列傳、可敵往時三兩年之功、如此則修撰之竣、亦可指期而定、紀傳完備、館僚解散、則欲擧文集之再校、戞々乎其難哉、且世之媢疾善良、蜚語奇詆者、豈特一芝山而已哉、久則邪正雜糅、皂白莫辨、何澹之疏、雖無損於考亭、而廣微之冊、將有累乎東林、是不可不深長慮也、願兩兄體而悉之、稟明左右、使僕得肆力于文集、則莫大之幸、蔑以加焉、塞甚、善

健飯否、希保嗇、

書增補追加家忠日記後（史論）

中島之敗、鳶巣之捷、伏見之居守、好景伊忠家忠三世相繼死事、忠勇壯烈、如出一轍、而家忠之子忠一、亦慕父祖之風、奮死于難波之役、何深溝之多忠義耶、鶖峰先生本光寺碑、以康保嗇三世殉難擬之、其知言哉、岩津之子孫、皆騰揚龍驤、而此特其翹楚者、宜其胙之茅土而世居方面之任也、初伊忠之赴鳶巣、家忠固請從之、而伊忠不可、釃酒而別、致以他日能報邦家、義氣凜然、如見其面、壯烈不減克用之三垂岡、而忠勇亞於正成之櫻井宿、不意西平有子之美、復見於當時矣、余特欽家忠當疆埸騷繹之日、而能留意注記、霸府基業、班班可見、方其在小田原營、能以靜制動、有古良將之風、及伏見城陷、左右指麾、挺身大呼而出戰、西兵為之披靡、義烈垂于不朽、果能不忝所生、而有光于前烈矣、忠冬之增補、雖頗有汎濫之譏、而纘成祖先之懿範、其志可尚焉、友人佐鄉成精予譜牒、能諳近世之事迹、而得是書、謄寫之、竣其功、僅二旬、余喜其勤而就讀之、重有感於家忠之世篤忠貞也、於是乎書、

與村篁溪泉竹軒書 戊子

篆祉騈集、膏澤溥洽、豐亨豫大、萬彙無不賁以發生、闔新年有命、兩兄邇侍世子、日新之功與陽和共臻、涵養之美可春容而致、揚眉吐氣、何喜加之、舊臘承諭、僕讀通鑑、外總州郡之大體、內正賢豪之系譜、推獎之篤、雖或溢分、而勤苦之習、頗有由焉、幼時嘗侍朱文恭、晝則游惰、夜則昏睡、惟記文恭應接賓客、教授弟子之暇、至夜分所讀者、通鑑與陸宣公奏議耳、當時不知通鑑與味果何如、雖至中歲頗能好之、而稟性鹵莽、未能通曉、常患晉八王十六國南北分爭、五代割裂、朝君臣而暮讎敵、瞻烏未定、攀龍誰適、又患唐以後多賜姓名者、張忠志之為李寶臣、董秦之為李忠臣、朱邪赤心之為李國昌、凡如此類不旁注舊名、則易疑惑、至莊宗賜者尤多、尋復其舊、錯雜難視、故粗舉系譜、旁注族屬、則親疎新舊、粲然可見、便于檢閱、入書以為注脚、而僕則恬然不省、古人謂、通鑑為書、博而得其要、簡而周於

事、褒貶去取、有所依據、故神宗獎諭、以爲前代未嘗有此書、過荀悅漢紀遠矣、按宋朝講筵必說通鑑、何以知之、理宗以葉味道爲崇政殿說書、故事說書之職、止於通鑑、而不及經、味道請先說論語、詔從之、則講經次及通鑑、從可知矣 溫公自言、修通鑑成、惟王勝之借一讀 他人讀未盡一紙、已欠伸思睡、則在當時雖不甚行、而南渡已後盛行、故胡致堂著管見、袁機仲著紀事本末、至朱子綱目、羽翼之功最爲宏鉅、此皆學世所知也、但僕屑々欲言通鑑者、不在正文、而在胡三省音註、三省受父遺囑、研究通鑑、當流離搶攘之時、未嘗廢家學、終能成其先志、其辨釋文、正史炤之舛誤、刪費氏之蹈襲、專爲司馬公依辨誣、眞溫公之忠臣也、管見議論、朱子猶有所不滿、而僕遽敢謂知音註之可否哉、特愛其於興廢盛衰之際、疆弱緩急之勢、成敗利鈍之迹、賢愚邪正之辨、或下二三句、或著數十言、議論精當、剴功明爽、蓋當宋元革命之際、封疆日蹙、志士扼腕、前朝事迹、適與時事相類者、必三復致意、姑擧一二、餘可概見、韓擒虎霄濟采石、守者皆醉、

遂克之、則曰德祐甲戌十二月沙武口之事、亦猶此、所謂沙武口、則伯顏阿朮攻陽邏、從沙蕪口渡江事也、南唐李景達遙爲壽州聲援、擁兵五萬、無決戰意、則曰、嗚呼比年襄陽之陷、得非援兵不進之罪、此襄陽被圍五年、范文虎觀望不救、樊城破而呂文煥降、則宋事不可復爲、當時目擊身歷、感慨悲愴、自不能已者也、李德裕追論維州悉怛謀事、溫公是牛而非李、則曰 元祐初弃米脂等四寨、以與西夏、蓋當時國論大指如此 是時溫公當拜、西夏趙秉常遣使來請、溫公建言、此乃邊鄙安危之機 不可不察、王朴獻策周世宗、取吳蜀幽并、則曰、是後世宗用兵、以至宋朝削平諸國、皆如王朴之言、惟幽燕不可得而取、至於宣和、則與國以殉之矣、其言幽燕形勢、不一而足、晉高祖割幽薊瀛莫十六州以與契丹、則追咎周德威失渝關之險、故論德威爲盧龍節度使、則其注最詳、推其人致、只爲金人入寇、由燕雲兩路、則在得遼故地、宋之得燕雲、雖由晉祖賂之、其實起于德威之失險、而元之入寇、未嘗不由此兩路、則宋朝國勢之弱、其所由來遠矣、是皆探本窮源之

論、絶非尋常註釋之比、其繾綣于國事、可推而知、蓋趙汝愚去而朱子註離騷、三省雖異于此、觸事興懷、能無同乎、他如論信陵君爲綺高縞素、竇融張軌威著西土、揚承勅因父歸命、馮道盧導李愚之優劣、其於君臣父子之間、可謂深功著明矣、至憲宗能太子侍讀韋綬、其言尤有味、韋綬每以珍饌餉太子、又悅太子以諧謔、上聞之能綬侍讀、出爲處州刺史、則曰、觀憲宗之能韋綬、亦知所謂諭教者矣、然觀穆宗之臨政也、習與性成、得非所急者、固在於選左右、誠人君之急務、而習與性成、儲副之所或有、雖古今之不同、等級之有差、啓迪灌沃、養成君德、則無以異也、今兩兄居近密之地、處講論之職、他日進讀通鑑、且爲未晩、冀講經之次、乃說綱目、稍存宋朝說通鑑之遺意、而自然有所融液贊襄、則豈惟館職諸士之幸、抑亦邦家無窮之福也、夫世之讀綱目者既多、讀通鑑者落落如晨星、矧讀音註而縷析錙較者乎、區區之心、竊願、上爲世子開陳綱目大義、下爲館僚勸讀通鑑、則於史筆勸懲、未必不有小補、而文恭看通鑑之意、可復見於今日矣、然而文恭豈專讀通鑑者哉、蓋東漂西落、無書可藏、其從崎港携來破篋中、僅有此二書、而腹中經史、固其所蓄、不過緒之以備遺忘耳、若其生所作文章、朴實誠悫、似從奏議中變化出來、則雖謂之久而得其力焉可也、不知兩兄爲何如、瀆冒要劇、輶褻特甚、伏祈汪度寬茹惟幸、

帝號義例　三項

古昔天皇之謚、未審起於何時、釋日本紀引私記曰、神武等謚、淡海船奉勅所撰、今考諸書、續日本紀、成於延曆十六年、而載神功應神仁德敏達孝德天智天武等謚、古語拾遺成於大同二年、而書神武天皇、姓氏錄成於弘仁六年、亦皆書謚、親長記以爲、神武至文武四十二帝謚、淡海公不比等所制也、無稽之說不足取焉、據釋日本紀、則追謚諸帝、蓋在光仁桓武之朝、不然則廢帝時也、天平寶字二年、追謚聖武及草壁皇子、憲章典故、模倣唐制、革百寮名號、則追謚疑在此時、雖今不可考定、神武至元正、紀首皆冠以追謚、崩下書追謚某天皇、

皇朝上レ諡、始見二續日本紀一、大寶三年、諡二持統一曰二大倭根子高天原廣野姫天皇一、諡二文武一曰二倭根子天之眞宗豐祖父天皇一、至二聖武一、則曰、天皇出家歸レ佛、故不レ奉レ諡、天平寶字二年、追尊曰二勝寶感神聖武皇帝一、諡稱二天璽國押開豐櫻彦尊一、所レ謂諡者、徽號之謂、而非二諡法所レ議也、元明遺詔、諡號稱二某國某郡某朝廷馭宇天皇一、傳二示後世一、蓋遵二古制一、稱二揚功德一、此之謂レ諡、其義可レ見、然元明元正二帝、續日本紀、無二上レ諡之文一、書二元明一曰二日本根子天津御代豐國成姫一、元正曰二日本根子高瑞淨足姫一、至二光仁一書レ諡曰二天宗高紹天皇一、考二前後例一、如二元明元正二帝一、亦當時以二徽號一爲レ諡、而無二明文一者、史之闕文也、續日本後紀、桓武曰二日本根子皇統彌照天皇一、淳和曰二日本根子天高讓彌遠尊一、類聚國史、平城曰二日本根子天推國高彦尊一、雖二上レ諡之文闕不レ可レ見、據下嵯峨以レ有二遺詔一不レ奉レ諡之文上、則桓武平城淳和三帝、以二徽號一爲レ諡可レ知矣、故今斷爲レ諡、但平城嵯峨淳和三帝、稱以二宮號一、故不レ書二追諡一、如二仁明文德清和光孝一、則當時所レ上諡也、故今皆從二其實一書レ之、上世帝諱、不レ可二考定一、日本紀、神武書二神日本磐余天彦皇、諱彦火火出見尊一、仁賢書二億計天皇、諱大脚、字島郎一、註曰、自餘天皇、不レ言二諱字一、而至レ此獨書者、據二舊本一耳、終日本紀、書レ諱者、不レ過二二帝一耳、綏靖以下書二某大皇一者、決非レ諱矣、有下連二書徽號一者上、有二單書レ名者一、如下懿德書二大日本彦耜友天皇一、孝靈書二大日本彦太瓊天皇一之類上、連二書徽號一也、如下成務書二稚足彦天皇一、應神書二譽田別天皇一之類上、單書レ名也、名即諱也、今何不レ書二諱某一、名而非レ名、當時之稱也、神皇正統記、至二仁明一書二諱正良一曰、先レ是名諱未レ正、多用二乳母等姓一爲レ名、至レ此名諱始正、蓋據下文德實錄、先朝之制、每二皇子生一、以二乳母姓一爲二之名一之文上也、夫以二舍人親王、源親房之博洽一、獨不レ能レ考二究之一、千載之下、豈能知三其果爲二名諱一哉、徽號既不レ可レ折、名諱又不レ可レ辨、則冠諡之下、不レ得レ書二諱某一、故除二神武仁賢一外、即位下皆書三是爲二某天皇一、其義何居、據二日本紀一也、繼體紀曰、元妃日子媛生二二子一、皆有二天下一、其一曰二勾大兄皇子一、是爲二廣國排武金日尊一、其二曰二檜隈高田皇子一、是爲二武小廣國排盾尊一、欽明紀曰、堅鹽媛生二大兄皇子一、是爲二橘豐日尊一、勾大兄名也、檜隈高田

稱號也、所レ謂名而非レ名、亦可二以見一、如二其廣國排武金日尊一、皆徽號也、神武元年、書レ即三位於二橿原宮一、號曰二神日本磐余彥火火出見天皇一、推レ類可レ見、唯如下清寧稱二白髮皇子一、顯宗稱二弘計王一、推古稱中額田部皇女上、亦皆從二其實一而書、初稱二某皇子某王某皇女一、如二天武持統文武元明一、據二本書一書二小名某一、元正以下、考二索本書一、皆書二諱某一、考據註レ於二各紀一、今不二一一援引一、

將軍傳義例

賴朝開二霸府一、兵馬之權、移レ于二關東一、天下大勢、至レ此一變、故鎌倉將軍傳、別成二一家一、上準二擬世家載記一、下依二倣藩鎭列傳一、賞罰黜陟、號令法制、逐レ年係レ月而書、姑擧二其目一、則天變地妖、載レ于二帝紀一、故不レ書、專係二帥府一者書、將軍除拜、自レ叙二爵五位一、進至二顯要一、皆書、問注所執事、評定衆、六波羅進退、皆書以レ某爲二某國守護一、及有レ故而罷書、元老重臣之死書、如下將軍詣二鶴岡一、將士獻二垸飯一、及觀中流鏑馬上、恒例不レ書、有レ故則書、游觀[illegible]騎射田獵不レ書、其大者書、其餘取舍、可二以レ類推一、如二賴家之蹴鞠、實朝之倭歌一、觸レ類而書、以著二其實一、賴經賴嗣雖下通レ于二北條氏一、徒擁中虛器上、而命令所レ出、藉以行レ之、據レ事直書、時勢自見、下至二宗尊惟康久明守邦四親王一、皆一例也、

村篁溪碑銘

篁溪、諱顧言、字伯行、稱二春帆一、更二新八郎一、篁溪其自號也、其姓源、其氏中村、世居二近江一、曾大父良政、稱二隼人一、屬二村井長門守貞勝一、謁二平信長公一、遂貫二京師一、大父良忠、稱二小七郎一、學レ醫、號二敎意一、東照宮在二京師一、屢謁見、考諱正勝、號二養軒敎圓一、敎二授子弟一、世以二善良一稱、妣奈佐氏生二一子一、即篁溪也、幼穎敏、有二成人之度一、寬文中養軒君挈レ家東遷、遂爲二武江人一、君謂二篁溪一曰、吾千里移レ家者、欲二汝擇レ仕也、鵞峰林先生有二舊好一、汝師二事之一、學優則仕、汝其勉レ諸、篁溪出就レ學、斷レ虀劃レ粥、研レ精覃レ思、鵞峰先生器二重之一、最受三知于二梅洞先生一、先生歿、又從三學于二整宇先生祭酒公一、業進行修、以レ薦仕二我水戶侯源義公一、日侍二顧問一、燕衎行適、靡レ不二親近一、公置二彰考館一修レ史、篁溪總二裁編修事一、天和中韓人來聘、通二使館邸一、頗失二禮義一、公命二篁溪一擧二三事一詰レ之、得レ稱レ旨、侍二嗣君肅山公一、講二經史一、

授句讀于恭伯世子、及義公告老、數侍西山、恩眷不替、始終如一、自弱冠筮仕、周旋左右、未嘗被徵譴、孝養父母、皆以壽終、官遂名立、克成養軒什之志、義公薨、鳳山公益善遇之、擢列小姓頭、特恩免雨雪入館、以優異之、正德二年正月八日卒、年六十六、葬于淺草妙經寺、元配田中氏、生一女、夭、次配吉村氏、生二子、彥五郎良直、一子夭、後配小村氏、生二子三女、六郎良範有雋才、蚤世、大之助良材尚幼、一子三女皆不育、所著有葦溪文集理珠章若干卷、藏于家、良直好學而文、克纘其業、以父執也、徵銘于余、余與葦溪同職而篤交、其爲人也悉知之矣、博洽多聞、善操觚牘、溫厚謹飭、與物無忤、學術醇正、惡厖而雜者、遇人不見圭角、而持論端直、與之議事、恂恂若不能言、而確乎不可易也、家素貧、尙清儉、不以有無變其節、酷好山水、澹然自逸、尤長於詩、雅麗工緻、蔚有作者之風、在館四十餘年、涉據今古、精練通貫、鳩集簡蠹編、闡幽抉隱、大有功於史策、其在講筵、因事進言、雖無赫赫之名、而磨礲浸灌、久而見其忠藎、豈古之所謂博聞強識而讓、敦善行而不怠者與、抑呂黎所謂幼壯爲良子弟、老爲賢父兄、歷官處事無纖毫過差者與、概其操履、可不謂之君子人乎、銘曰、

沮勸操權于史筆、施爲有俟乎替否、廼邦家之能用才、孰曰不稱其抱負、蘊崇高以自牧、古風蘊兮淳厚、忠以爲寶文以彰、今胡爲乎銘吾友、

書逐日功課自實簿後

陸放翁跋淵明集曰、吾年十三四時、侍先少傅居城南小隱、偶見藤床上有淵明詩、因取讀之、欣然會心、日且暮、家人呼食、讀詩方樂、至夜卒不就食、今思之、如數日前事也、覺事文恭先生亦年十三四、以至十五、纔三年間耳、所讀之書、不過孝經小學大學論語、此數卷、皆先生親點句讀、所口授者也、覺甫十歲、先人疾既危篤、而先生適以是年來水城、先人力疾躍然而喜曰、此千載一時也、稟明政府、以備弟子之列、從至武江、明年歸省、而先人不起矣、間一歲、先生又來水城、以心許先人、遂有吳季札掛劍之愈、携還武江、晨夕課讀、

先生命ㇾ覺作ニ一簿一、援ㇾ筆而題、逐日書ニ其功課一、即此是也　當時並ㇾ几橫ㇾ卷習ニ句讀一者、今井弘濟、五十川剛伯、服部其衷、與ㇾ覺四人、而ニ子者皆無ニ簿領一、不ㇾ知何故於ニ覺一人一有ニ此擧一乎、蓋以下頑鈍無知、不ㇾ能ニ成立一、故督責如ㇾ此其嚴也、然其時共肄ㇾ業者、或死或老　皆無ㇾ聞焉、如ㇾ覺者不ニ齊弗ㇾ馳弗ㇾ驅、眞駑馬之下材、不ㇾ及ニ數子一遠甚、而今玆蒙ㇾ命、校ニ釐先生文集一、紬繹簡點、沈潛反覆、得ㇾ與ㇾ於ニ斯文一、豈非ニ後死者之幸一歟、雖下輕塵不ㇾ能ㇾ增ニ泰嶽之高一、抑亦足ニ以酬ニ先人文志之萬一一矣、今其朱點句讀之書、宛然具在、其餘先生自書緣由　小李將軍畫軸、義公鐫朱舜水遺物也六字押印鐫刻、紫檀筆筩、並是先生歿後、義公所ㇾ賜ㇾ覺者、片言隻字、皆藏而寶ニ護之一、凡吾子孫當ニ敬ㇾ之如ニ神明一、其有ニ淪落喪失一者、非ニ吾子孫一、昔李文饒作ニ平泉莊記一、亦云、壞ニ平泉一草一木一者、非ニ吾子孫一、覺素敬ニ文饒之文章事業一、而至ニ此語一則不ㇾ服、夫以ニ堂堂李唐之大臣一、出將入相、已所ニ瞻依一、而顧戀ニ戀于ニ一樹一石一、曾不ㇾ能ㇾ及ニ麗德公之以ㇾ安遺ニ子孫一、不ㇾ幾ニ明闇之倒置者一乎、覺之所ニ以寶ニ嗇此物一、寢異ニ于是一、而所ニ以戒ニ飭子孫一則一也、咫ニ尺函丈一請ニ肄簡諒一、距ㇾ今四十餘年、亦如ニ數日前事一、而放翁幼時已知ㇾ喜ニ陶詩一、殆至ㇾ忘ㇾ食、覺在ニ當時一、勉强佔畢、倦惟思ㇾ睡、飢惟思ㇾ食、人之賢不肖、相去如ㇾ此逖遠、亦因書ㇾ之以爲ニ子孫之戒一、

濟泊齋文集卷之三

致二藤執政一書二首 癸巳 (史論)

覺在二考館一三十年、縱二觀史策一得レ覩二皇朝異邦之事迹一、徒供二筆墨之資一、未レ試二鉛刀一割之用一、年幾六十、益無レ聞焉、齒髮頹落、精神衰憊、雖レ有二老驥伏櫪之志一、而恐貽二駑馬戀豆之譏一、故修史之暇、唯以二澆菜養菊一爲レ務、至レ於二當世之事一、非レ所二涉歷一、豈敢吐二一言一論二一事一哉、然而飽食暖衣、豢二養妻孥一、皆君上莫大之恩、敢不下竭二犬馬之力一、以輸中螻蟻之忱上、久辱二台臺之知一、恃三其不二必厭棄一、故作二書二通一干二進左右一、冀暇時電覽、

其一

覺聞、仲尼之徒、無レ道二桓文之事一者、覇之與レ王、固不レ可二同レ日而語一、功烈如レ彼其卑也、然而後世公侯牧伯胙二茅土一而有二社稷一者、景二仰桓文之功烈一、咸欲二企而及レ之何耶、誠以下其得二賢臣一而爲二之佐一、合二諸侯一而尊中周室上也、方今柳營之制二天下一、雖レ不レ可レ比二于周室一、而德澤之浸灌浹洽、人心之攀附悦慕、不レ可レ謂レ無二周室之遺風一也、昔者月堂西忠二君、以至二道甫道幹二君一、僅有二三河之一方一、城非二完固一、兵非二衆多一、四境隣敵、而能自立、竟基二大業一者、非レ有二陰謀秘策驅レ神役レ鬼之術一、而以レ誠接レ下、以レ恩撫レ下、世德相承、人心固結、猶二太王之在レ豳也、傳至二東照宮一、英武天縱、人歸二其仁一、神智妙算、戡二定禍亂一、不二數十年一、合二四海於二分裂之餘一、擁二戴天子一、禮二遇公卿一、群雄匍匐而聽レ命、黎元繈負而嚮レ化、其規模之宏遠、聲教之樹立、自二鎌倉室町一以來、所レ未二嘗有一也、徽猷嘉謨、不レ遑二枚擧一、而莫レ善レ於下封建中三藩上、犬牙相錯、磐石相固、雖レ有二跋扈倔強之徒一、而不三敢萌二覬覦之心一者、以下其內外相持、緩急相救、其勢足中以威二服諸侯一、而其重足上以鎭二定遐裔一也、台廟以二謹愼一守二之於初一、猷廟以二英邁一承二之於後一、綱擧目張、仁漸義摩、百年之間、干戈不レ興、民安二其業一、人懷二其惠一、勝レ殘去レ殺之効、於レ斯可レ見、豈非二積德累洽之所レ致歟、近者文廟以二不世出之資一、入纘二大統一、發レ號施レ令、煥乎可レ觀、庶績咸熙、有レ光二前烈一、惜乎享世不レ永、施設有レ所レ未レ盡、天下之人、如レ喪二考妣一、此豈勉強矯飾之所二能致一哉、仁心之及

レ人、德澤之被シ物、不レ期而同二其効一如レ此、幼君在レ上、賢臣在レ下、率二由舊章一、顧若二畫一一、賈生所レ謂植二遺腹一、朝二委裘一而天下不レ亂者、正謂二此時一、而覺區區之心、竊謂君上宵衣旰食、勵精求レ治、而政府諸公同寅協恭、陳レ力贊襄者、亦在二此時一也、夫圖レ治與レ贊レ治、豈可二一日而忽一レ之、何必有レ待二於今日一哉、蓋四海之廣、萬姓之聚、約二之於一レ身、譬猶二一家一、然衣服飮食、不レ可二一日去一レ之者、由レ旦而夕、習以爲レ常、狃レ於レ所レ安、恬不レ知レ省、一有二孤兒弱孫一、主二其宗祧一、衆所二倚賴一、則饑飽寒暖之節、必加レ意而愼二重之一、由レ家而邦、由レ邦天下、在二能擴而充一レ之、則勵精與二陳力一、亦不レ在二于此時一乎、歷二訪之古一、柳營年齡之弱、未レ有下如二今日一者上、藤原賴經二歲赴二鎌倉一、當二此時一、北條義時竊二兵馬之權一、置レ君如二奕棋一、假而爲レ名、徒擁二虛器一、此不レ足レ論也、室町十五世、幼齡之君、不レ爲レ不レ多、而其最少無レ踰二源義尙一、雖レ有二其父義政尙存一、而厭厭如二泉下人一、强臣制レ命、政不レ由レ己、此又不レ足レ論也、唯義滿十歲爲二元帥一、器度卓二越常流一、輔以二細川賴之之忠亮一、故其駕二馭群雄一頗有レ可レ觀、而今輔相大臣、豈無二賴之之賢一、幼君成立、或能十二倍義滿一、則杞人之過慮、無二復所一レ用、而覺反覆究窮、不レ憚二瑣屑一者、亦有レ說焉、天下之大、機務之繁、豈能一一遵二成規一而合二軌轍一哉、臨レ事處レ變、不レ得二其宜一、則執政元老、必將下稟二白三藩一、而服中天下之心上、三藩之中、唯我君上年最高、而德最優、言而爲二天下法一、動而爲二天下則一、一言一動、皆所二瞻仰一、先自治而後治レ人、所レ係重而所レ期大、則圖レ治與レ贊レ治、豈非二今日之急務一哉、蘇子瞻有レ言曰、大臣不レ過レ遵二用故事一、小臣不レ過レ勤二守簿書一、上下相安、以苟二歲月一、此臣所三以妄論二陛下之不一レ勤也、由レ是言レ之、求レ治之道、豈惟遵二用故事一與レ勤二守簿書一而已哉、今四境之內、既無二憂虞一、士庶怗然、各安二其所一、夫何不レ治之有、而覺云云者、更欲二治道之精明隆盛一、而四方之來取一レ則也、君上仁孝寬裕、遷レ善改レ過、明レ於レ責レ己、儉レ於レ奉レ身、此誠希世難レ遘之明辟、而諸公宜レ力有レ爲之時也、往年震火之炎、權宜濟レ事、移レ於二駒籠別莊一、歲月既久、意所二便安一、一旦去レ之、速入二藩邸一、曾不レ吝レ於二去留一、天下之人皆知下愛二戴幼君一之誠上矣、願乘二此機一、恢二弘威公義公之志一、敷二敎化一、

以正風俗、開言路以納諫諍、甄淑慝以覈名實、決壅蔽以通視聽、則雖有難處之事難見之情、必將縷析而水解矣、苟能如此、則不負臨宗封建之懿軌、而植[?]尊周室之美亦可幾也、進而修之、豈惟[?]文功烈、雖聖人精[?]之言、亦可講明、而措之事業、則其所施、豈不博大悠遠乎哉、覺雖庸劣、掌聞事君之道矣、責難於君謂之恭、陳善閉邪謂之敬、吾君不能謂之賊、夫吾君之能之、邦人知之、天下知之、若夫將順其美、而潤澤之、則在政府諸公矣、予瀆嚴尊、退增汗顏、伏惟矜其愚而垂察焉、

其二

嘗觀古之言時事者、必有措置之方、覺愚不知當世之務、又自少及老、從事筆硯之間、未嘗吏歷[?]書之地、故其言迂腐不切時務、又非求言而言者、進有犯上之戒、退有出位之懼、但葵藿之心、不能自已、君上愛[?]幼之誠、修己治人之要、前已論其大較、又陳至愚極陋之計以備采擇之萬一、非敢自謂措置之方、亦恃愛而忘孱劣耳、竊惟、當今之務、在於洞悉諸侯之情僞、不知情僞、則不能察其形勢、事至而遽應之、亦已晚矣、昔者春秋列國之世、有行人之職、遍使列國以修辭命、以通朝聘、其君之賢愚、卿大夫之能否、政事之得失、民心之愛惡、租賦之盈縮、兵馬之疆弱、悉知之矣、今四海一家、諸侯會同於江都、非由吉凶大禮、則越境通使、法之所禁、縱令通使、不過禮貌而進退之、奚暇知其餘哉、故奧羽之近、既不能知、況關西筑紫之遼遠乎、然則何爲而知之、曰請用間、孫子十三篇、用間最爲下策、況在治平之世、妄陳用間之說、必爲狂悖而駭視聽矣、然嘗聞之、間者權也、在兵家名曰間、在聖人謂之權、處之有道、而卒歸於正、則權無害於聖人之德也、方今主幼國疑之時、同心竭力、輔翼幼主、措天下於泰山之安、此執政元老之任也、審天下之形勢、察諸侯之情僞、一旦有意外則變、則不動聲色、而折衝千里之外、此君上之任也、竊觀元和以來寓內輯謐、一有竊姦宄、則誅竄不旋踵、國主城主、政令苟有不喜者、能黜流徙、寔繋有徒、此雖議於朝堂公其是非、而至其隱微之情、難見之形、則非用間、何能探腹

心而中背綮乎、蓋朝堂之用間、神其機、妙其用、譬如著鹽於水中、泯然無迹、故人不能知耳、以其不可知、遂謂無此事、其可乎、豈惟朝堂之用間、諸侯有志者、亦用間於我、何保其必無乎、彼能知我我反不能知彼、豈事務之所宜然耶、覺愚以爲、宜擇卒伍吏胥中有膂力而可爲間諜者五六人、厚其資給、分遣諸國、或爲賈販、或爲伎工、隨便適宜、指授方略、覘知各國之情僞、又擇親密近臣、謹慤厚重通達事體者一人、統之、授以散職、踈而遠之、使居街衢閭咽之地、廣交諸侯之臣下、或飮食燕衎、或琴棋書畫、恣其所爲、不拘文法、畀以內帑金帛、充其交通之費、外爲汚穢之行、內實明敏精練、凡諸侯之好惡明闇、人心之向背去就、纖悉必知、隱微必察、而所遣諜者歲月一至、以其所得事宜、報之所統、所統審問而簿記之、以己所聞、較彼所言、參互證驗、以時上聞、則天下之和靜、可坐而知也、然其機一露、鮮不僨事、尤宜極愼極密不使外人測其端倪、故孫子曰、賞莫厚於間、事莫密於間、非聖智不能用間、非仁義不能使間

易曰、君不密則失臣、臣不密則失身、幾事不密則害成、夫大易豈言間諜細作之事哉、然而剛柔相推、變化不測、在能融釋而會通耳、蓋天下之患、常在恃安而忘危、何謂危、人心之去就是也、就之則安、去之則危、今天下之諸侯、雖大小之不侔、猶兩漢之遺制也、所謂御譜第衆、即從高祖于豐沛、屬光武於南陽、蕭何、曹參、馮異、鄧禹之流也、外樣大名、即英布以九江叛楚、耿弇以上谷佐漢、趙佗以南越服、竇融以河西來歸之類也、其他將校偏裨、有搴旗斬將之功、而無菹醢夷滅之禍、傳至數世、子孫守土、而牧民至於遐裔荒陬、奉書朝發而夕至、莫敢支吾者、誠以東照宮文謨武猷、英略絕世、駕馭得法、而能全功臣也、夫如是、天下之安、莫過於今日、尙何去就之察、而禍患之慮哉、然論天下之大勢、必審人心之向背、今天下之人心、皆向利而背義、侈靡成風、土木糜財、其所由來、亦有漸矣、天下言利之徒、並起而爭進、公侯牧伯、莫不以利爲先、廉恥之風、頹靡不振、苟爲後義而先利、則遺其親而後其君、孟子所以警梁王也、蓋好利之

心一、伺二可レ投之隙一、禍患之生、殆有二不レ可レ言者一、此覺所三以寒心股栗、而未二敢輙以爲一レ安也、江都萬民之所二輻湊一、浮浪之士、遊手仰食、不レ知二其幾千百一、憲廟之世、諸侯有レ罪而國除者、歷歷可レ數、其下所レ養之士、一皆漂散、則今日浮浪之多、倍二蓰曩時一、其間豈無二桀驁之徒一、萬一造二爲慶安辛卯之事一、智計反有レ出レ乎二其上一、響應而嘯聚、則將何以應レ之哉、浮浪之士可レ憂如レ此、況牧伯連率、權力百二倍于レ此者乎、厝二火積薪之下一、而寢二其上一、火未レ及レ然、因謂二之安一、此賈生所二以痛哭流涕而長太息一也、雖レ然處レ之有レ術、馭レ之有レ法、此執政元老之憂、而非三君上之所二可否一也、一有二意外之患一、而君上素爲二之備一、慮レ之周、而察レ之詳、逆二折其機一、而弭レ禍制レ變、則其忠レ於二公家一、施レ于二事業一、豈不三綽綽然有二餘裕一哉、嚮者義公蓺三卉木於二廢府一、植三香菓於二伊豆一、卉木香菓、果何益レ於二邦家一哉、此乃所下以泯二其迹一而收中其用上也、引而伸レ之、觸レ類而長レ之、則義公用レ意之深遠、經レ邦之勤拳、皆可二繹而講一レ之、則有下萬三萬于二至愚極陋之下計一者上、政府諸公、烏可下忽レ之而不上レ思二其故一哉、觸二冒忌諱一、罪無レ所レ逃、惟台臺鑒茹而裁二度之一、

祭二朱文恭先生一文　代言

維正德三年歲次癸巳、閏五月丁未朔、越十有八日甲子、權中納言從三位源朝臣綱條、謹遣二臣安積覺一告レ于二明故徵君文恭朱先生之靈一曰、曩者先君義公立三祠堂于二駒籠一、以レ時祭享、不レ意癸未之冬、忽罹二回祿之災一、守祠吏服部其衷克任二其職一、奉三神主於二忽遽之際一、俾レ無二震驚一、爾來營造浩繁、未レ遑二重建一、深惟、江都殷庶之地、民戶輻輳、爰居之止無レ時、畢方之孽難レ保、廼相三攸于二水戶城西一、新構二祠宇一、岡阜縈廻、林木鬱蒼、拖二江水一而倚二爽塏一、揖二峰巒一而俯二畎畝一、雖レ乏二輪奐之美一、足レ企二肅穆之風一、爰遷二神主一、奠三安于レ此、寔得二其所一、孰曰レ非レ宜、嗚呼先生乘レ化而往、窅然不レ可レ見者、七尺之軀、伏レ義而行、皦乎不レ可レ泯者、萬世之名、先生之文、如二長江之一瀉千里一、先生之節、如二孤峰之特立萬仞一、而其德敎之薰二陶士庶一、如二雨露之涵濡潤澤一、操守之卓二越今古一、如二日星之粲爛炳彪一、其有レ功レ於二民生彝倫一、莫レ知二其然而然一也、覩レ物興レ懷、遇レ時展レ敬、雖二音容之永隔一、庶精爽之不レ渝、神其鑒レ諸、來歆來享、嗚呼尙饗、

跋蝶夢集

閨閣才子、世必並稱清紫、其實紫優於清、蓋以才不浮于德也、古之婦人、不以才稱、以德稱、及漢班婕妤曹大家輩、始以才顯、而德亦娩焉、魏晉澆漓、猶有辛憲英明敏識慧、豫料成敗、若蔡文姫之流、君子不取焉、夫才德兼備者、大夫且難、矧在婦人乎、苟或有之、希世而一見、若一靜者其殆庶幾乎、典壺閫三十餘年、內人咸懷其惠、婉嫕貞淑、頗通書史、所詠倭歌不下一千首、晩年悉焚其稿、止留三百五十餘首、間作詩、亦焚之、所留倭歌、必其可傳者、而所焚未必皆不可傳者、取舍之嚴、毅然不顧、而處身範物、操守之篤、益可知矣、友人安藤爲章釐正成卷、題曰蝶夢集、叙其才德、徵以紫娘之言、可謂擬於其倫者也、余久忝近侍、熟知其爲人、雖列之於古之婦女、良無所媿、儻使之爲丈夫、從容政事之堂、贊襄徽猷、必有可觀、此非余之私言、而輿人之誦也、一靜、名吉子、村上氏、更稱左近、既老、削髮爲尼、自號名曰習之、字一靜、

書僧高辨語贈藤執政

初北條泰時在京師、謁栂尾僧高辨聽法、偶及治國之談、高辨曰、君不見夫治病者乎、良醫能察其源、審寒熱之所中、然後投劑、莫不立愈、世之爲治者、不察其原、濫行賞罰、則姦僞益作、風俗日偸、欲爲之治、未由也已、譬之庸醫不知病原之所在、妄施治療、治之不成、由人有欲心、欲心一萌、衆爲競起、足下執軍政、躬自率勵、何不成之有、泰時曰、雖一人勉行之、奈衆不從何、曰、是不難、在足下之心耳、古人有言曰、其身直則影不曲、其政正則邦不亂、正也者、無欲之謂也、足下心誠能存之、則人人薰德而知足、不勉而行、治可庶幾矣、一有爭訟者、則自反而痛懲、不可加罪於彼、譬如身不正而惡影曲、不正身而欲罪影、其可得乎、泰時大感悟、常謂人曰、我備執權、獲免罪戾、高辨之力也、謹按、高辨者、栂尾明慧上人也、戒行精練、載在僧傳、浮屠氏之敎、昌黎所謂一死生、解外膠、於心泊然無所起、於世淡然無所嗜者、彼於邦家事有何關涉、而所言乃能如此、蓋保元平治以來、王綱不振、選擧之法不行、而在廷之臣、苟且偸

安、不聞蹇蹇匪躬之節、攻文學者、徒以雕繢縟采為工、而不思濟世安民之路、孔孟之道、無復講明者、間有聽明特達之資、則逃在釋氏之門、故緇流多卓犖之才、纔掖靡經綸之術、彼此得失、良可概矣、明慧之對泰時、務欲反己而以淸心寡欲為本、其旨固美矣、季康子患盗、問於孔子、孔子對曰、苟子之不欲、雖賞之不竊、聖人之言、炳如日星、當時學術廢墜、惜無有以其言告之者、故明慧本原其意而推廣之、反覆曉譬、誘掖獎勵、豈不深切著明也哉、荀子曰、君者盤也、水者盂也、盤方則水方、盤圓則水圓、君者源也、水者流也、源淸則流淸、源濁則流濁、唐太宗曰、君源也、臣流也、濁其源而求其流之淸、不可得矣、賢哲之言、古今一揆、明慧出世之人、而能爲經世之言、苟有裨於世道人心、吾將取之矣、泰時能用其言、以身率下、政令簡明、紀綱整肅、盗賊屛息、士民富庶、貞永之目、至今爲準則、然使泰時能用聖人之道、則以死諫爭、不使其父陷於不臣之罪、而無倉之治、豈有可觀者也、刑賞忠厚之言、不出於儒者、而出於釋氏、世道隆替、從可知矣、覺頃麓正泰時傳、筆削明慧之言、而深有感于聖敎之湮沒也、故錄之、以呈政府諸公、願講治之暇、或能省覽幸矣、

跋大洗礒前明神社本緣

右大洗礒前本緣一卷、不敢杜撰一語、皆據日本書紀、舊事紀、古事記、文德實錄、延喜式、神書抄、諸神記等書、纂錄之、至禨祥影響之事、皆據耆舊所說書之、其間頗有近語怪者、然柳州羅池廟碑、載李儀慢侮堂上得疾即死、昌黎豈欺我哉、李德裕永嘉之廟、至宋元祐中、始著響應、於是有海神靈應錄之撰、二神財成輔相、範圍曲成、德洽四表、化被八埏、蓋大已貴之讓、等於泰伯、少彥名之功、庶幾神農氏、豈宗元德裕之所得爲比哉、昔者承久之役、東兵春日貞幸、濟宇治河、馬斃而溺、倒錮水底、虔禱諏訪將神、遂得復蘇、事在東鑑、咸其所知、儻信而疑此、固非通論、善乎馬端臨之言也、人受生於天地、稟氣於陽陰五行、日月星辰、實照臨之、山川神祇實擁護之、則夫疾痛而呼籲、厄難而叩祈、首過雪愆、祈恩請福、而天地明神、鑒其懇誠、爲之悔禍降祥、則亦理

之所レ有也、二神狥二立基業一、德之至廣、功之至大、與二天壤一並存、與二星辰一同照、人能以レ誠事レ之、則騭臨而擁二護之一、景福肸蠁之來、若下執二左券一而不上レ爽也、唯其誠、故能感、誠則明、感則應、子思子曰、至誠無レ息、孔子曰、齊明盛服、以承二祭祀一、洋洋乎如レ在二其上一、如レ在二其左右一、至誠之道、可二以通二神明一、雨暘若而災害錮、五穀熟而萬物育、放二諸四海一無レ不レ達、垂二之萬世一、不レ可レ滅、覺豈好語二神怪一者哉、唯欲三人之立二其誠一也、

草廬三顧圖賛 丙申

規模定二於隴畝之中一、功烈著二於廊廟之上一、要二其終一、唯一誠貫レ之也、借二荊州一、取二巴蜀一、通二好於一レ呉、鼎時之勢、瞭然備二于隆中數語一、及二後來起而爲一レ之、則若下執二左券一而合中符節上、何其明也、侯既不レ求三聞達於諸侯一、當時使レ無二枉屈三顧之隆一、則抱レ膝長嘯、優二遊草廬中一、終二于南陽一布衣一耳、孟子曰、禹稷顏子、易レ地則皆然、侯出處之正、殆庶幾矣、雖レ然昭烈英主也、魚水之投、際遇甚易、而公安之師、猶不レ能レ厭二侯之心一、徒使レ與三歎於二孝直之死一、後主庸主也、啓沃甚難、昭烈託孤之言、後主親聽レ之、而能使二之洞然不一レ疑、親レ之若レ父、尊レ之若レ師、宮府一體、而上下修睦、此豈區區策略之士之所二能爲一哉、非二至誠一其孰能與レ於レ此、鞠躬盡瘁、死而後已、侯蓋自言レ之矣、

寄二泉竹軒佐竹暉兩總裁一書

舊臘大日本史成、乃命修レ志、此君上善繼善述之所レ致、眞不朽之盛事也、曩兩兄建議、修二稱光院以下帝紀一以擬二續編一、不レ如レ是則南北皇統終歸レ于レ一、傳至二今日一、正大明白者、不レ能二彰著顯赫一、君上聞二其言一而韙レ之、遂命二兩館一修三志與二續編一、此又君上明識英斷之所レ致、可レ勝二欣躍之至一、往年潛鋒栗子編摩之暇、私閱二諸家記載一、作二後小松稱光後花園三帝紀一、名曰二倭史後續一、以示レ僕曰、請爲レ我刪正、僕熟讀玩味、歎二其考索之精、用力之勤一、約二他日見二其全書一而還一レ之、不二數月一栗子罹レ疾不レ起、後嗣未レ定、僕懼二其散軼一、託二親故一而取レ之、藏二諸篋一者有レ年矣、其書略倣二本紀之體一、至レ敘二室町將軍一、則兼二編年之體一、凡臣下事迹、小而驕縱不法、大而畔亂弑逆、皆備二書之一、注二其所レ出曰二參據一、述二其緒餘一曰二支注一、事有二可レ議者一、輙著評以斷レ之、剴切透徹、皆中二

事機、其志將欲帝紀至後奈良、正親町朝、將軍至義輝義昭、以究室町之盛衰、而欲術至後陽成朝、以叙信長秀吉之興廢、亦未可知也、不幸蚤世、書未及成、其纔成者、亦未及脫稿、蠅頭細字點竄塗抹、其矻矻苦心、即此可見矣、當時覲瀾宅兄、相與檢討商確、屢言其晝則登館、夜則焚膏反覆辨論、不得其要則不輟、宅兄頗困頓、而栗子披閱自若也、聞者多謂、栗子資稟薄弱、何能堪之、戕賊天年、未必此書不爲累也、僕謂不然、脩短命也、禍福豈反故紙之所能爲哉、趙方有言、未死一日、當立一日紀綱、栗子未嘗轉纖毫事、區區之心、竊欲表章皇統之原委、扶摘八臣之幽隱、以備將來之鑑戒、是亦彰考館中一日紀綱也、其可少耶、元順帝使修宋遼金三史、遼史成而宋金二史未成、總裁官揭傒斯留宿史館、朝夕不敢休、因得寒疾而卒、已而二史成、傒斯不及見之、栗子之亡、不類此乎、可謂[illegible]矣、今者適中修續編之役、此誠栗子宿志得伸之秋也、故致原稿于兩兄、以斷蒐獵、如其後小松本紀、義滿基氏等傳、則本館集而大成、無所藉乎私撰之書、然劉道原十國紀年、頗能裨益溫公之考異、庶以五行俱下之目、暇日看過、裁決取舍、亦無不可也、如稱光院後花園紀、義持義教義政等傳、今新所編纂、君臣淑慝、文武成敗、參互考覈、未必不有小補也、希兩兄加意繙閱、仍使書吏謄寫一本、原稿略加裝潢、付與後嗣、藏爲手澤、寫本支子館架、以資紬繹、隱括評斷、附爲論賛、則賁幽壤而旌忠魂、栗子忻忻然于地下矣、至于山名持豐細川勝元兩軍相持、則群雄割據、各樹其黨、震主脅上、不復知有天子將軍、海內之勢、自此而大變矣、蓋冀北山東、覬覦凌軋、而炎劉灰冷、成德魏博、跋扈輔張、而李唐潰爛、此尤不可不著力也、凡續云者正之副也、前之不能了、後之不容已者、皆於續焉發之、李巽巖作續通鑑長編、以繼涑水之書是也。郝伯常拘於忠勇軍、著續後漢書、自序曰、奮昭烈之幽光、揭孔明之盛心、祛操丕之鬼蜮、破懿昭之城府、明道術、闢異端、辨姦邪、表風節、甄義烈、核正僞、推本六經之初、補二史之後、僕雖不讀其書、每誦此序、未嘗不歎其言之精而確也、豈兩兄亦有意于斯乎、冀參酌而裁

定之、統新鑒涵、

磐船山法會詩歌序

嶙巖峭拔、壁立千仞、凄神寒骨、猿猱不能攀援、二川交會、匝山而匯焉、洪濤巨浪、舂擣噴薄、而石無完膚、澄泓深淵、黛蓄藍湛、舟檣帆席、日夕所經過、而黿鼉蛟龍出沒、不可窺測、迤東、則那珂港、潮汐澎騰、雷霆衝激、商賈輻湊、居然一大聚落、前有神洲之平衍、甌嶼縈回、沙鳥翔集、天妃之廟、勢若翬飛、西南則古松環列、蓊欝深邃、風搖其顛、互與海濤響答、此磐船山之勝槩也、往年源義公登臨游觀、以爲可以建梵宮闢寶地、度群生而極萬類、然非有大力量人負荷擔當、揭慧燈而鳴法鼓、則無以稱瓌奇秀特之美也、廼迎慧明院如晴上人於京師、來鎭於此、上人大乘之法器、而門主之懿親也、公素聞其名、故禮而致之、久米願入寺、古之名刹也、傾圮年久、公闡幽振滯、移之于此、殿堂廊廡、鉅麗宏敞、寺雖襲乎舊額、實以上人爲中興鼻祖、蓋有深意存焉、於是人傑地靈、方能無媿、而公與上人、相得甚驩、煙嵐雪月、林壑泉石、莫不並策而驅、連床而語、公以詩、上人以和歌、刻露淸秀、陶鑄性靈、覺每侍席末、聞見其談論風采、未嘗不歎公之知人、而上人之能應其選也、既而聚散不常、離合無定、公一旦厭世、而上人寂寥乎東海之濱、悲悼感愴、不能自已、每値公之忌辰、必設一會、廣行法施、每引文雅之士、摛藻構思、作爲歌詩、使與梵唄鐘磬之音交奏迭陳、而想見其流風遺韻、距今十有七年、跂慕景仰之誠、猶一日也、歲月積累、成一巨軸、使覺叙之、覺蒙公山居之恩、又忝上人之眷顧、義不得辭焉、凡常人之態、一時感激、誓天指日、奔走傾倒者、滔滔皆是也、及事去情遷、則蒼黃反覆、愈久而愈思慕者、世不多得、聞上人之風、能無媿乎、曾子曰、愼終追遠、民德歸厚矣、儒釋雖異、設教則一、況大乘之敎、不外倫理、上人忠孝之道、可以勵世激俗、然則磐船之巖壁、崒嵂卓絕、屹爲中流砥柱者、非償公之宿志也耶、

澹泊齋文集卷四

帝大友紀議

夫有英明之人、能立不朽之事、卓識偉論、適出衆人之上、然非備大公至正之義、則不足以服衆人之心、而破萬世之惑也、本邦上古之事、舍舊事紀、古事記日本紀、無足爲徵者、而日本紀又其尤也、然神功皇后未嘗踐位、列之帝紀、帝大友儲貳承統、黜而不書、編年記事、既不足以考信、崇虛抑實、又不可以爲訓、今所修撰、綜覈名實、抑彼揭此、出於上公之明斷、遂成千古之定論、不亦偉哉、蓋壬申之亂、頗與靖難之師相類、帝大友之舉措、未必下於允炆、而天武之勇略、亦未必過於成祖、特以將相無人、亟殉社稷、禍亦酷矣、舍人親王之作天武紀、譬如當宣宗廟修兩朝實錄、當事隱諱、固其宜也、然而曲筆過多、前後錯亂、帝大友事迹、尤爲難明、參之懷風藻水鏡二書、然後承嗣之重、纘統之正、粲然可見矣、故今據此二書、書曰立爲皇太子、曰即天皇位、其正大明白、凜乎不可犯、天武簒奪、於焉畢見、亂臣賊子可以寒心破膽矣、然其爲皇太子也、就二書而究之、則不能無異同也、懷風藻曰、年二十三、立爲皇太子、據之則實天智帝三年也、日本紀天智紀曰、十年正月、拜太政大臣、所謂十年即四年也、三年已定儲位、不應明年又有此命、懷風藻以爲年甫弱冠、拜太政大臣、既曰弱冠、應在二十左右、天智元年、大友年二十一、然則元年爲太政大臣乎、此與日本紀大異者也、如以親王所書、全爲可疑、則是日蘇我赤兄中臣金爲左右大臣、及置御史大夫三人、亦併不可信乎、水鏡所載、其爲太政大臣、則同於日本紀、而爲皇太子則異於懷風藻、曰、十年九月、帝疾病、十月立大友皇子爲皇太子、是時、天武已遁于吉野、揆之時勢、其或然也、故其爲太政大臣、不如從日本紀書於四年正月、其爲皇太子、從水鏡書於十月、庶無扞格之累、而於當時事勢亦爲允愜矣、然則何謂曲筆、曰、其稱天武無一定法、曰大皇弟、曰東宮太皇弟、曰皇太子、至天武紀書曰、天命開別天皇元年、立爲東宮、其果

皇太子耶、不レ宜レ稱ニ大皇弟一、其爲ニ皇太弟一耶、亦不レ宜レ稱ニ皇太子一、蓋大皇弟者、一時權立之名、而皇太子又不レ得ニ其實一、紛紜錯謬、故爲ニ其說一、然舊史所レ載、難ニ遽刪除一、今修ニ天智紀一、宜下書曰丙元年立ニ大海人皇子一爲乙東宮甲、其義何居、據ニ天武紀一也、神武以降、無下書ニ東宮一者上、此書ニ東宮一變例也、蓋作レ史者、據レ事直書、其得失從可レ見焉、此歐陽子作ニ梁本紀一大旨也、若夫改ニ大皇弟一爲ニ皇太子一、則代ニ親王一而刪授也、於レ名雖レ當、於レ義甚乖、既失ニ事實一、亦無ニ明據一、故元年特書立爲ニ東宮一、前後一以ニ大海人皇子一稱レ之、蓋書法貴レ嚴、有レ常有レ變、即其所レ變、而義自見、此朱紫陽修ニ綱目一之微意也、至レ於ニ天智崩後一、詔敕所レ出、機務所レ決、則雖レ以ニ親王之筆一、亦不レ能レ掩、野總裁考證、備得ニ其要一、又非ニ後生晩輩所ニ敢企及一也、謹議、

二宮考上

皇朝故事、皇后中宮、通曰ニ二宮一、非レ禮也、源親房卿抄曰、中宮者即皇后也、本朝並置ニ二宮一、太無ニ其謂一、而廣仁御宇置ニ此職一以來、代代並置、按始置ニ中宮職一者、桓武帝、而稱ニ中宮一者、皇太后也、非レ如ニ後世皇后中宮名異而實同一也、續日本紀桓武紀曰、天應元年四月、皇太子桓武受レ禪即位、詔以ニ親母高埜夫人一、稱ニ皇太夫人一、五月始置ニ中宮職一、延曆二年、立ニ藤原夫人一乙牟漏爲ニ皇后一、三年天皇移ニ幸長岡一、中宮皇后並自ニ平城一至、八年十二月敕、頃者中宮不豫、稍經ニ旬日一、乙未皇太后崩、丙申敕曰、中宮七七御齋宜レ令下諸國國分二寺誦上レ經、前後皆書ニ中宮一、至レ崩始書ニ皇太后一、蓋以ニ明年一追ニ上皇太后尊號一也、據レ之則所レ謂中宮即皇太后、而皇太后、新笠即皇太夫人高野氏也、遷都下文、書ニ中宮於ニ皇后上一、其義甚明、凡皇太子受レ禪即レ位、尊ニ皇帝一曰ニ太上皇帝一、尊ニ皇后一曰ニ太上皇后一、禮也、桓武之置ニ中宮職一、專爲ニ廣仁帝一、而非レ爲レ己、若レ曰ニ太上天皇之中宮一、推尊之道也、淸和帝天安二年十一月、詔改ニ先中宮職一爲ニ皇太后宮職一、事見ニ實錄一、可レ爲ニ確據一、於レ是益知ニ其爲ニ皇太后一也、不ニ特皇太后一、其太皇太后亦可ニ以稱ニ中宮一、何以明レ之、續日本紀孝謙紀天平勝寶六年、太后太后崩レ于ニ中宮一、所レ謂太皇太后者、文武夫人藤原宮子娘、聖武之皇母、而孝謙之皇祖母也、令義解曰、中宮職謂ニ皇后宮一、其太皇太后、皇太后、亦自中宮

也、後世不レ遵二此義一、皇后中宮、列二位椒房一、均被二寵遇一、竝レ后匹レ嫡、勢偪地逼 此劉聰天元之所レ爲、而人主之所レ宜レ戒、甚乖二祖宗之意一也、桓武即レ位、尊二高野氏一爲二皇太夫人一者、非レ禮也、凡后妃加二太字一者、帝崩而皇儲嗣位、尊レ之之辭也、按二唐書順宗王皇后傳一曰、順宗升レ儲、冊爲二良娣一、及二永貞內禪一、冊爲二太上皇后一、元和元年順宗晏駕、尊二太上皇后一爲二皇太后一、及レ崩、諡曰二莊憲皇太后一、禮儀使鄭絪議曰、秦漢以來、天子之后稱二皇后一、母稱二皇太后一、祖母稱二太皇太后一、崩亦如レ之、加二太字一者、所三以別二尊稱一也、開元六年、太常議二昭成皇太后（睿宗妃、玄宗母）諡號一曰、入レ廟稱レ后、義繫二於夫一、在レ朝稱二太后一、義繫レ於レ子、今如二諡冊入レ陵、神主入レ廟、當レ去二太字一、宋史高宗吳皇后傳曰、高宗內禪、稱二太上皇后一、孝宗即位、上二尊號一曰二壽聖太上皇后一、上皇（高宗）崩、改稱二皇太后一、光宗即位、更號二壽聖皇太后一、以二壽皇（孝宗）故、不レ稱二太皇太后一也、孝宗崩、始正二太皇太后之號一、由レ是推レ之、則天應元年四月、廣仁帝傳レ位之日、宜二尊爲二皇夫人一、而不レ加二太字一、至二十二月帝崩一、宜レ爲二皇太夫人一、然五月既置二中宮職一、舊史雖レ無下尊爲二中宮一之文上、其爲二中宮一、則斷不レ容レ疑、既爲二中宮一、不レ可三降爲二皇太夫人一、然則十二月帝崩之後、宜レ正二皇太后之徽號一、而不レ俟二九年之追崇一、如レ此則名正言順、於レ禮爲レ當、蓋當二此時一、朝廷禮儀、雖レ有レ可レ觀 未レ爲二大備一、得レ一遺レ二、固其宜矣、且唐宋典禮、皆桓武以後事也、可三以爲二後世之考據一、而不レ可レ爲二當時之準則一、至レ於二後世一、禮文盛行之時、皇后中宮並置不レ廢者、不レ知二其何解一也、親房卿之說、卓有レ所レ見、但曰三廣仁御寓置二此職一者 頗似二疎漏一、天應元年四月已前、固係レ於二廣仁一、而禪位以後則係レ於二桓武一、觀者當下考二究舊史一、詳得中其實上、蓋親房卿之作二是書一也、○在二關城戰爭之時一、無二書可一レ徵、而諳練强記、淹二貫古今一、譬猶三致堂之著二管見一、一二紕繆、愈見二其該博一、特怪夫後世並二立二宮一、沿襲不レ革、其原起二于桓武一、而非二桓武之過一、乃後世之過也、

二宮考下

皇后中宮、其實一也、分而爲レ二、起二於皇朝一、泛二覽前史一、北史后妃傳序曰、道武追二尊祖妣一、皆從二帝諡一、爲二皇后一、始立二中宮一、餘妾或稱二夫人一、隋書后妃傳

序曰、周宮嗣位、不率典章、衣褘翟稱中宮者、凡有五、夫人以下、略無定數、宋史哲宗孟皇后傳曰、宣仁太后諭宰執、孟氏子、能執婦禮、宜正位中宮、又曰、中宮之廢、事有所因、情有可察、劉皇后傳曰、時孟后位中宮、后不循列妾禮、高宗邢皇后傳曰、高宗虛中宮以待者十六年、吳皇后傳曰、憲節皇后（即皇后）崩問至、秦檜等累表請立中宮、孝宗謝皇后傳曰、成恭皇后（夏氏）崩、中宮虛位、理宗謝皇后傳曰、謝女端重有福、宜正位中宮、史策浩繁、未能檢閱、略擧淺見所及、總之皇后中宮、無所分別、親房卿所謂中宮即皇后者、簡而盡矣、按扶桑略記曰、寬治五年正月二十二日、前齋宮媞子內親王、冊爲中宮、是依天皇養母也、中右記曰、正月二十二日有立后事、無品內親王媞子、又曰中宮、立后之後、始有奉幣、曰立后、曰中宮、遞文而言、亦可以證中宮即皇后之義也、夫內親王媞子者、白河帝之女、而堀河帝之姉也、並中宮賢子所出、寬治五年立爲中宮、七年尊號郁芳門院、而其爲中宮、竊有惑焉、以爲天皇之中宮乎、則皇姉不可爲后、以爲上皇之中宮乎、則皇女不可爲后、然爲天皇之準母、則上皇之中宮也、名實紊亂、稱謂曖昧、蓋當是時、天皇尚幼、機務皆出於上皇、立爲中宮、上皇之志也、考之今鏡、上皇素寵中宮賢子、而會其崩、哀慕之情、鍾於子女、故使內親王養天皇、爲之準母、而篤其愛、既爲準母、故假之名而爲中宮、既爲中宮、故又加徽號、曰郁芳門院、親之愛之、尊之榮之、其實不過如此、而不知一假其名、則雖曰非上皇之中宮、其可得乎、此特出於皇情之私、而不可爲朝廷之法、悖禮害義莫斯爲甚、噫準母故事、雖有由來、不適其宜、則闕而可也、如不可闕、則後宮妃嬪、寧無其人、何必區區以同生之姉爲之哉、亂名分而存典章、與省虛文而愼倫理、孰重孰輕、姑因中宮事、併論于此、

王魏事太宗

嘗讀通鑑綱目、唐有三議論、曰王魏之事太宗、曰議封建、曰維州之取舍、諸說紛紜、莫知適從、蓋封建、先王之制、其事至大、維州雖爲經略重事、而非切己之務、若王魏之事太宗、則係人臣之出處、邪正之分、於是乎定、僕眩於諸

說一、久懷二疑惑一、今歷二舉諸儒之論一、質二諸館職諸君子一、此亦恐非三切レ己之務一、然不四猶愈三於月露風雲之徒費二工巧一乎、諸公博雅、願下二評騭一以賜二辨駁一、

王魏之事二太宗一、范太史以爲、食二君之祿一、而不レ死二其難一、朝以爲レ讐、暮以爲レ君、於二其不レ可レ事而事レ之、皆有レ罪焉、劉友益以爲、諫議大夫、天子之諫臣也、世民自爲二太子一耳、故爲二東宮官一、今爲二天子諫臣一、何譏之有、尹起莘以爲、王魏委レ質事二高祖一者也、非下事二太子一者上也、王魏食二高祖之祿一者也、非下食二太子之祿一者上也、非下唯不能レ讎二太宗一、亦不レ當レ讐二太宗一、其失在レ於レ不レ能レ請二命高祖一而已、至二明邵二泉一、則又以爲、太宗以レ弟殺レ兄、以二藩王一殺二太子一、是有二無レ君無レ親之心一、比レ於二篡弑一特一間耳、在二春秋之法一、所レ謂人人得而誅レ之者、況爲二其輔一者乎、王魏於レ此盡レ力致レ討、死而后已焉可也、故王魏雖レ不レ當レ死二建成之難一、而不レ可レ不レ死レ於二高祖之命一也、死非レ異、處レ死爲レ異、均一死也、此是彼非、義則然耳、故王魏之不レ能レ死、固天理人心所レ不レ與也、尹氏之論、亂臣賊子所三以接二迹於世一也、夫以二諸儒之明見卓識一、論不レ一、譬如二訟牒紛挐一、將何從而折衷耶、蓋范公之論、祖二述程子之言一、而二泉之論、敷二衍范公之說一、程子曰、王魏不レ死二建成之難一、而從二太宗一、可レ謂レ害レ於レ義矣、後雖レ有レ功、何足レ贖哉、此言一出、王魏之罪、暴白明著、綱常立而義利分、後世雖レ有二辨難蜂起一、其實不レ能レ外レ此、竊怪、尹劉二氏、作二爲書法發明一、羽二翼朱子綱目一、議論精微、不レ遺二纖毫一、而至レ論二王魏之事一、是非顚繆レ於二先儒一、此乃人臣出處之大節、而天理人欲之所二由判一、此而有レ差、焉往不レ差、然則所レ謂書法發明者、果不レ足レ恃耶、然發明所レ論 反覆詳切、且援二斐文舉于二志寧等事一爲レ證、其說鑿々有レ據、未三必盡非一、而二泉譏レ之、以爲レ足レ啓二亂賊之心一、又何甚也、及レ考二唐書一、又有レ疑焉、魏徵傳曰、隱太子引爲二洗馬一、徵見二秦王功高一、陰勸二太子一曰、早爲レ計、太子敗、王責謂爾鬩二吾兄弟一奈何。曰 太子蚤從二徵言一、不レ死二今日之禍一、王器二其直一、無二恨意一、即レ位、拜二諫議大夫一、王珪傳曰、建成爲二皇太子一、授二中舍人一、遷二中允一、禮遇良厚、太子與二秦王一有レ隙、帝責下珪不上レ能二輔道一、流二嶲州一、太子已誅、太宗召爲二諫議大夫一、

其爲諫議大夫一也、而禁門喋血之日、魏徵見爲宮僚、王珪謫在嶲州、前遷中允、高祖命之也、今流嶲州、亦高祖命之也、其可死不可死、非敢所知、而二泉皆責其不死高祖之命、豈以王魏齊名、而遂如此耶、覈其事實、竊恐微有不同、蓋君子之立論、一以維持世教爲要、事實異同、一槩不足計較耶、抑有雖被嶲州之命、而當死前職之理耶、此不可不辨也、參之通鑑、爲諫議大夫、在武德九年六月、其去庚申之變、不滿旬日、綱目因而書之 書法發明從而論之、似爲二公委曲出脫、若據本傳、則在八月太宗即位之後、此蓋通鑑新書所採不同、未知孰得孰失、而據書法發明、姑爲之辭、在即位之前、則高祖之諫議大夫、而無可議、在即位之後、則太宗之諫議大夫、而爲可議、此又不可不辨也、又考唐書通鑑、翊衛車騎將軍馮立聞太子死、歎曰、豈有生受其恩而死逃其難乎、乃與副護軍薛萬徹、左車騎謝叔方、帥東宮齊府精兵、馳趣玄武門、萬徹皷譟欲攻秦府、將士大懼、示以太子齊王首、遂潰去、明日馮立謝叔方皆自出、薛萬徹亡匿、秦王屢使諭之、乃出、秦王曰、此皆忠於所事、義士也、釋之、後皆事於太宗、各歷顯職、夫馮立薛萬徹之提宮兵、魏徵之對太宗、事雖不同、各行其志、故太宗容之、一則器其直、一則以爲忠於所事、其義一也、然馮薛皆以材武見用、素無學士大夫之責、故人不貶其事太宗、亦不褒其能赴難、若曰職分所任固當如此而已、王魏則以堯舜其君爲心、故君子責以大義、設使王魏不幸而職典宮兵、則將爲馮薛之舉乎、抑坐見太子之死、而勒兵不動乎、文武雖異、盡職則一、故以馮薛之赴難、益知王魏之當死、而王之於魏、實有間焉、

眞西山

栗潛鋒著論、以爲、理宗簒奪者也、西山不當事之、得罪於春秋者、故辨之、

濟王之廢、南渡之大變也、當時寃之、後世寃之、至今未嘗不扼腕切齒於史彌遠之兇逆也、夫濟王理宗、鈞宗室也、寧宗以濟王爲皇子、理宗爲沂靖惠王後、尊卑之分定矣、蓋其初意、以邦本未立、命選太祖後、教育宮中、如高宗擇普安王故事、則其傳位濟王之意、固已可知、故西山臨去

之言曰、大王若能孝於慈母、而敬於大臣、則儲位固而繼大位必矣、鄭若水上理宗封事亦曰、濟王當繼大統者也、當時聲勢、業已如此、寧宗何不立爲太子、而定大本乎、或曰、既爲皇子、又無庶孽、其承大統、斷不容疑、定儲位與否、非所論也、曰不然、當繼大統者、勢也、情也、立爲太子者、禮也、名也、勢與情、豈能敵禮與名乎、嘗考宋史、寧宗既失兗王授、乃養宗室詢爲皇子、進封榮王、立爲皇太子、薨、謚景獻太子、明年養濟王爲皇子、進封濟國公、景獻濟王、亦鈞是宗室、而無所軒輕者、在景獻則冊立、在濟王則不然、寧宗彌留之際、何不一降其命乎、推原其故、豈非史彌遠日夜媒孽其短、思有以廢置、寧宗惑邪說而不悟、意亦中變而未有所定乎、大本一定、則未易搖動、在廷諸臣、皆翊戴之、彌遠雖奸、楊后雖專、不得輒如奕棋也、惜乎寧宗之憒憒、其視宗社藐然、在位不定冊立、臨崩不遺顧命、故奸臣得以肆其惡、而無所忌憚、或曰、彌遠之疾視濟王、不啻仇讐、雖冊立而顧命、何難矯而廢之、是則然矣、如此則其罪惡彌彰、人人得而誅之、此余所以痛恨寧宗之昏懦而不能早定大計也、故究其情、則濟王宜承統者也、正其名則濟王未嘗爲太子、不得遽謂之君也、理宗之立、謂之不正則可、謂之篡奪則不可、其不能正逆賊之誅、則誠無所逃責、而加以篡弑則恐已甚、或曰、子之所引鄭若水之封事曰、援以春秋之法、非弑乎、非篡乎、非攘奪乎、此理宗之罪案也、曰、若水之言、直諒剴切、責難於理宗之不能誅賊而被惡名、而非眞以理宗爲弑爲篡爲攘奪也、故下文承之曰、天下皆歸罪彌遠、而不敢歸過於陛下者何哉、天下皆知、倉卒之間、非陛下所得知、亦諒陛下必無是心也、夫無是心而有是事、固人倫之不幸、處此則當詳慮善後之策、理宗不明大義、不能善後、故當時譏之、後世議之、而至今不能厭衆心也、若西山之事理宗、則非枉道苟進者、濟王既無建成之位、理宗素無太宗之謀、西山以起居舍人、兼宮講、其與王魏專爲東宮僚屬者、不可同日而語、則未見不可事之之理、方其入對、首論濟邸之冤、屢進讜言、竟爲權奸所憚、未遂

年而罷去、則其出處進退、可謂不負所學、而責之以爲得罪於春秋、則又已甚、尙論古人、不宜如是苛酷、史稱、德秀雖嘗一說其冤、亦未若鄧若水之力、春秋責備賢者、不不無遺憾、此公平之論也、故余反覆參覈濟王之本末、以爲、勢也情也、理宗非簒奪也、西山無不可事理宗之理也、

神功皇后論

西山公命修史諸臣、論神功皇后事實、臣覺謹摭其緒餘著論曰、「統者、所以正皇極、剗僭僞也、統之所在、不係大小彊弱、唯以正爲貴、雖不幸罹厄運、權衰邦擾、而發號施令、莫敢不從者、以統繫人心也、譬如天日之照臨、雖雲霧陰曀、不得覩其光、而運于上者、固自若也、故皇朝謂之天日嗣」歷世相承、無有紫色聲之閒其閒者、然而無統之世、閒亦有之、顯宗仁賢推讓之間、飯豐靑皇女臨朝稱制、至明年顯宗即位、武烈崩無嗣、大連大伴金村迎繼體于越前而立之、齊明朝天智爲儲貳、及齊明崩、殯七年、以皇太子令天下、襄事方即位、當此數朝、帝位閒曠、或朞年、或踰月、或數年、而人心悅服不敢動搖者、一則以讓、一則以賢、一則以孝、名正分定、似無統而實有統也、至于仲哀應神繼續之間、神功稱制、攝行萬機、則悠久閒曠、殆七十年、古今相沿、恬不知怪、其故何耶、託之神而文其事也、仲哀之崩、固不能無疑、日本紀書曰、身痛、而分載其說于下、前後繫以神語、若曰有祟、夫神勸帝、使興無名之師伐無罪之邦、以要重幣、帝不聽、而殃之、非貪則暴、何以爲神、其非爲祟、昭昭可見、參之舊事紀古事記、蹤緖晦僻愈不能無疑、然無事可徵、無言可析、議者或以弑逆之罪、歸之皇后武內、織無稽之談、以犯臣子之所不當言、豈其理耶、議者或以中矢爲實錄、身痛爲傷痍、蓋得其要矣、至于皇后之擧措、則又不能無疑、凡人之生、守十月爲期、過期而免、今世猶有、矧唐堯漢昭有其比、應神在孕十三月、此不足怪、而皇后當產月、親延其期、則可怪也、應神既生、何不速使正位宸極、丕承皇統乎、植遺腹、朝委裘、而天下不亂、況母后臨朝、大臣輔佐者乎、立爲皇太子則益謬矣、

使之冊立大行天皇之柩前、則實仲哀之儲貳也、仲哀既葬矣、陵土既乾矣、四歳而冊立、是誰儲貳乎、釋襁褓而衣袞龍、皇后雖不欲借其可得乎、舍人親王以攝政紀元、而不予閏位、其見亦偉矣、當時淳朴、未有文字、攝政之義則有、攝政之名則無矣、皇后借位、不亦明乎、幸賴神保壽、待六十餘年、皇后昇遐之日、始得承統、設使不幸先皇后而崩殂、則赫赫大業、何所屬望、當此之時、假有統而實無統、岌岌乎其殆哉、議者又以麛坂忍熊二皇子稱兵、為抗嫡母戕同氣、不免反者之名、臣竊為二皇子悲焉、其曰吾豈以兄從弟者、文也、如其心、未可知也、使之發于可發之時、則師出有名、事或有成、惜乎失事機、而陷于不義也、今修史者書反、書討、書伏誅、則毋乃寃乎、書舉兵、書擊、書敗死、則庶乎其可也、嗚呼皇后母臨寓內、總攬乾綱、既非顯宗仁賢之遜讓、又非繼體天智之賢孝、而悠久閏曠、遷延歳月、藉口胎中天皇、殺伐二皇子、遂使仲哀之統、幾絶而復存、自非我公英邁卓識、涇渭正閏而綜覈名實、則舍人親王之特筆、亦將湮爵而不振矣、若皇后之威武桀驁、武內之專權怙寵、則諸臣之諛諂矣、臣亦區區敢以統所歸為重、

清談之禍

古之人以為、晉室陵遲、夷狄亂華之禍、清談之徒啓之、竊謂、清談者、其言可聽、其趣可觀、其為禍也、未必至於如是之酷、徐而思之、則王弼何晏之徒、誠無所逃其責、蓋競為清談者、崇尚虛無、輕蔑禮法、士大夫爭慕效之、則偃蹇傲忽、怠惰放肆、紀綱法度、不可復振、其弊必至于朝無謇諤之臣、下無節操之士、權倖用事而不知警、貴戚弄柄而無所憚、政刑日紊、盜賊蠭起、黠胡伺釁、奸雄乘勢、糜爛鼎沸、四分五裂、而終不可救也、武帝混壹區夏、創垂大統、濟世安民之略、規模宏遠之謀、未之或聞、而玄虛談空之輩、放曠任達、破壞風俗、遺落名撿、惠帝昏闇、制于虐后、八王迭軋、骨肉相殘、劉聰石勒承其弊而取之、至於懷愍播越、青衣行酒、而板蕩極矣、當時祖尚王何、無過王衍、而衍身居重任、先為三窟之計、及其被執、則勸進羯胡、冀以自免、故石勒責之曰、破壞天下、非君而誰、孰謂清談之流、蘖禍

釀レ亂、遂至ニ於斯一、蓋由ニ恥尙失レ所、而名節掃ヲ地也、究ニ其根本一、則所レ謂天地萬物皆以レ無爲レ本者、實有ニ以啓ヲ之、故裴頠著ニ崇有論一曰、立言藉レ於ニ虛無一、謂ニ之玄妙一、處レ官不レ親レ所レ職、謂ニ之雅遠一、奉レ身散ニ其廉操一、謂ニ之曠達一、故砥礪之風、日以陵遲、陳頵遺ニ王導書一曰、莊老之俗、傾ニ惑朝廷一、養望者爲ニ弘雅一、政事者爲ニ俗吏一、王職不レ卹、法物墜喪、熊遠上疏曰、當レ官者以レ治レ事爲ニ俗吏一、奉レ法爲ニ苛刻一、盡レ禮爲ニ諂諛一、從容爲ニ高妙一、放蕩爲ニ達士一、驕蹇爲ニ簡雅一、應詹上疏曰、元康以來、賤レ經尙レ道、以ニ玄虛宏放一爲ニ夷達一、以ニ儒術清儉一爲ニ鄙俗一、干寶總ニ攬其說一曰、學者以ニ莊老一爲レ宗、而黜ニ六經一、談者以ニ虛蕩一爲レ辨、而賤ニ名撿一、行身以ニ放濁一爲レ通、而狹ニ節信一、進仕者以ニ苟得一爲レ貴、而鄙レ居レ正、當官者以ニ望空一爲レ高、而笑ニ勤恪一、合ニ是數者一觀レ之、則其爲レ禍之深、從可レ知矣、孟子距ニ楊墨一、爲レ甚レ於ニ洪水猛獸之害一、不レ知者以爲レ好レ辨、范寗謂、王弼何晏之罪、深レ於ニ桀紂一、或以爲貶レ之太過、嗚呼楊墨之害幸有ニ孟子辭而闢ヲ之、王何之害、雖レ有ニ觝排如レ彼者一、終不レ能レ救レ之、則寗之敢言、不レ可レ謂レ非ニ聖人之徒一也、

栗潛鋒評曰、晉廣預論ニ阮籍一、比ニ之伊川被髮一、所以胡虜逼ヨ於ニ中國一、以爲レ過ニ衰周之時一、著ニ晉書若干卷ニ云、此亦與ニ干寶一同志之人耶、有識如レ此多、論著如レ此勤、引レ喩抗議如レ此切切、而不レ克ニ得而救ヲ之、可レ歎哉、

讀ニ焚椒錄一

余嘗讀ニ懿德皇后回心院詞一、喜ニ其構體精巧、措詞妙麗、首尾相救、如ニ常蛇勢一、毎謂非下深レ於レ詩者上不レ能也、然不レ知ニ懿德何代人一、唐宋皇后、無ニ此徽號一、意其僞主覇朝之后妃、一夕偶讀ニ遼王鼎所レ述焚椒錄一、專敍ニ懿德事迹一、乃知道宗之后、而廢太子濬之母也、后以ニ才學姿色一見レ寵、正ニ位褘翟一、常慕ニ唐徐賢妃行事一、箴ニ規得失一、道宗稱爲ニ女中才子一、其諫獵一書、尤明快可レ誦、咸雍之末、寵稍衰、因作レ詞曰ニ回心院一、被ニ之管絃一、以寓ニ望幸一、錄後有ニ西園歸老跋一、不レ知レ爲レ誰、擧ニ詞中警策一、以爲皆有ニ唐人遺意一、恐有宋英神之際、諸大家無ニ此四對一、然後自信ニ品藻之不一レ妄也、錄中所レ載耶律乙辛誣ニ陷懿德一本末甚詳、參ニ之宋元通鑑一、其說良是、而竊有レ所レ感焉、夫讒慝之

入、無所不至、譖大臣、構良將、誣忠直、陷賢能、終至喪邦覆家者、雖歷世所不能無、皆中傷人臣之事也、至於讒君之妻、殺君之子、其事至難、雖極昏愚之主、未易欺罔、況道宗頗有材略、駕馭群下、苟非深文巧詆、蠱毒刻劑、則不能入也、今讀乙辛密奏、年月證實、語言服飾、宴安親暱、歷歷如畫、懿德不能辨斷、竟以自盡、何其慘也　汪充巫蠱之禍、不意見于當時、遼之不亡幸矣、蓋丘氏所載、驪姬之讒申生、伊戾之陷宋痤、讒書之構衛、豎牛之弄仲壬、昭伯之毀季孫、費無極之間郤宛、備而盡、約而贍、千載之下、如面觀其人、王鼎所述、雖有繁簡不當、而闡析敷陳、聳動視聽、然由是而又有感焉、當時孝謙帝時有一大獄、藤原仲麻呂誣橘奈良麻呂、以廢立事、黃文道祖安宿諸王、以至小野東人佐伯全成輩、自誣自欺、或死或徙、蹤緒隱昧、竟莫知其冤濫也、推究當時事勢、奈良麻呂、諸兄之子、而諸兄、帝室之冑也　仲麻呂之嬖於女主、殊非鄭儼李神軌之比、非竊神器、擅宸扆、則其勢不已　是故離間宗室世卿、而逞闔閭之謀、觀其諸臣所欸、羅織極密、鍛鍊極深、原委詳悉、不異乙辛之誣案也、幸而仲麻呂罪惡貫盈、得伏天誅、不然則篡奪凶虐、舐糠及米、力能移鼎而負扆矣　藤原時平之讒菅公、源滿仲之構高明、世皆知其萋斐、至奈良麻呂、則舉世不能辨其皂白、及被檀林皇后之澤、僅得仁明追贈之制、雖當時實錄、特爲君上諱之、而未嘗不憤惋于菅野眞道之曲筆也、若懿德之誣罔、猶有王鼎之錄、得補遼史之闕、如奈良麻呂之獄、則內無良史之紀實、外無稗野之可徵、堙鬱隱昧、可勝歎哉、操史筆者、尤當潛心于邪正曲直之間、雖正史實錄、有可疑則辨之、雖雜家小說、有足信則取之、如此則議論至公、而庶幾不牽於流俗之見也　彰考館佐希幸、當編修之局、專用心于史學、偶因懿德之禍、併及奈良麻呂之枉、書以贈之、

源義家

武衡家衡之亂、義家血戰數合、敗而復振、卒能摧堅挫銳、誅夷二豎、而奧地廓清、義家之功大矣、故其上解稱武衡家衡之謀反、罪既浮於貞任宗任、請速下官符、獻首闕下、廷議以爲、此私鬪也、不可

レ下二官符一、既下二官符一、則將士不レ可レ無レ賞、事遂寢、義家徒棄三首於二道路一而還二京師一、後三年軍記所レ云如レ此、驗二之當時載籍一、亦無二官符之文一、是時朝廷能存二大體一、非レ如下後白河法皇遞レ於二賴朝義經一、互下二追討宣旨一、朝君臣、而[illegible]敵上也、然以二二虜之亂一、爲二私闘一、竊謂不可也、陸奥出羽之士馬甲兵、糗糧儲峙、皆公家物、而二虜徵二發之一、運二輸之一、疆埸騷然、民不レ聊レ生、義家擊而平レ之、可レ謂下牧宰之寄、不レ忝二其職一者上矣、蓋二虜之構レ兵、起レ於三吉彥秀武憾二眞衡一、而非レ有二逆上之名一、故當時視爲二私闘一、而其恣動二干戈一、攻二剽國司一、是亦反也、何得レ謂レ私、必若下賴時貞任之塞二衣川關一、據二鳥海柵一、掠二賦稅一、奪中庸調上、而後得レ謂二之反一乎、當レ事者當レ議二師之曲直一、不レ宜レ計二較賞之有無一、義家之舉非歟、則當二黜レ之罰一レ之、是歟、則當二優レ之勞一レ之、而以二議者之言一不レ下二官符一、是朝廷吝レ賞也、何以能服二將士之心一哉、姚令言擧レ兵犯レ闕、李懷光與レ賊連レ勢、德宗播遷而亂離相尋者、皆以レ慳レ賞也、設使三義家部曲有二怨望者一、則朝廷將二何以應一レ之、吾未レ見二其可一也、雖レ然爲二義家一謀、則其請二官符一、當レ在二繕レ兵赴レ敵之時一、三年之間、歲月不レ爲レ不レ久、而必待二平定之日一、然後奏二其形勢一、亦已晚矣、故議者、得三以弄レ文而沒二其功一、惜哉、

平政子

政子閨闈之人、而握二戎馬之衡一、非レ有二權略智數大過レ人者一則不レ能也、不レ稟二父命一、奔レ于二賴朝一、本既不レ正、焉能保二其有一レ終、然政子、一流人、不レ可三以レ此責一レ之、當二是時一、賴朝、伊豆一羈囚耳、非下平氏乘隆憑二藉清盛聲勢一之比上、而寧負レ此適レ彼、不レ可レ謂レ無下婁昭君識二神武一之鑒上也、然其處レ心積レ慮、專爲二北條氏一、知レ有レ己而不レ知レ有レ子、可レ謂二悍而狡一矣、富士野之獵、賴朝遣レ使矜二賴家之射藝一、政子一言折レ之、是豈諧謔口氣哉、其胸中眼中、勘二破賴朝一、亦已審矣、賴家昏庸、不レ能レ負二荷基業一、政子命去レ職、分四天下地頭總守護於二一幡與二實朝一、一幡關東二十八國、實朝關西三十八國、叔姪不二兩立一、外家爭レ權、雖二中人以下一、知二其亂階一、以二政子之明敏一、豈不レ察レ之、其意以爲、比企能員、一幡之外祖也、彼恚二其減割一、慫二慂賴家一、從而斃レ之、我有レ辭焉、能員既斃、則一幡不レ能二獨立三於二縲絏之中一、外戚之權、歸レ于二時政一、而我得レ志焉、

蓋能員之戮、不待隔障之語、而一幡亦不免於死矣、至於義時弑賴家、公曉弑實朝、則愈不能無疑、公曉明以復父讐爲言、則賴家之弑、實朝使之也、兄弟推刀、君臣相戕、政子恬然爲不知、而不究治其事、及鎌倉無主、請賴經爲帥、擁虛器、主號令、其迹不可掩矣、究其心術、必能殺子殺孫、絕賴朝之胤、威權一歸于己、而後爲快、不啻武氏之亂再見於當時也、余嘗竊謂、孝謙皇帝有武氏之穢行、而無其才、政子有武氏之才、而無其位、武氏扼子拉孫（則天紀、扼殺其女、殺太子賢、又殺賢子）、務欲荐昌其族、而三思延秀、無復深謀遠慮、唯驕奢是務、相踵夷滅、而義時泰時、勤儉濟事、猛將豪宗、俛首而聽命、子孫相繼、秉兵權者九世、雖由義時父子之才略、亦政子善馭英雄之所致、可謂女丈夫也、雖然使遇武氏、則僅能執巾櫛侍盥匜、縱使用事、不過上官昭容賀婁尙宮之徒、余特提其髣髴形似耳、

入田親眞

入田丹後守親眞、左京大夫大友義鑑重臣也、常患世子義鎭之彊暴、屢規諫之、又憤津久見美作守、尾張守、田口藏人、齋藤右衛門、小佐井大和守等邪佞用事、請義鑑欲除之、義鑑聽其言、天文十九年二月九日、竊命近臣、誅齋藤小佐井、義鑑親檢其首、畢入內、夫人曰、津久見田口、尙全首領乎、侍女有其親戚者、密泄此語、於是津久見美作守、尾張守、孫太郎、田口藏人相與謀曰、等死耳、與其徒爲俎上之肉、不如行大事、乃潛使侍女爲內應、夜匿寢室中、偵其寢、揮刄齊發、弑夫人幷幼子、義鑑重傷、番直士宗像民部、田北將監等、聞變入闘、遂殺四人者、及曉義鑑病創而卒、及義鎭嗣立、以親眞每爲訐揚己非、將殺之、有人告之、因勸去、親眞謝曰、凡爲人臣者、忠諫逆耳而死、固其所也、偸一朝之生、汚萬世之名、我不爲也、乃自潰腹而死、時人莫不歎其忠烈焉、大友興廢記、筑紫軍記所錄述如此、又九州治亂記曰、親眞佞而有寵、善逢迎義鑑、讒于繼室、愛其所生到明子、（按鑑法名到明寺、松山叔康、其子曰到明子、他無所見、未詳、今一從本書）而恆有易世子之志、繼室日夜泣請、欲以親眞爲援、請以到明子託之、義鑑請親眞曰、我欲廢義鎭而立到明子爲嗣、汝意何如、對曰、御曹司聰悟絕倫、

人以為親世公再生、立之誠大慶、義鑑大悦、使義鎮以治疾如別府温泉、召執政齋藤播磨守、小佐井大和守、津久見美作守、田口藏人、諭以其意、四人同辭對曰、世子無罪、何故見廢、臣等未見其可、不敢奉命、義鑑不喜而罷、及晩召齋藤小佐井、誅於城門、津久見田口稱疾不至、入自後門、紿到明子近習曰、久不謁御曹司、願一見、即抽力突入、戕到明子、幷殺其母、遂弑義鑑、事起倉卒、內外騷亂、左右擊殺津久見田口、告急別府、義鎮馳還、親眞懼禍及、據采邑反、戸次鑑連、齋藤鎮實急攻之、親眞弃城走、阿蘇大宮司藤原惟豊、妻父也、故往肥後依之、惟豊誚責親眞曰、汝離間骨肉、悖逆無道、無所逃罪、背城決戰、力屈而死、不失壯士之名、猶之可也、今狼狽來奔、隻屈鼠伏、天神地祇寧汝容乎、遂斬其首、送子豊後、義鎮梟之、州人莫不稱快、澹泊齋曰、忠謂之忠、佞謂之佞、天下公論也、烏有一人之身而薰蕕氷炭如此相反者乎、蓋由毀譽牽於愛憎、傳聞出於泛濫、遂致紛紜厖錯、而善不得褒、惡無所貶、叢說稗史之不足憑據、類如此、而治亂記牽多聱牙杜撰之說、尤不足信、至義鑑被殺、夫人羅慘、則大友譜牒所載、雖不言其故、而興廢記軍記之說不誣也、機事不密、謀及婦人、宜其及也、

澹泊齋文集卷五

乙酉夏、久患ㇾ瘧、困臥羸憊、不ㇾ能ㇾ讀ㇾ書、因閲二信玄全集一、以爲二消遣之資一、間有二可ㇾ議者一、輙錄二本文一、附以二己見一、隨意評隲、本欲ㇾ渉二獵一部全書一、及ㇾ瘳、館事鞅掌、不二復得一ㇾ閑、故不ㇾ能ㇾ竣ㇾ功而罷、

信玄請ㇾ殿

武田信玄者、左京大夫信虎之嫡子、小名勝千代、信虎爲ㇾ人驕暴、愛二次子信繁一、動有二易ㇾ嫡之志一、信玄知ㇾ之、深自晦匿、擧動貶退、常如ㇾ不ㇾ及二信繁一、人皆以爲二庸劣一、天文五年、年甫十六、加二首服一、任二信濃守一、兼二大膳大夫一、名二晴信一、其年十一月、初從二信虎一攻二信州海野口城一、城兵乞二援平賀成頼入道源心一、源心率ㇾ兵入援、嬰ㇾ城固守、時大雪、城不ㇾ可ㇾ拔、將佐議曰、聞城中有二兵三千一、環而攻ㇾ之、猝難ㇾ得ㇾ志、不ㇾ如二罷ㇾ兵而還一、歳且ㇾ暮矣、天又大雪、敵豈尾ㇾ我乎、信虎從ㇾ之、下ㇾ令明旦班ㇾ師、信玄進而請曰、兒願爲ㇾ殿、信虎哂曰、衆謂敵不ㇾ能ㇾ尾、將安用ㇾ殿、若三二郎一則必不ㇾ請、信玄固請不ㇾ已、信虎許ㇾ之、十二月二十七日、（全集或作二二十八日一）信虎歛ㇾ兵還二甲府一、信玄獨留、兵纔三百許、夜令二士卒一曰、嚴辨二戒備一、秣ㇾ馬蓐食、不ㇾ論二能否一、飲酒盪寒、人皆不ㇾ喩二其旨一、竊相謂曰、還ㇾ府何用ㇾ如ㇾ此、眞癡騃矣、及ㇾ曉、信玄引ㇾ兵而出、直向二敵城一、城兵以二信虎解去一、散出二村里一、爲二迎年計一、留者不ㇾ滿ㇾ百、信玄掩撃殲ㇾ之、其在ㇾ外者聞ㇾ之、以爲信虎返攻、皆無二鬪志一、奔二竄山谷一、城遂陷、源心驍健多力、信玄輙斬ㇾ之、人始服二其膽略一、乃還二甲府一、信虎不ㇾ喜曰、守ㇾ城報ㇾ捷可矣、捨ㇾ城而來、何其怯也、群下揣二知其意一、皆慢二易之一、信玄不ㇾ伐二其功一、順從謙默、而爲二自全之計一、

評曰、信玄不ㇾ得ㇾ於二其父一、不ㇾ悅ㇾ於二群下一、而善自韜藏、一旦臨ㇾ機決ㇾ敵、出二人意表一、若三齊文襄之在二文宣時一、其智豈易ㇾ量哉、李唐太宗年十六、始應二煬帝之募一、說二雲定興一以二奇策一、竟解二始畢之圍一、信玄雖ㇾ非二太宗之比一、出ㇾ奇制ㇾ勝、如二老成人一則一也、知ㇾ人善使、謀畫無ㇾ爽、卒能取二信濃一、奪二駿河一、東略二上野一、西狥二飛驒一、凌二跨五州一、世稱二名將一、其機蓋見ㇾ於ㇾ此、而其無ㇾ父之心亦基ㇾ於

レ此、

信玄逐レ父

信虎將レ廢ニ世子一、其迹彌著、信玄患レ之。密與ニ親臣飫富兵部今井一郎等一、謀レ出ニ信虎一、而無ニ外援一、今川義元、姉夫也、欲ニ倚以爲レ重、潛使ニ人致ニ其意一、義元以爲。信虎婦翁、悍而難レ制、今與ニ晴信一通レ謀、使レ得レ如レ志、則彼必當ニ屬於レ我矣、乃許諾、信虎不ニ之知一也。天文七年春、使ニ人諭ニ信玄一曰、今川閥閱之家也、今使ニ汝之ニ駿河一、宜下在レ彼一二年就ニ義元一而講レ藝習中肆威儀上、其意專在下出レ之而以ニ信繁一爲上レ嗣、二月信虎如ニ駿河一、命ニ信玄一曰、不レ日而召レ汝、汝速來、及レ出。信玄與ニ同謀者一叛レ于ニ甲府一、拒ニ信虎ニ而不レ納、義元爲ニ之聲援一、信虎無ニ如レ之何一、信玄遂自立、信虎終身流ニ寓他邦一、

評曰、孝者、百行之本、信玄逐レ父自立、毀ニ滅天倫一、大本既虧、雖下威震ニ隣境一、名垂中百世上、不レ足レ觀也矣、或曰、子之論正而迂矣、信虎凶暴、天人之所レ不レ與、且欲ニ廢レ嫡易レ嗣、武田之家不ニ亦危ニ乎、信玄以ニ不世出之資一、不レ忍ニ坐受ニ其制一、故不レ得レ已而爲ニ此謀一、竟能興ニ隆世業一開ニ拓封疆一、是雖レ不レ孝レ於レ親、而孝レ於ニ祖先一、庸可レ譏乎、曰、不レ然、信玄旣爲ニ世子一、略涉ニ書籍一、當下講ニ問安視膳之義一、起レ敬起レ孝、盡中爲レ子之道上、盡レ道而不ニ我愛一、廢立唯命是從、於レ我何有哉、其在ニ之危懼地一、順從諫默者、皆僞也、夫兇悍如ニ信虎一者以レ誠事レ之、猶未レ易ニ感動一、況以レ僞乎、推ニ是心一也、商臣元凶之事、亦不レ難レ爲、雖ニ終身不ニ敢讀ニ論語一、果何益哉、曰、然則信玄被ニ廢黜一、就ニ群臣之列一、屢爲ニ一隊之長一、才略無レ所レ展、而老ニ死于ニ牖下一、後世不下復知中有ニ信玄者一、其可乎哉、曰、可也。立レ身行レ道。揚ニ名於ニ後世一、孝子之爲也、未レ聞下逐レ父逞レ志、貪レ功徼レ利而謂ニ之令名一者上、苟盡ニ爲レ子之道一、則名之不レ稱、世之不レ知、於ニ信玄ニ乎何損、且信玄之戰爭、專爲ニ富國彊兵一、而非ニ敵愾之事一、以ニ天子之命一、父不レ可レ逐、而況於レ私乎、孟子曰、舜視レ棄ニ天下一、猶レ棄ニ敝蹝一也、竊負而逃、遵ニ海濱一而處、終身訢然、樂而忘ニ天下一、張子曰、無レ所レ逃而待レ烹、申生其恭也、孝子之處レ變、如レ斯而已矣。衛出公拒ニ莊公一、不レ父ニ其父一、而禰ニ其祖一、當ニ是之時一、魯有ニ聖人一、晉有ニ正卿一、

故子路有二奚先之問一、趙簡子有二戚之師一、雖二人心泯一於レ彼、而天理存レ乎レ此、若二信玄之爲一、則群雄環視、恬不レ知レ怪、姻戚如二義元一、亦貪レ利レ于レ己反擠而陷レ之、詐力長而仁義消、人心泯而天理絕、禍亂何由弭哉、曰、卑レ之、無二甚高論一、舜與二申生一、信玄不レ能レ學也、曰、吾近取以喩レ子、燕劉仁恭自恃二疆大一、驕侈貪暴、及二梁將李思安攻一レ之、非二其子守光擊而卻一レ之、則燕幾不レ守矣、然守光悖逆、囚二仁恭於大安山一、可下以二存レ燕之功一而解中囚レ父之罪上乎、此必無之理也、要レ之、守光特庸懦之信玄、而信玄則英傑之守光耳、至二其叛一レ父則一也、雖二百戰而百勝一、烏能得レ贖二其罪一哉、

韮崎之戰

天文七年、信濃帥諏訪賴茂與二小笠原長時一謀曰、聞晴信逐レ父、人心不レ附、將士樹レ黨標レ異、不二相輯睦一、宜下乘二此釁一以取中甲斐上、七月、兩將率レ兵攻二甲斐一、逼二韮崎一、甲府以三新逐二信虎一、見兵寡少、僅有二六千餘一、飫富兵部、甘利備前、小山田備中、板垣信方、四將探レ籌、各定二前後一、兵部先與二賴茂前鋒一戰、信玄以二麾下兵一繼レ之、備前備中信方、相蹑而戰、然敵兵多、我軍疲頓、幾不レ能レ支、甲府留守原加賀、急驅二市井丁壯五十許一、擐二壞甲一、舁旗竹鑓、大譟而至、敵軍見レ之敗走、追斬二二千七百餘級一、自レ辰至レ未、戰合凡四、皆以二麾下一勝、麾下兵小幡山城、毎戰揮レ鎗先レ衆、獲二首級一、竟騎而與二敵偏將一、馬上相搏、斬レ之、被二七創一、馬亦傷痍、乃挂二所レ獲甲首四于一レ鞍、謁二見信玄一、汚二鐵赤血一、所レ乘赭白馬爲レ騟、甲府壯士相謂曰、戰當レ令二赭白馬爲一レ騟耳、

評曰、賴茂長時、勇將也、信玄年纔十八、處二危難之地一、能卻二疆敵一、其後用レ兵三十餘年、未二嘗敗衂一、雖二四境隣敵一、而無レ侵二掠甲斐一者、可レ謂二希世之良將一矣、雖レ然、非二加賀之方略一、則勝敗未レ可レ知、倉卒之間、能出二奇策一、邦有レ人、此之謂矣、山城之勇敢、恐不レ下レ於二耿介貴之甲裳盡赤一、及二晚年一沈鷙有レ謀、善曉二軍事一、壯士欽羨、信不レ虛矣、

信玄納二賴茂女一

天文十三年二月、信玄觀二兵諏訪一、板垣信方使三典厩信繁招二諭諏訪賴茂一、賴茂納レ款、三月信玄歸二甲府一、賴茂三來レ于レ甲府、信玄竟使二人殺一レ之、其黨又叛、

賴茂有レ女、年十四、信玄欲三納爲レ妾、信方及飫富兵部、甘利備前皆以爲二不可一、山本勘助晴幸竊謂二三將一曰、太守威武日盛、四隣莫二能爭レ雄、諏訪將士、何所二能爲一、今聞レ納二故君之女一、則將士胥悅、以爲萬一生レ子、使二外孫繼レ絕、則諏訪之家、可二以再興一、彼必傾レ心事二太守一、與二本州士子一無レ異矣、三將領焉、信玄遂納レ之、將士果大悅、相率來服、既而生二四郎勝賴一、使レ居二諏訪一、以嗣二賴茂之家一、晴幸之言驗矣、

評曰、晴幸算レ敵無レ遺、決レ勝有レ餘、智勇出レ群、世所二共知一、而至レ於二此言一則陋矣、殺レ降不祥、而納二其女一、使三其少有二人心一、則豈能俛首奉三衽席于二仇讎一哉、三將之言、正而難レ用、晴幸之論邪而易レ入、所謂逢二君之惡一者也、(按)郭崇韜、莊宗之功臣也、欲レ爲二固レ寵之計一、而勸二莊宗一、立二劉夫人一爲二皇后一、識者譏レ之、而覆二莊宗之社稷一者劉后也、今納二死虜之女一、冀三其生レ子而悅二將士之心一、在二當時一則可レ謂下不レ尋二干戈一而能鎭二靜一方一、計之得者上矣、而滅二武田之宗社一者勝賴也、天之報施、亦昭昭然、而晴幸之罪、殆不レ可レ逭矣、

信方之敗

天文十四年五月、信玄將レ兵、屯二信州小室一、諏訪郡代板垣信方遣レ使、告二小笠原長時木曾義昌一、（信玄全集作二義高一、今從二武田系圖、織田信長譜一）踰二鹽尻嶺一入寇、伊奈諸將（闕名）亦應レ之、信玄登時發二小室一、向二諏訪一、使三信方防二伊奈諸將一、信玄自將防二長時一、二十三日長時下二鹽尻嶺一、義昌爲二後繼一、長時與二信玄先鋒甘利備前、諸隅豊後、原加賀一酣戰移レ時、雌雄未レ決、信玄右隊將典廐信繁、小山田備中欲下從二山路一出上、長時陳レ後、直突二義昌陣一、長時衆見レ之、恐二其截一レ後、[illegible]時奔潰、信玄將士獲二首級六百二十九一、伊奈諸將聞レ之曰、二將失レ利、我軍豈能得レ支、不レ如二引退一、晡時將二抽レ兵而去一、信方欲二進擊一レ之、有二荻原與三左衛門九郎二郎兄弟一、信方之甥也、九郎二郎謂レ兄曰、伊奈諸將所レ恃者、長時、義昌耳、今二將既敗、將士聞レ之、當二速遁去一、而徐徐引退、且不レ燒レ營、間有二燒者一、則撲二滅之一、是必有レ謀、未レ可二輕進一、與三左衛門告二之信方一、信方素剛愎自用、及レ聞二其言一、大怒曰、汝輩怯懦、敵既褫レ氣、何謀之有、宜二疾擊一レ之、既而日暮雨降、伊奈將士乘レ闇迴レ軍、先レ是留三銳卒三百於二營中一、定二軍號一、

分爲三隊、至是伏發、大呼而進、前後夾擊、信方督勵士卒、悉力而戰、然事出不意、死傷甚多、果如九郎二郎所料、九郎二郎、恥詬於信方、挺身赴敵、獲首級二十一、示之信方、又赴陣而鬪死、時人莫不惜之、以爲信方拒諫取敗、歸必有罰、信玄諭曰、信方聞我鹽尻之捷、銳意勠敵、固其宜也、戰非斬敵爲善、我亦不可無損、前有強敵、後有伏兵、雨夜迷闇、必當進退失據、而麾下之卒、無一奔亡者、非素馭軍之善、烏能至此、時人感其言、

評曰、九郎二郎、可謂明決之士、料敵如指掌、智也、不躐等而告其兄、順也、不藉舅氏之勢、義也、恥言不用、奮身而死、勇也、使信方從其言、則兵不撓敗、而彼亦建勳著名、與當時驍猛之士、並驅爭先、惜哉、信玄之論信方將略也、豈有復諫喪師之將、而反稱其善者哉、蓋信方、老臣宿將、重傷其意、而英雄作略、固未可測、明年笛吹之戰、信方爲帥、以寡擊衆、大破上杉憲政之兵、豈非信玄獎諭之力歟、然而剛愎之性、終不能悛、狃勝輕敵、隕命於上田原、雖有孟明視不解之風、不思殷孝祠死將之譏、爲將者其可不戒哉、

戸石之戰

天文十五年、信玄攻信州戸石城、先是分遣諸將、以備隣境、故兵頗寡、栗原左衛門、蘆田下野等、各率數十騎攻城、小山田備中爲信玄前鋒、諸角豐後爲後拒、甘利備前、橫田備中、扼險以備援兵、村上義淸將兵六千、救戸石、前鋒樂岩寺直衝備前陣、橫田備中子十郎兵衛、搏敵督將、手馬上斬之、樂岩寺怒、督戰彌厲、城兵見甲府兵少、突圍出戰、信濃老方川上入道等皆敗走、備前備中前後受敵、力戰而死、義淸乘勢欲擊信玄陣、山本晴幸言于信玄曰、（時晴幸在麾下、託己所幸兒輕於安間曾根二人、而進言于信玄、）備前備中戰死、義淸將逼麾下、事急矣、得無良策乎、信玄應曰、信濃先方潰走、勢不可遏、不如與小山田備中、諸角豐後合兵、三陣爲一、以決死、晴幸曰、設使敵後隊南向、則我得勝、信玄曰、我軍且不聽號令、豈可使敵兵如意乎、晴幸曰、臣試出一策、請使豐後所將五十騎受臣指麾、信玄即呼豐後諭之、晴幸率其騎、去陣可五町、出其南、敵兵

果南向。南向則我陣益整、不可復當、晴幸還白信玄、益歩騎、將挑戰、小山田備中張陣而進、敵兵不能支、遂敗走、晴幸急馳備前陣告捷、備前士卒、素習兵機、逐北頗有斬獲、晴幸又諭信濃先方將士、使還軍整陣、甲府兵士、雖死傷甚多、而信玄遂得勝矣、

評曰、戸石之戰、義清軍鋒甚鋭、信玄先鋒既敗、麾下亦危、非晴幸之進策、則豈能得濟乎、善戰者因敗爲勝、其斯之謂歟、太宗與竇建德相持於虎牢、命宇文士及將三百騎西馳而南上、建德陣動、因而乘之、遂擒建德、晴幸之致敵、其有髣髴于此乎、兵家所謂大星、晴幸之所決機、而其功不可掩也、

上田原之戰

天文十六年八月、信玄攻信州志賀城拔之、休兵小室、先是小縣守將眞田彈正幸隆、知春原若狹及弟宗左衞門辨而有武幹、授以方略、使往更級詐降村上義清、因稱翻城爲內應、請遣兵迎接、誓書定約、義清信之、簡驍兵五百、抵小縣、若狹兄弟引入子城、幸隆闔門悉殪之、義清居常懷憾、至是聞志賀城陷、謂其下曰、志賀巡屬也、今不出兵、部下諸將、恐懷離沮、將墮彈正之姦計、多喪甲士、當與信玄會戰、而決死生、不然、則斬彈正之首、貫之矛槊、不亦快乎、將校諫曰、本軍壯士、多爲彈正所誘殺、新進輩未習軍旅、且聞信玄兵多、宜避其鋒、俟時而動、義清不聽曰、兵之利鈍、不在衆寡、我意決矣、遂將七千餘騎營于上田原、幸隆請爲前鋒、信玄知義清淹恚不許、命使爲右軍、板垣信方將前軍、與義清兵戰破之、率部下兵、乘勝逐北、與後軍相去懸遠、不擇地形、向義清陣、檢所獲首級、敵偵知其驕惰、卷旗而進、急擊之、信方方據胡牀、兵不暇接、敵兵以槍叢刺、竟斃之、義清軍復振、整陣而進、典厩飫富兵部等四將、邀擊破之、義清率精卒數百、馳突信玄陣、所向披靡、後軍馬場美濃信房、內藤修理昌豐、橫擊走之、諸角豐後、眞田彈正、邀其走路、義清單騎揮刀、親與信玄鬪、信玄被創、既而義清墜馬、士卒擁之而去、是日接戰、互有勝負、信玄雖喪驍將、而終得勝、斬首二千九百餘級、其後攻略諸縣、併呑信

濃一、勢浸疆大、實由レ此也、

評曰、魏相有レ言曰、敵加レ於己、不レ得レ已而起者、謂二之應兵一、兵應者勝、爭恨二小故一、不レ忍二憤怒一者謂二之忿兵一、兵忿則敗、義清不レ悟二詐謀一、亡二失精鋭一、此雖レ非二小故一、而所二以與レ我者忿兵也、信玄提レ師攻レ城、不レ得レ謂二之應兵一、而義清拒二群下之諫一、蓄レ怒而來、則信玄反爲二應兵一、變化無レ窮、勢在二呼吸一、而勝敗之機、蓋決レ于レ此矣、夫義清之摧レ堅挫レ鋭、與二信玄一鬪者、雖下能不上レ食二其言一、此特隊伍匹夫之勇、而非二將帥之事一、幸隆之譎レ敵、則高季興誘二李茂貞一之故智、而若狹兄弟、亦馬景之流亞也、權略之士、何代無レ之、顧在三能收二其用一耳、

義清乞二援景虎一

義清既敗、道路爲二諸將所一レ扼、不下復得上レ歸二更級一、經二涉山澤一、抵二越後一、納三一郡于二長尾景虎一、請レ屬二麾下一曰、義清兵竭力屈、崎嶇蹉跌、藉二君威靈一、得レ及二弊色一、君之惠也、景虎時年十八、勇略過レ人、出見二義清一曰、先人爲景、經二略加賀能登越中一、功績垂レ成、而不幸隕二命越中一、當時景虎尚幼、故不レ能レ繼二成先志一、將下俟二明年雪消一、出二師越中能登一、以攘中寇敵上、而今君窮蹙歸レ我、拒レ之不レ武、敢不二唯命是聽一、我聞、晴信用レ兵、常貴二愼重一、是欲下蓄レ鋭全レ力蠶中食郡國上、景虎則異レ于レ此、不レ務二遠略一、不レ貪二尺地一、當レ戰則戰、不レ能三復避二來鋭一、昔源義經僅領二伊豫一州一、相摸入道總二管天下一、至レ今世人不レ稱二崇鑑一、而稱二義經一者、以三其當レ戰善戰一也、於レ是景虎召二諸將一令曰、今當下與二晴信一對壘上、兵不レ須レ多、限以二八千一、十月、景虎及二信玄一遇レ于二海野平一、景虎雖二年少一、信玄聞二其名一頗憚レ之、命二山本晴幸一爲レ陣、布置嚴整、首尾救應、悉合二法度一、景虎使二前鋒挑戰一、勝負略相當、既而日過レ中、有二一騎兵一、出レ陣指麾、斂レ兵而退、問レ之則景虎與二其軍師宇佐美駿河定滿一也、甲府將士爭欲二追躡一、晴幸固止レ之、信玄亦引去、翌日、信玄召二諸將一、問二景虎方略何如一、晴幸對曰、臣愚料レ之、景虎合二兵七千一爲二圓陣一、先使三前鋒擊二我前軍一、其意正欲下以二其麾下一直攻二我麾下一、決中一死上也、而見二我陣完固一、馳突無レ所レ施、故輒收レ兵去耳、自レ此以往、彼必多方以怒レ我、怒而輕進、則陣不レ整、不レ整則爲二彼所一レ乘、正墮二其計一、宜三靜以待レ之、徐圖二其

利一、諸將皆善二其言一、

評曰、信玄謙信、勍敵也、智勇略相當、適足二以相持一、而不レ足二以相斃一、所レ謂以レ智攻レ智、以レ勇擊レ勇、智勇不レ足レ恃、而無二以相勝者一歟、雖二小大之不一レ侔較二其才氣一、則譬如三高歡之於二宇文泰一也、今其言曰、當レ戰則戰、不レ能三復遏二來鋭一、而海野平之役、戰未レ及レ酣、俄收二其兵一、所レ言頗似二相反一、而實相應、何也、既曰二當レ戰則戰一、明其不レ當レ戰則不レ戰矣、隨武子曰、見レ可而進、知レ難而退、軍之善政也、謙信蓋達二此旨一、觀三其談二將略一、信玄之謹嚴、謙信之果決、卒如二其言一、可レ謂二知レ彼知レ己者一矣、蓋信玄之兵、似二程不識之部伍一、而士卒不レ苦、謙信之兵、似二李廣之簡易一、而勇烈過レ之、世或見二其剽悍驍鋭一、而徒目レ之爲二猛將一、豈知下量レ敵審レ己、未レ逮二弱冠一、而有中老成之度上乎、及レ壯、管二轄諸州一、威震二關東一、如二其事業一、則反在二信玄之上一、兩雄並稱、豈徒然哉、

川中島之戰

天文二十年、管領上杉憲政、與二北條氏康一戰、敗奔二越後一依二景虎一、讓下管領職與二上杉氏一於中景虎上、永祿四年二月、景虎赴二京師一、謁二將軍義輝一、賜二輝字一、改二名輝虎一、（將軍家譜爲二三年五月一、而全集所レ載事實有二次序一、今從レ之）輝虎勢漸彊大、有下併二呑關東一之志上、時信玄狥二信濃一、士馬彊盛、輝虎以下與二義清一有上レ約、每年出二兵川中島一使二擾壞地一、八月率二兵一萬三千一、營レ于二西條山一、信玄聞レ之、出屯レ于二川中島一、扼二筑摩川上流雨宮渡一、斷二越後路一、士卒患レ之、輝虎略無二懼色一、信玄留五日、入二海津城一、休二士馬一、將佐諫二輝虎一請レ還、弗レ聽、淹留經レ旬、信玄召二馬場信房山本晴幸一曰、戰期二明日一、卿等部二分隊伍一、晴幸曰、我兵二萬、分二一萬二千一襲二西條山一、詰旦交レ兵、以二麾下八千一陣レ于二川上一、待二敵半濟一、前後夾擊、則蔑レ不レ勝矣、於レ是高坂彈正昌信、飫富兵部、馬場信房、小山田備中、甘利左衛門、眞田幸隆、相木一兵衛、蘆田下野、小山田彌三郎、小幡尾張等十將向二西條山一、典廐信繁、穴山（本書不レ書二伊豆守左衛門大夫一、蓋伊豆守信友也）爲二麾下前鋒一、逍遙軒信連、原隼人、將二左軍一、太郎義信、望月（名闕）將二右軍一、信玄自將二中軍一、部署既畢、以待二天明一、九月九日夜、輝虎從二山上一望二炊煙一、召二諸將一謂曰、我與二信玄一構レ兵、既逾二十年一、未レ能レ得レ志、今察二其機一、信玄分レ兵爲二二道一、一以

來襲、一以待㆓我半濟㆒擊㆑之、瞭然已在㆓目中㆒、今我先涉㆑水、張㆑陣挑㆑戰、使㆘彼前鋒襲㆓我空營㆒、直以㆓麾下㆒、薄㆗其麾下㆖、急與㆓信玄㆒搏戰、或交㆑刄而死、否則刼㆑之以講㆑和、我計決矣　遂率㆓其兵㆒、出㆓西條山㆒、度㆓雨宮渡㆒、時夜二更、不㆑聞㆓人馬之聲㆒、輝虎每㆑行㆑軍、一人兼㆓三人之食㆒、晨爨以斷㆓煙火㆒、人莫㆑測㆓其去留㆒、十日黎明、信玄過㆓廣瀨渡㆒布㆑陣、以待㆓前軍之報㆒、既而日昇霧霽、敵兵已在㆑近、衆寡不㆑敵、士卒大驚、信玄使㆓浦野若狹覘㆑之、歸報曰、輝虎數㆓匝其軍㆒、過㆓犀川㆒而歸㆓越後㆒、曰不㆑然、此所㆑謂車懸者也、輝虎將㆑送㆓死于我、乃更整㆑陣以待、輝虎授㆓甘糟近江兵一千㆒、爲㆓後軍㆒、直江山城兵二千、護㆓輜重㆒、自將㆓兵一萬㆒、以㆓鰐崎和泉㆒爲㆓前驅㆒、騎兵皆下㆑馬執㆑鎗、督將馬上指麾、分㆑隊力戰、輝虎率㆓麾下㆒、出㆓信玄陣右㆒、擊㆓義信㆒破㆑之、進擊㆓信玄㆒、所㆑向衝突震蕩　互相殺傷、輝虎馬上揮㆑刀、親擊㆓信玄㆒、信玄不㆑知㆑爲㆓輝虎㆒、據㆓胡牀㆒以㆓鐵團扇㆒支㆑之、刀中㆓團扇㆒者八、腕被㆑創、士卒爭進救㆑之、原大隅援㆑鎗刺㆓輝虎㆒、不㆑中、撾㆓其馬㆒、馬驚逸去、由縣三郞兵衛昌景與㆓鰐崎和泉㆒戰、穴山與㆓柴田因幡㆒戰、御㆑之、其餘諸將、皆爲㆓輝虎所㆑敗、逃至㆓廣瀨渡㆒、與㆓飯信繁、諸角豐後、山本晴幸等戰死、既而幸隆兵部等十將、邀聞㆓戰鬪之聲㆒、還㆑軍爭進、尾而擊㆑之、輝虎大敗、士卒悉潰走、戰死三千餘人　甘糟近江獨整㆓部衆㆒、徐徐而退、高坂昌信追擊㆑之、近江殊不㆑爲㆑意、過㆓犀川㆒留三日、收㆓集散兵㆒而去、是日合戰、非㆓諸將來救㆒、信玄殆危、輝虎歸㆓越後㆒、謂㆓將佐㆒曰、嚮我親入㆓敵陣㆒、欲㆘與㆓信玄㆒相搏、刼㆑之爲㆗盟、而謂㆘信玄好㆑謀、多置㆓圓顱類㆑已者㆒、以亂㆑眞、且鎧冑鮮麗、如㆓壯者軍裝㆒、其爲㆓信玄子弟㆒、亦未㆑可㆑知、尤豫之間、馬爲㆓敵所㆑毆奔逸、至㆓廣瀨渡㆒、有㆓□士㆒、自稱㆓太郞義信㆒、馬上格鬪、鋒及遞交、而信玄前軍競進來擊我軍敗績、不㆘與㆓信玄㆒交㆑臂遂㆖志、至㆑今不㆑能㆑釋㆑懷也、

評曰、晴幸指畫　未㆑爲㆑失㆑圖、謙信夙悟㆓其機㆒、冒㆑夜而進、此固晴幸之所㆑不㆑及、而信玄之所㆑不㆑慮也、先㆑人有㆑奪㆓人之心㆒、其此之謂歟、幸而諸將來救、信玄不㆑至㆓大敗㆒、不㆑然則孫叔敖所㆑謂戰而不㆑捷、參之肉、其足㆑食乎者、非㆓晴幸之謂㆒歟、以㆑死塞㆑責、固得㆓其所㆒、夫謙信之逗留涉㆑旬、異

レ于ニ義淸之愎レ諫、信玄士馬精整、無ニ釁可レ乘、故
堅忍以持重、欲下俟ニ其動一而制上レ之、及ニ其挺身陷一
レ陣、則欲レ爲ニ曹沫之事一而不レ果、謙信非下素與ニ信
玄一有中怨隙上、所ニ以構レ兵者、以三其許ニ義淸一也、然
而兵連不レ解、則不レ能三經ニ略關東一、遂レ使レ講レ和、
信玄不レ可、故欲レ決三成敗於ニ一擧一、而其志固有レ所
レ在焉、若以レ賈ニ餘勇一而觀レ之、則豈謙信之意哉、
蓋川中島之戰、所レ謂確鬭也、旗鼓相逼、鋒鏑交
接、勇而無レ剛者、不レ能レ支レ久、信玄始雖ニ挫衂一、
而終不レ退ニ戰場一、是所レ難レ能、而世稱ニ其勝一者歟、
審ニ其形勢一、兩魏邙山之戰、如ニ夜襲且遇、敗而復
振一、賀拔勝槊及垂レ及ニ高歡一、絕與レ此相類、固當
レ無レ所ニ優劣一也、

信玄廢ニ義信一

永祿七年中元夜、太郎義信託ニ觀燈一、抵ニ飫富兵部家一
密語過ニ夜分一而還、唯其傅曾根周防、近習長坂源五
郎（釣閑齋子）從焉、監吏偵ニ察其狀一、翌日白ニ信玄一、兵部弟
三郎兵衞昌景侍レ側、進レ言曰、臣記世十年十六、初
赴ニ戰場一、命ニ兵部一使レ衣ニ戎衣一、閣下親行レ酒、世子觴
レ於ニ兵部原美濃小幡山城山本勘助四人一、臣等感泣、竊
謂未レ見ニ如レ此盛事一、閣下慈愛日隆、而世子何故包ニ
藏禍心一、自ニ川中島之戰一以降、公詆ニ閣下一以蓄ニ異
圖一、兵部身爲ニ重臣一、當ニ讜言極諫、繼レ之以レ死、是兵
部之分也、今既不レ能ニ諫爭一、又從而賛ニ成之一、罪在ニ
兵部一人一、臣頗蹤跡知ニ其事一、自ニ七月初一每日通ニ書
兵部一、交結ニ邪謀一、然反計非レ急、臣欲下俟ニ監吏發レ之、
然後上言上、故延至レ今、因探レ懷、進ニ義信手書一、有下
兵部應諾誠可ニ嘉尙一之語上、於レ是信玄陰爲ニ之備一、猜
防滋甚、至ニ明年正月一、數ニ兵部罪一而誅レ之、下ニ義信
於レ獄、殺ニ周防源五郎以下八十餘人一、十年十月義信
自殺、

評曰、義信悖逆、天地所レ不レ容、因レ之殺レ之、孰
云レ非レ宜、然原ニ其本心一、則信玄有ニ以啓レ之、彼
聞ニ其逐レ父、以爲ニ爲ニ人子一者、苟有ニ才能一而不レ得
レ逞レ志、則雖レ逐レ父可也、殺レ之亦未レ爲ニ不可一、一
有レ萌レ于レ此、則梟獍之行、何所レ不レ至、嚮使ニ信
玄知ニ愛レ子之道一、則擇ニ師傅一、選ニ僚屬一、屏ニ憸邪一、
遠ニ讒佞一、敎レ之以ニ義方一、旦夕而輔導、則庶幾不
レ陷ニ於不義一、而無ニ父子相殘之禍一矣、今既不レ然、
自レ幼至レ壯、所ニ講磨一者、軍旅之事、所ニ游處一者、

健兒悍夫、不レ服二溫凊之勤一、不レ聞二仁恕之言一、肆レ意嬰レ戮、不二亦宜一乎、信玄爲レ子不孝、爲レ父不慈、天性毀滅、倫理斲喪、啻不レ逮レ身幸矣、夫兵部、甲府之驍將也、所レ謂赤備、鄰敵震懾、當下以二功名一令上レ終、而爲二潘崇之行一、凶徒之魁、罪不レ容レ誅、始與二信玄一、逐二信虎一、又與二義信一、圖二信玄一、一之謂レ甚、其可レ再乎、或曰、義信反狀未レ露、事頗曖昧、信玄不三推覆二其實一、而遽殺レ之、不二亦過一乎、曰、不レ然、昌景忠勇之士也、其言不レ涉二欺罔一、雖下以二百口一保上レ之可矣、以レ弟證レ兄、其事實難、大義滅レ親、可レ謂二公忠一、又何寃濫之有焉、

庚寅冬、中島爲貞作二淺井三代傳一見レ寄、余縱觀レ之、歎二其記事精確、用二意史筆一、因有レ感レ于二當時事迹一、摭二其可レ議者一、略下二論斷一以還レ之、

上坂泰貞教二誡二子一

泰貞之敎二誡二子一、似矣、然觀二二子之才一、孰二與亮政二子一、果能制レ之乎、則抑而不レ用、使二彼怏怏不一レ得レ志可也、苟不レ能レ制、則小惠不レ足レ懷二大奸一、克思二吾言一、遇レ之勿レ疎、果何所レ益、孰謂下泰貞之審レ於レ料レ彼、而闇中於レ知レ子乎、其實非レ不レ知也、養而子レ之、立而爲レ嗣、非レ有二大過一、其勢不レ能レ易也、然則殺二亮政一、以斷二後患一何如、曰不可、彼方忘レ死救レ急、殺レ敵立レ權、曲レ意事レ我、又無二過惡一、烏得レ殺レ之、蓋亮政之才、而二子之不才、天也、至レ此無レ可二奈何一、泰貞死不二瞑目一矣、

泰貞嘗爲三京極勝秀所二子養一、故養二泰舜一以爲二己子一、不レ忘二本宗一、義固當矣、何以又養二泰信一、蓋欲下結二文隣境一以爲上レ援也、然立二泰舜一爲レ嗣、泰信爲レ副、兄弟之分既明、而爭奪之源塞矣、上杉謙信養二北條氏康子一、命名二景虎一、又養二甥景勝一爲レ子、繼嗣未レ定而謙信卒、二子爭レ立、日尋二干戈一、景勝終殺二景虎一、據二有越後一、謙信英武絶倫、固非二泰貞所一レ及、而至二其貽厥一、則遜二一著一矣、

京極屋形

尾形者、世家謂也、當時非レ如二京極六角吉良土岐之流一、則不レ得レ稱、而京極六角、同族仇視、鷸蚌相持、而不レ免二漁人之利一、吉良土岐、至二義諦賴藝一、敗亡相踵、唯甲斐之武田、駿河之今川、周防之大內 豐後之大友、拓レ境廣レ地、士馬雄盛、不レ負二屋形之名一矣、然氏眞爲二信玄所一レ逐、義隆爲二晴賢所一レ弑 信長人二甲

妻一、而勝頼無二噍類一、秀吉一怒、而義統無レ所レ措二手足一、安在三其爲二屋形一哉、甚矣、高淸父子之孱弱也、亮政反レ于二秦舜一、是反レ于二高淸一也、而不レ能レ討檄召二將士一、張二皇虛聲一、老病不レ能レ任レ事、猶不レ足レ責、高岑懦緩、受二制于一レ人、不レ得レ已而出レ兵、敗衂而還、逼レ於二後孝之議一、既和而又戰、戰而又敗、敗而又和、雖二講和一、其實請レ降、擧措乖レ方、一無二足レ觀者一、宜其幽二于小谷一、不レ能二一日聊一レ生也、其子高秀若レ存若レ亡、苟非三秀吉之經二略長濱一、則京極氏不レ得二血食一矣、由レ是推レ之、信長秀吉、隱然有レ功于二京極氏一、雖レ謂下之爲二高淸父子一報レ讐雪上レ恥可也、

淺井三代

亮政謀將也、久政愚將也、長政勇將也、謀而無レ勇、則謀不レ成、勇而無レ謀則、勇不レ立、惟愚也、謀不レ能レ入、勇無レ所レ施、相率歸レ于二敗亡一而已、亮政知レ人善用、廣收二群策一、以レ寡擊レ衆、謀無二遺算一、乘二高淸之罹一レ疾、城レ于二小谷一、此其急著也、卒能吞二噬江北一、開二刱基業一、眞奸雄也、久政不レ恤二軍事一、荒レ于二畋獵一、拒レ諫信レ讒、疎二斥耆舊一、及レ殺二大橋秀元一、群下益離沮、其不三遽至二覆滅一者、特以下長政收二士心一、維二持紀綱一、遷中延歲月上耳、長政勇略逸レ群、健鬭無レ前、奇計良策、雖レ不レ及二乃祖一、而摧レ堅挫レ銳、百戰不レ撓、殆有二孫策姚襄之風一、而終不レ救レ於二敗亡一者、久政之惷愚、掣肘膠柱、請レ戰而不レ許、坐失二事機一、遂使下疆敵得上レ逞二志于一レ我、謀臣猛將、賣レ降恐レ後、力屈勢蹙、父子不レ能二自全一、悲夫、

亮政反逆之雄、何爲立レ傳、懲二不臣一也、應仁之亂、紀綱不レ振、勝元持豐之黨、割二據州郡一、各爲二自立之謀一、下陵上替、弱肉疆食、凡有レ力者、皆可三以行二簒弑一、亂臣賊子無二人得而誅一レ之、豈特亮政而已哉、然余嘗怪亮政得レ志以降、何亂賊之滋多也、約而言レ之、陶晴賢弑二大內義隆一、齋藤秀龍逐二土岐賴藝一、秀龍亦爲二子義龍所一レ賊、長曾我部元親出二一條康政一、浮田直家簒二浦上宗景一、松永久秀酖二三好義長一、遊佐信敎戕二畠山昭高一、三好義繼弑二源義輝一、其餘不レ遑二枚擧一、綱常滅而倫理絕、悖亂極矣、然其原起レ于二北條氏之蔑一レ上、義時以二陪臣一放二逐三帝一、恣行二廢立一、高時效レ之、陵二暴萬乘一、群下相視、恬不レ知レ怪、世道一變、其所二由來一漸矣、

長政藉二父祖之資一雄二視江北一、兵精力完、而與二越前一、

相ニ爲脣齒一、固信長之所ニ深畏一也、蓋長政不レ服、則信長不レ能下越ニ近江一、而窺中綴京畿上、故結レ婚以親レ之、倍レ約以斃レ之、其過ニ信長一、實長政之不幸也、諸將名ニ長政一者二人、淺井長政、先輩也、淺野長政次レ之、黑田長政又次レ之、皆一時之良也、淺野黑田、世受ニ方面之任一、安富尊榮、亮政至ニ長政一、三世而絕、反臣子孫、不レ能ニ久遠一、天定亦能勝レ人、其然乎、

淺見對馬守俊孝

俊孝機略、不レ及ニ亮政一、而殄滅之志、始終不レ渝、不丁特以丙其與ニ秦舜一有乙姻婭之好甲、蓋忠義出レ於ニ天性一、其身老レ于ニ行間一、曉ニ暢軍事一、亮政所レ憚、唯俊孝一人而已、高岑既敗、亮政往ニ越前一、謝ニ其援一レ己、俊孝欲三乘レ虛以襲ニ小谷一、將士一無ニ應者一、孤軍單縈、無ニ如レ之何一、使三諸將皆如ニ俊孝一、則豈不ニ轉レ敗爲一レ勝哉、高岑不レ能レ用ニ其策一、盡ニ其才一、每戰輙敗、沈慶之曰、節下有ニ一范增一、而不レ能レ用、高岑之謂也、

井口彈正義氏

亮政困レ于ニ地頭山一、計無レ所レ出、將ニ自殺一、大橋秀元耳レ於ニ義氏一、使ニ之代死一、義氏怡然就レ死、亮政竟得レ脫、故亮政厚撫ニ其孤一、娶ニ其女一、以妻ニ久政一、義氏不レ投レ命、則亮政不レ能レ立ニ三世之基一、豈非ニ忠臣義士一耶、曰、不レ然、謂ニ之烈丈夫一則可、謂ニ之忠義一則不可、何耶、義氏仕ニ京極氏一、而隸レ于ニ秦貞一、其實臣焉耳、及下亮政襲ニ今濱一拔ニ上坂一、意氣揚揚、還上自ニ越前一、義氏與ニ今村掃部國平一、迎ニ謁道左一、遂臣ニ事之一、與ニ其死一レ于ニ亮政一、何不レ死レ于ニ秦舜一、曰、秦舜衆人遇レ之　亮政國士遇レ之、則將如レ之何、曰、亮政反レ于ニ秦舜一、是主將之讐敵也、縱不レ能ニ陳レ力誅討一、豈宜ニ委レ質爲一レ臣乎、衆人國士、既非ニ通論一、況非ニ其比一者乎、燕劉守光將レ稱レ帝、孫鶴固諫死レ之、先哲謂、孫鶴受ニ劉守文委任一、不レ能ニ以レ死殉一レ之、乃銜ニ守光生レ全之恩一、忠諫而死、是可ニ以死一而不レ能レ死、可ニ以無一レ死而死也、義氏之輕レ死、豈非ニ其比一乎、然而逼レ於ニ亮政之急難一、激レ於ニ秀元之勸獎一、勢不レ得レ不レ死、此樊將軍授ニ首荊軻一之秋也、故曰、可レ謂ニ烈丈夫一、不レ可レ謂ニ之忠義一、余恐下世人見ニ其視レ死如一レ歸、將中與ニ村上義光毛受家照輩一同日而語上、故不レ得レ不レ辨レ之、

赤尾淸綱對ニ久政一

久政與六角義賢戰敗、歸咎勳舊將佐曰、卿等耄矣、淸綱對曰、行兵猶放鷹也、第在將之指揮耳、臣等雖老、筋力未衰、今日先君若在、不復如此老耄矣、詞直氣壯、久政無如之何、陳登嘗呂布盛怒、欲殺之、登不爲動容、徐爲曹公之言曰、譬如養鷹、飢即爲用、飽則颺去、布意乃解、淸綱語勢、與此略相似、調理靈人、不得不如此、

久政殺大橋秀元

秀元亮政之等夷、拳勇趫捷、非有大相過者、特以亮政有統馭之才、推而爲主、以徼功名富貴耳、相從日久、竭力行伍、亮政以故舊遇之、益相親愛、故臨死以久政爲託、久政多不法、秀元因事規諫、無所回避、遂見諫、又聽讒者之言、召欲殺之、秀元與其子善二郞赴小谷、遺書長政、指畫軍政、其心一日不忘淺井氏、幾乎從容就義者矣、郢王友珪患魏博節度使楊師厚威勢甚重、發詔召之、其腹心皆諫曰、往必不測、師厚曰、吾知爲其人、雖往如我何、乃帥精兵萬餘人度河、趣洛陽、友珪大懼、甘言遜詞以悅之、尋使還鎭、

師厚揣友珪不能殺己而赴之、秀元知久政必能殺己而就之、非不能爲師厚之事、不肯爲也、故其言曰、今我不往、令吾輩營眠、亦甚易耳、此其胸中算定久政、不下師厚、而不負託孤之義、能守君臣之分、則大有間矣、

久政議長政與信長結婚

近江越前、輔車相依、譬如夏之於鄭、建德俘而世充降、卒之兩困而俱斃、遇太宗也、信長之將略、未及英衞、況敢企望太宗乎、然而淺井朝倉、緩急相救、則不愧於夏鄭之交矣、何以言之、久政承父之業、不克負荷、荒禽怠政、疆埸日駭、唯其不欲長政與信長結婚、議論稍有可觀、不忘與國之好、使彼不得侵軼越前、而後許之、善隣之道固宜如此、信長專以詐力馭群雄、淸議不足恤、盟約不足賴、愚弄久政、牢籠長政、如宿將老臣、則以言餂之、將士日携貳、而瓦解之勢不可遏矣、寧捨一女子、不可不取敵國、此信長之本謀也、久政昧機宜、據其故常、以爲淸議可恤、盟約可徵、而終不知墮其計、此其所以喪軀也、考其歸、則誠愚、而持議未嘗不正、

彼以詐、此以信、去食去兵、而信不可去、寧與與國俱亡、不與敵國並存、臨死決烈、猶有可取、觀者不以其過而掩其善、斯可也、

遠藤喜衛門直繼

直繼手眼明捷、膽略素定、方其饗信長於成菩提院、中夜馳還小谷、說長政使殺之、曰、臣一人之力、足以辨之、君公即引兵來擊　進襲岐阜、則取美濃尾張在掌中矣以刺客自處、何其果也、以將略授長政、何其倨也、果與倨、皆明捷之所為也　其策信長、灼如蓍龜、設使長政從其言、則信長貫尸而歸　豈不殆哉、長政不欲邀危桀險、猶有君人之度、而不知養虎遺患　此興亡之機關也、姉川之戰、直繼潛入敵軍、直前欲擊信長、為竹中久作所覺而死、是欲了其前局也、故曰膽略素定、非耶、

暨乎兩兵酣戰、主客相亂、竊軍號、易旗幟、徑前欲殺主將者、往往有之、如姉川之戰、　倉義景之兵　狙擊東照公者二人、天野三郎兵衛康景、加藤喜左衛門喜之、覺而斬之、秀吉攻三木城、別所長治之兵久米五郎久勝、志水彌四郎直近、圖擊秀吉、亦所覺而死、上杉景勝與最上義光、相持東禪寺、有馬頭伴爲景勝兵、提首突入陣中、詐曰、我獲有馬頭首、大將安在　請授之、不及者十餘步、本莊越前守繁長、擊而殺之、凡此數者　皆直繼之流、而竟無一人得志者、匹夫之勇、固非所尚、而萬夫之勇、未必不從匹夫中來、顧其養之何如耳、

安養寺三郎左衛門經世

長政敗于姉川、經世力戰深入　爲敵兵所擒、信長問城中虛實、經世詭辭以對、信長縱之使還　經世益勵戰守、小谷阽危在旦夕、而延數年者、蓋賴其言也、及淺井氏滅、事京橋高次、削髮號閑齋、慶長庚子之夏、石田三成往大津城、謁高次、告其謀而誘之、高次雖不聽、而善遇之、經世謂將佐曰、三成稱兵、必不能成、執而戮之　一夫力也、請我當之、黑田伊豫守不從曰、三成受秀賴密旨、以舉大事、輝元居大坂、指麾軍事、今殺三成、則輝元急攻我、諸將響應　守備未完　四面受敵、此危道也、經世曰、不然、秀賴尚幼、不能出命令、三成誣天下以濟奸謀、關西諸將脅子

三成一、蒲伏聽レ命、今殲二渠魁一、則諸將波駭、群疑蠭起、輝元惶惑、計無レ所レ出、我亟遣二一价一、報レ于二小山一、內府大旆皷行而西、則平二蕩支黨一、可二翹レ足而待一、此不世之功也、伊豫守素恇怯、不レ能レ用二其言一、經世憤惋而退、信如二某策一則不レ待二靑野原之鏖戰一、而天下大勢已定矣、明決之士、所レ見略同、經世之欲レ執二三成一、即直繼之欲レ刺二信長一也、要レ之二子皆奇士也、故特表而出レ之、

澹泊齋文集卷六

赤濱村願成寺鐘銘幷序

春雷一發、則蟄蟲爲レ之蠢動、草木爲レ之萌芽、聲之入レ物也深矣、物皆然、况於レ人乎、賢智固不レ假レ聲、而因レ聞生レ悟、如二筌獲一レ魚、彼冥頑不慧之徒、非レ有二妙音聲震而警一レ之、則醉生夢死、曷時能得二醒甦一哉、故法器之中、鐘爲二最大一、常州多珂郡赤濱村願成寺、嘉元初、日辨上人之所レ剏也、星霜四百有餘載、山名松峯、幽蔚深邃、晨香夕燈、梵音與二海潮一合レ響、居然一靈區、而未レ有二桂椎之設一、村民以レ漁爲レ業、戕レ生殄レ物、罪障亦深、住持日長思レ有二以救一レ之敉、使三化主見性奔二走遐邇一、開二諭十方檀越一、勠レ力協レ心、鑪鐘功竣、索二余銘一レ之、余嘉二其志之篤、行之勤一、遒爲二之銘一曰、

精金鎔範、鳧氏製鑊、簨簴旣設、侈弇受度、長鯨一吼、聲震二寥廓一、春容鏗鍧、管攝龍絡、凡百有生、藏二舟於レ壑一、朝貪二榮利一、夕歸二冥漠一、腐鼠相嚇、蠢爾自縛、忽聞二洪音一、惕然驚愕、精進修善、勇猛斷レ惡、

如湯沃雪、似鉏刮膜、出脫泥犂、永劫安樂、

水府系纂序

元祿己卯歲、中山內記信敏、始謁西山、義公面諭曰、執政者以得人才為先、而其要在知仕進之先後、門望之輕重、府下士人、子孫世祿、逮事威公、有自伏見駿府從者、有自萬千代君傳者、有至威公及寡人時新仕者、甄別品流、慎擇才能、然後升之於公、此執政元老之任、而卿行將有其責矣、我有一書、名曰水城實錄、藏在彰考館、雖不悉備、而足粗知要領、卿其涉歷焉、時臣覺侍側、乃命覺曰、內記還水戶、取此書送去、信敏拜命之辱、既而解歸、傳寫謄錄、一如公命、恭惟、大君閣下、至性篤孝、善繼先志、重命佐野鄉成、增修補葺、演迤閎博、凡勳舊新進、歷仕等級、開卷瞭然、更其名曰水府系纂、蓋譜錄、所以重祖先、覈源流、而煦濡涵泳、廉恥之風所由立也、惟義公捘之於始、閣下成之於後、可謂有始有終、能盡為人君為人子之道矣、執政元老從而繙閱尋繹、則課績臣鄰之器、折衝御侮之才、以至籌餉撫會之務、皆可於此銓選、而昌崇正之夾袋冊、虞允之材館錄、未足多焉、覺幸及見其書之大成、可勝欣躍之至、因記義公之言、一則志善、一則志感、是為序、

清涼院源夫人碑陰 代言

夫人諱德、姓源氏、龍雲院英公之女也、母皓月院土井氏、承應二年癸巳六月二十五日、生于江戶櫻田第、年十七、嫁玄蕃頭有馬賴利、曾未半歲、賴利病卒、夫人歸家為尼、號清涼院、居讚州高松、後至江戶、元祿十四年辛巳正月五日罹疾、卒于小石川第、享年四十九矣、夫人婉懿貞淑、雅歸佛乘、薰修持守、始終如一、葬于鎌倉英勝寺、法名讚譽智相、享保二年丁酉六月二十五日、改葬于常州久慈郡大田鄉瑞龍山、從夫人之志也、從弟水戶侯源綱條建、

檢例提要序 庚子

記載所以考已往驗來今也、起居晉諱之儀、燕亭體語之處、以及時事所見聞者、苟非書之於簡冊、則不能尋繹前蹤、以取準則也、古曰、一日不書、百事荒蕪、故纂纘之家尤重之、事無洪纖、必係日而書、各家所記、不遑枚舉、厥來尚矣、

粤自威公祚第土於常藩、庶事草創、其制未備、元和五年初記柳營本藩之擧動、雖事多朴略、載筆或闕、而要其梗槩、亦足徵焉、自時厥後、奕世累葉、事務堆疊、記載浩繁、年成卷帙、義公愛其踳駁混淆、不便檢閱、延寶中始置日記書史、以吉川正信爲之、柳營本藩、各自爲冊、詳悉其事、元和至延寶、所有成書、亦準此例、新繕寫之、名其記　柳營事、曰視聽日錄、記本藩事、曰家乘、彙分區別、捷於考索、年年陸續、以至今日、一遵此例、而　義公有命、同局之外、不許見之、其視聽、有司有干預其事者、許臨時繙閱、其家乘、非執政奉行職者不得輒見、其嚴如此、元祿初、　義公手書、教人見傳以定其書法、加年中恒例、立爲三部、其用心之勤又如此、肅公襲對、善繼先志、恒以日記爲言、享保丁酉之火、慮其罹災、亟問之掌局務者、對以無他、公聞之、喜溢眉宇、恭惟、　大君羽林閣下、春秋鼎盛、堂構斯美、蜚英聲于貴戚、騰茂實于宗藩、自上奉柳營、下接臣僚、以至進退周旋之度、旅酬燕毛之序、非徵之於威公以來成式、則無以爲模範、日記之爲用、於是乎益重矣、臣將景、臣正道、叨以庸虛之才、忝曹局之任、懼其久而散軼、無以副　兩先君之盛意、故今歲正卷帙、整頓次節、旁及雜記別錄、蒐羅包括、統之以提要、盛之以五筒、繕寫未成者、請畢其功、既竣而有副本者、藏于水城庫內、以避祝融之難、凡視聽家乘、自元和元年正月朔、至享保酉年十二月晦、一百六十六卷、其寬文十二年視聽家乘、元祿八年家乘、罹元祿癸未之災、而爲爐燼者、不在此數、其記　兩先君爲世子時事、　靖伯恭伯兩世子、曹局所記日次記四十二卷、兩先君就藩日記八卷、雜錄別記一百六十六卷、其目標于提要、通計三百八十二卷、渙而萃之、博而約之、品彙臚列、森然成隊、庶俾後之掌曹局者、速于細繹、以備顧問、矧夫賢子賢孫、傳至永世、誓帶礪於山河、累繰細於歲月、五車不能載、萬金不能購者、可不卜而知矣、揭曰檢例提要、謹使同僚臣覺弁其首云、

大日本史後序　代言

大日本史者、先大父之所刱爲也、先大父嘗有志

於修皇朝之史、而患載籍之不備、自簪纓之私諸、金石之秘蹟、以至稗史叢説、靡不廣募厚積、以旁互參審、未及見其成而捐館舍、先人面受提誨、校閲編次、以成其志、夫以歳月之久、增損頗多、易藁凡幾、僅能得成、宜其雄深閎博、足爲不刊之典、而此事必注其所出、屬辭必據其成文、有斷而不續者、有齾而不啚者、因闕簡破牘之餘、纂散絶殘脱之言、掇拾如此其難、歳月爲之積累、其要務在摭實祛華、而跼蹐抵牾、不得馳騁於渠矱之外、豈能堪藏名山而納石室哉、然不如是、則不足以備後人之鎔範、故雖幾祥詠諧之事、亦互擧併載、髮櫛絲續、以俟良史之筆削、此先太父之遺意、而宗堯自幼所稔聞者也、其志表若于卷未成、雖非全書、而適蒙鈞命、訪問投進、宗堯感激踴躍、銘戢無厝、課功程於鉛槧、正紕繆於魯魚、謹以大日本史本紀列傳二百四十三卷、幷序、目、寫史例、引用書目、總二百五十卷、繕寫呈上、略叙其顛末、於戲休哉、先太父先人述作之志、湮鬱而不彰者、一朝獲伸、而京堯亦與有榮焉、豈非遭逢之幸哉、從二位行左近衞權中將源宗堯謹叙、

跋分門入室圖

北齋解律光及弟羨、並工騎射、少時獵、父金命子孫、會射而觀之、曰、明月豊樂、用弓不及我、諸孫又不及明月豊樂、世衰矣、毎日令出田、還即效所獲、光獲少、必麗龜達掖、羨獲雖多、非要害之所、光恒蒙賞、羨或被捶、人問其故、云、明月必背上著箭、豊樂隨處即下手、數雖多、去兄遠矣、聞者服其言、明月光字、豊樂羨字也、文祿中、細川忠興將兵在朝鮮、攻戰之暇、以田獵爲樂、忠興素善鳥銃、其臣稻富伊賀、特妙于鳥銃者也、毎獵而歸、必較其獲、忠興常多、而伊賀甚少、忠興謂伊賀曰、汝以鳥銃稱、今所獲反不如我、豈非濫得名耶、對曰、君侯妙手、誠非臣所企及、然臣有小技、請撿鉛子之痕、忠興就視之、則伊賀所獲、皆中要害、忠興則專主乎中、無復所擇、乃服其精、夫天下之理一也、豈有和漢古今之異哉、若光與伊賀、則詩所謂不失其馳、舍矢如破者、而羨與忠興、則一朝而獲十禽者也、史稱、金性質直、不識文字、不能署己名、其必不知王良嬖奚之事、而所言如此、伊賀

武人粗野、其不知光渶之事亦甚明矣、而所為偶合、藝之所造、極其深妙、則理之所歸原無二也、一日庵雅善劒術、撃刺練習、至老不衰、究其精微、闡其蘊奧、作分門入室圖、以論武技之先後緩急、為子孫之慮、可謂深遠矣、余雖不能知其術之至、詳味其旨、皆有合於理、而其令嗣精于鳥銃者也、因踈和漢二事、以題其後、且勉令嗣令孫讀書、以知古人之不失範也、

寄但州興國寺住持百拙和尚書

久聞道風、塵想如濁、不意圭齋藤兄見寄破草鞋冊子、拜閲數四、允愜宿望、愉快之甚、可勝抃躍、覺幼習句讀、長而僅知綴拾文字、嘗竊評論皇朝之文、以為野都田善菅江紀橘諸家、文章之盛、可以凌軋漢唐垂不朽焉、中世喪亂、彊圉多虞、禮闈策士之法不行而斯文衰矣、自千光國師始闡宗風、龍象繼興、棒喝之下、珠璧交輝、虎關中巖義堂絶海夢巖雙桂諸大老、皆以文字禪名於一世、其餘雪村蘭室村庵瑞溪諸老宿、亦能維持文衡、雄張騷壇、四六之工、頡頏宋元、北礀蒲室恐不足多也、蓋當此時、老於文學者、不在簪纓家、而專在叢林、唯一條禪閤頗好禪學、每與五山諸老遊、故為文氣骨遒勁、近於古雅、此非其證耶、覺生長東鄙、聞見隘陋、又不自揣、妄意近世叢林之文亦衰矣、惟高東彦以後、未得其人、然四海之廣叢林之大、豈無可與中世諸大老並驚齊軌者乎、今見和尚之作、如披雲霧而覩白日、衆體該備、興寄高遠、詠物則瀏亮精緻、記事則雄深雅健、與諸大老作、何以分別、於是始信叢林果有其人、可以振揭慈氏勝定之風者、非和尚而誰歟、蓋大慧下足陌錢、虎丘下省數錢、和尚併舉而兼有之、何其富也、景仰之餘、直攄淺衷、以撰文字一篇、非敢書之卷後、聊擬之耳、儻不棄擲、時供電矚、則誠幸矣、和尚董席名藍、馳京華、衣鉢相傳、必有淵源、嚮寄書藤兄、請聞其詳、報章未至、率爾奉此一緘、序中所謂國師諱號、願委曲示知為幸、覺皓首衰邁、未能研究性理之學、況敢得聞直指之旨乎、但文字習氣不能除去、疑團礙膺、無所質正、若一大事公案、則欲問而不知所問、不敢煩和尚提撕、今具別幅者、皆委瑣淺近之事、螢緣奉書、唐突獅座、冀命侍者、得賜清誨、則

幸孰甚レ焉、時向二溽暑一、希珍重自玉、深畏輸褻、惟
所祈鑒涵、

書二破草鞋後一

不立文字、固禪家之本色、而有レ時乎遊二戲于翰墨
場中一也、自二古碩師尊宿一莫レ不二皆然一、機觸物發、境
與レ時會、突然而起　寂然而止、何嘗擬議思量之爲
哉、且如二玉泉皓頌法身向上事一、呼レ紙未レ至、急就二
金漆卓上一大書　張無盡爲之入レ石、豈非二此謂一耶、
百拙和尚探二[illegible]播之勝一、步レ于二山雲溪月一、吟嘯賦詠、
積成二冊子一、而歸二其功於二破草鞋一、作家手段、可下與三
趙州東壁掛二葫蘆一併案上矣、覺稔二聞和尚之名一、每以
レ未レ見二其作一爲レ憾、昌有二雙見凌レ雲而來一、接得則圭
齋藤子所レ寄破草鞋也、喜不二自勝一、薰沐讀レ之、或古
或律或詩餘、其體不レ一、寂寥乎短章、春容乎大篇、
發越流暢、金石迭奏、山水之形勢、煙雲之態度、扶
摘刻削、皆不レ得レ逃、攝播雖二地廣一、縮レ於二一草鞋
中一、不二亦奇一哉、更可レ怪者、和尚出世之人、而善論二
興亡成敗之迹一、作二脂粉語一、則光源氏之風流、如レ在二
衽席一、作二鐵石語一、則源廷尉之籌略、如レ見二帷幄一、洪
纖不レ遺、萬象森列、而褒二揚忠臣義士一、尤惓二惓於二
楠子之墓一、較二其氣力一、不レ下二空華蕉堅早霖瓊華諸
集一、讀二是卷一者、隨二其淺深一、所レ得無量、可レ不レ謂二
之縱橫無礙遊戲自在之筆一乎、古傳二其集一、今有二其
人一、果其乘レ於二大道一乎、抑又背レ於二大道一乎、請質三
之於二破草鞋一、

問目

一嵩明教、道行之高、固非二俗子所レ可レ容レ吻、文
章乃其餘事、而傑二出一時緇流一、如二非韓諸篇一、雖
レ使二文公復生一、恐不レ能レ當、覺竊謂、師既爛二熟
韓文一、得二其骨髓一、方能如レ此論辨得倒、眞所レ謂
入二吾室一操二吾戈一而伐レ我者也、然臆見不レ知二
是非一、願和尚指示、

一相傳、建仁寺麟一庵入レ元、傳二柳文法一、信然乎、
考二統正宗所レ撰一庵行狀一、祇云、禪文並熟、而
不レ載三其傳二柳文法一、行狀又云、詩文四六、皆不
レ留レ稿、則無二其集一可レ知矣、或其文散在二人間一
者、和尚見レ之、果如レ所レ聞乎、元文人得レ名者、
黃晉卿、柳道傳、吳立夫、虞伯生、揭曼石等最
著、一庵或見二此輩一、受二文法一乎、萬一有二考
據一、願開示、

一臥雲日件錄、載二心泉號偈一、祖祖相傳流不レ盡、人人受用雨難レ乾、昨宵帶レ月擔來看、本是日家方寸間、云是常在光寺伯春和翁高岳所レ作、其餘數偈皆可二稱誦一、覺鼓愛二心泉偈一、以爲二切近一、此蓋當時一宗匠、既云二祖翁一、必有二嗣子一、不レ知高岳名諱如何、住持何所、

一達磨大師乘レ蘆渡レ江圖、古來所レ傳、敢問是眞乘レ蘆者耶、或一葦杭之義耶、中峰普通年外乘蘆者句、亦詩偈形容語、未三必眞乘二蘆葉一也、及レ見三日件錄抄二釋僧傳一、達磨傳曰、遂去レ梁折二蘆一枝一渡レ江、據レ之則似二眞乘レ蘆者一、大師神通妙用不レ容レ疑、然正法不レ假二神通一、信如レ此則黃蘗所レ謂吾早知當レ斫二汝脛一者、不レ能レ及二他神通一、强作二此語一耶、黃蘗必不二肯如レ此敗闕一、至レ此不レ能レ無レ疑、

一堯山堂外紀載、明太祖欲下起二楊鐵崖一而用上レ之、鐵崖托レ病固辭作レ詩、有乙袖中一管春秋筆、不下爲二傍人一容易裁上句甲、其氣節可レ知矣、義堂悼二楷書記一偈亦云、仲靈一管春秋筆、埋沒湖山煙雨中、句語大相似、考二日工集一、應安四年辛亥所レ記也、是歲正當二洪武四年一、太祖召二鐵崖一、雖レ不レ知レ在二何年一、而鐵崖義堂異域同時人、義堂不二肯沿襲一亦甚明矣、不レ知偶相同乎、所レ謂一管春秋筆者、或別有レ所レ出乎、

一外記又載、南昌僧笑隱大訢、高安僧圓至天隱、浙僧道元覺隱、皆以レ詩自豪、時號二三隱一、蒲室天隱之詩、覺嘗讀過、歎二其精工一、覺隱之詩、未二嘗得一レ見、不レ知有レ集傳レ世乎、

一舊時黃晉卿文集、盛行レ於二叢林一、往往見レ于二耆宿筆記一、元史極稱二其文一、宋景濂師レ之、得二其法一、則爲二一時大家一可レ知矣、不レ知至レ今用レ之乎、

一叢林尤重二四六一、蓋爲レ製レ疏也、故虎關禪師編二禪儀外文一以爲二模子一、嘗聞、蒲室以二文法一授二全室一、叢林所レ傳、乃其文法、有二口訣一、四六專師二蒲室一、而外文廢矣、此說是否、覺嘗涉二獵蒲室集一、四六之妙、超二軼前輩一、遡二其宗派一、則晦機之子、物初之孫、而北磵之曾孫也、蒲室稱、北磵爲二我曾大父雖室翁一、文章老手、當時無レ敵、物初晦機、亦能振二起家風一、全室繼レ美、不レ墜二

堂構一、淵源之遠、此必有レ所二授受一也、不レ知至レ今書疏、遵二用其法一、而所レ謂口訣者、可レ得レ聞乎、跂望深切願勿レ吝レ誨、

一禪儀外文茶湯榜題云二梅屏一、解者紛紜、或爲二人名一云嗣承未レ詳、蓋一時之容、不レ知此解爲レ得乎、或別有レ説乎、

一嘉吉元年、室町將軍義勝行二德政一、救二貧民一、東福寺慧鳳作二德政論一、德政之制、詳見二室町日記一、蓋當時弊政、而不レ足レ爲二後世通規一、想慧鳳之論、必駁議而救二其弊一、覺久欲レ見二其文一而此間無二竹君淸事薝蔔稿一、不レ得二考索一、和尚書庫藏レ之、則願命二驅烏一、抄出、惠賜爲レ幸、

右十件、不レ憚二瑣屑一、瀆二冒烏皮一、淸閒之餘、垂慈裁答、則何覗如レ之、千萬懇祈、

澹泊齋文集卷七

答二百拙和尚一書 壬寅

去秋辱蒙二囘翰一、冬初領到、局務鞅掌、裁答稽緩、和尚不レ責二疎慢一、春初又賜レ翰敎問、郵遞浮沈、何如眷愛之至、銘戢有レ餘、就審二和尚道候泰安 匕茵順適一、可レ勝二欣躍一、客歲、牽爾奉レ書、詢二尚法流淵源一、乃蒙二委曲示誨一、始知起單檗林、出世佛國、荐滌二篆輿國一、鼓二大鑪鞴一、想鎔二出多少法器一、日雨所レ灑、豈啻河潤九里乎、所レ奉破草鞋跋、不レ直二一隻皃皮一、辱二和尚謙遜之餘、期以二王茂弘之風鑒一、不レ意播揚海上、亦有二逐レ臭人一、眞合二人不一レ可レ解也、又忝二寵諭一、患二賜農字長歌一章一云、擬二佛印元公作一、原體所レ未二曾見一、今所レ賜佳作、組織工妙、珠聯玉綴、首尾相顧、繡二出許多鴛鴦一、粲爛奪レ目、觀者不レ暇二應接一、而竟無二針線之迹一、豈非二大作家一歟、但歌及書中、動以二蘇長公一見レ推、此雖二紙上戲謔一、了無二根蔕一、而謬致二過奬一、孰不レ謂三擬非二其倫一、悚惕不二敢自安一、長公、宋之名臣、文學政事、高出二一世一、歷二千載一而名益

彰、若レ僕樸樕小材、不レ堪レ充ニ長公馬前卒一、此不レ待レ辨而甚明矣、然其所レ謂好與レ僧游、放ニ浪乎形體外一者、非レ無ニ髣髴影響一、此乃所五以見四爾三錄於ニ和尚一者歟、鄙問十事、寸莛不レ足レ撞ニ洪鐘一、和尚隨和即應、和レ盤托出、褰レ帳呈露、開ニ發昏蒙一、指導分曉、爲レ惠實不ニ淺鮮一矣、但十事信レ手件繫、初無ニ意義一、和尚濫生ニ節目一、稱爲レ有レ旨、仁者用意之過、不レ幾レ責ニ石女不レ產レ子乎、然十鏡之喩、提撕深切、銘鏤感荷、外蒙レ惠德政論全篇、正論讜言、深中ニ弊敎之膏肓一、多年宿憾、一朝得レ償、又蒙ニ寄示一明張式之題ニ竹居淸事一詩、名下無ニ虛士一、愈增ニ愉快一、其餘潛子學究焉、文熟焉、而後其與奪、由レ視レ掌矣、黃檗若與ニ初祖一同時、見他乘蘆揑怪、一刀斫ニ斷兩脛一、貴レ乎下殃不上レ及ニ兒孫一、義堂詩句、不三肯蹈ニ襲鐵崖一、紀海駢儷、言出レ於レ藍、北澗蒲室、四六之妙、猶三少陵之於ニ審言一、皆議論痛快、辨析精鑿、甚副レ所レ望、今不ニ一一提起一、今春又蒙レ抄ニ寄澹游集中所レ載覺隱誠公二詩一、係以ニ小傳一、旁證明確、今讀ニ其詩一、骨格不レ凡、氣脈深穩、龍肝鳳髓、珍奇可レ貴、苟非ニ和尚之推薦一、何能得レ見ニ未見之詩文一、得レ聞ニ未聞之事蹟一乎、佳貺重疊、固非三楮墨所ニ能縷陳一、又論ニ據澹游所レ云有レ集行レ世、昔時南游諸老、或有ニ携レ集東歸者一、他日咨ニ訪京師禪刹藏ニ古冊一者、或能有レ獲、則可ニ謄寫投寄一、何鄭重之至レ此耶、併隣一庵之斷簡隻篇、希留ニ高念一、幸甚、前所レ云元公豈字原體、寡陋不レ知レ出ニ何書一、衆祈暇日命ニ驅烏一謄寄妙、鄙所レ論室町日記德政件目、抄出呈覽、本書鄙俚、雖レ不レ足レ充ニ雅觀一、亦可三以見ニ當時之秕政一、請與ニ德政論一併看、弊邑有ニ勝樂寺一、延文中、義堂所ニ住持一之古刹也、今爲ニ中峰法脈一、見住僧固山與レ僕交最熟、春間飛錫、抵ニ丹波高源寺一、留滯至レ秋、修ニ中峰四百遠忌一、料丹但相去、不ニ必楚越一、貴院亦當三同修ニ祖忌一、包笠紛紜間、萬一通ニ信固山一、則僕之老朽無能、只管游ニ戲黃花世界一者、彼必能道破矣、恃レ愛轉褻、語無ニ倫次一、幸恕奉復、統祈ニ原亮一、黃梅時節在レ近、希保嗇、

答ニ中根重玄一書

春間辱蒙ニ翰敎一、禮文備至、嘗於ニ梁蛻岩仕品中一、稔ニ聞仁兄之名一、又東溪田兄屢通ニ聲價一、故雖レ未レ接ニ手采一、久懷ニ景慕之誠一、就審仁兄游レ于ニ田兄之門一、致ニ授東都之諸生一、學已成、文已熟、固無レ所レ求レ於ニ庸

虛如僕者、而投寄高文以請是正、此雖出于田兄之先容、而謙遜之美、溢於楮墨矣、田兄固有通家之誼、眷注過甚、誤以輪囷離奇之蟠木、厠於楩柟豫章之良材、仁兄經閱其推獎、將謂有所禪益、負山嶽之重、而逡巡于蟻垤培塿、何能增其高且大哉、高文編閱數四、鋪叙北越事實、簡勁得體、僕往年偶讀見行本東國太平記、其爲書也、掇摭近世諸家軍記、重沓叢雜、不復考究其實、故有自相乖盭者、眞僞相半、不足憑據、卷末載杉原親清覺書記、乃其所得於耆舊口碑者、稍爲核實、中有宇佐美定行與長尾政景溺死事迹、信如是則不動干戈、而措北越于泰山之安、謀畫周摯、忠勇兼備、近於殺身成仁者、僕嘗講究定行兵法、崇尚其術、故欲標出論述、而奈局務繁冗不遑下筆、今覩仁兄所著、恰如探囊取物、頓償宿債、可勝愉快之甚、遂閱島援之序、壯浪可誦、歷舉其才藝、以竢薦賢擧能者、僕亦敢以仁兄之期援之者期仁兄、操行如此修整、文學如此植立、又焉往而可不售哉、高文本無疵類可指摘者、特以綣意懇惻、敢布一二管見、唯高明採擇焉、館職倥偬、日不暇給、故稽緩至此、疎慢之愆、統祈原亮、田兄以絳帳之選、應方伯之辟、學優而仕、行將展其所蘊、竊料仁兄一則喜其登庸、一則憂其遠別、憂喜著於文辭、必將有所贈矣、上途在近、想治裝塡委、布此名致意、

養花筒說 代近藤孝休叟

點茶必掛書畫於小爐壁上、換以養花筒、此原起于利休居士千宗易、天正十八年、豐臣太閤攻小田原、陣于箱山、命利休點茶、營中無瓶可插花、利休出新意、截竹爲筒、鑿開一口、以插花、太閤愛其風致、遂盛行于世、後名其筒曰園城寺、藏在左京大夫丹羽光重家、傳爲佳翫、蓋歲久筒裂、好事者取園城寺鐘破之義名之、開二口者、利休掛室中、以爲貯花之具、一日有客來告別、倉卒間、取而掛之於爐畔、茶餞之、自是與一口者並行、其法視竹形狀、稱其從圍而截之、雖有繩墨、亦不得精度著骨、故有口訣、近世三過老人待從織田貞置、善得利休之法、傳於女婿空隱居士鳥居忠重、忠重以傳於余、故粗記其顚末、以授同志之人、

跋積翠亭詩歌軸

重巒複嶺、綿亘數里、貸其脊而南北界焉、南則古內村、北則小坂村、萬松森然矗立、凌雲翳日、貫四時而冒霜雪、岩壑幽邃、可廬以居焉、小坂村民昧玄構亭其麓、三面皆峰巒、唯東方敞豁、對晨旭、望海霞、可謂能擇其勝矣、昧玄請余命其亭、名曰積翠、且就緇素名流索題詠、得詩歌若干首以授之、曰鑿井而飲、耕田而食、租期無後、生計有餘、男婚女嫁、志願畢矣、乃與蕘童牧豎、醉眠牛背、不亦人間一勝事乎、然人當知足安分、一毫過分、則咎責隨之。此是畎畝中第一等護身符也、

送田東溪赴彥根序

東溪田君、林門之高弟、而泮宮之領袖也、井伊公聞其名而辟之、公將就藩、君從而西、辨嚴有日矣、僕今僻在遐陬、不得挽袂觴之、惜其離曠、遙贈以言曰、封建郡縣之說、君之所熟知也、請著之於事證、蓋封建、古之公、而郡縣、秦之私也、昔者 皇朝不倣秦法、而郡縣天下、近世不襲周制、而封建諸侯、胙以第土、犬牙相錯、一有風草之警、則公侯牧伯、莫不聞命而奔走、千里之外、如臂使指、故雖黜陟之者、度越前古、柳子所謂封建非聖人之意也、勢也者、其殆庶乎、未敢以爲然也、郡縣之制、士與計偕、中選應舉、用爲守令、得以盡其才能、故道者名紀夏井之儔、悉心民瘼、不愧黃龔之政、丹墀門成藤原高房之徒、發姦摘伏、咸有趙廣漢韓延壽之風、稽諸往牒可見已、封建之制、諸侯自得辟賢能之士、故近世會津岡山二公、招延耆儒碩士、咨詢政理、府下之人、皆得知尊德性而道問學、敷五教而行九經、文翁尹翁歸之化、不是過也、繇是觀之、封建郡縣、立制雖異、而黨庠術序、育賢才而擧俊秀、以贊政化、成治効、其揆一也、君侍函丈、能傳三世之學、研精墳典、覃思圖史、掉鞅游及於藝文之場、非彼二公所延之士之比、公之禮而辟之、夫豈徒然哉、將欲興儒學、敎子弟、暇日脩其孝悌忠信、以副雄藩重鎭之寄也、君能體其意、鼓舞作興、以擧賢之志、涵養省察、以身心之學、講禮樂於金湯之地、訓仁義於貔貅之士、闔境之民、均被其化、使與會津岡山、媲

レ美而並稱上、則封建之制、非二特萬世鞏固之業一、而諸侯尊レ賢禮レ士之義、亦將レ見レ於二今日一矣、因敍二其說一而贈レ之、

勸酒說

東溪君將レ赴二彥根一、以レ書抵レ余曰、郭君遇レ我甚渥、日夜欲レ竭二涓埃之報一、第我性喜二飲痛一、自警戒而未レ能レ克レ之、今當二遠適一、家人憂レ之、子盍二贈レ言以箴レ之、余不レ能二劇飲一、而頗知二其趣一、迺敢對二其言一曰、周公酒誥、先聖不二爲レ酒困一、田敬仲卜レ晝、不レ卜レ夜、以及二王肅之家誡、皮日休之酒箴一、皆君之所二能講究而誦讀一者、又何藉レ乎二余言一、而必欲レ藉レ乎二余言一者、敬身愼獨之至也、飲而不レ忘二敬愼一、又何失之有焉、然余嘗記二管輅之言一、曰、吾欲二持レ酒以レ禮、持レ才以一レ愚、夫持レ酒以レ禮、此一獻之禮、賓主百拜之注疏也、持レ才以レ愚、此其知可レ及也、其愚不レ可レ及也之解釋也、苟能如レ是、則雖二美醞三升一、號爲二斗酒學士一、又何所レ損乎、故余不レ箴而遙唱二陽關一曲一曰、勸レ君更盡一盃酒、

谷派劍術記

一宮流居合術、其源出レ自二陸奧人林崎甚助重信一、重信篤好二劍術一、懇二祈林明神一一百日、滿期之曉有二夢兆一、自レ是其技入レ妙、故號二林崎新夢想流一、事詳二希賢叟所レ書許可卷軸一、門弟子相承攻二其術一者、各成二一家一、田宮平兵衞照常、稱二田宮流一、照常門人無樂齋槿露、稱二無樂流一、槿露門人一宮左大夫照信、稱二一宮流一、然至二授受之書一、則不レ改二舊號一、題曰二林崎新夢想流一、重二其本一也、廉泉谷君令祖重代、號二一得齋一、至考重篇、號二日凹一、相襲稱二小左衞門一、一得齋稚好二劍術一、就二照信一學レ之、究二其奧秘一、一得齋授二之於日凹及芝原四郞左衞門重之一、重之授三之於二佐川作左衞門盛正一、盛正授三之於二川又九衞門福顯一、君以二父祖之所一レ傳、不二敢失墜一、就二福顯一學レ之、精二究其法一、練習有レ年、享保七年壬寅夏六月朔、晨起拜二父祖神主一、就二閱鬼錄一、本日注二一宮下總一宮左大夫一、君不レ知三下總爲二何人一、左大夫照信之死、雖レ不レ詳二其年月一、而知レ爲レ朔、故亦拜而退、其夜就レ寢、夢二一大廈一、照信居レ上、次坐者兩三人、令祖一得齋與二照信一相對而坐、令考日凹、亦彷彿坐二其下一、照信謂二一得齋一曰、爾所レ諭谷派、今欲二處分一、一得齋喜曰、固所レ望也、照信開二墨髹箱一、出二書一卷一、君起レ坐而進、福顯亦相

繼而進、君接其書、乃一帖摺本也、題曰一宮流谷派一國一人之書、君披閱之、有標目、曰萬事拔、曰無極刀、曰太極刀、書尾載誓神之辭、及年月日授受姓名如式、然不能記其詳、照信呼曰、式部來、乃其門人飯野式部也、起而授無極刀法、次有一人、亦起而授太極刀法、其法無極刀、坐而拔刀、橫截之、所謂居組也、太極刀、起而拔刀、直截之、所謂立合也、各有第一刀以持勝、既而夢覺、君甚異之、中夜點燈操刀試之、夢中所習、心手相應、悉如其法、翌日招福顯告之曰、夢兆如此、吾家所傳居合術、自今改號谷派何如、福顯曰、善、請傳之於後、君使僚友安積覺記其事、記畢、謂君曰、凡學技藝者、其志貴純一、純一則不雜、不雜則精、精則明、明則誠、至誠之極、可以通神造妙、君能至誠以求之、故有夢兆之應、夫豈偶然也哉、學谷派者、以誠爲主、則豈唯技藝之謂、立身行己之要、不能外此、而孝弟忠信所由出也、以此敎子弟、豈不美哉、

江戶賦序

詩人之賦、麗以則、辭人之賦、麗以淫、揚子之言至矣、蓋辭人之賦、自漢以來尙之、其託物比興、瀏亮發越、則體雖非古、猶爲不失正也、若夫都會之大、形勢之雄、非有揄揚稱賛、極其鋪張、則制度之巨麗、規模之宏遠、無以勸示一時、而垂憲於後世、班孟堅之兩京、左太冲之三都、傑出古今、蔑以加焉、至宋周美成、亦倣其體、作汴都賦、雖不能及班左之筆、可足以覩帝居之壯、然則辭人之賦、亦不可少也、[illegible]朝建都之制、冠蓋之盛、播乎篇章者、古不乏人哉、烈祖神君、據山河之形勝、創基江城、藩屛王室、綏撫億兆、仁漸義摩、百有餘年、飛潛動植、咸被昇平之化、而未聞有能歌頌賦詠者、豈非大欠事乎、蓋郛郭之延袤、第宅之周匝、舟車之所輻輳、闤之所鱗次、陋五都而隘三吳、軼千古而垂萬世、虎炳豹蔚、固有以資辭人之賦、而揄揚稱賛自不能已者、亦人情之所必至也、桂軒小宮山子慨焉、有志賦之、往事遺聞、則不唯訪之耆舊、必蒐羅而研覈之、名區勝躅、則不唯驗之方志、必躬踐而窮討之、野錄叢說、旁互參審、髮櫛絲績、字鍛句鍊、庀材多而用力勤、故其間架結構、縯迤宏肆、

鏤刻藻繢、洪纖畢備、述二區宇之勝一、則覽者將二麗然而起一、叙二游觀之美一、則聽者欲二躍然而喜一、體レ物無レ遺、可レ謂二能賦者一矣、至レ於二　大城之規模一、則桂軒所レ不二敢言一、古人不レ言二温室樹一、亦謹愼之至也、或曰、獨孤馴象、世以爲レ工、子雲甘泉、晩而悔レ作、桂軒筮二仕藩府一、挂二籍史局一、將レ勵二精於摩研編削之事一、屑屑焉務穀之組是務、無二乃不可一乎、曰、不レ然、唐取レ士、專用二聲律一、宋取レ士、專尙二經術一、而亦不レ廢レ賦焉、故擢二之翰苑一、則制誥詔勅、當レ得二其宜一、寘二之史院一、則編修檢討、克當二其任一、桂軒之作二是賦一也、豈衒二其才一、矜二其能一之謂哉、將欲レ使下天下後世有上レ所レ考二據于明代制度之壯麗一、此摩研編削之所二由出一、而亦留二節奏一、不レ失二乎正一、豈非三美成之流亞一歟、苟進而不レ已、則雖二詩人之賦一、亦可二庶幾一焉、范文正作二金在鎔賦一、世皆知レ有二將相之器一、若二桂軒一者、異日隨レ才銓授、則其用豈可レ量哉、

省庵文集序

文貴二醇正淹雅一、不レ貴二華靡雕鏤一、西漢之文、如二相如子雲一、工則工矣、如三其有二嫵媚之態一、艱澁之累一何、至レ於二司馬子長之雄健一、獨二步古今一、固已偉矣、但其於二聖賢之學一、則未二之聞一焉、安足三以論二義理之醇正一乎、若夫粹然一出レ於レ正、則董仲舒之文、其庶幾乎、朱子雖レ議二其緩弱一、而竟稱レ之曰、仲舒之文實、其正レ誼明レ道之言、至レ今天下誦レ之、此則諸子之所レ無者、豈非三其學術之正、發爲二至文一乎、韓昌黎文起二八代之衰一、遂爲二百世師一、歐陽文忠推二尊昌黎一、唱爲二古文一、而宋文大振、下至二元明一、如二劉靜修、方正學輩一、皆以二濂洛關閩之學一爲レ宗、充實輝煌、積レ於レ中而發レ於レ外、故其爲レ文雍容典雅、足三以維二持世道人心一、歷二千載一而不レ可レ廢者也、近世惺窩先生表二章四書六經一、專尙二程朱之學一、其文刻二駢偶儷之陋一、力挽二古風一、儒宗魁士、相踵而出、文運之興、與レ治比レ隆、而省庵安東子、以二篤學力行一、名二於鎭西一、蓋嘗竟二其行事一、考二其履歷一、年甫十六、從三邦君好雪公於二有馬之役一、更歷二戰陣一、慨然謂、功業可二指取有一、既而志レ於二聖賢之道一、游二學京師一、聞三明徵君舜水朱先生來二長崎一、往見レ之、遂執二弟子之禮一、先生亦悅二其天資純粹一、以爲元定眞吾老友、屬レ意最深、而先生流二落海外一、孤縈無レ所レ立、省庵懇二求鎭巡一、多方以留レ之　自奉極二其儉薄一、而分二俸之半一以養レ之

能行二人之所レ難レ能者一、弗レ顧二流俗之譏一、可レ謂二特立不レ回者一也、蓋先生之寓二長崎一、人皆知二其宿德重望一、而未三能知二其學術一、間有二知者一、即レ之不レ能レ究二其精一、探レ之不レ能レ發二其蘊一、雖省庵切問近思、入二其室一、造二朱奧一、自二朱陸之辨一、以至二窮理盡性精一執中之旨一、靡レ不下講究刮磨、得二之於一レ心、而驗中之操履之實上、故其爲レ文、根三據於二理道一、而爽粹平實、一切浮靡詭詖之言、無レ所二從出一、蓋文與レ人、相二爲表裏一者也、先生素嚴毅、不二妄許可一、至レ若二知己二字一、絕不二假借一、其得與レ焉者、雖兵部侍郎完勳レ翊一人、而得三省庵於二萬里之外一、以爲二再遇一、顧非三其中有二大過レ人者一、則不レ得レ與レ於レ此、暨二晚年一、餘姚張斐來二寓長崎一、亦聞二省庵之名一、屢投レ書以推二奬之一、嗚呼省庵以二先生一爲レ師、得二張斐一爲レ友、師友之間、可レ謂レ無レ憾、而堂構之美、傳至二其子侗庵孫斯文一、豈不レ休哉、斯文不レ墜二父祖之業一、能自樹立、今欲下裒二輯遺文一以行中於レ世、以下余與二省庵一有中同門之好上、當レ弁二其首一、義不レ獲レ辭、雖レ然、余及二先生之門一、僅在二童子之列一、道德性命之言、聖賢受之要、一無レ所レ聞、其視二省庵德之高一、相去甚遠、而其受レ業之有レ所二從來一、制行之端愿謹慤、素所二熟知一不レ讓レ於レ人、而其爲レ文則近レ於二朱子所レ謂賢者一、世固有二公論在一、故略擧二歷朝之文一以敍レ之、亦欲レ使下世之觀二斯集一者知中其學術之正上也、

復二小宮山桂軒一啓

伏以奎璧騰レ光、四海歸二文明之化一、慧孛掃レ迹、百年際二禮樂之期一、故大鵬鼓二翼南溟一、欲レ搏二羊角一、而逸驥振二鬣北野一、求レ空二馬群一、名二一藝一者無レ不レ庸、通二百家言一豈不レ顯、雖二志士被レ褐懷一レ玉、亦善賈二拔レ茅連茹一、人奮二其能一、世仰二彼器一、竊惟桂軒小宮山詞宗、時流俊傑、後進英髦、操二几杖於二林門一、身通二六藝一、高三壘壁於二韓客一、才振二八叉一、言顧レ行、行顧レ言、既踐履之不レ苟、入則孝、出則弟、威儀之可レ欽、登二龍門一而策レ名、學優挂二籍齋府一、遷二鯉庭一以稟レ訓、業成著二史芸臺一、乃以二細繹之餘一、巧施二組織之技一、鑄詞貴二洛陽之紙價一、繪章奪二蜀江之錦機一、摛揚寧籍二鄙言一、媿非三士安之序二左賦一、推奬須レ憑二長者一、豈無二永叔之賞二蘇文一、雖粃不レ堪レ任レ前、珠玉何能可レ掇、自揣二老朽一樗櫟散材、何況庸虛而柳弱、每事レ御童稚、敢希二李詣之謝青一、下レ筆貿悸、何異二張黃之曳白一、顧乃

忝惠莊簡、枉乖寵榮、華藻損一陸之英、騈儷競三洪之長、何以爲報　聊此布誠．時維仲秋、雁叫紅蓼之渚、天多涼露、鶴驚白蘋之洲、長松與怪石爭奇、脩竹共清泉同趣、舟橫野渡、笛響江村、平楚迢迢．遙望武野之月、疎雲點點、近出筑波之峰、煙霞舊因緣、湖山新和識、願效和靖之放鶴、得醉公瑾之醇醪、臨啓可勝翹企瞻溯之至、

賀雪庵和尚住清水寺疏

楊岐種草、致處有脚陽春、新豐的孫．弄來無孔鐵笛、雖五宗各分門戶、而一派接淵源、恭惟新命東皐雪庵和尚、作家繍虎　覺苑金毛　名者實之賓、鶴鳴皐以遠聞、吾無隱乎爾、尋過山而自香、與其闘棒喝於荒陬、曷若鼓鐘鏞于名刹、深則厲、淺則揭．假住豈與眞住殊、入其室、撫其絃、活機能使劣機奮、氣衝星斗、久矣劍埋豐城、光徹寰瀛、時哉珠還合浦、佩三玄之符信、督五位之臣、喝雷轟雲、棒雨灑地、爐上篆縷．喚起覺浪潤堂、手中金針、繍出動巴先破、瀑泉湛碧藍水、午潮湧紫琳腴、圓通殿前．千江分白衣於一月、淸水寺裏、四則超黄龍之三關、聊綴葛藤、永仰松柏、

故從五位下玄蕃頭伊藤君碑銘

伊藤氏之先、出自藤原武智麻呂、十世孫駿河守時信始稱伊東氏、其裔世居日向、爲飫肥城主、君之高祖友祐稱玄蕃、天文弘治間、群雄競起、飫肥城陷、去赴甲斐、事武田晴信、爲騎兵隊長、以戰功著、從勝頼戰死于天目山、曾大考淸重稱莊二郎、號久與、流寓多歷年所、越前中納言森巖公聞而召之、給祿若干、大考友玄、稱久內、年甫十一、以東照宮命事威公於伏見、東照宮褒其勤恪、手賜島田守祐所造短刀、傳于家、暨威公封水戶、改稱玄蕃、與聞政事、爲大老、兼義公傅、食祿二千石、考友次、亦稱玄蕃、歷執政大老、爲城代、妣源氏、威公第十五女、生四子一女、君其長子也、寬文五年十一月十九日、生於水戶柵町家、諱友嵩、稱久內、義公命便更稱玄蕃、有故改勘解由、爲大小姓、給月稍俸金、尋爲通事、分賜考祿一千石、擢爲小姓頭、肅公襲封、遷書院番頭、轉大番頭、寶永四年九月、進爲執政、班大寄合頭上、七年爲城代、正德元年十二月、敘從五位下、任玄蕃頭、五年十一月、罷城代爲

家老、享保三年十二月、參議公叙從二位、遷左近衛中將、君使于京師受位記口宣、五年罹疾沈滯、正配酒井氏、前周防守忠治女、無子、養同母弟友益為子、稱宮內、時為奉行、側室生一女、適石見守鈴木重道、六年正月十七日、君疾革、卒於柵町家、時年五十七、葬久慈郡稻置邑久昌敎寺、參議公賜金俸於友益、以嗣其家、明年進班書院番頭、亦為執政、襲稱玄蕃、君資性寬厚、從容不迫、惠而恤下、慈而守儉、接人以和煦溫雅、不修邊幅、家世奉法華敎、至君尤篤、依止精練、未嘗懈弛、法號清心院日住月蓮、蓋其志也、雅好和歌、構思敏速、義公嘗遊津田別莊賞桃花、賜以和歌、宴酣而罷、其在京師、菊亭中納言公詮卿召而享之、親書所詠和歌賜之、君荅歌謝之、公詮卿稱賞之、君以為榮焉、友益使覺碑之、係以銘曰、

三諦融即、無非中焉、四敎雖殊、其要在圓、現寄宦身、厭野狐禪、薰修染習、超脫繭纏、如蓮出水、如月在天、抱茲美質、盍反其源、自我興宗、官爵蟬聯、賞延于世、忠孝兩全、

硯銘

鴨河石堅緻而溫潤、鑿為池、為良材、藤圭齋獲之、使覺銘、

緊青龍之抱璞、玄雲興兮靈澤對、虛厥中兮厚積、聊穮蔉兮稛載、左傳昭元年、譬如農夫是穮是蔉、國語齊語、垂橐而入、稛載而歸、

跋本朝軍器考

文武猶陰陽也、自陰陽二神立於天浮橋上、以天瓊矛畫滄溟、武器之用、既見於鴻荒之世、大日靈貴、光華明彩、照徹六合、文明之象著焉、背負千箭之靫、臂著稜威之高鞆、振起弓彇、急握劍柄、尙武之敎立焉、爾來天鹿兒弓、天羽羽矢、十握劍、頭槌劍、弧矢之利、以威天下、而甲胄干櫓、戴仁抱義、其為用也久矣、生於是邦、不知其製、可乎、世固有善其說者、然據今者不能稽古、襲故者不知通變、各色立門戶、牴梧標榜、製造之法雖工、而施之事為、或爽於用、夫車戰古法也、房琯用之於陳濤斜則敗、銑鋧新制也、蕭摩訶擲之於呂梁則勝、古今異宜、起舍隨時、又不可不察也、蓋軍器之制、有古有而今無者、有古無而今有者、苟非參互考覈、遡其源而窮其派、則踳駁精麁、不可得而審矣、白石先生慨然有志

於斯、教授之餘、考究制度、論列品彙、不遺餘力、必本之上世、而參之近古、以及今日之所通行、正流俗之訛謬、覈沿革之原始、凡古記實錄、家乘野史、靡不捜揚剪截經緯旁午、至若神祠佛宇暨耆舊之家所藏古物、力能及之者、必親見其製、以摸之、質諸載籍而折衷討論、萃爲一書、書以國字、圖以標式、務欲使人易曉而便於製作也、壬寅秋、覺得借觀之、始焉駭其精而確、博而約、該贍密察、融釋淹貫、中焉觀其聖德太子丙毛槐林之銘、干將莫邪鍛文縷理之說、辨析精當、無復餘蘊、然而未敢詑以爲奇、何也、先生聲名溢海內、文章播異域、此特其緒餘者耳、不足怪也、終焉讀弓矢鎧砲各有其能、鎧甲重反爲身累之論、歎曰、何其識高見偉、與彼佐佐木高綱戒其子重綱之言、若合符契耶、蓋先生武冠累葉、其言必有所稟於家庭者、窺一斑、可知其全、而其爲書、草壽氏序之備矣、夫復何言、但使先生當述作之盛擧、修一世之大典、則文武之用、豈特止於如是而已哉、牛刀割鷄、長殳刈菁、臨風悵然、援筆而題、

義公行實跋 癸卯

元祿辛巳冬、肅公以禮居義公之喪、哀慕罔極、命近臣中村顧言、栗山成信、酒泉弘臣覺等曰、先君子德業、不可不傳、其考履歷、狀行義、以紓吾憂焉、臣等承命、不勝惶恐之至、自揣褊見陋識、何能發揚德業、而贊襄孝思哉、雖然義公所爲、炳如日星、當傳之後世、稗益名教者、誠如所命也、凡爲臣子者、孰不冀其垂不朽乎、因錄所見聞實事實行、輯爲行實一卷以進、肅公覽之、享保癸卯秋、大君閣下命臣覺刪補釐正、當時與其編纂者皆已物故、獨臣覺存焉、竦動感激、悲喜交集、一則喜閣下世篤孝道而能欽慕遺範、一則悲僚寀淪謝、不能遭此盛擧、而又嗟老朽寡陋、無所[illegible][illegible]護也、但君命至重、敢不夙夜黽勉以成纘述之美乎、迺稟政府、繙閱家乘日曆、務從詳該、筆削雖不改舊本、而年月庶足考據、謹繕寫呈上、

西山遺事序

曩時義公致仕在西山、日召儒臣備顧問、商較古今、品藻人物、又招方外之流、以資山居之燕

間、譚論之餘、往往正流俗之繆誤、多所發明、下至事物瑣微、亦有所論列、侍臣以國字筆記、題曰西山隨筆、今茲臣覺蒙命、增刪義公行實、考訂既竣、區區之心竊謂、隨筆爲書、言雖淺近、皆承義公之旨、其可忽諸、論學術、則先經濟而後詞章、論士風、則獎廉恥而警惰慾、論事業、則重節義而鄙功利、論政理、則尙淳朴而黜浮華、世之稱說義公者、未必知其學植之閎肆、識見之卓越、精覈該學、如此其博也、伏惟大君閣下、好學篤行、日就月將、仔肩克廸、祖武堂構、有光前烈、欽仰義公之風、善繼肅公之志、既仁既孝、允文允武、萬政之暇、眞諸左右備于覽觀、則其裨益之效、油然而生、保社稷而和民人、跬步可以致千里焉、故取隨筆、編摩臚列、欲其簡約、換以漢字、不敢私意增損、一從成文、又有侍臣纂集義公遺事而筆記成冊者、今並檢討、可筆者筆之、輯爲義公行實附錄一卷、謹謄寫進呈、

跋義公詩餘軸 甲辰

詩餘權輿于宋元、皇朝解之者既寡、剏作之者乎、我義公獨好之、按譜塡詞、潛心多年、孤往默契、遂能自得于作者之蹊逕、然其工拙能否、不可得而知也、往年齋藤君銜一品大王之命、使于西山、義公驩甚、禮敬接使、歡洽待友、臨別作詩餘、使近侍者書以餞之、事詳引中、君裝潢爲軸、使覺跋之、當時接伴累日、執役逡巡、今想其事、殆三十年、河濟祖帳之設、宛然在目、可勝慨、大抵詩能述人之性情、詩餘又深一層、此作雖不入腔、所謂曲中縛不住者、必有在、惜世無知之者、

毅齋三木君墓碑銘

君諱之敎、字則誠、號毅齋、源姓、三木氏、大考仁兵衛高之、老稱別所、考之常、娶盧澤氏、生二子、長之忠、稱久太郎、君其次也、延寶六年四月十六日生、小字條之允、之忠蚤世、君爲家嗣、無何考歿、襲稱仁兵衛、元祿二年甫十二、爲兒小姓、明年 義公致仕、近侍肅公、每在水戶、徃侍西山、眷注殊渥、七年大考下世、俾給其祿、食四百石、累遷秩、寶永二年十一月爲書院番頭、五年增祿二百石、通前六百石、正德元年八月轉大番頭、享保三年五月爲世子傅、十月 世子襲封、

更稱側用人、職掌如故、六年八月、爲大寄合頭、八年八月二十二日、年四十六、罹疾不起、其宅在府城柵町、其葬在箕川邑妙雲敎寺、元配岡崎氏無子、繼室沖山氏生之道、稱森之助、尚幼、藩府念其勳舊、全賜前祿、君儁爽開朗、不事曲謹、與人交、無畛域、和愉能得歡心、及處事決疑、識論風發、凜乎不可奪、雖不勤讀、而雅志嚮學、好作詩、未能步驟而矻矻爲之、遂得窺其藩籬、使天假之年、富以學術、日進于德、則其所成就、豈可量哉、覺與君爲爾汝交、不勝悲惋、係以銘曰、

繄君之先、忠於所事、酬康子孫、俾昌而熾、如彼長松、磥砢多節、將成棟梁、一朝摧折、天乎何慘、婺泣孤哀、宜慶于延、世德是培、（于延恐延于誤倒）

小宅淸兵衛墓碑銘

小宅氏、小山大掾藤原朝政之裔也、世居下野、君諱重長、稱淸兵衛、永正中、其先避亂、往依岩城氏、遂爲陸奥人、曾大考壹岐、大考新衛門、皆失名諱、考諱重正、稱新藏人、妣舟生氏、以文祿三年五月五日生君於岩城、慶長七年、岩城忠二郎貞隆削地、徒出羽、左京亮鳥井忠政鎭岩城、考留仕之、忠政善遇考及君、同僚有害其能者、密謀殺君、抽刄迫撃、君力鬪斃之、避仇常陸、時年二十三、仇家、忠政之重臣也、故愬忠政禁君之仕途、無何忠政、移鎭出羽山縣、考從焉、時威公新封水戸、父執尾崎閑齋使人謂君曰、子能事我君、則彼無如之何、子其擇焉、君喜來于水戸、閑齋薦之於 公、忠政果不能錮、頃之 公以君爲小姓目付、君質直、不阿權貴、雖無學術、頗知崇儒、言多中理、 公親信之、如湯藥巾櫛皆使君掌之、蓋此時小姓目付、隷近習、故雖班卑得親近、而 公熟知其爲人也、嘗欲以君爲某職、察羣下曲直、君固辭不受、公不懌曰、汝重交誼而輕公事耶、君踧爾對曰、豈敢如此、臣愚不達事情、恐有臧否相反、擧劾失當、而使明君蒙嚴酷之名、下使臣僚罹无妄之禍、則臣罪不可贖、非敢拒命、臣實非其人也、辭氣激切、 公頷之、乃止、寛永二十年考終於山縣、年七十五、明年迎舟生氏奉養之、踰年而歿、居給侍 公之左右二十五年、班秩不進、罹疾在水戸數年、日益貧窶、

遂乞骸骨、執政以爲能望、皆欲屢斥之、公察其誠雅、知介特無援、增俸若干以振之、既而疾瘳、正保二年十二月、爲山手舊邸留守、自此常在江戶、明曆二年、移居小石川邸、三年正月十八日歿、年六十四、娶山崎氏、生三子、長某、稱千助、爲供小姓、十九歲而殤、次重治、字子道、稱淸兵衛、亦爲供小姓、君歿賜其俸、事 義公肅公、歷小十人小姓目付、兼寺社役、元祿八年、賜廩祿百五十石、明年爲馬廻、監寺社如故、十五年、 肅公優爲中寄合、明年致仕、號如灰、琴詩樂餘年、享保五年十月二十四日、以壽終、春秋八十七、好讀書、懿實謹飭、絕口不言人之是非、老練有吏才、 義公丞稱其幹能、次生順、字安之、一字坤德、號處齋、幼聰悟、 威公度其有成、給俸賜書、俾就卜幽軒野壹、學業日進、以博洽稱、文辭富贍、 義公器之、 日備顧問、賜廩祿二百石、使于長崎與明人接、以此知名、 義公得朱文恭而師事之、順之力也、中年以疾廢、延寶二年歿、年三十七、重治娶川又氏、生子忠、一女適城所信之、忠以善狀來乞銘、余有通家之好、情埒骨肉、敢以不文自外乎、因刪取其辭、鑱諸墓上、噫君有操守、近於彊直自遂者、其行己如此、知於君如此、而沈下吏、需微祿、家道轗軻又如此、然君處之裕如、豈以此易彼哉、銘曰、

卓立者君之操、嶄絕者君之守、可以託孤寄命、而不可以勢脅利誘、不躬詩書、而樂聞洙泗之道、不操觚牘、而喜掇卿雲之英、既堂構之肇基、迺稼穡之有成、厥仲移孝以爲忠、貽厥孫謀于門庭、

小宅兵十郎墓碑銘

生子欲其奉先幹蠱、敎以孝悌忠信、以備邦家行伍之用也、苟生矣、天質既美 其頑而昏、一日爲有力者負去、則不若不生之爲愈也、然世固有短折者、命也、可奈何、雖能知其無可奈何、而又不勝委之於命、旁皇悽惻、求之而不得、余於余友小宅忠子告見之、子告以寶永五年八月二十一日、生長子壽、稱金十郎、十歲謁見 肅公、長而更稱兵十郎、風神秀潤、弱不好弄、讀書 習武技、功力兼人、和煦接人、與物無忤、贓獲未嘗遭詬詈、人一見皆愛之、蓋其天性粹溫、使之

然也、享保八年、秋府下大水、予告家當其衝、水勢甚猛、門牆皆漂沒、舟覆者數、家人無不能免、孫以繩繋浴斛、載祖母暨母子、繩端纏腰、泅而牽之、遂得達街衢、往返十餘次、奴婢及來救者皆得免魚腹、孫之力也、九年正月、患痘不起、殤於二月二十八日、年十七、父母憫恨、如失掌中物、悲不能勝、余諭之曰、唐顧況喪子、亦年十七、況有詩哭之、殆不忍讀、荼毒非無其比、子少於況十餘歲、又有次息可為嗣、奚其過哀之甚耶、予告披涙、謀鐫生卒於墓石、余無以應、誦昌黎語曰、嗚呼其可惜也矣、如小宅氏之世系、粗載祖先之碑陰、茲不復書、銘曰、

謂脩短之有命、何天札之咨嗟、魄既死而將朏、苕正折而纔華、未及揚輝兮頽落、不能結實兮凋謝、胡早慧兮奪之遄、悲風颯兮歸長夜、

書蘭菊聯芳後

碑碣彝器、銘詩序記、篆籕草隷、瓌奇偉麗、蒐羅不遺餘力、盛行當時、而傳于後世者、歐陽永叔之集古錄、趙明誠之金石錄、為其最、其餘文人墨客、廣梭重購、堆卷累軸、以娛心目者、曷可勝數、皇朝簪纓世家、固不暇論、公侯牧伯、縉紳列鼎之家、與古書同科、收而蓄之、下至士庶人、視力彊弱、聚而有之、以多相矜、吾友源則之之所好、則異於此、書不必古、皆其耳目所接、品不必高、取其隨意揮灑、嘗謂余曰、凡吾所藏諸家墨迹、有自我得之者、有僚友惠之者、每曝凉防蠹、點撿之、書者與惠者、不存者過半、間雖有存者、亦皆老矣、吾行年六十、筋力日衰、委而棄之、必至腐壞堙沒、名氏亦不可辨、則不唯不敬其人、併失惠者之意、何以訓子孫乎、故裝潢為一軸、使不散軼、往事心越禪師、書周易兌卦貺之、愉以麗澤之義、吾取以名吾堂、今置卷首、以備警戒、自外不拘次弟、障而裝褫、暇日與朋友展觀、覩物思人、尋繹其義、則存亡之感、自不能已、景慕之心、油然而生、吾藏弆以為業、雖古書法帖不能博也、蘭山和尚見而善之、揮筆引首、曰蘭菊聯芳、予盍為吾識其後、余不能書、又無賞鑑、敢置一語其間哉、然聽其言、非玩物喪志之謂、視其軸、非務多貪得之比、篤于故舊之誼、發於愛敬之誠、存警戒、持省察、推之可以行

已、擴之足以濟事、彼集古金石錄以博勝、此以約勝、子其寶之、勿多讓焉、

跋勤讀畫軸

書非溫習則不熟、不熟則不通、故古人爲學、孜孜惜分陰、胡澹庵道從子維寧書曰、夜者、日之餘也、吾必繼晷焉、燈必親、薪必然、膏必焚、燭必秉、蠟必濡、螢必照、月必帶、雪必映、光必隙、明必借、睛則記、其丁寧告戒、如此親切、則其自勤可知矣、必如此而後成大儒、垂大名、所謂照帶映隙者、車胤、江泌、孫康、匡衡之事也、今考本史、鑿壁不載匡衡傳、而出于西京雜記、聚螢隨月、載車胤江泌傳、而孫康事迹、史無所見、想亦一時高士之流也、泌有至性篤行、南齊書南史、並在孝義傳、而衡與胤、漢晉二書、備載事實、衡至丞相、胤至吏部尚書、皆勤學之力也、然衡阿諛取容、知石顯之姦而不能糾、排甘延壽陳湯之功、而欲抵之罪、當時王尊劾之、耿育議之、班孟堅譏其持祿保位、胤沮會稽王道子之殊禮、守正不回、史稱其烈、故士之慕名敬賢者、願爲胤、而不願爲衡、則其優劣何如哉、蓋照帶映隙、施繪事而可觀、故好事者往々圖畫、以資燕間、其實勤讀之人、不止於此、孫敬閉戶懸縄、倪寬帶經而鋤、高鳳不知漂麥、祖瑩灰中藏火、顧歡然糠自照、陳彭年籌燈密室、不令其母知、楊綰由時不離案三十年、張九成石上雙趺之跡、隱然而存、此皆雜出於傳記、其餘不暇覼縷、此特擧其膾炙人口者耳、范文正公劃粥爲塊、司馬温公圓木爲枕以警睡、二公大賢也、又非衡胤之比、尤可欽仰而跂慕者也、恒齋森子好讀書、精于濟民之術、蓋此畫藏久、以其迎接多事、不能勤讀爲憾、時時展觀以寓感慨、使余跋之、余特怪、古人家貧不能自給、而勤苦如此、今人膏油薪燭、居常有餘、不必照帶映隙、而不繼晷、徒供謔浪笑傲之資、宜其世無學業之成者也、故推其類廣之、以應其需、亦以自警、

跋潛抱亭十境詩卷

凡境有曠有奥、有清有幽、有幻有逸、有秀而野、有小而佳、有近而可觀、有遠而可聽、閑樂白井君仙波之別莊、備此十者、蓋得境之勝也、莊在湖水之南、村民稱其地曰地主山、園圃町許、灌木

圍繞、早韭晩菘、古杉怪松、子采于顚、薪レ之樵レ之、稼穡登場、桃李成レ蹊、秀而野者也、下レ山則湖水滉瀁、舟而入、有二一小澗一、架レ石而橋レ焉、取二其堅牢一、名曰二千年橋一、小而佳者也、撃二壤畔一爲二曠境一、種レ稑交レ疇、杭稌充羨、田父野叟、收獲既竟、酒後耳熱、拊レ缶而歌、韓韓如有下帝何二力於一我之風上、脩竹林、爲二奥境一、煙梢雨檡、深密交レ翠、可レ以下棲二鸞鳳一挹中逸賢上、渭川千畝不レ足レ多焉、潜蚪洞、幻境也、幽邃窈冥、若下有二靈物一蜿中蜒其中上、能興二雲雨一、鼓二風雷一、亦不レ可レ測矣、横渡船、逸境也、莎岸雨歇、菱渚煙歛、榜レ之可二采蓮沂洄一、可二鷗鷺同群一、近而可レ觀者、淺水蘆、春抽二碧玉一、秋飄二白雪一、遠而可レ聽者、九皐鶴、玄裳縞衣、中夜警露、飄々乎有二芝田瑤池之想一矣、巉巖吞清、盤拗奇崛、有レ泉出焉、聲如二戛玉一、此靈泉巖之幽[illegible]、[illegible]而水勢湍悍、觸レ石迸散、宛若下垂二冕旒一、揚中珠簾上、[illegible]レ潭而泓渟瀦溢、凄レ神寒レ骨、可三以鑑二毛髮一、此走線瀧之清境也、蓋二一境相得而成 最爲二佳絶一、柳儀曹黄溪記所レ謂瀧泉者、其殆庶幾乎、君構二亭其側一、榜曰二潜抱一、暇日引レ客相與樂二其勝一、山殽野蔌、物薄而情厚、凭レ欄而望、湖光涵レ天、海氣連レ空、岡阜峯巒、邐迤相接、四時之興無レ盡、而魚鳥足二以留連一、君自作レ記、述下其令祖賜二此地一、德澤延及中後昆上、其意固美、而又使三彰考館諸子賦二十境詩一、屬レ余識二其後一、訓二飭子孫一、不レ耽二湖山之勝一、而以二力行孝悌一爲二本事一、君能竭二其力一、告レ老而退、樂二其餘年一、此君之雅志也、於レ是乎跋、

賀田信齋六十壽啓

伏以律中二林鍾一、長養遂二萬物之性一、杓揷二協洽一、代謝斡二三伏之樞一、蠡二測天時一、豹二窺人事一、廿八應二列宿之數一、六十添二華甲之籌一、竊惟信齋台翁、謹愨持レ己踐履省レ身、蹇蹇匪レ躬、恒留二心於經濟一、孳孳爲レ善、久研三精于二簡編一、奈何用與レ才違、殆其命將二時偶一、班皐曾無二慍色一、職冗方播二能名一、鎖鑰異レ于二北門一、瓦甌驗二學士之早晩一、圖書推レ乎二東觀一、牙籤諳二秘籍之有無一、旁闖二李杜之藩籬一、詞藻工麗、竟攀二班馬之堂奥一、校讐精當、好施不レ吝二資財一、輕裘倣而無レ憾、決レ事能中二肯綮一、利及投而有レ餘、昊天將レ報二善人一、福祿未レ艾、壽域宜レ躋二仁者一、緣督爲レ經、茲屆二懸弧之辰一、廼伸二杖鄉之慶一、老當二益壯一、期三矍鑠於二伏波一、齒不レ倘レ官、會三耆英于二洛社一、矧又羅三玉樹於二階庭一、

子孫蕃衍、徵三金蘭于二几席一、朋友切偲、式燕式歌、斟三醽醁於二南斗一、爰笑爰語、寄三枕簟于二北牖一、膩光直凌二雪霜一、脩竹遶レ屋、黛色幾閲歲月、古柏參レ天、所レ願星斗夜爽、炯二仙室之紺瞳一、沆瀣晨凝、俟二牛關之紫氣一、箕疇叙二洪範之五福一、周雅表二天保之九如一、春秋八千、問三椿年于二漆園傲吏一、甲子四百、約三亥字於二絳縣老人一、齋祝二龜齡一、深愧二蟬噪一、臨レ啓可レ勝二歡抃之至一、

跋二祭酒源公詩軸後一

祭酒源公政理之暇、好二劍術一、師二伊藤忠英一、究二其蘊奥一、嘗過二忠英之旅寓一、存問懇欵、忠英不レ勝二感戴一、使下大心師代レ己叙二其事一、賦レ詩進呈以致中謝悰上、一公辱賜レ和、忠英袖二其卷一謁レ覺曰、公嚮已賜二書畫一、褒二揚吾術一、裝潢爲二家寶一、今又蒙二齒錄一、寵光過レ望、幸孰甚レ焉、亦欲三裝褫以副二書畫一、請子爲レ吾識レ之、覺始獲レ拜二一公詩一、雅麗醞藉、絶無二塵俗之累一、文武兼資、益可二敬而貴一焉、噫一公以二宗藩之別一、能下二白屋之士一、又以二將帥之器一、不レ廢二刺擊之技一、又以二其緒餘一、悟二微禪機一、以資二單刀直入之旨一、忠英之術、頓生二精采一、不二唯榮一レ己、亦有三以榮二其父祖一、宜其緹襲珍藏以遺二子孫一也、若夫一公與二一囊山公一、同就二忠英一、精二練其要一、則詳レ於二一兩公所レ賜書記一、今不レ贅焉、

廬山石記

相傳盆石、起レ於二夢牕疎石一、師幼時、得二一拳石一、小而峭拔、有二雲煙千仭之勢一、名曰二七峰石一、師常愛而翫レ之、傳在二佐佐木滿高家一、以爲二至寶一、北條高時嘗得三一石於二江島一、環奇錯落、名曰二月岡山一、傳在二細川賴元家一、應永十五年三月、車駕幸二前相國源義滿北山別莊一、御座東面、設二七峰石一、西面置二月岡山石一、以爲二美觀一、一時好尙之風、亦可二想見一、足利治亂記、備載二其事一、所レ謂盆石起レ於二夢牕一者、未レ知二果然乎否一、蓋師有二巧思妙解一、超二脫蹊徑一、其所二位置一、一石一木、後世依倣、以爲二準則一、其或然也、爾來王公卿相、以至二士庶人之有力者一、貨以貿レ之、葺而致レ之、沙擁盆貯、以相矜夸、故欲下極二其品一擷中其秀上、則終身不レ可レ得也、夫石之似レ山者假也、達者不レ認レ假爲レ眞、而能以レ眞轉レ假、夢牕之愛レ石、庸詎知二其非一出世間之事一乎、石焉而崔嵬突兀 有二峰巒奇崛之質一者、足下資二燕間一而娛中心目上、奚必糜二金帛一殫二智慮一、

而求之、然後爲得哉、南紀隱士石野某家、有一塊石、色靑黑、縝潤嶙峋、嘗貽府下同族、柳軒藤翁有故得之、以爲席上之珍、往年東皐心越禪師見而悅之、命名盧山石、品非極高、狀非特秀、果能與以名鳴于世者、爭其優劣乎、然翁之心、異於流俗之所好、蓋高尙之懷抱、持卓犖之志操、嚮陵巖劇、端險挺立、丹霞翠壁、縹緲杳靄之態、坐臥當對乎軒窗、而盧山眞面目、在吾胸中、此翁之所以寄懷而寓志也、翁丐余題一語、余懸而野、不能辨石之精麤、故特擧盆石所由起、以詢世之知之者、

翠嵐石記

富田君逍遙于大洗磯前、得一拳石於祠前、彩狀奇麗、君愛之甚、持歸而問名于余、余諦視之、縝潤而蒼黑、嵓險挺立、高袤不過數寸、而有峰巒聳秀之勢、因命以翠嵐、而告之曰、君知神祠之所由起乎、昔齊衡年中、大洗磯前、有神新降、初郡民有煮海爲鹽者、夜半望海、光耀屬天、明旦有兩怪石、見在水次、高各尺許、蓋於神造、非人間石、鹽翁私異之、去後一日、復有百二十餘小石、在向石左右、宛若侍坐、彩色非常、時神憑人曰、我是大己貴少彥名命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民、更亦來歸、事詳文德實錄、至今八百餘年、靈威儼然、非彼神降於莘、石言於晉之比也、往年肅公命覺、記其緣由、考之日本書紀、二神戮力、經營天下、爲蒼生及畜産、定療病禁厭之法、萬世咸蒙恩賴、夫石者、神之所託、而二神有躋民壽域之良能、皇朝醫藥之所由起也、君遊于此、偶獲之、雖謂之神賜可也、昔人嗜好之癖、有具袍笏而拜石者、果神賜乎、雖薰浴而拜之、亦無不可、勿徒爲燕閒几席之翫也、抑又聞之、神聰明正直而壹於人者也、君能以正直奉上、服勤無倦、堅確以立志、廉棱以行己、取于石以爲用、則景福時萁之興、其可量哉、詩曰、靖共爾位、正直是與、神之聽之、式穀以女、君使余書其言、於是乎記、

答百拙和尙書

去夏辱翰教、眷愛鄭重、遺予楮墨、時礙事故、不能裁答、非齋藤兄之所熟知、想和尙亦傳聞、不以爲罪、尋蒙沛宥、仕途坦夷、不異平日、未幾

藩邸下命、有所編錄、搜索旁午、老朽筋力衰憊、今夏僅得緒、頗覺身心愉快、奈俗氛蝟集、鞭長不及馬腹、裁答依舊濡滯、自揣負罪已多、縱和尚或能容之、有何言辭、可以解釋、唯祈江海之洪量耳、春間藤兄報知、和尚鳴退鼓、還京師、寓陽明殿下之山莊、又得庵、寄跡寰中、棲心物表、此和尚本分事、固不足多、揮手脫去、鞭笞龍象、日與王公貴人、游于顧渚建溪之間、其享清閒之福、爲何如哉、別蒙題詠老圃七覽、再和碧於亭佳作四首、嘉貺重疊、喜出望外、薰沐朗誦、齒頰如嚼氷雪、其辭旨葱蒨、氣韻沈雄、則所不敢論、體物之妙、瀏亮瑩徹、不即不離、七境瞭然于紙上、雖老圃握中物、亦不自知景況之至於此、使人欣羨而心醉、作家手段、自然蟬蛻於塵埃之表、眞不食煙火人語也、但序引中、動以司馬溫公見擬、驚悚不能自安、蓋將溫公著資治通鑑一節、比修撰本藩史書事、其所去取、自有分曉、然溫公、僕素所欽仰、如其德行事業、前史所載、茲不復贅、多年熟讀通鑑、開發蒙昧、受惠實多、隨意筆記、以備遺忘、積久成冊、題曰湖亭涉筆、他日淨書功訖、或當奉覽、所畢溫公數事、皆關係通鑑瑣屑事件、而其餘不敢論列、此僕崇信溫公之本意也、夫溫公一生事業、皆以誠爲主、其議新法、排斥荊公、天下後世所共知也、及聞其死曰、介甫無他、但執拗耳、賜䘏之典宜厚、荊公亦嘗稱公曰、君實平生大過人者、臨事不苟、夫議論列不遺餘力之人、而所言如此、指排己之人、而稱許如彼、並無他、出於大公至正之道、而無一毫私心、故能感人、此豈著述修撰之所能爲哉、嘗聞、獨樂園中、有園丁呂直、性愚、故溫公以直名之、僕雖頑愚、直則固其所好、或以此園丁見擬則可、終以溫公見比、則決不奉命矣、蒙論前年所貺壘字雅製、印公原韻、少游絕句、共載坡公禪喜集、清誨領悉、謝謝、此間無藏此書者、容他日涉獵、以資聞見、又蒙允貸竹居清事、藤兄郵致領到、好書快意、讀之唯恐易盡、登時謄寫、以備藩府之用、藤兄又致待覺稿、疊和險韻、絕無窘步之態、唐稱元白皮陸、宋有尤揚范陸、此倡彼和、左提右挈、和尚出人一頭地、如鄧艾行師、奇兵出其不意、日中已無全蜀

可レ知矣、此卷亦謄錄、私藏レ于レ家、乘レ暇繙閱、想見一時徒弟之盛、皆鵠眼鷹睛、摩レ霄凌レ風、和和雖レ欲ニ堅臥緘默一其可レ得乎、所レ謂無事中事繫著者、未下必不上由ニ此等事一、而信レ手拈出、縱橫無礙、觸レ石而起、膚寸而合、不ニ崇朝一而淋漓霶霈、宜其以レ雲取レ譬也、去春所レ賦詠史歌行、本爲ニ鉛槧一呈覽、反蒙ニ推奬一、枉被ニ許可一、其所ニ評隲一、援ニ引事實一、皆中ニ肯綮一、可レ謂ニ要言不一レ煩、方知和尚亦有下好ニ理亂書一之癖上也、所レ示太虛中一點、何礙不礙之有數語、沈著痛快、金篦刮膜、雙瞳燗燗、殆僕所レ云隻眼者歟、非耶、所レ論寂音、亦有ニ此癖一、此才痛痒相關處、僕每レ讀ニ寂音唐玄宗狄仁傑等論一、未ニ嘗不一レ歎下其出ニ入古今一融液通貫、發爲中千古之快論上、竊謂、浦室永覺亦有ニ此癖一、其論ニ宋徽宗高宗劉秉姚廣孝一、剴切精到、皆不レ能レ出ニ其彀中一、乃知明眼宗師、從來不レ廢ニ此一派一也、又蒙レ諭碧於亭諸作抄錄、亦甚稽緩、併附奉覽、暇日或垂ニ青顧一幸甚、三幅復札約ニ一番一、故頭緒多端、紬繹失ニ詮次一、不莊不敬、均祈ニ原宥一、秋涼雖ニ爽氣可一レ喜、寒亦日逼、希自玉、

東雅序　乙巳

白石先生著ニ東雅二十卷一、覺得ニ借而觀一レ之、其書、一倣ニ源順倭名鈔之例一、譯以ニ國字一、其所ニ援引一、皆古簡舊牘、間有ニ互相發揮者一、則據ニ異邦之書一以證レ之、語有レ不レ可レ了者、割愛截レ之、義有レ不レ曉者、設レ疑闕レ之、烹ニ飪秋津六郡之史一、咀ニ嚼寧樂七代之集一、淹貫富贍、使ニ人目佪而意漁一、九原可レ作、則梨壺才子、豈不四忻ニ忻於ニ地下一哉、蓋上古淳朴、語言甚簡、後世文物丕隆、欲ニ其詳雅一而轉注假借、遂有下失ニ其眞一者上、譬如ニ元趙良弼一、女直人也、本朮要甲、音訛爲ニ趙家一、因以レ趙爲レ氏、後世不ニ復知ニ其本姓一、遂謂ニ良弼中州士人之族一也、我邦語言之轉、亦多類レ之、其輕重淸濁、緩急長短、出レ於ニ天成之聲一、移レ於ニ流俗之習一、先生能遡ニ其源一、而探ニ其本一、故每論ニ其世一以辨ニ明之一、史稱、沈約撰ニ四聲譜一、獨得レ於ニ胸襟一窮ニ其妙旨一、此編雖レ非ニ音韻之書一、而其得ニ胷襟一、不ニ多讓一焉、鄭夾漈曰、梵人別レ音、在レ音、不レ在レ字、華人別レ字、在レ字、不レ在レ音、故梵有ニ無窮之音一、華有ニ無窮之字一、若ニ我邦一則不レ然、四十七單音、開闔旋轉、以爲ニ無窮之語言一、今此書也非レ梵非レ華、直我邦上世之語言焉耳、自ニ中古有ニ文字一以來、字載レ音

而語成・語駕字而義存、先生融釋通會、不離乎語言之中、而精詣妙契、有出乎語言之外者、雖謂之兼華梵亦可也、或曰、昌黎不云乎、爾雅注蟲魚、定非磊落人、況譯蟲魚乎、甚非所望於先生也、曰、不然、夫有是物、必有是名、有是名、必有是義、大而日月山川、小而喘耎肖翹、莫不各有其名而存其義、古昔神聖開物成務、因自然之聲音、體品物之情狀、彝倫於是乎叙、政教於是乎出、居今之世、不知古語之義、庸其可乎、然先生非用精力於此書者、寓居海上、長夏無事、手錄成卷、以爲消遣之資耳、先生不自以爲奇、而僕則視爲希世之珍、借謄一孤、藏諸藩府、既而先生使覺序之、自顧譾陋、不能措辭、而其書之美、可傳於世者、備於鳩巣先生之序、覺何喋喋多言哉、故特記其轉寫之歲月、因及其書之梗概耳、

跋劒術記　藤柳軒需

技藝能傳師之妙處、既難矣、愈久而愈精、尊信其術者、又難矣、鉤雪翁之於和田氏、既不失其妙處、又從而筆記之、俾知藝術之所由起、與作用之所應變、和田氏之術、可以託不朽、豈非難之又難者歟、

酒器銘　河方泊船需

三宮之杉、輪囷離奇、剸而錄焉、孰與鴟夷、

答僧大心

客歲辱翰教、就審師道候裕寧、曷勝欣慰、聞師近年寓武江、隨機指示明心見性之要、建法幢、鳴法鼓、大振宗祖之風、將有日矣、僕衰朽老憊、無由瞻仰威儀、徒增悵怏耳、去秋藤雪艇、使僕跋師所著文字、拙劣不足揄揚盛作、反蒙推獎、遜謝鄭重、可勝泚顙之甚、舊臘俗務蝟集、新年應接旁午、日不暇給、遂致復札稽緩、疎慢特甚、冀優容之、雪艇歸朝期在近、當審起居、故倉卒布字、春寒、爲法自嗇、又聞碧湫和尚老健、維據法席、大作獅子吼、想側近野狐禪、一時膽落矣、書信往來、希叱賤名致意爲幸、

書野中重羽寶刀記後

百行之中、孝爲大、事親既孝、豈有事君不忠者乎、孝經曰、立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也、孝子不惟自揚其名、而又以顯其父

母、顯其父母、高曾祖考、亦由是而顯、此孝道之大者也、萬物本乎天、人本乎祖、推其本而及其枝葉、子孫猶枝葉也、修植之、培養之、則必悅茂而蕃衍、亦所以報其本也、余友野中翼之氏、講武之暇、旁通文事、嘗作家藏寶刀記、眎余曰、吾非敢表揚祖先汗馬之勞、誠懼歲月既久、子孫耳剽而不覈其實、則敬重寶刀之心、有時而懈弛、故不揣謭陋、綴輯事實、又作略譜、紬繹氏族所由出、俾吾子孫知其閥閱、則於報本之義、庶不相乖矣、子爲吾釐正而潤色之、余閱而應之曰、古人得上之所賜、隻字片紙者、猶必緹巾珍襲、敬之愛之、如臨父母、所以重君賜也、矧此寶刀、東照宮之所手授者、雖累鉅萬、不可購而得之、天壤間寧有其比哉、君立身有素、行己無愧、仕途既達、足以顯揚父母、今記祖先之餘烈、俾爾子孫、欽仰而景慕、欲以世濟其美、負荷克任、豈非孝道之大者乎、子孫能遵守其訓、移孝以爲忠、則枝葉之悅茂、不待蓍龜而知矣、

肥田巘之丞碑陰

郎君諱政孝、稱巘之丞、肥田氏、因幡守從五位下源政業之嫡長子也、所生筑紫氏、幕下士右近源利門之女、正德四年正月朔旦、生于水戶西街宅、天資怜美、弱不好弄、頗能讀書寫字、人皆期其幹蠱、享保十年六月十一日、罹疾而殤、年僅十二、知與不知、皆嗟惜之、葬城西常磐鄉袴塚、

復荻徂徠書

接八月十四日手書、盛意懇款、溢于楮墨、就審起居裕寧、曷勝忻慰、僕聞仁兄之盛名久矣、老癃不堪任事、承之府下留務、不獲東都軟紅香土、殆八九年矣、不能懷刺修禮爲歉、而無故通書問、又恐非禮、耿耿鄙懷、無由申達左右、徒抱悵怏耳、今春偶使姻戚岡田宜汎、就平野兄、乞七覽題詠、似聞已蒙允諾、又聞仁兄不好題勝、恐遲留歲月、姑寢之、僕初念欲煩大手筆、乞碧於亭記一篇足矣、然文難而詩易、奈不如舍難而圖易、鄙願速成之爲愈也、由是又使宜汎達意平野兄、乞題勝、自後音耗寥闊、蒙允與否、杳不可測、因幡然自悟、謂文難而詩易者、賣菜傭之見耳、司空表聖不云乎、文之難而詩之難尤難、自揣輕重、從前一念、在乞高文上、故不論難易、祇

較輕重、夏間裁書、敢請願輟題勝、撰高文一篇、想其書已爲烏有、不可査考、今者捧讀翰敎、憮慌自失、深咎書辭之不詳審、營惑高明之視聽、噬臍寧有益乎、或先入者爲主、仁兄以爲專乞題勝、故峻拒之、亦不可知、前後錯亂、言不盡意、深媿轇轕、罪何能贖、惟仁兄胸呑雲夢、眼空四海、若僕輩、何足芥蔕、而反蒙推奬、爰及先侯義公之事、謂杜石斯文、不啻間平、綜覈名實、殆非溢美之辭、府下之士、孰不樂聞、但以僕爲朱文恭高第弟子、則虛譽浮名、不勝忸怩、往年廣澤藤子、暫仕藩邸、當時僕在府下、未嘗一面、纔通書信、叙殷勤而已、藤子繆以溝澮之水潦、爲汪洋之陂澤、雖耳剽之過、亦可以知其好尙也、然聲聞過情。實非所堪、故不顧瑣屑、披瀝情素、僕童丱師事文恭、及十五歲春、患痘還鄉里、玩歲愒日、放浪自恣、事師不滿三載、僅授句讀、而爲學之術、◎作文之法、無所聞、眞包子廚中縷葱絲人焉耳、當此時義公方銳意、修大日本史、網羅英俊、誠如所論、僕素府下之產、以其粗通文字、驅而使之、權知筆削事、歲月既久、驊騮騄駬、相繼淪謝、而駑駘獨存者、以其不能半漢跳梁、而局促伏櫪也、汎愛之餘、比之靈光之巋然、不亦過乎、仁兄筮仕雄藩、蚤播聲譽、登天祿、窺東觀、宣揚徽猷、敎育英才、接金閨之群彥、分蓮燭之末光、河汾俊傑之士、相踵輩出、遐陬僻壤、莫不歆豔風範矣、區區之願、欲得高文以賁丘園、而書辭糊塗、志趣暌左、踈繆之譬、臚列于前、所諭仁兄不喜題勝一事、凡有徵求、一概謝絕者、敬聞命矣、竊謂汗血千里馬、必能周施蟻封、豈有仁兄之高材逸足而不能題勝之理乎、然尹師魯李泰伯、無詩賦之名、司馬溫公不能四六、此豈眞不能者哉、特性所不好也、況題勝、非僕本懷、夏間所請者亭記一篇而已。山川風景、土俗之異、非所敷陳于大方、藥欄藤岡塢梅園、瑣々境致、皆不足記述、祇以一把茅亭、臨千頃湖水、讀書啜茗于蒼煙綠霧之間、命意撰記一篇見投、則平生志願畢矣、此在仁兄、若探囊中之物耳、古人有傾府庫竭資產、而賙人之急者、其不恡一探、亦明矣、然以一概謝絕題勝爲言。則不論詩文、皆在謝絕中、亦不可測、此又如宋武帝微時對殷仲堪語、

音樂、性所不解、正以解則好之、故不習之、英雄作用、自然度越常流、不可強請而力求之、庶高明豐茹而涵容之、変淺言深、前哲所戒、僕亦深恃來書所云、不以小嫌而輟雁魚往來之厚眷耳、秋末罹賤恙、久廢寢食、近方得瘳、故復札稽緩、冀千萬亮恕、

追校正館本大學衍義狀

大學衍義、翰林學士西山眞德秀所著也、西山篤志性理之學、尤拳拳於程朱之書、奏議諫疏、載在宋史、踐履實行、不愧其言、所謂有德者必有言也、編述成於理宗紹定二年、而進於端平元年、蓋寶慶紹定間、史彌遠弄權、壅蔽主聰、排擯忠良、故西山卷而懷之、俟時而獻、身在畎畝、不忘愛君、賢哲憂時之心、如此其深矣、君臣遇合之際、又如此其難矣、其書當時未及施行、及趙氏祚殫、盛行于世、元世祖爲親王、命趙璧譯以國語、恒於馬上聽之、明太祖爲吳王日、始營宮室、使侍臣書於兩廡壁間、朝夕觀之、二君皆英傑之主、身在戎馬間、而不廢講習者、誠以修身齊家治國平天下之要、不外乎此書也、近世學者、有以大學爲非孔氏之書者、又有從王陽明之說、專以古本大學教人者、視衍義如土苴、况敢取而讀之乎、其爲非孔氏之書者、固不足論辨、如古本大學、非無所見、然以程子之所定朱子之章句爲宗、自有餘裕、何必出新意排前賢、然後爲得哉、甚者至有以衍義補爲不知王道無益之書者、夫有志於王道者、舍衍義補、何所據依、其舐排丘瓊山、即所以毀斥西山也、臣覺竊恐此風一開、矜高立異、則南轅北轍、日與大道相遠、而終不能入聖人之門也、故臣覺注意此書、歲月既久、每患坊間刻本、舛誤甚多、魯魚亥豕、轉寫失眞、脫文不能償漢字、小書與大字易處、文義窒礙、不能通暢、乃將福建刻朝鮮刻二本、一一校讐、釐正同異、其所援引經史諸子資治通鑑等書、皆就本書披閱、櫛比縷析、標於其上、不敢以私意斷之、或有帝系難明、訓詁難通者、輙附一二、以備考索、庶宗聖所傳之書、盛行於今日、而西山所衍之義、復明於後世也、伏惟、大君閣下、資文武而由仁義、富春秋而履忠信、仍舊貫于史局、繹古義於經筵、

誠意正心、立ニ爲レ學之大本一、制節謹度、守ニ保レ邦之
良規一、廼者就ニ藩本府一、新數ニ德教一、惠澤治レ於ニ黎元一、
頌聲起レ于ニ闔境一、臣覺不レ勝ニ抃躍之至一、謹將下所ニ校
正一大學衍義壹部上進呈、冒ニ瀆左右一、以備ニ暇豫之觀
覽一、區區之心、既欲レ表ニ章西山用心之壓一、又欲下閣下
學術之醇正、一以ニ程朱一爲レ歸而不上レ惑レ於ニ頓悟簡捷
之說一也、不レ顧ニ僭越一、敢以ニ遠大一、期ニ　閣下一、罪焉
能逃、此臣覺負暄獻芹之微忱也、謹狀、

澹泊齋文集卷八

挹翠亭記

幽人韻士之愛レ物、皆所下以寄ニ其懷一而寓中其志上也、
釋道林之馬、王無功之酒、朱元章之石、皆神領默會、
使下人不上レ可三忖度而思ニ索之一、然方外放誕之徒、置而
不レ論可也、若ニ靖節之菊、子猷之竹、和靖之梅一、則
所三以寄ニ其高尚坦率磊落軒昂之懷一、而求ニ其志一則有ニ
進取與ニ有レ所レ不レ爲者一、豈蜂蝶伍而禽鳥處之謂哉、
吾友尾羽君之愛レ松、則有レ所レ寓耶、無レ所レ寓耶、皆不
レ可レ知、然以ニ余所見一推レ之、其必有レ所レ寓矣、夫松
之爲レ物、高直聳秀、磥砢鱗皴、干ニ雲霄一而挺立、蟠
者如レ龍、偃者如レ蓋、仙鶴巢ニ其上一、靈液凝ニ其下一、
一爲ニ匠石所一レ顧、則爲ニ棟梁之材一、負ニ重任一而不レ撓、
架ニ大廈一而晏如、苟或不レ遇、則臥ニ澗壑一、俛ニ風霜一、
而終不ニ改レ柯易一レ葉、此士君子所下以表ニ其節操一而儀上
レ之也、春風洞藤子、顏ニ其亭一曰ニ挹翠一、君怡然曰、
是吾志也、迺求ニ府下僚友一、以題ニ歌詩一、輯爲ニ一軸一、
俾三余記ニ其事一、君素嗜ニ和歌一、人以ニ韻士一目レ之、其

所寓志蓋可知也、然君老矣、無所施其用、長公出繼本宗、仕途既顯、將有廊廟之用、而梓人之矩矱、可翹足而待矣、故余歷擧古人之所愛以勉之、

射鹿記

射居六藝之一、士子之不可不習者也、皇朝專以弓馬訓練士卒、內志正、外體直、持弓矢審固、習之既熟、然後貫虱穿楊之妙、方可幾、而霹靂閃電之稱、爲不虛也、享保丙午之春、大君蒐於石崎山、選射手十八、豐島胤清與焉、有奔鹿、胤清一發而殪、監吏北河原景豐、進呈其矢、大君傳觀、還賜胤清、翌日召胤清於大城嘉尙之、賜花絹一雙、時人榮之、胤清藏其矢、請余書其事、夫以射獵爲業者、有一日而獲獸數頭、況一鹿乎、此不足貴也、明人不能中、而能中之、枉矢弱羽而得經覽、申以褒諭之命、繇是感激奮發、進而不已、極其精妙、則紀昌養叔之術可企及、而長孫晟之美譽、將流於後世、是可貴也、因記之、

復荻徂徠書

春半方接舊臘手書、終不厭棄老物、曲垂清誨、謝何能罄、時患目疾、百事俱廢、遂致復札稽延、冀亮緊之、蒙諭前書、既言不作亭記之由、而漫弗之省者、此眩於龍蛇飛動之艸書、而固靳俊偉卓絕之文、以畢志願耳、近向輕暑、賤恙稍瘳、揩眼展讀、方能通峻拒之旨、野亭命名、取諸黃太史之詩、誠如所諭、宋詩之衰、太史爲之魁、且碧於者、歇後語也、唐以來詩中、碧於字何限、非如友子貽厥之類出於六經者、奇僻險諢、不免五山禿子之陋習、皆足下平日所擯棄者也、議論痛快、俊偉卓絕、前書所云、不欲厠貴名於諸作之間者、亦至此僅得通其旨、僕鹵莽滅裂、不能辨詩文之體裁、然中年以來、不喜蘇黃之詩、不知其所以然而然、間或諳誦一二、皆少年時所讀者、時時往來胸臆間、及移居得湖山之勝、境與時會、忽憶演雅中語、師心獸斷、以爲亭名、今讀來敎、恰如中山千日醉、一朝而醒、可勝愉快、又所諭、不知亭之制與常之山川景物、漫然敷衍以爲記、此宋文之弊也、晝錦堂記非記、赤壁賦非賦、韓文公廟碑非碑、皆論也、是謂之不識體、皆所黜而不取者、此又俊偉卓絕、過於前論高一

等矣、若下夫太史不レ得二志於一レ時、而托二野鷗一以遣レ懷、如レ僕固非二其比一之言上、則長者獎借之過、而非レ所二敢當一、士之遇不遇、亦有乙未レ可下以二一槩一言上者甲、則安知三僕之必非二太史比一哉、此又仁人推レ己及レ物之語、奈三僕庸駑非二其人一也、家世業レ武、非下由二文學一進者上、承二乏史局一、嘗管二編修事一、去冬所レ奉書中、既言二其略一矣、自揣、撲遫武夫、無二器之可一レ抱、無二才之適一レ時、雖下差勝上于二目不一レ識レ丁、亦不レ免二誤解蹲鴟之繆一、庶足下不下以二儒雅一槩視上爲レ幸、至レ於三粗敍二作レ記之方一、則本意專在レ期レ於二必得一、若レ曰二如レ斯而足一矣、豈敢犯二子輿氏玉人之譏一、亦出レ于二祈請之懇惻一耳、足下幸勿二深怪一、性復遲鈍、不レ能レ通二曉言外之旨一、而冒瀆不レ已、一之謂レ甚、況至レ再乎、圓枘方鑿、南轅北轍、宜其觸二襟懷一而致二疑訝一、罪焉能逃、然在二足下一則無レ所レ虧、而在レ僕則有レ所レ益、何耶、高文既不レ可レ得、而辱二前後一書一、俊偉卓絶之論鍼二砭聾聵一、前書艸而後書楷、可レ謂二一擧而兩得一矣、今欲下裝潢爲二卷軸一、置二之棐几一、眂二同志者一曰上、此徂來先生之賜也、命名之義、作文之法、皆備レ于レ此、可レ爲二準則一、且以志二吾過一、不二亦可一乎、意長楮短、無レ任二瞻溯之至一、希察茹、

招二天湫和尚一住二祇園寺一疏 代二成公一言

往年義公聘二明心越和尚一、住二持岱宗山天德禪寺一、傳至二三世一、咸鳴二退鼓一、壽昌一派、不レ絶如レ縷、肅公慨然、招二大寂和尚一、主二其席一、丕振二墜緒一、脩二飾儀軌一、正德壬辰之夏、更革二舊號一、山曰二壽昌一、寺曰二祇園一、四衆輻湊、淸規再盛、和尚展拓之功、肅公外護之力、各居二其半一矣、是歲孟夏、天湫和尚來開二法筵一、艸木一新、雲山改レ觀、寡人不レ勝二欣抃一、駢語以擒二賀悰一、

直指單傳、鷓鴣氏之桂識故在、淸淨空寂、盧行者之樹臺宛然、正要拔茅連茹、豈容二考槃在一レ澗、恭惟少林天湫和尚、拈二槌器宇一、轄二衲材能一、傳三心印於二壽昌一、荷二負堂構一、仰三祖風于二眞歇一、泝二洞淵源一、辣手匡徒提二黑蚖一、冷眼志彀射二白額一、金星婺女、耀二輝光於二東皐一、慧燈戒香、揭三宗乘于二西域一、譬二諸楚材而晉用一、緇素同歸、幾レ乎三越徹與二杭標一、古今合レ轍、揮二智劒一兮懾二伏魑魅一、把二金鎞一兮繡二出鴛鴦一、四月淸和雨乍晴、現成公案、一年好景、君須レ記、物外活機、請掌二精藍一、式操二法柄一、

醯鷄集序

醯鷄子自レ少好レ詩、涉二蘇黃之蹊逕一、造二楊陸之壼奧一、凡園林丘壑之勝、烟雲花竹之態、雨露霜雪、春榮秋悴、以至二窮愁無聊一、不レ可二鍼砭一者、一寓二之詩一、故其詩有二跌宕者一、有二奇崛者一、有下溫雅端莊如レ曳二裾侯門一者上、有下淒惋悲壯如レ擊二筑燕市一者上、其體不二一而足一、一日憮然謂レ余曰、人苦レ不二自知一耳、年逾二半百一、始知二從前作詩之非一、擧世皆唐、而吾獨宋、吾髮種種不レ能レ學レ唐、而舊染汚俗亦已深矣、世無三武王作二康誥一、孰能鼓二頑民一而革二弊風一乎、今將三舊藁一付二祖龍一、絕レ口不レ言レ詩、負三暄偃二臥于南牕下一、不二亦快一乎、余應レ之曰、子之言誠是矣、然時有二唐宋一、人無二古今一、子作二子之詩一、何卹レ乎二人言一、蓋日之所レ觸、情之所レ感、不レ能レ不レ發レ於レ言、或沈吟竟レ日、或一氣呵成、巧遲拙速、唯時之宜、何暇レ問二其爲レ唐爲レ宋爲レ元爲一レ明、而必欲二造レ車合一レ轍其可乎、三百篇大矣、姑以二余之所レ聞論レ之、則濟唐下武、歎二文武之盛德一、車攻吉日、美二宣王之師律一、齊整嚴栗雍容肅穆之辭、而有二蒹葭蒼蒼白露爲レ霜之篇一、又有二昔我往矣楊柳依依之章一、譬如下天地間無二一物之不一レ備、無中一事之不上レ存、後世能得二其法一者、唯杜少陵一人、故唐史稱下其渾涵汪茫、千彙萬狀、兼二古今一而有レ之、他人不レ足、甫乃有上レ餘、嗚呼詩至レ唐而盛矣、蓋唐以二聲律一取レ士、故士子以レ詩爲二專門之學一、其盛不二亦宜一乎、余非下知二唐詩一者上、然常喜讀二唐詩一、頗能辨二其爲レ正爲一レ變、唐之大家不レ可二屈レ指而數一、自二王楊盧駱一以至二錢郎韋柳之徒一、皆得二其正一者也、若二元次山之聱牙、王季友之牽直、李長吉之瓌詭、孟東野之苦硬一、皆得二其變一者也、夫三百篇、既有二變風變雅一、之數子者、豈得レ謂三之非二唐詩一乎、宋詩又其變者也、過レ於レ矯二中晚之卑弱一、而不下自知中其流上レ於二申商之刻薄一、此其所三以來二後人之譏彈一也、子輿氏曰、羿之敎二人射一、必志レ於レ彀、子能以二性情之正一爲レ彀、自レ變而趨レ正、則不レ學レ唐而自唐矣、故曰、子作二子之詩一、何卹レ乎二人言一、子欲レ焚二其藁一、余欲レ存レ之、他日一變、至二於魯一可レ幾也、且欲レ廣二其意一、故敘レ之、

復二荻徂徠一書

今夏亢旱、炎熱殊甚、伏讀二瑤函一、方知二足下動履無一レ他、可レ勝二慶幸一、僕春間患レ眼、復札遂爾遲緩、想足下不二復經一レ意、一覽便休、但恐此後鴈魚遂濶、無

由申達鄙懷爲歉耳、不意蒙諭、足下既罄所蘊、庶乎足以遂久要弗替之義、捧讀至此、喜不能自勝、愈服足下襟量之大、不啻叔度千頃陂也、汎愛之餘、爰及先侯及朱文恭流風有在、鼎言之重、感戢有餘、弊邑僻在東海、地非膏腴、故士風敦樸、不習華靡、先侯策勵以廉恥、瘠土之民、莫不嚮義、理則然矣、若夫作文之法、則僕亦豈敢以爲如是而足、此亦夷子憮然之類已、然一臠可知全鼎之味、儻能擴充之、則近河艸木、必受潤澤之賜矣、至於以己律人、大非足下之心、則僕竊有疑焉、大匠執繩墨以規材、其不中繩墨、不循規矩者、擁腫拳曲、天下之棄材也、匠人何與焉、冀足下勗諸、意者足下所著之書必多、僕未嘗得見爲憾、近從學子借觀蘐園隨筆、譯文筌蹄、此皆足下之緒餘、不足揄揚大家風、況僕蚤從編削之事、局務旁午、皓首不能究一經、其於性理之學、憒憒焉、然以蒐獵史傳之力、頗能辨其皂白、世多以文人望足下、不能知其道學之深奥、亦猶王右軍以書名、掩其通濟之器也、蓋足下之爲詮會之說、皆根據乎六經、折衷於程朱、不立異以爲高、

不求新以自矜、能使學者玩索涵泳、自然知其精微純粹、其餘如論佛教、有曰、儻使聖人生於今世、必有以裁之、而不必知周唐二代之爲也、又引朱子之言曰、周禮一書、皆從廣大心中流出、予由是而知所以處佛老者、又以良醫治痼疾、證陳眉公大養濟院之說、不激不亢、憂深慮遠、而與世之號呶排擊者、大不侔矣、若非大學問大見識、則不能到此、欲作責沈文、則筆力不逮、徒仰泰斗之高耳、筌蹄一書、則其門人之所筆記、固非足下之留意者、竊謂字義不明、文義窒礙、其害有不可勝言者、皇朝自有一等言語、如古語拾遺、釋日本紀等書、皆釋其義、而不可用於文字、解釋字義、明白精確、振古未有如此書者、妙通華語、援彼證此、縱意糾繹、不□論是、其惠後學多矣、蓋從灑掃應對、與精義入神、精粗本末、貫通只一理、循序而漸進、則跬步可以窮千里、僕豈敢以其淺近而忽之哉、文戒一篇、亦貴門人之所錄、附在隨筆中、三戒法度森嚴、其指摘仁齋下字差誤處、皆中膏肓之疾、獨所謂作文之法、舍此奚求焉、然步驟馳騁之法、操縱開闔之機、

恐不止于此、足下不吝開導、重賜提誨、則何幸加之、特愛護纏、不覺書辭之繁冗、希涵容亮恕、

楮尾請益

文字中用雖字、皆有一定法、不可移動、嘗讀通鑑魏明帝紀、諸葛亮曰、若不能者、雖兵多何益、數板下、叙曹休石亭之敗、賈逵曰、若待後軍、賊已斷險、兵雖多何益、同一語而用法不同、竊謂、肉雖多、不使勝食氣、可爲用雖字之法、則下文叙逵語爲是、而上文叙孔明語亦不可爲非、蓋通鑑據本史成文、三國志所書、想當加此、畢竟無一定法乎、固陋久懷疑惑、願釋之、

左傳僖四年、尙猶有臭、五年猶尙害之、據此、則尙猶猶尙、皆可用而無異乎、

襄三十年、申無宇謂公子圍、無不祥大焉、昭二十五年、士伯告趙簡子亦云、無不祥大焉、竊謂、此雖左氏筆、恐不可爲法、當以孟子不祥莫大焉爲正、僖二十四年、寺人披對晉文公曰、蒲人狄人、余何有焉、今君卽位、其無蒲狄乎、柳文與崔連州論石鍾乳書、則不必服正爲始與、意竊、此借字說出意、與披之語意略同、或祖之亦不可知、然臆見無的據、請賜裁正、

答中島總裁書

辱書、秋暑殊甚、承閤台兄動止綏寧、曷勝欣慰、嚮蒙論擬選貴號、六經諸子、皆台兄之所熟讀、於其中、簡拔一二字、以擬貴號、其事頗難、故就他書揀出、聊舉數項、以備采擇、承諭迦軒稱呼平穩、字亦可畧、今定爲貴號、因索鄙言敷陳其義、以代韋弦者、感意懇篤、謙光之美溢于楮墨、僕何人、斯擬選貴號、既踰其分、況爲之說、著文字乎、膚淺衰耗、實非所堪、又論斷章取義、非無此例、唐風無衣篇安吉之語、劉仁恭長安本色之言、雖倨傲悖慢之甚、亦可取以見擇號之本意、比喩甚當、嚴華谷釋無衣詩曰、此正與唐藩鎭戕其主帥而代之、以坐邀旄節者、無以異、此不必指仁恭本色之語、泛言藩鎭之跋扈、而台兄所引、其意適與華谷同、語練經史、識見審到、可勝敬服、故嚮蒙論擇號之時、竊謂、爲他人則易、爲台兄則甚難、正以此也、徵求字文、既不可辭、

便當速操觚牘以塞責、奈俗芬蝟集、加以枯腸枵腹、思路蹇澁、幸台兄曲垂鑒察、假以時日、雖秋瓜不能落帶、而有凍芋抽萌之期矣、春間辱賜賀賤齡七袠啓、對偶精緻、絕無湊泊之累、文從字順、錯綜自然、成章駢儷、台兄之餘事、而工麗如此、則其餘可知矣、但稱譽太過、所不敢當、自揣樗櫟老朽、不中尺寸之用、而蒙匠石之顧、不勝恧怩耳、又讀進校正大學衍義狀、辱蒙獎借、眷愛鄭重、喜出望外、其云人君為學之要道、豈有外於此者哉、僕之此舉可謂明世之盛事、鼎言增華、規諷及遠、中心藏之、何日忘之、外示高文二首、皆議論剴切、辨析精覈、多出人意之表、本欲作一書以謝厚眷、併賀榮進、時罹目疾、不能作書、及夏纔得瘳、而事務不暇應接、絡繹旁午、遂致初志睽左、多罪何由得贖、今因復書、併陳疎慢之罪、希亮恕、

通軒說

楊子雲曰、通天地人、曰儒、通豈易言乎哉、譬諸通路、必如衢衢康莊、無所窒礙、方可名之為通、故在學術則晝讀夜思、孳孳經典、察精微於毫釐纖忽之間、究道奧於傳注訓詁之外、優柔厭飫、涵泳融釋、發而為文章、則黼黻藻繪、可以賁徽猷垂不朽、舉而措之事業、則敦教化、正風俗、與郅隆之治、致雍熙之化、儒之用、至此不可勝計、不通而能如是乎、夫通五經、通禮樂、通兵農者、世既不可多得、況欲兼而有之乎、然士之立志、不以其難而自沮、苟有一物之不格、一理之不窮、必欲鑽研考覈、體驗而擴充之、巨細相涵、動靜交養、眞知實踐、積累既久、則豈無豁然貫通之日哉、彰考館總裁中島君、嘶號於余、乞以通軒應之、又嘶其說、夫通者、塞之反也、余天下之至塞者也、豈足以知通之義哉、然嘗讀周子之通書、一言以蔽之曰、誠者聖人之本、故舉乾之四德曰、元亨、誠之通、利貞、誠之復、朱子釋亨為通曰、文王以為乾道、大通而至正、通之時義大矣哉、君長於史學、既操筆削之權、他日顯擢、將有政事之責、則其所蘊、有時而發、楊子之言、方不為虛設、苟能立誠以修業、焉往而不可哉、故以此勉之、

謝因州刺史肥田君啓

銀山忽倒、漁舟出沒波濤之間、銅鉦高懸、商舶隱見煙靄之外、蒼生咸蒙其賴、靈祠翬飛、黔首競趨菩提、梵宇鶴立、遊此佳境、諧彼夙心、浴候潮而病魔頓除、踞釣石而詩思新湧、況又不捐故舊、遠惠嘉魚、巨口細鱗、雖非松江之產、赤鬚碧眼、孰與少室之胡、美味超乎八珍、寒厨暴富、盛意重於九鼎、陋巷生華、倉卒走毫、鞴藝研甕、

復百拙和尚書

鵲報喜、蝟毛縮、物之情狀、皆自然而然者也、今夏大暑爍金、久濶寶溪和尚音書、不知匕茵安適否、時時往來胸臆間、不能釋然、忽接圭齋藤兄遞致和尚書、兢誦法喜禪悅、日與道友文人會晤、襞積一詩篋去、神氣頓爽。靈鵲果報喜矣、寄一小冊、裝潢極佳、小楷端麗、粲爛奪目、熟視則和尚倡而諸友和、一韻逐至五百首、酬唱之詳、前古所未有、嘗聞唐有貞牟千、今雖假借稱韻牟千、亦可也、承諭和尚被謁明准后之奢過、自退寶溪以往、卓錫於東岡別墅、東南里許、接南禪之界、如青峰西巖諸大老、南湖景山諸儒、倡和或一日十二十、或四五十篇、其勢如走盤珠、似破竹斧、三五月而止、信手輯錄、脫落者亦多、南湖允題以幽客言、捧讀至此、駭其富贍敏速、愉快不可勝言、至讀楮尾徵鄙言、以弁其首、嚮之神氣爽朗者、索然蝟縮矣。僕東海一鄙夫、桑榆景逼、學業荒廢、縱不自量、強應其謂、如駑駘先騏驥、枳棘鉤珊瑚、不倫之甚、孰不媚笑、京畿文人之淵海、必有桓宣武雄爽、鬚作蝟毛磔、一筆揮灑、游刃有餘地者矣、請和尚就此圖之、必不得已、固求鄙言、則不必稱贊倡和之美、別有志之所嚮、恐犯不韙之罪、故不敢奉命耳、冗甚、未能周覽、且欲與同志者析賞、故少遲留、他日卒業、即當璧上、舊臘奉使江都、旅況無聊、每憩旗亭、不論眞一茅柴、逢著便嘆、專爲盪寒之計、春間患眼幾喪明、病源蓋孽于此、饕餮哉哥翁、果能如是乎、多謝和尚老婆心、途中口號呈露許多醜態、不意汚淸覽、而蒙稱許、可勝洗額、十志猶未成、如僕老憊、不堪編削之任、晚進才俊、假以歲月、必能成之、以繼先侯之志矣、野亭荒涼、風物依然、而竟無一句及之、可憐生太俗了、唯有園菊不廢修養工夫、莖葉日益茂盛、晚秋著花、可屈指而待、忝和尚齡

念一、當下以二汾陽語一相報上矣、率渺不宣、希炤亮、

水竹軒記

晴川一碧、奔放注レ于レ海、舟檝可二以通一、商賈魚鹽可三以贍二閭閻一、坻嶼瀠澳、邐迤縈回、渚菱汀芷、葳蕤蕙蒨、遠望則山嶽鼎二峙西北一、近揖則林巒輻二湊東南一、四時之興無レ窮、而漁釣足三以寄二其懷一、此那珂川之勝也、臨レ岸而架レ屋、脩レ竹成レ林、千尋涵影長流、龍蛇走而篁蕭起、居處既擅二其美一、而又貲産不レ匱、滋殖豐溪、能守二其分一、不二敢踰越一、愿愨勤儉、有二運輸漕輓之能一、斗酒尺鯉、歳時足三以娛二父老一、若レ此者誰歟、富商江幡滿矩也、往年義公過レ此而讌、愛二其勝槩一、命二名水竹軒一、賦レ詩而賜レ之、滿矩慄懼而感戴、緹襲珍藏、有レ年レ於レ斯、今茲請レ覺記二其事一、欲レ俾三子孫知二殊恩之渥一、如二江河之不一レ竭也、嗚呼義公能以レ高處レ卑、度量之宏大、惠澤之浹洽、至レ今閭境黎庶、莫レ不三稱頌而思二慕之一、況忝二其駕一而賜二圭璋之篇一乎、覺亦陪二其席一、得レ備二顧問一、轉盼之間、殆逾二三十秋一、追二憶公之風采一、眉宇、眞如二天人一焉、當時咫二尺西山一、得レ侍二燕寢一者、屈レ指能有二幾人一、而覺猶得下保二殘喘一而叙中往事上、豈非レ幸歟、然而悲懷嗚咽、不レ勝二物換星移之感一也、詩詠二廿棠一、傳著二祈招一、勿レ剪勿レ拜、式如レ玉、式如レ金、滿矩其寶レ之哉、

答二荻徂來一書

獨蒙二復札一、兢審二足下起居多祉一、大慰二渇想一、僕不レ揣二謭陋一、妄稱二蘐園隨筆議論儘好一、伏讀二佾教一、此乃足下昔年避暑漫書、聊以自娛者、誤墜二剞劂一、懊悔無レ及、足下自二少小時一、已覺下宋儒之說於二六經一有中不レ合者上、然既業レ儒、非レ此則無二以施レ時、故任レ口任レ意、左支右吾、皆不レ足レ論者、中年得二李于鱗王元美集一、發憤以讀二古書一、自誓曰不レ涉二東漢以下一、終而復始、循環無レ端、久而後啚之解二六經一紕繆悉見、祇季王心在二良史一、而不レ追レ及二六經一、足下乃用二諸六經一、爲レ有レ異耳、僕凡民之尤碌碌者、豈足三以知二豪傑之士一哉、然足下天資之高、絕類離倫、可レ謂下不レ待二文王一而興者上、豈非二豪傑之士一哉、僕素非二業レ儒者一、前書既言二其槩一、然儒者之道、即士人所レ當二躬行一之道、方袍圓顱、分爲二二途一者、戰爭之世之陋習、而非二昇平之氣象一、昔年先侯首使二府下業レ儒者返二其初服一、常曰、吾亦儒者也、吾有二君父一、有二家人一、有二土地一、有二人民一、非レ學二孔孟之道一、則何以得レ膺二方面之任一

哉、僕侍先疾日久、熟知其志、故講武事之暇、樂洙泗之道、幼師事朱文恭、徒有其名而無其實、亦如前書所陳也、文恭務爲古學、不甚尊信宋儒、議論往往有不合者、載在文集可徵也、當時童蒙、不能知其所謂古學爲何等事、至今爲憾、尊信宋儒、乃僕中年以後一己見識耳、皇朝無知程朱之說者、元弘建武間、僅有僧玄慧始讀之一條禪閤著之筆札、而究其旨者、數百年間寥寥無聞、及惺窩羅山兩先生出而表章之、其書盛行于世、區區之心以爲舍此無以爲學、今夏偶見隨筆中援引程朱之書、躍然自喜所見果不妄矣、及承淸誨、始知足下中年既覺宋儒之陋、六經不復須註解、人之知愚相去、天淵如此、今欲改頭換面、革去舊習、則齒髮日益頹落、志氣亦因衰耗、蛾眉闒茸、可望而不可卽、付之一浩歎而已、蒙諭宋儒主張理氣之說、六經無此、人欲出於學記、而不言去人欲、只盡之、克己之己爲己私、六經無此例、解格物、加窮理之二字、其義始成、明德之解雖美、至於詩左傳而有不合者、變化氣質、亦經無此言、又經所謂禮者、禮樂之禮、程朱以爲性、要之昌黎好議論、務言理、其風至宋益盛、程朱諸公、生于其世、習以爲常、不知求諸事與辭、務爲新奇之說、亦不自覺其與古背馳耳、其言皆鑿々有據、聞所未聞、此亦寸莛扣鐘之力、豈敢以爲異端邪說而斥之乎、但僕爲學荒陋、皓首不能究一經、尤憒憒於性理之學、如前書所具、故其是非得失、懵然不知所可否、此何異奏簫韶於聾俗舞干羽於裸塲哉、然非聞此剴切之言、則以隨筆爲足下之定見、誠如高慮、戀鳳翔于千仭之上、而猶爲藪澤之鴻鵠、不亦繆乎、又諭、如濮議、諸儒聚訟、今求諸儀禮、不俟多言、本自了了、謹聞命矣、然非切近之事、至於神主、府下士人、家家多所有、其制不合於禮、祭四代爲僭、則凡爲人子者、必有所不安矣、嘗聞、司馬溫公據荀勗禮、作牌子、伊川殺諸侯之制、作神主、又以義起始祖之祭、朱子後來覺似僭、不祭始祖、而祭四代、及作主之制、一從伊川之說、則朱子亦不免有疎漏處乎、此非敢輕議古人、亦欲考究切近之事也、今士人家、不用木主而用牌子可乎、溫公之制可據乎、戰別有式

乎、儻用木主、則其制如何而可乎、但祭祖禰、不及高曾為得乎、冀暇日命侍史、劄記足下祭享之禮、及木主之式見投、則何覞如之、千萬懇祈、蒙惠答問近作一篇、其莊雅響亮、則非僕所敢知、如處佛氏之方、則措置得宜、無復餘蘊、謝謝敬服、譯筌一書、足下視為兎園冊子、宜矣、然惠後學為益弘多、前書書備言之矣、請益數件、瞭然發蒙、謝何能罄、凡學文章要識體、故學左氏文、則用左氏法、學孟子文、則用孟子法、不可混而用之、即此數語、得益甚大、中心藏之、何日忘之、本欲登時奉答致謝、而秋末至今俗棼蝟集、日不暇給、遂爾稽緩、罪不勝擢髮數焉、白露凄其、忽至嚴凝屬發、尊候不異年日否、希保嗇、

謝平玄中書

嚮辱覞壽序、薰沐莊誦、如獲拱璧、命意之高、立言之大、夐出人意之表、不可以尋常祝釐之語求之、信乎徂徠先生之門多文人崛起者、籍湜輩不可一二數也、但僕蒲柳凋零、犬馬齒衰、徒糜歲俸、惴惴焉唯一日失墜是懼、不意蒙長者之推獎、忝張老之善禱、縱欲夸耀鄉里、揆之中心、能無愧乎、至於稱贊日本史、則借鄙人之書、以彰義公之美、古人亦有借彼言此者、此文章家機抒之巧、而大兄斡旋鎔鑄之妙、踔厲發越、筆下風生、孰不忘食而樂聞乎、蓋日本史之成、用力浸大、而文獻不足徵、古記實錄、皆編年之書、而紀傳搬體、以效遷固之史、戛戛乎其難哉、千載之下、其可徵者、無踰舍人氏之史、誠如所諭、而舍人氏之史、取材於三史六朝、頗有筆力、雖不純乎史體、亦非後世記載者之所能及、續日本紀以下、則日曆起居注之體、而冗蕪輭弱、皆不足觀、然如其事實、則舍此無可外求、中古兵燹、簡牘殘滅、日本後紀、既不可得、其散在類聚國史者、僅如黑子之著面、本朝世紀、寥寥無聞、可以取信者、水鏡大鏡榮花物語之類、已譯而成文、亦頗難矣、唯有王臣之家乘日錄、可補舊記之闕略、而周旋規矩之小節、什居八九、披沙揀金、蒐材構屋、抑又難矣、義公立法甚嚴、不許騁文弄辭、務使覈實、每戒史臣曰、選皇朝之史、固非汝輩所能及、後世必有良史者出而修之、吾備其稿耳、寧繁、勿失簡、寧質、勿過文、故每事參覈諸

書標其所出、畦畛溝洫、各有所局、而不能踰越、雖有具鶻眼鷹睛者、不得縱凌霄之翮、亦猶圖鬼魅者易工、畫狗馬者頗難也、然義公之立論、亦有卓然不可沒者、紀傳正名、内南外北朝、又如所論、雖然御紫極而當丹扆、莫非後嵯峨上皇之裔、義公豈得以私心輕重之哉、一以明德三年神器所歸爲斷、而興替盛衰之間、必三復致意焉、其餘列神功皇后於后妃傳、揭大友皇子於帝紀、皆世人之所駭異者、此非義公之掇見、而推原舍人氏之史也、舍人氏編年而書、苟不係於紀、則應神天皇六十年間事實皆湮沒而無聞焉、故書攝政元年、而刑賞黜陟、臚列無遺、既云攝政、則非踐祚明矣、若大友皇子之纂統、則懷風藻水鏡、皆有明文、而舍人氏既書近江朝廷、其書天武之簒奪、曲筆回護、雖子爲父隱、理所當然、而不自覺其往往逗出、此皆天理人心之公不可掩匿者也、後人不能究其旨、以大友爲叛臣、而列於將門純友之類、不亦悖乎、義公憤其憒憒、故特書而正之、亦欲扶綱常正名分也、降及中世、外戚竊朝權、宮壼亂倫理、三綱淪而九法斁、姦邪進而忠讜逐、遂致陪臣敢擅廢立、島夷指斥乘輿、開闢以來所未嘗有、其變亦大矣、究其端緒、必有所從來、而據事直書、美惡自見、此皆日本史之大較、而即其書可見其義者也、藏之金匱之底、而不下州閭者、豈義公之志哉、勢有所不可也、數百年間、汙隆升降、瞭然示諸掌上者、亦必有其日矣、踰七之老、朝不保夕、而日本史之壽、則不可限量、後世豈無良史者、采而擇之、筆者筆、削者削、以爲昭代之龜鑑、而成義公之志者哉、序中所謂亂臣落膽、悛覬覦之心、賊子跼蹐、不王之迹掃地焉者、至此方可庶幾也、僕與諸子、同修日本史、歲月既久、雖無尺寸之長、而熟知義公之志矣、夫貴藩之望義公、在大父行、而下之事上、猶一家也、何日把臂、以罄所懷、今因銘戢祝規、不惜爲大兒傾倒、略叙顚末、以冀日本史之壽與天壤不敝也、秋凉希自珍、

答平玄中書

曩者奉書、謝貺壽序、併及本藩修史之事、足下以爲、異國之史、往往皆一人之所修、而稱成一家之言、日本史獨歷多士之手、假以歲月之久、寡固

不可以敵衆邪、班馬諸史、未嘗不根於地下也、揄揚稱贊之至、豈僕一人所能專對哉、大抵史以成於一人之手為貴、唐書成於宋歐二子之手、而永叔不喜景文之奇澁、故退而修五代史、則其疏通暢達、後人以為勝於新書、元人修宋遼金三史、雖丞相脫脫總裁之、而編修成於諸子之手、虞集揭傒斯輩、皆備良史之才、搏綜衆史、馳騁古今、識者猶病其出於多手、而體裁不能絕一、況本藩史臣、學識不能及伯生曼碩之徒、措辭之難、摭事之不易、率如前書所陳、則其果可傳于不朽邪、抑招識者之譏邪、皆不可知、但義公立志之大、不自滿假、而待後世良史之筆者、炳焉不可磨也、義公不分儒與士人為二流、前復徂徠先生書中、詳言其故、僕深體其意、豈敢與醫卜同科睨之哉、其不欲以文人自居者、非不欲也、實無文之可居也、儻有其實、則雖自表於世、號為文人、亦無妨也、足下不棄老朽、推奬之過、使人忸怩不自安、千里神交、書牘往來、僕亦與有榮焉、天假良緣、結驩杯酒之間、接清談而挹風采、固所願也、至以足下比籍湜輩、則子陽井蛙之見、宜受伏波之譏誚、初意以為、徂徠先生文名震當時、可謂昌黎復出矣、則門下之士、雖以籍湜況之、亦無不可也、發書之後、方接先生之手書、始得聞其研究古學、而目不涉東漢以下、昌黎好議論務書理、其風至宋益盛、則其不滿昌黎、已自可見、籍湜輩奚足芥帶哉、如僕所見、眞矮子觀場、斥鷃指地者、擬人旣非其倫、深咎前書之失而無及焉、足下廼謂微意在折少年豪英之氣、縱僕老悖、豈敢以圯上老人自處、而以孺子徒足下哉、鄙書無說非無其比、他日為王者師、則不可量、足下想之、楮尾及小宮山昌嶠江戶賦、往年就僕商量、略陳所見、昌嶠頗采用之、盛意欲使乞序於祭酒林公甚當、鼎言增華、必知所論、當以盛意示知昌嶠也、稔聞、世子好學、溫良淳懿、眞守邑之器也、本邦既無虎闈齒胄之設、足下陪侍講讀、從容啓沃、則雖無其設、而有其實、德業之進、可延領而望焉、至祝至祝、承諭問安之暇、開園栽菊、大極殿王昭君山吹瀨極佳、僕若有意乞求、足下不吝為紹介、厚眷稠疊、謝何能罄、但此三種、一二年來

弊園所レ有、大極殿花極大、苟得二其養一、則徑至レ尺、誠如二所諭一、然品不二甚高一、舞陽侯之冠佩、不レ免三時露二麤率之態一、王昭君雖二潔白稱一レ名乎、自レ嫁二呼韓邪單于一、光彩不レ能レ動レ人、不レ及三漢宮新承レ寵者一遠矣、唯山吹瀨英姿爽颯、正レ色立二嚴霜下一、眞有二國士無雙之風一、天台山以後、倭龍門以前、無二與抗衡者一、率意評騭、不レ知足下以爲二何如一、老圃頗有二子花之佳者一、儻無二褻瀆之嫌一、則來春當レ獻二傑出者二三種一、就賜二名園奇品一、則榮孰大レ焉、難レ得之貨、正不レ在レ多、止レ於二三四品一、鄙願足矣、往年英岳翁傳レ命獻二菊秧一、幾及二百種一、明年辱賜二佳品十餘種一、至レ今栽培、以爲二弊園之美觀一、舊臘奉レ使入レ都、邸中倉卒、謁二見尊藩一、恩言朓篤、因及二獻秧事一、世子亦親聞レ之、感戢銘鏤、訖不レ能レ忘、既開二其例一、則非二唐突冒昧之爲一、故爲二足下一縷陳、然賜下老圃所レ有品類上、則感載不及、新奇者、願疏二見存品目一致二之左右一、足下一一點檢、法二其所レ有、標二其所レ無、而蒙二兪允一、則情愿光輝無レ踰レ此、僕非下隨二俗好尙一、務欲二新奇一者上、然傳不レ云乎、原田每每、舍二其舊一而新是謀、自レ古既有二此言一、冀與二田子一熟二圖之一、嚮緣二公事一、旁午鞅掌、奉復遲緩、故央岡子達二此意一、殘臘沍寒凜裂、希保嗇自玉、

寄二平玄中一書　丁未

新禧駢集、品物咸亨、足下年登二强仕一、齒髮方壯、遭二逢明君一、輔二導世子一、德業與二春祺一並臻、可レ勝二慶幸一、古來英邁特達之士、往往有下忽二略生計一、室而縣磬者上、由二其立志素高一、不レ屑レ爲二守錢虜一也、忽接二除夕手書一、深欽二足下意氣慷慨一、滕公頴陰之功皆可二庶幾一、而曹劌朱雲之事、亦不レ難レ爲、誠昂然大丈夫、而不レ免レ爲二窮鬼所一レ擾、酒家督債、計無レ所レ出、無聊之態、溢レ于二楮墨一、文人才子、率多二轗軻困厄一、何其古今一轍也、抑又困レ心衡レ慮、空二乏其身一、而天將レ降二大任於足下一歟、焉知下今日之窮、不上レ爲二他日之通一哉、承聞田子致二歲酒一、頗遣二不平之氣一、想亦不レ過二美醞三升一耳、嗟乎世無二陳叔達一、孰能充二斗酒學士之醉一、而使レ無二不足之難一哉、又諭弊園子花菊秧稟二世子一獻レ之、貴園名品、亦允二拜賜一、田子書中、已悉二其狀一、此皆足下先容之惠、感戢有レ餘、登時欲レ獻二左右一、奈春寒凜烈、過レ於二嚴冬一、加以新年未レ有二雨澤一、畦畛凍合、苗葉枯瘁、故濡滯至レ今、頃得二

好雨一、土膏融液、雖レ未レ及レ抽二青芽一、而荄根稍可二辨別一、謹將二子花五種一、致二之左右一、野人獻芹、老圃獻菊、其義一也、希叱名進呈爲レ幸、弊園所有品目、閣下具復二田子一書中上、蒙二賜品外四五種一、則榮孰甚レ焉、冀與二田子一隨レ宜處分、千萬懇祈、草率奉復、統容鑒茹、

寄二田子愛一書

嚮憑二大兄暨平野兄一、獻二菊秧于二世子閣下一、得レ備二栽培之員一、既幸矣、又辱賜二親翰一、謬蒙二寵諭一、蓮華生レ華、榮孰甚レ焉、恭惟、世子閣下、方富二春秋一、孳孳學術、端正淳懿、兼二資文武一、暇日味腴摹芳之爲、皆得三之於二問安視膳之餘一、飼藻兼二筆鋒一、媲レ美、德輝興二謙光一並耀、眷顧之隆、弗レ棄二蕉萃一、孰不二抃躍而感戴一哉、但覺老朽蹇劣、究無二尺寸之長一、禮樂詩書、乃郤穀之美事、悚懼有レ餘、先生之稱、非レ所二敢當一、揆二之中心一、實增二氷淵一、至レ於二灌畦藝菊一、則老圃分內事、故敢率意奉レ對、屈原陶潛、皆高尙潔身之徒、非下閣下之所レ宜二歆艷一者上、然澹煙疎雨之夕、黃裳元吉、鸞鳳翔三翔于二籬落一、亦可三以充二西園雅集之觀一、苟不レ至レ於二玩レ物喪一レ志、則莫レ非二藏脩息游之資一也、

弊園菊譜、忝經二電覽一、許三春後賜二品外五六種一、爲レ惠實深、翹望日甚、嘗聞承露盤、極易二消耗一、黃炎劉中壘、金莖亦易二摧折一乎、然蒙下求二種西京一秋末分惠之命上、則白水眞人、纘二業東都一、而潁川百姓、欲レ借二冠恂一之願、亦可二庶幾一也、亡師朱文恭有下乞二菊於二義公一帖上、載在二遺文外集一、覺百事不レ能レ學二文恭一、而唯此一事、稍存二餘風一、不二亦可レ差之甚一哉、希將二此意一、乘レ暇稟レ明、兼致二謝悰一爲レ幸、冀炤亮、

湖亭涉筆序

讀レ經不レ依二傳註一、自レ古推爲二上等識見一、經且如レ此、況於レ史乎、史除二三史一外無レ註、唯裴松之註二三國志一、博采二群說一、以補二陳壽之闕略一、徐無黨註二五代史一、不レ規三規於二訓詁一、發二揮義例一、裨二益本史一、二子之註レ史、爲レ不二虛作一、其可レ少哉、資治通鑑、文義平易、不レ假二註解一而自明、胡三省作二音註一、正二史炤之誤一、辨二司馬康之謬一、纖悉備矣、至レ於二成敗利鈍之機、賢愚邪正之分一、或下二冷語一、或著二數十言一、議論精覈、無二復餘蘊一矣、綱目書法發明、雖二議論剴切一、頗有下傷レ於二苛酷一者上、設使二其人而聞一レ之、必有レ辯焉、豈心服哉、胡氏之論則不レ然、審二其事實一、度二

其時勢一、如下與二其人一相對論告上、婉順引而歸二之於レ正也、蓋當二宋元革命之際一、封疆日蹙、志士抗厲、腐心之秋也、故遇下前朝事迹適與二時事一相類者上、必三復致レ意焉、姑舉二一二一、餘可二槩見一、周則七二蹤文帝一、言二宮闈之侈麗一、則曰、嗚呼我宋之將士、其習俗亦如レ此、吾是以悲二二宋之一轍一也、韓擒虎宵濟二采石一、守者皆醉、遂克レ之、則曰、咸淳甲戌十一月涉二武口一之事亦猶レ此、後晉出帝降二契丹一、李太后上表稱二新婦李氏妾一、則曰、臣妾之辱、惟晉宋爲レ然、嗚呼痛哉、南唐李景遣遙爲二壽州聲援一、擁兵五萬、無二決戰意一、則曰、嗚呼此年襄陽之陷、得レ非二援兵不レ進之罪一、當時目擊身歷、洽桑之感、不レ能二自已一、其縫三綣於二國事一可二推而知一也、其餘論下信陵君爲二縞高一縞素、班超通二西域一、大學諸生互相標榜、曹操料二袁尙一、竇融張軌、威著二西土一、姚泓非二撥亂才一、憲宗罷二太子侍讀韋綬一、周德威失二擒闕之險一、楊承勳因レ父歸レ命、馮道李愚盧導之優劣上、皆中二肯綮一、其於二君臣父子之間、與廢盛衰之迹一、可レ謂二深切著明一矣、是豈可下以二凡書註釋一觀上邪、覺承二乏館職一、與レ修二史書一、儚然弗レ知レ所レ措、涉二獵諸史一、依二倣其體裁一、而鞅掌盡手、日不レ暇レ給、故讀二通鑑一、粗知二治亂之綱要一、以爲二筆削之資一、而於二胡氏音註一、不レ能レ劃二之於レ懷、殆有レ類レ乎下劉義叟所レ謂性情所レ得、未レ能レ忘三言於二悟賞一者上焉、性又鹵莽善忘、隨レ得抄錄、附以二己見一、盈二積篋笥一、徒供二蠹魚一、長夏炎蒸、兒輩展レ之暴凉、乃取而閱レ之、則得レ於二通鑑一者什七八、得レ於二諸史一僅二三、旁及二稗乘叢說一、釐正成レ編、名曰二澗亭涉筆一、鵝巢先生序而獎レ之、不レ幾レ於二昌歜之嗜一乎、夫穎邁特達之士、傳註且不レ經レ意、而況於二通鑑音註一乎、其志趣之汚下、可レ不二自足レ於レ此而奮發一哉、胡氏註三玄宗立二表南北一候二晷極一曰、溫公作二通鑑一、不下特紀二治亂之迹一而已上、至レ于二禮樂曆數天文地理一、尤致二其詳一、讀二通鑑一者、如二飲河之鼠一、各充二其量一而已、覺老矣、雖レ欲二自奮一、庸能及乎、鼯鼠伎倆、不レ過レ如レ是而已、

答二荻徂來一書

嚮蒙二翰教一、審二足下起居泰寧一、可レ勝二抃躍一、所レ問神主制、精覈詳悉、感謝有レ餘、承諭、漢志載、天子主、尺有二寸、六孔明通、不レ題二識其面一、背有二題識一、伊川圓レ首通レ孔、微變二其制一、而題二識其面一陷中判合、

乃其所特叙也、蓋主者所以棲神、故六孔相通、
一廟一主、無廟無主、既有其廟、不須題識、號
謚自明、而題識其背者、守主者之所識別也、伊
川之制不免僭、荀氏神牌之制、題其面而無通
孔、亦無趺、參是温公所據也、庶人之制、祀四代
於一室、神位叢然、不可得而別、故設牌以別之、
牌者所以表其位也、故題識其面、非所以栖神
也、故不通孔、宋儒不習禮、不能視其制、以
識其義所在、遂混主牌以一之、庶人之薦、掃
一室、以設一日之位、薦訖即撤、故荀氏温公爲合
禮者、其餘議論閎深、皆精覈有根據、受益弘多、
甚副所望、特怪、夫伊川以義起始祖之祭、朱子後
來覺得似僭、不敢祭、而主式一從伊川之制、不
言其僭、前書所論、禮用十二六、唯天子爲然、
祭四代、唯諸侯爲然、謹聞命矣、竊疑朱子豈不
知之者耶、知而襲其非、則其非尤甚、參朱子嘗對
門人問程子主式士人家可用否、曰、他云已是殺諸
侯之制、士人當用牌子、又問、牌子式當如何、曰
温公用大版子、令但依程氏主式、而勿陷其中、
可也、據此說、則朱子又似不滿伊川主式者、而
文公[illegible]、何以曰爲四龕所以奉先世神主、又
對門人問、今雖士庶人家、亦祭三代、曰、雖祭三
代、却無廟、亦不可謂之僭、所謂三代、蓋不數
禰而上及高祖也、朱子之意、固以一堂四龕之制、
爲士庶人之通禮、而主式一從伊川、則與敎門人
用牌子之說似相乖戾、豈朱子別有所據耶、抑
如足下所云、宋儒都不知禮、鑿空爲之說乎、
皆不可曉也、温公作文潞公祠堂記曰、公以廟制
未備、不敢作主、用晉荀安昌公祠制、作神版、
則足下所云無廟則無主、及温公所據者、即是也、
先侯嘗問朱文恭、以五廟之制、文恭不采家禮、
其言曰、家禮乃庶士官司之禮、豈所以施於諸侯
者哉、庶士官司之禮、尙不得以施之元士、況得
以施之大夫施之諸侯乎、其對奉神主宜廟宜
寢之議曰、古者爲主、所以接神也、祭則迎主以
祭於廟、祀事竣則送主還寢、寢者皆以人道奉
其親者也、而廟則神之矣、朱子謂、凡廟之制、前
廟以奉神、後寢以藏衣冠、但失之粗率、亦非鑿
鑿謂適廟奉主也、又對大夫人配廟之議曰、程子
以翁婦爲嫌、欲爲別廟別祭、於禮固爲支離、

文恭不專尙程朱、往往此類是也、幼時嘗見文恭自書高祖龍山處士以下祭牌、雖客居流寓不能舉祭、而其意蓋與足下牌子之說相同、然今世頗有據家禮而修祭祀者、即如僕家先人、不用浮屠法、據程子式制木主以來、不腆之薦、殆將六七十年、神之接不接、非所敢論、而神之所安則可知矣、既如此、則不能一旦率然易以牌子、縱易之、將處舊主於何地乎、瘞之焚之、皆非所宜、此非順非襲故之謂、而爲人子者、其心實有所不安也、推之而言。府下之士皆然。豈啻府下、四方之士遵用家禮者皆當然、則其勢有不可行者也、夫無牲曰薦、加牲曰祭。廟則祭、而寢則薦、祭薦之判久矣 今士庶人之家、寢且有不能備者、百事苟且、誠如所論、然量力隨分、構一祠堂、以時薦之、亦無不可也、易稱、東隣殺牛、不如西隣之禴祭、實受其福、此雖文王之事、亦可推而及下、苟有誠心、則何必論其厚薄哉、至於與其祀而褻瀆、孰若且從世俗所爲、薦於僧寺之爲祖先所安享、則足下豈有激而言乎 今釋教盛行於海內、其間稍辨氣理、而知祀祖先於其家之爲是者、僅存什一於仟佰、而一槩舉之、以託緇徒、則其害有不可勝言者矣、然以悲哉二字結之、則知足下有激而言也、若先侯更張木牌之制、則所置僧寺而言通式、蓋唐宋天子廟寢皆備、而置御容於僧寺、意者先侯所置亦此類乎、當時不能請問其詳、皆僕臆度之言、勿爲據焉 今春又患目疾、奉復遲緩、罪甚、統祈鑒茹、春寒冀自嗇、

田巴山牌陰

君諱淳、字希范、號巴山、生於元祿二年九月五日、幼警悟、有成人之度、長而溫厚謹慤、至性孝友、長于武技、最善劍術、篤志學、有暇則涉獵經史、粗習華音能詩、書法楷正、給祿若干、積勞彰考館有年矣、絕口不言人短、唯學所長、友朋化其信義、享保十年十一月十日暴疾、先于父母而歿、材不盡其所蘊、齒未及強仕、哀哉、

題甲櫝

雨宮筑前某、父曰助右衛門某、其先出自河內守源賴信、賴信第二子肥後守賴淸之裔、而雨宮攝津守義正之胤也、世在甲斐、事梅雪齋穴山陸奥守源信

君、筑前以武幹稱、戰死年月戰場、皆無所考、有子曰七之介某、亦事信君、天正十年、信君遭難、死于山城草內渡、東照宮以萬千代君信吉繼其家、七之介某從而事之、給祿貳百石、慶長八年、萬千代君薨而無嗣、及威公封于水戶、事威公爲大番、給祿如故、其子安茂、稱又右衛門、爲書院番組頭、生子安平、事義公肅公、歷大番組頭目付、爲足輕頭、致仕號晚汀、子安昭世祿、襲稱又右衛門、實筑前之玄孫也、家藏筑前之甲冑、其身甲將棊頭黑絲縈、相傳、戰血淋漓有汚衊痕、其製甚偉、非常人之所可擐、故安昭以其兜鍪配父祖之甲、藏之櫃、手製櫃而緣之甚精緻、其餘所傳、有鐵脇楯、別藏焉、又有紀新大夫行平所造刀、皆筑前之故物也、刀頗有靈異、故安平藏之常陸第三宮吉田社、安昭欲使子孫知祖先之武功、而不墜其業、請余誌其梗槩、其志固美矣、因應其需書之、

復平玄中書

食貨兵馬二志、編纂、蒐羅、檢討日勞、緖閱令義解、延喜式、類聚三代格、無一事之可觀、啻板固滯、令人生厭、然不有此等書、則無以立本、適有古記實錄之可徵、則有始無終、得此失彼、每研究一事、必涉數部書籍、材識淺短、神氣昏憊、時方炎暑爍金、如坐甑中、老境眞不可耐、忽接金華大兄手書、情意懇款、謙恭過甚、又蒙謄錄詩文若干首、小楷妍麗、雲烟縹緲、盥嗽讀之、清爽嚼氷雪、塵累若頓、一時蕩去 何等清涼散奏效乃能如此乎、銘鏤感戢、謝不能盡、贈菅童子、及南郭稿序、其論文運至矣、聞南郭文集方今今上梓、意即其序乎、傳播遐邇、並稱二美必矣、吉田愼齋、僕莫逆友也、離隔多年、不能赴弔、至今怏怏、高文形容愼齋之爲人、頰上三毛不啻也、墓碣得其人可以託不朽矣、寄南郭書、記岐岨山路之險、極其精妙、嘗聞寢覺牀 天下之勝也、斯文可與爭美鬭奇、芙蓉在其南百里而高、不知其高、我之高也、豈非奇語耶、韓碑柳記出於一人之手、何足下之多力兼人耶、感歎之餘、不覺妄意置評、多罪希恕、詩皆高華精深、恐非今人所能可到、僕稍解宋詩、不知唐詩、然麒麟鳳凰、人皆知其爲靈爲瑞、唐耶明耶、麟耶鳳耶、世必有知之者

矣、僕平生所學、皆出人下、唯於近世群雄爭戰之事迹、則歷歷皆能舉其年月姓名、埜叢說、繆妄多端、一見知其眞贋、甄別淑慝、指陳勝敗、自謂稍有一得之長、雖極無用之事、而性之所好、不能而然、嘗觀足下所賦青野原古詩、豈與過褒斜宅蜀中同時事耶、親歷戰塲弔古興懷、淋漓慷慨、與彼按圖索驥者自異、此又驗足下一著矣、僕食錄不爲菲薄、而昧于經紀、家道窘迫、動至甑塵、此田子之所備知也、況功令森嚴、考索旁午、倦備雁鼎、儲醴耳、延客張宴、雅歌投壺、孔北海之所喜、仲長統之所論、何嘗夢見其彷彿哉、此皆足下推奨之過也、士君子立志、各有所嚮、足下既部武人俗吏、而爵則王侯、富有千騎、不動其心、此其立志之高、所期之大、爲何如哉、司馬德操有云、識時務者在乎俊傑、足下粒誦自娛、詩酒自晦、而所蘊之高之大、人皆不能窺測、而時或寓之筆墨之間、豈當世之俊傑者耶、非耶、僕雖欲以儒自居、而有所不能、前書既致其詳、茲不復贅、白首甘爲武人、而世服其業、此爲士者之常也、幸勿爲怪、百書不如一見、面、何日提手、披瀝肝膽乎、徂來先生拜謁幕府、美譽溢乎海內、可勝慶幸、希叱賤名、致意爲幸、暑劇冀自玉、

源流綜貫序 代成公言

嘗觀周室之興、古公亶父克修后稷公劉之業、邦人皆戴之、傳至文王、其道大亨、遂建八百餘年之基、莫非積德累仁之效也、我祖宗之在參河也、土地不甚廣大、城塢不甚險固、務行仁政、而衆庶歸之、雖中遭屯難、疆圉多虞、而世祿戴恩之士、甘粉其身而不顧、運籌協謀、克復舊業、神祖英武天縱、東征西伐、功烈蓋世、風櫛露沐、身櫜鞬而能尊王室、揭憲章振紀綱、發政施仁、天下翕然化之、天棐其忱、子孫蕃衍、胙之茅土、以爲維城之固、蓋別子之受封、定爲百世不遷之宗、犬牙交錯、磐石鞏固、內有魯衛之分、無吳楚之嫌、葛藟瓜瓞、覃施綿延、割土錫爵、外各爲小宗、義公豫料紹襲既久、昭穆紊次、乃命近臣、撰次譜牒、然神祖事業之大、非譜牒之所能盡、故不敢書、而台廟以下書其梗槩、立爲正統、曰尾張、曰紀伊、曰水戶、三家亞于正統、而其小宗、分爲別卷、以

附大宗之下、越前以懿親爲宗、而越後附焉、支流餘裔以類從、保科氏分派台廟、建邦啓土、彝倫所叙、猗矣盛哉、肅公重命臣僚、增修釐正、及余莅政、考訂益精、歷年方成、取而閱之、則文之昭、武之穆、以至周公之胤、一覽無遺、公子公族、煥乎臚列、天序天秩、粲然不亂、題曰源流綜貫、蓋取諸宋呂祖謙表語也、在昔慶長元和難波之役、威公留守駿府、其任亦大矣、自受靑社、幾乎一百十餘年、闔境寧謐、士民樂業、豈非爲仁之餘澤歟、義公肅公之規摸矩矱、可以垂憲本藩、而總蒙邑繹、不騫不崩、景福鍾於來裔、而奕世昌熾、以傳于無窮、保彼東方、永爲公室之蕃屛、豈不休哉、

復荻徂徠書

鄕聞足下蒙召謁見大城、今聞傳播遐邇、天下靑衿之徒、孰不延領而望風範哉、此人文不降之祥、所關係大矣、欲修一械中賀意、奈事務殷繁、淹過時日、六月初旬、因宜汎鄭致足下五月望日二書、薰沐莊誦、甚愧率意縷縷、不棄鄙陋、辱論近考歷代度量制、因讀朱氏談綺、載朱文恭論明三等尺、前後說頗相牴牾、其書係僕所錄、當識其由者、談綺乃亡友野燕齋所纂、僕承先侯之命、上梓而已、其故粗載序中、尺樣雜錄、注記頗欠詳審、當時泛然不注意、宜足下之致疑也、大抵文恭所用周尺、比本邦曲尺、七寸三分强、卽明之裁縫尺六寸四分弱、而裁縫尺比曲尺、長一寸五分半是也、律原發揮、載和州法隆寺所藏尺圖云、自魯般家傳、以至於唐、聖德太子傳之本邦、想足下亦當看之、憲廟時、法隆寺僧[illegible]寺寶古物、來襮於東都、先侯招之邸中、使陳列寶器以觀之、僕面聞僕云、此周尺也、不言魯般事、異於談綺所載、而比曲尺短一分半、豈魯般周人、傅會爲之說耶、遣隋使小野妹子所將來法華經、亦在其中、則所謂周尺、亦或妹子所齎來者歟、果爾則足爲準據、此方以三十六町爲一里、今文所不載、未審其昉於何時、又聞尼僧家、相傳唐升、以弘安時升校之、當六合五勺、未審弘安時用何升、建武之亂、凡百制度皆淪、是必官家制也、僕嘗與修大日本史、於斯二者、必有所考、謹聞命矣、二者不書於紀傳、所書於志、而志稿未

成、無所從而類聚矣、戶令有以五十戶爲里、田令十段爲町之文、而度地之法、五尺爲步、三百步爲里、以三十六町爲一里、則並無其文、又有以三百六十步爲里者、然則當時其數、而以三十六町爲一里乎、蓋後世所定之法、而非延喜以前之制、何以知之、延喜式、刑部省以伊豆安房等諸國爲遠流、而伊豆下注云、去京七百七十里、姑以箱根爲程、以今里數較之、則自京師抵箱根九十五里、如式所云、則近於以八町爲一里、他國亦準此、而與今里法迥異、凡校人民民課調役、昉於崇神、而備於孝德、初造戶籍、定田畝之法、在大化二年、令文所載是已、文武大寶二年、始頒度量於天下、元正養老元年、定調庸斤兩及長短法、舊史書而在別式、而別式不存、延喜式補之、而不書其制、蓋天下通用之器不足書也、三代格、仁明承和十一年、罷諸院權量、用權衡、然三代實錄、清和貞觀九年、始禁常平倉所出官米於東西京、米一升、直新錢八文、則納以權衡、出以量、亦可推而知也、意者先王所制之升、歷世因循不改、而吏或因緣爲姦、故後三條帝欲審量制、新作之器、量殿廷沙試之、因取穀倉院米量之、世以通行、謂之宣旨升、載在愚管抄、東齋隨筆、其後不聞有所更革、豈弘安時升、即所謂宣旨升耶、今世所傳、昔升武佐之類、未知異同何如耳、律徒所言、必有所據、而非臆空爲讀者矣、伏著十倍三伏、希自愛、

追憶、幼時嘗記文恭說、一升之米、其重百九十二錢、此或可備考據之一、

又

物有由微而顯、自小而成大者、僕於足下書若請得是也、初聞足下盛名、謂其一番半行書、不易得者、忽緣田宜汎請作野亭記、賜書見拒、責其名之奇僻、不免歎後之譏、粗及宋人文章不識體、豁然開悟從前之非、既矣、中讀蘐園隨筆、間謂足下尊信程朱、又賜書示知足下專讀古書、且不涉東漢以下隨筆、譏斥劉闕氏、非足下之定論、因及宋人不習讀數事、僕始讀之愕然、平心再讀、服其卓見偉識迥出流俗、因問神主牌子孰得孰失、乃蒙復札、詳論牌子之合禮、又幸矣、然處舊主之方、不知專宜、故敢請問、足下不厭

褻瀆、乃以心之所安見告、何其切偲之至也、制禮傳禮行禮三者之說、詳審精覈、浩博深遠、所謂儒者之禮、一與仲尼精規相似、程朱鋼不離理障、未流之弊、遂使西河之民、疑女於夫子、辨駁切至、愈服其卓見偉識、不可企及也、蓋足下之爲是書也、神思迅速、宜若不經意者、以僕寡陋觀之、則大議論大文章、非平日講論有素、則雖大手筆、何能率然揮毫、應之如響哉、至於結末數語、習於世俗之禮者、不以程朱所定爲安、亦猶僕以程朱之制爲安、則剴切精當、如徐扁之鍼砭、豈非幸之又幸者耶、夫野亭命名、至微至小也、得知聖人制禮求合人情之旨、則頗顯頗大矣、由是而推之、能進而不已、則得聞至顯至大者、亦可庶幾焉、但桑榆既晚、志氣衰耗、秉燭之光、不可復望、徒悵然自失耳、昔楊子之說鑄人、設辭也、今老圃之獲昌言、實際也、敢不拜命之辱、謹謝、

答百拙和尙書

春間方接客秋回翰、詞意鄭重腆篤、溢于言表、領謝有餘、圭齋兄屢報、和尙日會諸友唱和、動輒成堆、時時寄往詩稿、道候泰寧、曷勝欣慰、溪陰老宿、放行自在、固本分事也、但和尙爲有文字宿因、到處結果淨業、亦爲可羨耳、嘗示景山屈兒唱和十五首、感荷盛情、留讀誦之、爽暢逍遙、一洗塵土腸胃、六甲十二屬等諸體、競妍鬪奇、念奴嬌一闋、尤淸麗、僕固陋寡聞、寂音以外、未之多見、益可珍也、前書辭作幽客言序、又諭促之、至以筆劣於太沖、而文慚於玄晏爲譬、何謙遜之過甚耶、僕今春被寡君之優勞、劣減職務、專修志稿、不意老朽再與新進輩、並驅爭先、考索勞年、日不暇給、筋力衰憊、奉答至今遲緩、已爲罪戾、況綴文字塞責乎、又有微意存其間、故忘僭瀆、略陳其由、大抵物不兩大、有盛必有衰、曩時室町將軍、甚崇禪法、名流輩出、選闕君之名、必卜之於夢窗塔、而蔭涼軒主、干預政事、通謁弄權、季瓊日錄、遂與日曆起居注同科、可謂盛矣、而又由此衰焉、趙宋宰相富彥國、呂晦叔、皆好禪學、而正獻尤甚、覬覦僥倖之徒、至有禪鑽之目、近世濃牧秦翁保山二公、亦頗好禪、繕修伽藍、延接衲宿、其法寖盛、趨時附勢之士、未必不有禪鑽

之類、當二此時一南源高泉諸公、雖下以二詩偈一誰上于二蘖由一、而未レ聞レ有下一韻遂至二半千一者上、古今禪伯之受二知遇一、無レ過二新笑隱者一、身爲二釋教宗主一、居二龍翔集慶寺一、所二與交游一、皆一時名賢、著述極多、然亦未レ聞レ有レ之、則和尙此擧振古所レ無、可レ謂二光前絕後一矣、嗟乎使三和尙住二持名藍大刹一、公侯牧伯、日踵二其門一而問レ法、禪鑽之徒從而獲二揚之一、則雖二欲遂宿贍一乎奚暇レ爲レ之哉、唯其閑散蕭寂、棲二遲水竹閒一、徒與二騷人墨客一游處、故賦詠之盛、遂至レ如レ此、區區之心竊謂二詩之盛一、禪之衰一也、無限低回、無限感慨、有下不レ可レ形二于筆墨一者上、前書所レ云恐犯二不韙之罪一、故不二敢奉一レ命者、誠以レ此也、冀和尙亮レ之、南湖屈兄想今還レ自レ勢、相聚又多二一番唱酬一、他日不レ吝二投寄一爲レ幸、嶠陽慧レ序、秋暑酷烈、近乎安否、伏祈二自嗇一、

大田氏家譜序

族譜之不レ可レ不レ講也尙矣、譜不レ明則族不レ親、族不レ親則彝倫斁、故古人往往作二族譜一、以彰二祖先一、亦所二以垂二憲子孫一也、靜軒君生レ于二閥閱之家一、爲二大田氏之胄一、其考空山君、英勝院大夫人之從姪也、大考源七郞、雖レ爲二嫡長一、病不レ能レ仕、寓レ於二本藩一、弟道顯公以レ有二器局一、大與二門戶一、歷二仕四朝一、受二方面之任一、於レ考爲二叔父一、故視レ考猶レ子也、考有二才能一、儀容秀潤、宜下在二幕府一管中轄樞要上、而仕二本藩一者、大夫人之志也、大夫人鞠二育威公一、恩埒二所生一、故義公敬而慕レ之、至レ老彌篤、覺近二侍西山一、親見二其事一、猶二隔昔一矣、君以二威公之外孫一、傳レ於二肅公一、操履端正、與二聞政事一、告レ老致仕、慨然有レ志レ於レ作二家譜一、故使三府儒生熊長守、及覺、撰二定世次一、上標三氏族之所二由出一、中記二道灌公之武功一、下述二大夫人之事迹一、以彰二道顯公之勳績一、欲レ使下子孫世篤二忠貞一、而不レ墜二家聲一、永與二本藩一、同中其休戚上、不二亦美一乎、覺往年在二東都一、曾拜三道灌公之像於二金剛寺一、遺風餘烈、俾二人欽仰一、辛丑之災、忽成二灰燼一、而禁錄叢說、載二公之事業一者、率多二舛誤一、故今釐正而筆二削之一、庶使五覽者足四以知三其智算英略傑二出一時一、而含雪泊船之隆盛、與二天壤一不レ敝、則像雖レ亡而猶レ存也、君使三覺辨二卷首一、固辭不レ允、區區之心、竊謂、君之此舉、敍二彝倫一、以敦二九族一、誠有レ合レ於二古人親レ親之義一、貽厥之謀、可レ謂二深遠而周摯一矣、故因二其請一

叙レ之、

大田靜軒壽藏碑

君名資眞、源姓、大田氏、空山君之長子、大考正重稱二源七郎一、備中守資宗之兄、而英勝院大夫人之姪也、事詳二家譜一、妣長壽院、威公第三女、下二嫁空山君一、以二承應元年十月十八日一、生二君於水戸城三丸第一、小名內膳、改二稱新藏一、近二侍義公一、寬文十二年八月考致仕、繼レ家領二食邑二千石一、累二歷顯職一、爲二肅公傅一、與二聞政事一、元祿元年十二月、叙二從五位下一、任二對馬守一、後改二丹波守一、三年九月、罷二執政一爲二家老一、君素多病、請二辭職一、優命聽レ之、十五年六月九日致仕、號二靜軒一、娶二井上源藏政春女一、生二子萬助一、側室生二一學一、肅公命使レ爲レ嗣、無レ何夭、二女亦殤、養二甥資富一爲レ子、叙二從五位下一、任二下野守一、享保六年六月逝世、君請下養二其族備中守資矩子源二郎資胤一爲上レ子、參議公特命允レ之、君稟性謹愨、沈重有二風度一、擧止可レ觀、雖二閒退謝一レ事、而屹爲二府下元老一、今玆、君年屆二七十六一、神志不レ衰、豫建二碑於本法敎寺先塋之側一、使三覺粗書二其履歷一、蓋倣二壽藏之制一、以樂二餘年一、亦古人之志也、

天然不雕園記

園木可下以任二其自然一、蕪穢而不レ治、蔽塞而不中闢乎、此子路南山有レ竹不レ揉自直之說也、可下以從而脩二飾之一、矯揉造作而梏中其性上乎、此儵忽爲二混沌一日鑿二一竅一之說也、唯其除二榛莽一、芟二荊棘一、剪二去惡枝一、而扶二植其雕披屈曲者一、則雨露之所レ潤、枝葉之所レ長、養得二其正一而不レ失二其性一、方爲レ得矣、昔柳子厚記二永州之山水一曰、剷二刈穢草一、伐二去惡木一、烈レ火而焚レ之、嘉木立、美竹露、奇石顯、爲二園池一者、可レ不レ思二其言一乎、余友野內子善治レ園、廻環列植、位置幽邃、延袤不レ盈二數畝一、而有二穹谷嵁巖之勢一、柳軒叟過而觀レ之甚適、名レ之曰二天然不雕園一、野內子喜而託レ余、請レ爲二之說一、余應レ之曰、叟之言善矣、然天然不レ雕、近レ於二子路之言一、修飾而雕二斲之一、則陷レ於二蒙莊之寓言一、二者何居、子善擇レ之、子與氏曰、所レ惡レ於レ智者、爲二其鑿一也、如智者若二禹之行一レ水也、則無レ惡レ於レ智矣、子能三復二此言一、則不四唯用三之於二瑣瑣園木一、亦可三以知二智之大者一矣、

書二忠義碑陰一代二大石良丸一

往年近衞家、命下大和守進藤泰通、勸二君之族良丸一、

建之碑、使水戸府史臣栗山愿撰碑文、文成而碑未成、非慢也、相時也、今距君之死二十有五年、良丸與君之姻戚左馬頭進藤長富謀、而鐫之石、准后家熙公、偉君之事、親灑翰篆、書忠義碑三字以賜之、今其時也、哀榮之至、冀垂不朽、享保十二年丁未月日、進藤長富大石良丸立、

賀室鳩巣壽序

享保丁未之春、鳩巣先生、躋古稀之壽域、東都之彥、咸贈詩文以賀之、覺僻在東海、不得稱觴於先生之堂、深以爲憾、或咨之曰、子蒙先生之眷久矣、何其恝然竟無一語之稱頌之耶、覺應之曰、子陋矣、東都文人之淵藪、追琢其章、非金玉其相者、何可勝數、今賀先生之壽、非詩或文則不可也、自揣其分、詩則孱弱格卑、不入時調、文則材匱器鈍、不能古雅、與其言而不當、不如箝默之爲愈也、吾百事不能、而唯知養菊、培植三十年、頗能得其要領、子姑待之、吾將有爲也、炎涼代謝、菊花既開、聊捧數枝、係以序曰、

百卉之華於春者、雖妖冶鮮麗、晃耀一時乎、皆輕脆而易壞、唯菊則不然、堅操貞節、曠日持久、大率菊之性、抽芽早而著花晚、春雨分苗、夏日澆灌、至秋而扶植、涼風膩其葉、爽氣勁其幹、及其孳苞、則扶剔瑣微、而留其中心、白露爲霜、花正盛開、故能豐穠璀璨、瓌偉磊落、凜乎秀色、凌風霜而不彫、培養凡歷三時而吐穎、謂之大器晚成可也、其名著於周官月令及離騷、魏晉以來文人墨客、播於篇章、世所共知也、鳩巣先生在鄕閭日、夙彰聲譽、其猶菊之苗而秀者乎、壯歲游于恭靖先生之門、孳孳勵業、溫潤粹雅、薰人以德、其猶菊之在培養乎、既而學究天人、才貫古今、聘于賀侯、敎授三州之士、君臣道合、上下輯睦、豈非得展其所蘊耶、令聞遐暢、福祿未艾、安車蒲輪、竟蒙幕府之召、未幾奉旨近侍西城、咫尺儲闈、出入崇賢之門、起居資善之堂、贊翼之美、日就月將、其猶菊之在秋、霜葩煙蕚、珠輝玉潔、不與群卉競艷、而自然超軼於衆芳之外乎、蓋培養久者、晚節益瑩、豈與春花浮艷者同日而語耶、抑又聞之、菊以黃爲正色、在坤之六五、黃裳元吉、敢汲南陽之流、以爲先生之壽、

右澹泊齋先生文集八卷、寛政壬子秋九月、謄寫校合卒業彦、

觀瀾集

一將軍傳私儀　己丑春

史其著實云也爾、紀之以敍帝王終始之實、傳之以覈臣庶善惡之實、至其全編爲製、亦將以列一世體勢之實焉、而世之勢不能無變、故史之例不能無異、政綱之所以張弛、人心之所以逆順、制之沿革廢置、而運之隆替合散、要當義起意創、有所遷就而指健之、而後百千載事區分領擧、瞭然視諸指掌之上不可適也、始非立異而然也、而亦非襲故之所能得也、是以周時封建、降爲七國、而司馬遷世家之、漢初遵其制、置諸侯王、旋置旋絕、及推恩令行、等班列、而班固併而傳之、晉有五胡、入據赤縣、而載記之、唐有諸州節度使、阻兵拒命、而藩鎭之、五代天下無定主、割據分裂、士之措身、各殊所嚮、則本紀世家、純雜一行、悉備而詳分之、世之相移變已如是、作者之繼起、異同又如是、而如吾邦之未造也、上有天子、下有公卿士庶、而中有所謂將軍者、其官則受之朝命、其位則在于臣列、而凡天下土地財租、皆自有之、置守署吏、征討生殺、至廢立大事、又皆自專之、周漢迄宋元、君臣事蹟、未見有之類焉、則欲列其實者、安膠膠牽附、一倣異邦、沿前史可得哉、今議自源賴朝、至足利義滿、抽輯敍排、名以將軍傳、置諸傳之後、第一行書史幾卷、第二行書將軍傳、第三行書姓名某、而第四行乃傳正文、如其族屬臣隸、分收源守邦與義滿之後、如源範賴、足利直義、北條時政、高師直之類、第二行所書將軍傳、下沖數字、注家族、如家臣、予初議、直書將軍家族、如家臣傳、而錯綜駁、如此守邦之下、既敍範賴時政等、爲將軍家族家臣傳、至足利尊氏、復標以將軍傳、錯雜不貫、不若自賴朝迄大內義弘、冒以將軍傳、至家族家臣、於下註之、猶唐書藩鎭傳下書魏博澤潞之例也、此說最爲穩當有據、其將軍之何、擧世襲之職、以見武人擅權也傳之何、先世無制、時王不命、不其自建國與諸臣相異也、或曰、將軍宜據史記五代史宋史、建爲世家、然世家必天子所封策者、史記是也、上無定主、擅興有土者、五代史是也、時主未起前、已割據成者、宋史是也、如將軍、固不與宋五代例同、而先世無侯伯之制、時王無封策之命、徒乘朝衰、劫取蠶食得之、雖則其勢不止有國、遂併天下、而有之、而其分竟不容得與諸臣相異也、此又史記之所以不可沿也、置之諸傳之後何、上與列帝紀抗、人臣而行天子事也、家其族臣何、天子不得而召也、厥然而後與夫創世家起藩鎭各有所建者、例不同而義綜契、而吾邦沿革張弛

之體、與二逆順合散之勢一、既已掲如二日星一矣、其豈好レ異而爲也、夫周室全盛、禮樂征伐、自二天子一出、春秋之道、常行レ于レ世、自二東遷一德日廢、諸侯恣レ命、政及二大夫一、春秋之書、于焉筆削、則元暦之後、將軍之事、豈不三三致レ意擇二其謹嚴一、而所レ謂春秋亦曰、正二其迹一而著二其實一矣、實著而亂臣賊子懼、

二 讀二本記一 庚寅冬

書以記二帝王之跡一者也、而春秋以記二帝王之法一、者也、故本紀併二則此二一、備而簡、明而要者也、遷固以來爲レ紀、舉二其言動一、以具二左右史所レ記、固得二典謨訓誥之制一、足レ示二各帝終始一、然徒知二編年繫日之可一レ徴、而於下夫褒貶大義、取二決一字一者上、憒然後而不レ講既云二大缺一、乃至二體裁所レ措、事辭所レ屬、不レ能レ不三由以涉二泛猥一、可レ憾也已、至二五代史一、則務爲下微レ顯闡レ幽、扶二正道一、抑中亂賊上、矻矻刻意、以述二筆削之旨一、此其所三以大出二諸史之陋一、而第其不レ知二紀乃帝王之傳一、而爲レ體、不下與二舊史一同上、是以有レ綱而無レ目、曖昧曠抉、難滋阻絶、使下讀者必求二之諸ヲ傳而後可中得推上、不レ可レ爲二紀之得レ全者一也、余又於二歐陽氏一有レ憾焉、仰二古之所ヲ則、而審二後之所ヲ弊、其述二帝王一、豈可レ不レ愼哉、

三 讀二桐葉封レ弟辨一

唐柳子厚辨二桐葉封ヲ弟、以爲、周公聖人也、王弟當レ封、宜レ不下待二一戲一而後成上レ之、不レ當レ封、何敢成二其不レ中之戲一、以レ地與レ人、且云、設有下不幸王以二桐葉一戲上寺、亦將二舉而從一乎、設求レ得二其當一、雖二十易一レ之、不レ爲レ病、文辭嚴緊、意味切至、後世周公不レ成レ戲之議定、然以レ予見レ之、知レ有二未レ可者一也、禮云、言則右史記レ之、動則左史記レ之、書云、懋二乃攸ヲ績、睦二乃四鄰一、以蕃二王室一、以和二兄弟一、由レ此觀レ之、則天子固不レ可レ戲、而有レ弟宜レ封、故周公曰、天子不レ可レ戲、而遂成二之封一、若夫寺人不レ可レ封矣、已封レ之而後易レ之者、必周公也、而彼亦知二十易レ之不一レ爲レ病、何以知レ之、出レ於二戲動一也、王弟當レ封矣、已封レ之復易レ之、可乎、自二易レ之之後一、視二已封之言一、非二戲言一而何、周公於レ是苟焉者哉、彼遂不レ知レ之、然則周公實成二桐葉之戲一者也、周公之成レ戲、所二以禁ヲ戲耶、何傷レ於レ聖乎、

四 莽大夫楊雄論

均之罪也、常ハ則輕、而儒者則重、以下其無智胃行、姦

狀可レ蹤、而戮二一身一、與下知而爲レ之汨以二僞詐一、蔽中當時上、迷二後世一、以敗二人心風俗一無レ所レ窮也、自二孟軻荀卿之沒一、以二道德仁義一自唱、而天下從而稱レ之者、獨爲二楊雄一、其上稽二詩書一、下師二孔顏一、脩卿思惟、極レ深研レ幾、含明二倫理之要一、而正二禮義之則一、執爲二規矩準繩一、欲三以修レ己治二人者、固宜下擧二一世一贖二千載一之不上レ得二庶幾一、雄曰、大器猶二規矩準繩一、先自治而後治レ人、而乃食二漢之祿一、服二漢之官一、以仕二簒レ漢者之朝一、如二拔レ屋而徙一レ鄰、頌レ德稱レ美、被レ黜復出、汚辱之聲、至下載二道路一播中謳謌上、語見レ史、而頽然不レ耻、於二凡忘レ恩棄レ恥之行一、莫レ所レ不レ爲焉、則知而爲レ之之罪可レ惡矣、雄之爲レ人、恬蕩無レ所レ主二於內一、則似二無爲寡慾一也、語見レ史、悸慄不レ能レ振二於外一雄驚恐投レ閣、則悸慄之性可レ見則似レ不レ爲二富貴貧賤所一レ移也、語見レ史、事二雕蟲一、求二奇字一、爲二艱深迂鑿之詞一、而行二空虛泛漫之思一、以挑三名譽於二喬遠之外一、則似三好二古樂一之道也、語見レ史、力探二陳編一、而窺二摸聖語一、法言欲三以似二孔子一也、飾二卦氣之賾一、而倣二易道之妙一、太玄欲三以似二義文一也、凡其所レ爲皆似矣、而非レ眞也、若レ紫若レ莠、若二哇咬之於一レ樂、若二碔砆之於レ玉、混淆繆錯、疑眩不レ測、卒使下觀者仰二其行之與一レ言、以爲中至道所上レ在也、而又其造二誕大誇詫之說一、揚然恃而據レ之、用以仕レ莽、則曰、君子得レ時則大行、不レ用則龍蛇、此本雄非二屈原一之語、其任レ莽亦以二是意一爲獻二美新一則曰、可下於二吾淸靜寂寞一無上レ所レ傷、作二符命一則曰、可下於二吾寂寞一無上レ所レ傷、淸靜寂寞、見二解嘲及史一、可レ左可レ右、道而不レ窮、又將使下觀者論謂而煩レ乎レ小、全レ於レ大、巨德之擧、非乙纖人之所甲レ擬也、汨以二僞詐一之罪、益可レ惡矣、至下爲二雄所一レ誤不レ知者上、則前有下桓譚稱二其絕倫一、侯芭執中弟子之禮上、後有二韓愈與以二大醇一、予嘗謂、君子固不下以レ人而棄上レ言、然稱レ雄以二大醇一、得下與二孟荀一並係中於二列聖之下上、則韓子不レ爲レ無レ過矣而忠孝誠實、如二司馬君實一、亦註二其書一、玩二其數一、推二尊之一如二聖人一、其論二當昔之士一、以二襲勝一比二夷齊一、辟方詭辯、且不二妄可一、論見二通鑑一、而至二雄失レ節、茫如レ不レ省、向使三天下之議盡如二君實一、則宋滅元起之間、不二卑而爲一レ雄者幾何矣、是其蔽二當時一迷二後世一、以敗二風俗人心一、罪豈不二益可レ惡矣哉、余故曰、執二春秋之義一以正二兩觀之誅一、所レ責固不レ在二列侯宗室金張許史之裔驕レ首事レ賊者一也、亦不レ在三賣レ國之孔光王舜與二貢レ諛之孟通哀章一也、而必在下以二道德大儒一自處之雄上也、則特書以二莽大夫一、又繼以レ死、其罪當矣、噫姦賊之可レ惡者、莫レ若レ莽、而僞行之可レ惡

者、莫若雄、若爲君、雄爲臣、過亦奇哉、

奉賀大執政松平紀州公五秩壽節序

猗我國家之氣、何其盛也、其創業也遠、其積德也厚、伏信義之名、秉不殺之柄、來則取、去則不追、浸漸包羅、功烈四震、而彼強梗殘虐虎負鯨吞之徒、逡巡以就殲滅、雖乃鮮蕃虬洲、爭飭使聘而服陪藩、九有之民、茲以蘇矣、然後承以重威累德、寬裕恭順、保綏之道至而安利之盡方、其公進退時勸懲以勵群工者、固已備矣、而公將謂、材者國氣之英也、我願采銓之益精而激作之得術、抑無淫風靡俗以蕩之邪、而無虐刑繁制以剝而縮之邪、三綱四維之或弛也、八政庶職之或隳也、外之諸侯守度、尚恐撫馭之易緩、遠之裔夷奉職、尚恐懷柔之易失、建夫雨陽時愆而年穀告歉、則又以其輿閭里之差、招精祲之[illegible]爲恐、凡大體所關、當經晝翊贊、陽開陰闔、以就中和者、擧而在乎公之心、聚精會神、夙宵不忘、以之出臨政衙、以之入坐清寢、以至一呼一吸、莫不與國脈相貫也、則所謂扶輿龐鴻者、方將激射封殖、厚集一身、以使其壽之永、綿連渺邈、如岡如阜、屹然必成柱石之任而不磨焉、此蓋公以股肱自處、俾勇智兼濟、紀綱張而軌度昭、又有一德相與開闔盪激之士、乘運遞出、爲之佐弼、所以調理闡揚維持而樹植之道、莫有不盡、卒使百年生齒、胚胎茂育、以聊其生而遂其利也、則天意之所豫、人心之所欣、鬱鬱然如雲始出、盎々然如川方至、播爲扶輿、結爲龐鴻、衍爲綿邈、將亘億萬斯年而不見其所涯焉、盛矣哉、伏惟大執政松平公、紬自輿國、蔚開世胄、英爽雍粹、忠靡夙植、既與自期而挺生、加之好學尊道、觀於往聖之訓與述古之籍、鑒其治否、以施有政、爲日已久、値其歲之選、入以膺重任、掌大權、固其所矣、方今者皆持化、俊乂在列、所以爲天下慮、深遠周徧上下和而遐邇靖、蓋其任循良省徭役、以流德意於下者、固已普矣、而公將謂、民者國氣之本也、我之志、而天地神人之所昔佑也、是歳公登日[?]、華且届期、令胤佐州公　將爲展慶賀、廣孝敬而自藩下搢紳府中文儒、多獻壽章、歌以壯之、顧公之壯時、海内人士仰望風雄、皆謂其將進任、而遂尹上都、表四方、居之久、治績著聞、令輿載路、

皆謂其將內遷、而遂陞令職、以贊機務、每有所期必無不驗矣、則某之敢推其志、以期其壽於黃耇無疆之外者、亦豈不驗如龜卜而數計也哉、故述爲序、以助其頌、詩不云乎、其德不爽、壽考不忘、　正德乙未歲、

賀小宮山路齋五十序

古之爲治也、將以推其利於四海而徧之、制田里授資業、不奪時而擾之、不厚斂而困之、勞徠保育、以遂天之所生、夫其以不忍之心、而行不忍之政也若是、則天下之人亦必不忍其上、依戴尊親、唯恐其有位之不久、傳世之不延、而當時臣工輔助奔走、以承上德流下化者、亦爲天下所倚賴慕悅、唯願其莅職之不替、而保壽之罔極、天下思而祝之矣、雖欲無福其可得乎、古云、愛民者、必有天報、此之謂也、後世或不知奉是道、鄙瑣貪殘、以專利於一人爲務、而又有姦吏小人、百方附益、以媚于上而肥于己、就天下之口而奪之哺、逼天下之膚而褫之襲、至使其妻子憔悴、閭里蕭條、終年不復知有生民之樂、夫其自怨而忍乎上之若是、故天下之人亦將忍其上、而特以其使威藉法、劫而取之也、是以心怨腹誹、控訴無所、强者寧逆爲盜、弱者寧殍于塗而止、則鬱抑之極、天必代而譴之冥冥之中、世運日促、禍機潛臻、以陷覆國敗家之患、蓋不於其身、則必於其子孫焉、古云、國之亡也、豈以民爲土芥、又云、與民爭利者不免於禍、豈可不信也哉、惟國家之事廣矣、元相統之、百司分之、至凡百所需、則悉委於計局以辦之、而計局又課於郡縣以徵之、奉乎上取乎下財利之要係焉、所謂政之不忍人與否、皆由此而出、則居是職者、雖一命之賤、苟有以存心於濟物、其益民不淺鮮、而況莅正官任副參、論議經畫、以總四方之貨賄者哉、[illegible]之貞甚小宮山君雅好古讀書喜聞仁義之說、其所以奉公、廉而不劌、和而不汚、以周旋乎財計紛紜之日、而體恤民隱之志、不爲少移、幸今明主新臨、治具更張、節用之大本既正、而愛民之實政將興、當之時也、益以展力効慮、扶誘上司、而推行德音、與共徧此利於四海、有以助夫無偏無陂之化焉、則上之所以褒而錫之、與下之所以言而祝之、並集乎一

身、而五福之凝、可不待稽而知矣、此予之所以敢述古人之説而奉君五十之賀也、

七 小學備考序

小學之書固所以敎幼士也、而經壯至老、所執之業、隨時而異者、亦於其孝弟之常、言行之庸、益以加篤而致謹、不容一日忘其初、苟德振民之道、實因是而立焉、譬之樹長至百尺、柯分萬條、其根自若固存、而發達暢茂之氣必由是興也、予故曰、不失赤子之心、而後能爲大人、不失小子之學、而後能爲成德、蓋古之從事郷學、習熟業成、然後升于國、以服于政者、猶且莫不由乎斯道、而後世學士大夫、乃視以爲小子之事不足爲也、師之所以敎、弟子之所以學、並皆務博靡而羨功利、馳高遠而涉支離、其或議朱學以支離者、亦不知自陷苟簡虛誕之罪、吾輩恒以耿々有所愧焉、貝原損軒翁、嘗以儒者稱于海西、其所著小學備考、行世已久、逮晩自以有所不滿意、授旨於門人竹田子、以潤削之、時以年八十有五告下世、而竹田子亦克勵精研慮、積歲月之功、以成其命、或博取諸家、或參以翁及己意、訓示詳審、考據該確、大足以爲本書羽翼、師資之可謂勤矣、惜嘗成童讀所謂考者、得以解一篇大義、自當時受賜甚多、而及今之改正一新、來請其序也、予年已邁強、鬢髮皤然、不及見損可言、而得過竹田子、乃願以求中間幾十歲之所學、其於德行道藝、果何所得益、豈只獨善、爲終身之用、不忘心自監、又遵吾平生之所懷以自戒、蓋猶以成天下之爲學而失其本者、是予之所以應其請之求也、享保丁酉春、

八 凜生錄序

古之能臨其節、甘而趣之世、其心未嘗有所期於天下後世、而義之當、誠之至、自以爲當無愧怍者、既已毅確軼拔、煒燁燦爛、金石同堅、日月爭明、喬嶽洪河均融結、而並流峙、究其隆厚悠久、所抵無疆、是其爲氣、固與天成體、不待知不知以旺耗起滅也、而去百代、阻萬里、有好是懿之不自渝者、或弔比干子幽宮、而或招屈子于重淵、洞悟感歎、若身踐其事、與其危慘、則忠魂貞魄、亦揚精爽於汗青芸馨之上、肅々如有襲、以至如有觸以聲、豎子毛髮、酸子鼻、淸爲涕洄、而

恍爲夢寐、擧其居刳汩沒仰白及委流波之狀、宛乎在目、是其爲氣、特與人成體、待能慕不能慕、以隱顯而聚散也、譬則祖考精神、雖在上靡陰、而其烝蒿昭明不可蔽者、必賴子孫孝奉之誠、憑以凝象也、無是則亡矣、士之欲欽於古者、豈可不反省而自盡乎哉、今之於史何取、取記故事而已也、把析簡、玩陳言、嫩惡芳臭、驅供涉獵、此謂齋屍積校鬼錄亦可、而讚侯文學爾森子、獨讀紫陽綱目、於諸節義之事有感焉、於是併女流、採凡六十有一人、晝誦而夜思、冊列而案奉、圖以景仰弗忘、銘以凜生、則用心之正、抽精之切、閻足以起伊人于九原、髣髴可見、名亦稱矣、雖然予始之名之、意將推跡於彼而請予作序、專以要實乎己爲言、其相爲異蓋亦在習而不察與尋而未返耳、則及一旦之能悟也、益自惕發祗聳、以對在古不遠之斯且厭、而念慮之微、亦自有所恥而不敢、莫所愧而必爲、遂將擴充四達、顧視泰然、以韜韓蠑磅礴之烈而展淸明和順之德于今治平時、且不已焉、勗諸、正德甲午夏五月、

九保建大記序

六國史無褒貶、以其時淳事簡、皇道行於上下而自不知也、自世之季、政綱漸弛、民心日詐、僭踰姦軌之徒、纍々接跡、而載而筆之者、日紀日記、日錄、日抄、日鑑、日鏡、日語、率皆撮王廷之泛故、裒瑣府之冗務、祠理俚淺、敷衍擾雜、眞僞俱昧、要之朝報吏案而已矣、傳奇小說而已矣、是敍事且不成、尙奚在能勸善懲惡以衮鉞百代也、特北畠家有神皇正統記之編、揭威憲而振頽風、辨系緒而斥閏僞、黨義卓識、本諸思君憂時之誠、其書雖略、其言雖儱、實始可與言春秋遺意、而輓近學降于士庶、撰著頗多、其間亦特得潛鋒子保建大記、擬續范氏之鑑、取言朱子之綱、致敬畏于君心、謹禮分于臣道、忠邪不遁、終始可繹、以至攻之得失、事之是非、皆斷以古義、信其推本貴正、愛說名教者、固足與源淮后之作相亞、而措辭之嚴、行文之雅、逈已度越昔人矣、教從事徃精者皆能做子用心、引而伸之磨而精之、有以窮夫深切著明之至於廣記備吉之上、則史之散、幾可漸收歟、予未冠、伴讀故彈正尹八條親王、著之以上、後仕水戶侯、掌彰考

館事、修史之暇、撰輯詩文、出以見示、余以頃子同邦其官、學略均趣也、平素款甚、承其所論毎相投意、但其所謂以神器之在否、而卜人品之向背者、議竟不合、不合者纔、、而合者皆是則益足以見不阿而同也、嗚呼子之沒既七閱星霜矣、嘗有序言送余西歸、褒比以豐城之劍、余也抵今未自知其斬蛟切玉與否、而子之鋒、既埋幽石、而論窮原、錯鑠泯不復起、獨其議論確偉之氣、文章鎮發之光、時或勃然起、閃然動、以冲東南斗牛之躔者、賴有此編在焉爾、値其子弟來請序、悼然以書、正德壬戌秋、

十　送雨森子歸對馬序

用不用勢也、成不成命也、人見其不用不成、往往自怠所務、棄壞弗惜、終以無成而歸於無用、可歎也哉、余也少時、聞古之聖賢、明道樹德、必藉文以行遠、則謂此可務也、乃取秦漢以前、叙禮義、述性情、道功利之說、兵陣修養、如梓匠矢函牛醫狗相之書而觀之、背內有所見、外有所期、蘊之於心、徵之於事之久直熟、而後一舉出之、滾滾來、滃滃湧、井井泒、而澎湃淙潺之響、瀾漪洄洑之狀、豈以驚百世耳目、俾操觚懷槧、務爲摸擬者、自服以爲不可企及、則可見其言之必由乎氣、其氣之必原乎志、不徒虛張而僞飾也、自是之後、得其道以命世者、在唐爲韓柳、在宋爲王歐蘇曾、皆能致其由而詣其極、有倫有要、源委相比、雖其學之有偏正淺深、而要之原乎立志、中乎布氣、而終乎達言、生今之時、欲學古之文者、不可棄之他求、而專業之士、專巧其言、流而不返、宋明之士陰衒言、陽假氣、猶之醉夫多語、而優人善笑、閃然合、揆然散、其中索無有、吾恥爲焉、若夫我邦之所以爲文、則何其立志之卑且陋也、蓋自廟堂燮理有司籩豆之務、於所謂文、一無所關、上固不以是取士、士亦不以是自進、名爲文士者、大率求以備一時之須、而營斗食之利、其勢不免綴陳腐比字句、略取意義可通、以供俗目、而進而諂之、亦皆爭巧鬪靡、雕琢餖飣、扼腕與其徒角勝而止、則若余才疏質弱者、傍見其不用不成、與之相牽而去、日淪月荒、寧讓他人而爲之、及起而觀天下、其克立修身經世之志、發正大光明之氣、以與八家之

蕆之朽骨與一時之陳跡、猶且存不忘乎懷、況
推之於父子夫婦之際、情性理義之資、以支持乎久
物之美、立身行道之盛、其豈無有藹然相好、不能
自己者、以來往於彈鋏夾冶之際乎哉、是乃天理
之自然、人心之固有、可顧而服、非可叛而離、雖
欲離亦不可得、則師之門必欲不居者、亦自累
也、陽必爲不去者、亦自拘也、雖其迹之遠且深、
而適將遠一寇者、追尾夾擊、以劫悔心乎一朝焉、
師之迹無乃窮邪。如夫吾之道也、樂不以將、若
不以迎、率其性而居其安、謂之聖、閑其邪
而存其誠、謂之學、師若來、則我豈麾之哉、往
矣、正德辛未春、

十二　答下里某書

古之士斂其德、儲其藝、足以臨邦國、佐治成
化者、充然有餘乎中、雖未遑以此求榮利、
而其志許任期、欲不爲亦不得也、出而仕、時也、
退而隱、命也、時之與命、君子雖不道、而及其
興用得行也、將施仁義之澤于斯民、而誠溢
于事業、宜乎合鄉行飲、歌鹿鳴、以相慶也、昇平日
久、邦法如畫、而世官相襲、令行禁止、風俗亦成、
善於蕙圃之俊、當野之遺、寢寞已來、有心亦拱
沮不尚、終乎自廢、況不則於心、不習諸職、
把尋經卷、嘵嘵虛言、容跡侯門之廷者所爲、典
實之微、詞賦之媚、口孔氏之說、以營僕斗食之
資、何異農之得秋、商之得當、以爲生乎盡歲
也、故今之仕而祿、與不仕而耕者一已、昔少相
從、中間契闊十數歲、予既出而仕矣、其以爲仕也、
遠來離族親、去墳墓、從事史氏、不成一家之言、
學固寡、才固陋、識固陋、上昧春秋之旨、而下乏
班馬之筆、竟日抽毫、隨諸英雋該博之人、以遵考
往跡、滔滔成編、天下若予數幾人、我去則彼進、自
初釋褐、君臣纏綿之情、雖有自在、而其於所事、
不見益損、則我之求而爲之、幸亦口腹矣、聞君
有田廬、足以衣食、供歲時伏臘祭享之費、而徹然
假仰、取古聖人書讀之、究之、爲樂乎畎畝之間、
其所力行而實至、孝友道藝之名、但既有足施鄉
閭而發天府者、力之不已、材成德完、四方信從、
將與以當野有待之名焉、如此而後出、謂之古
之士可矣、古之士所以仕、固不在利達蘇食、則
用於今與否何計、此予之所有志不成大愧乎

內、也、而若乃未仕之人、書以吟、（以下疑有闕文）

十二

天地唯其無生無死、併欲生死之之心而無之、故能先乎萬物而作之、後乎萬物而散之、使其芸芸而歸、滔滔而逝、莫知所窮、而天地始不與也、此老子有見於化機之大旨、而特以其竅之密而藏之深也、是以雖所說僅僅不過五千文、而引而伸之、隨取隨應、治天下者取其清靜無爲、修生養氣者、取其澹泊寡慾、至若越之蠡、漢之良、及孫吳韜鈐之所述、亦皆寄其進退倚伏之機、而推之勝敗進退之間、以能全身報仇、制三軍而決勝爭、易如反掌焉、何其言之簡、而用之密也、前元老相摸守土屋公家臣池田子、以善劍聞于府下、居適與僕鄰、過予而告曰、我教師山內蓮眞翁、備學斯技于諸家、砥志勵躬、修習精研、超然有悟、以爲必遺形器、出範圍、不俟豫備、不期必勝、然後能居其常、以制其變、莫所不可、遂因所得以表其術、名以平常無敵、然至誘初學者、則尙有六勢之存焉、僕之幸獲私淑、晨夕講求、覺少有所資則、而亦非能外乎師說而然、蓋推其道形器者、則不持寸及、以敵揮霍之劍、窮其出範圍者、則六勢之設未免拘跡、故僕之所以爲教、始專示神氣之元本、袪擊刺之末技、而終乃使其亦手能奪白刃、其動能御煩、靜能制動者、實以數十年之功、誨凡二十有餘人、以自試而驗乎人、莫所復疑矣耳、嘗擇所以名其訣者、請之儒士、則其言或似滯固難通、求之禪流、則其言又恐曠蕩無所執、退而自取谷神之言、以擬之、未知其能當與否、願以正之、且有先師及僕所論著總八卷、又願賜一語、侈大之、以得行遠、予以不曉其術而辭、不得、乃告以前言而曰、萬人敵、猶一人敵、惡得不宗老子、而老子之道、其要在谷神、子之所名、其殆得矣、雖然此道也、窈冥希夷、至虛無繫、固難遽以所深自得以示其兆于後世、而蓮眞翁之名以平常、與子之推其意以取於谷神、又皆由積力久、心手慣融、累幾歲驗幾人、而後脫然有所自得、學而誨焉、後之游其門者、倘或不能修習如二子、而徒口口相傳、曉曉相說、以爲可一超而詣矣、則是虛而不中用之甚、豈子所謂谷神云者哉、此乃予無池田子席談之所

叙、而因書以題卷之首、且以戒下從學之徒授是卷者上云、予既書是序以畀由子既數日、被邀觀其演藝、則戛然自失、果知其言之與所學不相詭哉、

十四 秋遊記

丙戌之秋、與二三寮老游于郊北、臨所謂瀧野川道灌山者、川乃源賴朝稱兵進以置陣之所、而山亦太田道灌之壘址、夫賴朝之雄固也、如道灌、起於賤列、扶衰國、深謀遠慮、戰則必勝、以震其武于關左諸州、莫之能侮、橫槊之暇、復能延文士、聚禪徒、談論諷詠竟日、其壯概之韵、至今而傳、亦可謂當代之傑哉、而今薄海內外、莫有甌疆分爭者、自生髮至老死、不見干戈、澤洽家給、人可優游、而都會之地、繁華致驕、舫于水、張于陸、彈歌醉飽、爭以爲歲時之嬉、如予亦候天晴風寧而日氣暄朗也、乃從侶命儔、逍遙意行、以溯其流、則兩崖峭絕並峙、喬木巨篁、垂蔓亂篠、翳然相蔭、而水翟然出其下、及至游口、激以成瀨、赴如奔電、鳴如夏雷、懸而降如張練、噴而迸如散霰、遂乃瀼瀼南下、碧漣紺浪、一直一紆、環而復出、不知其所之、時見金鱗躍、翠羽掠、遊人之[illegible]足、而野店下飲、觀者久之、去而沿溪逐蹊、崎嶇迴迫、則出以陟其巓、則廢址斷壠、高低出沒、或有叢祠傾圮榛莽之中、野狐狡兎、奔竄嘯萃、四顧莫所見、而落暉所照、極海天際、鴻臺爾而筑嶺嶄、黃雲西垂而平田萬畝、畦疇隴澮、井畫綺錯、婦姑子弟、相携招伴侶、穫而歸騎而歌者、相繼其上、吾愛其淸遠曠廓、足以滌塵胸而縱遠目、臨風引飲者三、歎曰、府中人士自春且秋、來遊于此凡幾人、且歌且酌、靡費道古二雄之事、其偶及之、亦以資其酬酢笑謔而已、而況溯其流陟其墟、愴然墮淚、以臨弔荒烟秋水之上者亦罕有歟、此又可以見古今之變、而太平餘化所致也、今茲大年、所見田野之收、幾乎倍蓰、民有欣欣色、將傳吾輩得數經遊以同其樂、幸不多哉、

十五 會宜夏店序

先有秋、故宜夏、此店之所以名也、店在蓮池小島之上、其觀于池者之言曰、東台之山、尾翦勢盡、窪爲大瀦、長阜平林、環而未合、侯邸民屋、繩直矩折、以擁屬其半、而淪漣湛漫、萬頃一鑑、上與圓穹、蔚藍相瀾、此可以終日而臨也、觀于窪者之言曰、雙雄對峙、適出池心、橋路四[illegible]、亦皆有

雖所部以資其士、其與沛郡鄲之思、往以致切乎由者、不特士大夫時宦仕罷而可歸之田也、乃今府內勳閥、孰不與國家共興起、而傳襲者輻輳環衛、斯生斯長、以仕籍爲鄉貫、而邸第爲桑梓、是固萃人心固國本之良法、而予之以世胄東遷、與予之以新仕而西來、亦皆紫迴其間、獲蒙世祿、蓋自非奉使命、不得輒越一驛以出、則其懸奇不于心目、寄延望于雲天、依然時而興思者、亦豈非人情之不容已邪、然則予之寶愛此石誠宜、而予之敢應其請以命名者、亦未爲僭也、遂歌曰、

白雲之山白雲生、白雲出山任意行、扶輿飛散巍闕頂、軒轅有命護瑤京、君王簫鼓動汾水、捲將玉輦秋風驚、意似佳人琴裡鶴、忽辭華表下蓬瀛、城郭樓臺參差映、丘陵川澤不記程、曉爽夕澄日厚盪、碎作鱗紋排縱橫、漲海假寛魚龍潛、唯有帆影相紆縈、淡掃碧落依參廓、玲瓏玻璃何未成、九重層層四無隣、清湘鴻雁正南征、一條銀河斷復連、七點珠斗減在明、天女機上走練損、日應宮中舞裳輕、東有扶桑萬木枝、雲海且向日邊掌、誰家登樓望已久、何日昔雲津知傾、相思未竟歸思從、天長地迴水盈盈、誰知此思誰作有、高堂終日對無聲、啓繡戸西南隅、◎啓字上千恐脫字古峰頭雪崢嶸、

十八 澹泊齋記

澹泊者、道之味也、不卒不鹹、匪滋匪烈、嘗然後可自知、常用之者、能正精神、壯膽志、而用之也有方、吾聞諸古、修身養性之人焉、蓋人之有知也易于動、而物之有情也利于誘、其觸發摩盪之際、若熾若蕩、紛屯皆遝、委隨荒頹、至不自堪者、豈可診之膏肓龐脉、責之藥石湯液之末而爲哉、於是乎制而用之、於目曰艮、而所自知其漠如矣、則嬿嫚之態、熒妖之色、浸漬蠱惑、以奪吾睹者不見也、於耳曰閑而所自知、其密如矣、則靡曼之聲、尤詖在之言、姦聒紛嘵、以擾吾正者不納也、節口所入、穩乎適矣、守言所出、穆乎厚矣、勤之支體、儼焉日强、愼之念慮、快焉常足、則凡滅省饕以衛內、部倍以備外、惰慢邪僻、險暗穢雜、以弛己而賊人者、蔑如莫知所去而適也、能以是求之、討蕃接方、灌沃而涵濡、涵而浹洽、

動無靜不用焉、則始未甜、漸覺腴、乍而饜、終將飫、方寸之舍茲淨、一身之主永存、精明在躬、志氣如神。而所期盤錯艱習之塗、深奧宏大之域、亦以亭矣。嗚呼顏淵大賢也、我之所希也、陋巷簞食之卒。樂而不改。亦以是味已。舜何人也、我何人也 天下之富、天子之貴、有而不與、亦以是味已、欽用心乎遠者、必先致養乎邇、則馴致之功、成德之效、其若指諸掌哉、昔者諸葛武侯能以之自脩、推以起炎漢之衰、而延劉氏數年之命、驗亦可見矣、故其言曰、非澹泊無以明志 而安積君取以命其齋焉、君蓋早味其言而好其味、又遵其所好、必欲得之、則始不口七年疾而求三年艾矣、雖然酌而靡竭、嘗而愈美者、道之味也、旦夕之頃、終身之慼、調劑節量、審而用之、弗以虛其號者、君之志也、而至于其期修養之熟以體精明之驗、則復豈今日所可得逆言哉、

十九 慊齋記

岡子構小齋于廳側、坐而樂焉、又問其所以爲樂之說、則苔之曰、人苟知其所當務而莫之力、則雖日供以方丈之饌、歲給以千鐘之粟、而內省其躬、欿然愧怍、有不能安而享之者焉、其強以爲安者、非苟且自欺、則頑狂自棄之甚、豈人之本心哉、今子既能以祖業之難保、主恩之難報爲恐、朝出訪病、暮還僚友、勵精凝神、孜孜焉不知疲、是以日夕餘暇、獨坐此齋、以自問生平之所務、無復意緒語寞有不能自答者也、則歌于斯酌于斯俯于斯仰于斯、携兒女而玩樹竹、閱陳編而誦新詩、其又何適非吾之所當安而享之者矣、然則子之所以爲樂者、正在知其所當務而力之而已矣、傳曰自慊、其是之謂也已、

廿 題愛鷹石

凡物之形、大者自大、而小者自小、然極而大之、大亦有窮、極而小之、小亦有餘、蜩控地以自足、鵬搏天而替息、二者之大小、將窮而不知其所極、則自世俗視之、一拳何特千仞、自通士視之、千仞固一拳、天下之物、何小大之相違哉、試使愛鷹山視此石、必將謂肖我之甚、而使此石視愛鷹山、亦將謂似我之尤、然則此石之似愛鷹山、不止其峯之巑岏、而其址之邐迤也、予其觀諸、

廿一 題東坡騎驢圖

吾邦之學、中葉陷於浮屠氏、其徒專以坡公詩語之曠達、胸襟之脫灑、爲何、而世人往往爲其所眩、過公以禪子羽流與世相遺之輩、至夫經濟措置之才、與委身懷主之誠、則惘然無論而及之者矣、余故題此像曰、豈知戴笠騎驢客、即是匡時救世人、觀者其察諸、

廿二　弄月窩記

程夫子自見濂溪先生、使得吟風弄月之趣、而其所以爲教者、必曰、學以至聖人之道也、嘗稽諸古嘉謨高蹤、◎恐有脫字徵諸今能言質行之士、以索其所以能至之端、入之深也、茫乎不測、攻之力也、確乎莫痕、終日不食、終夜不寢、畢未見有得乎己也、及吾退思默省、又尋其所以能索之心、聲譽之馳、榮侈之望、煩躁浮淺、實與流俗靡相距遼、則所務所歸、自不知其何、而放者於是漸收、迷者於是漸返、始愕、中悔、終變大愧、將泚其顙、靦其面焉、即乎斯心而觀之也、親何不親、長何不長、所養何不報、所接何不盡、人而可虐、物而可傷、姦聲娃色之可留、貪利濁行之可徇、溫厚易直、本心之靈、藹然有若不已者、而昏蔽除矣、外欲之誘、脫然有若不顧者、其偉存忽銷、或起乍發、雖未必可保終于期月、而須臾之頃、方寸之內、亦豈不庶得吟弄之趣於髣髴、以本能至之端於己心歟、勿戕而害、勿泥而滯、遵養脩奉、謹守密防、遂以此洗心也、精明純粹、可馴而致、以此除欲也、機鑑剗棘、滌蕩滓穢、可廓開而渾化、以繹其理、融而不塞、以處其事、順而不忤、愛敬忠正、君格父豫、信義洽群、友輔衆服、及夫貧富窮通進退存亡之際、亦是以不貪不陵、潔己授命、以善其道、而推之國也禮、施之政也德、亦將足以布漸靡薰陶◎休洽淸爽之化焉、擴而充之、漸而進之、從容涵泳、日將月就、夫脫然者必不留人欲于造次急忽之末、而藹然者必當其天理之極、而全本心之德也、則靜虛動直、表裏交照、忽不知己、體風月之氣象、而泝乎伊洛之淵源矣、然則志學者、必當知以至聖賢之道、欲至聖賢者、必當索所以至之端、而欲索其端、亦豈遠搜而他求耶、今之學者則不然也、日講其道於陳編、而不本之於其心、其猶南行北轅、惡不潔而又襲之泥、是以窮理雖精、不免穿破

蔽錮、制行雖高、不免激發矯飾、恠作僞辨、巧言莊色。一切以隔人己、簸崇奉收名望、甘利腴、以欺己誑人、揚々坐都府、領衆徒、號爲老師宿儒、而曾十室忠信之不若、尚何希聖賢高明之域、而脫流俗汚下之習、不思亦甚。我友三輪希賢、往日寓江府、以光霽名其齋、既歸京師、卜居闕門西南隅、有窓東向、其前則禁垣外空棄地。廖廓曠寂、履跡寡至、草莽不除、青青滿目、而咫尺之間、坐納諸山、因又名之以弄月兩字、其意豈徒哉、蓋有志聖賢之學、而本其端於己、必欲改今弊、復古道、直泝淵源、体其氣象者。而予亦仰羨從臧。不揆其量、欲待大豪傑而起者也。因記、

廿三 祭小女文

天之所與汝以爲生者、僅一百五十餘日、不在乳者之抱、則慈母之膝、自其初降也、我爲之計曰、能食也。餔以甘旨、能言也、示以應唯、麻枲線縷、若紅若紫、使汝線之以績、吳絹之綺文、京様之染繒、使汝執剪把針、裁其寬窄、出則褋其輿、而鬆其笄、居則鑷其釵、繡其帕、其然後教之恐學歌詩、以爲閨秀歟、導之筋寵貞順、與古列女相倫歟、抑衣青子、侯貴之門歟、奉箕帚于素縫之人歟、寧歸布衣修潔之士、執汲甕以終身歟、其至幾年能生男邪、生女邪、我怡怡撫弄、如今之視汝足矣、何其爲慮周備永遠且悠久、惑之甚而蔽之厚也、汝之所歸椅土一掬、是天無窮、不化爲熠燿亂飛于露花風艸之下、則必呱泣而孩笑于茫茫冥冥之中、乃醉芳醑、其未知味、適以累呼而增歔耳、哀哉、

廿四 水尖亭記

亭始作之常州若舟山、而義公貴臨。因制之名、後船運其材、改而構之武州白山、而果名其名、以目其居弗替也、若夫曉廻昇而海門口、暮潮怒而坤軸轟、或波浪寂漠、年魚龍出沒、恭嘗測其際、而坐高閣、凭危欄、縱豪懷所如、海鮮錯落、白大如口瀞、以觴羽人于蓬島丹丘之外、而與之期壽億萬斯年、此亭之在常者也、連粉堞之迢遞、懸巨嶽而突兀。民戶緣谷、梵宇出林、花田而綠暗、木落而雪鋪、乃廓樓肆違、耳梵響而數鴻影、淺斟長嘯、點點坐間、延能賦客、與其擒思

于永言漢文之上、此亭之在武者也、吁嘗與武距百里、遊賞之相今昔、既經數四歳、而其觀物撫景、隨時光、觸事機、慨然不能不懷乎所天者、將與此亭、俱傳無窮而存焉、焉以其水雲與不而替也哉、

廿五 丁字硯銘 并引百七字

文武之不可分也尙矣、或廢其一、不暗則暴、不靡則僞、若彼張氏之子有言、天下無事、挽兩石弓、不如識一丁字、總以羅禍當世、貽笑於後、不知言之甚、某人獲硯一枚、命以丁字、以其所鐫之形肖也、而君乃櫜鞬之生、能讀古聖賢書、旦夕慕好、波及文房具、故予亦得言之以爲引、

凡涵玄海、亳起活龍、斯靜斯動、一横一縱、

廿六 文房四賢傳 姓名里居並係源君美所命、 六百十二字

劉改、鐵嶺人、生而圓銳有勇、疾惡如仇、自以去非命字、胡濡、字用之、管城人、爲人糊塗、務蓋藏、然能好施澤物、溫舒、盧州人、字展如、志常爲人伸屈、慕其有仁、多就親炙、牙磨、象郡人、姿才滑潔、以其先賄敗被焚而死爲羞、方自切礪、德輝夙著、其字乃子華、四人仕楮國、求甚任用、退居研海之濱、楮文國也、嘗有言氏孽子、曰異、曰化、曰比、曰參、兄弟竊據陶陰、以衛誑衆、遇者輒爲錯感、不省、傳染滋甚、至春秋時、推其長、潜稱門王、夏五以郭公師來襲、陷數州、楮以大亂、改乃擧兵討之、每戰執戈挺進、所向潰散、逐北收趙、斬其將首、東掠齊、殘其將立、轉而攻魯、將魚及孔氏卒五十就陣降、吳化比參等、度勢迫、倉皇騎三豕渡河而逃、方是時、廓淸之力、改爲第一、然自用兵、田土荒廢、衆仰哺于官、嗷嗷毛起、濡請就海採艸、煮以爲糒、澌水輸、所至傾櫜、給之一二遂州縣、民始霑足、帖然安堵、而舒特馳詣嬴峰神祠禱、及首懇祈所濟、神告曰、楮雖足食、未可猝用、爾其惠之、舒還、專以恩意、煦燠撫按、久之民心如受毒毀蒙陽睎、無不悅懌、楮於是召磨、請以政、磨曰、安有飽煖之民而無祇儆之教哉、因任磨先以切劘、繼以動盪、又從發揮而潤色之、不幾化成、則楮人面皆睟焉、自後方內調匀、物還其素、得文治更張、雖鄰界相顧、不能閒其音經亂、至四人所施爲、益無傳也、楮論其賞、授改司空、濡補闕、舒平章

事、磨光祿卿、並儀同二四友一、直二天祿閣一、分二掌校
讎一、識者曰、有レ功無レ跡、子孫其奕、
大史氏曰、工欲レ善二其事一、必先利二其器一、信乎言也、
當二楮被レ禍微三四人施二其材一、烏能撥二其亂一反二諸
正一、後世或政從二因循一、徒事レ粉二飾大平一、而憚レ于二
興レ役除レ寇、不レ然急用レ兵、以至レ破レ國、乃籍二强
胡一、設二牙軍一、務耀二其威一、要レ之惰而貽レ害、躁而黷
レ武、豈足レ貴哉、

右應二 相國近衛公命一撰奉、

爲レ人糊塗、用二宋呂端故事一、
務二盖藏一、盖藏謂二貯蓄一也、
其先賄敗、用下象有レ齒以焚二其身一賄上也、
陶陰、用二以レ陶爲レ陰以レ魯爲レ魚、
門王、古春秋闕字之誤、
夏五郭公、春秋脫誤之文、
肖立、古本戰國策誤レ趙作レ肖、齊作レ立、
將魚、用二魯魚之誤一、
卒五十、論語誤字、
三豕渡レ河、用二己亥之誤一、
灰首、泥首哀請所レ爲、

毒熨、醫療之方、以二藥石一熨帖也、見二扁鵲傳一、
飽煖之民 用下飽食煖衣逸居而無レ教則近中於二
禽獸一、胡以飽レ之、溫以煖レ之、
切劘勁盪、發揮潤色、並教學所レ用之詞、
面背睟焉、睟レ面盎レ背、德成之容、
天祿閣、用二劉向事一、
粉二飾太平一、世多以二胡粉一塗二誤字一、仍書二其上一、
藉二强胡一、椋將軍贊曰、使二强胡屈服一、强胡謂二棚之精甚者一、
唐世屢借二胡兵一以除二內寇一、
設二牙軍一務耀二其威一、世多以二猪牙一揩、塗二抹誤
字之處一、使二之有一レ光、猪有二烏將軍號一、五代藩鎭
置二牙軍一、

廿七 跋二續有職問答一八十七字

三條公之於二多々良氏一、舉レ所二親經練一以爲レ答、而安
藤子延二茲編一以續レ之、博蒐精討、動徵二古藉一、未三嘗參
以二臆決一、卿相之與二士庶一、其言レ禮各宜レ然也、試使下
彼晨夕委二迤于二簪紱之中一而趨二翔廊廟之上一者視上
レ之、雖レ欲レ勿二傾許一、其可レ得也哉、

廿八 斜好集序四百九十四字

詩無レ格也、非二知レ格者一、焉得而窺閫哉、嘗論二所レ謂

格者一、投レ湘之悲、横レ汾之壯、與二鄰中江左之靡而麗一尙矣、求二之輓近一、唐得二其正一、宋盡二其變一、二體交起、運交云極、而明氏之承、勢必厭二其變之近一、而景二其正之遠一、晩而視レ之、步而量レ之、力矯密削、摸擬是務、似則似矣、有レ表而已、此予所二每擧以質二世能レ文士一、而前年有二江生一、自二攝州一、今歲鞍貫生自二山州一來、以二篇什事一執二剌于レ門、予固不レ好故不レ解、偶作一無レ所レ徃、怪二其累踵至一、何所レ聞而然、而及二延レ之就レ席、揚レ眉抵レ掌、喜辨二歷朝一、夙度博且詳、與二何論一頗合焉、可レ謂二之詩一、予其勿レ守二其筌一、勿レ歆二其滓一、超然遠引、出二萬里之塗一、而讀二萬卷之書一、凡自二性情淑慝之可一レ辨、今古治亂之可レ慨、以至二山川鬼神鳥獸蟲魚微難二狀測一、蒐而聚レ之、培而厚レ之、唯知レ積已、蔑三復識二其何唐何宋爲レ元爲一レ明、而後播二之事物一、沛不二自禦一、條之達、英之發、雄厲婉抑、疏曠纖穠、必所レ之而言成レ章矣、其聲益宏而其調益古、二子皆從二京師以レ詩鳴者鳥山某一遊、稱レ於レ知レ格、而乃撰二此說一、以應二鞍貫生週集之求一、益有レ所レ惜焉、序既成、以付レ生、生數日又出二示一首一曰、何如、曰、殆非二子所一レ作、生笑曰、自レ被二先生所一レ惜也、恍若レ有レ悟、下レ筆輙覺レ有レ異、顧二視前者之作一、汗發浹レ背、不レ知何心百里齎致、以要二大方之言一也、請悉毀壞、須二四三年後一、得二十百首一以塡レ之、予亦笑曰、子之酸鹹頓變矣、旣足三以見二異日所一レ集、將下併三太羹玄酒之淡與二虎蹯熊掌之美一、錯乙落方丈于レ前 則序レ之道レ之、豈無レ當哉、寶永庚寅歲、

廿九　千歲窩記

蔡之龜、生有レ靈、能逆知、嘗棲二藻荇一、茹二菱藕一、與二魚鼈一友、蓋有レ年矣、奮然自謂、以二吾之性一、豈可下與二凡鱗介一而儔上哉、於レ是遡レ江而西、衝二洪濤一、觸二巖碕一、踽踽然至二昆明太液之池一、中有二樓船百尺一、旌旗閃、干戈森、美人千數、蓋瑤簪而瑝佩、吾將二就而觀一レ之、則水波寥茫、蘆葦寂歷、冉冉失二其所在一、而劉李之業空矣、又沿レ江而東、偃二文漪一、泛二順流一、喁喁然過二赤壁淝水之濱一、舳艫千里、精騎百萬、有二曳而遁一、有二呼而追一、吾將二就而觀一レ之、則八公草木、五湖風月、忽忽失二其所一レ逝、而孫謝之迹蔑矣、遂投二滄溟一、擧二鴻洞一、將二以究一レ于二海之際一焉、則其間神龍長鯨、噴レ雨騰レ雲、嘗莫二與レ吾相顧一之徒、不レ知二其數幾百一、又往焉、而得レ値二夫負レ山之鼇一、仰而問レ之

曰、子之神而壽、何術得レ之、叢丼而咲レ之曰、吾有二瓊樓金闕一、而負レ之則重而不レ堪、仙子玉人而背レ之、則睽而不レ見、其爲レ困與レ壽永、吾奚足二以羨一、子奚不二以歸一、龜乃有レ悟而謂、吁富貴功名之事、吾見レ之矣、豈以二其小有一レ才、徒索二無窮之迹一、不レ知二在レ己之安一哉、卒戢レ尾藏レ頭、斃莧以還、則藻接在焉、菱鬖在焉、游泳盤施、樂而不レ知、常蹐レ於二一小青荷之上一、而其自安也、蓋如レ坐二河海之寛一焉、古之人記レ之曰、龜千歲而游二蓮葉之上一、予友東府人谷某、能好二古典籍一、亦達二今情變一者、今茲作二宅城之東水之湄一、穿レ池且種レ蓮、而池側有二小廬一、廣袤兩莚、予因名二之千歲窩一、而記以二前言一、蓋其居之愈狹、而樂之愈博且久、識者之趣也、己卯之夏、洛人三宅子書、

卌 垂裕堂八景題卷序

余少時則與レ客相語曰、夜郞侯不レ可レ爲矣、無レ已則富家翁乎、上而寡レ所レ恐、下而多レ所レ施、手擁二推レ斗之金一、以レ時予奪赴二緩急一、亦可下以不レ負二吾一世之快一、而賢下夫士之戴二大夫一、大夫之戴レ卿戴レ侯戴レ公、累累相壓、跼レ首無レ所者上也遠、客笑而答レ之曰、富以行レ快、是子之所下以不上レ得レ爲二富家翁一也、及今而思レ之、質以二人事一、則客之言、其有レ旨哉、夫快者、德之薄也、其氣躁而散、其機疾而促、不レ可下以爲二渾厚龐衍凝レ福延レ恭之地一、而世之人無二貴富一、往々赴焉、窮賤之民、儲乏二擔石一者、雖レ欲レ行レ之、亦不レ可レ得、而彼抱二素封之貲一、以横二都邑一者、衣必盡、纖褥溫毳、食必盡、珍鮮膩芬、室廬器玩、婢侍僮御之盛、以至下買二歌舞一競二交結一、朋飲留連、施予無上レ度、又必據二得レ爲之力一、以極二欲レ爲之意一、馳騁四究、蕩然以逝、如二丸下一レ坂、如二驥就一レ陸、不二復還一レ顧、其入レ之有レ限、出レ之無レ程、財之可レ竭、而欲之不レ可レ窮也、則或子或孫、或逮二厥躬一、既已折レ產耗レ貲、歲要月成、且吾曼見、至二是時一、始之逞レ意者漸知レ悔、倭而猶且浮遊虛驕、不レ能二自制一、朝鬻レ田、夕賣レ屋、阿堵四飛、而撲滿倒掛、顧二其所レ餘、唯賒欠而已、快之勢、必至レ乎レ茲而後止矣、昔者隋主焚二沈香二百餘車一、以爲二火山一、以二唐太宗之賢明一聞レ之、意服二其盛一、則快之動レ人亦可レ謂レ甚、而至二宋仁宗一、審知二其然一也、夜飢思レ食二燒羊一、忍不レ宣レ索、蓋雖二天子之貴、四海之富一、非下愛二一饌食一痛抑中其欲上、則不レ可四得而保三四十年昇平之樂與二燧百祀縣延之祚一、而況爲二

人臣一、承二其令一者乎、又況下爲二庶人一、懷レ寶以當レ塗者乎、可レ不レ察歟、泉攝之地、跨二畿服一、當二海衢一、固東西漕輸之所レ繇、穀粟鹽鐵材植楮漆酧醢脯果之味、膏油苧麻木綿絲陶瓿冶之器、凡以衣三食資四用于二天下一者、若西南船貨藥材香料、吳之織、戎之罽、猛獸之皮、蠵斑鮫珠、牙角羽翠、丹砂玉石、以爲二器飾寶藏之具一、悉湊レ乎三二埠一、而後注レ於二四方一、逐レ利不軌之民居焉、間有二唐金生者一、世以二糶糴廢著之術一雄二視其間一、論二二州有力者一、人必指以爲二上等一、其富蓄亦可レ知、而生爲レ人忠朴謹儉、守レ分奉レ業、洞洞唯恐レ有レ失、不レ爲下爭二紛奢一狗二聲色一之行上、性又樂二聞レ道慕ン賢、非三出而從二耆儒勝流一、則入而藉二經史一研二理義一、妻亦能レ詩、有二閨秀稱一、平居與偕課二僮輩一、讀レ文寫レ字、値二坐客有ロ所レ賦、輒可二口授使一レ書、其嗜學之厚、至レ乎レ若レ是、而所レ居之堂、名二垂裕一者、固有二覩賢之勝一、自前數歲、擇二其八境一、徧請二中都有名文士及鮮蕃使人等一、以求二題著一、獲則視如二奇貨一、標装成レ卷、時復展玩、與二堂上所レ見之景一俯仰比較、揚以二諷詠一、被以二絃歌一、以撫二海山一、而慨二今古一、優然終レ日、不レ知下傍有二大賈豪商一斥三其得レ可レ爲而不二敢爲一以爲上レ出也、是其恬而不レ擾、固而不レ遷、日益修二勤儉敦睦之業一、而申二詩書孝弟之教於ン家者、固足下以垂二裕後昆一、世累中巨万之貲上、而生好レ古尚レ雅之聲與二諸名士雋偉之辭一、亦隨傳レ于二裔久無疆一、弗下與二其庫之鏹、庾之粟一、共就中朽腐上矣、如レ生可レ謂下能忍二其快一以有中其當上也哉、雖レ然自二余官遊一幾二歲於ン此、出境之行、國有二大禁一、嘗欲下一西歸過二帝里一、登二覇墟一、吊三義烈于二古墳一、仰三元初于二絶島一、詢三英豪搏爭之跡于二斥鹵荒漠之濱一、遵レ海南下、躡レ險捫レ葛、窮二神仙窟穴所ン在、然後還就レ生借二一席一、納二八勝膽眺一、拊拍以快中生平遊方之志上、而不レ能レ得焉、是又余之所下羨二富家翁一而未上レ忘也

卅一　醫仙像記

塑而三レ之、所三以崇二天醫之道一也、繪而二二十四之一、所三以報二仙醫之功一也、而牛山子獨棟二六人於ン古、表而肖レ之、謂三以效二我邦歌人吟侶之所ン爲也、其尚亦可レ謂レ雅矣、我聞、人之生必有レ所レ用、上焉制二其政一、中焉輔二其理一、下焉出二之穀一、作二之器一、貿遷廢居以通二之財一、形之所レ稟、用隨而賦、如二有レ所レ使而然一、故人能竭二其智力一、各事二其事一、然後精神之運、筋骸之

束、日通日固、屹乎得以立斯生於兩間、而其奉天命、效民職、而莫敢懈者、雖一犂一鋤之微、實與裁輔位育相參、而洪鈞元化相融、蓋有亘宇宙而不朽者存焉、是謂人之道、彼仙也者、伺化機而裔有形、以爲是吾之有、可得而有也、彰固閉藏、頑守冥行、自凡倫累之相交、智慮之互起、足以盪耗乎吾內者、視如讎嫌、避而日遠、岩壑其居、土木其質、餐霞吸沆、鹿豕以侶、盱盱焉、睢睢焉、苟保視息於大期之外以爲悅、是謂化而爲物之久也可矣、至人之所以爲生者、則復何乎有、從其七返九還、蟬蛻羽化、得以相隨木公金母于汗漫寥廓之墟、而卒與蟪蛄蜉蝣游埃飛燼、共漸滅而撲散、不亦可悲哉、雖然物有其德者、必有其業、勤乎內者、必施於外、六人者之名、固登丹臺而通玉籍、乃克推其靜清澹泊凝精行氣之道、以施於時極危回死、不知其幾、而品藥之所嘗、經方之所述、格言要訣、又皆足以資仁術於百世、醫而仙者、於是獨有所用矣、有所用則有所傳、有所傳則有所希、有所希則隔海之外、又有若牛山子、修其道仰其功、常以其不長生久視以永其惠爲恨、而依慕之至、遂寫其神、朝夕羹而墻之、不徒玩控鶴叱羊於屛間之爲也、六人者於是果不朽矣、世又有文人才子、懼性靈之就銷、傷道骨之難得、寧抽肝腸而彫辭章、冀其名之或不朽、逮歳月之後、値求之於陳編者、亦但抵掌欣賞、以娯一時耳目、猶之熠燿待夏、乍明乍滅于腐草之下、而若我輩也、世命以儒、退而莫所得乎己、進而莫所爲於當世、翻然改業刀圭、以濟唐陸宋范所志、亦且不能、則無恠乎平日猷爲、不出辭章之陋而已也、以此獲託其言於仙像不朽之側、我其得不自歎而又自幸乎哉、

卅二　梅子宅觀象棋序

戰國好勇之主、創爲角觝、以較力伎、而好奇計士、又創所謂象棋戲者、位置分布、氣勢聯絡、一與九軍乘之相爲表裏、變化出入、寄數不測、以鬪神智而試運用、亦戰鬥之爭具已、以梅村子之性之恬也、好之巧之、久俾吾輩引得傍觀、駸駸然將誘以爲朋、可恠也、今夫欲得而好勝者、人之同情、而彼徇名榮、耽功利、唯己之立、是舉天

下一皆爲レ讎矣、其人己之界、兩國屹立、揣摩捭闔、計レ彼計レ我、屋漏獨處、廟堂多算、城二其心一、機二其意一、劍二其腹一、刀二其笑一、目明二瞭望一、耳察二探聽一、據二險陂之性一、而沒二溝塹之欲一、植二黨與一、藉二貴强一、以相濟援控制、凡其自守如レ此之備矣、而及二其旦立レ朝暮遊一レ市、有レ所二必爭一、則冠服鮮盛、言詞鋒鋭、奔競赴應、復合而復離、紛然不レ解、强避焉、弱併焉、廉耻焉、貪啗焉、陷讒如レ霏、流謗如レ灌、沮如二渠答一、中如二礮石一、鈎取鑽求、伏レ于二昏夜求レ憐之下一、而揚レ于二白日傲レ人之上一、凡其攻レ人又如レ此之備矣、猶未也、則驟而甘言卑諛、是無レ故而和、越人之詐レ吳也、漸而誘レ醋薦レ淫、是亂而取レ之、齊人之欺レ魯也、約レ信不レ踐、秦之偸レ盟也、緩急不レ恤、晉之辭レ糴也、雖二乃平生夷塗、骨肉親暱一、而謂爲二貔貅咆哮龍蛇超攫之交一、一席千籌、立談万變、得レ寸求レ尺、營營遑遑、至レ窮レ老不レ知レ省、其懷レ害之深、暴レ精之久、潤澤日朘、悔吝並臻、理義之心、頑廢耗竭、甚レ於二旱荒疾疫之餘一、而甚者謀漏事敗、覆レ家殺レ身、身首異レ處而後已、是又宋桀嬴政之黷レ武、而白起蒙恬之自禍也、東府乃利名之津、于與レ我前後遷徙、歲月之間、多觀二其爭一、所レ得不レ償レ所レ失者、往々皆是、於レ是每二寂午雨夕、官事之有レ暇、折簡互招至、局已奠在二中座一、相共鼓レ趺支レ頤、緘レ口睜レ目、思三棲神四凝子二進退乎直兩界尺坪之間一、而莫二佗之知一、勝者扣レ髀以誇、負者拍レ額自哄、如レ予拙手素不二太好一、不二太惡一、觀倦則引レ盃仰飮、挾レ書俯讀、時或陶然一二醉局側一、不レ知二其覆一、其爲レ樂優矣、游矣、可二以能忘一焉、則其爭也祗足下以不レ爭レ乎レ心、不レ爭レ乎レ人、弭上向二所レ謂利名爭一者哉、予已叙二此言一、局半收レ子起曰、多矣天下之爲二孫吳一者、愼勿二並馳一、勿二並角一、

卅三　答二室氏一書

昨奉二東報一、審二久雨中寢味多福一、兼示二淸操堂記一篇一、莊誦數四、幾レ乎二紙弊一、趣遠而道邁、議正而意切、可レ謂下能取二倚于レ古而用二功于レ今者上也、世之以二彫蟲一爲レ技者、綺章繪句、穿鑿綴飾、從三事于二古人之所レ譏、甘心不レ辭、至下以二經學一標二門戶一者上、則終日揮レ手擬レ目、吃吃期期、不レ能二一下レ筆以レ言立一レ其亦村學究耳、近代之學、率不レ出二此兩路一、而如二大兄一學博文富、夙將二韓歐是依一、而所レ志所レ力專欲下以據二經傳一窮二理義一、大闡中聖人路蹊之緖上、有レ源

有レ委、燭レ乎レ內而輝レ乎レ外、若人、四顧之下、更得レ幾邪、來書命レ僕、篇中文字或未レ妥者、聽レ加ニ評駁一、夫大兄之文、非ヨ僕輩所ニ能容ニ口吻一、雖ニ衆人一不可ニ得知一、及ニ驟然被レ敎以相講磨一、則面顏然汗、不レ知レ所レ咨、然退而思レ之、蓋亦有ニ不レ可レ辭者一焉、去歲叨蒙ニ辟召一、得丁與ニ大兄一托丙同年契于ニ朝堂一于乙私舍甲、瞻晤幾次、其姿德之厚、談論之正、決知レ不下以ニ世俗交一過上レ人也、則今之所レ命、亦決知レ不下陽謙挹、陰誇耀、以ニ世俗態一誘上レ人也。而我乃顯ニ形迹一、懷ニ嫌疑一、虛避飾讓、忍而麾レ之、是將下以ニ俗交俗態一自待上レ乎レ己焉、其爲レ過不三特乖ニ來意之美一也、僕頃來竊有レ所レ計、以謂、幸遭ニ明時一、擧若ニ大兄一者、千里羅致、得レ從ニ班聯一、有レ疑可ニ就而質一、有レ誤可ニ就而辨一、何不三屢進レ所レ著請ニ之削正一、冀以脫ニ鹵莽疎謬之習一也、然不レ料是計、既已爲ニ大兄奪而先一矣、僕臨レ今逡巡顧望、辭而不レ肯、則恐嗣後請ニ敎左右一、勢將ニ推避展轉、拒而不レ納、彼拒此辭、知而不レ言、視而不レ顧、贊歎褒揚、相爲レ不レ逆而已、嘗有ニ一友人一、每下以ニ文字一呈上レ予レ座、則曰、請下ニ批語一、勿下語爲ニ纏結一、喝采一過上、倘使下僕與ニ大兄一兩相熟視隨踐此、則僕之素計、因就ニ沮止一、而其至雖レ欲下與ニ大兄一不ニ爲ニ世俗文一不レ可レ得也、是僕所ニ以應ニ命不レ辭、敢獻中所レ疑一二上、而其言之當ニ與ニ不當一、毫無レ所レ益レ于ニ高明一也、知レ之亦熟矣、豈在レ所レ省哉、大抵不レ恥ニ下問一、在ニ常人間一能行レ之、而學者極難レ之、蓋常人無レ所レ挾、而學者有レ所レ矜也、昔者謝顯道以レ克レ己爲レ任、猶且用ニ歲月之功一、以攻ニ此病一、而大兄脫然徹ニ畦畛于ニ人己一、廓ニ藩籬于ニ胸懷一、俯レ首垂問、下及ニ僕輩一、想其視ニ天下一、無ニ不レ可レ問之人一焉、何其高也、僕於レ是益信下大兄之文根ニ諸經一者、不中徒口耳淺々上、而僕相觀之益、亦不レ止下講習討論讀ニ讀乎ニ是非之間一而已上也、爲レ幸無レ限、餘俟ニ面布一、因書被口是望。壬辰夏四月、

駁語四條

擇而取ニ於此一 此字蓋指ニ下文夷惠二子之行一、大抵文法上遮ニ其實一、下承以レ切ニ當此一、今先揭ニ取諸此一于レ上、而遮ニ其實于レ下、措語倒レ倒、僕未レ知下古有ニ此句法一也否上、且獻レ所レ疑、

咸講究云云至レ宜レ之 一篇主意、全在下擇ニ二子之中行一而宜上レ之、則其所レ窮レ於レ理、須ニ博審愼明一、以求ニ至精至當處一、方得ニ施レ事而行的ニ合其宜一、今就レ知レ用ニ講究二字一、稍覺ニ乏略一、不レ與ニ宜字一襯帖照ニ、若以ニ擇而精レ之四字一冒ニ行而宜レ之一句一、更覺ニ簡明一、被ニ高訂一、

淸與レ和皆在ニ其中一、 皆字作レ擧恐穩

剔抉塵垢、至道可踐也。（抽垢下然後二字、以換道上而字、思得穩順）

卌四　馬角記

燕太子丹質秦、秦謂之曰、令烏頭白、馬生角、得還、此二者、天下之所必無也、而風土賦稟之偏、與一時感觸之變、紛然相合、流形成象、頓致有異、如牛黃狗寶馬墨、亦是類已、豈以我不常覩、而斷爲必無邪、大石子家、藏馬角一枚、傳云、上總介小幡信定乘馬所生、可謂恠矣、然古老往往謂親見此異者衆、而五行傳論爲兵象、隋志所記、並出戰國、思足利氏覇政之衰、宇內分裂、干戈相尋、信定乃屬甲州、以勇聞、內守外征、無日不在行間、則一時氣化所感、俾乘馬有此非也固宜矣、余於是信言者之不誕哉、正德壬辰冬、

芳洲評（何等曲折、何等瀠洄）

卌五　會筑後守源君亭詩序（即席所題）

上之取士也要廣、而士之應上也要專、貴之棟梁鼎鼐之任、賤之府史胥徒之勤、大之長民守土、小之管庫錢穀、君子殫其智、小人竭其力、一心勵精、贊導治化、給赴用役、欲以需天祿于下、一無與工人獻技、上下其稟者異也、其亦專矣、而仍不愧所食焉、自國初設文學官、固已弘多、近歲益彼引用旌招、以廣其員、以筑後守源君爲之魁首、波及吾輩數人、君以今茲正月滑日、具酒于家、邀木下某深見某室某服部某土肥某飲、余預焉、室子特齎詩數首、分其坐客、客亟屬和、積以成篇、或壯而雅、或婉而巧、錯落並進、而卒皆金玉其音、黼繡其章、足其揭國華而鳴時盛、豈可不謂之稱其選者也、而余之謭陋、聞寡識下、僥倖一時之舉、而濫吹諸子之末、亦豈可不謂之曠其職者也、雖然余有辭焉、方今至治日久、聲教四布、郡國都邑之間、將必有攻經藝精文業、明古聖賢之道者、進而論之、必有魁壘特異、懷器用以需于時者、更進而論之、又必有躬道德志經濟、負不售者、余起而告之曰、上之取人也廣矣、以余之材、得容其間矣、則安知不搜選登崇、旁及艸萊、併四海聚一堂、與之談笑講磨、得如今日哉、是余之所以抱愚措志、靦然食而不愧、而遂以其言觴主人曰、君以爲何如、

卅六　恭奉二一品大王命一賦二桐壺牡丹一詩幷序

桐壺之名、可二得而道一、桐壺之色之香、不レ可二得而識一也、紫黄紅白花四色、而紫與レ黄在二吾土一所レ不レ尚、至二白之與一レ紅、或純駁或淺深、種類般蕃、可レ賞者居多、試銓二考其品一以擬二之位一曰、維白質葆二豐潔一、氣鐘二純淸一、上天無レ爲、太素不レ染、比レ梅弗レ痩、常挾二窮士之孤高一、如レ玉而温、允協二君子之良貴一、其宜二封爲一レ王、維紅、艶以惜レ性、嬌以持レ容、被服絢爛、粧飾煥發、羞而帶レ赤、窈窕之顔、酔而有レ酡、妖嬈之態、其宜二冊而爲一レ妃、於レ是議定、二者姿格高下、班列貴賤判矣、側聞、桐壺一種、賦生絶偉、自レ辨而蕊、蕊而心、無二毫點染一、其白至矣、稽二古花譜一、雖二唐宋之盛一蔑レ有也、夫既以二凡牡丹一稱二花王一、凡白充二王位一、則若二桐壺一、乃所レ謂天授克王レ王者、超然出レ類而拔レ萃、其挺三生于二明暦上皇之廷一、移三栽于二一品大王之苑一、珍二護之一、寶二惜之一、使下吾曹徒聞二其聲一而不上レ知三其爲二何狀一、不二亦宜一哉、以二王之人一、花之貴一、鄙人是賦、榮也、謹爲二四韻詩一以献、

誰使三名花出二倚方一、春恩到處得二宣揚一、雪依二正午圖中影一、粉帶二內家叢裡粧一、始信毫光彌二寶地一、新看蟾魄渡二天潢一、東風不レ動一十日一、長爲二君王一占二物芳一、

卅七　櫻

紅者、呼爲レ桃也、白者、呼爲レ梅也、爲レ李爲レ杏、各隨二其名所一レ在、而獨謂二之花一、人皆知二其櫻一者、專而予レ之也、櫻之美、斯可レ知矣、神代之初、大山祇女、降在二此樹一、因號爲二木花開邪姬一、人皇之世、履中帝泛二舟內池一、此花飄入二手杯一、因號二其居一、爲二稚櫻宮一、而平城帝賦レ詩、賞以下光照二四方一笑亘中三陽上嵯峨帝始爲レ之設レ宴、後冷泉帝新爲レ之起レ殿、其降二種子秋津洲一、而受三賞于二大宮人一、蓋亦尚矣、而歌人墨客爭賦競吟、或比レ雪者、或擬レ錦者、又不レ知二其幾萬言一、方二夫都士女探一レ春求レ芳、豪家名苑、梵宇神祠、堰野之曠、崎嶇之絶、無二貴賤一無二遠邇一、窮二車與之所一レ到、隨二杖鞋之所一レ赴、鬧レ幕縱レ酒、如レ醉如レ狂、必及二其散一而後已焉、嗟亦足下以揚二上都之至盛一、而飾中太平之餘華上也、獨惟、造化之功、精華之發、專鍾二其美於二吾土一、而異邦所レ生、稱者絶少、所レ謂櫻有二兩種一、云二櫻桃一者、禮記、仲春、天子以二含桃一、薦二宗廟一、即是、而樹不二甚高一、春初開二白花一、

繁英如雪、葉圓有尖及細歯、結子壹枝數十顆、有深紅色者、有紫色者、有正黄明者、其顆如瓔珠、故謂之櫻、而許愼櫻桃云、鸎所含食、故又曰含桃、三月熟、時須守護、否則鳥食無遺也、本草綱目、下同云山嬰桃者、與櫻桃相似、而實獨異、山間時有之、樹如櫻桃、但葉長尖不團、子小而尖、生青、熟黄赤、亦不光澤、而味惡、不堪食、四月采之、由此觀之、櫻桃開之早、實之佳、與吾地所生太異、而山嬰桃者、蓋可以當之、但異邦不多有、其偶有者亦生山間、則宜于武陵王半山特作惆悵寂寞之看、而絶無嬌艶豐富之態、萬首絶句、于武陵白櫻樹詩云、記得花開雪滿枝、和風和蝶帶花移、只今花落蜂蝶去、空作主人惆悵詩、半山集山櫻詩云、山櫻抱石蔭松枝、比並餘花發最遲、賴有春風嫌寂寞、吹香渡水報人知、雖然古之言云、物以稀爲貴、唐宋間、風雅狀物之士、及一艸木之微、猶且題賞不置、而獨於此花落漠蔑言者何邪、蓋倭之與漢、大洋中隔、累譯不通、則其水土變、美於此醜於彼、猶踰淮之橘、變而爲枳歟、抑其俗尙之異、棄於彼賞於此、胡人之惡醇醪而甘羊酪歟、或以邇波佐久良、爲櫻桃者、見源順和名抄尤無證之言也、或言、別有一種、不梅不櫻、實赤而甜、訓爲油顧良者、是櫻桃也、然不多有、亦不可審、予欲題此花、因考其種以正之名云、

艶陽欲醉九重霄、無數櫻花春正饒、濃學曉雲偏蔟蔟、嬌依午影自搖搖、杯中誤惹君王喜、階左笑迎臣士朝、日暮東風三月雪、漫傍紅袖散飄姚、

卅八　奉謝白川侯賁臨

某也少聞鄕老先生之言云、中古公侯、尊賢禮士、雖騎射擊刺挾一小枝之徒、悉被加意優遇、當是時、蓋有就訪下士之廬者焉、至于近歲、上益亢、下益淈、其風寥乎蔑聞、而士之抱德負材者、往往縮首斂跡、俯仰詘以全其身於當世、豈復敢以古道自期乎、己而望於人乎、昨者家奴自外入傳命曰、白川侯人至、某前以事詣謁于侯者纔再次、不得續見以窺盛德之一二、乃謂是必使也、令延之廳、及出迎、則侯已升而在坐矣、乃倉皇俯伏不知汗之浹背、而侯徐々談論、無以鄙朴簡慢見嘲之色、移時而起、夫侯貴下臨、送迎有禮、某雖陋庸亦嘗講之、第平素之所蓄、未嘗以此自期、又未嘗以此望乎今之世、而今者猝然以宗室懿親之尊、藩鎭寄望之巨、來就弊廬、莫所顧焉、

則某誤レ聞失レ措、此至レ忘レ禮、其罪蓋亦有レ可レ諉者一、然其驚惶失誤之甚、蓋足三以見二侯行レ古履レ道之隆一也哉、感激惴慄之餘、賦レ此奉レ謝、

五玉鏗鏘侯第連、不レ誇二富貴一最爲レ賢、宗望久託北門鎖、公暇唯繙東魯篇、豈識使儀森二巷口一、忽驚珮影落二階前一、魏文覇業由レ斯盛、古道不二徒靑史傳一、

卌九　跋二磬控要錄一

水藩鷲尾君、少好二騎法一、力學不レ倦、其受レ於二祖傳一者、正既且詳、而又能體二驗於レ己、研精極熟、心與レ手相應、馬與レ人相忘、而不二自知一焉、嘗著二一書一、名以二磬控要錄一、言簡理該、揭二宏綱一而不二妄發一、將レ使下從學者質二諸耳提面命一、驗二諸羈靮轡策一、有丙以詣乙積習獨得之妙甲焉、其所レ造之深、亦可二以見一哉、君累經二數職一、有二廉幹稱一、今致仕、號二慶翁一、予以三往者有二忘年交友之誼一、故依二其請一以書二卷尾一云、

四十　題二親鸞像一

僧家犯二色肉二律一、其猶下士人之坐二畏懦一論中私賦上、雖二其類甚一、方且醜詆指斥、使レ不レ得三相齒列一、而鸞師獨執レ所レ見、以下衆生根劣、非二吾此法一、則不上能二超度一、乃公然擁二婦女一、啖二腥葷一、以唱二一世一、我固不レ知下其法之能合二迦牟尼一與上否、即使レ能合一、亦在二我所乙不レ取、而特至乙其篤信確守、雖下舉二天下一議上之、而不レ爲移一者甲、則可レ謂二誠難一矣、凡學士大夫、必與レ師同二斯志一、然後可丁以得丙脫二凡近之習一而進乙聖賢之域甲、非邪、我其執レ鞭以從レ師哉、呵呵、

四十一　記二贓吏事一

稅官之犯レ贓、有二情可レ矜者一、有二罪不レ容レ誅者一、余宅舊主某、負レ贓革レ職閑住、許以二歲祿賠補一、而某人囊尙有レ所レ畜、竊置二二妾一、縱二其子一遊二妓館一、凡有レ所二市買一、輒不レ酬レ値、某年官遷二其人於遠部一、以二屋址一賜レ余造盦、徙居之後、商夫叫レ門而過者、僕輩呼レ之則疾顧速步、爲レ不レ聞而去、至下賣二豆腐野菜一者上亦然、既數日見三我門廡一新非二舊觀一、就二僕輩一問曰、此非二某殿宅一邪、僕輩應曰、某殿既遷二遠部一、此宅如今屬二吾爺一矣、商夫等喜曰、某殿時、被レ喚二入其門一、則威劫聲喝、擅行二白奪一、是以我輩不二敢入一、自今之後、獲レ免二此患一矣、戊戌春、余新造二前廳一、有二鏝匠一語レ余曰、此地舊主某殿、小人能知レ之矣、小人嘗奴二一坊者之家一、某殿使三人至二主翁一、召備以偸二屋

壁、主翁未相識、發小人赴役、數日畢、不給値、小人屢往請之、最後某殿親出罵曰、汝以些小工錢故、敢來聒我耶、以杖打小人數下、小人走還告主翁、主翁曰、寧棄之耳、汝莫再往、人之暴亦至此哉、更有一人跡似而情大異者、其姓名、小人既忘之矣、宅在前街、食祿四百石、主翁以工事出入其門數十年、亦爲稅官、坐職扣祿賠補、貧困日甚、奴僕捨去、至夫人自執炊爨、一日値大風、所居壁向內倒、盆梗狼籍、不容坐臥、召主翁視曰、我如今唯有一老奴夫婦、力不能起此壁、即起亦不能修、不知今夜使婦子輩得睡何處也、汝思舊好、幸爲修之、我亦非終子此者、他日獲償官債、全領祿米、則必厚酬汝也、小人從主翁聞之、幾泣下、時城中房屋倒損者多、工價騰貴、至一日金一步、主翁亦有心者、慨然應命、多買沙土、雇他工、齎己粮、悉爲修完、其價該金五兩有餘、無所求、後數年、其人與一貴官私交、換宅、遷郭外、因得金數百兩、分十兩以贈主翁曰、汝恩不可忘、今日聊以相報、主翁往辭曰、小人按舊帳、本價該金五兩有餘、得之則足矣、奚多取爲、其人曰、汝若不欲來往我家、則從汝所言、不然當收此金、主翁不得已受金而還、人之有義亦至此哉、余聞嘆曰、宅舊主某之貪殘無恥、誠可惡甚矣、若某人困躬懼罪記恩重義、決非無良心者、其犯蓋非一時濫費所致、則柔懦不振、爲胥吏所欺、抑或公令苛急、催督暴至、不暇辨理、以陷於罪歟、然官之處決、不論故誤、槩以一律、覆盆之下、天日不能照者、豈特是哉、執法者所宜察焉、而士人懷順良之心者、一或不謹、以觸法憲、玉石俱焚、不得復白其情實乎世、尤可愼哉、

四十二福田某碑文

予也成童、與播州三木郡人福田君者相識、比授徒京師、君復率諸同志就席聽講、後經二十有餘年、臨沒遺言家人、遠以銘碑見託、則予豈得不得思其舊交而書之哉、予聞、三木郡、僻在府鎭之外、壤闢土沃、稼穡攸業、其民朴野、未嘗以文禮接耳目、而知有之者實自君始、君諱尙存、稱代藏、貞齊其所自號、姓鹽治氏、其系出自雲州守護鹽治高貞、曾大考事三木城主別所長治、守賀

東都福田庄之砦、長治滅、遂隱不仕、多置田產、頗致饒裕、祖考更冒母家姓井上氏、考諱善秋、娶大西氏、生二子一女、長爲生、次安義、至生之時、議將復姓、以曾大考嘗居福田、遂以命氏、生年九歲喪所怙、大西氏有貞行、事姑考順、抱生及安義、安義妹甫二歲者、誘勵僮婢、致力畎畝、經年所增拓更倍舊、雖隣里媢嫉、憚其嚴正有守、靡敢加侮、而又能示二子以勤儉、俾就長老讀書習字、生過弱冠、始有尋師問道之志、乃請母氏、以家政委安義、一奴蕭然負笈東赴京師、初博求諸家、後專攻經術、一歲半游學、半歸省、率以爲常、而其間足未嘗踐優伎之席、同舍生嗤笑之、不顧也、若是者前後十有餘年、奉所聞以還鄉、日召弟姪若里中少年、與之說道課書、諄導不倦。遂請母氏、撤家舊所用浮屠法、而建祠龕、奉木主、藏時薦饗、一依朱文公所定、斟酌行之、舉郡聞者爭爲恠議、生依然不爲變、漸而或更觀感、悅而慕之、生於是豫作棺槨如式者一具、値里黨有喪事之需、輒出給之、隨給隨作、所施亦不知數、後數年大西氏壽終、而其斂葬兆壙、益得以盡制節無憾焉、此其施家推鄉之大者也、嘗築一小廬于宅口、號以栖遲、多植花樹、吟哦舉日、所得詩積成卷、又好書法、徧就當代能迹、叩其底蘊、每暇把筆如椽。任意揮寫、頗合古人矩度、蓋觀其所以爲樂、則其所厭而不爲者亦可知矣、享保二年丁酉夏初罹疾、自知不起、會親族、囑後事、以無嗣育、命安義長子正道以承宗、又召匠制棺、力疾躬親檢視、得其牢完而後止、越五日遂歿、是爲四月廿二日、距生寬文元年辛丑、壽五十有七、妻陸栗花氏、亦攝州著姓、生二女、一夭一嫁、嗟夫君之質行、得諸母氏之懿訓、而母氏之德賴乎君之學以顯、且文飾而恢張之、則厥子厥孫、罔當申孝弟攻詩禮、以勿毀家規、而凡里中子弟、知得讀書講道者、亦宜益力學與行、以成一鄉仁厚之風、而流生之遺惠於無窮哉、是乃生之志也已、

四十三紀旅川君事

君名正羽、稱矢右衛門、奧州小田川人、世名善騎、其先出佐藤氏、中世更氏飯村、飯村乃所居邑、其城址至今存、而系譜淪沒、不可得考、高祖正保、

稱矢右衛門、曾祖正明、稱大隅守、復本性佐藤、州之大姓伊達相馬氏、毎常手疏通問不絶、祖正信、稱將監、從小田川、有子長曰正定、稱馬左衛門、仕參議蒲生公、寛永中、大猷君朝京師、公奉從、道經大井川、會水漲、顧曰、孰克濟者、正定時年十六、應聲而出、單騎亂流、往又返、若践平地、公大悅、自後呼之曰旅川、不名、由是旅川之名、震于關左、遂以氏焉、蒲生氏國除、仕參議丹羽公、無子而絶、次曰正成、稱將監、從兄氏、始仕宮内大輔酒井公忠勝、生二子、長正貞、稱市兵衛、次乃君、共仕酒井氏、君幼從父徙羽州庄内、習挽學擊、舞槊調馬、覺有神助、歲十三、慨然起曰、我世爲與著性、以武伎聞、安庸庸餬口列國之下哉、比過弱冠、請致職、不聽、遂不辭而去、酒井公忠義、怒禁其仕、經年獲釋、君於是漂遊、至城州、受射片岡氏、尋學十字鎗于下里道二、歲月鍊慣、最精其法、及東還居江府、以騎與鎗教授、冀聲聞流布、階以値幕府之薦也、自凡列侯要官、從游其門、前後三千餘人、時權聞而延之、試觀其伎、大見嗟異、以名聞台聽、收錄之、將有日、而會中風不能起、年實六十有九矣、諸貴游饋醫藥者、相踵于門、今酒井公憫之、新賜其子正府祿二百石、以終養焉、君性澹宕、與人不道財利、有暇則讀兵書、至老不有室、取姉所生以爲子、乃正府、正府亦能傳父業、一時知名云、梁人王鐵鎗有言、豹死而留皮、人死而留名、如君利其器藝、思以恢祖業而顯當世、幾成復墜、値老且病、爲正府者、於其用捨與通塞、力不能爲也、則謀將錄事實勒金石、俾君未瞑前知其功之寧湮乎今而其名之賴傳於後、欣然以終、而後世或求史佚于野者、亦有取焉　豈不養之遠哉、雖古未聞其典、然我衷之父之子之志以書、

四十四肥田某碑文

肥田君、諱政大、字惟醇、稱十歲、常陸水戸之產、姓源氏、源氏之後有土岐氏、實爲所自出焉、曾大考諱政長、事小田原北條氏、任下野守、居伊豆德倉城、大考諱政勝、稱和泉、年十六、輙授部將、父子名勇、數建戰功、北條氏敗、屏居德倉、大考與養珠院夫人有姻好、以故東照廟召賜祿五百石、

居數年、命仕水戶威公、曰善佐我兒、行有所用、久之職祿不見進加、遂不辭而歸德倉、公強使起、增賜爲千石、尋又增五百石、授大老、及公庶長子英公封讃岐、命使往輔、賜祿一萬石、病終于高松城、考諱政直、稱半兵衛、留仕水戶、食祿千五百石、未強而沒、其子、長曰政利、稱伊織、甫九歲嗣家、至十有七歲夭逝、次曰政實、與政利同年沒、次乃爲君、政利沒之明年、義公命仕左右、又明年、新賜祿二百石、實寬文之四年甲辰也、君以奉公興家爲志、歷掌數職、夙夜匪懈、遂爲大老、今鳳山公命永侍府邸、至元祿十六年癸未任和泉守、而祿亦累加千五百石矣、正德元年辛卯四月罹疾請解職、不許、特免日直、大事就家咨訪、同年十二月、獲請改號淸泉、仍留寓、就醫療、明年壬辰八月十日卒、享年六十有五、葬府下谷中長明寺、娶水戶府士下河邊之女、生子政業、稱助之進、繼爲其後、一女嫁水戶府士結城晴映、君爲人寬恕重厚、怡色寡言、不飭邊幅、而儀貌可望、中年輙莅要劇、有暇讀書玩筆硯、好接賓客、自府朝士大夫延待盈席、談笑竟夕、優游有餘、人無高下、獎薦不倦、事韜惡而揚善、有善讓而爲之、至其世故、審時機、以持大體、而收遠效于邦、則有大出於人意者、然人亦莫之知也、是其所以參預政事二十餘年、彌綸終始罔或遺擧、而餘愛之存乎人者、亦將久而益見慕焉、正德二年壬辰九月、

四十五青野欽之墓碑

君姓靑野氏、諱叔元、字欽之、稱源藏、後改源左衛門、京師人、幼志凡書無不讀、矻矻日夜、最勤史學、而不喜爲詞章、有所詩示、人謂之迂、不顧也、比冠博聞強識之名播都下焉、方水戶西山公編國史也、聞而召之、仕二十年、寶永三年丙戌十二月十日、疾終江戶府、歲五十有四、月女甫三歲、臨沒託之安藤爲實、爲實乃同仕、素相好者、因葬君府下慈照院、而遺言又囑同僚三宅某、銘其碑、吁二十一世之史浩矣、得一涉獵、世之學士所難、而君之學、始取涑水之編、讀十有八遍、君臣事跡與治亂之要、優經該熟、而進及正史、自班馬、至金元、讀各再遍、人物制度天文地理財賦有

司之事、又皆務加ニ搜尋一、上下綜而巨細擧、使三其纍然如ニ貫珠在一レ掌、遂毎ニ一史一、參以ニ各代稗官一、旁逵根推、以校ニ同異一、詮ニ取捨一、曲筆謬傳、一歸ニ是正一而後已矣、或値ニ叩問一、輙擧ニ成文一以答、如レ是者曰ニ之史專門一可也、嘗著レ書駁ニ諸史一、積レ艸盈レ箱、以ニ多病一而廢、人咸惜焉、銘曰、

存焉胸羅ニ千載一、沒焉身周ニ一棺一、名山之下、乃靈攸レ安

四十六安藤朴翁居士墓碑

居士之曾大考諱邦茂、幼名喜多丸、乃伏見親王諱邦輔之庶長子、而親王家令內藏權頭安藤宗實女、名少納言者所レ生云、邦茂之幼、親王將ニ出レ之爲一レ僧、未レ果、適會ニ京師兵火一、第舍蕩盡、宗實奉ニ曾大考及少納言一、避三亂於ニ丹波州桑田郡尾口邑一、依レ親以居、于レ時天文某年也、宗實有ニ一男一先亡、乃取ニ其遺女一以配ニ邦茂一、改諱ニ惟實一、惟實後更ニ號惟翁一、名ニ其居一以ニ抱琴一、歌詠耕耘、樂以終レ身、至ニ元龜元年四月一而沒、大考諱定實、配ニ名倉氏一、乃宗實孫女之所レ生、仍氏ニ安藤一、稱ニ滿五郎一、勇敢有ニ膂力一、時海內方亂、大考奉ニ母族數家一、擊ニ走鄰邑堡主香西孫六一、據ニ有其地一、旁攻ニ郡中豪傑一降レ之、勢威大張、天正中、織田氏遣レ兵徇レ州、大考拒戰不レ克而走、後復歸レ鄉、改ニ號快翁一、慶長十年九月沒、考諱定明、稱ニ忠右衛門一、配ニ河合氏一、少好レ學入ニ京師一、游ニ于惺窩藤先生之門一、伏見親王貞淸聞而召レ之、爲ニ家令一、敘ニ正六位下一、任ニ右京亮一、未レ幾稱レ疾辭、改ニ號了翁一、寬永十四年五月沒、居士諱定爲、稱ニ外記一、甫弱冠、親王又召爲ニ家令一、初考子ニ養女姪一、於ニ居士一爲レ姊、遣ニ侍親王長子邦尙一、獲レ幸生ニ子貞致一、而邦尙實多病不レ堪レ事、親王意將下以ニ次子邦道一爲中嗣上、邦道亦有ニ孱疾一稍長不レ改、親王於レ是計使ニ貞致承一レ嫡、邦道生母恃レ寵、讒搆遂謀レ毒レ之、事漏、姊亟奉ニ貞致一、出依ニ居士一、居數年、承應癸巳之歲邦尙薨、明年親王薨、未ニ一閱月一邦道又薨、(邦道薨可レ考、未レ爲ニ親王一、不レ可レ言レ薨、)院廳議將下以ニ皇子一爲中之後上、報ニ告東府一、居士乃日詣ニ京尹周防守坂倉宗重一、請下以ニ世孫一宜上レ立、辭意凄確、義不レ可レ奪、宗重感ニ其誠一、具言以啓ニ東府一、居士因亦東往、投レ狀密愬ニ時執一、東府遂爲奏立ニ貞致一爲ニ親王一、以承レ後、一時搢紳間、藉々稱ニ居士之忠一焉、居士於レ是廣延ニ博雅之士一、說レ經講レ藝、以輔ニ親王一、終保ニ其家一、至ニ

年五十有三致仕、改號朴翁、數年乃歸尾口、官累進至內匠頭、位正五品下、居士性温裕不迫、臨事敢爲、周于愛物、丹波州水尾邑民二十人、越訴邑主過惡、下京師獄、其首八人、法當梟首、邑主亦戴罪屏處、有居士所識在被刑中、居士憫其非意犯律、屢詣京尹及諸吏、上下辨理、懇求原降、八人因得減死放逐、餘悉不問、邑民感恩、私建小祠、設居士像、以祀其壽、有田宅在鄉里及京師、並使小民佃僦、每値歲歉、悉放屋當稅糧、仍給以米、由是戶下之民、經數十年、不敢遷易、自幼篤學、受經于下冷泉左近衛中將爲景、學和歌于烏丸大納言資慶及長嘯子、守淡執正、足未嘗履優伎之席、而最精禪理、晩以參禪爲務、家有所贏金百餘兩、以貸親明及門客窮者、一日遺言曰、我老矣、死期將迫、願以所貸爲遺留物、其秋頗覺肢體有憊、子爲實適在歸省、勸請用藥、不聽、數日語之曰、年過古稀、不知病患、吾復奚憾、所有詩歌草卷、火之莫留、汝兄弟惟當相愛、盡忠所事、與朋友信、慈視妻孥、吾之所以遺言止此已矣、言訖食頃、奄然而卒、實元祿十五年八月二十三日、而年七十六、葬于邑之北原、配山田氏生二子、長爲貞、次爲章、並仕水藩、繼湯川氏生一子、曰爲輿、業醫、曰爲實、不仕、銘曰、

華冑綿々、我王一雄、操綜有待、提劍來薦、温彼居士、流德可詠、手挽頹波、濬源底正、輔導栽培、餘潤四達、援死救窮、知禮有稱、法尚空教、道由至性、千年之山、庶以傳慶、

四十七抱琴子壽藏碑

抱琴子謂其友三宅子曰、世之諱死者死矣、憎不知死者亦死矣、知其死不之諱者亦死矣、廬飛烟斷、斯須並盡、則身後之可傳、特有生前之所爲焉耳、吾名爲實、字之賓、稱內匠、號抱琴、而姓本藤原氏、系出自左大臣魚名、世仕朝奉禮職、十六世之祖實澄、任越前守、居稻津保、十八世之祖齋宮寮助宗澄、以安藤爲氏、由是子孫皆氏稻津或安藤、至二十六世祖宗實、猶任內匠頭若狹守、而自其子惟實以下四世、退耕丹波桑田郡千年山下尾口邑抱琴園、惟實、實伏見親王邦輔之庶長子云、父定爲、復出仕伏見親王、爲內匠頭、敘從五位

上、娶山田氏生吾子抱琴園、吾仍仕親王、十有六歲、敍正六位下、爲右衛門大尉、二十有二、有故辭去、寄清閑寺大納言熙房、三十有三、以稍慣典故、應水戸義公招、專掌其編修禮儀類典及扶桑拾葉集局、結局、遷仕今水戸公于江戸之邸、累職見爲番頭、而年既六十一矣、嘗略談儒釋、力事擊劍刺鎗及拳法、琴則學之四辻宰相季輔、笛則學之山井但馬守景則、和歌則學之中院内大臣通茂、清水谷大納言實業、受古今集之秘于慈光寺中務權大輔冬仲、而其於典故、自幼最以爲嗜、諸公卿家傳青箱者、就正殆遍焉、所著續有職問答三卷、所詠和歌五千餘首、名曰抱琴集、妻河邊氏、及一女先死、男二人、長定賢、次爲正、凡此皆吾生所有之蹟也、予請爲記、以爲吾死之傳、吾將壽石、葉諾、且告之曰、達矣、然余謂、典故之學、有三難、以故從事者、鮮克濟、蓋不長薈蔚之下、則難乎親睹、不接衣纓之士、則難乎博聞、及其欲質以舊籍也、家秘人惜、難以成風、雖一儀節器節制之微、視如金科玉條、未嘗披示之、則又難得之最著也、今予結髮、親炙王府、而掌衛官、華族貴遊亦以其醞藉風流可愛也、晨夕携從不措、而卒辟宗藩、局中所有之書、舉以見付、致力考纂二十春秋、以至仰替之功爲多、則宜其所學詳確、不與夫鹵莽瑣尾、綴輯傅會者侔矣、幼以是爲志而遂成、豈以是食上而匪忝、予百歲之後、其將益安然以瞑歟、非邪、予曰唯、退將併勤、銘曰、

抱琴兮、抱琴兮、中藏山水之心、奏時固無餘響、而閟後仍有大音、故知生死、頓同古今、笑磨片石、東海之濤、

四十八題大唐六典

姬周已降、憲度文物之明、設官分職之備、特以李唐爲盛、而六典仍經衆賢討論、以成於開元全盛之日、一代之制、粲然可見、我朝每有造因置廢、修飾理化、亦未嘗不參而徵之也、其書中罹亂故、毀燼湮沒、爲日既久、而近更因舶傳以得之、第得之不多、行之不廣耳、徒聞而目未睹者、往往而是、府内適有一本加校正訓讀者、仍出以授于梓、冀與搢紳士大夫、稽古制典、欲仰贊皇猷之方一二者共焉、若夫律令格式之爲編、或有完

而存者、或有存而缺者、或有全然不傳者、異日幸得四者之備、以與是書、同就刊布、則其補乎世亦將何如哉。予嘗爲之措志而有俟云、

四十九　與村良直書

久絶徽音、敢呈短束、不審貴恙安否何如。僕固多梗性寒、屐跡不踵高門者幾日、負罪、墻根雪解、天際雨歇、窓景隔紗、月色置罩、園鶯聒耳、莫不暖響、而雲鴻送目、總是歸意、方是時也。僕知高懐不無所挾、而足下亦繫鄙襟大有所蘊也、適獲烟酒一筐、此亦有想思名、聊投左右、勿拒爲幸、

五十　隱岐守中山君五秩節壽歌引

椿歲遙期、芟年初度、折曇壹陌、算推八千、前閥富貴之榮、不待而備、大衍乾坤之策、無窮所生、儉于私、勤于公、數非循省、吟乎風、嘯乎月、在命優游、況乃和滿熙臺、仁流化國、壽帝戒日、丹鳥東翔蒼距、月卿寄題、青鳥西自瑤水、先金母之未降、將木公而共遊、樹上採絲劉茶胸中梨甘棗熟、持身有衡雪凌霜之節、托契無改柯易葉之時、計深五大夫之交、繼以六家僊之詠、文朋騷友、賡唱爭馳、瓊章琳篇、排敷佐揚、當酌時恩子杯觴、大張宗會子花樹、如其異日從官藩府、適聞納拜席隅、宜賜芹誠、少致華祝抽青對白、雖則我未會、弁首點睛、還遇君之請槐羅魚目、敢坐貢賓之魁、譲云蕢梓、亦爲八音之始、所冀晩翠日茂、以與孫枝共蕃。壬辰春二月

五十一　賀巽軒木子四十壽且叙并詩（也、其兄菊潭君求）

木子挾諸書以爲業者也、宜素講明以知自奇之非禮、而甲折簡、憑人徵言、雖恐不得、其豈將以誇交游之廣於洛社耶、喜虛揚、甘溢美、以傚唐俗波靡之習耶、蓋亦有慕修養術、以方强而規久視、恢其意於文士之詞、以盛祈祝云爾、則自今之後、起居動息、燠嗇是勤　不嘗若慈母育嬰孩、以過者艾涉耆期、而濟所求于天賦之外也、可幾焉、予之所爲予納慶以集菊潭君請者止斯、莫可復道、而特其以齡則予之同庚、而以居則予之故里、爲之一時慨起。延頸遐望、不覺其情之溢、盎然已至、成詠乃以侑也、想席間舉觴之客、或抵掌稱曰、亦奇也哉、

每値西風意緒多、黃花黃葉故山阿、爲吾代向

鴨河照、四十蒼顏今若何、

五十二興說　偶讀牧老詩論、其說與近而未至、因述、

男女之情先著者、莫若風也、微婉之詞尤見者、莫如興也、世之說興、每患其類比而易混、而及求之性情之原、祇將以其與賦雜辨爲患焉、知其辨、而後可與言興矣、夫性情之發、有直著物而見者、其詞爲賦、斥言而平敘也、有待擬物而足者、其詞爲比、引類而取象也、故二者、皆主於物、而興之爲情、專由乎己、愛慕悁懟之際、悲憤歔欷之下、藹然生、藹乎停、依委紆餘、眇微氤氳、如火之始熱、莫其炎也、艸之方芽、恐其折也、欲默止而不能、欲正言而不忍、終且因事之所觸、依目之所視、就思之所適、以起其端、而卒乃指其實、述其事矣、是興之所以先言他物、以引起所詠之詞也、其因所觸而依所觀、故其取物、或有始無意義者、樛木桃夭嘒彼小星江有汜之類是也、其就所適、故其取物、或有略得類肖者、關雎淇澳之類是也、而后妃之取摯鳥、君子之取猗竹、亦借其物、以爲我言志之端而已、非若螽斯指身必擬他物以道我意之比也、然則比之與興、詞雖似、情頗殊、而興之始也、直舉所有而終也、指實而述事、似將與平敘斥言以賦時情者抑焉、斯宜辨也、

送淨居大潮師序

自余登仕于府朝、海內祿食之士、若山林韋布之徒、幸不我鄙、懷刺通謁、踵門以呈其所能者、何其盛也、其間或有高拱徐步、規進矩退、爲將舉道德而明之者、其言曰、不知此、則無以獲己之實也、或有訓釋詮訂、剖析毫忽、將上究性命神鬼之賾而後已者、其言曰、不如此則無以明聖人之統也、聞余嘗論當世務、喜爲迂言、則有來陳鎭殺刑名綜理一世之道者、以謂、必如此而後可以奏濟民之功、聞余嘗却思反觀有以致意於自得、則有來薦簡易、捷直一蹴、可以超乎伊洛之口者、以謂必如此而後可以守治心之要、以神道、云則我邦之道也、奚求爲、儀章典故、則云我土之宜也、勿棄近而好遠、以詩若文、則含英吐菁、明體分趣、闖漢魏薄隨唐、思以倬大雅之音由我而振焉、其高下深淺、詭奇昧謬、脊脊並進、以陳於前者、我乃悉從延而納之、左右應接、欣然

不倦、知採其長以自益、未知襲其不備以相仇、蓋居天下之會而觀天下之材、樂亦可知也、唯今　國家法具而德洽、其所以教導薰陶、豈有強使之然者、然凡之抱才與氣、欲有爲者、爭者刮劘雕飾、糜盡時月、始焉欲罷而不能、終焉自喜而不措、其勢如有物推前而驅致之、而及其各有成也、則雖一節一藝之微、亦未嘗不爲百年昇平餘華可觀之助也、譬之天之於物、非道所強而熊熊、一値陽機之（⊙機之之下恐有脫字）下而春令之行、則群卉衆禽、爭皆揚妍茂、鳴和豫、以宣夫駘蕩之化、而彼爲物者、初不自知、而亦不能自已焉、　上之恩亦廣也哉、日者又有以解西音求鳴世者、其於士人、曰岡島生、於衲流、則曰大潮、倶肥州之產、每二人見訪、試其所習而觀之、曼誦則金石遞奏、疾讀則瀅轄齊起、唔語咿嚶、劇談嘈囋、如唄如囈、從入於耳而不通於心、宛然將與蕃外之民相面於一席之上、奇亦甚矣、而二人者、遂乃軒眉抵掌自詫曰、不通乎此、則無以言也、無以爲文也、方潮之歸鄉、過余請言、以壯其行、且曰、我有所學、然居通邑大都、則不可得成、明年必還以相尚、我聞、釋氏以道鳴擅市爲業、爲潮者亦嘗遂通寒處於邊陬窮山之中、獨甘以終其身、而特以有所挾、自忘其去千里西來、求傳其技、既又學爲韻章、務求去浮屠語以教諸才子所爲、歲月之間、如見有進、則其心再深、蓋學士大夫援求益於外、積功於内、成其所學、以參乎熙化文治之末、而後爲是者、雖潮亦將不能自已焉、余以是卜東旋之可期、喜以爲贈、丁酉之夏、

三宅緝明書、

讀隋書

高熲一世名臣、號有宰輔識度、而以一婦人語、輒被讒黜、雖時主不明、熲亦誠不愼、賀若弼父敦言、被宇文護忌、抵死、臨刑戒弼、吾以舌死、不可不思、因引錐刺弼舌出血、誡以愼口、弼亦諸楊素與熲、此二人堪宰相、因坐除名、而最後與熲私議朝政、承誅死、可戒哉言、

記財

管仲之術、如豪農内煮其海、鑄其山、力以致富也、計然之術、如大賈賤買貴賣、流行鄰國、巧以致

殖也、（計然曰、以物貿易、貴上極則反賤、賤下極則反貴云云）桑弘羊劉晏、併取二計、施之天下者也、然漢初質略、以鹽鐵爲遺利、故弘羊之法得行、唐季潰亂、鹽制漕綱皆亂、故晏之法得行、而乃至今日、無遺利矣、有定制矣、吾恐一有罅窔開孔、上下俱窮、赴亂之易、

論治敎

天下不可無治、而不可無敎、古之聖人、事兼治敎、後世人主、無可以敎之德、則口雖誦詩禮也、令雖施文敎也、竟是天下不肯信服、所爲縋持法以威之而已、至其敎則權歸在下、在下則善惡是非淆淆、則惡必勝善、非必破是、是以孔孟始初持敎于下、而逡巡之際、楊墨老莊蝟起虎挐、終而聖賢之道、爲其所壓、可不哀哉、今日佛氏盛門、吾未論到其言之是非、實亦代上施敎者耳、

復泰庵竹田君書

日昨辱惠長東例佳什、披誦再四、不措于手、自一拜面、即知　足下之學有淵源、守正採粹、不苟爲狗世求異、而　足下之行有規矩、抱和揭謙、亦不苟爲儇淺辨騁好勝之態、及奉此書、則行文之雅且緻、設論之博且確、殊非世浮靡怪僻之比、實九州東西一千里間罕有者矣、有若人來、欲與我俱論斯文、則豈可默默不陳所蘊於前而休哉、異端之蕪聖道也尙矣、特以釋老之害內、申商之害外、爲之魁、而其實値世降運否主昏而臣僻、則周孔程朱之說、難見尊仰、而偸慢淫靡之化、詐譎貪刻之治、固以行、自神宗之用周禮、理宗之崇道學、以至唐宋末明中季之際、廟堂公言、亦未嘗不依詩書禮樂、而一時政體人心之所赴、隱然悉萌乎邪、其間雖或飾以正學者、及考其所以立身應務、則事皆蹈曲矜技、徼利要名、足以敗當世之俗、是其言則周孔程朱、而心則釋老申商已、焉思是時也士之爲學、任己自高、爭爲詭辯者、則釋得不紛紛起哉、及値世道運昌主明而臣良、則釋老申商之說、雖見雜用、而恭儉敦睦之化、正大寬恕之治、固以行、漢文景二主、未嘗不尙淸靜、由刑名、唐宋明初創之日、未嘗不以祈福挾術爲事、而一時政體人心之所赴、渾然悉出於正、其間雖或說信邪說者、及考其所以立身應務、則率皆忠厚質愨、姦慝弗懷、足以輔當世之化、此其言、則釋老申商、而心則周孔程朱已、此是時也、

士之爲學、尊古務實、守而不遷者、焉得不比比與哉、且夫古聖人之於天下、治以始之、敎以成之、敎使一世之民、理生制行、莫不依上之所導、而政茲一矣、周衰已降、一任威力、其所以臨民、不過取惡之甚者、刑而懲之、豫擧敎化之大權以委諸下、儕莫所向、則其勢之極、必有如釋老申商公然抗旌而反者以出、釋老斁人倫者也、申商壞王法者也、斁人倫而壞王法、天下可愕可歎之事宜莫若焉、而尙且滋蔓沈痼、膠不可拔、則其他影冒假託、以逞私知之徒、咋呀嗣所、蛙食鼠竄、乍作而乍輟、彼興而此滅、其亦勢之所不得不然耳、固不足深以爲憂也、苟又非言語法制之所能諭化遏絕也、唯君子之反經、必有斡旋震發、滌膏肓、奪根窟、以拔彼天下在心之釋老申商、然後天下在心之周孔程朱、可得而起、周孔程朱之心起、然後釋老申商之言可漸戢、而周孔程朱之言亦可漸盛、即天下誤信之惑、未可盡就撲滅、而其所以立身應務、皆將忠厚質愨、姦慝是去、以入於牢籠範圍之中、而向所謂公然抗旌以返者、既來而爲吾道之輔矣、不啻不爲害也、故待其機則行、不得則尋建言書、書行以傳天下而已矣、豈區々以口舌相爭而爲哉、此僕平日所以卜斯文之興替以人心之邪正、而今乃誦以答足下勤勤被責之意、顧亦儒生空談、迂濶迂踈、口徒言之、躬竟不能爲之、矧世溝、運否、士心正而民風厚、間有異議如來書所云者、亦皆攻經傳、業敎誘、足以助文明之一端、則僕輩但當退步反省、守默止爭、與同道協志者足下之人、俱講明所聞、有疑相訂、有得相樂、優焉衎焉、以需理化之成於終老之際耳、然則僕之就而求樂者、當先爲請、而豈待足下之自薦乎哉、

盧經裒腹序

予嘗誦程夫子不可不知醫之戒、而謂醫豈易知、知醫有要、必擇稽古之精而閱疾之多者而委之、庶其不失也、蓋好乎稽古而不廣於閱疾者、迂濶拘泥、不能應機、比諸趙括之讀書、務乎閱疾而不本於稽古者、意揣臆行、不能謀遠、比諸霍光之不學、雖其識一世之法、奏康中之功、而要皆不能原至理而歸實效、均謂之庸可也已、事親者、其豈可誤信偏任、繼之上下以試

所レ天之驅命於不測之刀圭上哉、予在二水戸府一、屢爲二二豎一被レ祟、延二醫官藤子一攻レ之、或標或本、對レ症隨レ方、每レ施而獲レ功、其他府中士庶來請レ藥者、且夕累々相二踵于一レ門、而予平日博涉二經史一、好二著述一、於二軒岐之典一尤以研覃論討、無レ不下究二其要一以底中可レ施焉、前歲撰二廬經褒脉一、走レ書徵レ序、勤而不レ已、顧醫道之廣、不レ專不レ精、今之所レ述、當否精粗、固非下不レ專二其門一者所上レ得擬議上、即使二議而得一レ當、亦皆紙上空論、將下與二趙括一同中科、予於レ是不レ知二何言以塞二其請一、而特至下子之務レ予レ閱二疾而審二予レ臨レ機不中苟迂踈爲レ泥レ古、則面視親試、有レ所レ不レ疑、乃舉以爲下海內讀二是編一者上保レ焉云、正德乙未秋、平安三宅緝明撰、

斂齋記

人之生也憑二乎氣一、而氣之爲レ物、抉離是合、縱二其所レ之、易レ熾而難レ戢也、可レ渙而不レ可レ凝也、勢將下薰灼熛烱、瀾漫滲漉、不上レ知二底止一、而及二夫貨利食色愉悲得喪、可レ慕可レ愕之事、來而挑二之、又旣延而附レ之、牽而趨二之、物與レ物化、弗二復返一矣、可レ哀哉聖人於レ是有二脩而立之敎一、而後之能得二其統一以示二其法一者專以二收斂一爲レ言、蓋其不二自放一、不二自失一、肅々如三游魚之翕二其鱗一、翼々如三飛禽之振二其羽一、自二視聽辭容之於一レ身、感觸營運之於レ心、以至二好惡違順、避就向背、醻酢無窮之間一、恆有下所レ仰而稟二其本心之制一、以使中貪婪驕虐淫嬉怯懦之私、莫上レ不二弭伏一焉、則熾者日戢、渙者日凝、適將下薀爲二粹溫一、汰爲中精明上、以配二吾仁義一而行上、不レ啻不二敢作二我寇一也、人之得レ所二以爲一レ人、而與二凡卉木禽獸百物之類一不レ同者、要豈不レ在レ茲歟、今者懋二與人蘇生之嗣一、名二其居齋一以レ斂、有レ記、副以二贈其賦一、而生於レ學恭誦畢且退、乃命二之對飮、則舉レ觴滿レ屬而止、問二之故一曰我聞二養生家言一、不二敢多食一、夫口之於レ味、尤爲レ易レ饕、不レ容レ無二節以止一レ之、則心與レ身之易レ肆、不下爲二約束一以從中矩繩上可也哉、予還而省レ之、有二餘師一矣、甲午秋八月、

題二諸葛洞卷一

以二孫吳一論二武侯一者、固不レ知二武侯一之言也、而世之淵談迂議、徒以二煦々孑々一爲二仁義一者、亦豈知二武侯一、唯其難レ知、故稱爲レ龍、

某生名字說

某生請所以爲名及字、予有所應、則進請、昧其義、則忘其戒、顧有述以終之、予乃又應之曰、在易幹父之蠱、貞固足以幹事、所謂蠱者、父之志也、所謂幹者、子之道也、而幹之所以立、則曰固焉、幹之時、固之義、大矣哉、蓋人子之身、乃父母之身、支膚爪髮、營慮運動、皆其奉遺體之所行、無絲末分隙、可以爲己有、則存也、一舉一止、唯底其豫之是計、沒也一歔一爲、唯述其業之圖、全然舉終身之事、而狥乃父之志、靡有它焉、而後爲子之道可得而盡也、其或謂晨而省、昏而定足矣、暇則任自放、哀于喪而奉于祭畢矣、今則任自創者、雖使所爲皆善、莫至悖戾、而其實二有生之本、以限報于罔極、不足觀已、是予所以命其名幹也、而其或浮而躁、以失乎固、偸而以惰以失乎固、銳而求速、以失乎固、肆而忽近、以失乎固、有一于此、身且泛泛、不知所據、復奚以竭力于右左無方之中、致守于終始弗隕之外、趨走奉給、彌縫維持、得以安乃父之志而立爲子之道、而又奚以進而求古聖賢之法、是循是蹈、勇取無前、有以大建于當世、而可使鄉閭邦國爭稱曰有子如此幸也耶、是又予所以命其字伯固也、凡厥人字之、已名之、日常唱答、當以隨聲應心、瞿然爲警、而特思道之廣也、聖言之富也、何往不可取以爲戒、然及資諸當務之急、規諸所性之偏、則其約取體驗以覺者、當而有獲刺而有痛者、但有一耳、無二也、可心知耳、不可口言也、其猶金石艸木之毒、仲景思邈之方、皆可以醫、而及對內外之證、補攻之案、則其決擇投試、論胃洗腸、以就瞑眩者、亦但有一耳、無二也、可獨知耳、不可與它人言也、則今之所命果足以資其急歟、規其偏歟、生其自知諸、甲午秋、

與辻某書

接東承借蘭書集二本、領到謝謝、拙叢未施何讀、性懶身病、加以事冗沓至、無少暇以用功、當俟過談面同批下、自後以此爲例也、足下就問疑難不解處亦便、他容再晤、臘月初四

千代竹記

奢者不久、是雖鄙諺、亦不可以不察也、世之富家豪商、盤居于通邑大都者、擔夫倚門、馱背引路、

舟漕而穀輸、歲所レ入幾巨萬、公侯資之聘享、賓庶賴レ之憑生、吏司爲レ之側レ目、而安二坐廣宇一娛二觀綺園一、其膏粱鮮濃之美、走奴寵婢、視レ之如レ水、出也靚莊、居也溫毳、未下嘗手執二牙籌一啓上二簿會一、頤使氣指、唯其所レ令、饑饉荐至、調發頻起、而不レ知也、勢亦安矣、盛矣、然其暴二殄天物一、罔二羅地利一、剝二衆夫之膏一、而奉二一己之欲一者、歲月之間、雖レ未三驟就二敗亡一、而狷積怨凝、上玄怒而幽鬼瞰、殃豈可レ逭焉、是以父積レ之子散レ之、孫行乞レ市、獲三傳而至二三世一者幾希、哀哉、余嘗訪二東播人某一、淹留數日、主人出二一竹管長尺許一、示レ之曰、吾姻家在二攝丹生山一者、距レ此數里、相傳、其宅、大同元年所レ造、屋甍戶樞、雖二或改作一、架桷柱梁、一皆仍レ舊、如レ剝如レ刓、莫レ見二斧鑿痕一、是竹也乃墉壁所レ榦、色如二渥丹一、重倍二恆竹一、蓋故物也、吾愛而器レ之、命以二千代一、名亦稱レ焉、宅主之言云、吾家不幸、吾祖亦不才、自二大同一迄レ于レ今幾一千祀、而未レ聞下有中克起レ產樹レ業以大二其屋一者上、噫亦足レ爲レ笑也、余乃應レ之曰、是何言哉、唯其不レ興、所二以不一レ衰也、吾聞、丹生之山、深莽重阻、津都之所レ不レ接、舟車之所レ不レ通、居レ之者世皆農、異物不レ遷、非望不レ萌、男事レ耕、女事レ織、親爲力績、深耡而逹畎、粒粒縷縷、莫レ非下食二己力一衣中己功上、是以天之所レ培厚而能固、無レ有二兵燹盜掠之患一、以保二其家一、而到レ乎レ今焉爾、曩使三中世之主、殖レ利致レ富、出處二都邑一、則獲レ不下與二夫富家豪商一並倒上、而田畝什物永爲中己有上邪、予其以二是言一誡二宅主一、敎二之偸レ安忍一レ苦、以二至レ曾而玄、而雲而仍一、克守而不レ失レ之、則令之傳レ子二千祀一者、又將下延二万祀一而不上絕焉、把玩之餘、慨然又歎曰、是竹所レ閱幾世而幾人矣、自二王公將相一、以至二士庶人一、由レ儉而興、由レ奢而亡者、往往皆然、王室之季、上下狃レ安恃レ富、繁文末節是趨、女寵聲樂是尙、而 神武艱難之業、墜レ于二后王逸樂、臣工玩愒之餘一矣、而將家之起也、亦皆絕倫之才、高世之智、足下以攬二群雄一首中兆民上、則其爲二子孫慮一、固熟且密、而高レ城深レ塹、宏第巨址蕩然、嘗不レ能下與二是竹一存上焉、亦不レ以二其逞一レ欲歟、至レ若二豐臣氏一、身起二匹夫一、鞭二笞天下一、勦二百年之亂一、溯二一統之緖一、而內荒外靡、日自解體、或者書二奢者不レ久四字一、以揭二之路一、即令三援レ筆寫二不レ奢者亦不レ久其傍一、而淫蕩自若、卒不下爲二後嗣一貽中大訓上、

二世而亡矣、然則是鄙諺也、雖保國臨民者、亦不可以不察焉、

石井信行字說

稱子為可、而子知其所以可乎、事之可在人之從、人之從、在己之信、凡奉父兄、接事物、謹威儀行義、以至讀古聖賢之書、能心焉而不貌、躬焉、而不口、有自實乎己、則其道也、確然可據、坦然可踐、何往而不行、孔子言、人而無信、不知其可也、大車無輗、小車無軏、其何以行之哉、我於是字子以信行、

奉答酒泉老大兄左右　丙戌之秋

月初辱書、得聞左右清健安涉、暑時萬福、僕邇來取家弟同居、晨夕相從、天倫之樂不勝慰暢、推恩所係、實自老大兄矣。丘山難謝且承所寫寄村老人高文五章、命僕轉覽、其有疑問、悉許陳述、惟老大兄措意之高、藹才之邃、固非吾人所能容口吻、而其言而有謬、就取之正、亦求益於己爾、何辭、於是披讀數過、觀其答僧人一書、見老大兄之於文、固已用力苦心、粹雅温厚、究之瀟洒、而凡銜名衿人之行、一切遺諸胸懷、何其高矣、次讀孫子、始知老大兄所學不止[illegible]、而至戰天愚人僥倖一旦之術、斷乎弗為、何其正矣、又次而論八陣、辨地勢、雖孫吳法、採而取之、益知老大兄於韜鈐之略、諳練精密、非漫好大言者、而經之答問兩篇、破俗陋、退詭詐、推生物之心、明心勝之德、又益知老大兄之學全然根據乎斯矣、每讀讀至一段、拍節歎服、恨不廣傳此言、以為世綺章繪句、懷詭蹈危、自傷己德而敎人事之戒也、特至謂八陣襲獨地勢、不可用之鎭西地勢、與兵家才質、今推其意新制一陣、庶可用也、未知其說有何所據、抑亦高見別有所發軌、區區之疑不可不道、天下之事必有一定不易之法、亦必有臨時隨處之用、法者大體之所本、用者微機之所應、不通其用、則法不可得立、而不據其法、則用不以可行、僕聞、魚腹圖古風后握機之遺制、武侯推而演之、壘石為壘、置其法委于江流不轉之間、不特為帳汗劔閣偏安之業而設、至後蔡氏明其數之與卜筮律呂河圖井畫相經緯表裏者、固非譎士拘儒所能傅會、而朱子又收之禮經、以為萬世講演征發之定法、凡談兵家、未嘗不資以

取則也、其戰而勝者、得其法之一二者也、敗者始不知其法者也、至其明此法者所爲、則山林沮澤平原廣野之上、深淵高壘之下、以至夫萬馬馳逐、鋒合及接、紛紛綸綸混混沌沌、人不得顧足不得施之間、臨時隨處、當機即應、一奇一正一進一退、忽圓忽方、忽重忽單、不行而至、不疾而速、須臾之頃、不見其定、而綱落句連首尾相救之勢者、依然當存、譬諸匠氏之作屋、有輪然大、有窄然小、曲面之勢、各不相同、而其必賴規矩繩墨、以制其形者、未嘗異也、醫氏之行變、亦冒風者、亦被熱者、所觸之症、各不相同、而其必資君臣佐使、以施其方者、未嘗異也、然則此圖之制、豈以古今遠邇殊、而用而不能、特其人之不察矣耳、僕嘗言、八陣無定形、猶八卦無定象、應而無窮、用而神之、在其人焉、今謂囊蜀地勢制之、是以八陣爲如舟師之於江南、騎軍之於河北、不可相移之類也、則武侯南浦瀘、東屯五丈原、一援而斬張郃、再援而斬王雙、其亦爲部分隊伍、每推維圖紙本、以得勝哉、夫既以八陣爲不易法、臨時隨處、新制一陣、亦皆八陣矣、外乎八陣、有所以制、則無法之軍耳、不審高明以爲何如、至或者所云小八陣、以理推之、雖似有謂、而其孟浪無益、易親凶器、不啻括母笑之、使括聞之、亦將不足捧腹矣、京有商人、讀十三方誌曰、虛則吾參芪之、實則吾芩連之、寒某方暑某方、吾悉知之、何病之不療、鄰婦信之、延療其姑、纔三日姑斃矣、此亦可以喩世易言兵者也、知其大見、知兵而不言兵、常禮教而幾干戈、先儒之所大信且服、而僕乃未嘗讀兵書、未嘗審兵機、八陣之囊蜀地與否亦未嘗慣閱而索講也、漫書讀見、以供笑柄、更賜見誨爲幸不貲、時方新涼、所希自嗇、

奉答

昨者辱承枉賁、豐豐之談、每使人聳聽不知倦、而杯酒未乾輒命歸駕、曷堪悒恨、歸數所陳一卷領了、書中所及正確的切、眞後學負才恃氣者之針砭哉、僕前依竹田子請、許一語以辨卷端、到今惘然、不知所以爲言也、近日再獲拜晤、賜高明之緒、以爲下筆之資本、是新、

新井氏所藏刀記

劍者所以護身也、而身乃親之支、君之有、君子以

能禦暴、敵懾莫敢傷而苟免之是務、則其守子已捍子國以濟忠孝之大節、直謂一人敵而止也、或徒備狼鬬而事斬擊、其惡得異夫虎之牙、狼之爪、以資殘害噬攫守食撰肉之用哉、筑後守臣源君美之初叙爵、文昭廟賜以朝服、有刀副之、所謂絲纏太刀、實其陪從沃盥、積勞日久、以得寵異之隆至是、非恒常恩數所能及者也、其家舊亦藏一刀、傳云、父正濟有寮友藤四者、嘗出一顱骨破爲兩半、而視之曰、此吾伯兄少時與人有爭、刀擊而破之者、其刀猶在、名以獅子、正濟知其利及、就以百方購請、經歲月乃獲之、尤以寶而傳焉、蓋俗間謂顱爲鉢、鉢與八音相通、於數析八得二四、而四四又與獅子音相近、故以名之、且取雄猛之義也、君美後啣公命使皇都、匣之以隨、意圖使上方匠人、修飾外具、爲細太刀、而適以事謁攝政近衛公、得拜觀其祖宇治公所佩玉帶、每[illegible]以獅子、斗[illegible]圓眼、一蹲一躍、精緻活動、蓋古制也、君美乃告以刀故、請其樣以繪子室、公奇其事而聽之、其它上琫下裝釘釘圍鐶之類、亦皆爲倣其制、於是兩儀刀、備矣夫其一則君之賜也、一則父之貽也、乃在清平無事之日、殿陛至嚴之地、是物爲用、固不過云居安不忘危、而君美特佩恩之遇、而服父訓之遺、用[illegible]獨立刻厲乎清班、其資孝致忠、仰冀報効之志、常自[illegible]與永及[illegible]鍔、藏而在于室中者、相爲[illegible]備而弗備焉、是其平素所以立護身之道而與[illegible]家關業之緒、亦正在茲、爲之孫子者[illegible]而藏之者、宜以知二刀之可寶若此、而忠孝兼備之可重又若此也哉、臣緝明依君美言、謹述爲記、享保元年九月、平安三宅緝明稽首拜書

跋廣澤子所刻朱文公大極帖

廣澤子之所以摹鐫推崇成此帖者勤矣、頃者齎來請余一語、以侈其事、及披而觀之、則肌骨豐容之相依、筋脈起伏之相接、濃頭纖尾、怒稜銘芒、豐破文折、纖[illegible]條牽、或醜[illegible]成刻、或銷[illegible]成缺、或蝕缺成聚、以至濃纖混污、爛然成痕、體之所具、一毫靡失其眞、而精神氣韻既溢乎翰墨淋漓之上矣、且其自書題篆四字、跋語數行、亦皆有古楷織、前者蔚如殷[illegible]周鼎以臨、後者[illegible]如[illegible]璜琚瑀綴佩以垂、而首尾又系以小字分書、其大和豆、纖如絲、會不

使諸華之士嘆、於是大服其巧、不知機心之運、何以能然也、雖然爲巧有道、必精於書、博於學、而後可得、而若廣澤者、固併此二而有之矣、則海內游藝之巧、孰出其右、余學朱先生者也、而平素不習書法、故於其心畫之妙、不妄騰品評口强取、不知以犯自欺之訓、而吾目所至蓋亦留典形於影響、若有覩焉、乃拜而還之、正德乙未首夏　平安三宅緝明題

安積君墓碣銘

君諱正信、稱覺兵衛、奥州岩瀨郡飯土用邑之人、其姓藤原、實爲本郡二階堂氏之族、考稱藤內、妣安積氏、考之時、屬信濃守二階堂盛義、築邑以居、始以飯土用命氏、而不知與盛義爲親疎也、考爲盛義、守同郡須加川城、天正十七年、伊達氏攻取岩瀨郡、城亦從陷、考擧族四散、不詳所終、有子三人、長曰重政、稱太左衛門、次無所聞、君乃其第三子、自幼逃難、輙冒外氏、外氏亦同州安積郡之大姓、前後爲伊達氏所滅矣、君既長、與兄重政俱事松本城主兵部大輔小笠原秀政、元和元年、秀政令重政從長子信濃守忠脩、君從次子大學助忠眞、卒以赴大坂之役、當是時、海內控弦之士傳城下矣、夏五月七日、諸軍大戰城南、秀政忠脩、督所部力鬪死、重政亦隨死之、而君僅與儕輩四人隨忠眞、奮擊愈勵、忠眞中重創不能起、君乃單進斬一騎將、以其馬載忠眞、衝萬衆而去、忠眞賴免、一時傳誦其勇者、則必以國訓呼其稱曰於保依兵衛、謂其試而有功也、由是安積於保依兵衛之名大振焉、後以忠眞行賞不平也辭去、忠眞怒禁其仕、乃還須賀川、更復飯土用氏以自遯、隱居數年、客寓會津城主下野守蒲生忠鄕、忠鄕適在江戶、遣一家臣應罪者、齎手書以致、君披而視之、則命即誅其人、君讀已、顯詰以故、一擊斃之以報、既而意謂、以此試人非知己、不樂而行、自是漂游窮困甚、而聲價猶爲士林所重、有薦賀侯請以祿千石召之者、然以罹禁、事終不就、至寬永中、被水戶威公之辟、始獲出仕、委贄之日、公問曰、汝不氏本安積耶、君對以更復之故、公笑曰、我所召者、安積於保依兵衛耳、豈他之問哉、命從舊貫、賜祿四百石、君亟還人、報於忠眞、忠眞爲釋舊憾、召見有加禮焉、君後被

遇絶等、許二用廣嶽一、萬治三年七月二十八日、以レ疾終二水戸府一、壽七十有三、法號覺翁道參、葬二府下坂戸原一、君爲レ人剛朴決眞、心如二其貌一、而於二諸武藝士禮一、多レ所二講脩一、初忠眞之被レ扶而歸、即以二君所レ獲乘其一還二與君一、就記二其功於鞍橋一、至レ今家傳レ之、配佐藤氏、須加川之產、諱松、温而有レ惠、從二君於一レ阨、勤相終始、萬治元年七月八日、以二壽五十有七一、先レ君而終、後以拌衛、有二一男二女一、女皆嫁二水戸府士族一、男名貞吉、稱二介之丞一、號二希齋一、以レ病不レ堪、給レ俸自養、然好二讀書賦詩一、以レ禮自將、循循如二儒者一、安積紉作二淺香一、希齋以二其非一レ邦之本名一、而改レ之、生二子覺一、甫十歲、命受二學於　義公客明人朱舜水子一、義公屢頒二若之功一、與二左右一道レ之、及二覺成童一、輒賜二祿若干一以旌レ之、而朱子亦有レ書贈レ之曰、令嗣立二功他邦一、而　上公爲錄二其孫一、疇勳之至、可レ謂レ稱矣、覺今學大成、與レ余相知尤深、是歲改二建君碑一、要三有レ所レ識以顯二其烈一、則以二予不文一不二得而辭一、且於二君之事一也烏不二勇爲一、銘曰、

群龍血レ首、我奮二厥時一、斬レ驍捉レ馘、拔二主於一レ危、譽聲二一世一、乃銘二于卮一、噫今之人、有レ試者誰、

某年某甲子某月日　　平安三宅緝明　撰　文

擬古二首 以下行習齋反

君子莘〔一作游〕兒洛、壯子游〔一作莘〕帝畿、朱門當大道、雕樓欝娥々、春氣何氤氳、道路照裳衣、所營雖云樂、鬓髮恐頽稀、鷄鳴催駕御、臨歧雙淚揮、賜草勵遠志、贈矢戒忘歸、

其二

驅馬陟東岡、舉鞭指遠道、扣馬爲阿誰、垂鞭心若擣、餞筵在河渚、賓離畔秋昊、染成紫與紅、不如素絹好、朋友無良會、別離胡太惱、照予與我者、天上月皓々、

李陵

將軍李氏孫、降虜豈其志、立會單于廷、出援漢家使、笳吹不可聞、羶酪聊自醉、鴻雁日南飛、不向上林墜、

四詩 春

午漸半下花無言、曈曨日影透紗窗、畫閣朱扉春深沈、時聞金盆魚自翻、輕影小蝉相將下、拾翠多是顏王孫、戲追胡蝶捉復放、双粉翅上口纖痕、

夏

新篁稍晴石榴明、手倦遊愁繡難成、白日當墻上不得、風釐水紋羅幃輕、情覺香遠江南夢、楚雲疊鬆湘簟平、坐擁團扇未肯盼、竪窓前樹起蟬聲、

秋

金井欄上月榜徘、紅霄梧葉引纓長、誰家機杼寄促織、雜以高樓砧聲揚、夜色如水晶珮紗、搖搖銀燭淚成行、低聲連喚人不至、自嘗衣篋認舊香、

冬

飛雪紛々撲簾院、瑤堦曉開新粧面、往將折梅行呵手、屐痕蘚藉人已先、爐火紅消不復燃、猫兒依我情戀戀、報道倚壁十三絃、一夜凍折亂絲絃、

歲暮 元祿丙子作

流年何處逝、今古寂無聞、爲士老鋒鏑、爲農老耕耘、爲商亦不易、廣莫偏紛紜、利來而利往、錐頭覆三軍、問吾當世務、發憤滿臭壤、取願陽春令、只作共欣欣、手持酒量券、細占孟嘗君、此變應不盡、樓頭闌度去、

得後字 水戶世子恭伯黨、後架上偶得中山某、分其韻得後字、共有本末事有終始知所先後則近道矣十六字、以爲韻、諸子與館諸人賦、得後也、

萬金擲費化、六閑列廐後、彌斑雲錦色、色明成家部、餵以玉田芻、候伺親試走、輕瞪夕不起、涼涼交總柳、徐徐按中道、虬髯始鶺鴒、纖手朱汗滴、南轡青在手、將橫行沙塞、而圍獵楚藪、豈若爰所華、知我恩難負、公子今何在、仰天發嘶久、

人惠蘭一叢、以性懶不能養、遂轉付肥田君、君手自揀土灌水、愛護不置。至秋藹然華矣、欣其得託以賦、

幽蘭人不知、雖知養不正、賴得所託宜、奇芬遂天性、抽條釋礙累、孤花觀淸淨。寧爲楚人珮、不然魯翠詠、古來桃李俗、妖嬈執春政。厚顏巧嫵媚、敢爲向人請、此時絕伐姿。蘊崇恐喪命。不如歸中谷、秋水任意映、

夏日松宇賦謝招飲

竹閤長里餘、橫走夕日東。花堂相映帶、坐我潭潭中、喬樹不見頂、涼籟奏半空。波心天影動、菰蒲何蓬髮、瀰瀰一池水、意與銀河通。矧乃桂醑設、殷勤瀉厚衷。園葵嚼軟玉。海味蛸◎截鮮紅、不須出門送。弦月掛梧桐、

春江花月夜

華月滿江夜可憐、江盈月明花嬋娟、花氣霏微去復來、月光瀲灔絕還連、江水如錦輝欲流、流入珠宮驚水仙、浦遠洲長恍初見、芙蓉島旆沙棠船。頭上九鸞聲將飛、脚下雙鳳步不遷、正視凝眸何所覩、羅布六幅時々翩、唯恐天風吹就散、薄雲片段碧落懸。我有銀漢烏鵲約、意警容斂起飄然。何處衡渚求委佩、何處蘭沚索遺鈿、露珊珊兮烟冉々、花月不語江無邊、天上人間渺道路、千秋万歲盼山川。江南漁郎都不識、長抱蛟龍枕波眠、

谷生扨讀書舍、請所以名且戒、乃取束廣微補亡首篇以命之。因擬其辭爲採蘭三章十六句、

循彼南垓、言採其蘭、爾露之膏、于艾于菅、我髮如漆、我顏如丹。擯襪游甘、儀貌以端。有斐被服、上衿下襴。見彫寢野、鮮跳其湍、出爲衞心、不忘不嫚、不孝且順、人也洵難、蘭亦馨矣。親亦悅矣。行至中堂、薦醴授帨、慈以焉甘、糅以芬馝。會宗命執、歌謳如濤、慓慓承意、匪敢衞褻、其臧克獎。否亦云輟、世也多類、天也未崇、孝子逮時、樂且無閔、多類謂方淸平、天指父母、父母攸悅。悅在善身、俛仰求思、詢諸先民、匪灼匪揲、明告如神、帝之畀汝、赫赫不泯、奉茲周旋、夙夜祗寅、行于家室、延于國人、裕有譽處、薦爲卿賓、元吉介祉、孫子式申、

賀侍醫今井君六袟壽節

誰挾回生術、午探青雲春、樓閣埃壒裏、祝駕釋騏驎、人間杏花雨、釀成紅醞新、前部捲露袖、下陳梟筧紳、

酔顔老兎精、被服色如銀、玉杵三万下、丹成名練眞、
得此救世訣、歸來益以珍、試問天機秘、自壽今壽人、

得艇字

小樹容數人、自如坐野艇、其下碧漪漣、俯看鏡光冷、
魚驚游遂逝、鷗鷺降成竝、薫風捲荷氣、爲我滌酩酊、
忽聞急管起、懷抱足深省、撫此未肯言、前林一燈迥、

席上和梅花隱處韻

霜雪不可犯、君性愛栽梅、春光而夏謝、脫涼湖上來、
南薫浩無涯、手攬荷葉盃、城中塵埃深、白日相驅催、
登樹多感嘆、今古閲劫灰、雲霞意茫々、羞我匪仙才、

題文房四賢傳後

以レ器作レ傳、不レ作則已、作則不レ免レ出レ戲、如三韓
愈叙二毛穎一者是、而附レ象引レ類務馳二奇巧一、以迎二
人喜笑一、比下之漢賦有二規諷一者上、抑亦下矣、況余之
作哉、因戲賦二古篇十二韻一、

君不見古有禹稷契夔者、治淬驍猛足胼胝、纔之播種
與勞徠、禮樂庠成神人宜、又不見古有丙魏房杜者、
赫々盛名竹帛垂、却從史氏求相業、跡無可見德可思、
二者譬猶四時更、序行功收民不知、雜霸純王且東閣、
來問斐詞道何其、經國須與若人俱、治楮要取此器隨、
天生百物寓至理、把玩平日有餘師、几案廊廟均爲政、
欲割社肉分鄕耆、漢儒逸氣奎凌雲、詞賦豈足存諷規、
益信大雅悉凋喪、俳優語成足愛眉、莫嗔文士文爲戲、
它日平準記者誰、文爲レ戲用二斐度事一、

壽善書某七十

乃翁把筆大如椽、龍蛇常逐隻手飛、濃汗行潦不能容、
直溯天漢作墨池、一揮傾瀉夏雨勢、蹦鞋點黷意所之、
檀軸蘭卷屛牖障、碌扁綠榜雕門扉、下視人間書題遍、
業就名立四方知、是時却步黙無言、靜執執事觀希夷、
毛穎性命甕中禿、玄卿歳月泓底澌、唯我谷神長守舍、
養以寡欲行以慈、滋潤敦厚天栽培、圓顏春入桃花枝、
歷歷數至七十旦、律調中和東風吹、陽布德流時恩深、
身與群物各自私、都堂能吏翰苑秀、堦芝廷蘭影參差、
況向天上控驥騏、頭從夢中卜熊羆、併子有祿且有孫、
乃翁到此舉案危、飛花晴度琅玕席、欲使鶯囀奏塤箎、
滿堂方唱南山誦、富岩雪映華髮垂、其人本仕二侯國一、後登二薦府朝一、長子爲二儒官一、次子爲二政廳書史一、父子三人並食レ祿、長子前已有二一男一、次子頃育二一男一、壽日在二二月某日一、

奉和瀟泊先生憶故園梅

飛燕眞天人、氷膚能耐冷、憶有梅花宵、獨守雪夜永、
瓊戸與玉欄、中護一枝影、月落人未來、華心正耿耿、

得二一字

頓覺雙袖有所失、秋風秋葉四海一、井底影落老梧桐、床頭聲楊新蟋蟀、東道主人西土禪、淸氣崢嶸玉爲質、我不飮者須亦醉、醉時直枕美人瑟、

和烈女韻

松栢鬱茂晨、桃李搖落時、舊賜有羅衣、棒篋獨徒移、將槃在何處、楊柳千万枝、委道三匝拜、紅顏忽摧萎、天日不可戴、妾心不可欺、鐵鋏換金釵、被服絕相宜、綠珠猶先主、紅線克酬知、纖手提血首、鬢鬆隱風吹、貿之君墓前、微笑發舊姿、一片脂粉氣、万丈虹霓垂、妾今明白死、天地何所期、

奉和安老大兄釣魚作

使心與事乖、何若遂樵漁、行吟烟波上、一吐詩書餘、遵渚求美人、綽綽紅芙蕖、去把釣鈎直、從君長羨魚、

二月三日、遊消齋看レ梅、分二探晩溪寒水照一、晴日數峰來一聯一爲レ韻、得二照字一、

梅華可望不可料、曲灣湛滿描風調、素花亂點水中天、纖月涵影俱窈妙、美人多愁故多瘦、粧樓曉開鸞鏡照、斯須天風捲平波、魂返枝頭忽一笑、

重九日遊二郊外一、分下探秋風集二南澗一獨遊亭午時上爲レ韻、得二澗字一、

九月九日命友侶、五歲六歲携童丱、手折野花珠露滋、穫後平田寬顧盼、碧空中插筑波峰、其旁依稀着片鴈、人物共是闔以西、萍合蓬轉久爲慣、肆游梁園與燕市、聊將寶劍計巧宦、淸時事業幾兩屐、載酒每博千歲患、議且登高永優游、此言滿座皆左袒、連引金觴把紫蟹、落帽風流與可扳、坐久白雲飛去盡、悔心汾上輓貽訕、傾略今古引頸望、夕陽有人釣南澗、

和三喬木子壽二家君道室翁七十一以拜賀元祿戊寅作

不管人間醉與醒、歲登七十玆康寧、家繼聰明好男子、夙著綵衣陪戶庭、嚴訓德敎總無事、靜養動節只自聽、健行泥上幾兩屐、執杖靑春學延齡、中宵獨起繙周易、耿耿燈明長眉靑、請看屋上雲漢外、不是德星卽壽星、

擬木寺相模歌見二太平記一

金戈鐵戟兮閃電馳、磐石鳴鏑兮雨雹飛、天帝之子兮坐指麾、羆貅虎豹四披靡、

六言

抵午蟲聲未絕、入秋人跡愈稀、心頭幢幢來往、世路茫茫是非、

五言

諸葛亮

我愛諸葛公、夜半起長嘯、胸中何有藏、業業漢宗廟、

倭刀

倭刀長三尺、百越足横行、幾歳腰間佩、有時手裡鳴、

有感

東市貿緇布、作我迎新衣、不知天下士、得無寒與饑、

水道橋行人 茉亭八景之一

我視郛橋上、人行似蟻行、行行行不絶、將各有經營、

偶作 一本作聞蟲

一本虫聲唧唧
候蟲徹夜鳴、不知底喜怒、天下不言者、亦須內自訴、 一本不平者

哭亡兒

却藥情無語、飛霜度曉庭、片魂何處逝、帳底一燈青、
今知凡百事、紛紛爾自愚、紫綬紅錦囊、儼盛米字符、
兒郎其捨我、泉路與誰行、可憐倚眠裏、猶爲搖撫聲、
言乳母
何庸周汝身、一丈白雪絹、遐徊裁且縫、裙帶領袖緣、
泥路北阡滑、烟波西日斜、悲風吹不止、併葬落梅花、

歳暮

撫躬有餘責、居官無寸功、爭如蓬頭婦、爲主夜裁縫、

和偶作韻

雨過天侶水、風至坐如舟、夢到滄州上、吾傍出白鷗、

七言絶句

奉和西山公 丁卯

公詩幷序曰、素聞三宅氏探學淵飲文字、不意邂逅于此、酌酒闌叨扣短律戯座客、久
驚我耳轟雷霆、風度相逢水上萍、時雨一過凉洗暑、忽開柳眼放垂青、

君威雖本比神霆、臣義由來非水萍、時雨和恩齊至處、眼前艸本一般青、

和水戸春初有競馬

春入行雲漾漾姿、滿城白馬此馳奇、遊人橋上傍漄立、欲折綠楊絲一枝、

和

曲塘湛碧映花顏、傍有第村万樹環、獨木橋頭倚笻立、滿皐落日鶴飛還、

謝三人惠梅及金絲烟一筐

投我江南梅一枝、相思剏又結金絲、煙霞隈處忽如見、姑射神人氷玉姿、

出塞

繡雲褊襠羽林兒、賜宴平陽醉初辭、直向玉門關外去、
家中少婦不相知、

又

迤邐長塞入黃雲、唯有悲笳日暮聞、一片枯髗漢時骨、
收爲飲器饗三軍、

病軍人

嶺外盡燕塞外霜、歸來羸馬得扶傷、不知閭左悉調去、
滿目荊榛顚病床、

和日向守進藤君述懷五首

游雲芳草事依違、千里思人月照扉、遙識長安秋意動、
建章宮外夜擣衣、

浮沈本自學乘除、憐子孤眠眼似魚、湖海今宵風雨甚、
六月廿八日、夜風雨頗甚、床頭又啓古人書、

知我髭鬚未皓然、談論稷下寄流年、官街唯恐後塵犯、
公子馬驕文似錢、

形影今爲兩地人、寶刀無恙護長身、功名不與黃金散、
管葛當年共是貧、

莫復豪華尋舊緣、風塵京洛意茫然、爲君欲寫東台興、
蒸踏雲霞收上篇、

寄花懷舊

爲誰能白爲誰紅、吹斷年年桃李風、午夢回時人不返、
一庭花影隔紗窓、

辱被二白川侯盛招一、宴二其園亭一、賦レ此奉レ謝、

滿園嘉樹擢琅玕、徑掃流雲陰洞寒、自是侯家春日長、
蓬瀛將緣上欄干

觀二趙文敏畫一陶潜飲レ酒圖幷詩

千里王孫遊始歸、菊花莊畔倚欄時、興來呼取白衣酒、
不信山河醉裏移、

松宇小集

桃花無語倚籬笆、烟鳩西頭數暮鴉、銀燭不搖深院雨、
胡琴一曲說平家、

同席上賦新燕

春水紋搖來有期、頡頏偏傍萬年枝、不知何處寄毛羽、
三十六宮簾影垂、

和若冲子韻

風自星河南畔來、暮霞飛盡水浸臺、滿堂花月明於晝、
又勸掌中紅玉盃、

冬夢和歌題

遍身唯覺羽衣寒、銀闕瓊樓十二欄、忽被天風吹夢破、

雪埋窻外竹千竿、

夢兄（兄時在江戸、元祿甲戌乙亥兩年之作、）

忽到東關万里天、朱門多少畵神仙、覓君不得（◎一作見）欲歸去、去在空梁落月邊、

贈梅友人（在水戸作、其人乃京師之産、）

手折梅花鶯未知、薄霞落日遠蹤離、關山不送淸香至、無限春愁寄數枝、

郊行

夏潦漲來橋欲平、颺揭身在水中行、孤筇不識何行止、一片閑雲任意橫、

登寅閣春◎

褰袂楊眉意跨鵬、飛檐傑閣曉層層、風濤不起瑠璃碧、坐視東荒日始昇、

題鶴有佳齡

鶴群松樹最高枝、雲護稚雛出岫遲、不管仙碁亘勝敗、碧苔磵上立多時、

春閨怨

鏡鸞影瘦曉樓寒、寶鴨烟輕午雨乾、滿地落花欲春暮、美人立盡玉欄干、

又

南陌紅塵柳栁絮、雁書鴻信事難豫、晚風簾擁燕雙雙、飛上敘梁追不去、

春情

燕子傍人恣自飛、晴風陣陳撲羅衣、欄干十二花如霧、春色還從何處歸、

和碧於亭春興十首

追夜爭開兩岸桃、晴曛霞氣散林皐、不知春浪生多少、十里浮萍綠沒篙、

湖陂如鑑欲浸天、家住曲塘翠柳邊、幾日蓬丘消息絕、立看双鶴下靑田、

滄波任逝日遲遲、芳草低烟關意時、仙夢路迷花樹裏、不知鶯囀在何枝、

午夢尋常禽喚醒、有時植杖伴畦丁、興亡莫向陳編歎、艸色湖光自眼靑、

數聲玉笛起誰家、竹籬褰來坐日斜、應是暮雲歸未得、隔湖一樹白櫻花、

行驚睡覺時物幽、孤村偶認細烟浮、探春欲究銀河遠、楊柳灣頭立喚舟、

墜紅不起鳥啣餘、滿砌苔生夕影踈、客問時新何處得、脆軟膩滑盡園蔬、

爐底餘香撲鼻微、遠林花落雨將飛、筑峯罩在烟波上、
一點春愁雁北歸、
庭院晝長芳艸滋、不嗔樵子打黃鸝、八行如畫紛相過、
正是春城市散時、
花下壯顏帶酒紅、眼看春盡倚東風、層巒十里湖千頃、
併入清吟朗嘯中、

落葉如雨

千林槁葉落秋風、切切凄凄聽更空、遙憶吳江楓樹岸、
有人向月揭孤篷、(缺)

席上得風字

向晚流霞噴水紅、壓湖欄曲倚長風、可堪岸樹沉沉綠、
新月一痕彎如弓、

拾二翠上野一、中有二土筆一、因題贈二京師人一、

楚野晴曛露欲晞、抽尖脫胄巧成圍、迨迨芳草王孫遠、
細鴈春情催〔川カ〕使歸、

千年寺在二丹州一

數家映帶斷堤頭、楊柳灣深欲下鈎、芳艸斜陽思何限、
分明一道向東流、

千年村

芋栗可蒸黍可炊、里中父老似嬰兒、年年秋稅來輸吏、
不識大宛名是誰、

千年寺

鐘聲昏曉出華臺、老樹幾株門始開、時有村翁來納拜、
金身丈六色如煤、

葛城白雲垂裕堂八景、用二步虛詞一

山都供役撼雲根、雲湧天南葉葉翻、架作銀橋長万丈、
仙人赤脚躡無痕、

談路島雪

島影孤懸海正中、倚欄人指雪巃嵸、曉光冷透古關夢、
猶自飛鴻鳴向東、

茅渟遠帆用二竹枝詞一

醉扯阿郎別意酣、快帆開處水如藍、好風好日三千里、
斜掛婀娜向海南、

武庫晴嵐

埋甲沈戈餘怒驕、頑嵐自潰四飄颻、九原欲向忠魂問、
兵氣營隨王氣銷、

日野暮雨

酥胸凝雪透龍綃、趙妹◎妹歟嬋妍名未銷、誰嫁村前買茶
客、即今暮雨賦蟏蛸、

吉見里月

白板雙扉連水涯、竹深正見酒帘垂、醒來月上前山久、
一里寒砧搗起時、

興津沙鷗

離披千翼半空斜、浪拍長洲墜素霞、自是塵機應不觸、
高秋理翮曬晴沙、

佐野商客（大家俗語衆共公然五意）

素封子弟不知錢、樓上清歌日夕連、万斛巨艨爭入港、
大家擊鼓犒長年、

千年山（此詩當レ在二千年寺之次一）

何峯不與白雲齊、猿子呼朋下飲溪、往往樵夫爲相語、
桃花滿洞有仙樓、

以某人和歌末字爲韻

寒日涵江烟水渺、流年疾似歸飛鳥、明朝應在惠風來、
楊柳條上情不少、

和安積氏泛舟仙坡（仙波有二觀音堂一并堤、種以二檉柳一、）

不レ信湖波暗自東、棹停十里綠荷中、柳堤日落行人少、
路向親音閣下通、

奉和澹泊先生憶老蒼園落梅

東風一陣睡餘過、不識黃鸝謂我何、勿爲梅花苦回首、
關山月小笛聲多、

席上圖下古來鶴髮翁、餐レ英飲二其水一一聯上、得二
來字一、

豫期仙客逐香來、籬落縱橫皆手栽、夜倚闌干欲眠熟、
夢中黃鶴舞蹁躚、

和安積君詠菊九絕

君家何事最稱忙、種菊早苗兼晩秧、天報閑人亦優矣、
滿園錯落萬金黃、

霜將堅至露淒其、嫣笑曉來爭弄姿、不禁香風吹四散、
一雙蛺蝶夢多時、

須著工夫期晚遲、寒花苦節卓園籬、黃裳孰爲蕭然立、
栗里秋風獨酌時、

昨夜重陽雨未乾、秋光索漠數枝寒、無絃千載知音絕、
須把衰香好意看、

每値風情輒舉觴、年華染盡菊花黃、使人坐有昇仙意、
一陣清風衣亦香、

三千賓客一色籬、裊々流香入手巵、吾解長生與君付、
醉陶陶地對花時、

凜乎風烈晚揚香、報說花王下廟廊、竟是春叢容不得、
白衣黃髮老人粧、

半生長醉色如丹、愛遠庭籬受薄寒、空使仙莖高百尺、

金華玉露曉團團、
桃李過榮梅極寒、秋風斜倚竹雞安、楚平眞解行藏意、
苦爲君王加一餐、

過法輪寺

川源迢遞萃秋淸、佛閣鐘樓晚更明、月滿寶塔森万樹、
空山響起讀經聲、

薄暮、奴於二鄰寺一得二桂花一枝一、以爲レ獻、即
插二竹筒一掛レ壁以看、

壁插桂花懸竹筒、天香吹墜一春風、燈光倒射婆娑影、
身在瑤堦瓊樓中、

首夏

一雙乳燕自參差、綠入南薰檐樹斜、夢裏途窮醉且坐、
照人簾外杜鵑花、

山家雨寶永二酉四月賜二宴於二駒込第一

門臨林表白雲衝、多少可人山氣濃、日暮簾櫳一過雨、
坐看新綠上巖松、

暮春陪駒込別莊花下宴

檻俯小橋行客紛、南陂萬頃碧波文、艶陽掛在匝簾上、
霏拂花香人欲醺、

季夏賜二宴靜壽軒一、賦以謝レ恩、

匝檐雲在鶴將侶、竟日山靑人自閑、一逕瑱肝何處路、
誤延塵跡到仙寰、

奉賀知命

坐對南山挹碧霞、蓬丘勝事歲年遐、壽觴欲向瑤堦滴、
秋半風光菊未華、

再奉和西山公

露談瀼瀼起風霆、難遇海中兩葉萍、跂望幾番回首處、
雲披忽喜視天靑、

壽某母八十

華顚瑞雪氣津々、但解含飴開笑唇、自是後堂春雨裏、
不蔣諼艸却栽椿、

五言律

奉挽源義公五首

扶桑太平會、麟出角崔嵬、後樂先憂志、兼文備武才、
折衝鄰遠震、止殉世風回、驚聽廟廊上、拉然梁木頹、
偃蹇藤蘿宅、西山隱若城、撫床年荏苒、訪馬氣崢嶸、
醉語皆忠慨、放歌亦性情、寥寥夜臺下、不起奈蒼生、
斯文將墜地、掩袂久歔欷、袞鉞嚴周史、衣裳間漢儀、
道窺神冊秘、歌起雅風衰、拾藥成功畢、令人撫卷悲、
邦家唯有讓、子姪本無私、自棄連城富、人稱百世師、

行藏如避俗、辭取不求奇、今日應含笑、身歸梅里碑、
人向碧寥去、士民雙淚揮、中原餘岳色、分野沒星輝、
長夜龍眠穩、一丘虎踞威、遺歌何處是、雨灑故山薇、

寄京師友人其人本居二東叡山一、近遷二京師一、適會二大火延一レ燒禁內一

欲問遊春好、長安事若麻、鵑鳴孤館雨、草色万人家、
夢絕關河遠、書來歲月賒、何時台嶠頂、褰袂挹流霞、

席上賦皇家雪

形庭飛雪起、璵響遠珊珊、瑞納年豐奏、恩推邊戍寒、
撲珠鷩扇雉、被玉肅儀鸞、欲識微行處、趙家夜宴闌、

有感望二士峯一

雙劍函關在、窮陰蓮嶽晴、天無妨崷崒、歲亦欲崢嶸、
琴裡雪長在、人間雲日生、片愁應不至、曉黛拂空橫、

歲暮會長島翁

來就葛僊飲、一庭霜月沉、壁懸淇澳綠、籬落洞庭垂、
莫奏陽春曲、未裁歲暮心、龐眉愁不上、對守地爐深、

送人省父京師

西指君歸處、白雲我故鄉、江湖萍兩葉、風雨雁雙行、
渭水秋將老、帝城樹獨蒼、遙憐老萊子、披錦醉高堂、

夜行夏和安積氏韻

長塘人不至、爽若九秋深、野水全浸月、村燈孤隔林、
幽螢流草際、晴露滴松陰、吹過芦葦岸、微風適啓襟、

貧女寄二諸友一、蓋歎二士人不遇一

不因才與色、薄命一生沉、善舞無羅縠、巧梳有竹簪、
羞作他粉面、欲守妾丹心、嫁爲商家婦、月前細擊砧、

殿閣生微涼

伏退方無事、殿深初覺涼、紅蓮涵藻井、壁月上彫梁、
雲逐鳳笙緩、風傳虬漏長、君王午眠起、奉旨索蔗漿、

八月十六夜

晚光揚水郭、晴響下鐘樓、亂樹千般月、斜河一片秋、
高城莫聞笛、滄浪欲浮舟、不識長安客、倚欄尋舊遊、

偶作

不是求春興、大吟心得餘、嶺雲人意近、郊草燕來初、
有待春蒔菊、無營晝讀書、知君交道切、淡淡水亡如、

和題菊

秋華宜夜月、衣薄立庭皐、香噴銀蟾氣、光分玉兎毛、
稍將霜下節、欲向斗間高、寧耐摘盈掬、五更命濁醪、

劒

何歲良冶手、寒光始發硎、一揮神出沒、傳看氣縱傾、
不恨方無用、所逢是太平、持來示胡客、此劒夜相鳴、

會笠原待蓮字夏

箕踞逕蜿曲、睨彼鬱蒼天、遙引銀河水、欲灌玉井蓮、流盃酌幾回、午枕倚潺湲、胡爲歸鞅緩、甘瓜割碧圓、寺原在二水府南一、圃阜業好、泉澗冷冷可レ愛、上有二不動寺一、號二銀河一、

六朝體

難波客居 君時十八歲、元祿壬申作、

乾坤一病客、無處不僑居、劇地風流少、新移朋友疎、門前留海舶、月下讀鄉書、時復洪河曲、躊躇獨羨魚、

歲暮

官游無底止、復向武城還、鑽紙向裨補、借枝亦臘閑、杯啣春氣象、樓納曉江山、不耐高堂鏡、殷勤照厚顏、

歲首

即覺春聲洽、歡娛合巷歌、鉛槧擬報答、醺醸挹雍和、依海鷗浮遠、向人鶯語多、年年明鏡下、濟否復如何、

和淡泊先生自述芳韻

片鴻何處沒、對面筑峰生、遠夢樓頭睡、清詩月下盟、每從黃菊飲、輒曳白雲情、公退西窓霽、諷歌聊自榮、

席賦蘆菔鹽醃

御寒還索冷、因是酒相侵、脆向編貝碎、清通華蓋深、雪邊啣片玉、月下嚼黃金、眞耐富壯士、牀頭顏色淋、

僚友廣前韵即和

斯味甘加薺、可防世熱侵、氷膏巖下結、松液池中深、滿柈陳黃琮、隨刀拆粹金、淩除胸所蘊、沛氣潤將霖、

同席賦茶烟

欲讓春陰暖、還遮雨氣濃、簾外霏千縷、室中彌一空、勿訝團鏤鳳、能使鼎騰龍、晩來清夢絕、香颺落花風、

仲秋侍二准后法親王宴一應レ令代作

欲攀天上桂、浩詠倚南樓、萬里徼雲盡、千山孤影周、輪留烏鵲渚、珠墜荻蘆洲、不レ識嚴城曙、露華盃上浮、

山家紅葉 卯年之秋日於遊

自匪松杉操、山粧一樣同、人間物皆醉、門外葉都紅、一作山下 無客停車看、有僧寫字工、席上有レ僧、一善レ歌、一善レ詩、 勿三誤題二玉女一溪水好媒通、

七言律

拜楠公墓

一從廟算喪元勳、海自蒼茫山自紛、當日臣躬唯粉碎、後來皇統遂瓜分、血凝地上靑靑草、怨遏嶺頭漠漠雲、不信桑田人代改、到今南向涕孤墳、

席題石刻文山忠孝二字屏風 室直清之家藏、

難奈胡兵飛渡江、文公丹血獨爲腔、節委穹帳應全雨、字勒堅珉長作双、終古風雲暗柴市、至今日月掛桑邦、

蟹冠爲問綱常重、不特千鈞筆力扛、

比叡山

誰計梵宮兵可栖、盤扯層頂絕板蹐、五千鐵騎英雄北、新田義貞奉レ帝據二此山一、拒二足利尊氏一、兵敗、率二五千人一北走、帝與二尊氏一和還二京師一、一片王旗日月西、往事江流何處逝、遺羞山色于今齊、最高唯有冬晴雪、富貴諸公把筆題、

臆西山公辟赴水戶

倚闌攬轡立多時、身逐東流何所之、長水雙鳧眠不解、平田獨鶴立如思、雲尖欲雨前邱遠、天末無山落日遲、不是涓人能買骨、金原多馬好追隨、小金原有二牧地一、

◎奉挽源義公

扶桑川岳鎮岧嶢、誰跨白雲攀碧寥、西狩篇終麟角折、東門地柝犬牙搖、薇肥春雨歌方歇、梅落故墟番不銷、空使閭閻丘下劍、精光夜半上沖霄、◎

送某人番上江戶邸在二水戶一

踈柳曉搖秋水紋、忍將双袂別紛紛、筑峯天墜孤鴈影、金野風鳴萬馬群、客店就活醪似雪、王塗行見稼如雲、與君割與海東月、公退樓頭細照文、

有感

世途九曲險如濤、聒耳園林閙伯勞、流氷桃花賦招隱、殘鐘曉月讀離騷、抱兒一哭策爲上、學佛不言文始高、飛絮滿庭春欲盡、爲君强酌醉醄醄、

偶於二篋底一得下水府人某某本京師人、和二九日登二道灌山一二章上、有レ感賦呈、詩中下レ註、亦欲レ衍二懷舊立意一耳、

被復風吹萍葉離、往與レ兄同二居貴府一、送二其歸一省京師一、有二江湖萍葉、風雨離双行之句一、波濤殊響夢回時、塵飛洛浦美人盡、嘗京師昔賢曰就二香落一、則洛水麗姝既隨二薩下之芳塵一、樸然滅矣、霞滅台峯羽客稀、自レ遷二江府一、每有レ攜二諸翁祭一嘗二花東叡一、而簊溪也、潜鋒也、岐陽也、相繼下世、則與俱堪二覆亦城一、以賡二韶華一者、更幾人矣、吾石多年從學釣、兄素巧レ釣、常釣二城下一川一、而屢從學不レ成、以レ拙見レ笑、鬭害一夜對彈碁、兄書與レ予敵手、思別後已着先矣、功名十歲不無得、自比麟麒擁兩兒、聞兄有レ男、予亦有二兩豚一、

和二其人陪二某公仲秋泛二舟大井川一

木蘭船泛欲何之、天末佳人明月詩、湘瑟無聲一水碧、星槎有路雙艇歆、盃凝瓊露醉愈冷、堅躍錦鱗歸故遲、不知流波般耳去、仙娥竚在白雲涯、立イ

和某人題竹始賡二其作一、奇才可レ服、

幽人與竹可相憐、影拂塵埃翠四連、鸞葉舞酣依片月、龍梢怒霧側枯烟、夜窗玉枕一叢雪、曉閣瑤琴百道泉、誰採斯村伐爲笛、聲飛韶奏九成邊、

九月十三夜會某氏亭此夜風疾天寒

不怪鳧鷖群且飛、池臺倒影月參差、寒凝玉宇輪昇緩、
風驟霓裳舞起遲、菊意易荒過盛日、世機且逐未盈時、
江城秋釀家家好、肯向關山笛裏悲、

和老圃子土浦眺望韻

茅店聊堪袒葛衣、酤醪稍厭買魚肥、野繞巒岡鵰掠過、
城連灌莽雉將飛、祇今朴俗市正午、弔古征人臨落暉、
亦賴當時防禦力、百年我輩得依歸、自二江府一至二水戶一、館驛蕭索、百需難給、唯土浦城可レ得二魚鮮一、而沽酒醪烈不レ堪レ盡レ杯、江府以東民尙限レ日成レ市、以レ物相貿、東照廟擊二逆人石田三成一、時遣レ兵屯二土浦一、以防二佐竹氏一、

賀致仕前伊豆守木下翁八十壽日

心機久已付棊枰、八十春秋雙眼靑、白日飛神遊北闕、
清晨叩齒漱東溟、恩流戚畹推波遠、芳振家庭嗣德馨、
與君競誦畝立美、松柏作榮椿作齡、

舊春百景園至來堂小集

縱它微醉帶餘寒、城角高堂共倚欄、長水西來春欲晚、
數峯北峙雪猶殘、柳烟縹渺度珠箔、花氣霏微入玉盤、
小徑羊腸園十里、流憩秖恐足心酸、

九日和室子韻

門向金城萬雉開、游雲列樹宋公臺、翺闌華騎蹴塵去、
市遠老丁沽酒來、北地秋高魚可蕺、西山晴遍雪成堆、
祇亦應申君子約、年年黃菊隔籬栽、

歲始作

植松植竹茂如林、何處朱門春可尋、公事戴星陪下陳、
年豐卜雪對前岑、平生刀筆有涯智、時節鶯花無限心、
復向東風斟自壽、顏紅歲歲鏡中深、

和京師人被寄鴨河韻

一帶長川滔不休、畫橋照影瀉襟幽、三更燈火波心市、
十里歌絃岸上樓、杜父魚肥杯可舉、午王廟古葉將秋、
爲問東溟不歸客、夢中聞水聽清流、鴨河出二杜父魚一、爲二名產一、可三以爲二羹一、午王廟謂二祇園一、

送處士某遊長崎

海徼繁華萬里程、天將殊觀寵君行、侏㒧半雜美人語、
肥腯常調上客羹、闤賈樓頭看月落、蠻奴檣杪候潮生、
歸來腰佩于闐玉、莫復鏗鏘鳴不平、

某人宅觀二紅梅一賦、用二某人韻一、

韶光三月滿江城、醉倚南樓花正明、影襯羅韈欲未起、
氣蒸沆瀣滴初清、畫欄應使紅雲遏、檀板爭翻白雪聲、
別有暗光吹不斷、沉烟裊々透爐輕、時代床敷以二紅氈一、

郊行

晴郊連輿踏靑春、得似帝京士女紛、野馬不羈仍自臥、
汀禽何意競成群、殘花畫篁牛娘廟、老柳春歸木母墳、

千載王孫去無跡、空令芳草亂如雲、

芳州雨森子宴席題₂鳳凰來儀₁、末寓₂別意₁

堯舜文章五色明、鳳凰毛羽九苞成、濟蹌徐轉丹丘步、律呂遙和嶰谷聲、梧蔭栖深華露濕、蓂階立久瑞烟生、自追簫響去無跡、海上白雲千古横、

和相國寺緣師 緣師謁₂江戸₁、袖レ寄以レ詩、而事故不レ得₂一握₁手、輙歸、而事故亢

江東書劍負華年、綴閣若逃夢裡天、唱梵聲飛迷秘擭、寺帶₂行香禮₁降天仙、行香用₂宋相國寺事₁、花營文學緇門選、足利氏常引₂僧侶₁學₂書記₁、相國寺僧録司統₂北内₁、金閣風流幕府禪、用₂足利義滿事₁ 不得相逢話鄉故、暮樓坐誦碧雲篇、

和人秋夕韻 〃

掃堂遙邀素娥遊、一穗沉煙搴繡毬、蓋甞月中先泣露、早〻芭蕉風外欲鳴秋、莫望萬里頻空想、多爲百年凝片愁、不禁天涯雁將至、星河錯落倚城樓、

席和危言

尋思大地是微塵、據空依氣載斯民、抽出藕絲將百尺、啄殘卵殼負千鈞、鋼柱火邊方進步、氷山日下足憑身、却指酣歌狂舞裏、老頭獨掉孟嘉巾、

題紅蜀葵

一東鮮血噴闌新、應是蜀魂殘涙勻、村女靚粧開笑靨、胡姫半醉動歌脣、備經雲雨色初豔、解向紅暾心竟眞、葉葉皺紋織成扇、殷勤相贈掃佳人、此花與₂梅雨₁相終始、兒女以₂其落謝₁爲₂雨止之候₁、

中秋集某人宅

仰看雲物晩初晴、邸第樓臺歌管聲、萬里銀河下飲海、九重玉宇平臨城、頻花影動天香散、壁畫光寒蚌氣横、楊柳梧桐秋一色 不堪倚檻翠彩輕、頻供以₂木犀₁、壁掛₂老蚌噓レ氣圖₁、庭植以₂梧柳₁、

春初宴集、新井筑州宅走和₂室兄韻₁、首句偶失レ律、

東風拂海入新年、生値清平豈偶然、城頭晩色霞流彩、陌上春遊塵繞韉 欲見三千興禮樂、長憑百二奠山川、鱗鮈樓閣青雲外、幾處隨君步始遷、

次明別賦呈

百年文治向彬〻、普燭北幽求是人、抱玉久眠金澤雪、戴花共醉武城春、參差冠影循除轉、霏拂爐香連袂匂、多幸官閑心亦靜、雲臺携手好尋眞、雲臺眞逸即朱子別號、室某好說₂朱學₁、因云、

和蘭山和尙試筆韻

深鎖山門輕世華、敲氷正旦自煎茶、簿書我愧同齒蠹、

棐几兒嬌作老鴉、殊雪遙峯霞薄抹、疎梅小逕竹交加、
三年相別不相見、試問禪師髮白耶、第四祖曰師髮白耶、
春到溪山深處家、煙雲滿鉢樂應嘉、夜寒瓦釜煎殘雪、
日出巖扉開斷霞、松帶龍鱗長偃蹇、梅橫鶴膝自槎牙、
何時林下親相見、搔首東風鬢更髿

老僧閑似白雲閑、密竹侵窓亦不刪、柳色鶯歌新歲月、
鬢絲禪榻舊江山、曝褌花上輸師懶、進步竿頭笑我頑、和三觀集、花上曝褌言可嘉、
記得太湖煙雨裡、晚風徐佇落梅花、

道人不與世譊譊、獨掩山扉口自緘、高操如松遙閱歲、
虛心似竹瘦依巖、邀來對月茶三椀、捲去倩猿經一函、
殘雪春陰寒起粟、定知懸几襲重衫、

塵寰遙隔別乾坤、日永鶯啼向小園、編戶爲憐多菜色、
玉堂安得獻春暄、褐衣帶月山還水、卅杖曳雲郊又原、
只願隴頭嘉麥秀、黎民皷腹荷天恩、

和澹泊主人梅花之作

坐掛疎簾(◎一作揭簾櫳)夕景長、參差梅影(◎一作梅花如玉)照春陽、一
枝何日香踰嶺、數片誰家飛過墻、生素清姿加老瘦、
郎能白面不嬌粧、新詩高唱(◎一作況吐)玲瓏響、悉引簪纓
步玉堂、

菊花

琥珀盃中菊一枝、問渠下酒只咿唔、名羅青史幾人在、
芳襯黃華千歲遺、籬下含英歌楚怨、葉間挹露點陶詩、
讀書眞有富家術、簇簇堆金元不貲、

重九日遊二郊外一、分下探秋氣集二南澗一獨遊亭午
時上、爲レ韻、得二時字一、

坐據斷岡望徙移、川源村墅暮天涯、輿民存値豐登日、
有客方傷搖落時、皂莢丹楓寫層下、黃華綠澗瑞班垂、
壯懷好向高原釋、莫使菜萸不負期、

和下進藤圭齋陪二陽明左嘉公一遊中嵯峨上

其一

織竹爲門不復關、西嶂晴稍夕陽間、遠路野水瀞頭寺、
窓豁秋雲落後山、鳴鹿勸令孤客起、從禽能與薦人還、
拾樵搬葉來烹茗、許託吾生在此間、

其三レ 其二和下其人陪二某公一伴舟大井川之作上也、前見、

川上傷逢斯夕晴、歡詩絃管軋能并、借呼晚渡舟初泛、
鹿叫秋郊笛亦橫、夜月龜山迷舊路、帝魂鳳闕泐歸程、
可憐公子愛懷古、一株海雲家在京、
寬野二秋郊一用二僕實一、嵯峨龜山乃文帝遊居地、後嵯峨帝崩、僧祖石因二龜山殿址一起二天龍寺一、以修二聖福一、帝顧命詔曰、身埋二南山一魂歸二北闕一、

排律

奉レ賀二大執政松平紀州公五秩壽節一詩、以二水石契久一爲レ題、

將種懸弧日、相材任棟年、懷胸兵十萬、儀度禮三千、
金鏡君臣照、玉壺表裡圓、南山持峻望、東閣納群賢、
昨撤京兆幕、直辭咫尺天、甘棠歌未歇、樛木福爭纏、
芝彩九華吐、蘭燕多子傳、班衣新奉酒、珠履已盈筵、
繁管鳳凰曲、妙詞鸚鵡篇、衆推德所致、公謂恩介然、
詞理方扶國、棟修退學仙、與民同此樂、水石契期綿、

題二鼎於亭一

重簾低攏擁城隈、十里湖寛鷗不猜、柳蔭重堤煙外島、
蓮臨曲渚鏡中開、白雲猶逗觀音閣、寒日稍昇阿閦臺、
樓上四時長若此、篇中千古亦悠哉、學從涑水淵源遠、
論擬廬陵次第裁、倦見波痕浸几案、醒看林翠撲樽罍、
投毫起問興喪跡、一艇斜陽往復回、

右百八十首

七言古詩

菊川

先王法服先王軌、衣纓子孫素知恥、國步艱難中興秋、
特有忠臣荷密旨、閫外兵甲方強梁、廟裏謀謨那足恃、
冠履倒置直天時、引頸好爲君王死、民彝物則固昭然、
無古今亦無遠邇、百世之芳流菊川、一片之血凝柴市、
寒鴉不下樹蒼蒼、慘澹雲影依陂陁、哀詞三唱問遺魂、
秋風忽與黃塵起、

五言古詩

和人問山家

一峯在我目、孤雲掛其間、終日馬玄黃、着鞭山復山、
濶步過邅迴、危行經險艱、覓茲叩岩扉、飲食開笑顏、
嗟夫墨墻高、唯力可以攀、請看它山石、礪出荊璞頑、
乾乾運不息、流水逝莫還、傾服識者訓、入道得門關、

老姑惡

老姑惡、裁岩作袴、纔沙作絲、陸轉桿柁、汲以箕籬、

鴛鴦

侍婢說鴛鴦、十一未喜聽、阿母繡鴛鴦、十二學得成、
十三感鴛鴦、慵向粧鏡梳、十四夢鴛鴦、十五猶未如、

送二佐藤先生之一東武一詩并序

四方八風之氣各異也、或强剛、或柔弱、其種不可勝擧、而可以克揉之反其正者、不任柔弱而在强剛焉、吾國士夫之風、所謂强剛之氣、蓋魁萬國矣、朝出焉試其馬、暮歸焉鳴其劍、跅弛矯犍、壯烈忼慨、口羞道不忠之事、躬不踏不信之行、一言語酬酢之間、義苟不肯、兩屍並仆、膓腦塗地、遂致宗族妻妾無所依歸也、固在所不辭焉、是以擧世之風、廉恥成俗、蓋剛毅近仁、而一變至道之資也、然此特風氣所生、或未始根乎理義之本心、則所謂廉恥者、竟廉于人、恥于人、而非自廉自恥也、其非慕外狥名之卑陋、亦唯悻悻然小丈夫而已、可惜哉嗚呼、允有豪傑之士、一建明聖學、唱吾所謂廉耻以鼓之者、則彼跅弛矯犍、壯烈忼慨之氣、固有所襯配根柢、而勇往奮勵從事於斯、富貴貧賤、取舍之分判乎內、立於外者自不能已、其然後造次顚沛、存養之密、方有所議也、由吾所謂强剛之氣、可以反正者、而其能爲仁、其能至道、於此乎可驗矣、士奚可措而不學哉、然世以學自負者、或未嘗以此爲志也、是以營營然、東投西遊、踉足相踵、徒求售而要利已、夫既以此爲人師也、其教誨論况之功、固不以足俾夫矯犍壯烈之士、有所興起奮勵、而其間虛慕德化、假飾仁愛、初惘然乎廉耻之唱者或有焉、吾恐聽之者彌衆、而敗俗者日繼、卒使剛毅之資、儒學之實皆失之而後已也、今也先生之行、願以吾言告東方學徒、而因以致所誨之士大夫焉、獻餞詩一篇、述所思以爲之序、

假裝萬里行。負任素非輕。能反士風正、遂俾儒道明、指雲望去路、數日問歸路、時節有賓鴈、一封幸寄聲、

富士峰

何處士峰頂、兀兮出大空、雨行關左右、日斡海西東、勿畫施人巧、欲登告帝功、更須四首瞻、四面八州同、

和人過西山

自從人跡絶、唯聽鳥聲幽、世事三年變、臣情萬歲愁、曲沼猿爭飲、空庭鹿下遊、何處舊歌舞、潺湲問流水、

七言律

題東台山下紅梅

仙衣爲見着精神、一段紅粧向雪新、秦漢嘗叩林下客、闌干同醉樹邊身、霞凝丹頂欲攀鶴、月在黃裙正夢人、

不識孤筇應到否、壽欄犬吠赤城春、

謁二楠公正成碑一 并序

天之所レ賦、有レ吉有レ凶、莫レ不二各實理之自然一、人之所レ値、有レ禍有レ福、莫レ不二各己義之當然一、而唯人之所レ爲、就レ己而求、盡レ心殫二智于ヲ內、竭レ力周二謀于ヲ外、不レ避不レ怨、不レ愧不レ怍、確礴凜冽、超二然禍福之上一、乃天之所レ報、即茲而在、必使下其忠與二日月一同懸上、必使下其功與二宇宙一倶存上、不レ可レ毀、不レ可レ磨、不レ可レ蔽、不レ可レ欺、昭明較著、依二然吉凶之外一、則其禍也其凶也、亦匪四適所三以爲二假福元吉一歟、吁夫昌榮求レ祥、僥倖回互、以苟二一旦之得一、而至辱劇妖已臻二其身一、其亦不レ知之甚矣、昔者朝綱上弛、兵權下移、自提二重器一付レ于レ人、而天下大勢去矣、後醍醐帝赫發二宸怒一、圖三以討二高時一、搢紳緇彰衛士應兵、潛謀竊哨、鼠聚烏合、其亦不レ異下擧レ卵投上石、而笠置芳野相尋陷沒、天王儲君、蒙二塵西土一、而所在官軍崩解銷縮、帖然不下復聞上有二兵革之事上、方二是時一楠公正成、承レ詔特起、戰二玉造一、逸二赤坂一、退修二千磐一、以拒二百萬之師一、持二三年之久一、其間天王起居邈絕、中京廢立

見レ行、而唯曰奉レ命討レ賊、後援弗レ繼、前功弗レ期、而唯曰以レ身許レ國、應二孤兵一嬰二小城一、盤二據控三蔽中畿衝路一、而恩養有レ素、操演有レ術、士激卒厲、一各當レ百、自二凡樓櫓器械、糧餉薪水一、豫虞素備、曾莫レ所レ或レ虧、環攻夾擊、蟻附魚貫、應レ方臨レ機、曾不レ見レ或レ挫、士心賴レ此維持、民觀賴レ此係屬、有丁以知丙天下猶有乙勤王討賊之師甲以下議貞北興而殲二巨魁一、長年西服而奉中天王上、賊徒內潰、義旗四麾、遂克還三皇輿於二中京一、復三大物於二上古一、拂二氛霧一而鋤二蚯冢一、擎二日月一而回二乾坤一、抑難下王氣之未レ終、時運之未ゟ廢、而自レ非二公精忠格レ天、奇才蓋レ世、孰能成レ之、烈哉盛哉、厥然後不レ能下先二之諸將一、參中之萬機上、政紀因循、主心淫蠱、孽后創レ厲、而皇藩倒、諛臣誤レ朝、而諍夫遯、遂乃縱三巨姦於二廣野一、以恣二其呑嚙一、鎭閫並摧、賊勢彌熾、中興艸昧之業、再爲二鼎沸麋潰之極一、而公諫不レ用施不レ行、扶復顚、褌復敗、以進焉勁敵寡兵、退焉誓言偏聽、罷焉強促敦遣、湊川之役也、有レ死而無レ他焉、則天之命窮矣、厥然後不レ伐二其勞一、不レ辭二其位一、獨蒙二朝廷之倚一、負二蒼生之望一、焦思而苦慮、

不用復諫、不行復施、隨顚隨扶、亦敗亦碑、猶倘朝聞命夕引道、徃次櫻井驛、遺言嫡子、綣綣唯以討賊復仇之義、未嘗一語及于家、進赴決戰、塗膏授首、卒以茲軀獻吾主而後已焉、則人之義畢矣、天之命獨有窮焉、而公之心則不已焉、唯其不已、是以四海之內千載之下、凡有知以上、聞名歆風、孰不竦慕愕服、欲以表其墓旌其閭血食其祀茅土其子孫者、亦孰不憤惋斤罵、欲以鉤讒舌、臠賊肉、飲其血、而寢處其皮者、而當時間乎公、仇乎公者、難則恃一旦之寵、逞一朝之强、而內省自視、若悔若赧、耿耿昭昭其方寸內、則楠公之天於是定矣、夫其確礴凜洌、昭明較著、禍愈慘而福愈穰、凶愈烈而吉愈大者、豈不信哉、丙子之秋、緝明如播州、道經兵庫、繫舟登岸、徃訪其碑所在、則重巘杳溟平野草芥之間、巍然特立、題曰嗚呼忠臣楠子之墓、此乃水戸相公所建以改觀當時垂跡不朽、功亦偉矣、予低回不能去、敢擇言曰、能踐爲人之形者、爲聖爲賢、能踐爲臣爲子之形者爲忠爲孝、有其心而無其事、未得爲忠孝之全、有其事而無其心、未得爲忠孝之實、而若公也內盡外該、心事並至、則建諸天地、亘諸古今、萬人所觀、數尺之石、題曰忠臣、而固靡所愧其名矣、嗚呼公之忠、其天下之達忠也歟、感歎之餘、虔誦前言、而繼以詩焉云、

一從廟算失元勳、海自蒼茫山自紛、當日臣軀唯粉碎、
後來皇統遂瓜分、血凝地上青青艸、怨遏嶠巓漠漠雲、
獨有遺心懷故國、依然南向岳王墳、

喬松孤倚早秋天、凉度軒楹思欲仙、龍卧白雲生冉冉、
鶴歸明月照娟娟、地中琥珀使杯湧、風外笙簧隔箔傳、
應有多男爭獻口（壽カ）、輪囷葢影蔭華筵、

和大醫師長島君思歸田韻

手救斯民亦有年、逍遙何處不全天、美言巧笑人磨劒、
黃閣朱門吏討錢、樵唱充吾招隱曲、農談爲右養生篇、
它時林下好消日、瀹藥燒丹坐候烟、

七言絕句

無題

旭紅上牖滅灯光、懶整金釵十二行、將就何人圓昨夢、
貍奴劃破繡鴛鴦、

長短歌

勿泣梅黃時、人當歸、雖就遲遲、瓜有熟期、

古歌

妾被責、爺不歸、春風惡、花片飛、

老姑惡

老姑惡、在天者星、在山者松、在者幾許、歷數說儂、

曉送

餘香隱隱、殘燈沈沈、下涙ニ淸、爲郎多金、

自君之出矣

自君之出矣、塵跡滿粧臺、今歲新巢燕、窓紗竊復回、

歲暮

晚步兮水頭、萬流波兮難留、乃盼兮天杪、慨吾生兮覆幬、

歲暮歌

雲駛駛兮如逐、將知短景兮西沈、芳折兮霜野、籟潛兮凍林、昏乘兮明燭、靜照兮我心、物不可兮終極、孰徒倚兮呻吟、

醫師某僧見訪

天使家倚百尺臺、雲樹茫茫資嘯傲、參差粉堞片雁飛、高風擡頭睨穹蒼、馮唐冷署老將至、韓愈短檠眠已耗、門臨坡堍落紅深、玉人剝啄晚相報、姹女鼎底鍊嫵媚、須彌芥裡列嶄嵓、座久流霜西檐度、轉燭且問菊息耗、物候數至九秋杪、猶學風流龍山帽、江東諸才賦悉成、速封入稜笑相犒、

金菊姓陶三十韻

江南衣冠地、貴種奕葉昌、輕薄桃李色、（羅隱菊詩、春叢莫ニ輕薄一）繁華王謝郎、陶本公輔後、（淵明自以晉世公輔之後云云）我考持淸望、維常無射月、（魏文帝云、九月律中ニ無射一、群木庶草無レ有、惟芳菊紛然獨榮）降日實金行、（蘇老泉菊詩、獨稟金行秀）生而有五美、（菊有ニ五美一云云）素心不紅粧、（顏延年誄、淵明曰、長實素心、劉禹錫白菊詩、素女不ニ紅粧一）自受讀父書、（淵明著ニ孝子傳一）班斕着蘂黃、（事文類聚菊詩、斕斑晚看レ菊金蘂）或云天所賜、青女裁坤裳、（羅隱菊詩、一生青女霜、蘇詩、正色着ニ坤裳一）欲爲制頹齡、（淵明集、菊爲レ制ニ頹齡一）甍露必先嘗、給力豈違命、（給力事見ニ小學一）代治國徑荒、竹君與松叟、（松有ニ髯叟之號一）相隨兩相忘、婆娑柳先生、門熟師友良、德馨日外聞、好隱蓋內光、起爲南陽令、澤民得壽康、勿謂菁華沒、（延年誄曰、巢高夷皓、菁華浸沒）守淡繼遺芳、所以事業肯、絕榮審行藏、（淵明詩、絕ニ榮利一云云、羅隱菊詩、彼是有ニ行藏一）方夫夏令罷、炎午政不綱、（炎午謂ニ司馬晉一也）繼以霜威犯、金刀勢太剛、（黃詩、禮樂卯金刀、謂ニ劉宋一也）之子有高趣、（淵明有ニ高趣一）秋容愈軒昂、（且羞ニ老圃秋容淡一）籬落殆不蔽晏、（淵明居、風雨不レ蔽、晏如也）如弄異香、馥郁且淸烈、家聲日以張、第坐性嗜酒、

（淵明嗜レ酒、）被摘投瓊觴、史家嘉晚節、記卒係重陽、滿城爲歎惜、風雨夕冥茫、（滿城風雨近二重陽一）後傳周少夫、相將遊帝鄉、（王子喬以二甘菊一、周少夫餐レ菊而仙、淵明辭二帝鄉一不レ可レ期、）人見其時出、賣藥增年方、自是姚魏徒、因諂皆封王、幸與蓮君子、論者並稱揚、苗裔七十餘、語於譜中詳、（石湖菊譜、七十一種、）至今萬朶菊、想古一夢長、始悟人間世、園蝶亦蒙莊、

相思艸賦

維何食飮之肇起、不レ假二聖造一而固存、擊レ羶割レ腥、拾レ粒採レ滋、莫レ記二其元一、而烝炊紛養、菹臛膾炙、爭啓二其門一、皆充レ腸而適レ口、唯養生之專論、狻彼儀氏二之子、創二麴蘖一、變二醇醲一、馴二致後民之知一、摘二嘉木一（江南嘉木、）以淸供、充二合歡之上薦一、奏二蕩穢之首功一、而不預饑飽、亦匪二列饒饔一、逮二夫靈榫之生一、顧二一者而愈備、取二穀液一、（酒）藉二坎精一、（茶）尙涉二形質一、而此特服氣、揚二和潤一、（酒）殺二煩滿一、（茶）尙佐二膳羞一、而此特顧レ志蓋極燧庖之敎一、而盡二噬嗑之利一、有二拘拘者一、謂不レ禦レ于レ餒、而妨妨レ于レ耕、不レ實レ乎レ腸、而耗レ乎レ魄、是謂二異味、有レ損無レ益、宜君子之靡レ嘗、而王政之弗レ借、鬻レ市播レ田、痛行二禁格一、嗚呼宇宙之茫廊、氣化之推遷、坱圠磅礴、機常軋而跡相纏、物之日備、勢之自然、有レ利則害、理不二兩全一、因以裁制撙修、獲二身安而民樂一、撤二汚樽一而毀二雕罍一、毛血廢而醴牢作、觀二賢哲之執一レ極、豈末微之强索、奪レ欲而戾レ情、壅レ川而塞レ壑、玆草之裨レ人、固猶二酒之扶一レ衰、而茗之釋レ滯也、今之不レ可レ無二玆草一、亦猶下酒之不レ得レ不レ釀レ於二古初一、而茗之不上レ得レ不レ蒔レ於二中世一也、而安得レ禁哉、況糜レ穀費レ財、多食以招レ邪、不レ止レ此也、將レ有レ加焉、吾請歷二其德一、得二一二論レ之、延二佳賓一而興末レ濃、折二玄理一而談將レ躓、開二合縫一以繹二金絲一、抗二管端一以代二如意一、叩二唾壺一而希レ響、霏蘭芬之千穗追二綺景一、班二繡封一、命二行竈一以先致、蹤二走獸一驅二平原一、施二火技一而且試、是乃貴介公子之所二以首愛而最玩一也、而釋レ耕休レ饁、遑レ仰二雄志于鴻飛一、罷レ樵倚レ石、聊忘三徂年于二仙棊一、版築半紛、將レ失二鹽梅之蓄思一、春鑿且輟、誰定二杵臼之契期一、（用二公沙穆事一、）是於二其時一、鄙人下皂之所二賴以慰一レ勞也、顚レ衣倒レ裳、待レ漏計レ刻、解レ劍綬レ帶、還レ室自息、跨二側鞍一而戒二嚴程一、按二公比一而擁二吏牘一、縣跋履之良勤、紛勾稽之易レ惑、是於二其時一、庶官群胥之所二賴以濟一レ役也、唔咿達レ旦、吟哦竟レ宵、埋レ頭若レ疚、擁レ鼻若レ惻、數三

行盤于相素、雕章句于瓊瑤、將以赴課而難酬、還雅而未調、是於其時、騷客詞流之所賴以策勵也、鎖晝寂于簾帷、計少日誰與語、寄夕感于櫺欄、懷伊人何乎據、五撈方嬰、二豎新去、視聽寡惊、甘膩避御、睡也覺也、醒也、飫也、兀爾聊爾、忽焉遽焉、是於其時、又莫施不可、莫用不宜者也、若夫壯士之悲節、義夫之竦心、夜方永而不夢、聽鷄唱匪惡音、斜月窺罅、高風振林、冷露被草、威霜薄襟、怨歎慨之無寓、撥卷編以閱古今、稽蕭曹于漢初、欽房杜于唐始、自書一之既定、使復生豈誰啻、惡痛哭于賈生、厭列言于陸子、奏大樂于澆漓、羅古貨于鄽肆、道有分、運有期、幸深文之不擬、達者審命而畏天、仁人測時而遺己、苟黈纊之可通、就斧椹而甘死、自世風之日降、各有挾以相擠、道懸路絕、貴賤日暌、弔玄揚于寂寞、訪窮韓于鹽虀、執篆刻之末技、請斗升以仰徯、猶寡知而遭嫉、殆推輪以陷泥、慕後名之奕奕、惆存日之栖栖、與千歲而沿泝、益轇轕厥若締、於是撫佩燧而不給、探宿火而已灰、墜玉蟲而星霣、挑銀缸而暈開、推几促膝、嘗幾吸不知裁、激雲霞于脣角、盤虯螭于堂隈、縈園屏之巫峽、起殘燼于博山、比鳳嘯于蘇門、揮惠澤于湘灣、素磊塊而亙洛、忽匐匌以回環、担曠朗若有見、神厥遊不可攀、蓊勃衝隮、蜿蜒轉折、下亙溟瀛、上抵虹霓、揖浮丘而直過、値廣成以問訣、悅予志之不磷、安淡薄而守芳烈、賜以帝觴之珠滴、名云華池之瓊英、非下世所能有、其爲味辣且馨、欲吐而終嚥、下咽以自醒、東方白矣、復將何營、

贊梅月圖

朧爾軒轅鏡、忽然姑射裝、何人繡帷底、爲爇反魂香、

七言絕句

春閨怨

半日抱琴猶未彈、鶯鶯有語告春闌、十三兒女心中事、只願身香似牡丹、

冬閨

烏鵲南來啼數回、隔紗枯樹月徘徊、高風一陣征人遠、挑盡寒燈撥盡灰、（寒イ）

宮詞

昨夜六宮呼召頻、命頒時樣綵花新、君恩眞是似天大、

李艷桃嬌例賜春、

春日遊上野有感

縱使山櫻伐作薪、百年心事易辜春、花飛莫入漢宮去、
風雨由來妬殺人、

席上和芳洲韻

高堂談笑倚溟波、復奈水萍相遇何、君去千秋望幾許、
芙蓉峯峙鬟將皤、

野餞栗得上字

送人送春曳孤杖、離歌瀏亮天高敞、路觸細雨亦不辭、
飛華粘著行衣上、

但州妙見山八景癸巳夏

山東沃野

年年秋粒斂珠璣、政簡農勤地亦肥、却怨平疇浩莫畔、
不分二頃資吾歸、

櫻溪遠花

山花爭唉接高低、藹藹蓊蓊望欲迷、不免幽人醒自恠、
白雲多態擁前溪、

箕泉清流

泉逐曲巖凌碧桃、人蹤不至響初高、想從滾滾出山去、
和謂混涇多自勞、

杉間秋月

誰識人間杉翠影、行遮天上桂花圓、願差八萬三千戶、
斧斷交柯光始全、

嵐峯紅葉

盡櫻（○盡樓歟）倚霽冷嵐收、紅葉千峯染出秋、知是洞中歌
徹夜、滿山玉女錦纏頭、

四山晴雪

嶺雪皚皚四望同、幾人載酒揭軒窓、如今須向山中訪、
高士抱珠臥似龍、

霧海朝暾

喬嶺噴霧曉濛濛、眼見乾坤一掃空、竟是紛昏遮不得、
羲輪漸漸向天中、

北溟眺望

凝眸人倚斗南天、溟渤蒼茫雲氣連、舉手試招採桑老、
長風滿袖思將仙、

觀明人張荊藩崎館七夕詠因和

其一

香桂枝頭玉露多、不妨織女暗經過、佳期只恐嫦娥識、
雲錦裳垂半絕河、

其二

天上樓臺日已晡、橋邊烏鵲遠相呼、了鬟先候銀河水、昨夜新晴可濟無、

其三

手纔華井白蓮莖、欲取織功擬錦城、試向中秋裁舞袖、素娥應覺細腰輕、

其四

牛女之言眞放唐、古今不遇有參商、飛針走線無乞益、別向心中子細量、

其五

人間雅曲寂倚闌、空倚白雲銀漢看、万里秋宵一聲鶴、坐來方覺露華寒、

其六

其七

寄耕研大兄 大兄時患ニ麻疹一、世謂斯疾發ニ於胎毒一、故患者雖ニ壯且老一、好把ニ小兒嬉具一、因以ニ一土偶一爲レ贈、土偶買以ニ三錢一、則詩一首値ニ一錢一矣、詩價物佐恰衡抵當

迎取床頭一笑新、泥身紙帽眼雙瞋、相憐恐我染同病、世上頑來兒視人、身長九尺望如神、欲費經營內每紛、勿謂兒嬉成底事、泥車瓦狗弄天眞、土偶雖頑性不移、几前侍立養痾時、世人不知傀儡子、翻動全身悉用機、

李夫人

廷上魚龍紛作團、連娟一盼笑初微、美人至死風情在、忍使劉郎不見歸、

明妃

欲救生靈酬漢命、辭將顏色汚胡塵、君王竟擧三千寵、委付畫工那問眞、

肥前洲人齋藤道本、客ニ江府一、既而歸レ鄉、數年病沒、叔氏芸菴、後亦來游ニ府下一、得下其臨レ別贈レ人之作上、思慕悽楚自不レ能レ已、請ニ予和レ之、諒ニ其不レ忍レ死レ之之心一誠可レ悲也、爲賦ニ二首一、

孤燈客夜誦無衣、長慨離魂泉下歸、欲取心期對床話、夢中人世事多違、記爾輕裝霜作衣、故山華表柱頭歸、平安今欲與誰報、鴻雁秋來信不違、

和川口生題梅

生歲十三從レ父來見、介人謂ニ其敏爲レ詩、予顧ニ席

間屏書一以レ菊試題、援レ筆輙成、時適對州文學雨森子見レ訪、延レ坐示レ之、更以レ竹試題、則又輙成、繼室同年見レ訪、亦請進而示レ之、再以レ梅試、則又成、應レ聲命レ意、三章連翻、速ニ於八叉一、至レ見下其典午山河伴ニ老忠一之句上、三人殆乎相視吐レ舌、遂各屬和以加ニ奬異一、夫二客者海内之名士、以ニ生年幼一得ニ其一顧一、可レ謂レ榮矣、然天之付ニ才於レ生、譬下菊苗之初茁、梅蕚之未レ析、而竹萌之露上尖、苟非下栽以ニ其土一、培以ニ其方一、又防中踏履摘折之是至上、則安得下其揚ニ晩節一收ニ佳實一、而擢中凌雲之姿乎千尺上哉、生其勉レ旃、

春閨梅發倚東風、五色毫飛萬玉中、莫使文詞徒出口、
須要孝弟永由躬、

雪中望首句用ニ假名仁字一與レ任同、

任使層巒夜半遷、高樓雪滿曉望連、何人更策蹇驢去、
万里銀橋架至天、

和剪綵梅花韵

別記宮中春色新、横斜隨手轉精神、欲令蝶夢徬徨久、
一片氷魂認未眞、

前題

滿盤春色剪齊紈、望久全爲白雪看、徹夜暗香吹不動、
劉郎正對玉人寒、

贈尼仕ニ第三院一、給ニ事ス佛殿一

禮了金仙曉殿空、袈裟且伴綺羅叢、欲問人間春易老、
碧闌高處倚東風、

寂光瀑布

千仭泉懸巍殿傍、遙歸瀛海不波揚、飛流日夜轟然下、
正是鈞天奏未央、

武城元旦

春早扶桑第一枝、梅雲捧日曉離披、千門万戶青松掛、
閑跨金鞍過者誰、

始見ニ小倉伯父一、又聞ニ其歸有レ近、賦ニ一絶一以爲レ贈、元祿戊寅前作

十年稷下丞知名、相遇相離胡不情、欲認春流快帆影、
淡山中峙曉雲横、

松崎氏見レ招席上和ニ所惠芳韻一元祿戊寅作

春風似曽帶香來、勿逃詩中白玉梅、須把酒盃三飲盡、
十年心事一時開、

五言律

遊ニ東叡山一僧近江人

邸第管絃湧、林上鐘磬幽、雪殘紺殿北、霞落石樓頭、延鶴氣香坐、隨僧載酒遊、五湖歸不得、携手晩登樓、

和月下尋菊

秋花宜夜月、衣薄立庭皐、香吐金蟾氣、光分玉兎毛、稍將霜下節、欲向斗間高、寧耐摘盈掬、五更命濁醪、

席上題梅

湖南布衣士、容倚吟筇硯、孤格壓華塲、一生依竹里、飄颻散亦奇、突兀杖莫累、借問伯夷清、聞笛恨邪否、

落韻

席上題梅 得二調字一

君家梅淺樹、帶水且臨橋、鶴立枝横出、鶯移花始飄、誰將宮艶比、不向世人嬌、眞識苦寒節、脫成羹可調、

席上和村顧言韻

由來同四海、堂上歲寒盟、高古人風格、老蒼梅性情、坐園紅燭密、吟倚紙窗清、微雨半酣後、瀟瀟灑夜城、

會僧院得鳴字 夏

吾師玉麈柄、炎塵一掃清、竹檽方三尺、靑巒長縱横、川灣抱林角、目送暮船行、此話亦欹矣、佳禽終日鳴、

三月十五會二東山一 元祿戊寅作

亦追春事盡、半日在山房、竹蔭園碁席、華飄踏鞠場、高欄收遠碧、疏箔透融光、同是四方客、歌罷揮玉觴、

送松田釣玄歸豫州 元祿戊寅作

南人留不住、碧海布帆浮、重歲千般怨、遙懸一片愁、與雲離嶹島、沿月下中流、何日長風外、婀娜向豫州、

七言律

題紅梅

羯鼓聲催日影遲、樓前先已醉梅妃、夢回玉枕斜痕破、恨記羅衣點涙稀、春淺怯隨丹鶴瘦、曉來化就彩霞飛、故勝從幸揚家子、血汗遊魂無處歸、

季秋十五夜、會二筑州君亭一、君有レ詠示二坐客一、次日賡謝、

銀漢耿耿掛城樓、宵宴高堂爐氣幽、忍放飛霜掠玄鬢、漫迎華月照窮秋、心期杳渺鴻聲度、醉眼闌干燭燄流、人世相知即相樂、莫將歌舞奏無愁、

席上賦 得二絶字一

自從蘭佩楚聲闋、復取此花爲玉玦、薰徹千重庾嶺雲、飛繞一片吳天雪、影臨淺水爲誰横、笑隔疎籬堪手折、可憐孤潔値知音、滿座主賓詩品絶、

和村良直見惠

欲索超然物外遊、風流正在海東州、詩成玉吐藍田上、

筆墜雲來閬苑頭、客枕有松吟靜夜、官邸莫酒滴清秋、
鬣峰好會神仙子、苦問何山藥可求、

館中戲賦少女得聽字

學繡學縫生慧聰、壓窻新解倚東風、向人羞坐鴛鴦被、
終日貪看鸚鵡籠、蘋薇粧樓開鏡照、手裁畫幅抹鉛紅、
鄰家夜宴對床飲、聞說王郎坐在東、

王子觀桂

下飲清溪氣似沈、神仙殿閣桂花陰、後身今現如來相、
兆夢昨遊薝蔔林、月裡幾人能仰折、山中獨步得幽尋、
無端一陣晩飆急、忍使村童掃碎金、

恭誦攝相大相國近衞公、邀奉尊君大相國殿下、盛作二章、敢述鄙和、憑門下以獻、

相國事過相國第、兩辭揆路狎林幽、池臺逈距鳴珂里、
劍履不躋勤政樓、花泛瑤樽揚晩節、琴彈碧水奏清秋、
盤桓應與千春久、椿桂交陰綠欲流、林幽二字連讀、清秋謂清商、

又

晉公早向午橋休、不買名花地自幽、脈脈晴川銀作浪、
低低曲檻玉爲樓、賓筵蔭合柳礬翠、仙履香移蘭渚秋、
起奉瓊觴醉初洽、四明峰頂紫霞流、

賀新井筑州六十壽誕辰在二月十一日

明月彎環掛作弧、挺生夙自合玄符、寵靈逈擢漢千石、
潤色嘗稱鄭大夫、桃李門深春未半、闌蓀堦暖絲成區、
東望蓬海方清淺、聊爲傾將瀉玉壺、

和某人鰹魚鱠韻

偃然俎上碧波凝、直劈駝峰第一層、紫氣猶纏龍肉鮓、
殷紅欲溢菊花稜、性饕何須切爲縷、易餕初思伐賜氷、
無毒不夫從古爾、恥將施乳得併稱、

天水君庠舍置酒見邀、仍有佳什之賜、和以伸謝、兼呈芳洲君、

連宵甘雨入芳年、欲向橋西試茗泉、時節採蘋堪置奠、
交歡伐木久成篇、斗城霽色繡千樹、壁水猗文動細烟、
更有中原他口日、楸枰鬪局學周旋、

除日漫賦

北郭泥痕晴後更、衡門誰餽五侯鯖、典衣且買生前酒、
操筆空挑海內名、溟極鴻過雲色老、天東人立斗文橫、
漢家元待賈生口、年邁材疏漸未成、

又

嘗逐群口雲路登、不材豈是仕如鵬、百錢貨僕趁朝謁、
三毳關供口友朋、積雪重關同片鴈、急風低郭掠飢鷹、
非無古道寄方策、去剪第堂除夜燈、

稻滕竹里步悠悠、戲把茱萸訪僻幽、遠客頻吟摩詰句、先生閑泛李膺舟、入秋牀蓐久埋首、此日鄉山始寄眸、猶幸膏肓逢邦手、芳園瑤醆菊將浮、

右病起、拜吟澹泊先生九日登游作、

書梅花紙帳

不妨蚊翼恣披猖、梟梟微風張坐涼、地縮室中圍玉壁、天低中上瀉銀潢、愁多暗隔燈青暈、夢半誤驚窓曙光、堪畫梅花三兩朶、由來織雪且裁霜、

元旦

九重佳氣鬱葱葱、欲曉時看白鶴冲、履響衣香人絡繹、方窓曲几日朦朧、六經聊學療飢法、斗酒今當補世功、吳下周郎胡不起、長江日夜好東風、

遊石山 石庵云、此寅君十四歲作、上四句失之、

斜陽一徑西歸客、長水千山北去舟、欲問雄將酣戰地、暮雲夕靄使人愁、

滴水府途中作

隅田川上夢多時、復取行裝何處之、長水雙鳧眠不解、平田獨鶴起如思、雲尖欲雨前村遠、天末無山落日遲、五百黃金非買骨、馬群此地好追隨、 所經有白金野、即牧地、

寄室直清誤再出

百年文治向彬彬、普燭北幽求此人、抱玉久眠金澤雪、戴花共醉武城春、參差冠影循除轉、霏拂爐香連袂勻、多幸官閑心亦靜、雲臺攜手好尋眞、

剪綵花

桃亦紛紜李亦煩、施將剪巧託靈根、討論眞侶花無色、謝絕榮枯春有痕、若使閨娘一偷眼、恐隨夢蝶輙憑魂、與君對此四時物、看至秋風葉已翩、

細雨 得雨字、○與神代氏、雨中小集、戲題細雨斜風、

千點萬點村外雨、欲濡未濡堦前土、素絲剪斷織雲機、珠玉亂飛修月斧、客袂有痕濺渭城、泊蓬無響懸湘浦、不妨簑笠冒黃昏、青艸長坡斯熟路、

斜風 此詩末六句遺失

舞筵紅袖欲飀空、驀地東來一陣風、

九日登高

豐登日、有客正傷搖落時、皂莢憂風寥歷下、黃花綴潤班披 此詩脫前後數句

山家紅葉 和歌題公宴

人間物皆醉、山下葉都紅、 此詩脫前後數句

自和偶作

閒居心有裕、官況力無餘、中夜雨聲歇、小園花事初、

末四句失記

落楊成聯

落日半簾依曲几、淸風一榻臥中園、

大黑贊

囊而托レ之儉也、搥而力レ之勤也、儉レ于レ左、勤レ于レ右、則如下積之粟與中堆レ斗之金上、坐可レ得焉過レ是以往、神所レ不レ識、

蛭子贊

方ニ其未レ得、危膝瞠目、與レ魚沈潛、既而得レ之、手舞足踏、與レ魚活潑、天下何事不下從ニ苦心中一而達上也、畫前之意、其可ニ以察一、

五友圖讃

孤標擢淸、幽姿弄馨、植而亭亭、倚而盈盈、傍臨吏誰、此君之貞、先生有ニ爭友五人一、安得下其德不レ瑩而道不上成也哉、

玉仲遺文

釋宗琇玉仲著

自讚

卑賤醜陋、如レ聾如レ盲、板齒生得レ毛、嗔則吐ニ爍爍之毒氣一、稱鎚捏出レ汁、喜則揚ニ滔滔之惡名一、陵ニ蔑竺土黃面子一、瞎ニ瞎少林碧眼睛一、性氣破戒得ニ人憎一、頑石圓轉、修行懈怠不ニ我管一、生鐵鑄成慈悲不ニ衆乖一、手心膽向人不レ傾、坐ニ衲僧舌頭一、麁老機關復可レ把、步ニ毘盧頂顊一、蕭何賣却假銀城、平生視レ善而不レ欣、况復遇レ惡而不レ驚、佛祖來也打ニ一十棒一、無ニ些子仁義一、胡漢現也與ニ三尺竹一、莫ニ秋毫人情一、指レ鹿爲レ馬兮一起一倒、證レ龜作レ鱉兮雙暗雙明、掀ニ飜海岳一求ニ知己一、撥ニ亂乾坤一建ニ太平一、顧賢刧ニ無此立樣佛一、匱而待彌勒下生、咦

諸衲寫ニ愚虛質一、請レ讚矣、

文祿三稔龍集甲午王正初三日、

前住龍寶後住金鳳玉仲子宗琇書焉、

自讚

這老醜拙、莫ニ人相隨一、不ニ出レ手而拈レ香、轉處爐熘、不ニ開レ口而說レ法、活路鉗鎚、作家之日用、上古之風規、肩痛袈裟還ニ的旨老讚翁一、面皺柱杖、付ニ橫骨超脚兒一、瞎ニ却人天之眼目一、趣ニ向公門之面皮一、受ニ衆請於ニ古岩前一、方陞ニ斯座一、下ニ盲喝於ニ官池上一、既弁ニ機宜一、這般之事謗談競起、自醜也如何、已而拂子一拂云、老倒無事日、坐看雲起時、咦

天正十載壬午小春十又七日

前龍寶住山玉仲宗琇書

自讚

咄這禿丁、償ニ竹篦債一、打ニ殺杓中釋迦老子一、顯ニ佛祖寃讎一、敲ニ倒口裡達磨胡兒一、出ニ魔王妖怪一、不レ續ニ大燈嫡孫之傳一、要レ滅ニ臨濟正宗之派一、鉢盂裏走ニ騾馬一、踏ニ飜虛空一七顚八離、藕絲孔騎ニ大鵬一、觸ニ碎須彌一千敗百壞、諸方所ニ誹謗一、遮般之見解、須不レ如下還ニ先師舌頭落處一話上、扶桑樹頭紅日昇、萬年普照三千界、快

入室彌子肖ニ愚像一需ニ讚語一

天正八稔龍集庚辰臘八

前大德玉仲子宗琇書

自讃

馬面團圝、狐疑倥侗、渠々不㆑渠讃㆑渠、丹㆔青於㆓水
上㆒、我々不㆑我謗㆑我、黼㆔黻於㆓太空㆒、讃也滅㆓却正
法眼㆒、謗也喪㆓盡主人公㆒、魔外之親昵、墮㆓在赤眉人軍
隊㆒、佛祖之寃敵、過㆓著白招賊家風㆒、好末㆓必爲㆑好耳
已盲、惡末㆓必爲㆑惡眼已聾、百草頭上薦㆓取老僧㆒、活
機自在、大用現前、不㆑存㆓軌則㆒、遊戲神通、鐵牛耕
破扶桑國、迸㆓出金烏㆒照㆓海東㆒、[illegible]

松岳板首寫㆓予幻質㆒請㆑讃矣
文祿二載龍集癸巳重陽日
前龍寶住山玉仲子宗琇書以塞白

大光院殿之讃語

分明寫出大人形、意氣如㆑鵬搏㆓北溟㆒、仁澤欲㆑霑家勇
烈、德輝所㆑及國安寧、三山權現再新造、八瀨觀音是孕
靈、盖代忠兮貫㆓日月㆒、君臣合道一丹青、
藤堂佐渡守高信士、摸㆓寫大光院殿春岳棨 公大
居士之幻容㆒、以需㆔讃語於㆓山野㆒、便書而以塞㆑白
矣、
天正又九稔辛寅夏二十二日
金鳳住山玉仲子宗琇亂道

泰岳大居士壽像讃語

黃梅院殿筑州都督小早川拾遺泰岳安公大居士者、中
國數州之巨擘者也、以㆑武制㆓治國㆒、以㆑文撫㆓育民㆒、五
常在㆓其中㆒矣、入㆑乎㆑洛、遑日控㆓愚陋室㆒、咨㆓詢此
之事㆒、忽然猛省而決㆓擇生死㆒矣、建㆓立庫司㆒、寄㆓銀
百鎰之莊㆒、結㆓師檀之緣㆒、至㆓彌勒下生㆒矣、蓋如㆓淸
朝楊次公季世佛牙郎㆒相似、預繪㆓吾壽像㆒、需㆓讃語於㆒
㆑愚、不㆑得㆓固辭㆒、終應㆑乎㆓厥之請㆒書云、
將㆓中國紀㆒、立㆓一家基㆒、九州之外、更有㆓九州㆒、參禪
打㆓破黑漆桶㆒、三界之中、是出㆓三界㆒、投機觸㆓著鐵蒺
藜㆒、將㆑謂得㆓王常侍勘弁㆒、乃是具㆓龐居士機宜㆒、日用
拈㆓掇金扇㆒、依㆓放下提徑之世事㆒、太平按㆓置寶劒㆒、耍
㆑把㆓住上古之風規㆒、魁悟奇偉、如㆔張良爲㆓女子㆒、智
略妙用、齊㆔大公成㆓帝師㆒、治㆓博多湊泊官府㆒、外發㆓
屈强之勇㆒、入㆓榑桑最初禪窟㆒、內有㆓博愛之慈㆒、口輪婢
視㆓蜀孔明三顧㆒、快活奴呼㆓漢陳平六奇㆒、作㆔三善於㆓
三玄㆒、端的絕勝㆑乎㆓周情孔意㆒、爲㆔五常於㆓五位㆒、直下
川增㆑乎㆓堯肩舜姿㆒、白雲端上人夜話更所㆑諳、黃梅楊
次公檀度又在㆑茲、
綿綿子葉兮、厲厲孫枝兮、蓊兮蔚兮、春風桃李、一

以貫レ之、㊞
天正十又八稔龍集庚寅小春日
讃二黄梅院殿泰雲大居士之壽像一
九州都督、中國執權、兄弟英雄撫二四海一、海外歸服、父子猛將領二十州一、州中安全、定四孔明於二策圖二八陣一、作四傳說於三舟渡二巨川一、征二伐金虜百千屈强一、治三兵乎二洛汭一、勾二引甲首三萬徒卒一、振二旅乎二朝鮮一、重賞之下多レ勇、寬仁大度集レ賢、護二持博多津一、接二貴族平氏初度一、制二治太宰府一、得二寵渥拾遺榮遷一、加之疑着本源自性、乃是參窮作家活禪、賞罰所レ行兮弩不レ發レ機、佛日杲杲殺活臨レ時兮劒不レ出レ匣、王道平平、寄二萬緡之莊一、建二立庫司一、歷二三祇劫一而綿二著檀緣一、快活自由、芥子納レ於二須彌百億一、神通妙用、粟粒收レ於二世界三千一、子葉綿綿、繁與國家千秋日、孫枝續續、鎭護院門萬斯年、咦
黄梅院殿泰雲大居士之壽像賛、題二拙語一、以旌二異厥之仁德一而已、
文祿三稔龍集甲午菊秋初七日
前住大德後住天瑞黄梅席上玉仲子書
泰岳諱紹安小早川右衛門尉

藝州太守宰相輝元之伯父者、平氏小早川侍從隆景、一代之傑出之人也、威而不レ猛、富而不レ驕、武勇冠レ乎二十州一、名利皷レ乎二天下一、去歲之己亥夏秋之交、關白秀吉公、移三台旆於二九州一、直被レ行二征伐一、則降旗者面縛而從也、抗敵者征伐而均也、頗隆景勠レ之也、依二此之忠賞一、以二筑之前後州一、被四領三知乎二幕府一矣、戊子之秋、入レ洛弁殿、進二侍從官一、千載之一寵遇、是吾家之始業也、一日入二龍寶山裏一、暫遊レ乎二黄梅庵一、見二殿庫門廡一、則或有二半興一、或有二半廢一、不レ勝二嘆惜一、而寄二筑州萬緡之莊一、又贈二銀子百鎰一、書二師檀之鐵劵一、已而歸レ國矣、途中有二溫泉一也、便湯山是也、過浹日餘、令二愚俱浴一焉疑著此之事、朝參暮請、移暫日劫、夙緣煇煉、工夫純熟、而平素凝滯、渙若二氷釋一、忽焉大悟矣、鼻孔遼天之日、需二諱與レ字也、不レ許二固辭一、終稱三諱於二紹安一、號三字於二泰岳一也、隆景老金諾而錦歸矣、愚也歸洛之後、書二岱岳二字一、宜二一偈解厥之儀一、祝二遠長一、以二壽頌一名レ之云、

賛

萬物繁榮資始攸、從二開闢一幾過二千秋一、岩岩氣象中嵩外、雲雨山高蓋二九州一、

黃梅院殿前黃門泰雲閑公大居士者、平氏之朝臣小早川養子也、先考者、大江氏元成公也、其之令子弟而繼箕裘之業、撫育萬民、屈伏强項、十州平均、周道如砥、羽翼宗主、國家興盛、功騰古耀今、名喧天下矣、逸日扣愚陋室、參決西來祖意、日久歲深、豁然大悟矣、降來年稔、而至于佛祖精奧、活受用確乎生死一塊而爲鐵團圞、至矣盡矣、以故寫肖像、來而需讃語於愚也、不獲固辭、終抒德之全盛、祝末之長久、製歌頌一篇、應乎厥之命已也、

無休中國古徽猷、氣滿乾坤蓋九州、領宰府提持劒戟、伐朝鮮磨盡戈矛、世衰邁時焉廋、參活機禪萬事休、薰香五枝丹桂梅、莊椿讓歲八千秋、格

慶長五稔庚子夏五念五日

龍阜前席七十九齡玉仲筆于黃梅院

泰雲紹閑大居士肖像之讃語

黼黻虗空、突出己躬、刮霜面目、凜凜威風、活受用天眞獨朗、大休歇道義神通、亘古德、貫虹忠、振旅新羅絕代功、寫照明明千載月、當軒座斷主人公、咄

黃梅院殿前黃門泰雲閑公大居士之肖像、紹達禪人請讃語於愚夫、不得固辭、便製歌頌一篇以塞白、

讃黃梅院殿泰雲大居士像　句

凌烟閣上畫圖賢、參得紅旗閃爍禪、令尹夫知制宰府、張吾軍征伐朝鮮、法無法傳不傳、一陞風光豈屢遷、寫出雲門鎭護像、面南看北斗一千年、咄

□眞住持寂和西堂和尙禪將、寫黃梅院前黃門泰雲大居士之肖像、需讃語於愚也、愚雖未通書、有同檀越之好、以故不得固辭、便抒歌頌一篇、以應求也已、

贊少林院三品前工部尙書活杭宗快居士之像

鴨氏藤之者、累代之家業、歌鞠之兩道、不今亦廢也已、常疑著此之事、參春林老師、忽焉有省矣、即諱于宗快字于活機也、又謁于怡雲和尙、屢有奏請、弃俗染于緇、拜賜掛絡矣、爾來與愚交也已、命狩野直信、使我壽像畫、一日需贊語於愚、固辭已久矣、甲戌之季夏念七日、染于微疾、俄爾逝矣、應常所需贊之曰、

咄這摸作、他是阿誰、敬亘古今、主神廟之祭祀、忠貫日月、扃相府之政儀、仕途之進退契義、歌道

之行藏隨レ宜、踏二倒黃梅石碓一入二活爐鞴一、觸二著楞庵弁箆一、受二惡鉗鎚一、擲二昨日少年風措一、舉夜雨同參家私、獅子皮掛レ肩、左轉右轉、泉聲中夜後、犀牛扇飯二空手一、横拈竪拈、山色夕陽時、畫三幻影於二虛空一、張三獨坐於二須彌一、分明紙上快居士、咄江月照兮松風吹、

天正二載龍集甲戌小春

繁林道民禪人肖像

黑衣異形、截二斷鉄釘一、横拈二扇子一、眼裏山青、風光難レ畫、何圓相、月在レ天兮水在レ瓶、[五]

參二大心禪師一、忽決二擇生死一、下髮賜二裹衣一、其孝子寫レ像、求三贊於二愚拙一、便書塞レ請云、

天正六稔戊寅小春初八日

贊二壁（璧カ）溪全首座之肖像一

曲木床頭、良久胸睟、打破漆桶、會六不收、南遊活路三千里、載太唐飯一葉舟、

壁溪全公首座者、志操屈強而意氣高節也、嘗入二太明國一、歸朝之後、參二大心禪師一、請本命无辰落處八十六歲矣、厥徒第宗哲典藏寫二其之像一、求二贊語於二愚一、不レ得二固拒一漫泚レ筆云、

贊二易春宗陽庵主之肖像一

攝州堺北之住、源氏渡邊易春宗陽庵主者、一門之遺老而庄中之耆英也、疑二著三玄之事一、參二詳大心禪師一、一日忽然已發省矣、以來扣二愚陋室一、日久レ于レ茲矣、命二畫工一自使二像寫一、請三贊語於二老衲一、不レ得二峻拒一、裁二贊語一以應二其之求一云、

海內遺老、鄉黨威雄、全体畫成、如三影之在二鏡上一、劈面幻出、似三月之印二水中一、決三斷是非於二官府一、疑三著生死於二梵宮一、咨二扣老没先師一、殺活受用、相二看諸和尙子一、逆順互融、陳尙書嗣二睦州一似、龐居士參二馬師一同、白雲千秋付二與彼妻拏女一、丹青萬載、抒二留箇主人公一、祇麼揭兮厲兮、子孫鬱鬱葱葱噫、

贊二召伯良叔禪人肖像一

何似無相惟肖不眞、雖レ畫レ月兮不レ得レ寫レ光、單單直旨、雖レ圖レ雪兮不レ得二描絜一、處處全身、保二護盧生五十歲一、使レ得二趙老十二辰一、一曲高歌、不二樂府一唱和白雪、上封旨酒、入二醉鄉一截二斷紅塵一、畫工者分明不識、謂二三（之カ）一無位眞人一、[五]

前越州刺史建孝院殿吉岡悦翁宗歡庵主者、源家之一裔也、曾疑二著一大事一、入二京城大德見春林師翁一、參二決一大事一、既歸レ乎レ豐矣、邮レ民寧レ國也、所三以入稱二豐之老一者、蓋如三孟公綽爲二趙魏之老一者也、沒後、厥之淑婦人命レ乎二畫工一、寫二肖像一、又肖二自壽容一、併而以焉贈二黃梅席上一矣、便添二拙語一、以レ所二讚揚一、永打二供養一云、

虛空圖畫好風光、水上丹青全体彰、扇柄橫拈閑伎倆、衲衣掛著沒商量、如春日似秋霜、文武祗歷未覆藏、要見黃梅賢宰否、無爲子是佛牙郎、（印）

天正六載龍集丁丑蜡月念三日

潛龍山玉仲子書

黃梅石女白帽緇麻、寫二出風采一如二趙昌花一、豐嶺千秋霜夜月、在途中也不レ離レ我、咄

讚二大通宗喜大姉淑婦人之壽像一

天正六稔龍次蒿月念三日

潛龍山玉仲子書

斤間宗札居士之肖像

摸作不レ着、畫得不レ成、洒洒落落老骨撾、痴痴兀兀活眼睛、得龐居士之洪機、奔流度レ刃、具二韓太伯之知見一、海晏河清、道得叉手、叉手當胸、隱去半身、半身分明、咄咄咄是什麼、圓相裡何似生、（印）

元龜三載壬申良月日

前大德玉仲子宗琇書

淡治屋宗意禪人像之贊語

攝州之堺北居住淡治屋宗意禪人、曾扣二愚之席一、歲深日久、徹レ乎二祖師意一矣、以レ故稱二柏庭宗意一也、忽焉臨二行脚一、有二遺書一、贐二銀百鎰於レ愚也、其之志至矣、盡矣、有二小姪等以者一、寫二肖像一而需二讚語一也、不レ勝二感傷一、便抒二讚語一以塞レ白矣、

咄這禪人、截二斷紅塵一遺レ名、積善有二餘慶一、巨富肥家無二比倫一、殘二後胤一現二本身一、扇歸二掌內一坐歸レ眞、孝哉父子成二親近一、一族番昌億萬春、噫、

默庵像贊

淵默雷聲迸二旱天一、分明寫二出谷神仙一、相承須古倭歌道、診候醫邦扁妙傳、或持咒叉參禪、東海酌斷繩床邊、西江吸盡茶甌裏、鐵樹頭枝葉萬年、（印）

贊二菊芳宗英大姉一

自性元來不畫工、陳尊口有二織鞋風一、數珠念弄爲二尼

相一、破帽周旋蓋二己躬一、識不識功無功、灯籠沿壁大神通、孃生本色當看取、繪事虚空一紙中、[九二]

松岳長老寫二慈母菊芳宗英大姉之肖像一、需二讃語於レ愚也、便抒二歌頌一篇一、以應レ需也已、

一庭宗轍禪人之像

以レ橛拔レ橛、至大休歇、寫出幻身、咄鑄二就生鐵鉄一、千年桃核舊時仁、子葉孫枝似瓜瓞、[九三]

讃二天瑞寺殿贈准三宮從二位春岩太夫人之肖像一

簾中華麗只思レ衣、多少綺羅千里輝、今是發心橋貌上、片雲一點黑如レ影、

讃

孝男子單丁齋繪二先考太府卿壽林宗久居士之像一、以需レ讃、愚有二舊交之好一、所レ謂不レ獲二固辭一、書以從二其請一矣、

在家開士、希世賢人、山川揚二德輝一、處處準レ弄二鹽官之扇子一、夷洛發二聲價一、家家如レ稱二陸羽於二茶神一、半杓廬瀑水紫、一椀點建溪日新、一代榮譽進二其官一、儉而克義、末世潤色、此祿直而有仁、早參二大聖國師會公案一、晚扣二愚夫陋室一絕二情塵一、起倒分明、提二掇三玄戈甲一、殺活受用、撥二轉十智機輪一、便遺二之子孫一、永爲二之舊親一、以筆二一點一云、

寒松一色千春、咦

賛二一滴宗念禪人之像一

無位眞人、處處分身、吹毛三尺、截斷紅塵、打破西方安養土、總爲二桃李一塲春一、咦

一滴宗念禪人、曾扣二愚陋室一、咨二問自性彌陀一、知二唯心淨土一、已而俄皈二無生國裡一矣、令弟寫二肖像一以來二賛於一愚、便亂道、

前大德玉仲子宗琇、書二之長松山休休亭一、

武野一閑紹鷗居士之像

宋慶曆以來、我朝嗜レ茶者、雖レ有二數多一、只紹鷗一人也、能會レ乎レ心而熟レ乎レ眼者也、一顧二茶哲一則其價萬億也、蓋求レ哲者、只求二一顧一耶、宜乎德者風也、假二其草一也、爲二門弟一者、不レ墮二其風於一地、皆誦二紹鷗之名一者、猶如三陶桑苧翁像稱二茶神一、以レ故昨夢齋寫二厥之肖像一、以需二讃於一愚、不レ得二固辭一、作レ詞以讃、

讃曰、

虚空肖上寫二茶神一、齊世間陶陸羽眞
點撿趙州成二一味一、体窮風穴有二三巡一、

扣二禪室一絕二俗塵一、度越前丁後茶人、
將二吸盡一西江意氣、家中長認建溪春、　噫

攝州之住榎木宗悅禪人者、號三字於二慶革一、謂三諱於二宗悅一、名三齋於二自唉一、皆大心禪師之所レ稱也、後愚附二庵主二字一矣、曾入レ于二禪師之室一、參二著一大事一、打二破漆桶一、決二擇生死一、得二活三昧一也、壯而大富、老而要レ休、今玆命二畫工一、肖二我壽像一、索二讃於レ愚、不レ得二固拒一、舒而視焉、右手拈レ扇、左手持レ律、以二陽律陰呂一、作二十二箇一相合鼓吹、唱和歌二甲乙一哉、雖レ然如レ此精レ于レ務者、靡レ不レ至レ奧、只持レ于レ手、不レ持レ于レ心、豈不レ謂二之活手段一哉、爲讃、讃曰、

靄然有レ和、剛而兼柔、
富且薰レ天、　合三取陶朱猗頓於二一處一、
德必潤レ屋、　并三呑龐老李翺於二一處一、
將二積善家之餘慶一、爲二松山石之希求一、
平素點二百沸之茶一、每有二客扣一、
慇懃講二三巡之禮一、欲レ知二宗猷一、
咨二問諸祖之閑絡索一、觸二著先師之活自由一、
逆行順行、　攪三黃河於二半竹杖一、
横轉竪轉、　載三大唐於二一葉舟一、
過三與往古於二掣電一、管三刧來今於二浮漚一、
接三六角扇於二唱歌一、淸風是別調、
合三十二律於二鼓吹一、大地聽二點頭一、
子孫繁榮千載裡、老倒閑管萬事休、
無孔笛擁著氈拍板、秋月寒江德人天遊、　[印]

天正十一稔龍集癸未仲秋彼岸日
前大德玉仲子宗琇書

與二吾一片太虛空一、淡掃二娥眉一侍二主翁一、
淸鏡寫二吾眞壽像一、念珠呼レ佛大神通、
世界裡淨土同、　回首西方夕照紅、
看取丹靑惟肖處、　芙蓉水上月明中、　咦

攝州之產宗福淑女者、號三字於二萬松一、謂三諱於二宗福一、大心禪師所レ稱也、今玆使三畫工寫二吾淸容一、需二讃於レ愚、不レ得二峻拒一終作二歌頌一讃焉云、

天十二……
前………

才林紹八禪人之肖像

念珠百八圓成佛、一段靈光轉掌中、拈二却犀牛兒扇子一、作二閻浮內主人公一、咦

宗助禪人肖像

泉南之堺庄雪江宗助禪人、不二與レ物拘一、唱歌三昧、只嗜レ茶耳、春秋富而疑二著此事一、咨二參于レ愚打二破漆桶一、脫二出生死一、忽焉行脚矣、其之令弟追慕未レ已、寫二兒肖像一請二讃於レ愚、不レ得二峻拒一、便宜一偈、以爲二讃語一云、

如空肖月印二淸池一、寫出全身拈扇兒、無價珍留與二吾弟一、坐期彌勒下生時、[五]

讃二休岳道機庵主一

能州太守平氏、前田筑前刺史先考之法名、曰二休岳道機庵主一、絕代之武勇、而國家之爪牙也、有二厥之令子一、十三倍於二父才一振二武威一者、復具二忠孝一矣、洛之城北龍寶山下、有二興臨院一、寄二一莊一而作二墳寺一也、前之太守者、創建之寺也、今也百廢共興、以成二新建立一矣、院主感二志之所一レ之、摸二寫厥之肖容一以請二讃語於一レ愚、不レ得二更固拒一讃焉、抒二蕪辭一曰、

摸二寫庬空一作二而門一、岸烏帽大坐當軒、活機用佛魔同境、點撿來凡聖一源、定二計策一立二勝幡一、吹毛本是鐵崑崙、之罘海市登州裡、未見盡留與二子孫一

天正十四稔龍集丙戌捌月十又三日

黃梅村玉仲子書

這風釆說向二阿誰一、與二主人公一日結レ眉、體會凌行婆剩語、發明靈照女機宜、弃貞婦作二僧尼一、末後活禪宗受用、屋裡瑞松繁茂處、千秋長二子葉孫枝一、咦

單丁齋寫二先妣瑞松院春芳宗榮禪定尼之肖像一、求二賛語於一レ愚也、難二綶辭一、而抒二歌行之体一、旌二異厥之德一、泚レ筆以塞レ白、

賛二壽像一

德播二鄕黨一、名知二塞垣一、活火敲レ氷、常酌二井底於二通海一、聯レ茶烹レ雪、工作二小屋於二郝源一、將レ謂淸風兩腋習習、矧又生涯一夢原原、誦二持桑苧翁三篇茶經一、匡二諸人之規度一、參二究趙州老之一轉公案一、諳二衲子之語言一、勦二絕萬刧一繫二驢橛一、體二會一字一入二公門一、北坑焙爐邊、風穴三二巡委悉、西江鳥颺裏、龐老一口幷吞、支二配槍旗之茗於二朋友一相二傳箕裘之業於二子孫一、咦

泉南之住今井宗薫禪人、牓其之齋曰巢丁也、繪於我幻質、一日持來、求贊語於愚、不得峻拒、終宣蕪辭以塞白也、

讃見性妙林禪定尼之幻像

柔德家肥有自由、子孫亦幾積千秋、抽而就畫工難會、恰似楊妃下玉樓、 喝一喝

讃玉田宗玖信士肖像

匪我匪渠、萬劫獨居、無碍光佛、淨穢一如、擧首見而方不遠、夕陽斜照破吾廬、 噫

贊淵中宗琳禪人肖像

畫成咄這老禪人、眼上眉兮鼻下唇、扇子念珠常受用、撥開龍袖現全身、〔九〕

黄梅村裡玉仲子書

塔婆銘

南瞻部洲大日本國泉州堺南之居住大願主今井宗久禪人、天正拾一載癸未林鐘初二日、伏値太政大臣從一位泰岩大居士一周之嚴諱辰、預於斯日奉爲台靈、造建三丈三級塔婆也、伏以太相國家、來爲先鋒、去爲殿後、百戰百勝、前無勁敵、以故諸國、頗入掌握中矣、唐顏眞卿二十四國、惟公一人而已、夫此之謂乎、世尊既謝往、後有王阿育者、役諸鬼神、造八萬四千塔、布於八萬四千處、同日而就矣、震旦十有九處也、今泉南一處也、何以故無邊刹境、不隔毫端、心佛衆生、三無差別、斯那一切、滅除無量億劫生死惡業、生長盡未來際菩提善利、何況發大誓願、傾盡家貲、造立莊嚴者、俾台靈安致於家山也、若約山僧見解、一喝喝出而不下幾許多泟脚、當始而到安樂田地矣、因重說一偈云、

八萬四千那一切、如天柱突出虛空、向西方不願成佛、只作雲梯上月宮、 喝一喝

石塔銘

總見院殿贈太相國一品泰巖大居士石塔

夫塔者、始乎竺之多寶佛、盛乎唐之慈恩寺、是德位之表顯也、制雖有大小、而所感大願力、便湧出寶塔矣、娑婆世界搏桑國泉州堺南之住、大願主今井宗久禪人、天正十年龍集壬午林鐘初二日、伏値太相國尭重建十三級石塔、而安置佛舍利、以表顯一代之武德、要脫生死也、教曰、有佛塔處、即是如來轉法輪處、即是如來入般涅槃處、正恁麼時即是台靈同一處也、何以故衆我入海、同姓釋氏、山

野不レ然、只拈二向一邊一去、咄爲二之銘一、銘曰、

三千刹界第一塔婆、平出兜率蘸二映銀河一、落落戲嶮團團嵯峨、制始二支竺一、摸移二漢倭一、雲斤月斧、雨笠烟蓑、枉レ寸直レ尺、減レ少添レ多、以經以營、如レ琢如レ磨、不日成矣、築土刹那、所感願力、莫レ不二謳歌一、擁二護諸佛一、降二伏惡魔一、雖二名將種一、皈二此母䭾一、同居凡聖、混雜自他、斯無盡藏、眞常樂窩、前無二多寶一、後無二釋迦一、黑粼皺地、靜處薩訶、

黃梅新造梁棟之銘序

天正十又五稔己亥五月之權輿、要三新建二黃梅庵一、積二聚紀土二州之上材一、戊子之四月初五日、操二鐵石之心一、從レ頭改作二新條一了畢、六龍舞來、五鳳飛至、一任二人之耳目一、忽有二本色道流一出來道、玉仲老子、以二幻身一修二幼工一、有二甚麼奇特一、鳩工已成矣、山野只向レ他道、天正戊子之四月初五日、同至レ于二五月二十二日一落成矣、道流曰、此鳩工從二過去久遠劫以前一思量、至レ于二今茲一則成就矣、此之末亦復如レ至レ于二過去久遠劫以前一、此鳩工之壽同一劫者也、山野諸諾相應、乃爲レ銘、銘曰、

天正戊子、黃梅造興、落成不レ日、志願消氷、四七後胤、七百高僧、出二現麟瑞一、來二儀鳳膺一、太平時至、明德日昇、朝恩宏原、檀信仰憑、僧鉢日濕、佛法相承、一庵成就。萬年規繩、刧石縱盡、兒孫川增、

黃梅新造庫司棟梁之銘

香積佛國、無文字說、但以二衆香一令三諸天人得二入律行一、誠哉斯言、蓋各隨二機緣一故也、天正十六稔戊子之仲秋、小早川隆景到二平安城一、入二黃梅庵一見二新造丈室一、而以二庫司之建料一贈二白金百鎰一矣、以二明年己丑春二月既望一庀レ工、至二夏四月初五日一落成矣、古佛與二露柱一相交歡喜、森羅萬象、一時起舞、一繒出象曰、昔虛堂師祖建二鳳林庫司一、時有二來儀鳳一、便上レ堂云、有林自是眞棲處、風淡惟聞靜夜鳴、老和尚今建二黃梅庫司一、有二甚之瑞一乎、山野打レ手一下云、文殊普賢入二香積界一來還、看摩、便宣一偈、以爲二棟梁之銘一云、

此造工期億萬春、移二香積佛國一來新、法輪轉處食輪轉、復古黃梅七百人、

金鳳山天瑞禪寺方丈棟字銘

伏以關白太政大臣秀吉者、安二法皇一、助二聖主一、漢家霍

光關白、擁レ昭助レ宣、惟肖哉、蓋雖二周公阿衡一、以レ何加焉、今茲天正十又六稔龍集戊子、有二我萱堂之不例一、況於二春秋一高矣、難二夕而保一レ朝、卜二壽藏之地一、新建二大伽藍一、號曰二金鳳山天瑞寺一也、厥之貴介弟大納言秀長一奉二鈞命一、便命二匠工一、自二六月十八日一、至二八月十八日一、鳩工已竟矣、美哉、輪焉奐焉、修善則延レ命、誠哉斯言、萱堂之病忽爾平瘳也、壽藏之地、變而指二出須彌作壽山一而已、世尊因レ地布レ髮掩レ泥、獻三花於二燃灯如來一、燃灯見二布髮處一遂約レ退、衆乃指二其地一云、此一方地、宜レ建二梵刹一衆中有二一賢子長者一持レ標插レ於二指處一云、建二梵刹一已竟、時諸天散レ花讚言、庶子有二大智一矣、密庵云、大家燃灯指處、滴水氷生、賢レ子二插時一、天同地轉、見得古釋迦不レ先、關白不レ後、其或未レ然、更聽二重下注脚一、芟二除荊棘一、建二伽藍一、七佛常來二此處一參、地久天長、功未レ墜、天花時復雨紛々、拈二出成此新方丈棟梁之銘一、又爲レ銘、銘曰、

天正戊子、天瑞新修、立二一猊座一、移二五鳳樓一、遺二常棣愛一、相二萱堂攸一、助二萬乘位一、治二六十州一、絕代威勇、希世武侯、施二捨豪富一、建二立道流一、三世諸佛、日日出頭遞代列祖、時時來由、繁榮佛法、永因二皇猷一、法齡萬刧、擅信千秋、

同庫司棟梁之銘

天正十有六載龍次二戊子一、關白大尉侯秀吉、不下啻我萱堂母二儀天下一、育中萬民上、柔德醇而春秋高矣、期二百年之後一、新建二精舍一、曰二天瑞寺一、其之猶子中納言秀久、奉二鈞命一、俾三匠工一崇二建太庫一、聚二土紀二州之美材一、經レ之營レ之、不レ日而成矣、乃是大衆命脈處、將謂及第心空之捷徑、成レ佛作レ祖之階梯也、食輪轉處轉法輪也、是最上之功德也、雖レ如レ是、達摩大師曰、無二功德一、山僧云已無二功德一、爲二什麼最上之功德一、與二麼把得定一、則漆桶不レ會、常棣行中拜二宰相一、梧桐名上識家、脫未レ然、宜二一偈一以爲二庫梁之銘一云、

文殊粥篦上分身、此後又期過去春、
庫主潙山僧某甲、杓頭百七百千人、

天瑞寺本尊牟尼王開光明之語

關白太尉侯秀吉公、去歲天正十又六稔龍集戊子之秋、爲二我聖善一、卜二壽藏之地一、俾三貴介弟與二猶子一、崇二建大精舍一、號曰二天瑞一、夙緣純熟、不レ日而落成矣、厥之聖母、亦運二出自己之家珍一、刻二裝法身迦文一、便

安三置乎二木尊一也、今茲己丑、涓二取吉日一、特命二住持宗琇一、發二開光明一矣、預修二後生殖福之善處一、兼爲二現世延壽之祈祥一、舉昔毘藍園裏摩耶聖母、左手攀レ樹、釋迦老子右胎降誕、諸人且道、前聖母與二後聖母一、是同是別、若道是同、一女降誕、一女裝刻、若道也別法身、何止西當、伏以四生覺母、三界法王、求レ移二半步一、到二鷲峰上一、忉利不レ說二一字一、收二龍宮滿海藏一

權實之二境来レ盡、福惠之西足無量、

萬德之圓備、一偈以舉揚云、

信根深處法身彰、賢刧從前選佛塲、

不出母胎多化度、三千世界一威光、　露

紫野金鳳山天瑞禪寺雲板銘云

茶禮已前、報粥齋筵、誦經資始、此聲萬年、

天正十七稔己丑良月吉日

住持嗣法玉仲宗琇書

鐘樓棟宇之銘

關白殿秀吉公聖母、從一位大政所殿春岩國夫人、庚寅之夏、命二晉般之徒一、建二立層樓一、而又俾二鳧氏之族鑄二洪鐘一也、専冥福之預修、而便現在之保安也、但是夙緣所レ感、則不レ日而既成矣。惟柔德之功、庶二幾至レ乎二萬斯年一矣、便爲レ銘、銘曰、

靈地洛陽乾位前、鐘樓建立大檀緣、母儀諸國柔中德、

子育萬家慈裏權、久遠刧寛仁法界、善根力廣大無邊、

縦臻二河帶并山礪一、祇摩鯨音壽等天、

天正十又八稔龍次庚寅蜡月十四日

金鳳山天瑞禪寺住持嗣法玉仲宗琇書

大檀那大政所殿春岩國夫人御願主　工匠清右門尉

天瑞禪寺鐘銘

竺土制度、梁國舊規、禪林資始。法社總持、德滿二四海一、功越二三祇一、響震二大地一、聲徹二須彌一、玉麟祥瑞、金鳳來儀、佛界號令、衆生洪慈、末上一杵、何處可レ期、刧有二消日一、聲無二盡時一、

大政所殿春岩壽位預修之御願製

天正十又八庚寅仲夏如意珠日

金鳳山天瑞禪寺住山玉仲宗琇書

禪通寺庫司再造棟宇銘

天正三紀癸亥小春十又三日、庫司及レ乎二爵攸之變一也、世間相常住也、建化門中、豈無興廢之感哉、大家變者必復矣、明年同四載丙子抄春初十日、先募二諸財一、以馨二衆力一、欲レ與三百廢一、再上三棟宇一、萬三倍乎二舊

制一、千三層乎二新造一、經レ之營レ之、不レ日落成、緇白歡
躍、底者諸人不壞底、還會麼、代日僧堂佛殿厨庫山
門、乃爲二之銘一、銘曰、
天正四載　庫司再生　衆力募合　匠工造營
得時崇建　不日落成　六龍歌舞　五鳳歡聲
食輪常轉　金穀多盈　檀信歸崇、衆緣尋盟、
皇風永扇、佛法繁榮、天長地久、海晏河清、
天正四載龍集丙子夏首初四日
長松山禪通禪寺住持傳法沙門玉仲子宗琇書

開光安座

文祿二禩癸巳良月吉日、如意輪觀音大士裝二餝厥之古
像一也、承聞播州書寫山如意輪觀音薩埵、降三靈神於二
揖西縣一、生二妙超師祖一、辱我山開闢大灯國師也、兒孫
番衍未レ央、三二百有餘年于レ茲矣、矧又圓應乎黃梅院、
奉レ勸二請本尊一也、慈仰三法榮於二萬斯年一矣、便說二長
偈一以讃嘆、開三光於二萬之一一、其辭曰、
稽首過去正法明　勸請現世如意輪　聞思修入三摩地
眞靜惠無六欲塵　眼聞絕聞大妙覺　耳觀滅觀是正因
靜悄悄不變獨朗　明歷歷無爲全眞　松風吟嘯音邑相
花月鮮明妙色身　乾坤蓋載慈悲力　虛空廣大惻憹仁
出十界蕭然物外　入六道把走要津　普應三十二佛母
圓通二十五聖人　人天引接要救苦　女相是足如劾頻
圓極圓悟智如海　世中世尊德有隣　以諸佛示寂寂滅
作衆生如幻幻泯　十方淨土多化度　大地普門欲長鎮
稱名盡有何生死　誓願斷論那寃親　日出月沒奇特事
春寒秋熱靈感新　古貌巍巍還光彩　慈眼燗燗辨平均
檀信歸崇三千界　岩上安座億萬春
嗣法玉仲子暮齡七十二載書

土藏之銘

金鳳山天瑞禪寺庫藏之新造、小出播磨守奉二大政所
殿之貴命一、夏秋之交、經レ之營レ之、既落成矣、金穀
滿而無二紅陳一、贏齎多而無二盡期一、使二後手有レ餘而足一
矣有千子圍繞、不二亦勞レ力、日日轉法輪、時時轉食輪、
佛法繁榮之洪基也、驩喜之餘、宜二一偈一爲レ銘云、
師檀應用至二令昌一、平地鋪レ金獻二覺皇一、祇樹給孤長者
富、藏中皆滿福無量、

石塔供養

石州益田元祥、値二亡子慈雲院殿月溪宗林禪定門盡
七之忌辰一、造二立石塔一基一、直下湧出無縫塔、厨落落
影團團、諸人還會麼、宜二一偈一爲二供養一、　个無縫塔已

成時、良久還他忠國師、永刧清風吹不㆑盡、育王八萬
四千基、㖞

卵塔銘

雕梁繡戸布金工、多寶如來塔一同、佛界衆生無㆓隔
礙㆒、人間淨土有㆓流通㆒、三身法相須臾現、脫体圓形畢
竟空、不日既成阿育製、層層八萬四千口　露

石塔銘

竊以過去久遠刧中、通(過カ)東方無量何僧祇世界、國名寶
淨、彼中有㆑佛、號㆓多寶如來㆒、彼滅度後、依㆓本願力㆒、
隨處湧㆓出寶塔㆒、大日本國泉州大鳥郡鹽穴常樂寺安
阿彌、和同元年戊申、創㆓建五層石塔㆒、安㆓厝佛舍利㆒
矣、降來歲久、而至㆓天正七禩己卯㆒、當㆓八百七十二年㆒
矣、同小春念九日、今井宗久禪人、伏値㆓一閑紹鷗
居士二十又五回遠諱之辰㆒、預起㆓大願力㆒、喜㆓捨家貲㆒
募㆓費匠工㆒、易㆔地於㆓廟處㆒、築㆔地於㆓四方㆒、重㆓建五
層㆒也、專爲㆓居士㆒修㆓冥福㆒者、自利利他、微塵數諸
佛、十殿冥官王、恒河沙數靈、本地風光、洒洒落落地、
點㆓撿將來㆒、只是一堆頑石、頑石拈㆓出無縫塔㆒、說㆓
示諸人㆒了也、雖然憑歷崇建那一句還㆓山僧㆒可㆓始得㆒、
便爲㆓之銘㆒曰

阿育王制　多寶佛傳　百廢共興　再造新遷
湘南之地　潭北之邊　活卓卓爾　峭巋巋然
想映碧海　突出靑天　老少殖貨　自他結緣
祇廢安置　若何言宣　乾坤盡日　石塔萬年　露

天正七稔龍集己卯林鐘念九日休休子書

大願主宗久重建

君臣位牌之銘

忠一看、鐵石心肝、君臣合道、家國平安、

右玉仲遺文一冊丁未春余偶獲諸都下一書肆未審何人所寫不唯序跋無可得識文章又似不僅止于此也然據字樣按紙質蓋慶長元和年間物矣春城市島君見而奇之請收于其所輯續續群書類從詩文部中乃別寫一本以贈之但原本魯魚亥豕極多闕脫亦不爲少今無由是正姑訂其太甚者云明治四十一年庚申春分後八日藻洲牧野謙識

續々群書類從第十三終

明治四十二年三月一日印刷
明治四十二年三月五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市神田區蠟燭町八番地
印刷者　武木信賢

東京市神田區蠟燭町八番地
印刷所　武木印刷所